

新上五島町北魚目の文化的景観保存計画

平成 23 年 10 月

長崎県新上五島町

はじめに

平成 16 年 8 月に「新魚目町、若松町、上五島町、有川町、奈良尾町」の 5 つの町が合併し、「新上五島町」が誕生しました。平成 19 年 1 月には「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が世界遺産暫定一覧表に記載され、構成資産候補になった国指定重要文化財である「青砂ヶ浦天主堂」や「頭ヶ島天主堂」のある本町も関係 5 市 2 町の中の 1 つの町として、世界遺産一覧表への登録を目指す事業に関わることになりました。この流れの中で、当町の歴史的な背景から形成された独特の魅力ある景観を未来へ残すために、平成 20 年度から重要文化的景観の選定を目指し、国の補助を受け、文化的景観保護推進事業に取り組んで参りました。

本町は古くは遣唐使船の寄港地となる「相子田泊」（現在の相河、青方港と推定される）を有し、中世には倭寇であったと伝わる「王直」の拠点の一つがあったとされ、町の西側は海外との交流の拠点として栄えていました。島であるという利点を生かし、海洋資源を有効に活用してきました。近世になると町の東側が栄え、鯨漁などの漁業技術を持った漁民が来島し、島の人々にその技術を伝えました。漁業が盛んになると魚を保存するために塩は欠かすことができないため、江戸時代は、竈百姓と呼ばれる塩作りや薪炭を生業とする人々がいました。豊かな森と海を利用した海水を焚く方法で行われていた塩作りは江戸時代以降廃れていきましたが、近年では復活し、塩を作る企業が年々増えています。

また、北魚目では勾配の厳しい地に段畑をつくり、「イモ」（甘藷）を栽培し、それを主食とする生活を送っていました。イモを効率的に保存するため、5㎜ 位の厚さに輪切りにし、急斜面に突き出したように設置した「ヤグラ」（干し棚）で干して乾燥させました。乾燥させたイモを地元では「カンコロ」と呼んでいます。「カンコロ」は屋根裏に保存し、年間を通した食料となっていました。昭和 30 年頃になると、イモを茹でて干した「ユデカンコロ」は、とても甘く子ども達のおやつになっていました。このユデカンコロは五島の名産品の一つである「カンコロ餅」の原料となります。冬場にストーブの上にアミをのせて、黄金色に焼き色がつくまで焼いたカンコロ餅は絶品です。

この度、発刊することとなった「新上五島町北魚目の文化的景観 保存計画」も、町の特有の歴史や文化を背景として形づくられた集落の景観の価値を理解し、今後の保護と活用、そして地域の活性化のために推進していきたいと考えています。

最後に、本調査や保存計画の策定にあたり尽力して頂きました委員ほか調査協力者の先生方、並びに各関係機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成 23 年 10 月

新上五島町長　井 上　俊 昭

例　言

１．本書は、平成 20 年度から国庫補助事業で実施した文化的景観保護推進事業（文化的景観保存調査概要、及び保存計画）の報告書である。

２．保存調査及び保存計画策定に係る事務は、新上五島町世界遺産推進室が担当した。
体制は以下のとおり。

新上五島町世界遺産推進室　室　　長　濱田宇喜雄
課長補佐　原　　正則　（平成 22 年 10 月～）
係　　長　竹内　睦生
係　　長　石口　敏広　（平成 20 年 4 月～平成 22 年 9 月）
学 芸 員　大山かおり
主　　査　松 岡　　貢　（建築課併任）
嘱託職員　高橋　弘一　（平成 22 年 7 月～）

３．本書の執筆は、序章、第Ⅰ部第１章、第Ⅱ部については事務局が行い、第Ⅰ部第２章第２節は清川昌一氏に、第３節と第４節は鴨川誠氏に、第５節は松尾晋一氏に執筆して頂いた。第３章第３節は平成 21 年度に発行した『上五島の文化的景観』保存調査報告書（基礎資料編）から加藤久雄氏の原稿を掲載した。その他の第２章から第４章までは新上五島町文化的景観保存計画策定委員と調査協力者と事務局で執筆した。特に立平進氏、橋村修氏には第３章について原稿を書いて頂き、ご指導ご協力を頂いた。第５章の各論については、文化的景観保存調査報告の内容の根拠として、ご協力頂いた先生方に寄稿頂いた論文集である。また、本報告書には平成 21 年度に作成した『基礎資料編』の抜粋も含んでいる。

４．本書の写真は、特記のない限り、調査担当者及び事務局が撮影した。

５．編集については川上委員長と事務局で行った。

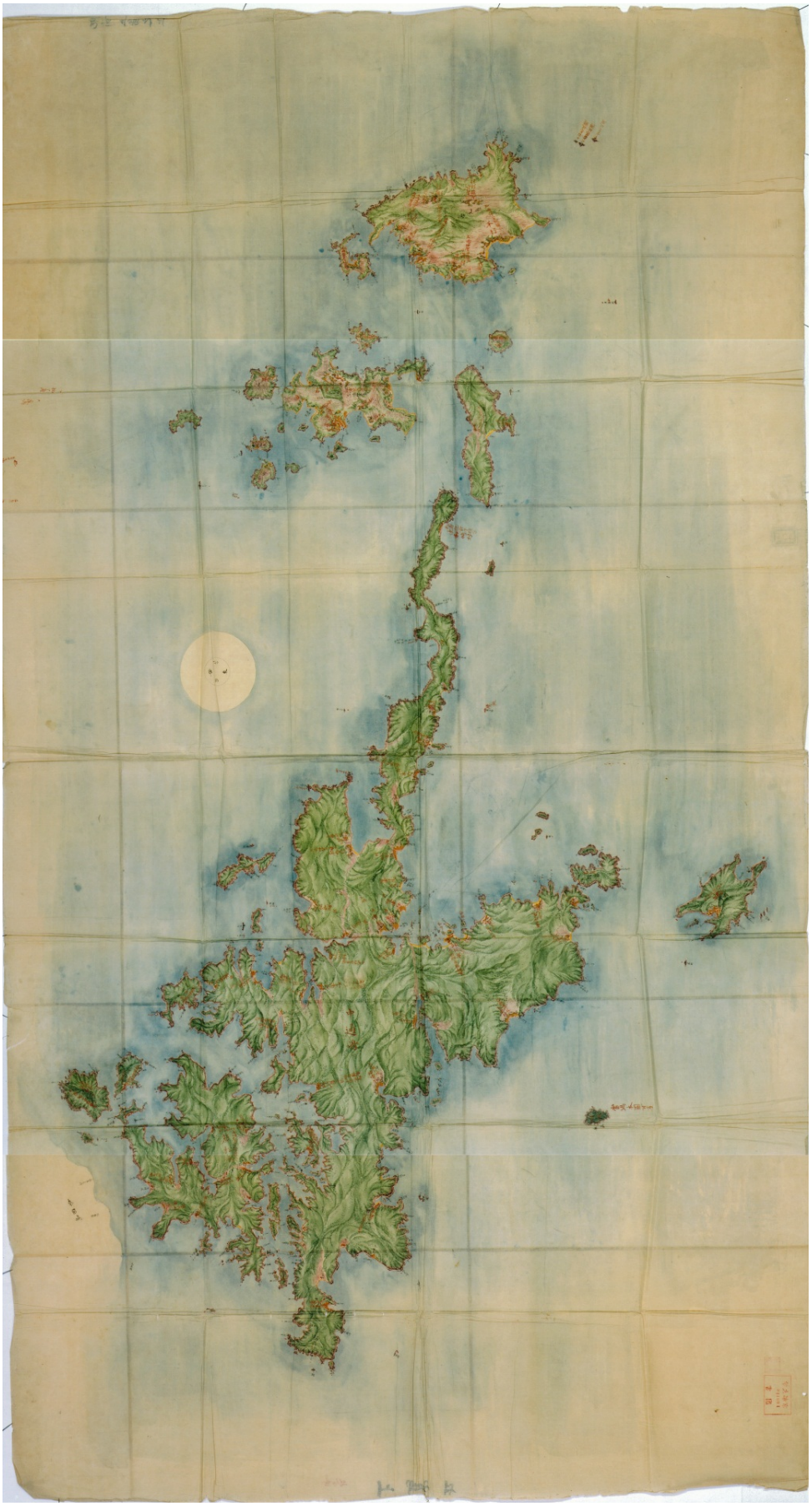
６．本書を発行するにあたり、関係機関及び関係者に多大なるご協力を頂いたことを謹んで感謝申し上げる。また、地域住民の方々には快く調査や撮影をお許し頂き、様々な情報を提供して頂いたことに、この場を借りて、改めて深く御礼申し上げる次第である。



北魚目地域（平成 20 年）



大水（昭和 59 年　川上秀人撮影）



伊能忠敬翁地図「肥前国五島沿海」（五島上）（京都大学附属図書館所蔵）

序　文化的景観の位置及び範囲
１．計画の目的 …… 1
２．検討体制 …… 1
３．計画策定に至る経過 …… 2
４．位置及び範囲 …… 3
５．文化的景観の申出について …… 6

第Ⅰ部　文化的景観保存調査の概要

第１章　　保存調査の目的 …… Ⅰ－ 1
第１節　調査に至る経緯及び目的
第２節　調査対象地域
第３節　調査項目

第２章　　新上五島町の概要
第１節　新上五島町の概況 …… Ⅰ－ 2
第２節　地形と地質 …… Ⅰ－ 5
第３節　生物と環境 …… Ⅰ－ 20
第４節　歴史 …… Ⅰ－ 35
第５節　文化財 …… Ⅰ－ 45

第３章　生活と生業
第１節　農業と林業 …… Ⅰ－ 47
第２節　漁業 …… Ⅰ－ 65
第３節　生活 …… Ⅰ－ 80
第４節　交通 …… Ⅰ－ 92

第４章　集落
第１節　北魚目地域の概要 …… Ⅰ－ 98
１．集落成立の概要 …… Ⅰ－ 98
２．全般的な推移 …… Ⅰ－ 99
３．伊能図に見る北魚目の概況 …… Ⅰ－ 99
第２節　北魚目地域の集落 …… Ⅰ－102
１．津和崎・米山 …… Ⅰ－102
２．竹谷・一本松 …… Ⅰ－107
３．仲知・赤波江 …… Ⅰ－110
４．江袋 …… Ⅰ－113
５．大瀬良 …… Ⅰ－118
６．小瀬良・上小瀬良 …… Ⅰ－120
７．大水 …… Ⅰ－123
８．立串 …… Ⅰ－127

第３節　住居と石積みの構築物 …… Ⅰ－132
１．北魚目地域の居住 …… Ⅰ－132
２．頭ヶ島の住居 …… Ⅰ－135
３．石積みの構築物 …… Ⅰ－136
第４節　集落の特性と類型 …… Ⅰ－141
１．集落の特性概要 …… Ⅰ－141
２．集落のシンボル …… Ⅰ－142
３．集落の類型 …… Ⅰ－143
第５節　集落と生業 …… Ⅰ－148
１．生業の概要 …… Ⅰ－148
２．カンコロ生産の装置 …… Ⅰ－148
３．住居と集落 …… Ⅰ－150

第５章　各論

第１節　集落
１．北魚目における移住集落の形成過程　（菊地　成朋）…… Ⅰ－155
２．集落の空間構成　（萩原　博文）…… Ⅰ－173
３．墓地　（大山かおり）…… Ⅰ－180
４．頭ヶ島天主堂と石切場　（山田由香里）…… Ⅰ－188
５．上五島の地質　（清川　昌一）…… Ⅰ－195
第２節　歴史
１．明治以降における神社境内の景観変容　（松尾　晋一）…… Ⅰ－199
２．近世後期の上五島における宗教と信仰　（東　　昇）…… Ⅰ－220
３．上五島の漁場利用　（橋村　　修）…… Ⅰ－225
第３節　教会
１．教会堂の立地について　（片岡瑠美子）…… Ⅰ－249
２．上五島のカトリック集落と教会堂の関係　（高橋　弘一）…… Ⅰ－252
３．鉄川与助の教会堂建築　（川上　秀人）…… Ⅰ－261
４．教会堂建築におけるトラス小屋組の変遷　（川上　秀人）…… Ⅰ－279
第４節　信仰
１．仲知小教区の開拓者たち　（阿部　律子）…… Ⅰ－298
２．新上五島町の柑橘「ゆうこう」について　（鴨川　　誠）…… Ⅰ－336
３．上五島のキリシタン遺物　（加藤　久雄）…… Ⅰ－346

第６章　文化的景観の本質的価値 …… Ⅰ－353

第Ⅱ部　文化的景観保存計画

第１章　文化的景観の保存に関する基本方針

１　文化的景観の概要と価値、課題 …… Ⅱ－ 1
２　保存管理に関する基本方針 …… Ⅱ－ 3
３　整備活用に関する基本方針 …… Ⅱ－ 5
４　管理運営に関する基本方針 …… Ⅱ－ 7

第２章　文化的景観の保存に配慮した土地利用に関する事項

１　保存管理に関する考え方 …… Ⅱ－ 8
２　既存法令等による土地利用規制の整理 …… Ⅱ－ 11
３　景観法に基づく景観計画による行為誘導 …… Ⅱ－ 15
４　現状変更の取扱い …… Ⅱ－ 21

第３章　文化的景観の整備活用に関する事項

１　整備活用に関する考え方 …… Ⅱ－ 23
２　整備活用の方針 …… Ⅱ－ 24
３　整備活用計画 …… Ⅱ－ 29

第４章　文化的景観を保存するために必要な体制に関する事項

１　管理運営に関する考え方 …… Ⅱ－ 32
２　地域住民の役割 …… Ⅱ－ 33
３　行政の役割 …… Ⅱ－ 33

第５章　文化的景観における重要な構成要素

１　景観を構成する重要な構成要素の考え方 …… Ⅱ－ 34
２　重要な構成要素一覧 …… Ⅱ－ 35

第６章　参考資料

１　公共事業におけるガイドライン等の尊重 …… Ⅱ－ 47
２　風力発電施設についての考え方 …… Ⅱ－ 47

序　文化的景観の位置及び範囲

１．計画の目的

新上五島町地域は、中通島、若松島を主体とした７つの有人島と 60 の無人島から構成されており、基幹産業は第１次産業である。平地の少ない本町では急斜面地を開拓し、古来より甘藷などを栽培してきた段畑が多く分布する。またキリシタン集落が点在し、教会と集落は地形的特徴、周囲の自然環境と相まって独特の景観を有している。

このような状況から、新上五島町北魚目の文化的景観を文化資源として捉え、新上五島町の地域再生・活性化に資するため、文化的景観保存調査で明らかになった新上五島町の北魚目における文化的景観の価値付けを行い、文化的景観保存管理計画を策定し、保存・継承を図っていこうとするものである。

２．検討体制

新上五島町北魚目の文化的景観の保護と活用を図ることを目的として、平成 20 年６月に「新上五島町文化的景観保存計画策定委員会」を設置し、調査を実施した。本計画策定にあたっては同委員会で協議を重ね、また町関係部署との連携を図り計画内容の検討を行ってきた。なお、委員会等の構成は以下のとおりである。

新上五島町文化的景観保存計画策定委員会名簿

	委員氏名	所属等	専門分野
委員長	川上　秀人	近畿大学教授	建築
副委員長	鴨川　　誠	長崎・野生生物環境研究所所長	植生
委員	清川　昌一	九州大学大学院准教授	地質と地形
〃	松尾　晋一	長崎県立大学准教授	歴史
〃	山田由香里	長崎総合科学大学准教授	集落景観
〃	加藤　久雄	長崎ウエスレヤン大学非常勤講師	生活・生業（H22.3 退任）

調査協力者

	調査員氏名	所属等	専門分野
調査員	東　　昇	京都府立大学准教授	歴史
〃	山田　　亨	ハワイ大学大学院非常勤講師	文化人類学
〃	大野　和則	長崎歴史文化博物館	民俗
〃	宮﨑賢太郎	長崎純心大学教授	宗教民俗学（日本キリスト教思想史）
〃	立平　　進	長崎国際大学教授	民俗
〃	橋村　　修	東京学芸大学准教授	歴史地理学
〃	大場　　修	京都府立大学大学院教授	建築（古民家）
〃	菊地　成朋	九州大学大学院教授	建築計画（日本の伝統的集落の空間構造解析）
協力者	阿部　律子	長崎県立大学教授	フランス 18 世紀啓蒙思想
〃	片岡瑠美子	長崎純心大学教授	キリスト教文化史、比較文化
〃	荻原　博文	平戸市教育委員会学術専門幹	考古学

指導

氏　　名	所　　属　　等
井上　典子	文化庁文化財部記念物課文化財調査官
鈴木　地平	文化庁文化財部記念物課文部科学技官
古門　雅高	長崎県教育庁学芸文化課課長補佐
中尾　篤志	長崎県教育庁学芸文化課主任文化財保護主事（～H22.3.31） 長崎県知事公室世界遺産登録推進室主任主事（H22.4.1～H23.3.31） 長崎県企画振興部文化観光物産局世界遺産登録推進室主任主事(H23.4.1～)
小林　利彦	長崎県教育庁学芸文化課文化財保護主事（H22.4.1～）
馬場　秀喜	長崎県知事公室世界遺産登録推進室係長（～H22.3.31）
山口　美沙	長崎県知事公室世界遺産登録推進室主任主事（～H21.3.31）

３．計画策定に至る経緯

（１）文化的景観保存計画

平成 20 年度から検討を行っている文化的景観保存計画策定委員会は、申出までに８回開催（ワーキングを含めると 17 回）し、申出範囲の調査研究や重要な構成要素の検討等を行ったほか、各調査委員とは随時協議しながら取り組みを進めた。平成 22 年度からは文化庁、県の指導を仰ぎながら追加調査を随時実施した。また、地域説明会を実施することで合意形成と周知啓発を行った。

■文化的景観保存計画策定委員会の概要

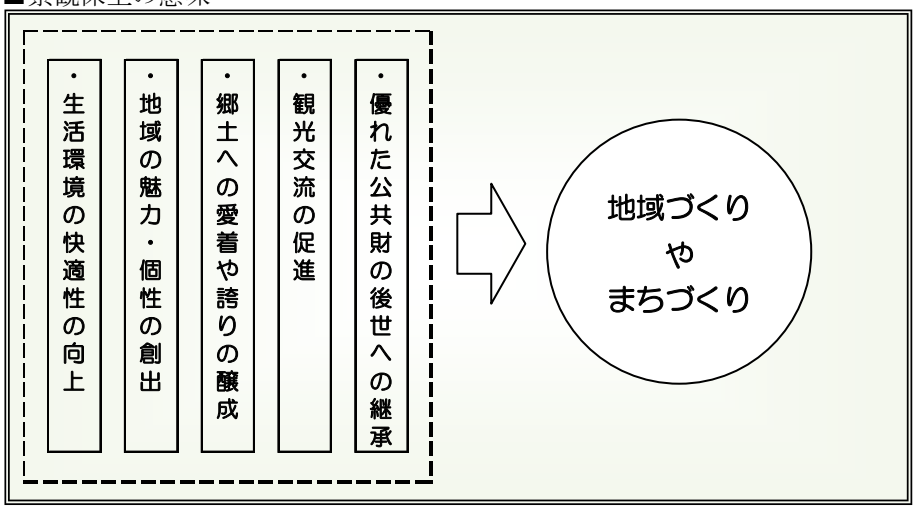
番号	期　　日	名　　称
1	平成20年 6月 26日	新上五島町文化的景観保存計画策定委員会　(H20 年度第１回)
2	平成20年 9月 27日	〃　(H20 年度第２回)
3	平成20年12月 25日	〃　(H20 年度第３回)
4	平成21年 1月 23日	〃　(H20 年度第１回ワーキング)
5	平成21年 2月 8日	〃　(H20 年度第２回ワーキング)
6	平成21年 3月 8日	〃　(H20 年度第３回ワーキング)
7	平成21年 3月 19日	〃　(H20 年度第４回ワーキング)
8	平成21年 6月 12日	〃　(H21 年度第１回ワーキング)
9	平成21年 7月 16日	〃　(H21 年度第２回ワーキング)
10	平成21年 9月 4日	〃　(H21 年度第１回)
11	平成21年12月 25日	〃　(H21 年度第２回)
12	平成22年 2月 2日	〃　(H21 年度第３回ワーキング)
13	平成22年 3月 5日	〃　(H21 年度第４回ワーキング)
14	平成22年 3月 30日	〃　(H21 年度第３回)
15	平成22年 8月 2日	〃　(H22 年度第１回ワーキング)
16	平成23年 2月 28日	〃　(H22 年度第１回)
17	平成23年 5月 19日	〃　(H23 年度第１回)

（２）景観計画

平成 16 年 12 月の景観法施行に基づいて、新上五島町は長崎県と協議を行い、平成 20 年６月に景観行政団体となった。以降、景観計画策定委員会の開催及び地区説明を実施しながら取り組みを進め、平成 21 年３月に景観計画を策定し、同年 11 月に景観条例制定及び景観計画の告示を行った。

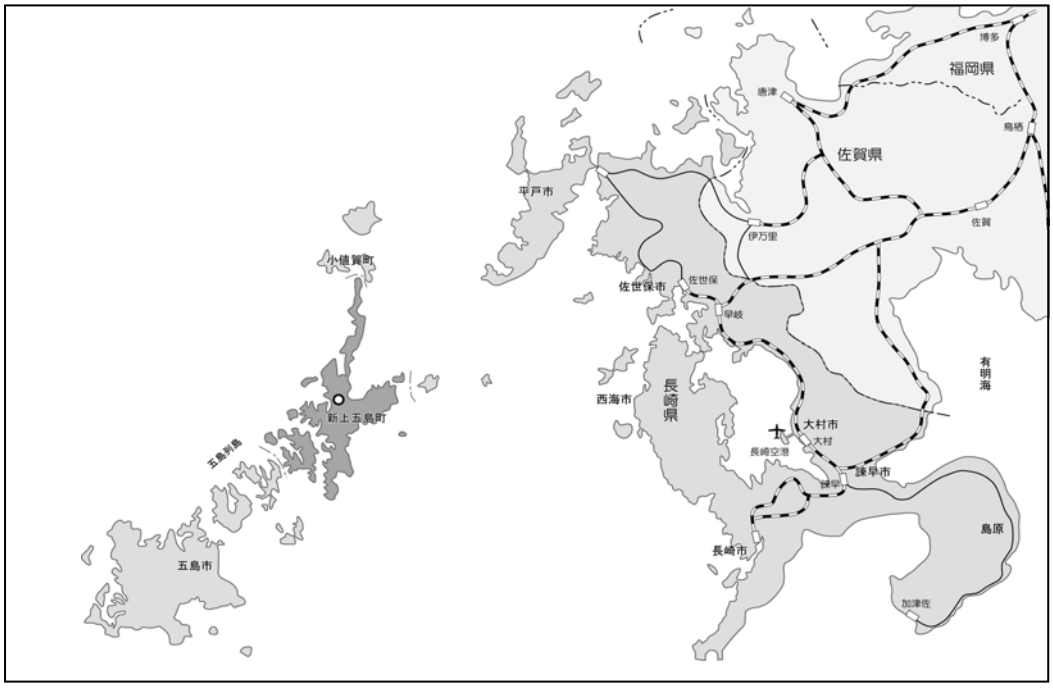
策定にあたっては、文化的景観保存調査の価値を踏まえるとともに、関連計画との整合を図り、本町まちづくりの一環として検討を行った。

■景観保全の意味



４．位置及び範囲

新上五島町が所在する五島列島は、九州の最西端に位置し、北東から南西へと連なる列島であり、北から中通島、若松島、奈留島、久賀島、福江島の主要島と属島からなる。明確な境界があるわけではないが、一般的に中通島、若松島を上五島地域、奈留島、久賀島、福江島を下五島地域と呼称し、それが行政単位の新上五島町、五島市となっている。



新上五島町位置図

新上五島町は、長崎県の西方、五島列島の北部に位置し、中通島と若松島を主体とした７つの有人島と 60 の無人島から構成されており、その中で中通島は南北に長い十字型をした島である。北は海上約 600ｍを隔てて北松浦郡小値賀町野崎島と接し、南は海上約 900ｍを隔てて五島市奈留島と接している。総面積は 213.97ｋ㎡で、地形は極めて複雑で、山から急勾配で海に面しているため平坦地が少なく、入江毎に散在集落が多く、また、大きな河川がないため水資源に恵まれていない。海岸線は変化に富んでおり、海と山が織りなす美しい自然景観は、若松島を中心に西海国立公園に指定されている。

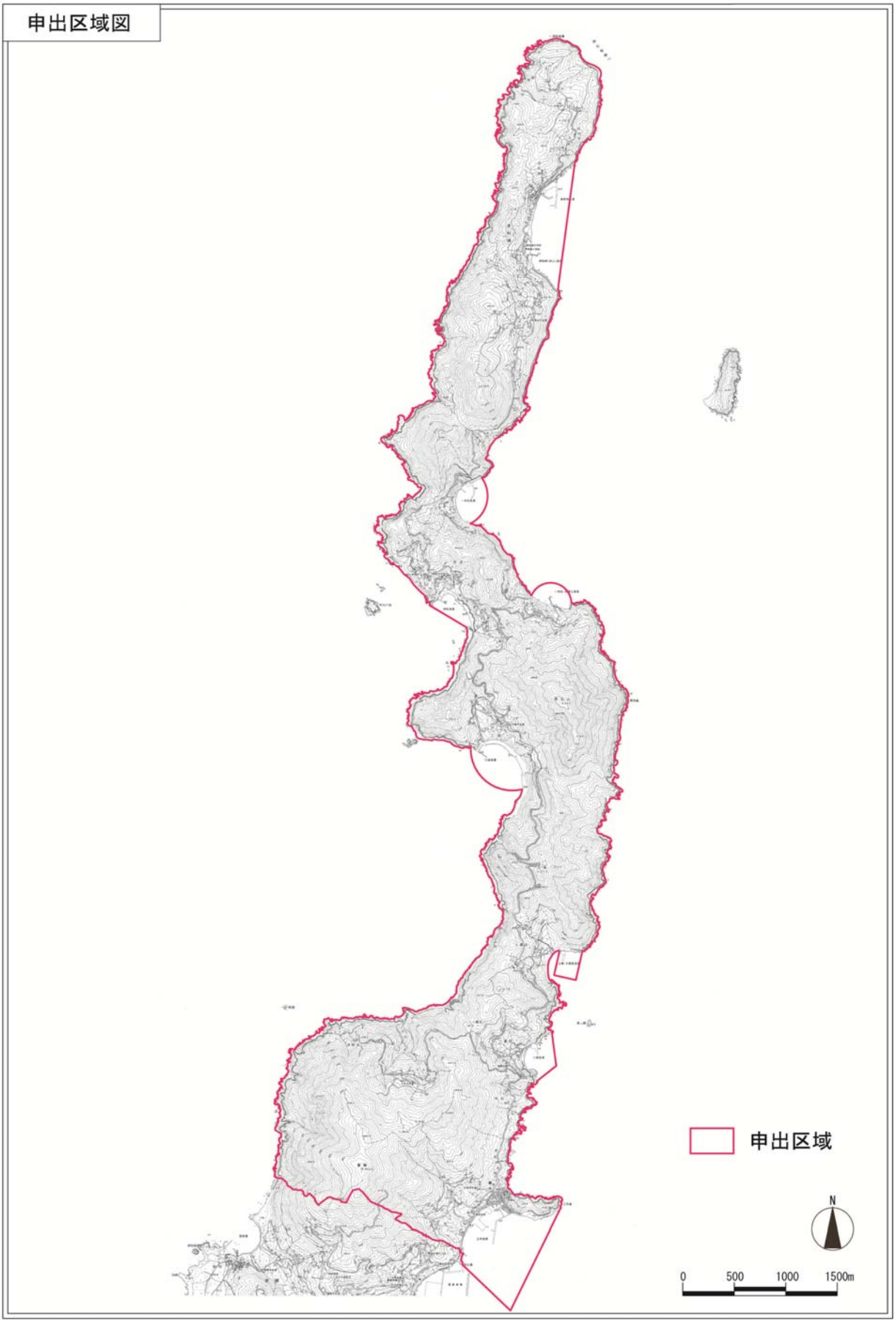
気候は、対馬暖流の影響を受けて温暖海洋性気候であるが、台風の常襲地帯で年間降水量は比較的多くなっている。

新上五島町の北魚目は細長い半島に急峻な山が連なる地形のため、人間が生活を営むには極めて不便な土地であり、番岳以北の立串と津和崎の間は海岸部の平坦地を除き、18 世紀までほぼ無住の状態であった。その後、18 世紀末以降の農耕民の移住と開墾により、傾斜地に散在する現在の集落景観が形成されたが、日本の集落景観のなかでもこのように地形、気候あるいは社会的背景ともに厳しい僻地離島への移住により、それまで無住であった居住に不適な急峻地に移住民による開拓集落が多彩な形で開かれ、今日まで連綿と継続してきたことは他に例がない。狭く急な段畑で「カンコロ」生産のための甘藷栽培を中心に厳しい環境を生き抜くための工夫をこらした独特な一体景観が新上五島町北魚目の文化的景観の特徴であり、これらの範囲を文化的景観の保存調査対象地域とした。

最終的な申出の範囲については、北部半島の番岳以北に決定した。この範囲については、今後の調査により拡大されることも考えられる。



大水集落



「新上五島町北魚目の文化的景観」選定申出範囲図

５．文化的景観の申出について

（１）段階的な申出

「新上五島町北魚目の文化的景観」は、新上五島町の北部地域 12 集落で構成されており、申出面積は 1,508.0ha である。

なお、新上五島町全域が景観計画区域であるが、今回の申出範囲である北魚目地域を重要景観計画区域に設定している。

平成 23 年７月に、新上五島町北魚目地域を申出することとし、その後、地域住民の景観保全に対する意識醸成、地域内で行われる公共事業の調整、その他文化的景観としての価値を高める補足調査や地域内での景観協定の締結等を行うように計画している。

表　申出計画

申出予定年月	地　　区	面　積
平成 23 年７月	津和崎集落、米山集落、竹谷集落、一本松集落、仲知集落、赤波江集落、江袋集落、大瀬良集落、小瀬良集落、上小瀬良集落、大水集落、立串集落、漁港・港湾区域水面	1,508.0ha
	合　　計	1,508.0ha

（２）集落の概要

平成 23 年３月現在

地区名	人口：男	人口：女	人口：計	世帯数	備考
津和崎集落	45	44	89	41	１次
米 山 集 落	30	30	60	31	〃
竹 谷 集 落	4	5	9	5	〃
一本松集落	13	11	24	10	〃
仲 知 集 落	46	60	106	54	〃
赤波江集落	9	9	18	9	〃
江 袋 集 落	39	44	83	38	〃
大瀬良集落	27	30	57	27	〃
小瀬良集落	4	8	12	7	〃
上小瀬良集落	15	15	30	18	〃
大水集落	26	26	52	27	〃
立串集落	65	84	149	84	〃
合　計	323	366	689	351	

第Ⅰ部　文化的景観保存調査

第１章　保存調査の目的

第２章　新上五島町の概要

第３章　生活と生業

第４章　集落

第５章　各論

第６章　文化的景観の本質的価値

第１章　保存調査の目的

第１節　調査に至る経緯及び目的

新上五島町は日本本土最西端よりも西海上に位置する五島列島の北部にあたる。五島列島は、中通島、若松島、奈留島、久賀島、福江島の５つの主な島と 200 余りの小島からなる。

新上五島町は、中通島と若松島を主とした７つの有人島と 60 の無人島で構成されている。中通島は、東西南北に少しひずんだ十字形になっており、十字形の中央から北に延びた半島の北半分が北魚目である。

北魚目は、番岳（標高 442.6m）から北に南北約 10km、東西約 1.5km の狭く細長い地形をなす。

五島列島には寛政期に大村藩より移住してきた人々がいる。彼らの多くは潜伏キリシタンであった。明治６年に禁教令が解かれると、潜伏していたキリシタンの人々は復活を果たし、教会を建てていった。

上五島北魚目には狭く細長い半島に集落が張り付くように形成され、集落の中央には教会が建っている独特の景観が形成されている。上五島若松は、西海国立公園に指定されている若松瀬戸を始め、入り組んだ入江ごとに集落が形成され、入江の奥まった場所に教会が形成されている。これらの地域の人々の営みによって作り出されてきた景観地を重要な文化財の一つとして将来に残すために、文化庁と長崎県の補助を得て、文化的景観の保存調査を実施することとなった。

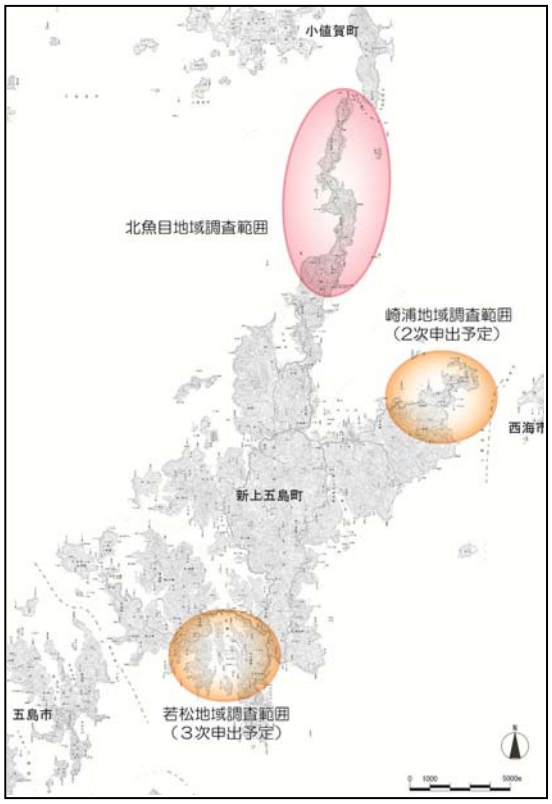


図１　文化的景観調査申出予定範囲

第２節　調査対象地域

上五島の文化的景観保護推進事業を推進するにあたり、調査対象範囲を北魚目地域と若松地域の２地区に設定し、町内全体の状況を把握する概要調査から始まり、平成 20 年度第２回委員会で北魚目地域と頭ヶ島を先行して選定申出を目指すこととなった。若松地域は第２次申出の予定となった。平成 20 年度から３年間、保存調査を行った結果、北魚目地域と頭ヶ島は同じ選定基準で価値を語ることができないことから、新上五島町北魚目の文化的景観は平成 23 年７月に選定申出をし、新上五島町崎浦（頭ヶ島を含む）の文化的景観は平成 24 年１月に選定申出を目指すこととした。

第３節　調査項目

新上五島町における保存調査実施において、調査項目を建築、景観、歴史、民俗、地質・地形、動植物の６項目に設定し、６人の先生方を新上五島町文化的景観保存計画策定委員会の委員として、精力的に調査を行った。そのほか、調査（協力）員として８名の専門家にも協力をお願いした。委員及び調査員の氏名は検討体制に掲載している。

第２章　新上五島町の概要

第１節　新上五島町の概況

１．位置

新上五島町は、九州の西、長崎県の西方に位置し、中通島と若松島を主体とした７つの有人島と 60 の無人島から構成されており、北は海上約 600ｍを隔てて北松浦郡小値賀町野崎島と接し、南は海上約 900ｍを隔てて五島市奈留島と接している。九州本土には長崎港まで約 77km、佐世保港まで約 60km を隔てている。

面積は 213.97km^{2}で、地形は極めて複雑で、山から急勾配で海に面しているため平坦地が少なく、入江ごとに散在集落が多い。また、大きな河川がないため水資源に恵まれていない。海岸線は変化に富んでおり、海と山が織りなす美しい自然景観は、西海国立公園に指定されている。

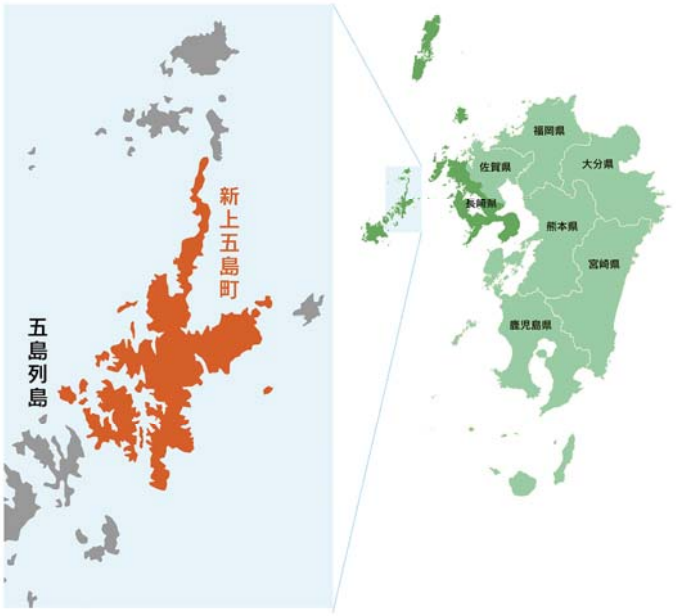


図１　新上五島町の位置

気候は、対馬暖流の影響を受けて温暖海洋性気候であるが、台風の常襲地域で年間降水量が多い。

２．沿革

本町では、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が発見されており、この時代から人が住んでいたと思われている。

東シナ海を隔てて中国大陸と接しており、奈良・平安時代には、遣唐使船の日本最後の寄港地となるなど、大陸交流の拠点となった。また、江戸時代にはキリシタンが新天地を求めて移住した地でもある。

このような歴史の中で、地域内には教会や寺社をはじめとして多くの歴史的、文化的遺産が残されている。

明治４年の廃藩置県後、本町の各地区は、町村制施行等によりそれぞれ変遷を重ね、平成 16 年８月１日、若松町、上五島町、新魚目町、有川町、奈良尾町の５町が合併し、新上五島町が誕生した。

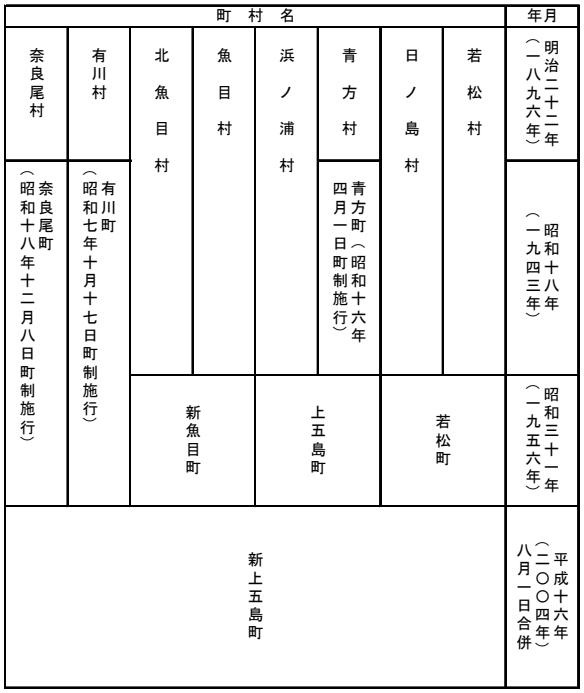


図２　新上五島町の変遷

３．人口

（１）人口構造

本町の総人口は、25,039 人（平成 17 年国勢調査）で、県内 21 市町中 16 位の人口規模となっている。平成 12 年と比較すると 2,520 人（9.1%）減少し、ピーク時の昭和 30 年とは 32,571 人（56.5%）の減少と慢性的に人口の減少が続いている。

年齢別人口構成比の推移を見ると、年少人口（0 歳～14 歳）と生産年齢人口（15 歳～64 歳）は、ともに減少しているのに比べ、老齢人口（65 歳以上）は増加している。老齢人口割合は、昭和 45 年に「高齢化社会」といわれる 7%を超え、平成２年に「高齢社会」とされる 14%を超えた。また、平成 7 年には初めて老齢人口が年少人口を上回り、平成 17 年では老齢人口割合は 29.7%となり、全国平均と比較すると 9.6 ポイント高くなっている。総人口、年少人口、生産年齢人口が減少する中、老齢人口は増加し、少子・高齢化がさらに進んでいることが分かる。世帯数は、人口と比較すると昭和 10 と 15 年を除き若干の増減はあるもののほぼ横ばい状態で推移している。また、１世帯あたりの平均世帯人員は、昭和 30 年の 5.4 人に対し、平成 17 年は半分以下の 2.4 人となり、核家族化が進展している。

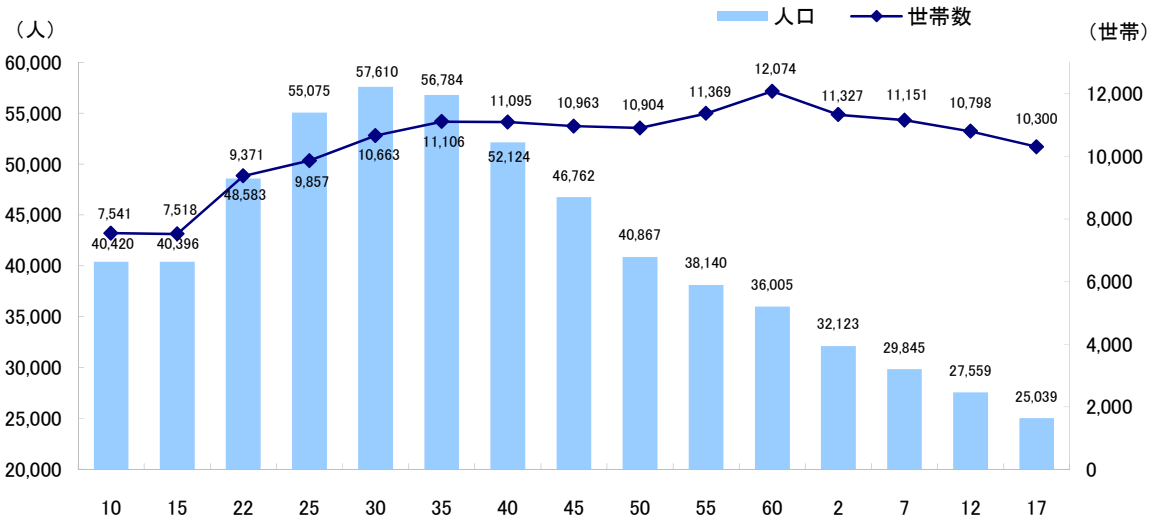


図３　総人口、総世帯数の推移

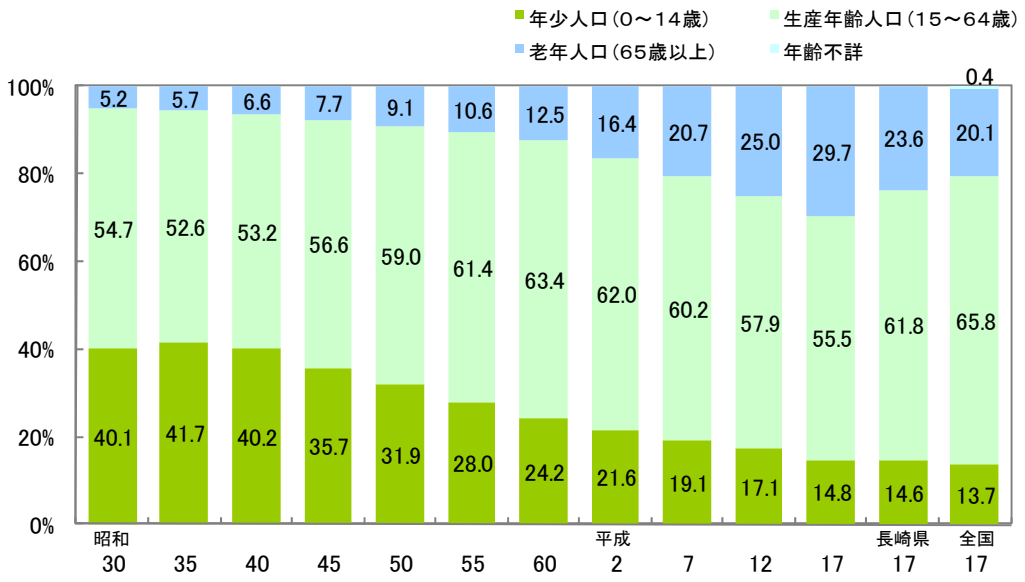


図４　年齢３区分別人口構成比の推移

（２）就業者数と産業構造

本町の就業者総数は、人口減少と相まって年々減少している。昭和 30 年には 24,967 人だったのが、平成 17 年には 9,644 人となり 61.4%の減少率となっている。

産業別就業者割合を見ると、第１次産業の就業者割合が減少し、第２次産業、第３次産業の就業者割合が増加している。特に第３次産業の就業者割合は大幅に増加し、経済のソフト化・サービス化が進行しつつあることがうかがえる。

平成 17 年における産業別就業者の割合は、第１次産業では、漁業（1,205 人、就業者総数に占める割合は 12.5%）がほとんどを占め、第２次産業では建設業（1,170 人、12.1%）と製造業（480 人、5.0%）、第３次産業では、サービス業（3,137 人、32.5%）、卸売・小売業、飲食店（2,176 人、22.6%）が多くを占めている。

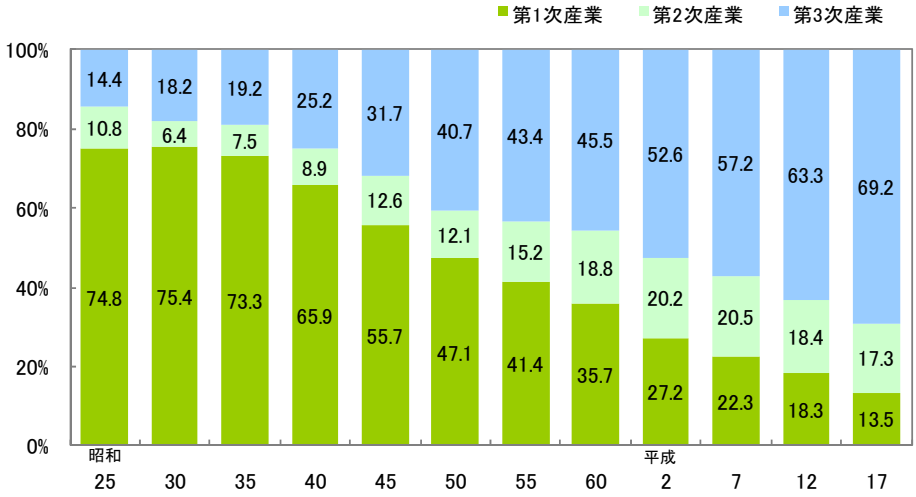


図５　産業別就業者割合の推移

４．地形

新上五島町は、中通島や若松島など７つの有人島と 60 の無人島から構成されている。中通島と若松島、中通島と頭ヶ島など町内の有人島はすべて架橋等により連絡している。

中通島は、東西南北に少しひずんだクロスの形になっている。南北方向に約 39km の延長と、東西約 18km の最大幅を持っており、面積 168km^{2}は、対馬島（696 km^2）・福江島（326 km^2）に次いで、県内第３位の面積を有している。南北方向の地形は、700 万年前以降の火成岩分布層であり、幅の狭い険しい地形を作っている。また、若松島から頭ヶ島の南東方向にかけては、比較的傾斜の緩やかな地層のために平野ができている。若松島がある南部地域は有川層からなる比較的固結度の低い火山岩のために侵食によるリアス式海岸を形成している。

５．地質

中通島においては下部の砂岩泥岩を主とする青砂ヶ浦層と、上部の砂岩層を主とする飯ノ瀬戸層、また、若松島では、五島層群相当層は若松島層群と呼ばれており、凝灰岩と泥岩からなる若の浦層と砂岩が卓越する月の浦層に区分されている。

６．植生

本町は照葉樹林帯で、島々の相観はシイ萌芽林が主な照葉樹林である。その樹種はツブラジイ（コジイ）群落で、スダジイ群落は少ない。中通島や若松島で発達するシイ萌芽林群落・タブノキ萌芽林群落を伐採し、スギ、ヒノキを植林した人為的な人口森林がその地域ではモザイク状に見られる特異な相観もところどころで見られるが、北魚目地域では人工林の面積は少なくタブノキ萌芽林群落が大部分を占めている。

第２節　地形と地質

１．はじめに

五島列島には新第三系が広く分布しており、日本海の拡大に関連した堆積盆の形成やテクトニクス及び当時の環境変遷が記録されていると考えられる。しかし、五島層群（特に下部）については全体構造や詳細な層序についての研究例が少なく、また島ごとの構造・層序対比は行われていない。これは、五島層群が構造的に急角度の地層を含んでおり、また、新旧火成岩類（花崗岩・石英斑岩・緑色火山岩）・貫入岩（ドレライトシル）などの影響により層序の組み立てや層序対比が難しいため詳細な地質図が作成されていないためである。 清川研究グループでは、５年間にわたり五島列島の地質構造を明らかにし､五島層群全体の岩相層序を組み立ててきた(山本 MS2006、安永 MS2007、長谷川 MS2008)。

五島列島は日本海拡大に関連する歴史が地層中に含まれており、日本列島が島弧としてユーラシア大陸から完全に離れた最後の部分として重要な場所である。五島列島は下位から中新世中期の五島層群、中新世後期の中通島層群、そして第四紀に活動した玄武岩類からなる。その中で基盤を形成しているものが五島層群であり、その地層層序や構造を明らかにすることが、五島列島がたどった最も古い歴史を紐解くことになる。清川研究グループは、五島層群下部に関して、下部の火山性砕屑物の認識､五島層群と中通島層群の火成岩類との境界決定を行い､特に､本町における五島層群の全層厚 3,700 mの地層変化を明らかにした。また、五島層群の層序的中部において、今まで五島層群中からの産出が知られていた温暖型の台島型とは異なる比較的冷-温帯型の植物群が産出した。

本報告では、五島層群全体の地質の特徴を述べ、より詳細に上五島地域の地質・地形について、人々が住める現在の状態になったのか考察する。

２．地質概略・研究史

長崎県五島列島は、九州の西方約 60 km に位置し、北北東－南南西方向に配列しており、福江島、久賀島、奈留島、若松島、中通島の５つの主要な島と 200 余りの小島からなる。それぞれの島では堆積岩や火山砕屑岩・花崗岩からなり、海抜 460mに達する山々と少ない平野、そしてリアス式の入り組んだ海岸地形が広がる。地層は前期～中期中新世の五島層群が、列島の配列方向と平行な北東－南西方向に伸び（植田、1961；長浜・水野、1965)、その上位を五島流紋岩類（河田ほか、1994)や火山性堆積物の中通島層(築地層：鎌田 1966;手島・山本 1972;有川層：川原ほか、1984；神部層)が重なり、第四紀の玄武岩火山が島々の北限と南限部に残っている（図 1)。構造的には、島々を区切る北北西方向の瀬戸があり、北北西－南南東方向の若松瀬戸を分ける郷の首断層（鎌田ほか、1966）の記載はあるものの、その成因は明らかでなかった。研究地域の層序については、新第三紀の堆積岩類である五島層群は、福江島の上部層から産出する植物化石が台島型植物化石群に相当することから、佐世保炭田の佐世保層群と野島層群に対比され、その堆積年代を中新世前期から中期とされている（植田、1961)。また奈留島の４地点から佐世保炭田の野島層群下部に共通する淡水性貝化石が発見され、五島層群は非海成層と見なされた(長浜、1965)。さらに、長浜・水野(1965)は野島層群と五島層群の堆積期に、延長 100km 以上にも及ぶ淡水湖を推定し、この堆積盆地を「五島－野島沈降帯」と名付けている。

３．五島列島の地質

福江島においては、河田ほか(1994)では、福江島東部の地質図にて、下位の厚い砂岩泥岩互層を奥浦層、凝灰岩を挟む砂岩の卓越層について戸楽層を定義している。福江島では、五島層群上に福江流紋岩類が重なっており、また、1500 万年前の花崗岩類の貫入がみられる。五島列島は北東方向に並んでいるが、第四紀の玄武岩類が活動し、富江・三井楽・岐宿・鬼岳と溶岩が流れたあとであり、五島列島ではめずらしい広い平野を作っている。構造的には奥浦から荒川そして玉之浦－オゴセにかけて片側落ちの背斜構造がみられる。この変形は福江島の北西側が正断層によって引きずられて出来た構造であり、日本海形成時にできた五島列島形成の最も初期の重要な構造である。この変形を五島列島における最初の変形構造ということでD1変動と名付けられている。その後、玉之浦地域で横ずれ変形に伴う構造変形がみられる。これは、福江島西方から対馬西方・韓国東方に達する対馬－五島構造線の運動に伴う変動で、D1 変動の構造を変形させており、D2 変動と名付けている。D3 変動は五島列島のそれぞれの島を分ける海峡をつくる断層運動で、若干の横ずれを伴う北東－南西方向の伸張場でできた正断層である。北部沖縄トラフ拡大に関連する可能性がある。奈留島北西部に唯一断層露頭が見られる。この断層活動は、中通島にみられる 7000 万年前の火山岩類の露出方向とも一致しており、火成活動を伴う伸張活動が起こったと思われる。

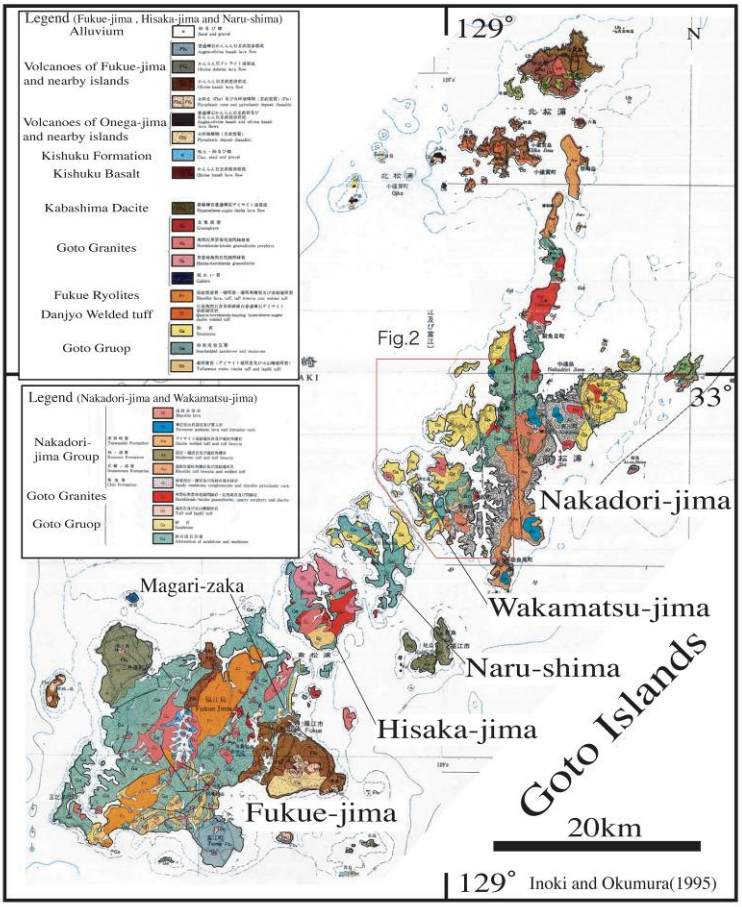


図1a　五島列島全体の地質図(猪木・奥村1995)

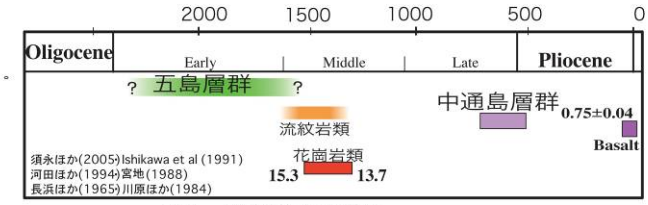
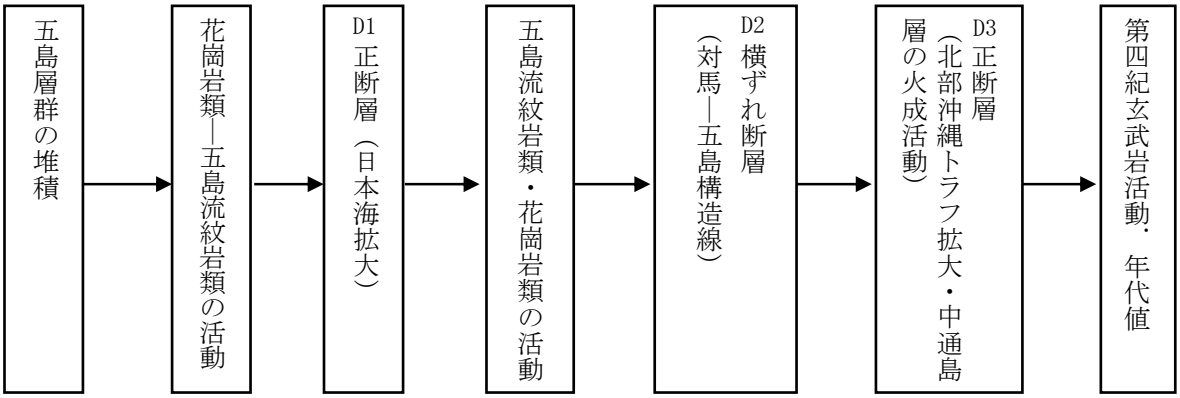


図1b　五島列島の地質年表

今のところ、以下の順番で現在の五島列島が形成されたと考えている。



４．上五島の地質

中通島においては下部の砂岩泥岩を主とする青砂ヶ浦層と、上部の砂岩層を主とする飯ノ瀬戸層(川原ほか 1984)、また、若松島では、五島層群相当層は若松島層群と呼ばれており、凝灰岩と泥岩からなる若の浦層と砂岩が卓越する月の浦層に区分されていた（鎌田、1966；手島ほか、1972)。また、鎌田（1966）；手島ほか、（1972）では、凝灰岩中の鉱物に注目した記載はあるものの、地質構造を考慮した岩相層序対比はなされておらず、それぞれの地層における垂直変化や側方変化は述べられていない。川原ほか（1984）では、主に中通島層群についての記載であり、五島層群については注目しておらず、特に五島層群下部の青砂ヶ浦層については、露出が限られており岩相変化や分布についての明瞭な記載はなされていないため、安永ほか(2007)により道土井層として再定義され、またその下位に分布する高崎層を新しく定義した。

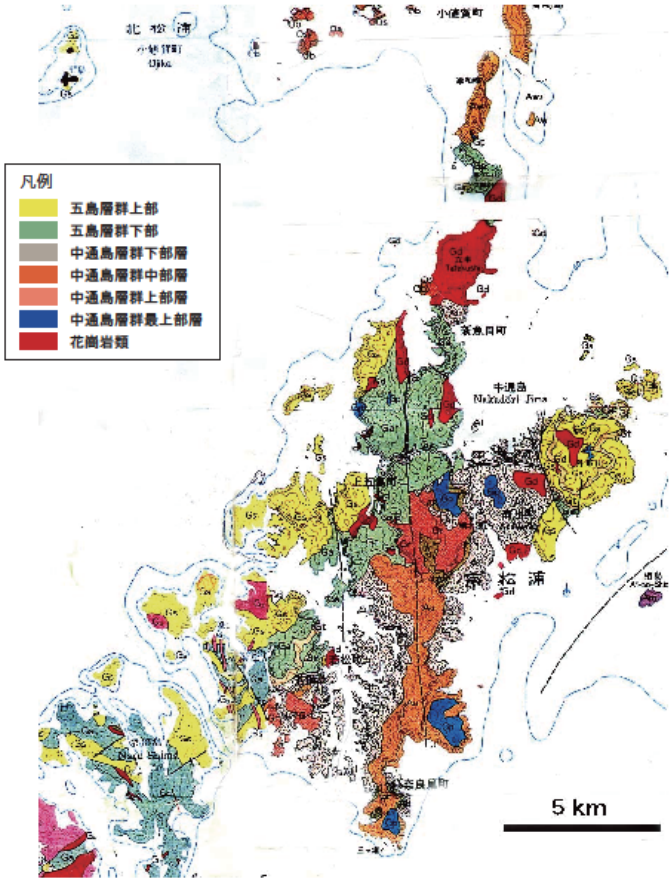


図２　上五島の地質図

（１）五島層群層序

中通島および若松島における五島層群について火山砕屑岩層と砂岩層の変化に注目し３つの岩相層序に区分した。下位より、緑色を呈す火山岩砕屑岩を大量に含む高崎層、泥がち砂岩泥岩互層を主体とする道土井層、厚い石英質砂岩を主体とする飯ノ瀬戸層からなる。

①高崎層（新称、700m以上）

模式地は、若松島の高崎鼻採石場、及び猿浦の海岸北側、郷ノ首とする。最下部は不明である。下部層は層厚は 100mほどが露出し、白色石英シルトと黒色粘土、および薄い凝灰岩葉理が細かく繰り返す泥質シルト岩からなる。泥質シルト。粘土岩は厚さ数 mm～数 cm の石英および有機物に富む粘土が細かく規則的に繰り返す互層からなり、生物擾乱もないため、非常に静穏な湖環境と考えられる。部分的に酸性凝灰岩薄層や、レンズ状砂岩が挟まれており、静かな湖環境への火山灰や陸域からの流れ込みがあったと考えられる。

上部は塊状火山岩及び厚い緑色火山砕屑岩からなる。上部の火山岩・火山砕屑岩層は、斑晶の多いデイサイト質塊状火山岩、ガラス質の急冷破砕岩（ハイアロクラスタイト)、火山砕屑岩からなる。砕屑岩は、緑色を呈し約 15cm 程度の角礫を含み、基質は中粒～粗粒の緑色火山岩起源の砂からなる。鏡下では、円磨度の悪い火山岩起源の石英粒子を多く含み、急冷ガラス及び変質粘土鉱物からなる。火山砕屑岩は、低角度の斜交葉理が発達し、上方細粒化が特徴的である。これら火山砕屑岩類は岩相・層厚の側方変化が著しく、若松島の東海岸で 200m、西海岸では 400m程で東部から西部へ向かって層厚が増す。高崎層は湖環境において、爆発的な火成活動が記録されている地層であると考えられる。

②道土井層（新称、1,400m）

模式地は中通島道土井から黒崎に至る海岸及び若松島東海岸とする。厚い火山砕屑岩層の高崎層に整合的に重なり、泥岩の優勢な砂岩泥岩互層からなり、上方細粒化を示す下部と上方粗粒化を示す上部に区分できる。下部は、境界が明瞭な泥がち砂岩泥岩互層を主とし、部分的に火山豆石を含む数mの凝灰岩層を挟む。細粒砂岩とシルト岩簿層が繰り返す互層が卓越し、ウェーブリップルが頻繁に観察できる。砂岩層は連続性に乏しく、レンズ状をなすものも見られる。特に若松島西海岸では、泥質層は少なくなり、石英を主とし部分的に火山性物質を含む緑灰色から緑色の砂岩・シルト岩互層になっている。上部は、細粒砂岩とシルト岩簿層が繰り返す互層（リズマイト）から、塊状砂岩へと数10mの厚さの上方粗粒化層が繰り返しみられる。また、大型陸上植物化石層を含む。

道土井層に見られる境界が明瞭で泥岩の優勢な砂岩泥岩互層は静かな環境で堆積するリズマイトと考えられる。また、砂岩中の広域にみられるウェーブリップル層から、湖の周辺部の浅い環境であると考えられる。リズマイト層からウエーブリップルを伴う砂岩に移り変わる地層の繰り返しは、湖環境における湖畔環境において、陸域から土砂の流れ込み、もしくは水の干上がりにより湖が埋没状況を示していると考えられる。部分的に含まれる火山性物質を含む緑色の砂岩層の存在より、道土井層は火山性二次砕屑物が流れ込む湖沼起源の堆積物であると示唆される。

③飯ノ瀬戸層（1,500m）

中通島北西部及び若松島北部に分布する。 飯ノ瀬戸層は、道土井層最上部の葉理の発達した層厚約５mの緑色凝灰質砂岩に整合的に重なる。非常に厚い砂岩層からなり、部分的に数mの泥岩を挟む。砂岩層は上方厚層・粗粒化しており、数 100mの上方粗粒化堆積サイクルが認められる。下部は、厚さ数10mの砂岩と数mの泥岩の互層からなり、砂岩中には平行葉理、斜交層理が見られる。上部層は、３回の上方粗粒化のサイクルをもつ砂岩優勢な層である。砂岩は黄土色～灰白色で石英粒子に富み、砂岩中には斜交層理（波高20～40cm）が見られ、特に最上部では、波高30mに及ぶ大型の斜交層理が見られる。また特徴的に、厚い砂岩中には塊状・層状をなす炭質物が頻繁に含まれてくる。厚い砂岩にはコンボリューションが発達し、泥岩の偽礫を含む粗粒砂岩をしばしば挟む。トラフ型斜交層理から求めた古流向は、そのほとんどが北東への流れを示す。

飯ノ瀬戸層は砂岩優勢で上方厚層化・粗粒化を示し、その供給は一定方向からであるため、河川からデルタ環境であると考えられる。また、北東方向への古流向は、北西九州の新第三系で求められた古流向と非常に調和的である。飯ノ瀬戸層堆積時（ほぼ15Maごろ）は丁度、日本海が北東側に拡大している。飯ノ瀬戸層の上位の地層が見られないため、湖成か海成かは不明である。

④大型植物化石

道土井層上部にあたる跡次において、凝灰質砂岩層を挟む泥岩と砂質シルト岩の互層中の暗灰色で堅固な砂質シルト岩層より多量の大型植物化石を得た。化石の保存状態は悪いものが多いが、現段階で以下の針葉樹１種、双子葉類14種、単子葉類１種を認めることができた。

Taxodium dubium (Sternberg) Heer
Salix masamunei Matsuo
Salix sp.　1.
Salix sp.　2.
Zelkova ungeri (Ettingshausen) Kovats
Liquidambar miosinica Hu et Chaney
Gelditsia miosinensis Hu et Chaney
Podogonium knorrii Heer
Leguminosae gen.　indet.
Ilex sp.

Acer sp.
Sapindus tanaii Onoe
Celastrus sp.
Paliurus ? sp.
Fraxinus ? sp.
Glamineae gen.　indet.

跡次の植物化石群は、ヤナギ属の *Salix* を多産し、針葉樹の *Taxodium* も普通に産することから、河床～湿地の植生を反映しているものと考えられる。その他の種類では、台島型植物群に特徴的な *Podogonium knorrii* や少数の *Liquidambar miosinica* や *Sapindus tanaii* が含まれている。種の識別はできないが、*Ilex*、 *Celastrus*、*Paliurus?*も台島型植物群に普通の要素とみてよい。しかし、台島型植物群に特徴的な常緑のクスノキ科やカシ類は現在のところ確認していない。双子葉類 14 種のうち、常緑と考えられるのは全縁葉の *Ilex* sp. １種のみで、*Salix* の多産する台島型植物群の例はこれまで知られていない。*Salix* そのものは、現在の熱帯山地から寒帯まで広く分布しているが、分布の中心は温帯から寒帯の地域である。

植田（1961）は五島列島福江島の五島層群上部から、*Cinnamophyllum* や *Liquidambar?*など、温帯南部から暖帯性の植物化石群を報告し、これが台島型植物群に相当すると考えた。筆者らは、植田（1961）の植物化石産地近く（福江市北方曲峠）から新たに植物化石の採集を行った。この植物化石群は *Quercus miovariabilis*（植田により *Castanea* とされたものに相当）を多産し、*Liquidambar miosinica* や、常緑の *Pasanea*、*Actinodaphne*、*Myrsine*、*Ilex* を含んでいて、跡次の化石群とは異なっている。同様な組成の植物化石群は、若松島漁生浦の飯ノ瀬戸層下部の黄土色砂質シルト岩層中から確認されている（安永・植村、未公表資料）。

五島層群に対比される北西九州の野島層群の深月層からは台島型植物群の産出が知られている（棚井・尾上、1956）。また、深月層上位の南田平層からは最近 *Vicarya* や *Cerithideopsilla* などを含んだ門ノ沢動物群が報告されている（小松原ほか、2005）。深月層の“台島型植物群”は、中通島跡次の植物化石群と同様、*Salix* を多産し、温暖要素の植物に乏しいという組成的特徴がみられる（植村，未公表資料）。*Salix* の多産は河床～湿地環境という、生態的あるいは堆積の様相による規制を受けていると考えられる。しかし、*Salix* と随伴する植物を考慮すると、跡次の道土井層上部や深月層の植物化石群は、典型的な台島型植物群に先立った、より温帯的な気候を反映した化石群である可能性が高い。

（２）花崗岩類

花崗岩は若松島北部の有福島/津和崎西海岸に緑色円礫状のゼノリスを多く含む花崗岩類がみられる。この緑色のゼノリスの形状が非常に丸く、マグマだまりの中での酸性マグマと塩基性マグマのマグマ混合がみられている可能性がある。花崗岩類は今里付近にも小さい岩体として露出する。

（３）中通島層群

中通島層群については、川原ほか(1984)に詳しく説明されている。下位より流紋岩質火砕流堆積物を主体とする有川層、デイサイト質火砕流堆積物の津和崎層、安山岩質溶岩からなる矢倉岳層に細分される。五島層群との境界は鯛ノ浦入口の藤崎－男鹿の浦の南岸に不整合面がみられる。有川層と津和崎層との関係は南部と北部という違いがあり距離が離れているため、明らかでないが、津和崎層と五島層群も不整合関係で接するらしい。今回の調査では境界は見つかっていない。南部の奈良尾の東海岸福見鼻では、巨大なブロックを含んだ、火山岩類が五島層群の互層上に落下した地層がみられ、不整合が確認できる。

①有川層

下位より阿瀬津部層、筑地部層、神ノ浦部層、岩瀬浦部層からなる。細かな記載は省略するが、基本的にこれらの火山岩類は多くの五島層群の砂岩泥岩層のブロックを含んでおり、大きいものでは５m以上に達しており、噴火の時に五島層群を通って、もしくは露出している五島層群を吹き飛ばし、巻き込みながら堆積したものである。福見浦から浜串漁港にかけて、連続した火山砕屑岩の露頭が連なり、神ノ浦部層と岩瀬浦部層の境界が浜串漁港のマリア像南岸の崖に見られる。基本的に火砕流は、最下部に数mの礫を多く含む地層からはじまり、上部ほど均質で細粒の火山灰層に変化する。これは、火砕流が流れてくるときの流速の減衰によるものである。岩瀬浦部層の厚い白色凝灰岩類は、若松島南端の白崎地域に広く分布し、若松瀬戸の鳥の小島から白崎にかけて、下位の礫岩から徐々に細粒で均質になっていく非常に厚い火砕流堆積物の様子が観察できる。キリシタン洞窟はこの均質白色火砕流堆積物の節理にそって出来たものである。特に朝日の当たる朝出港の青方から福江に行くフェリーにてよく観察できる。

②津和崎層

津和崎海岸に分布する石英/黒雲母含有複輝石デイサイト質火砕岩であり、緻密で黒色の溶結凝灰岩をなす。含有する異質岩片は流紋岩、凝灰岩、砂岩からなり変質して緑色になる。今回の調査で、津和崎にみられる産状は有川層中のデイサイト質火砕流堆積物に類しており、境界は見えなかったものの五島層群に不整合で重なることより、有川層と対比できると考えられる。

③矢倉岳層

有川層に溶岩流として覆うもので、流紋岩部分と安山岩部分に区分される。層厚はそれぞれ 50m以上あり、ドーム状の産状を示す。貫入部分と溶岩部分がある。地形的に高い部分には、この火山岩が覆っていると思われる。

その他、上五島には多くの貫入岩類が分布しており、石英ー花崗班岩、流紋岩、安山岩ーヒン岩、石英閃緑岩、はんれい岩、粗粒玄武岩が貫入しており、地質構造を難しくしている。たとえば、有川港近辺にも五島層群に貫入するヒン岩があり、貫入時の流理組織をもつ。これらは一見すると周囲の砂岩層と同様な色をしており、その縞は堆積構造に間違えることがあるので、露頭での観察では必ず貫入境界を確認する必要がある。

５．地質構造

（全体の地質構造）上五島地域の地質構造は、五島層群は緩く北西傾斜・北西上位をしており、北東ほど新しい地層が見られる。しかし、若松島高崎鼻の採石場にて急傾斜した南上位の緑色火山岩類が観察され、それより南側の五島層群も南上位になるため、滝河原－間伏－若松越えに大きな背斜があることが明らかになった。中通島での褶曲軸は中通島の荒川郷あたりを通るが中通島層の分布のために見られない。

（五島層群の D1、D3）福江島で見られた構造も、D2 の影響はなく、D1、D3 に関して明らかになった。特に D1 変動の特徴である片側急傾斜の片側落ちの正断層を伴う背斜構造が、高崎鼻、若松瀬戸の大串崎、船崎の横崎鼻でみられる。中通島層群は褶曲していないので、五島列島形成後の変形であることは明らかである。褶曲や片側落ち正断層構造は側方への連続性が悪く、D3 変形によりずれていると考えられる。

（中通島層群の構造）若松島と中通島西部においての、五島層群と中通島層群の関係は単純ではなく、境界面は侵食作用か断層活動により大きくずれている可能性が示唆される。これは、広く分布する中通島層群の火砕流堆積物の分布が若松島北部や中通島北部の標高が高い部分に見られないためである。今のところ、中通島層群噴出時の陸上地形の影響の可能性が高い。D3 変動は有川から東側に広く分布する砂岩泥岩層と地形的にほとんど同じ高さの有川－鯛ノ浦地域における中通島層群の分布にも現れており、太田－小河原を結ぶ地形的にも直線的な凹みの両側で違いが見られる。つまり、D3 変動は、複雑な侵食面でない限り、中通島層群噴出堆積後に数 100ｍの変位量をもって変形していることが考えられる。

６．五島列島形成史

五島列島における層序の確立は、堆積盆の変遷を考えるだけでなく、構造変形の著しい場所での地層の連続性を考えた地質図を作成する上で重要である。五島層群は陸成層からなり地層の側方変化は大きいが、岩相が急激に変化する３つの層序関係（厚い緑色火山岩層の高崎層、砂岩泥岩互層からなる道土井層、厚い砂岩層からなる飯ノ瀬戸層）を明らかにし、それらに不整合で火山砕屑岩からなる中通島層群が重なる。

五島層群は側方変化があるものの全体層厚が約 3,500ｍにも達することが明らかになり、火山噴出堆積物から河川や湖の堆積物、そして最終的には厚い砂岩が南方からの大量砂の堆積供給を受けて形成する様子が明らかになった。現在の五島周辺の海底は水深 200ｍしかないために、これらの堆積物を沈積させる堆積空間を作るために、当時大きな沈降が続いていたことがわかる。当時の五島列島地域はリフトに関連する酸性－中性火成活動からリフト活動がはじまり、そこにできる堆積盆（湖）を川で埋めていき、最終的には厚いデルタ的な堆積物が北方に広がる日本海に供給されていたと考えられる。この時期の北部九州の堆積盆ではそのほとんどが北東方向の古流向を持つため(小松原ほか 2005)、中国の古黄河流域などから形成される大河が日本海に流れ出す巨大なデルタが発達していた可能性がある。

地質変形作用は D1、D2、D3 の３回を識別できる。D1 は五島中央褶曲と北東傾斜が卓越する F1 断層を形成する北西－南東伸張を示す構造運動であり、五島列島の骨格を作った北西－南東の伸張構造運動といえる。D2 は、F2 左横ずれ断層運動に伴って、玉之浦地域の地層はブロック化する運動であり、F1 で形成された地質構造を南方向に曲げていく。D3 は五島列島の島を北西－南東方向で分ける F3 の活動にともなう新しい時期の伸張運動である。

これらの変動と花崗岩・流紋岩・貫入岩の関連は重要である。地質構造と地層や貫入岩の切断関係から以下の項目が明らかになった。A) 五島流紋岩と五島層群は貫入関係、B) 花崗岩類・五島流紋岩

類の活動は F2 および F3 変形に関連、C）NEDO 掘削による丹奈地域の急傾斜砂岩泥岩互層の下にある花崗岩類の存在（花崗岩が急傾斜層に貫入を示す）、D）花崗岩類の分布および種類の違いによる久賀島・福江島、奈留島・若松島との形成深度の差と島間にある F3 断層の存在、E）北東－南西方向を示すドレライト岩脈群（7－8 Ma の年代を持ち、五島中央褶曲や花崗岩類や F1、F2 断層を抜く）。

上記のうち、五島流紋岩類と五島層群下部の高崎層の境界関係は構造変形と火山活動の順序を決める上で重要である。不整合の場合は、五島層群形成後に変動が起こり五島層群の上部の侵食作用後に火山活動が起こったことを示す。貫入の場合、変形時期と同時に火成活動が起こっている可能性がある。河田ほか(1994)では 背斜部分に生じた北東－南西方向の断裂がマグマの通過経路になったことを示唆している。今のところ、不整合で五島流紋岩が地層上に被っている境界は発見されていないが、火山活動による堆積境界は必ずあると思われる。また、D1 と花崗岩類の関係は、NEDO 掘削による砂岩泥岩の急傾斜層の下位花崗岩類が存在すること、花崗岩類に D1 で形成した構造がみられないことより、花崗岩類が D1 後に貫入したと考えられる。花崗岩類・流紋岩類にはドレライト岩脈がみられ、これらは D3 に切られている。

FT および K－Ar 年代測定により、五島層群の堆積時期と花崗岩活動時期が精度良く明らかになった。過去の流紋岩類に関する年代報告のうち 20 Ma などの古い年代を示すものは不正確な年代とし、15Ma 以降の若い年代を示すものは福江流紋岩類活動期の年代であると考えた。

これらの関係から、今まで明らかにされていなかった五島層群における 3 回の構造運動と貫入関係は、五島層群堆積（18－16 Ma）－D1（16－15 Ma）－五島流紋岩類・花崗岩（15－13 Ma）－D2（10－8 Ma）－ドレライト岩脈群（8－6 Ma）－D3（6－5 Ma）ということになる。以下、構造発達史を述べ、堆積場・構造変形と日本海の拡大について考察する。

（１）五島層群の形成（18－15 Ma）

アジア東縁辺部におけるリフト活動（中新世前期から中期；18～17Ma）

中新世前期の火成活動によって緑色の流紋岩質凝灰角礫岩を供給し立谷層が堆積した。大陸縁辺部で起こった火山活動で、2,400m以上の堆積物をためる堆積盆を形成し、おそらくリフト帯が発達したと思われる。そこに河川－湖沼起源の堆積物（奥浦層・戸楽層）が堆積する。

日本海への流れ込みと巨大デルタ形成（中新世前期から中期；17～16 Ma）

地域的な火成活動を伴う凝灰岩を含む戸楽層が堆積後、急激に粗粒砂岩層からなる仏崎層が覆う。南西から北東への古流向および大きな波高をもつ粗粒斜交層理砂岩層が重なることは、すでに北方から日本海の拡大が進行しており、拡大の最南端が五島地域に到達した可能性を示唆する。このとき黄河域から日本海に流れ込むデルタ環境になったと考えられる。奥浦層が示す 19.4±0.9 Ma、16.2±0.9 Ma はおおよその五島層群堆積時期を示す。

年代値の誤差を考慮すると、五島層群は 18～16 百万年前に比較的短時間で火山活動を伴うリフト地域に河川・湖で堆積したことになる。福江島北東部における砂泥互層を主とする五島層群奥浦層の層厚は約 1,300mなので、その堆積速度は 43～65cm/1000year。であり、野島層群においても、その堆積速度は約 50cm/1000year。以上と見積もられており（小松原ほか 2005）、岩相・古流向などの特徴より類似した堆積相と考えられる。

（２）五島列島における構造変形と貫入活動

D1（日本海拡大期　正断層：約 16～15 Ma）

D1 は北西－南東方向の伸張場によって北東－南西走向の正断層（F1）が形成される変動である。この変動は伸張にともない高角度の正断層が発達し、断層に沿って階段状に地層が褶曲する特徴をも

つ。断層の垂直変位量が数 100ｍで F1 の下盤側は幅数 10ｍから数 100ｍの急傾斜層を形成する。この変形が北東－南西方向の五島列島の骨格を作る。

花崗岩類の貫入・流紋岩類の活動　(F1 形成後；約 15～13Ma)

F1 の形成に引き続き、北東－南西方向に延びる活動範囲をもつ酸性火成活動によって約 15 Ma に花崗岩の貫入が起こる。それとほぼ同時に五島流紋岩が約 15～13 Ma（FT 年代測定法から求まる熱変成年代 13.3±1.1 Ma）に活動したことになる。花崗岩と福江流紋岩はともに北東－南西の方向性をもって分布しており、また放射年代も近い値を示すため、基本的には同時期の火成活動で形成したと考える。

D2（対馬－五島構造線の活動：10 Ma～8 Ma）

D2 は五島中央褶曲を含めて、福江島西部の地層群を北東－南西方向から南北方向に反時計回りに褶曲させた活動である。このときに、玉之浦地域では、細かなブロック化が起こり、北東－南西走向の右横ずれ正断層を形成しており、横ずれに伴う伸張場になっていると思われる。対馬列島及び五島列島の西方海域には北北東－南南西方向に伸びる対馬－五島構造線が存在しており、上記の右ずれ正断層活動は、この断層の左ずれ運動に伴ったブロック回転変動であると思われる。

ドレライト・安山岩岩脈・流紋岩－デイサイト類の再活動(D1 形成後；約 8～6Ma)

8-6 Ma は福江島広域でドレライト・安山岩質岩脈の貫入が起こっている。この頃は、上五島では流紋岩－デイサイト質の火山活動にて中通島層（川原ほか、1984）が形成し、五島列島全体で再び小規模な火成活動が起こる。甑島では 7Ma に北西－南東伸張がはじまり、デイサイト質貫入が起こっている（大岩根ほか、2007、　藤内ほか、2008)。

D3（沖縄トラフ形成：7～5 Ma 以降）

D3 は北西－南東走向の右横ずれ正断層を形成する変動であり、五島列島の主要な島々が北西－南東方向の断層によって分かれる。特に花崗岩が広く分布する久賀島はホルスト状態になり、福江島、奈留島は沈降したために、久賀島では比較的下位の五島層群と花崗岩、福江島では層序的に上位の堆積岩や流紋岩が覆っている。福江島南西に分布する五島海底谷もこの F3 断層型と方向が類似する（大岩根ほか、2007)。この 変形の時期は、少なくとも７Ma の火山砕屑岩の中通島層や７Ma のドレライト岩脈がずれていることより、6～5 Ma ごろと推測できる。

７．地形の特徴

地形的な特徴は、地層分布と地質構造を反映している。中通島の特徴は、東西南北にすこしひずんだクロスの形になっている。特に津和崎から奈良尾にかけての南北方向の地形は 700 万年前以降の火成岩分布層であり、幅の狭い険しい地形を作る。若松島から頭ヶ島にかけては五島層群が延びる方向であり、比較的傾斜の緩やかな地層のために平野が出来ている。若松島－奈良尾地域は有川層からなる比較的固結度の低い火山岩のために侵食によるリアス式海岸を形成している。新魚目町地域は津和崎層群や花崗岩の貫入部分は侵食による急崖を作っているが、五島層群が残る江袋－赤波江地域では、地層が砂岩や泥岩でできているため、なだらかに侵食されるとともに、斜面の地滑りにより比較的緩やかな地形を形成している（江袋・赤波江・大瀬良地区)。

８．教会を形成する岩石

教会を作成した岩石は、すぐ近くにある岩石を使用しており、頭ヶ島教会のように、お金がある教会のみ岩石を切り出して精度の高い石垣・壁を作っている。今のところ、五島列島のキリスト教会はほとんど近くの岩石を使用している。

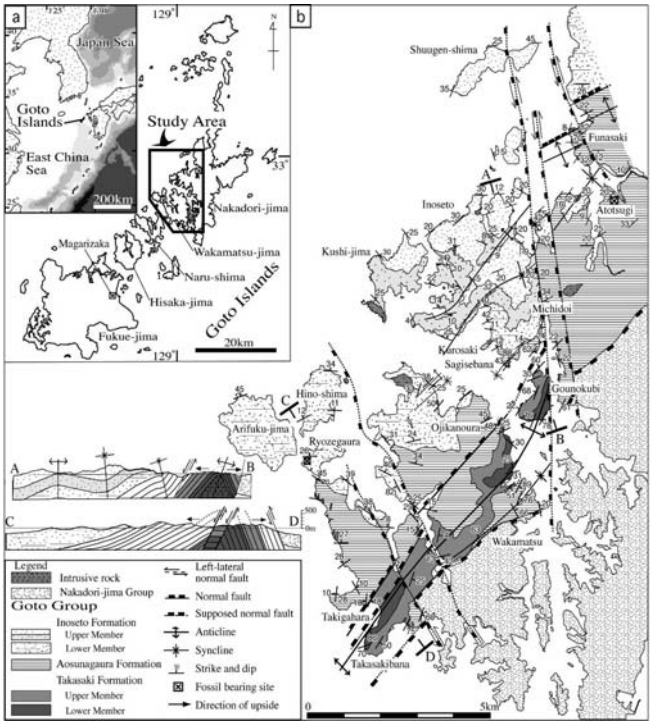


図３　青方－若松地域の地質図（安永ほか 2007）

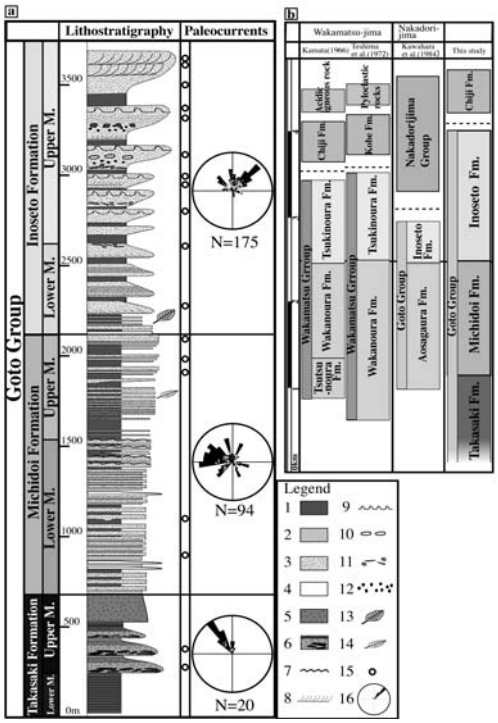


図４　五島層群の上五島地域の総合柱状図
（安永ほか 2007）

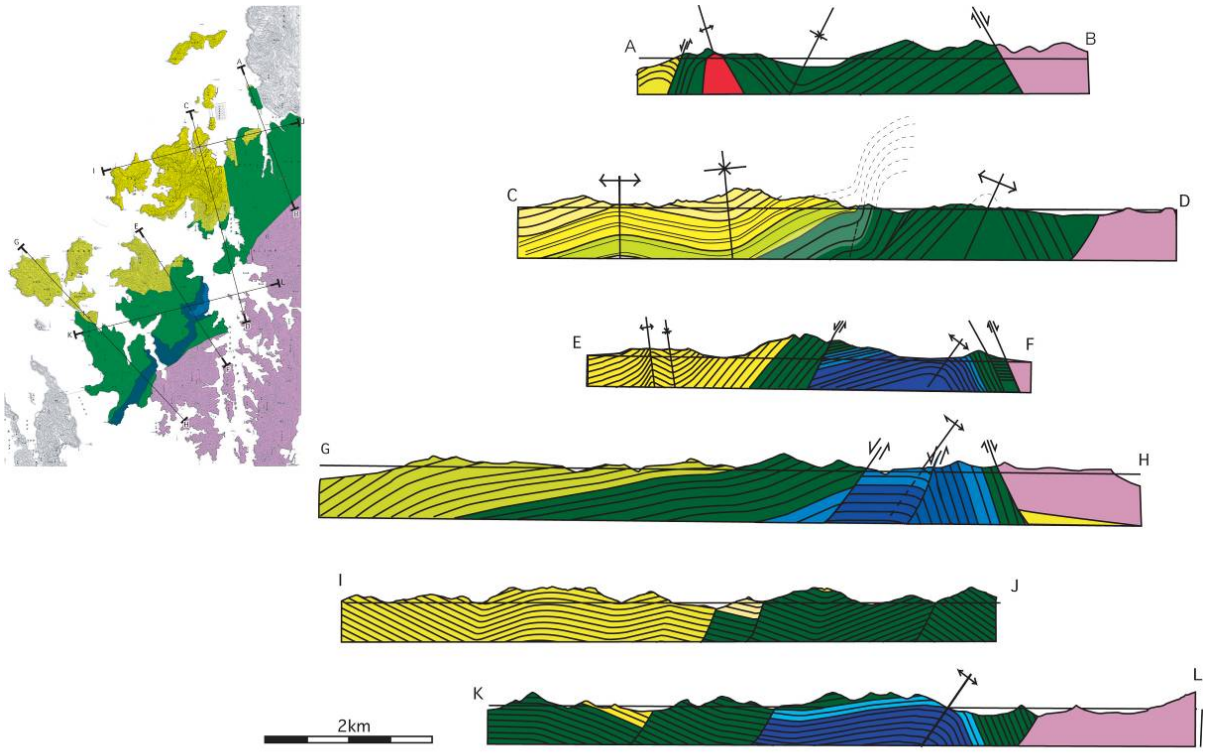


Fig.3-2 Cross sections

図５　地質断面図



写真１
【五島層群下位から】
下部高崎層中の緑灰色－黒色頁岩薄層互層。薄層が生痕化石などによる擾乱されずに互層しており、湖のような静かな環境で堆積したことを示す。



写真２
【五島層群下位から】
上部高崎層中の斜交層理の発達した火砕流起源の堆積物である。



写真３
【五島層群下位から】
泥岩から砂岩への上方粗粒化の層序が見られる道土井層。若松島、若松瀬戸・男鹿の浦。



写真４
【五島層群下位から】 植物化石:ヤナギ属ヤナギ科, Salix masamunei Matsuo, 跡次、道土井層上部。



写真５
【五島層群上部　飯ノ瀬戸層】飯ノ瀬戸層中の８ｍの波高を持つ斜交層理。飯ノ瀬戸層、猪浦西岸、福崎鼻。



写真６
【五島層群上部　飯ノ瀬戸層】飯ノ瀬戸層の全貌。福崎鼻。地層は南西に緩く傾斜し、上方に厚い砂岩層が連続する。



写真７
【五島層群上部　飯ノ瀬戸層】　上部飯ノ瀬戸層。祝言島には砂岩泥岩の互層が広く分布し、厚い砂岩層上に再び上方粗粒かする泥岩層が重なる。本層は走向傾斜と地質構造より江袋地域のビシャゴ岩に連続すると考えられる。



写真８
【五島層群上部　北部の露頭】　60 度傾斜している砂岩泥岩互層。祝言島、江袋と同様の N50E 走向の砂岩泥岩互層。網上西方・高崎。

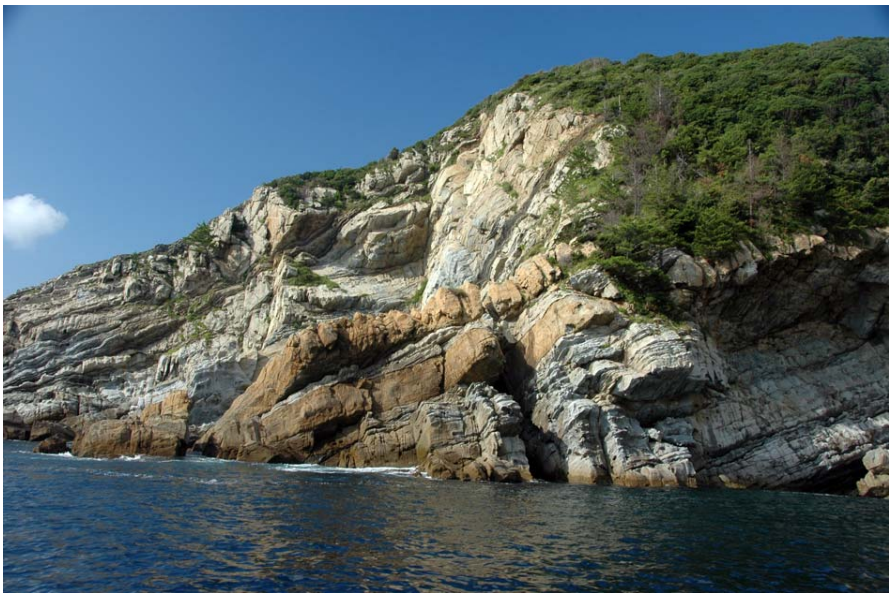


写真９
【五島層群上部　北部の露頭】　砂岩泥岩互層中に見られるヒン岩のシル。（地層面に水平に入る岩脈をシルとよぶ。）



写真 10
【五島層群上部　北部の露頭】 上方粗粒化を示す砂岩層。２回のサイクルが見られる。地層は左方向（南西部）から右方向に傾斜角度が緩くなる。江袋西方のビシャゴ岩を北西から望む。



写真 11
【五島層群上部　北部の露頭】 頭ヶ島の飯ノ瀬戸層。厚い砂岩層が緩い傾斜でみられ、石の切り出した跡地が残る。



写真 12
【中通島層群・第四紀火山】 奈良尾福見鼻にみられる五島層群中に落ちてきた巨大火山弾と不整合。



写真 13
【中通島層群・第四紀火山】　有川層の泥流堆積物（神浦部層）と火砕流堆積物（岩瀬浦部層）の境界。浜串南部海岸（ビシャゴ鼻）。



写真 14
【中通島層群・第四紀火山】若松島最南端白崎に分布する白色で均質の火山砕屑岩、有川層（岩瀬浦部層）。



写真 15
【中通島層群・第四紀火山】 緑色の円礫状岩石を含む花崗閃緑岩。マグマ混合の可能性がある。有福島西部地域。

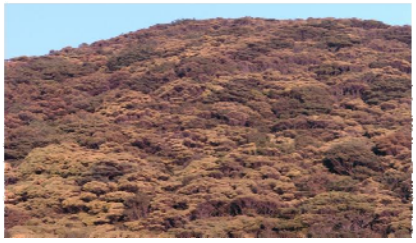
第３節　生物と環境

１．気候

生物の生育・生息に強い影響を及ぼす気候の重要な要素は気温・雨量・風・光（照度）などである。

（１）気温

五島列島は対馬暖流に囲まれているため温暖な海流の影響を強く受け亜熱帯系の植物が生育している。理科年表平成 20 年版によると 1971～2000 年までの平均値、つまり平均気温を列挙すると東京 15.9℃、新潟 13.5℃、福岡 16.6℃、長崎 16.9℃、福江 16.6℃であった。


写真１　照葉樹林も夕焼け

日本列島に発達する照葉樹林は（写真１）、年平均気温 15～20℃、年降水量 750～2,000 ㎜で乾期および雨期の区別はない。

さらに日最低気温を比較すると、東京 12.5℃、新潟 10.2℃、福岡 13.0℃、長崎 13.6℃、福江 12.8℃であり植物の生育、動物の活動に少なからず影響している。また 1978～1984 年統計によると上五島における年平均気温は 15.5℃で後述する他の地区より約１℃低い。福江 16.5℃、長崎 16.9℃、福岡 16.6℃（1971～2000 年）、カッコ内の数字は発生した西暦年および統計期間である。

陸上植物の植物群系を構成する種類と分布を決定する要因となる年平均気温と年降水量（後述）について五島列島は照葉樹林帯域に適合している。

五島列島の各地海岸および上五島の蛤海岸等に生育しているヒガンバナ科ハマオモト（ハマユウ）は年平均等温 15℃線（低温度極地－3.5℃線）以南に分布することが知られている（北村四郎 1964）。

新上五島町に生育する植物の生活形などが温度により強い影響を受け熱帯および亜熱帯系の植物も生育している。

（２）雨量

新魚目町郷土誌（1986）の資料によると過去 17 年間の降水量は新魚目町の最多年降水量は 3,090 ㎜（1974 年）最小年降水量 2,490 ㎜（1984 年）で、理科年表平成 20 年版により他の地域と比較すると最多年降水量は東京 2,229.6 ㎜（1938 年）、新潟 2,397.0 ㎜（1998 年）、福岡 2,976.5 ㎜（1980 年）、長崎 2,842.0 ㎜（1993 年）、福江 3,491.5 ㎜（1972 年）となり、五島列島は他の地域より多いことが明らかである。さらに最小年降水量は東京 879.5 ㎜（1984 年）新潟 2,316.4 ㎜（1928 年）、福岡 891.0 ㎜（1994 年）、長崎 922.0 ㎜（1994 年）、長崎より西に位置する福江 1685.0 ㎜（1996 年）であり、中通島より南に位置する福江島は降水量が多いことが明らかである。


写真２　ハマヒサカキ・トベラなど
（頭ヶ島 08.11.28）

植物群系の種類をきめる気候要因となる年降水量と年平均気温はシイ類（ツブラジイ・スダジイ）・タブノキ・クスノキなどの常緑広葉樹を形成する要因となっている。したがってこの群系は照葉樹林帯で季節変化が少ない特徴がある。（写真１）

（３）風

1980～1984 年の５年間に旧新魚目町役場で観測した結果（新魚目郷土誌 1986）によると、季節ごとの季節別風向出現率は春期に北西の風 39%、北の風 20%、南東の風 13%、東の風 12%で北方からの風向は約 60%で、夏期は北西の風 31%、南東の風 26%、北の風 20%、東の風 12%。秋期は北西の風

56%、北の風 16%、南東の風 10%で北方からの風向は 72%で南方に集団移動する渡り鳥の季節移動を容易にしている。


写真３　ウリハダカエデの種子
(09. 11. 21)

冬期は北西の風 50%、北の風 14%、南の風 12%、北方からの風向は 64%で１年間を通じてみると北西の風が 31～56%であり、さらに秋期には北西・北風の日が 72%で秋季に南国へ越冬に渡る渡り鳥、例えば大陸から移動するアカハラダカ個体群の季節移動を容易にしている。また北西向きの海岸線は露岩の崖地が多く生物群集への影響もあり潮風に強い海岸植物はハマヒサカキ（写真２）、シャリンバイ、トベラなどの樹木は季節風と海岸から吹き上げてくる風により樹形は風向きと同じ方向の陸地方向に枝が張り出し適応している実態を観察することができる。


写真４　シロバナタンポポ
（大瀬良 90. 3. 21）

風は海流とともに種子植物を運搬する種子分散やシダ植物などの胞子の散布に貢献している。

種子は風に吹かれ空気中に浮かぶような形態をしている個体群がある。たとえば種子はテイカカズラ、キジョラン、オキナワシタキヅル、タンポポ（写真４）などのように冠毛をもつ個体群やウリハダカエデ（写真３）のような翼をもち種子はかぜによって遠くまで運ばれる形態をしている個体群もあり、例えば先述の南方系のオキナワシタキヅルの種子植物などが生育している。また、潮風は強い波とともに作用し土地・岩石を砕き海蝕を進行させ、先に述べたように崖地があらわれる。

（４）光

光要因は生物群集へ大きく影響し種個体群はその変化に応じ適応している。たとえば五島列島および中通島・若松島・平戸島などの森林群落には立体構造が発達し、相対照度の最も大きい高木層(100%)とし亜高木層・低木層・草本層・地表層。さらに光が照射しない根系層などにはミミズ類・モグラ類などの動物が適応した個体群がみられる。


写真５　アオモジ（西九州に分布するアオモジ）

さらに植物では日向を好んで生える植物アオモジ（写真５）・カラスザンショウ・タラノキ・アカメガシワなどの陽生植物が、森林中の日陰に生えるヒサカキ・カクレミノ・ミミズバイ・シロダモ・数少ないキンショクシロダモ（写真６、７）・ヤブニッケイ・スダジイ・ツブラジイ・タブノキなどの陰生植物が生育しシイ類・タブノキは樹冠を形成し光合成が盛んで極相林になる。


写真６　キンショクシロダモ
（須崎 05. 4. 24）

一般に光は種子植物の発芽には無関係であるが、なかには光を当てなければ発芽しないヤドリギ、新上五島の米山展望台の駐車場や江袋・大水にみられるヒノキバヤドリギは光発芽種子でヤブツバキ・ネズミモチなどの樹冠部の枝に半寄生し光の働きを受け発芽し生育している。種子は熟すると果皮は破裂し１m以上は分散し分布を拡大している。日照時間の年平均値を比較すると東京 1847. 2h、新潟 1651. 0h、福岡 1848. 5h、長崎 1867. 6h、福江 1847. 2h と記録され、日本海に面した新潟との差が大きいが他の地区とは大差ない。


写真７　キンショクシロダモ
（須崎 05. 4. 25）

日照時間は植物の花芽形成の調節・発芽の調節など光周性や野鳥類が春から初夏に繁殖行動をあらわすのは日照時間が漸増していくこと、その結果として生殖系の形態的・機能的賦活とその維持をある一定期間にわたって光により刺激されるからである。その生理的しくみは目の網膜で受容された光覚刺激が視床下部→脳下垂体→性腺軸を活性化させ視床下部の性腺刺激ホルモン放出ホルモン分泌に次いで下垂体前葉の性腺刺激ホルモン群の分泌が促進される。たとえばウグイスの初鳴きは日照時間とともに気温も関係があるものと推測される。地球温暖化に関係するのかウグイスの初鳴きが長崎県（諫早市・佐世保・五島列島）では 2000～2009 年には１月中旬に聞かれるようになった。しかし理科年表平成 20 年版によると福江３月２日、長崎３月６日、福岡３月 24 日（1971～2000 年までの平均)、またススキの開花日は福岡９月 21 日、長崎９月 24 日、福江９月 29 日（1971～2000 年までの平均）の記録が公表されているが近年は９月上旬に開花している。生物季節も地球温暖化により変化している。

以上１．～４．で述べたような無機的（非生物的環境）な要素にかこまれ、生物群集はこれら無機的な環境要因の影響を受け生育・生息している。

植物は同じ場所に固着生活をしており形態は生活環境と密接な関係にあり環境に適応した生活形となる（写真２)。温度と降水量に恵まれた五島列島では樹高の高い常緑広葉樹林(生産者)が発達している。

２．植生と動物

（１）津和崎・池尾地区

生産者である植物の相観は温暖な気候に発達する照葉樹林である。この地域の自然林はほとんどが萌芽林である。農耕地として麦作、イモ作などの作物が栽培されていた土地も昭和 30 年代から放置され、かつての自然植生に二次遷移は進行している。所々にシイ萌芽林がみられるが、この地域の相観はタブノキ萌芽林群落を呈しているが、墓地周辺の群落は優占種が「ツブラジイ群落」であった。

①植物

ツブラジイ萌芽林群落

群落調査地：津和崎郷池尾
標　　高：約 65m
方　　位：南東斜面
傾 斜 角 度：35°
調 査 面 積：100 ㎡× 3 コードラートを実施した。

＜植物群落の階層構造＞

[高木層：10～13m　植被率 80～90%]：ツブラジイ（優占種）、タブノキ、カラスザンショウ、ハゼノキ、ノグルミなど。ノグルミは北方系の植物である。カラスザンショウは陽樹で群落の遷移が若いことを表している。

[亜高木層：４～７m　植被率約 60%]：ツブラジイ、タブノキ、ヤブツバキ、モチノキ、イヌビワ、シキミ、トベラ、クロガネモチなど。シキミの果実は採取し輸出されていたことが後述する江袋地区での聞き取りにより明らかになった。

[低木層：0.5～３m 植被率約 40～60%]：ヤブツバキ、ヤブニッケイ、ハマビワ、ヒサカキ、クロキ、ツブラジイ、シロダモ、モチノキ、アオモジ、モクタチバナ、ネズミモチ、ミミズバイなど。アオモジは陽樹で西九州を代表する種で早春に小さい黄色い花を咲かせる。またモクタチバナは南方系の常緑樹で海岸林に生育し半高木である。県本土では少ない種である。

北魚目半島の相観は先述したごとく「タブノキ萌芽林群落」であるが、ツブラジイ、スダジイ、頭ヶ島の項で述べるマテバシイなどの果実は人間の副食物と成り得る。果実は堅果であるが果皮を取り除くと種子は澱粉質に富んでいて食用になる。ツブラジイの果実は煎り食べて空腹を満たしたものと推測できる。

タブノキ群落域の人家や墓地の周辺に「ツブラジイ群落」がみられることは食用を意識し人為的に人による種子散布が行われた可能性も推測できる。また鳥類により種子散布されたものが自然に発芽し生育したものを人為的に残したことも推測できる。したがって聞き取り調査などが考えられる。

＜特徴的な植物＞

ａ．オキナワシタキヅルの北限：双子葉で合弁花に属するガガイモ科に属するつる性半木状藤本で暖地の近海林縁にまれに分布する。（写真８）和名が示すとおり沖縄舌切草である（佐藤武之 1994）。九州本土では久留米市の高良山で発見されているが数少ない。



写真８　オキナワシタキヅル

長崎県内における分布については a. 長与町藤ノ棟、b. 福江市岐宿町、c. 福江市島山島、d. 福江市奈留町、e. 南松浦郡新上五島町などにおける分布について発表している（鴨川誠 2009）。そのなかでも　新上五島町津和崎郷津和崎鼻は本種の分布北限の地域で、北緯 33° 09′ 32″、東経 129° 06′ 53″は北限であり学術上貴重な分布地域である。

b．ノアサガオの北限：双子葉で合弁花に属するヒルガオ科に属するつる性常緑多年草で暖地の近海林縁にまれに分布する。長崎県内では福江市に分布する。新上五島町では仲知教会付近にも分布するが、さらに北上し津和崎郷津和崎鼻にも分布し、ここは北限地で地図上での緯度・経度は北緯 33° 09′ 32″　東経 129° 06′ 53″であり、北限地で学術上貴重な分布地域である（写真９）。



写真９　ノアサガオの北限地
（津和崎鼻 09. 5. 13）

c．ヤブツバキ群落：自然林の植生では亜高木層に出現する種である。ツバキ科ツバキ属に属する日本特産種である。五島列島では海岸沿いに自生する。自然植生を活用し人為的な群落を形成し広い面積で育成し多量の果実をとり種子を採取し販売するか、あるいは搾油し現金収入を得たり自家用にも使用したであろう。またヤブツバキは防風林にも利用されている。ヤブツバキ（つばき）は温暖な地域の照葉樹林の代表的な種で、１年をとおして葉はクチクラ層が発達し厚くかたく光沢があり晴天の日には葉の表面がキラキラと照りつける特徴がある（写真 10）。



写真 10　ヤブツバキの花

②動物

a．哺乳類

［イノシシ］：新上五島町の中通島および若松島などに普通に分布する偶蹄目イノシシ科イノシシ属で中通島、若松島などの全域に分布を拡大し人間生活に大きな影響を与えている。

［キュウシュウシカ］：偶蹄目シカ科で、奈良県などに生息するホンシュウシカより小形で角も短く角の開きは狭く、第三角区は左右平行で、第一、四枝は比較的短い（今泉吉典 1966）などの特徴がある。中通島、若松島などの全域に分布を拡大している。生息密度が大きい若松島ではイノシシと同様に人間生活に影響を与えている（写真 11）。

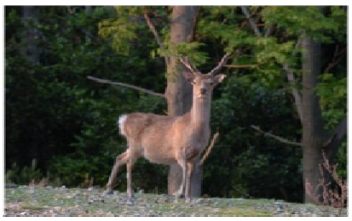


写真 11　キュウシュウシカ♂

水産資源が豊かなこの地域では、魚類タンパク質の摂取により狩猟による動物タンパク質は好まないため狩猟されることもなく分布を拡大し自然の植生を荒らし家庭菜園なども荒らされ困っている。林床植物は減少し毒草であるタケニグサも食物としてか、若松島の西海岸沿いの道路では死骨を見ることもある。タブノキの樹皮を食べているが足の筋肉のひきつけの痛みに効能が人間では知られているがシカも本能的に知って採食しているのだろうか、幹の周囲の樹皮が全体的に剥ぎ取られた木は立ち枯れしている。

b．鳥類

長崎県・五島列島は渡り鳥の①南北型ルート、②東西型ルートの個体群の移動のさいの十字路に位置するため留鳥を含め五島列島では多数記録している。

この地域ではタカ目タカ科のハチクマ（東西型）、ヤイロチョウ科ヤイロチョウ（東西型）ツル科ナベヅル・マナヅル（南北型）、タカ科ハイタカなど絶滅危惧種およびアカハラダカ（南北型）など

の通過地および中継地となっている。そのため五島列島に長期滞在し観察し楽しむことができる。

「おや、牛の鳴き声では」と考えさせられるハト科カラスバトの鳴き声を確認することができる。本種は国指定天然記念物および絶滅危惧種で貴重種などの生息する場所である。鴨川が調査に入る前は「フクロウの声」と長い間推察されていた。

（２）江袋・仲知地区

植生は気候、地形、水分、土壌、日射などの立地条件、人間活動など様々な影響を受けている。この地域の植生はタブノキを優占種とする「タブノキ萌芽林群落」で全てが二次林である。サツマイモ畑が放置されたからである（写真 12）。

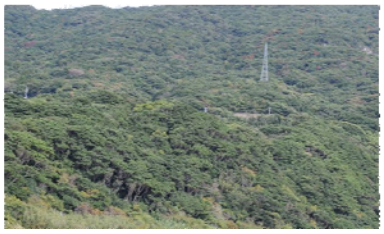


写真 12　タブノキ萌芽林群落 江袋

①植物

ａ．仲知地区

タブノキ萌芽林群落

群落調査地：久志
標　　高：約 100m
方　　位：南西斜面
傾 斜 角 度：16°～20°
調 査 面 積：100 ㎡× 3 コードラートを実施した。

＜植物群落の階層構造＞

[高木層：９～12m　植被率 60～98%]：タブノキ（優占種）、ヤブニッケイ、アカメガシワ、ヤブツバキなど。陽樹のアカメガシワが出現することから推察されることは農耕地などからの二次遷移である。

[亜高木層：５～８m　植被率 30～50%]：タブノキ、ヤブツバキ、ヤブニッケイ、アカメガシワ、クロキ、シロダモ、ハマビワ、ヒメユズリハ、ミミズバイ、イヌビワ、コクサギ、サンゴジュ、カゴノキ、ヤマグワなど。ミミズバイは上五島では多く生育し果実は鳥類のツグミ類の好物であり種子分散に関与している。

[つる植物]：亜熱帯系のハマニンドウが生育していた。

[低木層：0.1～0.2m　植被率 20～30%]：ヤブツバキ、カクレミノ、ネズミモチ、ハマビワ、ヤブニッケイ、マンリョウ、ヤツデ、ヒサカキ、シュロ、トベラなど。

[草本層：0.1m～0.2m　植被率５%]：ホソバカナワラビ、テイカカズラ、ツワブキ、ムサシアブミなど。

仲知教会敷地の背後の森林は昭和 36 年ごろから耕作地（サツマイモ畑）が放置され前述のデータの通り二次遷移が進行していた。

＜特徴的な植物＞

・亜熱帯系のハマニンドウの大蔓：スイカズラ科スイカズラ属の植物で暖帯から亜熱帯の海岸近くに自生する常緑つる性植物で長さは 10m 以上に及ぶ大蔓である。このような大蔓は他の本土では少ない。

・墓地に栽植されたオニユリ：オニユリは、温帯から亜熱帯に分布することが知られている。日本には古く中国から食料として伝来したものが野生化したものであろうという（北村四郎 1970）。しかし後述する江袋海岸の砂礫地に群生するものがある（後述）。ここの墓地では死者の霊に手向けられたものと推察される。

b．江袋地区

タブノキ萌芽林群落

群落調査地：江袋
標　　高：約 30～70m
方　　位：北東斜面
傾 斜 角 度：10°～30°
調 査 面 積：100 ㎡×３コードラートを実施した。

＜植物群落の階層構造＞

[高木層：10～16m　植被率 70～90%]：タブノキ（優占種）、クスノキ、ハマセンダン、ヤブニッケイ、カクレミノ、クロキ、アカメガシワ、ヤマモモなど。ハマセンダンは常緑・半落葉高木で暖地の海岸近くに生育する。古い時代にはこの用材は娘の嫁入り道具となるタンス製作の用材となるまで大きく育て、伐採し薪にすることもなく残した。

[亜高木層：５～10m　植被率 30～40%]：ヤブツバキ、カクレミノ、タブノキ、ツブラジイ、クロキ、ヒサカキ、カジノキ、アカメガシワ、トベラ、メダケなど。シキミが調査区域外で出現したが少ない。種は古い時代には果実を採取し国外に輸出し現金収入を得ていたという。このような人間活動の影響かコードラート内には出現しなかった。

[低木層：0.2m～３m　植被率 30～40%]：ヤブツバキ、マテバシイ、ヤブニッケイ、カクレミノ、タイミンタチバナ、カカツガュ、ホソバタブ、ヒサカキ、ネズミモチ、ヒメユズリハ、ヤツデ、コクサギなど。

[草本層：0.1m～0.2m　植被率 5%]：ムサシアブミ、ホソバカナワラビ、リュウノヒゲなど。

＜特徴的な植物＞

・江袋の大ムクノキ：天満宮跡地の隅にムクノキの大木がある。天然記念物に指定し保存する価値がある。天満宮が建設された当時から生育していたであろう。天満宮の歴史を語る上で学術的に貴重である。220 年は経過しているものと推測される。



写真13　江袋の大ムクノキ

・柑橘ゆうこう：柑橘「ゆうこう」を江袋教会近くで１本確認することができた。ゆうこうは中通島の築地に 1800 年代に西彼杵半島の外海から隠れキリシタンの浜口喜三エ門が築地に持ち込み栽培したのが最初である。築地を中心に分布しているが、隠れキリシタンの関係者以外の屋敷まわりでは確認できなかった。新上五島町では隠れキリシタン信徒と強い結びつきがあることが明らかになった（キリシタン信徒の物は貰わないという意識が強い地域であるからである）。



写真 14　柑橘ゆうこう

・消えたシキミ群落：モクレン科シキミ属のシキミは江袋の丘陵地に自生し亜高木層を形成していたが、「はなしば」として墓地に手向けるために枝葉を伐採し、販売し現金収入を得た。また果実も採取し輸出したという（地元：尾上勇談）。そのような影響があり前述したごとく人が入りやすい傾斜地には極めて少なくなっている。

・天然の防風林・防潮林：北西斜面に位置する集落では人家や農耕地の一角を被う防風林・防潮林として天然に自生する常緑広葉樹のタブノキ、ヤブニッケイ、イスノキ、ヤブツバキ、シロダモ、サンゴジュ、マサキなどの樹種が活用されている。



写真 15　南方系ヤシ科植物の果実漂着（江袋海岸）

・漂着したヤシの実：沖縄から北上する対馬海流は様々な生き物を乗せて運び生物の分布に強く影響を及ぼしている。南方で生育するヤシ科の果実が物語る。特に江袋の入江にはおおく漂着している形跡がある（写真 15）。



・海岸砂礫地のオニユリ群落：仲知の項でも述べた如く、本種は中国原産で日本へは食用として栽培されたというが、江袋海岸では高潮線付近の砂礫地に群落がある（写真 16）。
この地は対馬海流に乗って南方産からのヤシ科の果実が多量に漂着する場所でもあり、「オニユリの珠芽」も同様に海流により分散したものではないかと推測している。したがって学術上貴重な分布域である。他の地域にも分布を拡大している。この群落の構成種はハマナタマメ、ネコノシタ、ハスノハカズラ、メボタンヅル、ツユクサ、ヤブラン、ヨモギ、ハマウドなどである。



写真 16　オニユリ群落（江袋海岸 08. 7. 28）

・砂地の群落：ａ）ハマゴウ群落はハマゴウ（優占種）でテリハノイバラなど木本にママコノシリヌグイ、ヤブガラシなどの草本植物から形成されている群落である。ｂ）ネコノシタ群落はネコノシタ（優占種）でネコノシタ 70～80％で、テリハノイバラ、ハマゴウなどから形成されている。
ハマゴウは漢方では消炎薬として頭痛、感冒などに用い、解熱、強壮薬および清涼剤にもされた（木村康一 1974）。民間薬では風呂に入れていたそうだがこの地区での利用があったのか聞き取りはできてない。

②動物

・哺乳類

キュウシュウシカ、イノシシについて、津和崎地区で述べた。

・鳥類

絶滅危惧種のミサゴ：江袋海岸入り江に「ビシャゴ瀬」、入り江に開けた小川の「ビシャゴ川」がある。「ビシャゴ」とは鳥類でタカ科のミサゴの俗名である。江袋の入江は魚類の回遊が豊かだったことが推察される。ミサゴは生きた魚類を主食とする。現在も入江で採食行動を観察することができる。この入江は魚が集まる海域で、漁場として豊かだったことが推測される。

（３）小瀬良・大瀬良地区

①植物

タブノキ萌芽林群落

群落調査地：小瀬良
標　　高：約 100m
方　　位：南西・北東・南東斜面
傾 斜 角 度：27°～33°
調 査 面 積：100 ㎡×３コードラートを実施した。

＜植物群落の階層構造＞

［高木層：10～12m　植被率 80～90%］：タブノキ（優占種）、ツブラジイ、ヤマザクラ、カラスザンショウ、クロキなど。

［亜高木層：５～６m　植被率：30～80%］：ヤブツバキ、ヤブニッケイ、タブノキ、クロキ、ツブラジイ、ヒサカキ、ハマビワなど。

［低木層：0.2～３m　植被率約 20～40%］：タブノキ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、イヌビワ、シロダモ、ミミズバイ、モチノキ、ハマビワ、トベラ、シキミ、マンリョウ、マサキ、キブシ、ヤツデ、イズセンリョウなど。

［草本層：0.2m　植被率:10%］:ホソバカナワラビ、ツワブキ、ムサシアブミ、テイカカズラなど。

＜特徴的な植物＞

・メダケ群落：農耕地の畦の崩壊防止を目的にメダケを畑の畦に自然の植生を残すか、人為的に積極的に植栽している。北魚目半島では各地にみられ、昔は家屋の桟にもやぐらにも用いた。

・大瀬良のヤブツバキ群落：ツバキ科ヤブツバキ（ツバキ）は「厚葉木」で葉が厚いのでアツバキからツバキになった。種子を秋に採取し天日乾燥し圧搾し油を取る。集落の鞍部に広大な群落があり種子を採取し販売し収入を得たであろう。

・民間薬アロエの大株：ユリ科アロエ類は熱帯アフリカ原産で薬用にはケープアロエ、ソコトラアロエなど約 10 種が使用されているが、日本ではキダチアロエが栽培されている。北アフリカ地方では紀元前 20～30 世紀から薬用にされていた。北魚目半島では医院、薬局などは無くキダチアロエは民間薬として葉を使用、「健胃、切傷、火傷、虫刺され」などに使用されたのか、温暖な対馬海流の影響からか冬期でも枯れることもなく各集落毎に大株が残っている（写真 17）。



写真 17　民間薬アロエの大株（小瀬良）

・大瀬良海岸のハマエンドウ群落：つる性の多年草で海岸の砂浜、砂礫地に生育し春から初夏にかけて開花する。葉のわきから長い総状花序をだし赤紫色から青紫色の蝶形花を開く美しい花の群落で観光資源となる（写真 18）。



写真 18　ハマエンドウ群落（大瀬良海岸 09.3.23）

・小瀬良海岸のハマヒルガオ群落：つる性の多年草で海岸の砂浜、砂礫地に生育し春から初夏にかけて開花する。花はアサガオと同じ形でヒルガオより薄く淡紅色である（写真 19）。



写真 19　ハマヒルガオ群落
（小瀬良海岸 09.5.13）

（４）大水地区

①植物

タブノキ萌芽林群落

群落調査地：大水
標　　高：約 80～100m
方　　位：南東・北西斜面
傾 斜 角 度：26°～35°
調 査 面 積：100 ㎡×３コードラートを実施した。

＜植物群落の階層構造＞

［高木層：９～11m　植被率 80～90%］：タブノキ（優占種）、ヤブニッケイ、ホソバタブ、クロキ、クマノミズキ、アブラギリなど。

［亜高木層：６～９m　植被率 50～60%］：ヤブツバキ、ヤブニッケイ、タブノキ、クロキ、ハマクサギ、トベラ、ヒメユズリハ、カラスザンショウ、ミミズバイ、カクレミノなど。

［低木層：１～２m　植被率 15～30%］：タブノキ、ヤブツバキ、ヤブニッケイ、カクレミノ、イヌビワ、ヤツデ、イズセンリョウ、カジノキ、シュロ、ヒサカキなど。

［草本層：0.2m　植被率５%］：フウトウカズラ、キズタ、ムサシアブミ、トベラ、イヌマキなど。高木層の植被率が大きいため林床部への照度が小さいために補償点が低い陰性の植物がわずかに茂るだけであった。

＜特徴的な植物＞

・道路の法面・林縁にオンツツジ：別名ツクシアカツツシという。花は赤色で目立つ、近畿地方、四国、九州、韓国の済州島に分布することが知られている（写真 20）。



写真 20　オンツツジ
（大水 09.5.1）

・防風林としてのヤブツバキ：北西斜面に位置するこの集落では季節風から人家や農作物を保護する目的で自然に生育するヤブツバキおよびタブノキを利用し防風林・防潮林として活用している。

②動物

・鳥類

絶滅危惧種のタカ科チュウヒ、ハイイロチュウヒ、ハヤブサ科ハヤブサなど猛禽類が上空を舞う。彼らの食物となる小鳥類やこの地区を南北か東西に移動する。

（５）立串地区

①植物

ａ．立串

タブノキ萌芽林群落（農耕地後の二次遷移）（写真 21）

群落調査地：立串
標　　高：約 115m～150m
方　　位：東斜面
傾 斜 角 度：15°～30°
調 査 面 積：100 ㎡×３コードラートを実施した。



写真 21　タブノキ萌芽林群落(立串鼻)

＜植物群落の階層構造＞

[高木層：５～９m　植被率 80～90%]：タブノキ（優占種）、ヤブツバキ、アカメガシワ、ムクノキ、カゴノキ、モチノキ、イスノキ、イヌガシ、シャシャボウ、カンコノキなど。

[亜高木層：３～４m　植被率 30～60%]：ヤブツバキ、タブノキ、スダジイ、ヤブニッケイ、イヌモチ、ハマビワ、クロキ、ヤマハゼ、イヌマキ、イスノキなど。

[低木層：0.5m～１m　植被率 30～70%]：スダシイ、タブノキ、ヤブツバキ、ヤブニッケイ、イヌビワ、ハマビワ、モクタチバナ、ネズミモチ、ヒサカキ、タイミンタチバナ、マサキ、ハマニンドウ、コショウノキなど。

[草本層：0.1～0.5m　植被率７～60%]：ミゾシダ、ツワブキ、ノシラン、キズタ、フユイチゴなど。

ｂ．上立串

タブノキ萌芽林群落（農耕地後の二次遷移）

群落調査地：上立串
標　　高：約 115～150m
方　　位：東斜面
傾 斜 角 度：15°～30°
調 査 面 積：100 ㎡×３コードラートを実施した。

＜植物群落の階層構造＞

[高木層：６～14m　植被率 80～90%]：タブノキ（優占種）、スダジイ、ヤブニッケイ、サンゴジュ、シロダモ、ヤマグルマなど。

[亜高木層：３m～４m　植被率 30～60%]：ヤブツバキ、ヤマハゼ、ヒサカキ、イヌビワ、ヤブニッケイ、ヤマグワ、ハマビワ、トベラ、ネズミモチ、コクサギ、ツブラジイなど。

[低木層：0.5m～１m　植被率 10～30%]：タブノキ、ヤブツバキ、ヤツデ、カクレミノ、ヤブニッケイ、アオキ、ハマビワ、シロダモ、ヒメユズリハ、ヤマグワ、トベラ、ネズミモチ、ヒサカキ、シキミ、シラカシ、イズセンリョウなど。

[草本層：0.1m～0.5m　植被率２～５%]：ムサシアブミ、ツワブキ、テイカカズラ、ミゾシダ、キヅタ、フウトウカズラ、ノシラン、オニヤブソテツ、ホホバカナワラビなど。

ｃ．琴平神社周辺

タブノキ萌芽林群落（農耕地後の二次遷移）

群落調査地：琴平神社周辺
標　　高：約 80m～120m
方　　位：東・北西斜面
傾 斜 角 度：30°～60°
調 査 面 積：100 ㎡×３コードラートを実施した。

＜植物群落の階層構造＞

[高木層：６m～14m　植被率 80～90%]：タブノキ（優占種）、スダジイ、ヤブニッケイ、サンゴジュウ、シロダモ、ヤマグルマなど。

[亜高木層：４m～５m　植被率 30～60%]：ヤブツバキ、タブノキ、スダジイ、ヤブニッケイ、イヌモチ、ハマビワ、クロキ、ヤマハゼ、イスノキなど。

[低木層：0.5m～１m　植被率 30～70%]：スダジイ、タブノキ、ヤブツバキ、ヤブニッケイ、イヌビワ、ハマビワ、モクタチバナ、ネズミモチ、ヒサカキ、タイミンタチバナ、マサキ、ハマニンドウ、コショウノキなど。

[草本層：0.1m～0.5m　植被率５～10%]：ノシラン、ミゾシダ、ツワブキ、リュウノヒゲ、フユイチゴなど。

＜海岸植物群落＞

・立串海岸植物群落　自然海岸（満潮線より９m地点、調査面積：１㎡×10 コードラート）。
ハマボウフ：被度合計 31・被度順位１・頻度 100%、アゼトウナ：被度合計 21・被度順位２・頻度 90%、ススキ：被度合計 18・被度順位３・頻度 90%、他に構成種はラセイタソウ、マンネングサ、ハマヒルガオ、ツルソバ、ギシギシ、ハマボッス、ハマナタマメ、ハマナデシコ、ツワブキ、シバ、ハマウド、ノブドウ、ヘクソカズラ、テリハノイバラ、ヤマグワなど。

・立串海岸植物群落　半自然海岸（満潮線より９m地点、調査面積：１㎡×10 コードラート）。
ハマボウフ：被度合計 27・被度順位１・頻度 100%、ラセイタソウ：被度合計 24・被度順位２・頻度 100%, ススキ：被度合計 12・被度順位３・頻度 80%、他に構成種はアゼトウナ、マンネングサ、ハマヒルガオ、ツルナ、ギシギシ、ハマボッス、ハマナデシコ、ハマナタマメ、ツワブキ、シバ、ハマウド、ノブドウ、エビヅル、ヘクソカズラ、ツルソバ、イノコヅチ、タカサゴユリ、カタバミ、ハスノハカヅラ、テリハノイバラ、ヤマグワ、ハマヒサカキ、イヌビワ、クコなど。
半自然海岸では木本類のヤマグワ、ハマヒサカキ、イヌビワ、クコなどの遷移が進行していることが調査により明らかになった。

②動物

ａ．絶滅危惧種ヤイロチョウの生息地：ヤイロチョウは日本には夏鳥として飛来し全国でもその繁殖地は少ない。新上五島町では他の地域より生息地はおおいが繁殖の確証は少なく、確実な繁殖地は若松島であるが、番岳東斜面の谷合い・上立串でも繁殖の可能性がありさらに調査が必要である。また番岳の駐車場付近は秋の渡り東シナ海への最後の渡去地である。

ｂ．国指定天然記念物カラスバトの繁殖地：新上五島町の各地で生息を確認することができる。おそらく日本一の生息密度であろう。植物群落調査地点周辺でも頻繁に鳴き声を聞くことができた（写真 22)。



写真 22　カラスバト
（国指定天然記念物）

ｃ．絶滅危惧種サシバの繁殖地：数年前に桂山で本種の繁殖行動を確認したが、平成 22 年度は番岳周辺でも繁殖の可能性がある。繁殖期に滞在し繁殖行動を観察することができた。

（６）調査地区の相観

生態系の生産者である緑色植物は「常緑広葉樹林」でタブノキを優占種とする照葉樹林であり、タブノキなどは第一の火である薪、つまり薪炭林として活用されていたであろうことが推測される。現存する森林はほとんどが二次林の萌芽林である。

北魚目地域では人工の植林も少なく自然林である。また、時代とともに島民の生活も自給自足の生活から脱却し農耕地は耕作がとまり丘陵地の尾根付近にまで達していたサツマイモ畑地は放置され、植物群落の乾性遷移はすすみ①草本期→②低木林→③陽樹林→④混交林→⑤陰樹林に、放置された年代の経過により①～⑤までの段階の遷移が見られる。遷移の方向はもともとの植生を復元する方向にある。

①植物

古い時代の園芸植物・作物など現在も残っている＝要保存。

ａ．カンナ科のダンドク：現在のカンナの原種（写真 23)、米山教会付近や大曾教会裏などに今も残る。大きい葉は「おにぎり」を包むなど食物を包むのに活用していたものと推測される。

ｂ．柑橘ゆうこう：カクレキリシタンに強く結び付き残っている。



写真 23　ダンドク（大曾教会裏）

ｃ．ぼうぶら：ニホンカボチャともいう。新上五島町では近年まで栽培されていた。本種は南米原産の南京であり西洋カボチャより古い時代に渡来しているので「ニホンカボチャ」とも言われている。若松島の人々も知っていた。聞き取り調査をし種子の保存をするべきである。

②動物

特殊鳥類

ａ．絶滅危惧種：アビ科アビ(NT)、オオハム(NT)、カイツブリ科カンムリカイツブリ(NT)、ミズナギドリ科シロハラミズナギドリ(CR)、ウミツバメ科ヒメクロウミツバメ(CR)、サギ科オオヨシゴイ(CR)、ミゾゴイ(EN)、ササゴイ(DD)、アカガシラサギ(DD)、チュウサギ(NT)、カラシラサギ(CR)、クロサギ(CR)、コウノトリ(CR)、カモ科コクガン(CR)、オシドリ(NT)、ウミアイサ(NT)、タカ科ミサゴ(NT)、

ハチクマ(NT)、オジロワシ(CR)、オオワシ(CR)、オオタカ(EN)、ツミ(NT)、ハイタカ(VU)、サシバ(EN)、クマタカ(CR)、ハイイロチュウヒ(NT)、チュウヒ(EN)、ハヤブサ科ハヤブサ(EN)、ツル科ナベヅル(VU)、マナヅル(VU)、クイナ科ヒクイナ(NT)、タマシギ科タマシギ（NT)、シギ科アオアシシギ(NT)、キアシシギ(DD)、ソリハシシギ(NT)、ホウロクシギ(EN)、チュウシャクシギ(NT)、コシャクシギ(CR)、セイタカシギ科セイタカシギ(CR)、カモメ科ユリカモメ（DD)、コアジサシ(CR)、ウミスズメ科ウミスズメ(CR)、カンムリウミスズメ(EN)、ハト科カラスバト(VU)、フクロウ科アオバズク(NT)、ヨタカ科ヨタカ(EN)、カワセミ科アカショウビン(EN)、ブッポウソウ科ブッポウソウ(CR)、ヤイロチョウ科ヤイロチョウ(CR)、モズ科アカモズ(CR)、ミソサザイ科ミソサザイ(NT)、ウグイス科ウチヤマセンニュウ(EN)、キクイタダキ（EN)、カササギヒタキ科サンコウチョウ(EN)、ホオジロ科シマアオジ(EN)。

絶滅危惧ⅠＡ類(CR)＞絶滅危惧ⅠＢ類(EN)＞絶滅危惧Ⅱ類(VU)＞準絶滅危惧(NT)＞情報不足(DD)。

ｂ．二カ国間渡り鳥条約：選定されている種のうち新上五島町で記録されている種類数

（Ａ）ロシアと日本：アビ、オオハム、カンムリカイツブリなど 117 種類。

（Ｂ）中国と日本：カンムリカイツブリ、オオミズナギドリ、ミゾゴイなど 87 種類。

（Ｃ）アメリカと日本：オオミズナギドリ、カツオドリ、アマサギなど 52 種類。

（Ｄ）オーストラリアと日本：オオミズナギドリ、コグンカンドリ、アマサギ、ダイサギなど 15 種類。

③天然記念物に指定したい大木

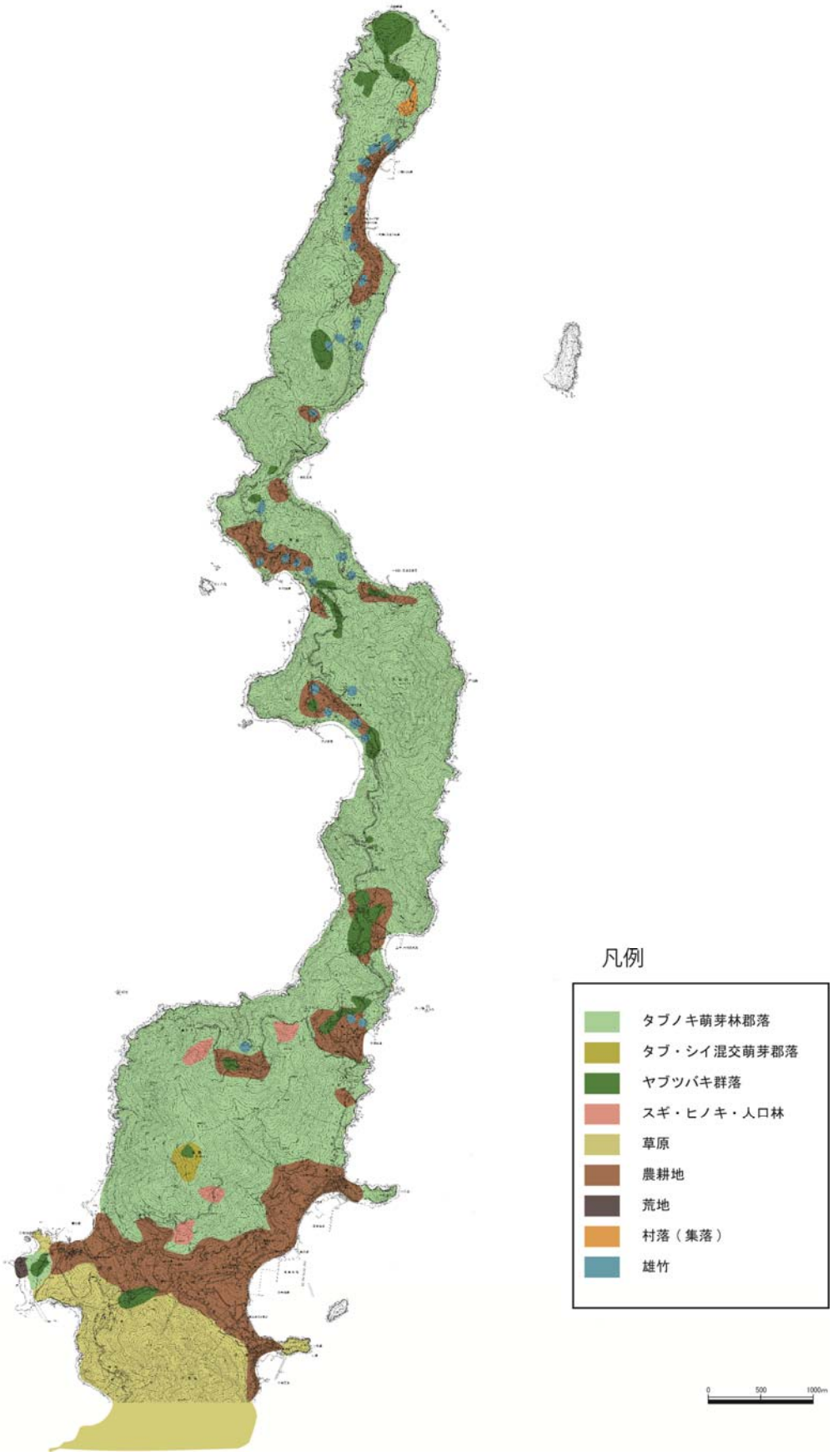
・江袋の天満宮跡地のムクノキ大木（写真 13)。

④植物分布上天然記念物に指定したい北限地

ａ．津和崎鼻オキナワシタキヅルの北限地。

ｂ．津和崎鼻ノアサガオの北限地。

北魚目地域の植生


凡例
タブノキ萌芽林郡落
タブ・シイ混交萌芽郡落
ヤブツバキ群落
スギ・ヒノキ・人口林
草原
農耕地
荒地
村落（集落）
雄竹
0
500
1000m

第４節　歴史

１．原始・古代

五島列島の北部に位置する中通島・若松島周辺は、海を介して日本列島と大陸の影響を受けてきた歴史を持つ。この点は考古学資料からも確認することができ、浜郷遺跡（新上五島町有川）では、弥生時代前期から中期にわたる土器・石器とともに土坑墓・甕棺・箱式石棺、人骨のほか、南島産の貝輪・垂飾品などが発見されている。

文献資料では『肥前国風土記』松浦郡値嘉郷の条に、「相子田の停」[1]という船を繋留した泊の名がみえ、遣唐使船はこの泊や川原浦（福江市岐宿）を経て、美弥良久の埼（福江市三井楽町）に向かうと記されている。663 年の白村江の戦後、遣唐使船は朝鮮半島を経由せずに中国大陸へ渡航したが、これによって五島はその渡航ルートのなかに組み込まれた（南島路・南路）。山王山は古来より信仰対象であったが、天台宗の開祖最澄が航海の安全を祈願した後、再び訪れて山王神を勧進したとの伝承を持つ。また、真言宗の開祖空海もこの地域を訪れた。伝説によると御嶽日枝神社は、嵯峨天皇が勧進し、最澄が第 16 次遣唐使入唐のお礼に古称御嶽の浄池に日吉山王への神を創始したという由緒を持つ[2]。これらの事実は、日本列島と大陸を結ぶ中継地として、国際交流の重要な役割をこの地域が担っていたことを裏付けている。

国内の人の動きを示すものとしては、大宝元年（701）、讃岐高松に鎮座の大己貴大神を守護神として日ノ島村金堂崎に勧進された高松宮がある[3]。明治４年（1872）に日島神社と改称したものの、現在でも「高松さん」として地域住民に信仰されている。讃岐高松と当該地域が結びついた理由は不明だが、瀬戸内地域と何らかの関係があったものと推測される。

２．中世

〔支配の変遷〕　現在の中通島・若松島にあたる範囲は、中世において広域通称名として「浦部」「浦目浦」とも称されていた。この地域は肥前国宇野御厨庄に属して清原氏が支配していたが、是包が海賊行為を行ったことで領家から勘当され、仁平２年（1152）に領地没収となった。これにより、是包の姪三子の三人の息子清（御厨氏の祖）・披（峯氏・平戸松浦氏の祖）・囲（山代氏の祖）に知行権が移ったものの、三子の夫源四郎直が実質的に知行した。その後、源四郎直は三子と離別して後妻をもらい、連れ子の松浦十郎連に小値嘉島、浦部を譲った。しかし、是包の甥である尋覚が知行権を主張して幕府に訴訟し、地頭職補任となった[4]。

これ以後も一族間での争論が続くが、暦仁元年（1238）に至って、青方氏（尋覚次男青方家高・能高）は「みくりやのみしやうおちかのしまのうらううらへ」の下沙汰（地頭代官）であるとされ、峯氏に領有権を奪われた[5]。所領の争論はその後も続き、当該地には青方氏の重臣的存在で松浦平戸の堅めとして、曽根氏が曽根に居住した[6]。また、浦を本拠とした浦氏も魚目を分領して、奈摩にも屋敷をおいた。これらの勢力は、14 世紀以降、次第に宇久氏の勢力下に入って行ったと考えられる。宇久氏は、応永 20 年（1413）勝の時代に至り、深江（福江）へと拠点を移すことになるが[7]、これによって当該地域は政治的中心地としての機能を失っていった。

〔辺境としての特質〕　若松島の極楽寺には、統一新羅時代の阿弥陀如来像（国指定重要文化財）があり、朝鮮半島との関係があったことを物語っている[8]。また、日の島の海岸には 14～15 世紀に製作された多数の中世石塔群が建っており、それらの中には若狭の日引で製作されたものが多く、日本海の流通ルートとの結びつきがあったことが確認できる[9]。この事実を考えると、国内流通と国際流通の

結節点としての役割をこの地域が担っていたことが推測される。

ただこれは、安定した状況を前提としているが、海を隔てて異国との境界地域であったことから、大陸の脅威を感じた時期もあった。寛弘２年（1005）、高麗船の侵攻があった際、御厨庄にいた領主清原氏は、外敵降伏を祈願し高麗船を退き、庶民安穏・外寇祈願のために青方神社の社殿を建立している。また、政彦神社（青方）も敵国降伏や武運長久が祈願されてきた。日本の中央政権の外縁部に位置するこの地域は、異国との間の最前線に位置しており、このような側面もあった[10]。

15 世紀になると、この地域を含む海域で倭寇が勢力を持っていたことは知られているが、倭寇による被虜人刷還などを通じて宇久勝は朝鮮半島と通交した[11]。

ところで、当該地域は在地領主層間で支配領域が争われた。観応３年（1352）、松浦氏と青方氏の間で、浦部島北端津和崎のひん河内・びさご崎を結ぶ線が境界として決められる。しかし、その後も争いは続き、至徳２年（1384）５月３日に至って、禅源ら六人での寄合が開かれた。そこでは、当地（沖知）と江袋の間のみきこさき（現津和埼郷のビシャコ）などを境に、その北の山野・河海・綱などを平戸松浦領とし、青方氏はその南の山野・河浦・綱・牧などを知行することが取り決められた[12]。

ただ、松浦・宇久・青方など諸氏の間で争論などが繰り返されたものの、婚姻関係などを通じて、蒙古襲来や南北朝の争乱といったこの地域全体の危機が起きたときには団結して対処した。応永年間（1366～1411）、足利方の今川頼泰が松浦に上陸して以降、この地域の領主は松浦党の一揆契諾状に署名するなど[13]、団結して事態に対応する側面もみせた[14]。生業の維持などを前提に、地域内の経済的な対立による分裂を避ける政治的結束を重要視する意識が、この地域には根づいていたともいえる[15]。

〔中世の生業〕　この地域は、田地以上に山野、海の資源に依存した経済的基盤となっており、「海上漁取」「海夫」「網代」「塩屋」「百姓釜」が譲状の対象となった。応永３年（1396）には、平戸松浦氏と青方氏との間で、曽根の赤浜網代、樽見の三ツしり網代、船崎の河内網代の相論も起きている。応永７年（1400）には、有河浦中の篤ら六人が寄合を設け、江袋のカマス網代のうち浦と二つ河原の網代は一年交替で引くことを定めた[16]。このことは、漁場の中心が青方周辺から北に 10 ㎞離れた地域に移っていたことを意味するとも考えられている[17]。漁業がこの地域の経済基盤として定着し、産業構造が複雑化していったのがこの時期だった。

〔西洋との出会いとキリスト教〕　記録上、五島と西洋文化が接点を持ったのは 1563 年のことであり、宇久純定がトルレス神父に医師の派遣を請い、日本人キリシタンの医師ディオゴが五島に渡ったことによりはじまる[18]。西洋人が五島に訪れたのは 1565 年で、ポルトガル人四・五人がシャムからの中国船に同乗し、シナ航路に当たる最初の湊である五島へ来航した[19]。これを契機に 1566 年には、イエズス会のアルメイダ修道士らが口ノ津からはじめて五島に派遣され、領主やその一族に病気の手当てをしたことから次第に信用を得て、大値賀（福江）などで布教を行った[20]。

同年 12 月バプティスタ・モンテ神父が福江島に来て、1568 年まで在島した。1567 年には、宇久純定の庶子（宇久純尭）が受洗してドン・ルイスと称した[21]。1568 年９月パードレのアレシャンドレ・ヴァラレジョ、イルマンのゴンサルヴェスが来島し、この冬 180 人をキリシタンにしたという。同年 11 月１日にヴァラレジョとドン・ルイス（宇久純尭）と墓地を完成させ、祝別式を行った際には、大値賀（五島）のキリシタン 500 人が参列したというが、正確な数は不明である[22]。アルメイダが豊後日田から司教カノレイネロに 1569 年 10 月 22 日に報じた情報によると、五島の領主の庇護がなく、100 人余りがキリシタンになったに過ぎない状況だったと記録されている[23]。元亀２年（1571）には４ヵ所の教会があったが、ヴァラレジョが五島の食物により胃を痛め、吐血するので、ヨーロッパに帰ることになり、五島にはパードレもイルマンもいない状態になった[24]。

純定の没後、孫の純玄が宇久宗家を継承し、反キリシタンである叔父（宇久盛重、つまり玄雅か）が実権を握った。1573 年棄教を迫る彼らに対して、ドン・ルイス（宇久純尭）は家臣とともに抵抗するが、男女子どもら 300 人のキリシタンをともない長崎に亡命した。その後、薩摩の王（島津義久）の仲介でルイスは家臣の半分を連れ、長崎から五島に帰還したが、五島の殿は再び棄教を迫り、ついにルイスは屈したという。ルイスの禄高は従前と異なり、わずかであった。各所に残っていたキリシタンは信仰を保ち、幾人か長崎へ告解に向かったという[25]。

1581 年当時、五島のキリシタンは平戸のパードレの管轄下にあったが、数個の島々を治める領主（純玄）は異教徒で、平戸の領主に劣らぬ迫害者であったといわれる[26]。1582 年２月までに東インド管区巡察師アレシヤンドロ・ヴァリニヤードが得た情報によると、五島のキリシタンはおよそ 400 人であった[27]。1587 年の豊臣秀吉によるバテレン追放後、純玄はいっそう圧迫を強め、棄教する者が多かったが、ヴェネツィア出身のジョゼフ・フォルナレート師と日本人修道士天草パウロが派遣された。1588 年の五島のキリシタンは 2,000 人といわれ、さらに 60 人の改宗者があった[28]。翌年のイエズス会名簿によれば、フォルナレートと天草パウロのほか、バルタザール・ロパス神父が在島した[29]。1590 年には洗礼も、キリシタンが葬式を出すことも厳禁されたが、信者はなお 1,500 人を数えた[30]。翌年には宣教師が退去させられている[31]。1594 年の朝鮮出兵中に純玄が死ぬまでこうした迫害が続いたと思われるが、新領主玄雅も反キリシタンの政治姿勢を継承した。

純玄の後を受けた玄雅は僧侶と同盟して宣教師を追放、十字架や教会を破壊し、またキリシタン集落への弾圧を行ったとされる。このため信徒らは潜伏を余儀なくされ、マリアの会などの組織を形成して信仰を保ち続けた[32]。1614 年には、パードレが一人５箇月間島に滞在し、60 人に洗礼を授けたが、徳川家が全国的な禁教令を出したために藩主盛利は棄教しないキリシタンを追放した[33]。

元和３年（1617）のキリシタン連判書付に五島の 10 箇所の地名が見え、指導者と考えられるキリシタン 57 人が署名している。これは日本にいるイエズス会の神父らが迫害の時代にあっても信者を見捨てずにその大きな犠牲のもとに尽力を惜しまないでいることを、日本管区長コウロスが徴収、証言させたものだった。しかし弾圧は厳しく、同年４月ペドロ・バウティスタ・マシヤード神父が五島を巡教していたが、上五島の鹿ノ子（鯛ノ浦の近く）で捕らえられ、大村で後に処刑されている[34]。また 1624 年には、若松のキリシタンの世話をしていた看坊のカリストが斬首刑に処され、大値賀キリシタンの中心人物の一人であったミゲルが処刑された。小値賀の住人で看坊のケン左衛門パウロも、斬首刑に処されている[35]。

なお、この時期改宗したものは「転切支丹」として五島家が把握に努め、寛文期（1661～1672）以降切支丹類族帳などを作成した。これらによると、それらの存在は奈良尾村、岩瀬浦村、東神浦、太田村、鯛浦村、有川村にみられるが、末裔の女性が嫁ぎ先として江濱村や友住村に移り住んだ例、元々家船漁夫であったものの末裔が平戸領宿浦村、大村領蛎浦へ移り住んだ例も間々みられる[36]。五島家の場合、家臣も多く改宗し、「転切支丹」として把握されたが[37]、特にこの点が子孫に何らかの影響（婚姻や出世など）を与えた事例は確認できない。農民や漁師も同様であった可能性はある。

３．近世

〔五島家と松浦家の境界確定と富江領の成立〕　五島氏、松浦氏はともに朝鮮出兵を経ることで中央政権に大名家として承認されていくが、中世以来の境界争いが続いた。しかし徳川家が支配する時代となり、国家的事業としての正保国絵図作成にあたって、正保元年（1645）５月 28 日に関係者が集まり、境界について協議した。その結果、平戸領と五島領の境は中通島北部において「東岸ひん河内、はいたての間より、西岸びさご崎境、くだまきの尾を結ぶ線の以北で野崎島と共に平戸領」と決められ、一応の決着をみる[38]。中通島の西部については、濱の浦から道土井（若松瀬戸）に至る線より以

西、大串崎なるつた石・赤崎に属する島頸の西半分が基本的には平戸領となった。そのほか、この地域特有の相給制度である「二方領」「三方領」が存在し、年貢や漁業、山林の生産物を二分にしたり、平戸領四分の一、五島領四分の三の割合で分けることなどみられた（下図[39]参照）[40]。

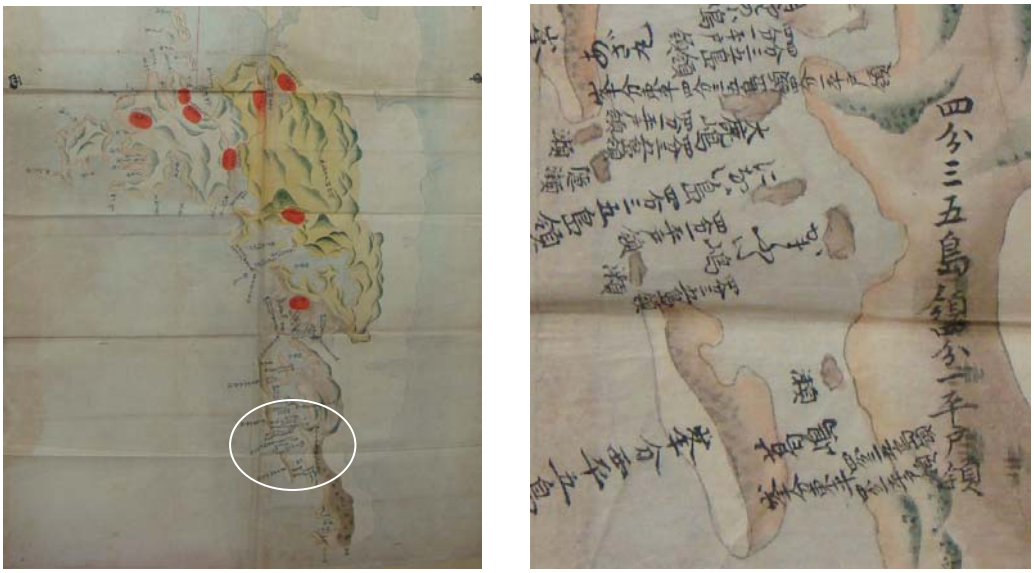


図１　中通島西側：黄色は「二方領」（右は白丸部分の拡大）

明暦元年(1655)、五島藩主盛次が江戸にて病死した。この跡を継いだ万吉は 11 歳と若く、幕府は叔父にあたる盛清にその後見役を命じて三千石を分与させ、柳の間詰めの交代寄合とした。五年後、万吉は 15 歳に達して元服を行い盛勝と改めた。これを機に盛清は後見役を解かれたが、幕府より正式に分知が言い渡された。寛文２年（1662）には、後に陣屋が置かれる富江を含めた 20 ヵ村（富江、田尾、丸子、琴石、太田、黒島、青方、相河、奈摩、船崎、魚目、榎津、似首、小串、藤首、(立串)小浜、神ノ浦、飯良、北椛島、南椛島）が知行地として定められた。

富江領家臣団の職制（慶應４年：1868）としては、御家老、中老、御用人、寺社町奉行、元締、御留守居、船奉行、御目付、代官、医師、船見、山奉行があり、武士身分の格（慶應４年）は、御家老、中老、御用人、嫡子席、元締、馬廻、中小姓高席、中小姓、御徒士に区分された。富江領は、明治３年（1870）に福江藩に合併されるまで続いた（地図参照）[41]。

〔富江領の姿（文化的景観申請対象地域)〕　富江領の人口は、寛文元年（1661）時点で、百姓 301 人､水夫 176 人､船 14 艘という状況であったが[42]、同二年（1662）において当該地域の石高は、魚目村　274.1395 石（内 208.7325 石本高、65.4074 石内検高)、青方村　337.8022 石（内 254.826 石本高、82.9662 石内検高）であった[43]。魚目分の六ヶ村（浦、堀切、栗木、榎津、似首、小串）は漁所であり[44]､立串は塩竈 228.7325 石であった[45]。青方、魚目の物成は米で納められ、その割り当ては次表のようであった。

＜富江領の石高＞

◆魚目

村名	本高（石）	内高（石）	合計（石）
魚目村桑木浦	82.3375	35.4437	117.7812
榎津村	41.2445	12.6337	53.8782
似首村	27.117	5.4444	32.5614
小串村	58.0355	11.9016	69.9371
魚目中（上記計）	208.7345	65.4234	

竈方[46]（塩竈：藤首村）　20
網加徳　15帖網　225（1帖15石）

◆青方

村名	本高（石）	内高（石）	合計（石）
青方村	153.216	55.387	208.603
相河村	31.1235	13.267	44.3905
奈摩村	70.4965	56.0653	126.5618
青方中（上記計）	254.836	124.7193	

竈方（塩竈：船崎村）　20

〔移民〕この地域は移民で構成された集落が多く、大きく分けて二つの特徴を持つ[47]。ひとつは豊かな周辺海域の海洋資源を求めた人々であり、泉州・紀州や肥前などから来た人々を中心として構成されている集落である[48]。この特徴は技術者集団であり、それぞれが身につけた漁業技術の活用を目的としていることである。それらの実数は掴めないが、その多くが先住者と町や村で共生した。このほかに奉公人として、畿内よりこの地に移住してきたもの達の存在も確認でき[49]、集落の構成員が固定化されていたという状況にはなかった。その一方で、寛政期（1789～1801）以降、大村領から移住した「居付」と呼ばれた移民は状況が異なった。漁業の不振などに伴う人口減少に歯止めをかけるべく、安永４年（1775）、五島藩は大村領から 14 家 78 名の移住を求め、その後、寛政９年（1797）には三井楽村淵ノ元に 108 名が移住した。寛政年間(1789～1801)には、仲知・島首にも大村領より移住者があったとされている（そのうち、江袋への移住者は、大村領神ノ浦大中尾の七右衛門とチエの子孫と伝わっている）[50]。これらは農業従事者であり、農耕地を切り開いていった。後述するが、彼らの多くはカクレキリシタンであり、先住者の集落とは婚姻を含めて通交がなかった。

〔漁場争論〕　寛文２年（1662）に幕府より富江領が確定して以後、有川湾における海境争論が起きた。これは魚目村（富江領）と有川村（五島領）の間で起きたもので、幕府の裁許が元禄２年（1689）に出された。しかしこれでも事態の収拾がつかなかったものの、翌年にも同様の判断を幕府が示したことから一応の決着をみた。幕府による「磯は地付次第、沖は入会」という裁許は、この時が初例だといわれている[51]。

当該地域の漁業従事者は、柴田家（北魚目：越前）・湯川家（似首：紀州）、設楽家（福岡）、小倉家（立串：筑前小倉）、福山家（淡路：榎津）など他領から定住したものが多い。特に紀州出身者が圧倒的に多く、当該地域の漁業発展に大きな影響を与えた[52]。これら他領出身の漁業従事者は、定住以降侍格や村役の身分を獲得し、延網から敷網への変化による漁業権の再編で網加徳を獲得していったといわれている[53]。彼らは鮪漁や捕鯨などで莫大な資産を築いていったが、これらの資産が富江五島家の財政を下支えするものとなっていった。



図２　有川湾浦絵図（元禄２年、1689）（新上五島町鯨賓館ミュージアム所蔵）



図３　魚目浦絵図（貞享５年、1688）（事代主神社所蔵）

〔漂流・漂着船への対応〕　江口家文書には、海難救助に関する記録や礼状が数点残っている[54]。それらの多くは、大風によって破損した船、流された船で、紀州藤代・泉州・播磨魚崎から近海の筑前鐘崎、平戸といった地域のものだった。

破損した船の残骸や積み荷などは、すべて回収して返却される海事慣習があった。そのため「舟諸道具壱色もちさらさる様ニ御取あつめ被下、其上何色ニてもうセ物於有之は、申上ケ候へ御吟味被成可被下之由、忝奉存候、右之舟かす、慥ニ請取申処、実正也」[55]などといった文言の礼状がみられる。

対馬海流と角力灘の間に位置する五島列島は、朝鮮半島、中国大陸、琉球からの漂流・漂着船も多数みられた[56]。江戸時代においては、そういった船や人は幕府が保護し、長崎から送還するシステムが作られており、その度に対応した[57]。

富江領には、寛文２年（1662）以降、たびたび異国船の漂流・漂着船がみられ（表１）[58]、当概地の住民にとって異国人と接触する機会は多かった[59]。漂流・漂着民の送還や漁業、水主役などを通じて領民は長崎にも行き来しており、交流圏のなかに異国の存在があった。

表１　五島渡来、又は漂着の異国船並びに国内船数

時代		唐船	朝鮮船	蘭船	その他外国船	琉球船	国内船
寛文	1661～1672	10	3	2			5
延宝	1673～1680	2					3
天和	1681～1683	3	1				3
貞享	1684～1687	27	1				2
元禄	1688～1703	22					
宝永	1704～1710	6	1				
正徳	1711～1715	1					
享保	1716～1735	5	5	1			1
元文	1736～1740	3	2				
寛保	1741～1743	2	1				
延享	1744～1747	2	2			1	1
寛延	1748～1750	3	1				
宝暦	1751～1763	14	6			1	2
明和	1764～1771	7	6				3
安永	1772～1780	1	6	1			1
天明	1781～1788	4	3				
寛政	1789～1800	9	8			4	
享和	1801～1803		2		1		1
文化	1804～1817	13	11			2	
文政	1818～1829	5	9			5	1
天保	1830～1843		1			1	1
弘化	1844～1847	1	1				
嘉永	1848～1853	1	2		3		
安政	1854～1859		3		8		
文久	1861～1863				4		
慶応	1865～1867				1		
計		141	75	4	17	14	24

『新魚目町郷土誌』（新魚目町、1986 年）229 頁掲載の表を加工した。

〔国防と当概地域〕　寛永鎖国以後、五島藩は海防に力を注いだ。当該地域には、寛文３年（1663）富江領が分知された時に遠見番所が２ヶ所設置される[60]。平和な時代には、先述した漂流・漂着船への警戒を主な任務とした。しかし寛政期以降、日本の近海には異国船が多く見られる状況になり、五島近海にもその姿をしばしば現した。

当時、異国との関係を限っていた幕府は、国防に本格的に取り組む必要を感じていくが、基本的に富江領は、五島領に準じるかたちで異国船への警戒に備えた[61]。五島領、富江領とも防衛システムの確認及び改革に取り組むと同時に、領内に台場の設置などがなされた。任務遂行にあたって情報収集が重要になるが、長崎との関係も強めていった[62]。

〔富江領の消滅とキリシタン弾圧問題〕　大政奉還以後の混乱した状況のなかで、明治新政府は王政復古の大号令を発した。五島盛徳は、今後の海防問題に関する請願書を弁事御役所に提出したなかで、富江領の吸収合併にふれた。これが明治政府に認可されたことで、富江領の反発を生み混乱が生じた。これは福江藩と富江領の対立という単純な構図ではなく、領主層と被支配者層（農民・漁民・町人など）が結びつき、復領嘆願を目指す一揆が起きた。明治３年（1870）に解決するが、この状況は、近世の百姓一揆とは異なる国人一揆的な形態として理解されている[63]。

ところで、この時期天領であった長崎、大村藩、五島藩、平戸藩といった地域はキリシタンの存在が大きな問題となっていた。この地域は歴史的に支配領域を超えてカクレキリシタンが存在していたが、取締りの実態は支配領域で異なり、幕藩体制の枠組みで実施された。

五島藩の場合、明治元年（1868）12 月３日、行政官御達により、領内における邪宗門の取り調べが命じられ、処置については長崎に伺いを立てることが五島盛徳に伝えられた[64]。明治２年（1869）、各国公使から明治政府に、五島における信徒の処遇問題についての問い合わせがあった。これに対して明治政府は、長崎府及び五島藩を通じて調査を行うと同時に、外国官判事山口範造を派遣して事態の把握を試みた。これに関する資料が、『耶蘇宗一件』[65]である。内容から、五島藩の信徒認識、信徒把握、取締りの実態等が確認できる[66]。明治４年（1871）５月付の『異宗徒人口戸数並死生出奔調目録　福江藩』[67]によると、当該地の信徒は記録されていないが、『邪宗信仰之者調書　明治５年壬申６月　魚目村　青方村』[68]によると、曽根郷には家数 49 軒、人数 193 人（内男 111 人女 82 人）の信徒がおり、そのうち江袋には、13 軒　63 人（男 36 人女 27 人）、立串には、12 軒　57 人（内男 29 人女 28 人）が存在した。

平戸藩も五島藩同様にカクレキリシタンの取り締まりを行ったが、『太政類典草稿　自慶応三年至明治四年七月』[69]の「平戸藩管内異宗徒処分」によると、平戸藩の管轄内で脱走した信徒の数は 132 人であった。この中には、今回調査地域の仲知村居付も含まれており、明治３年（1870）11 月 13 日付の弁官宛平戸藩届によると、明治２年（1869）の冬に露顕した信徒はすべて改宗した[70]。この改宗が平戸藩による強制的なものであったためなのか、明治３年 10 月 16 日夜に至って、32 人が脱走している。

ところで「居付」の定義であるが、明治２年６月に長崎府判事より外国判事に宛てられたものによると[71]、五島藩は「元来彼地人員寡少、諸国ヨリ渡来者ヲ止置、山野開拓ノ為、小家ヲ建、農具ヲ与へ、其地ニ居ラシメ墾田開畠ヲ致サセ候者ヲ居着（イツキ）ト唱、諸国ニ所謂入百姓ノ類ニテ、従来ノ国人等ハ大ニ此徒ヲ卑シメ縁組ハ勿論親睦ヲモ不結、別種ノ者ノ如ク被取扱候者而已ニテ、従来ノ国民ハ無之」と認識していた。つまりこの内容から、「居付」は農業従事者として把握されていたことが確認でき、これらの住民は先住者から蔑んでみられ、縁組みを含み交流関係を持たない孤立した存在であったと為政者側が把握していたことがわかる。

以上のように明治政府及び藩は厳しい姿勢でカクレキリシタンに臨むが、外国の非難などもあって明治政府は次第に政策を軟化させていった。こういったなかでキリスト教信者の増加を抑えるため、明治政府は国民教化に神道を利用する。明治政府は宣教使を派遣して、氏子改めや神社名改称などを行った。近代国家としての体裁を作り上げる過程において、信教の問題が明治政府にどう扱われていたのか、この点を検証しうる歴史を当該地域は持っているのである[72]。

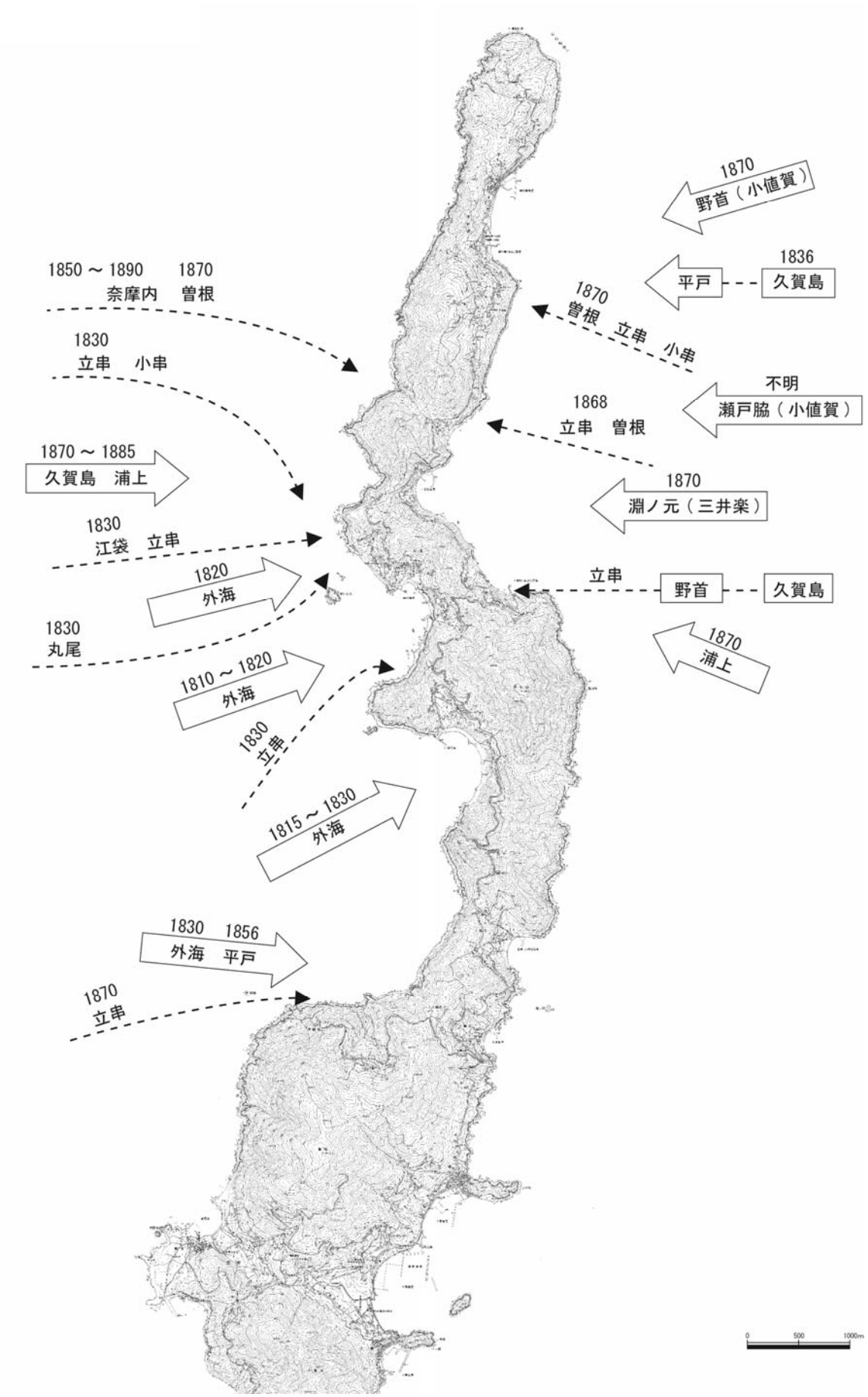

1870
野首（小値賀）
1836
久賀島
平戸
1850 ～ 1890
奈摩内
1870
曽根
1870
曽根　立串　小串
1830
立串　小串
不明
瀬戸脇（小値賀）
1868
立串　曽根
1870 ～ 1885
久賀島　浦上
1870
淵ノ元（三井楽）
1830
江袋　立串
立串
野首
久賀島
1820
外海
1830
丸尾
1870
浦上
1810 ～ 1820
外海
1830
立串
1815 ～ 1830
外海
1830
外海
1856
平戸
1870
立串
0
500
1000m

図４　居付の移住

◇脚注

1 青方や青方湾の相河に比定する説がある。
2 『五島神社誌』神祇会長崎県南松浦郡部会、1943 年。
3 前掲『五島神社誌』
4 宇久氏の出自については諸説あるが、魚目は早く宇久氏の勢力下に入ったようで、文治年間（1185～1189）に浦源三郎が代官として堀切に入った。ここを相懸かりに有川方面へと勢力を拡大していく。
5 暦仁元年（1238）十二月廿五日峯持・源等連署和与状案（青方文書）。
6 『新魚目町郷土誌』新魚目町、1986 年、71 頁。鎌倉時代前期より、曽根氏には分家があり、奈摩、青方にも屋敷を所有していた。
7 前掲『新魚目町郷土誌』
8 『長崎県の文化財』長崎県教育委員会、2001 年。
9 同上。
10 前掲『五島神社誌』
11 松尾弘毅「中世日朝関係における五島諸氏と通交体制」『東アジアと日本　交流と変容』創刊号、九州大学比較社会文化研究院、2004 年。
12 至徳二年（1385）五月三日禅源等連署裁決状案（青方文書）。
13 青方文書。
14 前掲『新魚目町郷土誌』。
15 白水智「肥前青方氏の生業と諸氏結合」『中央史学』10 号、1987 年。
16 同年二月九日篤連署押書状案（青方文書）。
17 橋村修『漁場利用の社会史』（人文書院、2009 年）。
18 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』（中央出版社、1979）9、219 頁。
19 1565 年 9 月 23 日「フェルナンデス書簡」（村上直次郎訳『イエズス会士日本通信』下、雄松堂、1969、5 頁）。
20 フロイス「日本史」9、225～265 頁、1565 年 9 月 23 日「フェルナンデス書簡」・1566 年 10 月 20 日「アルメイダ書簡」前掲『イエズス会士日本通信』82～117 頁。
21 フロイス「日本史」9、301～303 頁。
22 五野井隆史「五島とキリシタン教界について」（村井章介代表平成 12 年度～同 15 年度科学研究費補助金研究成果報告書「8－17 世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流―海域と港市の形成、民族・地域間の相互認識を中心に―」2004）。
23 前掲 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』（中央出版社、1979）9、212 頁。
24 同年二月四日「ヴィレラ書簡」同通信など。
25 フロイス「日本史」9、352～353 頁。
26 「一五八一年日本年報」イエズス会日本年報。
27 前掲五野井。
28 イエズス会日本年報。
29 シュッテ「日本歴史資料集」Ⅰ。
30 フロイス「日本史」12、42～43 頁。
31 フロイス「日本史」12、82～83 頁。
32 パジェス「日本キリシタン宗門史」など。
33 浜口庄八訳『一六一四年イエズス会年報』（『純心女子短期大学紀要』第五集、1969 年。
34 五野井「禁制下における大村藩とキリシタン宣教師」『長崎談叢』第 71 輯、4 頁。
35 前掲五野井。
36 荒木文朗『肥前国五島領転切支丹之類族帳』2006 年。
37 『元禄三午年　類族帳』長崎歴史文化博物館、11-2871。
38 前掲『新魚目町郷土誌』。
39 平戸五島領領分図（長崎歴史文化博物館収蔵、3-185）。
40 『長崎県史　藩政編』吉川弘文館、1973 年。
41 魚目掛代官所。
42 中島功『五島編年史　上巻』国書刊行会、1973 年、331～332 頁。
43 「高三千石外ニ御内検高入御分地并上下五島山境杭銘山分帳」（浦母屋文書、『新魚目町郷土誌　史料編』新魚目町、1988 年）。
44 「肥州下松浦郡五嶋領」（荒木文朗編『旧魚目文書（一）』）。
45 同上。
46 山林の経営、炭・塩業に従事するが、田地の小作権は有しない。濵百姓は、農業に従事するが、小作権を有せずに漁業権を持つ（『魚目村郷土誌　全』長崎歴史文化博物館、13　67－1　171）。
47 移住については、宮本常一「五島列島の産業と社会の歴史的展開」『西海国立公園候補地学術調査書』1952・3 年（後に『宮本常一著作集　第 11 巻　中世社会の残存』未来社、1972 年に所収）も参照されたい。
48 泉州については、「当時、佐野（泉州）ノ漁民ハ青方村大曽浦ニ来リテ漁猟シタり。」（前掲『五島編年誌　上巻』409 頁）、「コノ頃ヨリ泉州佐野浦ノ漁民、平戸五島方面ニ出漁シ土着セル者頗ル多シ。紀州方面ヨリノ移住

ハ已ニ古ク直接鯨猟ニ従事セルモノヽ如シ」（前掲『五島編年史　上巻』599 頁）との記録が残る。当該地域に新出した背景については、宮本常一「対馬における佐野網の変遷」（『漁業経済研究』東京大学出版会、第 13 巻第 2 号、1964 年）を参照。延宝 6 年（1678）肥前大村より深沢儀太夫が鯨猟にきた（前掲『五島編年史　上巻』422 頁）。他に貞享 4 年（1687）には、「七月一日、佐渡守盛暢、江戸ノ賤民ヲ五島ニ移シテ原野を開カシム」（前掲『五島編年史　上巻』507 頁）とあることからもわかるように、江戸からの移住が五島の地域では見られた。

49 江口甚右衛門は、大坂の口入伝法屋五兵衛を通じて奉公人を確保していた（荒木文朗編『江口家文書叢書（第九集）奉公人・網代関係』）。

50 大村領からの移住については、江戸時代の史料である「就人別改御領分中廻勤日記并行事」（長崎歴史文化博物館　青方 14　52）で確認できる。前掲『五島編年史　下巻』723-4 頁。前掲『長崎県史藩政編』726 頁。『仲知小教区史』（仲知小教区、1999 年）によると、島ノ首地区は、黒崎村から島ノ首へ移住、立串から小串を経由して島ノ首への移住が確認できる。真浦地区は、1820～30 年代に神ノ浦から丸尾、そこから真浦へ移住し、山手の開拓をしていたという。久志地区は、江袋から久志への移住、立串から久志への移住が確認できる。1830 年代に久志と真浦の山手を開拓した。一本松地区は、立串から一本松への移住、淵の元（三井楽）からの移住、立串から一本松への移住が確認できる。東竹谷地区は、西彼、大野から立串に移住し、五島崩れ後、平戸、黒島を経て竹谷への移住が確認できる。

51 羽邦男『土地問題の起源：村と自然と明治維新』（平凡社、1989 年）。

52 前掲『長崎県史　藩政編』、橋村修『漁場利用の社会史』（人文書院、2009 年）など。

53 前掲 橋村修『漁場利用の社会史』（人文書院、2009 年）。

54 荒木文朗編『江口家文書叢書（第二集）』（有川町教育委員会、1999 年）56～65 頁。有川村では、貞享四年の海境争いの際に「公儀海役張」を作成している。これは、有川村百姓が海難救助をしてきた実績を書き上げたもの（長崎歴史文化博物館収蔵、青方文書 14－44－1）。

55 延宝六年八月十一日付「指上ケ申書物之事」江口甚右衛門殿・原藤左衛門殿宛紀州藤代ノ船頭吉兵衛（江口文書 367）。

56 前掲『新魚目町郷土誌』229 頁。

57 荒野泰典『近世日本と東アジア』東京大学出版会、1988 年。

58 寛文 2 年（1662）8 月 12 日奈摩浦へ唐船の漂着があった。宝永 4 年（1707）6 月 3 日には、曽根村赤浜に唐船（92 人乗）一艘が漂着している。また、宝暦 13 年（1763）2 月 8 日には、朝鮮船が破船し、中通島船崎村に漂着している（御領内江唐船朝鮮舟琉球船漂着并沖合見掛調帳　青方 14　92）。

59 「異国船之儀者、古来ヨリ能見馴居候付、遠沖相見候内、其島役□江申達、陸地者飛脚船路□以飛船福江表江告来候」（五島領内島之手宛覚　青方 14　100）。

60 『長崎拾芥・華蛮要言』純心短期大学長崎地方史研究所、1988 年。166 頁。

61 「同姓右膳殿領内島々右ニ準手宛被仰付候」。「福江ニ而者遠見番所有之鬼嶽と申山ニ而相図を以領内見通之場所并同姓右膳殿方江茂為知候」とあるように、富江領と五島領の間には、異国船来航に備えていた連絡体制があった（「五島領内島之手宛覚」　青方 14　100）。実際、この体制が機能したかについては、嘉永七年四月のロシア船来航時の様子が 前掲『五島編年史　下巻』969～973 頁で確認できる。

62 沼倉延幸「開国前後、長崎における海外情報の収集伝達活動について―熊本藩・五島藩長崎聞役（留守居）の活動を中心に―」（『書陵部紀要』第 47 号、1994 年）。

63 丸山雍成「肥前五島の富江一揆について」（『封建下の社会と交通』吉川弘文館、2001 年）富江一揆については、前掲『長崎県史　藩政編』、郡家真一「富江騒動―富江藩の興廃―」（『五島文化叢書 2 集・五島の史話と民話』1983 年）など。

64 『長崎県史料　福江藩史稿』（内閣文庫 59007　39 冊）。前掲『明治元年自七月至十二月　文書科事務簿第二』。

65 国立公文書館　2A　33-9。

66 この中で、明治 2 年 4 月 11 日付で五島飛騨守公用人近藤虎之助が改宗者、家数 86 軒、人数 429 人と報告していることが確認できる。また、当該地を含む魚目掛にはキリシタン信仰者が、家数 38 軒、人数 132 人（内男 77 人女 55 人）おり、このうち 69 人（男 39 人女 30 人）が改宗し、63 人（男 38 人女 25 人）が出奔したことが確認できる。さらに魚ノ目掛居付七兵衛以下 6 名の調書によると、明治元年に大浦天主堂に参詣し、その際に「経文習」を受け取り、その後、天主堂を訪れた人々がその都度「仏躰・数珠」を貰い、村内のものへ教義を伝えた、というキリスト教伝播の過程が確認できる。同時期の福江藩の資料として『切支丹信仰之者惣人数付　明治 2 巳年』（長崎歴史文化博物館　11　55-1）がある。これによると、魚目掛居付は、家 58 軒、人数 162 人（内男 77 人女 56 人）で、内 69 人（男 39 人女 30 人）が改宗し、内 63 人（68 人女 25 人）が出奔と記録されている。記録されている数字は、計算上の誤りもあり、信憑性に疑問がある。

67 長崎歴史文化博物館 11　40-1。

68 長崎歴史文化博物館　11　59-1。

69 国立公文書館　2A　24-8　131。

70 前掲『五島キリシタン史』によると、仲知のキリシタンは、34 名が小値賀へ積み出され、それ以外は男女に分けて、厳しく詮議されたうえで平戸へ護送されたという。

71 『耶蘇宗一件』前掲。

72 松尾晋一「明治以降における神社境内の景観変容」第 5 章各論第 2 節歴史、新上五島町、2011 年。

第５節　文化財

新上五島町内にある指定文化財は、下記の表のとおりである。国指定文化財４件、国選択文化財１件、長崎県指定文化財７件、新上五島町指定文化財 61 件、計 72 件である。

１．国指定文化財

地区名	指定区分	区分	文化財名	指定年月日
若松	重要文化財	美術工芸品	銅造如来立像	昭和 56年　6月　9日
上五島	重要文化財	建造物	青砂ヶ浦天主堂	平成 13年 11月 14日
有川	重要文化財	建造物	頭ヶ島天主堂「教会堂・司祭館」	平成 15年 12月 25日
奈良尾	記念物	天然記念物	奈良尾のアコウ	昭和 36年　4月 27日
五島全体	民俗文化財	無形（国選択）	五島神楽	平成 14年　2月 12日

２．県指定文化財

地区名	指定区分	区分	文化財名	指定年月日
若松	記念物	史跡	日島の石塔群	平成　2年　2月 22日
上五島	記念物	天然記念物	五島青方ウバメガシ	昭和 53年　8月 22日
上五島	有形文化財	建造物	大曾教会	平成 19年　3月　2日
新魚目	記念物	天然記念物	新魚目曽根火山赤ダキ断崖	昭和 53年　3月 31日
新魚目	有形文化財	建造物	江袋教会	平成 22年　9月 10日
奈良尾	記念物	天然記念物	ヘゴ自生地	昭和 41年　4月 18日
	民俗文化財	無形	上五島神楽	昭和 56年　3月 27日

３．町指定文化財

地区名	指定区分	区分	文化財名	指定年月日
	記念物	史跡	白魚千軒跡（千人塚）	昭和 62年 12月 11日
	民俗文化財	有形	六角地蔵石憧	昭和 62年 12月 11日
	有形文化財	美術工芸品	銅像薬師如来座像	昭和 63年　2月　1日
	有形文化財	建造物	榊ノ浦龍音龍尊堂	平成　2年　7月 20日
若	記念物	史跡	金比羅神社境内の板碑	平成　2年　7月 20日
	記念物	史跡	荒川郷本倉寺屋敷石塔群	平成　2年　7月 20日
	記念物	史跡	真浦遺跡（モエン様）	平成　2年　7月 20日
	記念物	史跡	老松神社境内の岩陰遺跡	平成　2年　7月 20日
	有形文化財	美術工芸品	荒川観音像	平成　2年　7月 20日
松	有形文化財	美術工芸品	秘仏十一面観音	平成　2年　7月 20日
	記念物	天然記念物	源寿院の銀杏の木	平成　2年　7月 20日
	記念物	天然記念物	曲崎海岸のはま沈ちょう群落	平成　2年　7月 20日
	有形文化財	歴史資料	老松神社裏出土の鰐口及び古銭	平成 13年　2月 21日
	記念物	史跡	玄加玄徳の碑	平成 13年　2月 21日

地区名	指定区分	区分	文化財名	指定年月日
上五島	有形文化財	建造物	五輪塔	平成　3年 10月　1日
	有形文化財	建造物	政彦神社棟札	平成　3年 10月　1日
	有形文化財	彫刻	福寿庵地蔵堂の木造仏	平成　3年 10月　1日
	記念物	天然記念物	青方神社社叢	平成　3年 10月　1日
	有形文化財	建造物	六地蔵塔	平成　3年 10月　1日
	有形文化財	彫刻	長福寺木造仏	平成　3年 10月　1日
	有形文化財	彫刻	相河薬師堂薬師仏	平成　3年 10月　1日
	有形文化財	彫刻	相河薬師堂十二干支仏	平成　3年 10月　1日
	有形文化財	建造物	今里平家塚と中世墳墓群	平成　3年 10月　1日
	有形文化財	建造物	御船様	平成　3年 10月　1日
	民俗文化財	無形	青方念仏踊り	平成　5年　1月 14日
	記念物	史跡	続代官所跡	平成　7年 12月　1日
	有形文化財	建造物	伊藤美俊家住宅	平成 16年　7月 16日
	民俗文化財	無形	青方石づき唄	平成 16年　7月 16日
	有形文化財	建造物	冷水天主堂	平成 17年　7月 25日
新魚目	有形文化財	絵画	魚目浦絵図	平成 10年　4月　1日
	有形文化財	彫刻	山中観世音像	平成 10年　4月　1日
	記念物	史跡	魚目城跡	平成 10年　4月　1日
	記念物	史跡	富江藩中通代官役所跡役所井戸	平成 10年　4月　1日
	記念物	史跡	鯨供養碑	平成 13年 10月　9日
	民俗文化財	無形	みんかけ	平成 15年　6月 13日
有川	民俗文化財	無形	鯨唄・羽差し踊り	昭和 57年　4月 30日
	記念物	史跡	坂本竜馬ゆかりの碑	昭和 58年　3月 16日
	記念物	史跡	鯨供養塔と観音石仏二体	昭和 58年　3月 16日
	有形文化財	工芸品	弁財天像	昭和 58年　3月 16日
	民俗文化財	有形	潮之目恵比須の三枚網羽	昭和 58年　3月 16日
	有形文化財	歴史資料	江戸控訴時の有川湾浦絵図	昭和 62年 10月 13日
	有形文化財	古文書	元禄二年の幕府裁許状	昭和 62年 10月 13日
	有形文化財	古文書	元禄三年の幕府再裁許状	昭和 62年 10月 13日
	記念物	天然記念物	祖母君神社のアコウ樹	昭和 62年 10月 13日
	民俗文化財	無形	鯛ノ浦薙刀踊り	昭和 62年 12月　9日
	有形文化財	歴史資料	江口甚右衛門正利肖像画	平成　8年 10月　1日
	民俗文化財	書籍	江之濱薬師如来縁起	平成　8年 10月　1日
	民俗文化財	工芸品	江之濱薬師御堂「御厨子」	平成　8年 10月　1日
	民俗文化財	工芸品	江之濱薬師日光・月光十二神将像御堂	平成　8年 10月　1日
	民俗文化財	信仰・絵画	釈迦涅槃図	平成　8年 10月　1日
	民俗文化財	無形	有川神楽	平成　8年 10月　1日
	民俗文化財	無形	十七日祭り	平成 12年 12月　1日
	記念物	天然記念物	応護島のアコウ樹を中心とした自然林	平成 15年 6月　10日
	記念物	遺跡	上原遺跡	平成 15年 6月　10日
	記念物	天然記念物	アコウ樹	平成 15年 6月　10日
	民俗文化財	無形	江ノ浜念仏踊り(きゃあ念仏踊り)	平成 15年 6月　10日
	記念物	遺跡	浜郷遺跡(弥生墳墓)	平成 15年 6月　10日
	有形文化財	建造物	旧鯛ノ浦天主堂	平成 15年 10月 28日
奈良尾	記念物	名勝地	芦山の滝	昭和 62年 2月　17日
	有形文化財	史跡	妙典無縁墓碑群	昭和 62年 2月　17日
	有形文化財	史跡	遠見番岳のろし台跡	平成　4年　2月 28日

第３章　生活と生業

五島列島の農林業及び漁業について、民俗学的に、生業として、その実態を全体的に明らかにした記録や報告はない。島でこそ解明できることがあるはずであるが、その地域の特性について、多くの課題を残している。

第１節　農業と林業

歴史的には、五島列島の場合、中世に宇久島や小値賀島から開発が始まって、五島列島へと進んでいったと考えてよい。さらにさかのぼって、古墳時代でも、小値賀島に２基の古墳が確認されていることなどから、宇久・小値賀から開発が始まって、五島列島全域に及んだものといえる。このような歴史的な歩みから農業や漁業も別にしては考えられないはずである。

１．農業、水田稲作の在り様

島々では、一見して、漁業を生業にのみしていたかのように思われがちであるが、決してそのようなことはなく、島に人が住みつくようになるのは、農業によって始まる要因の方が多いといえる。その農業も水田稲作の場合と畑作中心の場合とがあるが、水田稲作に対する志向には強いものがあった。水田稲作の場合は、島のわずかな谷田や山あいの山田を耕していたのであるが、それにもかかわらず、水田稲作への志向が強かったというのである。

水田稲作であるが、島々の水田の立地には、一つの基本的な型式があると考えられる。どの地区でも、入江の奥には棚田が造られ、その奥を上がると、標高が高くなるにつれて保水林となるスダジイなどの雑木林が見られる。棚田は、数段から十数段になる場所もあるが、そこに基本的な地域構成が見られるのである。谷を上がって、上部の山頂一帯には、スダジイ類の雑木林が茂り、小さな谷あいにカワが流れているのが基本的な地勢である。

カワと表記するのは、谷あいの谷頭に湧き出るほんの少しの湧水のことで、水口のことであるが、現地でカワと呼んでいることによる。そのカワの両端に小さな水田が造られていく。それが今日棚田と呼ばれているものである。カワは、最終的には、棚田をめぐり、海岸を経て海にいたるのであるが、水田に水が必要でない時でも、小さなカワの水は、一年中チョロチョロと流れ下っている。

それらの水田は、山の七合目あたりから狭い小さなものが見られ、標高が下がるにつれて段々をなしながら、棚田の一つの面積は少しずつ広くなるのである。このような水田稲作について、島々の農業が、同じ棚田であっても、本土の水田の土地利用とは、基本的に異なる型式であることを記しておきたい。

本土と異なるところを比較して記し、島の特色を抽出してみた。島の棚田は、カワが、傾斜地から直接海に流れ込む状態で、本土のように、いったん平地をめぐり海に注ぐことになるのとは異なっている。本土ではカワではなく、川であり、その水量も大きいため、ところどころに保水林としての雑木林をかならずしも必要としないのである。本土でも、島の型式の棚田は、半島などで見られるが、それは地勢と地形が似た場所であることによるもので、島と同じ条件である。島では、最大限にそれを上手に利用してきたといえるのである。保水林としての雑木林が重要であり、谷間の水田の上部には、必ずその林があることに着目する必要があるといえる。

もう一つの特徴であるが、棚田を耕している人々の水田と集落の関係について、次のようなことがいえる。本土では、標高で、集落より下位に水田が営まれており、集落より上位には段々畑が作られているといった斜面地の利用をしている。これが島や島と似た条件の半島では、集落より上位にも水田が作られているのである。この事については、いろいろな理由が考えられるが、水利が一番に考え

られることである。さらに、海上交通という観点からは、海岸付近には集落は少ないが、海岸から少し上がった場所に集落が営まれるということになるのである。

具体的な比較例としては、本土では、諫早市本名川の中流域から上流域に見られるのが典型的な例である、半島や島では、平戸島北部西海岸の春日地区や新上五島町でも該当するものである。

畑作については、谷筋から外れた場所で行われてきたといえる。あるいは棚田水田に隣接した場所で耕作されてきた。ほとんどは、カワの水を利用できない場所で段々畑が作られたといえる。そして、水利のもっとも悪い場所では、焼畑が行われていたのである。水を使うことができない場所である。今日、コバ（木場、木庭）という地名が残る場所である。

ただし、焼畑も多く行われていたが、無制限にというのではなく、耕地を開く制限がおこなわれていたところもあった。斜面地の利用では、木々を無制限に伐採することは、死活問題ということを知っていたのである（その理由は、林業の部分を参考にしていただきたい。）。

また、別の観点になるが、島の農業について、基本的には、生業が農業であるという、建前が必要であったという場合も多い。近世から近代にかけて、近代では特に、封建遺制的な観点からも農業を生業とすると答えるのである。収入の如何にかかわらず、耕作地の多少にかかわらず、職業は農業だと答えているのである。このような背景があったことが考えられるのである。

昭和 25 年に発行された南松浦郡実態調査によると、南松浦郡の総面積 63,996.7 町歩中、農業用地（田、畑、園地）は 9,469.4 町を占めて、全面積中の 14.79%に過ぎない。南松浦郡の耕地の傾斜角度表を見てみると北魚目は 20° 50′ と厳しい環境に段畑を作っていることが分かる。新上五島町域でみても、専業農家戸数比率が 28.05%と高い（表１）。

また現金収入を得る手段としてツバキ（椿）の実の採取、シキミ（樒）の実の採取、薪の切り出しなどもおこなった。集落により事情が異なるが、津和崎、米山、大瀬良、小瀬良などではツバキの実の採取が盛んで、江袋、大水などではシキミの実の採取が盛んであった。ツバキの実は乾燥させて殻を取り、ツバキ油の採取のため出荷した。シキミの実は中国への輸出品として高値で出荷された。

薪の切り出しは多くの集落で行われており、漁業集落である立串集落などに販売にいったり、隣の小値賀島に船で販売に行ったりしていた。一つの山からある程度薪を切り出し、次の山に移り、その後最初の山にもどった。薪の切り出しは計画的に行われた。成長の早いタブノキ群生林であるがゆえに可能なことであった。江袋集落では特に小値賀島とのつながりが強く、集落所有の船を出して薪や野菜を販売に行き、そのお金で日用品などを買って帰ってきている。小値賀島への買い物などの交流は昭和 40 年代前半の道路整備が行われるまで続いた。

表１　旧町別耕地面積及び農家数（昭和 25 年３月　南松浦郡実態報告書）

旧町村名	面　積（町）				戸　数			
	総面積	耕地	割合(%)	総戸数	専業農家	同比率(%)	農家	同左専業
日　島	2,182.0	103.0	4.72	536	59	11.00	463	12.74
若　松	3,796.5	172.5	4.54	1,248	73	5.85	906	8.06
濱ノ浦	2,823.3	145.2	5.14	705	92	13.05	540	17.03
青　方	2,781.9	298.8	10.74	1,220	112	9.18	972	11.52
魚　目	597.9	123.0	20.57	796	86	10.80	589	14.60
北魚目	2,044.9	248.9	12.17	1,130	317	28.05	880	36.02
有　川	5,701.1	362.6	6.36	2,131	214	10.04	1,325	16.15
奈良尾	1,548.8	147.5	9.52	1,616	51	3.15	811	6.28
合　計	21,476.4	1,601.5	7.46	8,382	1,004	10.70	6,486	15.48

表２　旧新魚目町の耕作面積の推移

地目	大正６年	昭和 30 年	昭和 45 年	昭和 55 年
田	61.1ha	44.0ha	32.0ha	12.0ha
畑	374.4ha	339.0ha	185.0ha	108.0ha
計	435.5ha	383.0ha	217.0ha	120.0ha

表３　集落別耕作面積

	昭和 30 年		昭和 55 年	
集落名	田（ha）	畑(ha)	田(ha)	畑(ha)
浦桑郷	11.87	27.83	3.13	6.16
榎津郷	6.84	21.11	1.64	4.60
丸尾郷	5.73	26.07	3.84	8.29
似首郷	0.94	15.75	0.85	5.83
小串郷	8.12	49.99	3.43	13.88
立串郷	3.64	60.56	5.25	35.49
曽根郷	6.71	74.20	2.00	16.83
津和崎郷	0.15	63.49	0.00	17.24
計	44.00	339.00	20.14	108.72

表４　南松浦郡の耕地の傾斜

福　江	1° 10′	奈留島	11° 20′
奥　浦	4° 00′	樺　島	11° 50′
崎　山	4° 00′	日　島	7° 30′
本　山	1° 10′	若　松	9° 10′
大　濱	1° 10′	濱ノ浦	14° 00′
富　江	1° 40′	青　方	17° 40′
玉之浦	4° 40′	魚　目	5° 40′
三井楽	3° 30′	北魚目	20° 50′
岐　宿	4° 40′	有　川	5° 40′
久賀島	14° 30′	奈良尾	13° 03′

（昭和 25 年３月　南松浦郡実態報告書）

注：表中の ▭ は北魚目地域である。

表５　集落別農家戸数並農業人口

	大正６年		昭和 30 年		昭和 50 年		昭和 55 年	
	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口
浦桑郷	410	－	134	683	76	301	61	224
榎津郷		－	131	668	109	367	86	250
丸尾郷		－	143	729	119	509	114	449
似首郷		－	101	515	64	253	60	210
小串郷	705	－	239	1218	144	604	131	481
立串郷		－	263	1341	195	816	151	606
曽根郷		－	208	1060	185	1011	176	874
津和崎郷		－	226	1152	189	929	170	819
合　計	1,115	－	1,445	7,366	1,081	4,790	949	3,913

２．北魚目地域の耕作土

北魚目地域の地質は、南部と北部に、玢岩があり、中部に中生層地帯があり、その中に花崗岩地帯及び上五島唯一の玄武岩地帯が存在している。玢岩地帯に入るのは、大瀬良、小瀬良、明松、立串、平野の各集落であり、この地帯はいずれも極めて急峻な山腹に拓かれた階段畑となっている。この地帯の耕地はいずれも表層は 15 ㎝以下であり、集積層は 20 ㎝以下であって以下心土となっている。土性は砂壌土又は壌土であり、心土では埴土となっている。礫は各層ともに角礫が多く、植物根は表層のみにしか認められず、土壌構造は余り明瞭でない。

津和崎、米山、仲知、江袋、一本松の各地域は、中生層を母岩として居り、各地とも極端な急傾斜地に開かれた段畑となっている。しかし、この一枚一枚の畑は完全に水平ではなく、若干の傾斜角度を有している。これら各地の中でも、津和崎及び仲知では、その表層は 15 ㎝程度であり、集積層は認められずに心土となっている。土性は表層が壌土又は埴壌土で、心土は埴土となっており、礫の含量は少ない。また、土壌構造は明らかでないが、粒状構造を示しているようであり、根の伸長は表層のみに限られている。

江袋及び米山の各地の土壌は表層が 10 ㎝程度であり、その下に５㎝程度の厚さの集積層が存し、以下心土となっている。土性は砂壌土又は壌土が多く、礫の含量は角礫の小中程度のものが多く、ともに地表近くに多く集まっている。土壌構造は粒状構造をなしており、根の伸長は表層のみに止まっている。沈積物は見受けられない。また、江袋の一部と一本松においては、表層は 20 ㎝程度あり、その下に 15 ㎝程度の集積層が存在して以下心土となっている。礫は少なく角礫の中、又は、小のものが点在しているのみであり、根の伸長は表層のみに限られている。

江袋及び米山の各地の土壌は表層が 10 ㎝程度であり、その下に５㎝程度の厚さの集積層が存し、以下心土となっている。土性は砂壌土又は壌土が多く、礫の含量は角礫の小中程度のものが多く、共に地表近くに多く集まっている。土壌構造は粒状構造をなして居り、根の伸長は表層のみに止まっている。沈積物は見受けられない。また、江袋の一部と一本松においては、表層は約 20 ㎝程度あり、その下に 15 ㎝程度の集積層が存在して以下心土となっている。礫は少なく角礫の中、または、小のものが点在しているのみであり、土性は壌土で軟らかく、根は良く発達している。置換酸度も低い。

立串郷平野、尻無尾の付近は花崗岩地帯となっているが、この地帯においては、作土層が 10 ㎝から 15 ㎝で、第二層がそれ以下となっている。土性は砂壌土で角礫の小を含み、第一層は軟らかく、土壌構造は粒状構造をなしている。この地域の表層の土壌 PH は 5.5 となり、相当な酸性を示している。曽根には上五島唯一の玄武岩地帯が存在し、他の急峻な山腹に開かれた段畑はこの地帯には見られず。広々とした緩傾斜をなす台地となっている。地表は暗赤色を呈しており角礫が多い。表層は 10～15 ㎝の厚さを有し、以下集積層となっている。土層間の境界は明らかであり、土性は埴土である。礫は小角礫を含み、粒状または角塊状の構造を示している。根の伸長は大体表層に限られている。土壌の PH は 6.5 程であり、殆ど中性となっている。（出典 1950 『南松浦郡農業実態報告書』 長崎県農業試験場 集報 第１号）

３．農業移住者の生活

「なぜ、大村藩からの移住者が漁業に携わらなかったのか。」平戸藩の事例をもとに、歴史的な記録から推測した。

例えば、かくれキリシタンは、自らは「漁夫でござる」と応えている（浦川和三郎著『切支丹の活』）。それにもかかわらず、本格的な漁はしていないのである。生月では、鯨組に出ているというが、実態は不明である。

これらの背景には信仰上の理由があったのかもしれないが、移住先の土地の条件について、次のような記録から、大きな規制があったことが考えられる。

○平戸藩の記録で、『政庁要録』から、次のように在々の定が出されていた。

「百姓之儀は不及申、在々ニ居来候耕作仕程之者、鯨船併猟船むさと乗間敷事、」

これは本百姓のことである。それに、年貢をすべて済ましてから、代官所に届けをして行くのは構わぬとしているが、実は、それが簡単でないことは、当時の記録からもうかがわれるのである。この記録は、寛文２年（1662）に出されているものである。

○平戸の鯨組の組主であった吉村組の記録からも、次のようなことがうかがわれる。

「一　人数合弐百九拾五人内弐百弐六人鯨船拾七艘、」

として、続けて

「右之内壱人も乗セおり置不申候、殊ニ諸国法度之者乗セ不参候為其手形如件」

と、厳しく乗組を吟味していることが記録されている。

鯨組には、人数が要ることは当然であるが、このような規制があって、他所者がなかなか入り込む余地はなかったのではないかと推測される。

○郷の時代の生活

今日、地区というのは、かつては地名で何々郷と呼ばれていた頃の集落のことである。地区は、だいたい 14～15 軒ごとに一つの組となり、いくつかの組に分けられていた。今日では、地区によっては、人口減少のため、その組を維持できなくなっているところもある。

地区内の共同慣行については、組ごとに、組単位で行われてきた。しかし、人口減少のため、組が自然崩壊して、組がなくなっているところも多く見られ、共同慣行も行われなくなって数十年が経っている。

今日のような社会に変容する前には、郷に共同の権利が与えられていた。郷に与えられていた権利は、組ごとに均等に分配されていたのであるが、五島列島などで、急激な人口減少が起こる直前から、日本全体の経済的変化の影響により、そのような制度は、なし崩し的に無くなっていったのである。今日そのような制度があったということは、聞き取ることはできても、具体的な内容や場所を知ることも難しくなっているのが現状である。

海の権利、郷には、郷の磯があり、磯ものを採る権利が割り当てられていた。毎年、「クチアケ（口明け）」の日が決まっていた。磯の権利として、オゴ、テングサなどを採っていた。収益は郷内で分配された。

磯ものを採る権利について、聞き取り調査を含めて、地元の者が磯のものを採る権利を持っていたという。オゴやテングサなどは売買されていたので、特に規制がかかっていたという。売れないものや食用にも使えないものは、勝手であり、そのような海藻を採り、自らが開墾した畑に入れて肥料にしたという苦労話を聞いた。

キリシタンの人々は、このような理由で、本格的に漁業に携わることができなかったのではなかろうか。簡単な網漁や一本釣りは行っていたとおもわれる。特に、他からの移住者には、厳しい現実があったことがうかがわれる。

江戸時代は、石高制が基本である。米を作るという、このことが政治の中心に据えられていた時代である。漁業は、必ずしも奨励されるものではなかったのではなかろうか。鯨組のような、産業として成立するものの他は、生業としても苦しかったものといえるのである。

４．甘藷について

（１）甘藷の呼称について

普通に、イモ（芋）と呼ばれているもので、甘藷のことである。山の芋や里芋は、別の呼称がある。甘藷は、イモの代表であるため、そのように呼ばれるのである。

しかし、詳しく聞くと、伝来の地名を付して、＜サツマイモ（薩摩芋）＞といい、＜リュウキュウイモ（琉球芋）＞と呼んでいるのである。さらに丁寧に、五島では、＜リュウキュウカライモ（琉球唐芋）＞という人もいた。

いずれも、このイモが、伝来してきた道筋を示すものである。中国から、琉球を経て、薩摩に渡り、日本の本土に広まったものである（甘藷の歴史参照）。

（２）イモの食文化

日本人が普通に米を食べられるようになって、やっと半世紀ほどである。このようにいうと、信じる人は少ないと思われるが、本当である。それ以前は、イモが主食であった時代が長く続いたのである。昭和 30 年代の後半までのことであるが、１年中イモの切れ目がなかったというのである。これは五島列島でも、長崎市近郊でも（中心部を除いては）同じ状態であった。

イモは、10 月ごろ収穫して、イモガマにいれておく。これを翌年の４月頃まで食する。

ほとんどは蒸して食べるのである。三度三度といってよいくらいイモを食べたのである。

４月以降になると気候が暖かくなり、イモガマでは腐敗が進み、食べることができなくなるのである。それ以後は、カンコロ（コッパンともいう）と呼ばれる生イモをスライスして乾燥したものを煮て食する。

カンコロは、イモガマに入れたものとは別に、収穫後、半年分を秋から初冬にかけて加工する。カンコロは、日陰で風通しがよい場所に広げて、カラカラになるまで乾燥させて、湿気が来ない場所で保存する。こうして 10 月頃まで、新しいイモが収穫できるまで、主食として食べるのである。

なかには真っ白いカビが着いたものもあるが、これは水に漬け、タワシでカビを落として煮るのである。大きなハガマ（羽釜）で煮る。一度に２～３回分も煮るのである。煮上がるまで、シャモジで混ぜるので、団子のようになってしまう。練った状態である。これを茶碗に注いで食べるが、采は、鰯を甕や桶で塩漬けにしておいたものを焼いて食べた。

ときどきは、麦も食べたといっていたが、その時の麦は、殻を取った丸麦である。これもハガマで炊いた。一度に２～３回分も炊いておいて、食べる前に火を入れて柔らかくするのである。イモより麦のほうがまだよかったと言う人もいた。

このようなイモと麦と鰯が、年間を通しての、常食であったのである。そのようなことから、イモ料理の方法は、いろいろ工夫して、十種類以上もあるのではないかと思われる。

今では、昔のように大きなイモガマに入れて毎日食べるようなことはなくなってしまったのである。

このようなものとは別に、イモをスライスして茹でたものもある。太陽の光に当てて干すと飴色のようになり、それを焼いて食べるのであるが、手がかかるので、お菓子の代用として食べられていた。

最近、五島の特産品として土産物で売り出しているのは、カンコロ餅である。これは、たいへん贅沢な食べ物であった。正月など「晴れ」の日にしか食べられないものであった。

（３）甘藷栽培の現状

現在では、甘藷は、それほど多く作付されてはいない。ときどき副食として食べるためとか、正月にカンコロ餅にして食べるくらいの量である。カンコロ餅は、主に正月前に作られていたが、最近では五島の特産品として広く知られるようになり、一年中土産品店で販売されるようになっている。あ

るいは、ごく最近、焼酎ブームにのって、その原料として栽培する農家もある。また、甘藷は、品質がよくなって、西洋菓子のケーキの原料に使用される場合もある。それでも作付は、一軒で一反から二反ほどの面積で行われている。主食からは外れたのである。

甘藷栽培の最盛期であった昭和 30 年代までに、一軒で、どれぐらいの量のイモを収穫していたのかということであるが、これは作付面積ではなく、家ごとの人数で異なるが、各家で自家用に使うイモの量である。これは上五島で聞いた話である。

「食料の上に寝て食料の下に寝る。こんな幸せなことはない。」と話してくれた人がいた。これが、どのようなことを意味するのかというと、たいへんな感動ものであった。

五島では、イモガマは家の床下に造るのが普通である。その大きさは、深さ 1.5m、縦横の長さが２×３ｍのものを二つ設けたという。これは今でも残っている家がある。家族の主食である半年分の生イモを入れておくための施設である。これが食料の上に寝ることである。

食料の下に寝るとは、後の半年分は、乾燥したカンコロにして、ガマゲに入れて天井に吊るしておいたという。それが食料の下に寝るということである。一年分の食料を確保しておいて、もっとも安全な場所にそれを置いておくことが何よりも幸せなことであったのである。種イモとなるものは、別のイモガマに保存したという。

（４）五島列島のイモ文化の特色

五島列島の各地では、イモだけで生業が成立していたところがほとんどであり、イモがなかったらいったい、この地域はどうなっていたのであろうか、ということ思い知らされるものである。

これは小値賀町になるが、新上五島町の対岸にある野崎島のことである。新上五島町の津和崎とは目と鼻の先にある野崎島の舟森地区は、かくれキリシタンの村として知られていた。津和崎とは親密な関係があった地区である。

その舟森地区は、村のすべてが段畑である。水田はまったくないのである。ここでの生業は、漁業も少しは行っていたが、イモ作と麦作であり、イモ作が主体であった。

この舟森地区は 25 軒から 30 軒の集落で学校も教会もあった。そこが離村（閉村）したのは、昭和 41 年のことである。日本の経済構造が変化して、イモがデンプンとして売れなくなった頃である。イモが売れないだけでなく、自給自足では生活が成り立たなくなったことも大きな要因であると思われる。このような村が五島列島のあちこちに点在する。

（５）甘藷の歴史

甘藷の歴史は、長崎県平戸にはじまるといわれている。即ち慶長 10 年（1605）、甘藷が清国から琉球に伝わり、元和元年（1615）には平戸へ入っていることによる。これは琉球王が薩摩藩へ献上した元禄年間より 83 年も前のことで、さらに江戸で青木昆陽が薩摩芋として栽培普及した 120 年も前のことであった。

日本で最初に甘藷が栽培されたのは、現在「コックスの甘藷畑跡」として、昭和 29 年から長崎県の史跡指定を受けている平戸市川内町 71 番地にある土地で、旧中野村川内浦の鳶の巣というところであった。

ここにイギリス商館長リチャード・コックスが甘藷を伝えたという記録がある。元和元年（1615）のことで、「アダムス氏より甘藷一袋送り来る」というのが日本で最初の記録であった（元和元年６月２日）。同時に、川内浦の鳶の巣というところで栽培された記録も記載されている（『長崎県の文化財』）。「この菜園を借り受け、これに琉球より持ち来りたる甘藷を栽培す。日本にはまだ栽培されたることなきものなり」というものであった（元和元年６月 19 日）。

これが寛永５年（1628）には愛媛県の西部、旧宇和島藩下に伝えられたという（宮本常一『甘藷の歴史』1962 年「親民鑑月集」）。わずか 13 年のちのことである。しかし同時にこれが長崎県域にその後広がって栽培されたものとはなかなかいえない状況もある。というのは、長崎県でも対馬などでは正徳年間(1711～1716)に陶山訥庵が甘藷を伝えたともいうし、元禄のころ琉球から薩摩に伝わったものが、薩摩の地で栽培され全国へ広まったとも考えられているし、初期の伝播の状態は必ずしも明確ではない。

ところで全国に広まるきっかけとなったのは、栽培技術の変化ではなかっただろうかというふしもある。即ち、リチャード・コックスの日記（1615 年６月 29 日の部分）には「小さき甘藷の根 500 本を菜園に植ゆ。イートン氏が琉球から余に送り来りしものなり」と記録されている。これは明らかに種芋を植えたものである。しかも現在までこの栽培方法が伝わっているものか、平戸ではコックスの時代にトンボ植えと言った栽培法を伝えているともいう。もしこれが当時の伝承であるとするならば、少なくとも元禄以降に全国へ広まったのは、どこかで改良された方法であったと考えなければならない。即ち平戸の種芋を植える方法が、どこまで用いられたかということで、のちの記録には見られない。これは宮本常一の指摘するところでもある。少なくとも長崎県内では蔓植がほとんどであった。

さて長崎県下における甘藷の栽培動向であるが、西彼杵郡海岸部一帯と五島列島南部域、南高来郡などに多く産した。

西彼杵郡の甘藷作付面積は、明治 17 年 3,462 町歩、明治 34 年 6,325 町歩、南松浦郡（五島列島）では、明治 17 年 3,003 町歩、明治 34 年 4,139 町歩、南高来郡では、明治 17 年 3,700 町歩、明治 34 年 3,927 町歩、このときの県全体の作付面積は、明治 17 年 18,295 町歩、明治 34 年 22,858 町歩であった。その後は県全体でも昭和の初め頃まで、ほぼ 2 万町歩の作付面積を維持している（『長崎県統計書』『長崎県史』）。

明治 34 年には、昭和初めごろまで続く生産基盤が出来上がっているが、これは一定の販路を持った商品化への証明でもあった。その原因の一つには、当時東彼杵郡大村町にできた甘藷澱粉工場の設立があげられよう。このようにして盛行を極めた甘藷栽培であったが、現在まで続いて作付を行っているところは極めて稀である。南高来郡森山町から愛野町では、すでに戦前から馬鈴薯の作付に転じた農家も多かった。戦争中と戦後の一時期を除いて、その後の甘藷栽培は極端に落ちこんでいるのが現状である。いま五島列島福江島・富江町では、溶岩でつくられたカンコロ棚が遺跡として残るような状態である。ここは溶岩台地上に一面芋畑となったところであるが、すでに作付も変っており、一部は荒地になっている。

現在長崎名産として流通量は少ないが、カンコロ餅が出回っているほか、自給的なカンコロとして冬場の３ヶ月を保存できる量だけつくっている農家が多い。五島列島でも、西彼杵半島でも商品作物として作付しているものは飼料となる護国か、きわめて良質の甘いコトブキが主体となっている。菓子材としてあるいは料理用に使われているものである。

つまりは、この地域の生活を支えていたのは、イモであったのであると言いたい。その歴史からも、そのことが理解されるのである。歴史を知り、改めてイモの恩恵を知ることができるのである。

（６）甘藷栽培の生産量の推移と耕地面積の推移

昭和 45 年、第３次の貿易の自由化により、11 品目の関税の引き下げが行われた。これにより、糖蜜が外国から輸入されるようになり、焼酎の原料として使われるようになり、シロカンコロの需要がなくなった。シロカンコロの出荷を急激に減らすことが出来ないため、政府が間に入り、徐々に生産量を減らすようになった。

シロカンコロが売れなくなったため、新魚目町では馬鈴薯の栽培が一番適しているとして推奨した。シロカンコロを作っていた農家には、馬鈴薯の栽培を推奨し、転換させた（農業指導員）。馬鈴薯は、イモのまま出荷した。馬鈴薯には、生産量は安定しなかった。また、出荷の際に離島であるため、どうしても値が上がってしまい利益を上げられなくなるため、出荷数量に応じ、１kgに対し 10 円、１箱 200 円の補助を町から出した。

ユデカンコロの出荷が始まったのは昭和 50 年前後くらいである。

特に佐世保の業者が買い付けに来たが、他の業者にも農協から卸していた。

ユデカンコロはおよそシロカンコロより３倍の高値で売れた。ユデカンコロを二十数トン出荷したことがあった。その時は業者も大量には買えず、調整が必要となった。その後は、ユデカンコロとシロカンコロを作る割合を農家毎に割り当てた。

痩せた土地で栽培したイモは特に甘くなり、「大水のイモ」は特に甘くておいしかったと聞いた。

終戦後くらいまで、カンコロを主食としていたが、カンコロばかりではなく、半ばくを食べたりしていた。戦中は、カンコロをむして、しゃもじでくだき、潰して、日に三度食べていた。お昼のお弁当にカンコロを持って行ける家は、まだ、よかった。お昼の時間に川に魚釣りに行っていたこともあったという。

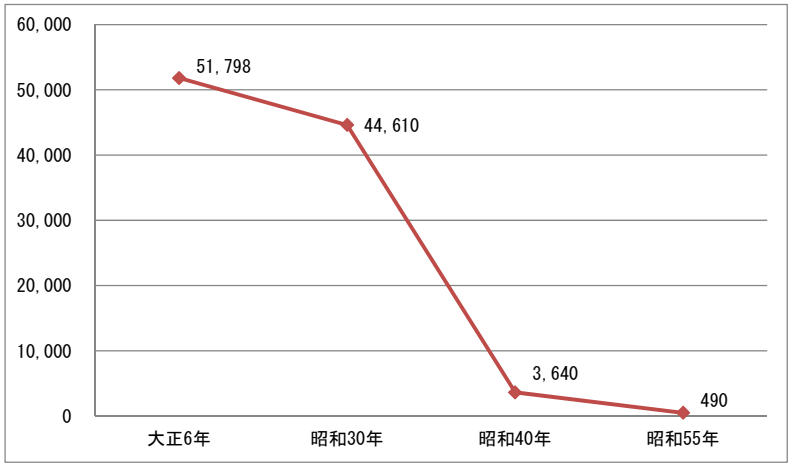


図１　甘藷の生産量（ｔ）



図２　甘藷の耕地面積（ａ）

表４をみると、北魚目地域は耕地の傾斜が 20° 50′ もある。それにもかかわらず、甘藷の栽培面積は上五島の他の地域よりも広く２反を超えていた。他の栽培作物でも栽培農家の割合や栽培平均面積でも北魚目地域は上位に位置している。しかし、全体的には図１でみるように昭和 30 年代から甘藷の生産量が減り始め、耕地面積も昭和 40 年代から急激に減っている。昭和 41 年以降、イモが澱粉として売れなくなっていったことも、要因の一つではないかと考える。全体的に減少傾向ではあったが、表８によると新上五島町の平成元年から平成 15 年までの農業産出額の１位の品目は甘藷であり、近年の町の主要農業産出物であることがわかる。

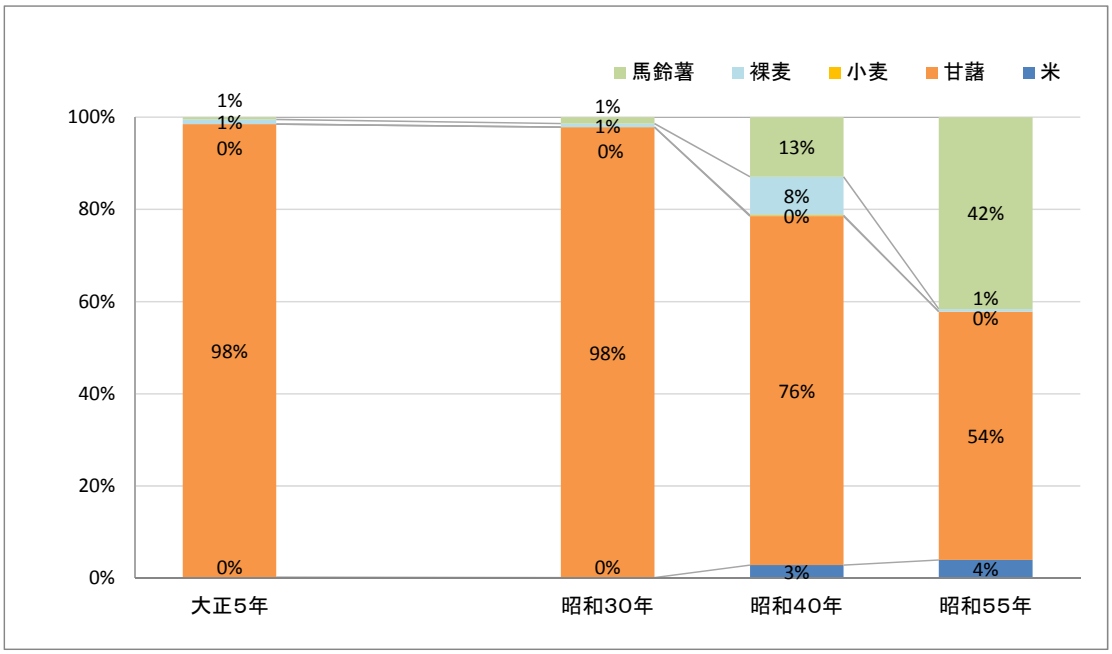


図３　新魚目町主要農産物の生産割

表６　年別各品目生産量

		米	甘藷	小麦	裸麦	馬鈴薯	計
大正６年	生産量（ｔ）	118.2	5,1798.0	―	501.8	270.9	52,688.9
	生産額（千円）	16	62	―	44	1	123
昭和30年	面　積（ha）	44.0	289.7	3.0	220.0	48.0	604.7
	生産量（ｔ）	61.0	44,610.0	0.2	352.0	624.0	45,647.2
	生産額（千円）	4,066	29,743	180	10,560	9,982	54,531
昭和40年	面　積（ha）	41.0	256.0	6.0	167.0	46.0	10,390
	生産量（ｔ）	138.0	3,640.0	11.0	401.0	623.0	4,813.0
	生産額（千円）	13,770	30,022	489	18,645	12,460	75,386
昭和55年	面　積（ha）	12.0	31.0	1.0	2.0	29.0	75.0
	生産量（ｔ）	36.0	490.0	1.0	5.0	379.0	911.0
	生産額（千円）	9,000	56,260	190	810	22,740	89,000

表７　旧町別栽培品目割合（昭和25年３月　南松浦郡実態報告書）

種別／旧町村名	裸　麦		小麦		甘藷		馬鈴薯	
	栽培農家（%）	平均面積（反）	栽培農家（%）	平均面積（反）	栽培農家（%）	平均面積（反）	栽培農家（%）	平均面積（反）
日ノ島村	97.84	1.23	60.29	0.18	99.56	1.59	87.90	0.12
若松村	99.89	1.28	37.74	0.11	99.89	1.49	94.04	0.12
濱ノ浦村	98.33	1.50	44.26	0.15	100.00	1.62	85.18	0.13
青方村	99.28	1.38	39.61	0.16	99.89	1.75	99.17	0.14
魚目村	98.81	1.01	45.33	0.12	99.80	1.42	95.75	0.12
北魚目村	99.10	1.18	77.84	0.14	99.78	2.27	98.86	0.19
有川町	98.56	1.27	38.34	0.15	99.90	1.86	79.39	0.13
奈良尾町	99.01	1.30	15.66	0.15	99.75	1.38	99.63	0.12

表８　新上五島町の農業産出額と上位品目別産出額　　単位:1000 万円

	農業産出額計	１位		２位		３位		４位		５位		
昭和42年	49	米	11	養豚	9	鶏卵	8	肉用牛	5	馬鈴薯	4	甘藷 3
昭和45年	56	養豚	8	米	8	鶏卵	7	甘藷	6	馬鈴薯	4	
昭和50年	108	養豚	16	肉用牛	11	馬鈴薯	11	米	10	鶏卵	10	甘藷 9
昭和55年	90	馬鈴薯	17	甘藷	14	養豚	10	米	7	夏蜜柑	6	
昭和60年	80	夏蜜柑	16	ゆで切干甘藷	8	馬鈴薯	8	甘藷	6	米	6	
平成元年	51	甘藷	8	馬鈴薯	6	ゆで切干甘藷	5	肉用牛	4	米	3	
平成２年	57	甘藷	9	馬鈴薯	7	肉用牛	5	ゆで切干甘藷	4	大根	3	
平成３年	56	甘藷	9	馬鈴薯	8	ゆで切干甘藷	4	夏蜜柑	4	大根	3	
平成４年	49	甘藷	10	馬鈴薯	6	肉用牛	4	米	2	大根	2	
平成５年	47	甘藷	7	馬鈴薯	6	肉用牛	4	玉葱	2	大根	2	
平成６年	47	甘藷	7	馬鈴薯	7	肉用牛	3	大根	3	玉葱	2	
平成７年	47	甘藷	9	馬鈴薯	7	ゆで切干甘藷	3	大根	3	玉葱	2	
平成８年	42	甘藷	9	馬鈴薯	5	肉用牛	3	大根	3	ゆで切干甘藷	2	
平成９年	38	甘藷	8	馬鈴薯	3	大根	3	ゆで切干甘藷	3	肉用牛	3	
平成10年	38	甘藷	7	馬鈴薯	3	大根	3	ゆで切干甘藷	3	キャベツ	2	
平成11年	33	甘藷	7	馬鈴薯	4	ゆで切干甘藷	2	大根	2			
平成12年	32	甘藷	8	馬鈴薯	4	馬鈴薯	3	大根	2	肉用牛	1	
平成13年	31	甘藷	7	馬鈴薯	4	馬鈴薯	3	大根	2	肉用牛	2	
平成14年	33	甘藷	9	馬鈴薯	4	馬鈴薯	2	大根	2	肉用牛	2	
平成15年	32	甘藷	8	馬鈴薯	3	馬鈴薯	2	大根	2	玉葱	2	

注：上位品目差出額は概ね２千万円以上の品目を計上

資料：「農業産出額及び生産農業所得統計」2005（九州農政局新上五島統計・情報センター）

（７）カンコロの生産方法

①植え付け

種芋に芽を出させるため３月頃に土の中に萌やす。

６月頃、芽が 30 ㎝～50 ㎝の長さになり、雨が降った後に、畑にイモをさす。

イモをさした後、イモのつらおこしを２回くらいする。

畑には、肥料として下肥や藻を雨ざらし、日ざらししたものを使う。

②収穫

10 月の終わりから 11 月にかけて行っている。

昔は収穫に２～３週間かかっていた。

収穫したイモはイモガマに入れていた。

種芋をいれるイモガマと食用のイモを入れるイモガマは分けていた。

イモガマには筵を敷いて、かがりいっぱいにイモを入れ、それが 50～60 個、一つのイモガマに入っていたという。

③「カンコロ」作り

ａ．収穫したイモを水を入れた樽に入れ、二本の棒を十字の板で繋いだもので水をかき回し、イモを洗った。これがない場合は、洗濯板のような板１枚を使って水をかき回して洗った。イモの泥がよく落ちたという。

ｂ．洗ったイモは樽からカゴにうつし、掛水をして乾いてから包丁で１個１個皮を剥いた。（ユデカンコロの場合）

ｃ．皮を剥いたイモは、手ガンナで切った。戦後、回して切るカンコロガンナが出来たが、ユデカンコロを作る時は、手ガンナで切った方が綺麗にできた。回して切るカンコロガンナはイモが割れた。

d．イモをカンナで切った後、ウーガマでゆでた。
e．ウーガマで茹でた後に、ヤグラの上に網を置き、その上に茹でたイモを干した。
カンコロは、北西の風、又は、西の風が吹けば、２～３日間で出来上がった。
短期間で乾くと色の良いカンコロになった。南風が吹くとカンコロはだめになった。
ヤグラは風向きを考えて設置した。昔は竹をすのこ状に組んで作った。
f．シロカンコロは、袋に入れて天井裏に置いた。

④出荷

仲知の男性（70 歳半ばくらい）宅では、シロカンコロは、100 俵くらい出荷していた。大水の女性（90 歳くらい）宅では、シロカンコロは、80 俵くらい出荷していた。シロカンコロは、鹿児島で焼酎の原料となっていたという。

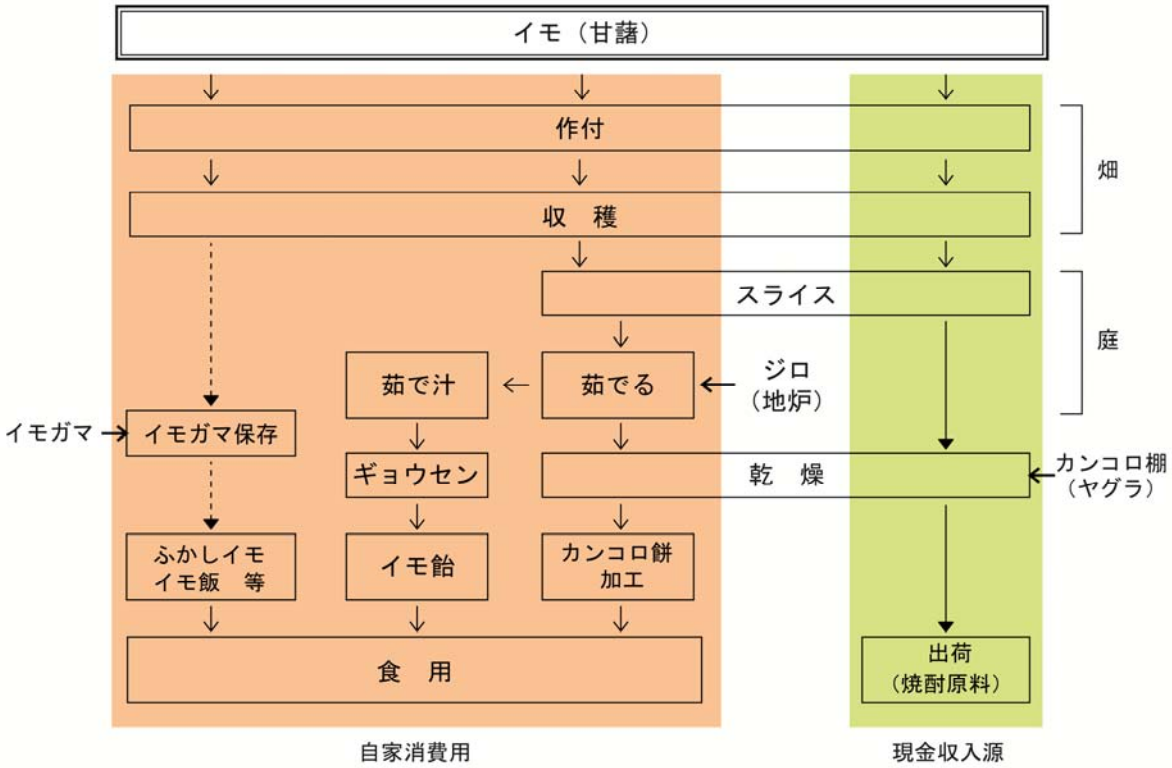


図４　甘藷の栽培・加工工程

ユデカンコロの製作過程

①収穫したイモをかがりで運ぶ。

⇩

②イモを洗う。

昔は桶を使っていた。現在はプラスチック製になっている。

⇩

③洗ったイモを網ですくい、かごに入れる。

大量にイモを洗う場合は、川に石を組んで、その上に網を敷き、イモを入れ、足で踏んで洗っていたという。

⇩

④洗ったイモをかごに入れ水気を取る。

⇩

⑤イモの皮を剥く。（シロカンコロは皮をむかない。）

現在はイモをスライスするカンナを使っている。

⇩

⑥イモを茹でる。

家の庭先に作ったジロに釜を置いて、ゆでた。昔は平釜を使っていた。

⇩

⑦茹でたイモをざるに上げる。

洗ったイモをあげる網と茹でたイモをあげる網は違う。茹でたイモは金網ですくう。

⇩

※ギョウセンやイモ飴を作る。

イモを上げた後の煮汁にモヤシと呼ばれるものを入れ、煮詰めてギョウセンと呼ばれるものを作る。

ギョウセンに砂糖を入れ、程よくやわらかくなったものを伸ばしたり、練ったりして、イモ飴を作る。

⇩

⑧イモを干す。

ざるに上げたイモは、少し冷ましてから、ヤグラに干す。

⇩

⑨カンコロの保管。

乾燥したカンコロを袋に入れて保管する。

ユデカンコロは、昭和 48 年頃から、お菓子用として佐世保に出荷し始めた。

シロカンコロは焼酎用として、農協に納め、福江に持っていったり、鹿児島に持っていったりしていた。

ユデカンコロの製作過程



イモを運ぶ「かがり」



イモを洗う



洗ったイモをすくう網



イモをすくい、かごに入れる



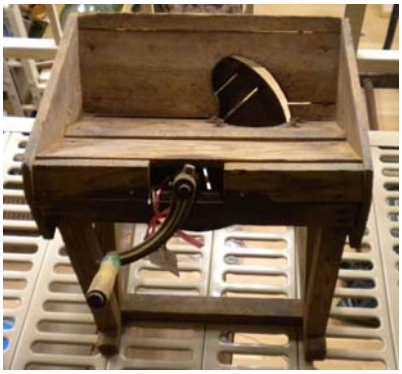
昔、洗ったイモを入れていたかご



イモの皮を剥く



イモをスライスする「手ガンナ」



イモをスライスする「カンコロガンナ」
（新上五島町鯨賓館ミュージアム所蔵）



イモをスライスする「カンコロガンナ」
（新上五島町鯨賓館ミュージアム所蔵）



イモを茹でる釜



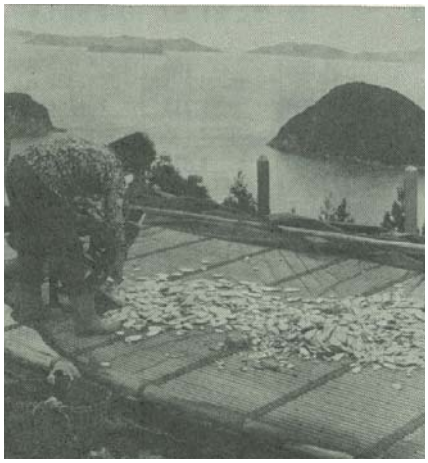
イモを茹でるためにも使うジロ



茹でたイモをすくう金網



茹でたイモを上げるざる



イモをヤグラに干す



カンコロが入ったざる

５．林業

五島列島の山々には、本来、スダジイなど樫の木などの雑木が植えられていたと推測している。これらの木々は雑木であるが、実に、植えられていたのである。それに手入れが行われていたということである。これが筆者のいう、自然林である。原生林原始林とは区別しての自然林である。自然林というとき、人の手が加えられているが、その土地に適応した樹種が植えられ、ある程度の手入れがおこなわれてきた樹林のことである。それが自然な状態でということである。さらに、歴史的には幾世代にも渡って森林が造られてきた場所のことである。

そして本稿では、この地の林業という場合に、戦後の杉や檜の植林を別にして考えた。戦後の植林は、地域の伝統的な文化を壊すもので、必ずしもその土地に適合したものとは、認められないからである。

五島列島の一つであり、福江島の隣の島になるが、久賀島を調査したことがあった。その時、生業について、周辺地域の歴史的背景についても多少調べたことがある。その中で生業に関する地域を語る記録を見ることができた。このことから記していく。(注:『久賀島の民俗』立平進　長崎県立美術博物館)

「久賀島は昔、深い森林におおわれていて、樵を業とする人が何人もいたという。」(注：西村次彦)

今でもその当時を物語るように、山地にはたくさんの切り株が残っている。しかし、現代では、森林らしき様子を少しも見ることができないのである。島々が森林におおわれていたという伝承は、今日では、なかなか信じ難いものになっているのが現状である。しかし、このことを証明する歴史的な記録はある。(注：ルイス・フロイス『日本史』)

「シナから日本へ行くと、平戸から海上約四十レグワ離れた所に、五島といういくつかの島がある。この島じまは魚と塩とだけが豊富で、肥後、肥前の両国は、塩や魚油や魚の干物や塩漬けの供給をそこから仰いでいる。そこは豊富な鹿猟の地域で、住民たちはかなり猟に熟練している。」と記されている。さらに、次のようにも記されている。

「殿が住んでいる島はたいそう鬱蒼としていて、猟獣の多い所である。それで、そのために殿もそこに住んでいる。」というのである。

殿の経済的資源は、狩猟とも受け取れる表現である。最初の引用文の中で、「豊富な鹿猟の地域で、住民たちはかなり猟に熟練している。」というところは、少なくとも、現代の状況からは、考えにくい島の様態である。また、「殿が住んでいる島はたいそう鬱蒼としていて、」と記されるのは、森林が発達していたことを示すものである。

その時の樹種が何であったかは、明確ではないが、また今日残る切り株がその当時のものであったのかどうかは明確ではないが、「久賀島が深い森林におおわれていて、樵を業とする人が何人もいた」という、今日の伝承に近いものである。この久賀島の例が、五島列島全域で同じような状態であったのかどうかは確かではないが、筆者はそのように判断したいと思っている。

自然林のスダジイ類の雑木のことであるが、当時の山がどのように利用されていたのかということを示す必要がある。現在、鬱蒼と繁る樫の木などの雑木は、昭和 40 年頃から、現在まで、40 年ほど伐採されることがなかったので、今日のような状態になっているのであるが、それ以前は、確実に計画的に利用されていたのである。

雑木類は、10 年から 10 数年に１回伐採され、薪や炭にして販売されるため、街に積み出されていたのである。その伐採も、雑木であっても、全体の成育状況を見て計画的に行われていたのである。雑木は、10 年以上経てば、伐採した切り口から芽が出て、その「ひこばえ」から成木になるのである。幾つかの山を計画的に伐採しながら、一度に一つの山を全部伐採するような愚行はしなかったのであ

る。水害や山の保全を考えてのことでもあったといえる。

具体的には、薪や炭木に使われていたためである。日本の社会と経済が構造的に変化する、昭和 40 年代から後、薪や炭木はまったく使われなくなったのである。家庭では、薪や炭であった燃料が、ガスから電気に変わり、それにともなって使用器具や機器がすっかり変わってしまったのである。それが都会で始まり普及しただけではなく、田舎まで普及して、伝統的な器具は使おうにも使えなくなってしまったのである。

このような経過と状況が五島列島でも例外なく進行したのであった。

〔シキミの実〕　大正７年に書かれた『北魚目村郷土誌』によると、シキミの実は「当村字江袋の住民、八蔵と乙吉の両名が鰯を長崎支那商に販売していた。偶々、長崎から帰る時に、支那商からハナノミ（樒の実）が必要なことを二人に伝えた。二人は江袋へ戻って住民に伝え、山林に入りシキミを探した所、所々に発見し、採取乾燥後、長崎に搬出した。支那商の商人は大木に歓迎した。当時、一斤を天保銭一枚で買い求め、天保銭二枚に売却していた。年を経て、シキミを繁茂させるため、周辺の雑木を払い、下草を刈り、シキミ林を形成した。江袋と周辺地域において、最初に手をつけ、その収入の多さからシキミの実を採取するものが相次いだ。」という。

江袋や大水が主要な産地で、戦前まで仲買を通じて、長崎から中国方面へ輸出されていた。昭和 29 年（1954）には、37,500kg の生産があったが、昭和 30 年（1955）から需要が減り、昭和 35 年頃からは販売できなくなり、山は荒廃していった。

江袋集落の人々は、シキミ実の収穫時期になると朝４時頃から収穫作業にかかり、６時頃には教会へ行き、朝ミサを授かり、朝食を食べて、再び、シキミ実の収穫作業に戻ったと聞いた。シキミ実を採る時には懐の深い着物を着て、実をそこに入れた。または、腰に竹で編んだ籠を下げて実を入れた。

シキミは一般的にはハナシバとしてお墓用の仏花として使用されているが、カトリック墓地ではハナシバはお墓には飾らないと聞いた。



写真１　てご（このような籠がシキミの実の収穫に使用された。）

〔ツバキの実〕　大正７年に書かれた『北魚目村郷土誌』によると、ツバキの実は「江戸時代よりツバキ実を採取し、油を搾取し、燈台、食物の調理、また、婦人の結髪等に使用された。主として、自家用に使用した。ツバキ実を、乾燥して販売搬出するようになったのは、近代になってからである。ツバキの中には年月を経過した老木もある。また、小字にかたし山（ツバキ実の俗称）、人の姓に椿山という姓もある。これは、古くから地域住民が、椿林を尊重し、経営した証でもある。ツバキは北魚目の至る所に分布し、自然の恩寵に大いに感謝すべきところでもある。」と書かれている。

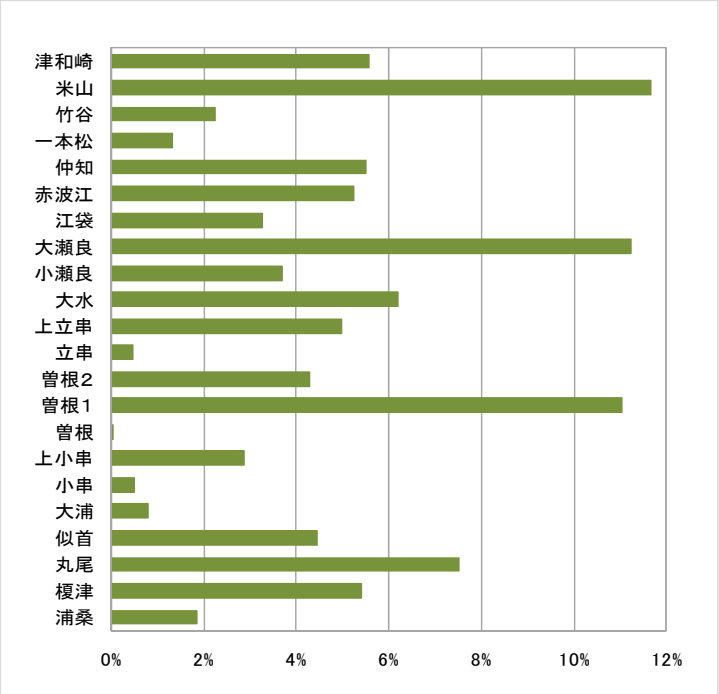


図５　旧新魚目町の地区別ツバキ生産量の割合

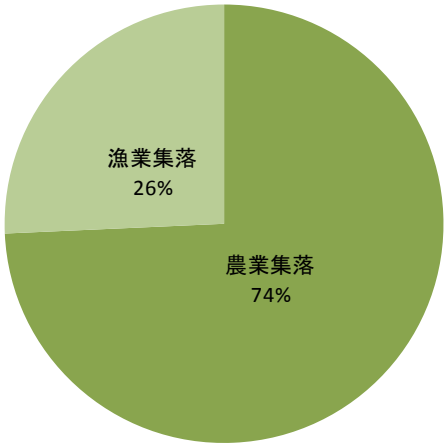


図６　ツバキの実の生産量の集落タイプ別の割合量の割合
（津和崎、立串、曽根、小串、似首、丸尾、榎津、浦桑を漁業集落とした）

図６のように農業集落と漁業集落でのツバキ実の生産量の割合を比較すると農業集落が 74%と高いが、これは農業集落が山手に展開していることによると考える。

表９　集落別林相状況（大正７年発行『北魚目村郷土誌』）

	椹林の見込現面積	椹実数量	価格	椿林の見込現面積	椿実数量	価格
江　袋	36 町 5 段	80, 000 斤	8, 000 円	9 町 5 段	28 石	588 円
仲　知	8 町 9 段	15, 000 斤	1, 500 円	4 町 5 段	9 石	189 円
大　水	7 町	25, 000 斤	2, 500 円	5 町	15 石	315 円
曽　根	28 町	42, 000 斤	4, 200 円	10 町 8 段	27 石	567 円
小　串	25 町	7, 000 斤	700 円	1 町 5 段	3 石	63 円
立　串	25 町	9, 000 斤	900 円	6 町	9 石	189 円
津和崎	—	—	—	9 町	27 石	567 円
計	130 町 4 段	178, 000 斤	17, 800 円	46 町 3 段	118 石	2, 478 円

第２節　漁業

１．中世

『肥前国風土記』の松浦郡値嘉郷の条に書かれた記述には、「海には鮑、螺、鯛、鯖、雑の魚、海藻、海松、雑の海菜あり」とある。

弘安３年（1280）の「百姓等連署起請文」の中で、「網一張を百姓に与へ、又網一張の得分を召す」とあり、同文書のなかで、漁業に関する記述が初見される。「網建漁法」による漁撈が行われ、漁船・漁網等は領主の所有物で、百姓（海夫）等に貸し与えられ操業していたことが窺われ、得分（漁獲物）が定められている。和船（櫓・櫂）は小型船（三丁・五丁櫓）で、帆船も一張帆の帆柱一本の小型船が多く、平時これらの和船が漁船として利用されている。（谷村、2004）

嘉元３年（1305）、「峯貞陳状」のなかに、建長年間（1250）の頃、青方氏の本主である、青方二郎家高（浦部島下沙汰職）が、小値賀島地頭峯持に「御京上」用途費用として、魚 40 隻（箱）を進物として届けられた記事が見える。恐らく塩蔵したものと思われ、魚種等は不明であるが、鰤・鰹の大型の魚であったと思われる。在津百姓（海夫）によって、占業により網建“製塩”に専従され、相当の漁獲高・製塩高（往時は製釜製法）を確保し、塩は漁獲高と平行して確保すべき重要産物で、魚類・獣類（猪肉・鹿肉）等の保存塩蔵物に貴重品であり、五島の領主・土豪層にとっては田畠と同じ経済的にも、大きな基本財産で、海域の網代権（漁場）、魚網・塩屋等は土地と同じ「譲状」で、譲り与えられている（谷村、2004）。

文保２年(1318) ９月 17 日の青方高継譲状案（青方文書、以下同文書）に「うら」とみえ、青方浦（旧上五島町）のうちの地頭職を養子の亀法師丸に譲っているが、その四至のうち北境は「魚目之大道をかきて、うらにふミをとしてゑわけをかきる」というものであった。

数年後に高継が惣領である高直宛の譲状に、「山野をつくり、材木・船木・海草物・すなとり（魚取り）候わんに、惣領勢の限りあるべからず候」とある。13 世紀の頃、すでに造林（林業）も行われ、家材木や造船材の確保に力を入れ、造船業も盛んに行われ、海産物（のり・わかめ・ひじき・あおさ・かじめ・おご等）や貝類（あわび・さざえ）の採取保存も行われていた。列島中でも、小値賀・宇久の両島は貝類・海草類は他の三島より産出量は豊富で、これ等の保存用の加工技術も優れていた。

元享２年（1322）、元享３年（1323）、元徳２年（1328）の譲状には、領内での本主（惣領）と一族（支族）間で漁場の得分、塩屋の得分等が記載されている。領地内の津々浦々の百姓（海夫）等が、本主対支族間（一族）で小競り合いを度々起こしている。

天徳２年（1330）、康永２年（1343）、高継・高直の時代の譲状では、本主対支族間で、「網の得分」から「漁獲物の得分」と変わり、漁場（網代）内の操業は「網一帳」の定めから、操業（網建・網入）の日時の定めと変わり、時代とともに、支族の増加と、漁船の改良、漁網の改造等によって精力的に漁業に力を入れ、漁業の開発が急激に進められ、漁場名が「譲状」で見られ、漁場数も増加して行く。青方本主の支族白魚氏との間でも「塩釜」の一件で紛争等があり、一族間でも度々紛争が絶えなかった（谷村、2004）。

13 世紀後半から 14 世紀前半は、網が固定の場所に立てられたことを示す史料はみられない。青方沖、奈摩付近とその飛地、曽根・矢堅目の地先にも網が張られていたことが窺われる。この時期、上五島の青方付近では田畠等から受ける恩恵は少なく、山野・塩竈等から出る用益権に依存していた。他方、海面の占有は行われず、好漁場に張った網の用益権が所有対象であった（橋村、2009）。

応永年間（1394～1427）になると、青方本主も二十数家を数え、漁場や網曳きの相論も多く、これと平行して網の改良等も進歩している（谷村、2004）。応永７年(1400）には、有河浦（旧有川町）中

の篤ら六人が寄合をもって、江袋のカマス網代のうち浦と二ッ河原の網代は一年交替で引くことを定めているが（同年二月九日篤連署押書状案）、この浦が当地かどうか明らかではない（浦、1991）。

この頃、特に網建・網入等網曳き等の操業工程が決められ、魚種によって日替わり曳き（浮魚類）、小網曳きは十五日交替、鰤・鰹類は一年交替と定め、相論を有川（河）浦中一族が裁定している。また、譲状の内容も、海夫・船党（漁船団・浦々の海夫）、漁船・先祖網（本主の網）、網代等も譲状に明記されて来ている。特に注目されることは、「漁業の相論」には近隣の領主（浦中）の裁定で解決されている。（谷村、2004）

14 世紀中葉から後半には、青方氏・鮎河氏等の分割支配から一揆結合による共同支配が進み、上五島全域で網代をめぐる相論を裁く機能が形成された。永和３年（1377）３月の「青方重置文案」には、「かつをあみ、しひあみ、ゆるかあみ」の記述が見られ、魚名を冠した網が知行の対象となっている。このように、当該期における漁場利用は、網代の誕生により固定化していく様子を知りえる。網代には地名が冠されているので、どこの場所に網が立てられていたのかがわかり、現地比定が可能となる。海の所有は網代の成立で網の用益権から瀬付近の輪番利用による海面所有へと変化する兆しがある。しかし、それはあくまでも漁期に左右されやすく、用益権中心であった。それに対する土地所有は水田農業が定着するにつれて意味を帯びていくことになった。（橋村、2009）

文安２年（1445）、青方氏と松田氏の相論をめぐって当地を拠点とすると考えられる「うら有」を含む 12 名で寄合を行って裁決している（同年 11 月 19 日日向守佐等連署押書状案）。「うらたもつ」は永享５年（1433）、青方氏の所望により高継が所領の一部を堺深（鮎河氏）に売渡した元亨２年（1322）の青方高継、高直連署沽却状を写している（同年閏７月４日有川学等連署添状）。寛正３年（1462）に「浦大隈守」は青方氏・松田氏・長田氏・鮎河氏とともに寄合い、取決めを行っている（同年 3 月 10 日青方頼等連署押書状案）。当地にある数基の室町期の五輪塔は浦氏墳墓とされる。

14 世紀末期から 15 世紀前期の当地における海面の権利と利用をめぐる特筆事項としては、「固定漁業」として存在していた網代が、番立網代へと変化していったこと、そして、網代漁業とは別の形態の漁業として「うきうおこあみ」漁が始まったことが挙げられる。後者は網代の権利を得て集まる魚を持って捕獲する形態とは異なる、「うきうお」、すなわち回遊魚を追って獲る漁業形態ではないか、と思われる。つまり、網代漁にみられる固定漁業の形とは異なる漁業として展開していたことを推測できる。（橋村、2009）

２．近世

貞享５年（1688）の魚目浦絵図（事代主神社蔵）によれば、浦に網 15 張があり、所務運上銀五貫五百匁（一張は 15 石に相当）で、ほかに浜百姓の運上を合せて、６貫 960 匁を上納していた。「網一帖と申すは、先規により高に結び 15 石」に相当するという（「浦絵図添書」五島魚目郷土史）この 15 張は魚目浦の古来の由緒がある加徳 15 人（川崎家・西村家・浦家）の網組合が所持するものと考えられ、鮪・海豚・・・鰯・鰤などをとっていた（「旧来網代関係原由書」同書）。

一加徳は高に換算すると 15 石といわれ、別に網田といって田２反歩（約 20a）が付属することもあった。これは、代々家督として世襲的な権利であり、典型的な封建的階層的体制をなしていたのであり、定置網、鰤建網のすべてはこれら加徳士の持分でもあった（浦、1991）。網加徳とは漁業権のことで、領主より知行の一部として魚目在住の郷士に与えられた。

享保年間（1716～1735）には、敷網が用いられるようになり、網加徳の性格が変わる。加徳士で加徳団という団体を結成し、相談の上で、抽選や輪番制をもって経営する方法をとった。これらの加徳士は自ら網主となり、一般の浜百姓は所属の網子となって主従関係が結ばれ、これらは他面の主従関

係と何等変わるところがなかった。

捕鯨で有川に後れをとった魚目では享保９年（1724）長門国湯玉（現山口県豊浦町）から鮪大敷網漁の技術を導入、当時 15 帖あった加徳網（福江藩から付与されていた漁業権）も鮪敷網に替え、幕末期の加徳網は 19 帖で、五島を代表する漁業となった（同書）。寛政 11 年（1799）、魚之目浦に宮崎喜兵衛の鯨組があり、網数は６結組（土佐室戸浮津組捕鯨史料）。

〔捕鯨〕　江戸時代には有川湾では捕鯨が盛んに行われた。魚目村持には８組、有川村持には 10 組の舫いがあったが、それらは紀州の人々が行ったか、あるいは、紀州の人と地元の人が舫いを組んで行われた。貞享５年（1688）、江戸幕府の評定所での江口甚右衛門の口述には、寛永３年（1626）から寛文２年（1662）までに有川・魚目にあった突組について、次のように書かれている。

有川之内の罷在る鯨突き数の覚、
一、紀州湯浅之庄助、有川船津に居る。
一、同国こざの三郎太郎、有川名主甚左衛門もやい、同所（海口浜）に居る。
一、同国藤代の角右衛門、同所に居る。
一、同国広の又左衛門、福江の太郎左衛門、唐津九郎右衛門もやい、同所に居る。
一、同湯浅の平次、同所後浜に居る。
一、同湯浅の文之丞、同所立石村に居る。
一、長崎の惣左衛門、同所の内赤尾村に居る。
一、大村の先の義太夫、同所の内頭ヶ島に居る。
一、宇久の勝太夫、同所内に居る。
一、紀州の藤六、同所の内友住村に居る。
鯨突組合拾組
右分地以前は有川六ヶ村之内に罷り有り候、百姓共渡世をいとなみ申し候。
外、小河原村前、新鯨網代
平串之間、同断

魚ノ目之内に罷在鯨突数之覚
一、紀州湯浅之五兵衛、魚ノ目内榎津に居る。
一、同国こざの六右衛門、同所内桑ノ木浦に居る。
一、同国湯浅の庄助、同所の内似首に居る。
一、同国同所の弥十郎、同所に居る。
一、同国同所甚五兵衛、同所内小串村に居る。
一、同国藤代の久左衛門、同所立串村に居る。
一、同国湯浅の久右衛門、同所内大浦に居る。
一、魚ノ目之名主助太夫、同所之庄太夫、有川の利右衛門、奈留の七右衛門もやい、同所の内榎津村に居る。
鯨突組数合八組
右分地以前は魚ノ目五ヶ村に罷り有り、百姓共渡世をいとなみ申し候。
外、小串村前、新鯨網代
似首村前、同断
風ノ浦前、同断

右の通り、有川之百姓共、御掟之海上役并に地下人、旅人によらず諸仕伝候段佗（他）迄も其隠し御座無候。



図１　魚目浦絵図（魚目村）（事代主神社所蔵）



図２　有川湾浦絵図（有川村）
（新上五島町鯨賓館ミュージアム所蔵）

とあり、紀州から鯨漁をする人々が移住して来たこと、頭ヶ島には大村の義太夫や宇久の勝太夫が居たことがわかる。

また、紀州からは、慶長初年頃に鰹釣りのため、紀州有田郡広浦の漁師が奈良尾に移住している。紀州から移住してきた由緒を持つ魚目地域の家は、外に紀州湯川村の出である似首の湯川家、紀州佐野浦付近から移住した青方の道津家、漁業移住した法村家などがある。奈摩の田坂家も慶長から寛永年間（1595～1623）に紀州の船乗り兄弟二人が移住してきたと言われている。法村家は大曾浦にて漁業に従事。大曾には長崎県指定天然記念物の「五島青方のウバメガシ」がある。これは、紀州より移住するに当たり、漁船具・漁網染料に利用すべく移植した原木で周辺にも種子により繁茂している。道津家は初代九郎兵衛の時、藩主（富江五島氏）に献納あって、網加徳となる。浜ノ浦の伊藤家は16世紀末に平戸より移住して来たと推測され、正徳元年（1711）には、鮪網代の発見から次々と漁場を開拓している（2004、郷土誌）。

筑前からは立串の小倉家が明和年間(1764～1771)に移住し、漁業や漁商を営み、榎津に移住した設楽家は二代目から鮪網代を営み、三代目の時に網加徳を獲得している。

若松島の日ノ島や漁生浦には､淡路、讃岐及び長州の漁民が移住し、又家船が居付いたという。

上五島の主だった家の由緒からも紀州や筑前からの移住者がいたことがわかる。上五島全域に、漁業を中心とした、多くの移住者がいた。

寛文元年（1661）７月、富江領分知の知行割が始められ、翌２年に完了した。有川村は五島藩福江領となり、魚目村は青方村等と共に五島藩富江領に編入された。魚目村と有川村は有川湾を挟んで南北に対する漁村となったため、有川湾での漁業権を争い、貞享３年(1686) ２月、有川側が江戸出訴を決議し、江戸評定所において有川側 14 名、魚目側 12 名を尋問吟味の上、元禄２年（1689）に評定所

より裁決が下された。裁決は、「磯猟は地附次第、沖は入会」となった。漁事の際に争論にならないため、有川、魚目の間で便宜上の海境を設定することに話合いがまとまった。有川側の記録によると、内証境は、「両浦二つ割　沖は継子瀬限り　海上見渡等は生月馬の頭より竹の子島白岩見渡し」と決めたとしている。

明治 17 年に、五島捕鯨株式会社が設立され、唐津の川原又蔵が社長となった。明治 23 年（1890）、当時、五島捕鯨株式会社が有川村・魚ノ目村沖を漁場としていたが、大正初年に途絶えている。

明治 42 年には、東洋捕鯨株式会社の事業所が有川に置かれる。昭和 10 年から昭和 11 年にかけて、南氷洋捕鯨が試験的に行われ、遠洋捕鯨の時代となった。しかし、戦争が始まり、捕鯨船は徴用され、捕鯨は一時中断した。戦後、食糧難になっていた日本の食料となったのが鯨である。捕鯨は昭和 21 年から再開され、昭和 20 年代後半から昭和 30 年代にかけてピークを迎える。町内からは 600 人以上の捕鯨従事者を出した。昭和 57 年（1982）、国際捕鯨委員会によりモラトリアム（一時停止）が採択され、昭和 60 年（1985）商業捕鯨は全面的に一時停止された。現在は調査捕鯨のみを行っている。

〔鮪漁業〕　上五島に関する記録の中で、「しびあみ」の記述が始めて出てくるのは、青方文書の永和３年（1377）３月の「青方重置文案」の譲状の中に、「かつをあみ、しひあみ、ゆるかあみ」である。

享保９年（1724）長門の豊浦郡湯玉から大敷網が導入され、小串の中野太治平が小串前鮪網代に鮪大敷を敷き入れ、豊漁であったため、翌 10 年（1725）に、似頸二番鮪網代にも鮪大敷を敷き入れ、成功を納めた。その後、宝暦７年（1757）まで、八ヶ所の鮪網代を見立てる程、大盛況だった。湯玉式大敷網は独特の発展を遂げ、「五島敷」と呼ばれる主に鮪を取るための大型の大敷網となった。明治７年に書かれた「旧来網代関係」によると加徳が経営している網代は 19 網代となっている。この漁は昭和 15 年まで続いた。

〔鰤漁業〕　鰤漁業としては、明治 40 年、似頸の人、湯川岩太郎が宮崎県東臼杵郡伊形村の漁業家で、日高式の発見者である日高亀市及び栄三郎親子と共同経営で鰤大敷網を四番、小島に創設するまでは、鰤建網及び鰤延縄によって行われていた。明治 23 年刊行の漁業誌長崎県編も「鰤漁業には二種類あり、一つを釣漁業とし、一つを建網漁とす。管内各郡中北高来郡を除き、皆此の漁業なり」とある。

鰤大敷網の創設でその成功に力を得た日高親子は明治 43 年に日高式鰤大謀網を発明し、これを翌 44 年には敷き入れた。従来、鰤建網による漁獲はわずかであったのに比べ、大謀網漁は一網数千、数万尾という飛躍的な漁獲をし、当時の水揚の年平均は五、六万円にのぼったと云われている。

鰤延縄漁は津和崎地区で盛んに行われ、一時は数十万斤にのぼる漁獲を見たが、鰤大謀網の敷設以来、全くの不漁となった。

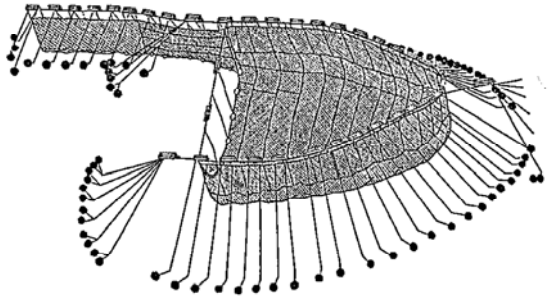


図３　大敷網見取図

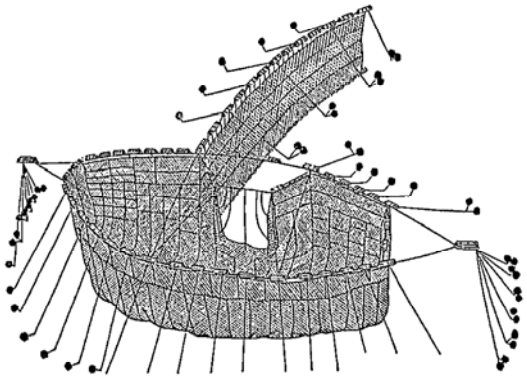


図４　大謀網見取図

大謀網漁法は、網の大部分が麻網を用いて製作されていたから、その経費も多額を要した。個人での経営は中々不可能とされ、漁船、漁網及び労働力の調達のため、資産があり、しかも社会的力のある郷士階級（代官、庄屋、小頭等村の支配階級の家々）が網主となり浦人を所属の網子として漁業を営んだ。

先述の湯玉式大敷網が五島に導入され、独特の発達をとげ、五島敷と呼ばれるようになったが、この五島敷の特色は鮪を捕るのが主で、大形だった。湯玉式のような魚捕部の袋網がなく、最奥部は藁の織網で、それに続いて三寸目、四寸目、五寸目、一尺目等と次第に目の粗い網がついている。魚見の指図に従い、魚群が入れば入口に石を投げたり網を建て切り、麻製の格子網を入れて漁獲するのである。これを更に改良したのが大謀網型である。昭和に入り綿糸漁網の発達で、網型も次々と改革され、鰤を主体とする大謀網型から雑漁をも併せ獲る台網型、落網型、壷網型等が開発され、最近になり金沢式二段箱網型と進歩し、小はキビナから大は鯨まで漁獲できる網型になった。漁獲は年々減少したが、ここ数年大羽鰮が豊漁を見せている。鰤の群は数年に一回くらいしか来遊しなくなった。それで台頭したのが「ハマチ」の養殖漁業である。

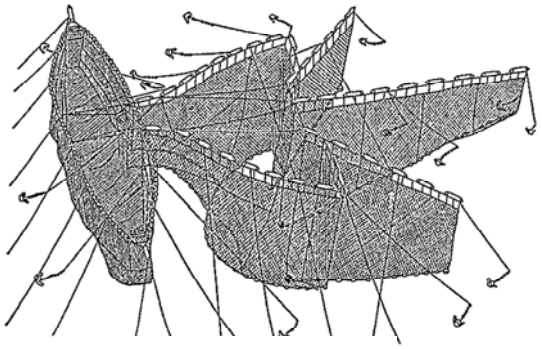


図５　落網見取図

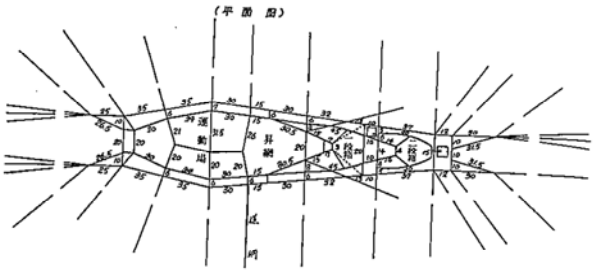


図６　二重箱網を持った定置網（金沢式）

明治 43 年、大阪の内外水産株式会社が立串前に大敷網を敷き、また、明治 44 年には日高、湯川組が立串に鰤大敷を敷き好成績を収め、大正 2 年には湯川、柴田得次郎組が立串に、大正元年には土佐の杉本嘉吉が小瀬良に鰤大敷を敷設経営したが、何れも失敗している。（郷土誌，1986）

〔●（しいら）漁業と飛魚漁業〕　「しいら」は網加徳の付属権利として認められていたため、かなり古く、富江、五島家所蔵の浦絵図面（貞享５年（1688）、魚目、有川の海境争いに使用された）の文中に次の記録がある。「昔より、此浦案中より内を 48 丁四方と積り●網場壱帖宛と見合に相定め候。是は網の縦横為無御産候と申伝候て今以って、網場見合に案中より内には浮竹仕置候を拾五艘の船に弐百七拾人程乗組、之●網漁仕り候、●は風下に乗る魚にて此浦北向故北風吹き候を相待ち浦へ入り候を取り申し候、西風には別而有川べたに●寄り候を古くより取り来たり候、此網拾五帖に相定まり壱帖より運上金八拾匁宛先規より御地頭様へ相納め来り申候」

しいらは、しいら潟と云って、長さ二間から三間位の松の木等の主幹を孟宗竹数本で巻き、これを網でくくり縄綱を結び垂らして●の集まる所に碇で浮かせ、前記の船及び人数で網を建廻して漁獲する漁法である。その後、しいら潟から諸（両）手網に改良され、●の群を見つけて追いかけ、手早く網を海中に投じながら左右に別れ網を張って包囲し漁獲した。その後更に研究され、網、船共に改良されて片手廻しになり、一艘で行うようになった。この●網の副産物として飛魚（アゴという）が獲れた。●漁の衰微もあって飛魚漁の方に重点を置くようになった。

旧記によると、魚目浦中で●漁の草分けは、堀切村（現在の西股）の川崎助左衛門と言われているが、享和３年（1803）には、似頸の湯川重兵衛が●の片手網を始めているところから、この頃にはすでに諸手網から片手網に移行していることがわかる。これが俗に言う「ヒワン」又は「ヒワーン」で船形が細長く、船足は早い。五丁艪建ての特長のある形をした船の元祖である。この頃は●と同時に飛魚漁も盛んに行われた。

この漁業は昭和に入り飛魚漁が主体となり、改良に改良が重ねられ、昭和 22 年には道網を使用し、更には小型動力船を補助船に使用し、多い時には一網万斤を数える漁獲を見るようになり、終戦前は一漁期中に一艘で二万斤も水揚すれば上位の船であったが、漁獲は大幅に増加した。

この漁法は昭和 52 年まで続けられたが、労力不足（一組で、網船一、動力船二、漁夫 15 人）のため次々に減っていった。これに代り登場したのが動力船二隻による二艘びき漁法、すなわち機船船びき網漁業（人員３～４人）で、昭和 53 年からこの漁法が導入され、56 年にはすべてこの漁法になり、六ヵ統が着業した。飛魚漁は好不漁の差が著しいが船びき網の操業により増加傾向を示している。（郷土誌、1986）

〔鰯漁業〕　古来より、いわしの漁獲はいわし網といった専門の網漁法はなく、有川湾では鮪網か地びき網で行われていたようである。

天明の頃、柴田家六代、六左衛門が初めて鰯網（八田網）を経営したが、湾内の鮪網に支障があると藩主より禁止され、長い間中断した。明治 26 年に榎津の小野徳太郎が千葉県夷隅郡の漁業家、池田源蔵を招き、立串を根拠に共同で鰯巾着網を創業して良好な成績を収め、次第にこの漁法を営むものが多くなった。

その後、西彼杵郡瀬戸村の山道栄吉、楠本清次郎等が曽根郷赤崎で西海の縫切網を使用して鰯漁を始めると、同地方及び天草地方より入漁するものが十数統に及び、盛況を極めた。明治 42 年頃から不漁となり、漁場は東の海に移り、小串、立串が盛んになった。

その後、網漁業も種々改良がなされ、湾内では、巾着網の外に縫切網、八田網、四艘張網等が興り、後に改良揚（まき）操業が出たが、昭和 16 年以来、大羽鰯の来遊が途絶えた。有川湾では専ら定置漁業で漁獲がなされ、沖合での流刺網も衰微して行ったが、定置網の周囲で行われた小建刺網が一時的に好成績を上げた。

戦後各地で中型まき網が計画されたが、倒産する業者も多く出た。その後、大型化が進み、漁場も近海から遠洋へと移り、漁獲物も鰯から鯵、鯖、鰆等が主体となり現在に至っているが、魚族は減りつつある。本町の場合、小串に中型まき網が一統操業している。

昭和 52 年、突如として大羽鰯が来遊し、湾内は何十年ぶりに鰯の大漁に湧いた。しかし、価格の暴落に会い、放棄する網さえ出た。その大半は養殖漁業の餌として処理され、現在も続いている。昭和 60 年になり、魚体選別機を導入し、鰯を大小選別して販売するようになった。（新魚目町郷土誌、1986）

若松には、貞享元年（1684）、明石助九郎が若松に来て、佐尾でイワシ網を始めたのが五島でのイワシ網のおこりである。この網がどのような網で、どこから来たのかわからないが、古文書には佐尾イワシ網初発の次第とあり、五島藩に佐尾でのイワシ網営業を申請した記録である。同年、許可されている。

このように、江戸時代から明治の初期にかけて、本県イワシの大宗として盛んに行われた。

明治初期には、本県で行われたイワシ漁業は、八田網の他、縫切網・地曳網・片手地曳網・小イワシ地曳網等があり、八田網は海上で漁撈するもので、網船２艘各 15 人乗り、口船２艘各 10 人乗りが一団となり、５艘一組で操業するもので、漁場に到着すれば火船を中央に置いて、船頭の合図により網船の網を順々に海中に落とし入れながら左右に漕ぎ分け、次第に円形に漕ぎ寄せたところで、網底

をしぼり、網をくり縮めて魚をすくいとる方法であった。

その後、明治 17～18 年頃から縫切網に改められ、これは八田網より進歩した改良網で、一名焚入網ともいわれた。操業の方法も大分改善され、大正の初年まで全盛をきわめた。

これに代わったのが巾着網で、明治末年から県下に輸入され、大正７～８年頃は縫切網を圧倒した。

巾着網とほとんど時を同じくして改良揚操網が起り、この新漁法漁業は魚群を求めて、随時随処で、操業出来る漁法で、従来の漁業に対してはるかに漁獲高も多く、経営も一層合理的に行うことができることから、圧倒的に有力となった。更に動力化と大規模化が進み、戦後の揚操網の全盛時代を迎えたのである。

現在の改良揚操網が出現したのは、昭和２年、岩瀬浦で行われたのが最初で、この地方でのそもそもの初めは八田網だった。その後、明治 15 年に縫切網が、次いで、明治 26 年、双手巾着網が千葉県から導入され、昭和２年、現在の巾着片手廻網がこれに代わり、以来、改良を重ね、近代化され、揚操網の実現となり、積極的な操業によって飛躍的に発展した。終戦後の食糧増産振興のための保護政策と、更に国内全般のイワシの不漁を尻目に、五島近海では格別の豊漁に恵まれ、いわゆるイワシ王国を築きあげたのである。その頃、揚操網漁業への希望者は多く、県は資源濫獲防止の対策として、揚操網漁業の許可について制限したほどである。

このような揚操網漁業の動向から、乗組漁夫は不足し、町外から雇い入れねばならなくなり、町の人口は急激に増加した。また、港は遠く大阪、四国方面からの鮮魚船でにぎわい、陸では煮干製造の素台がところせましと並べられ、道路は人も通れない程の活況ぶりであった。

しかし、この隆盛も長くは続かず、昭和 25～26 年頃からこれまでの濫獲が資源の枯渇をまねき、衰退の一途をたどり、倒産する者が相次いだ（新魚目町郷土誌、1986）。

〔いるか漁業〕　いるか漁業は、最も古くから行われた。「ゆるかあみ」の名前が初めて現れるのは永和３年（1377）の青方文書の中であり、この網は建切網と考えられる。その後、この網で鯨を捕ることが延宝７年（1678）以前から行われている。

魚目村には、鮪と●の網代十数箇所の外に、いるかを捕る大網代があった。建廻網、張切網、格子網の補助網を使用して捕る方法であったようである。これは魚目、有川の海境問題が起こり、元禄２年２月 12 日（1689）に幕府の裁決があるまで魚目の独占漁業であったが、裁決後は有川が同等の権利を与えられたことによって、以後は現在のような共同経営になった。

安政３年(1856) ６月 26 日のいるか追い込みに関する文書（榎津浦母屋文書）によると、同日浦桑湾に入道、羽勢入鹿を追い入れる。当初、百二、三拾本と見立て、藩役人が来るのを待って、二十八日から三十日までに計五百七拾本の水揚げがあり、このうち百八拾四本を九拾二本ずつ有川と浜分けした記録がある。

以来現在に至るまでいるか漁は続けられて来たが、最近になり鯨は勿論いるかの捕獲について、動物愛護の面から、アメリカを始め外国から苦情が出ている。

現行の配分率は次のとおり

有　川　　４割

魚目、北魚目　６割（魚目 5.5、北魚目 4.5）

（新魚目町郷土誌、1986）

〔鮞（かます）漁業〕　この漁業は、立串柴田家６代目六左衛門の創業で、漁場は主に立串後浜であった。六左衛門は寛保３年（1743）２月、藩主に出願して、同年 10 月、漁業の許可を受け、以来、柴

田家の漁業として一族を主体に代々継続されて来た。文政５年（1822)、八代、十次兵衛の時、網に改良を加え、一層の漁獲をあげた。戦前数年間続けられたが魚の減少とその他種々の事情で廃業した。（新魚目町郷土誌、1986）

〔キビナ漁業〕　若松瀬戸は早くからまれにみるキビナの好漁場だった。天和２年（1682)、若松瀬戸の激流が岬に衝突して逆流する海岸の浅い海中にキビナが泳ぎ通るように袖石垣を築き、その上に竹または柴木（枝に葉が付いたままの雑木）の垣で水道をつくり、その中に泳ぎ入るキビナを大タビですくい取る漁法である。漁季は陰暦 11 月から翌年３月まで、毎月１日より５日まで、15 日より 19 日までの夜明けの漁業である。漁法は１艘２人乗りが午前４時から築場に船をつなぎとめ、潮流に向かい築口にタビをあてキビナの泳入をみて、二人で力を合わせてタビを船中にすくい上げる。この漁法を何回も繰り返すのである。そして、明るくなると、キビナが泳がないので、午前６時にはやめなければならない。

忠左衛門は、後に五島藩主から、この地域漁場での築場の権利を与えられている。

宿ノ浦にもあちこちに漁場があったことが天明２年（1782）の古文書に見えている。また、これとは別に目掛網や小規模の地曳網があった。このキビナ地曳網の権利は宿ノ浦と若松にだけ許されていた。宿ノ浦は中通島側の海岸を、若松は若松側の海岸を操業した。

ところが、周囲の部落（多くは釜百姓の部落）でもキビナを目掛網やヘントコ網でとるようになってきた。ヘントコ網というのは、伝馬船２艘で、３～４人乗って、船曳きする方法で、これは昼間網代に関係なく操業できる漁業である。

地曳網は、夜間湾内に入って来るキビナが、定められた網代前に来るのをまって、用意した２艘の網船に、ミト樽（網全体の中心に取付た樽）を境に積み分けた網を、船頭の指図で両船のもやいを解き、網船を左右に漕ぎ分けながら網を漸次海中に落し入れ、曳揚場に漕ぎ付け、両方の網の末端から順次曳き揚げる漁法である。このキビナ地曳網は月夜でなければ出来なかった。若松と宿ノ浦以外の部落がこのキビナ漁業を行うようになって両者はしばしば対立し、争いが多くなり、やがて周囲の部落の勢力が少しずつ強くなり、紛争をかもし、協議の結果、協定契約が交わされ、キビナ漁業は村内各部落で行われるようになった。明治 41 年若松では佐賀県唐津の人、磯口利太郎を招き、一張数千円の大規模の地曳網を仕立てて大漁したので、各部落共に拡張した（新魚目町郷土誌、1986)。

３．近代

明治３年に諸業株式廃止の令が出るに至り、これに類する加徳団がこれまで通り漁業権を独占することは不当であり、これらは村中人民平等の所有に帰すべきであるとして、其年の冬、網漁業を浦人との平等稼ぎとして経営したのであるが、これが数年に渉る紛争の発端となった。これは従前の封建的な漁業制度を打破しようとする浦人民一同と、これを維持しようとする加徳団との抗争が表面化したのである。明治３年に始まったこの紛争は、再三に渉る県の処置が加徳士例の主張を支持したため、明治８年 10 月 15 日浦人は遂に長崎県令宮川房之を相手どり長崎上等裁判所に告訴したのであるが、この裁判の審理中、即ち明治８年 12 月９日付大政官布告（195 号）による次の海面官有宣言が出された。

捕魚採藻為海面所有之件

一、従来人民に於て、海面を区別し、捕魚採藻等の為、所有致居候者も有、之候処、右は固より官有にして本年二月第二十三号布告以後は所用の権無之候条従前の通り、所用致度者は前文布告但書に準じ借用の儀其管轄庁へ可願出此旨布告候事。

これによって裁判長は訴訟を却下し、新たに県へ出願すべきであるとした。しかし、その後も県は加徳団に免許を許可した。浦人総代松園貫一・小野慶太郎の両名は、明治７年４月６日と同年７月 27 日に上京、内務郷大久保利通へ鮪網漁業伺書を提出し、認可の請願をしたが、よい結果は得られなかった。

明治 12 年になり、加徳士総代２名に対し、県より出頭命令があり、「これより加徳士 15 名にて二分の一、浦方（村民）二分の一の割合にて共同稼ぎとすべし」との申し渡しがあった。こうして、明治３年に始まった漁業権紛争も約９ヵ年の歳月を経て、明治 12 年に一応解決を見たのである。

その後、明治 34 年４月 14 日公布された法律第 34 号漁業法（明治漁業法）で明治 41 年７月、漁業組合が設立され、これ迄の浦人共有の漁業権は漁業組合に移り、漁業組合と加徳士との共有となった。

このようにして保たれてきた漁業権も、支那事変の拡大に伴い諸物資が統制され、漁業経営も年々窮屈さを増していた。昭和 16 年、組合員の強い要望もあり、県の強い指導で三百有余年の歴史をもつ加徳もついに漁業権を全面的に漁業組合へ譲渡することになり、加徳士・加徳団の名称も永遠に消滅し、歴史の一コマに残るのみとなった。

昭和 16 年、魚目・北魚目に漁民の出資で漁業共同経営団が組織され、定置漁業権は全面的に漁民の手に移り、終戦後の漁業法改正まで続けられた。昭和初期から昭和 20 年頃まで、鮪、鰤、烏賊の漁場に恵まれた丸尾漁港のほか、榎津港、津和崎港、似首漁港・小串漁港・立串漁港・仲知漁港・一本松漁港などがあり、かつての大型定置網や刺網・一本釣の諸漁の賑いは失われたものの、現代に至るまで漁業は町の基幹産業で、近年の漁獲量では真鰯、烏賊類・とびうお類・真鯵・さんまなどが上位を占める。また、定置網のほか、漁礁・藻場、および築磯の造成によって資源を保護し、養殖型漁業に力を入れている。

昭和 24 年 12 月 15 日、法律第 267 号によって、現行の漁業法に改正され、同 25 年３月 14 日から一斉に漁業権の切換えが行われた。北魚目漁業共同経営団は、漁業権をめぐり小串郷と立串郷の間で話がこじれ、免許申請が遅れたが、結局従前どおり両方共同で経営することで決着がついた。昭和 35 年には曽根江袋にも部落民の出資で江袋漁業経営団が組織され、五定一号外小型定置三漁場の定置網を経営するようになった。魚目・北魚目の両経営団は漁期中、佐世保魚市場に駐在員を置いて販路拡張に努めたが、北魚目の場合、経営不振が続き、昭和 38 年、解散に追い込まれ、漁業経営権一切は北魚目第一漁業協同組合が引き受け、組合の直営事業となった。一方、魚目・江袋の共同経営団も一進一退を続けながら今日まで継続されているが、その内容は必ずしも安定経営ではない。漁撈従事者の不足と老齢化が進む中で、操業の機械化・漁夫の削減・網型の改良・並びに流通機構の改善等経営の合理化が図られているが、定置漁業の経営は年々苦しくなりつつある（新魚目町郷土誌、1986）。

日本列島の海に関わる人々は江戸時代頃から水産資源を有限なものとみなしていた可能性がある。人々がそう思い始めた段階で漁業権がより明確に認識されたのかもしれない。それは中世後期から若狭や五島で顕著に、しかもいろいろな形でみられ始めた。五島では国人領主が主体となってポイントの権利としての網代がみられ、その後に海面分割を要する「うきうお」漁業がみられ、面的な権利が芽生えた。天草での権利は中世末期の天草二十ニ浦もあるが、水主（舸子）浦として特定の海付き村に漁業権と海面が付与されたのは 17 世紀の正保期である。これらは、水産資源の有限性を意識しての設定ともいうことができるかもしれない。日本的な村のコミュニティをベースにした漁業権は、網代などの様々な漁業権の形成を経たなかで、政治的な意味合いと、水産資源を維持する思想、考え方の落し所というところで到達した賜物だと推測される。

一方で、五島では中世に国人領主の持つ網代が形成され、中世末期から近世初期にかけての捕鯨組、大敷網漁業などのような規模の大きな漁業が展開した。この漁業の主は、網代や加徳にあるように郷

士や村の有力者、商人などであり、天草にみられるように個人主体であった。それは、中世以来の網代権が加徳として継続していたことと関係するのである。漁場の権利は時系列的な展開の中で変動が著しく、漁業の様々な面、すなわち「村共同体的漁場」や「党的集団（松浦党）や移動漁業者の漁場」などの複雑な要素が絡むことを特徴としている。また五島の好漁場という自然地理的な特性もあった。

そのため、沖漁業は研究対象として十分に扱われてこなかった。また、中世的漁業の残る地域や辺境地域の漁業は後進的ととらえていた。本稿で扱った五島列島は中世的漁業の残る地域で市場からも遠く辺境地域とされるが、視点をかえると漁業の先進地域であったのである。

五島と天草は、同じ海域で隣接していながら漁場利用、漁業権のあり方に相当な違いがあった。その背景には、封建制の強弱などの政治・経済の要素のみならず、漁法の展開、漁場用益の慣行（資源管理）、魚の回遊する環境の違いもあったと想定される。（橋村、2009）

４．統計資料による現況

新上五島町の漁業現況については、港勢調査および漁業センサスのデータによってまとめられた町水産課の資料をもとに統計を行った。

（１）漁業従事者の推移

図１のように、新上五島町域の総人口は約 25 年間に 40%ほど減少している。それに伴い、漁業従事者も概ね半減している。

図２の人口構成をみると、高齢者人口が非常に多いことが確認できる。詳しく見てみると、総人口の構成は、低い年齢階級から 40 歳代前半までは大きな差はない。40 歳代前半以下の人口が安定的である傾向が確認できる。一方で、漁業従事者人口構成は、40 歳代前半以下の年齢についても年齢階級が低くなるにしたがって、少なくなっていく傾向にある。この傾向は、旧新魚目町域でも顕著に認められる。

これらの傾向をまとめると、新上五島町域の総人口の減少以上に、漁業従事者の人口比率も下がっている。さらに、高齢化傾向は、漁業従事者において著しく、新魚目町域でもその傾向が顕著である。

（２）新上五島町における漁獲量の近況

図３をみると、新上五島町域における漁獲量はこの 15 年ほどの間、減少傾向にある。海面漁業ではその傾向が著しく、概ね最盛期の 3 分の 1 に減少している。一方で、海面養殖漁業の減少程度は海面漁業に比べて減少の程度が緩やかである。

（３）海面養殖漁業について

図４をみると、顕著な傾向として旧若松町域、そして旧上五島町域において、漁獲量における養殖漁業の占める割合がこの 10 年で高くなっている傾向が読み取れる。

相対的なデータであるので、漁獲量の全体的な減少傾向から見ると、単純に養殖漁業での漁獲量の増加と見ることはできない。しかしながら、全体的な漁獲量の減少の中で、旧若松町や上五島町域の漁業が、養殖漁業へ依存していく過程が読み取れるだろう。

（４）新上五島町の総漁獲量における水産物構成の推移

図７をみると、魚類の占める割合は常に高いが、この 15 年の間にイカ類、ウニ類、エビ類、タコ類、ナマコ類などの水産動物の占める割合が 1990 年代末葉以降に漸増する傾向が認められる。

この傾向から考えると、沿岸漁業への緩やかな依存傾向が推測される。

（５）海面漁業の漁法からみた旧自治体域の漁業の推移

図５と図６では、1993 年と 2003 年の、旧自治体単位での漁法の構成を示した。これらの２つの図から傾向を読み取ってみる。

- 新上五島町域の漁獲量の大半は遠洋海面漁業である大中型巻き網漁で占められる。
- 上記の傾向は、旧奈良尾町域の新上五島町域において漁獲量が著しく多いことに起因する。
- 1990 年代には旧新魚目町域を除き大中型巻き網漁が盛んであったが、2000 年代に入ると旧奈良尾町と旧有川町のみになる。
- 1990 年代には盛んであったあぐり網漁が 2000 年代に入ると、旧新魚目町域のみに残る傾向が認められる。
- 旧新魚目町と旧有川町では、定置網漁が常に高い割合を占め、旧新魚目町ではその傾向が著しい。旧両町域では沿岸海面漁業が盛んである傾向が読み取れる。

出典　「上五島の文化的景観」―保存調査報告書（基礎資料編）―　2010 年発行

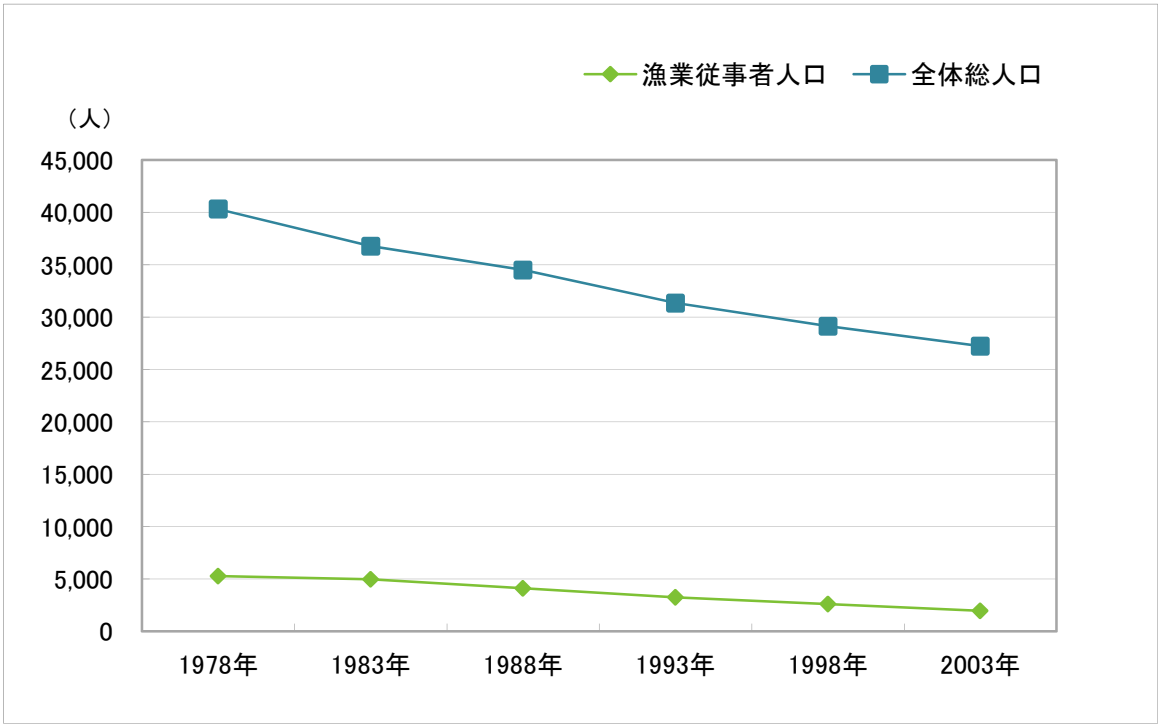


図１　新上五島町域の総人口と漁業従事者人口の推移

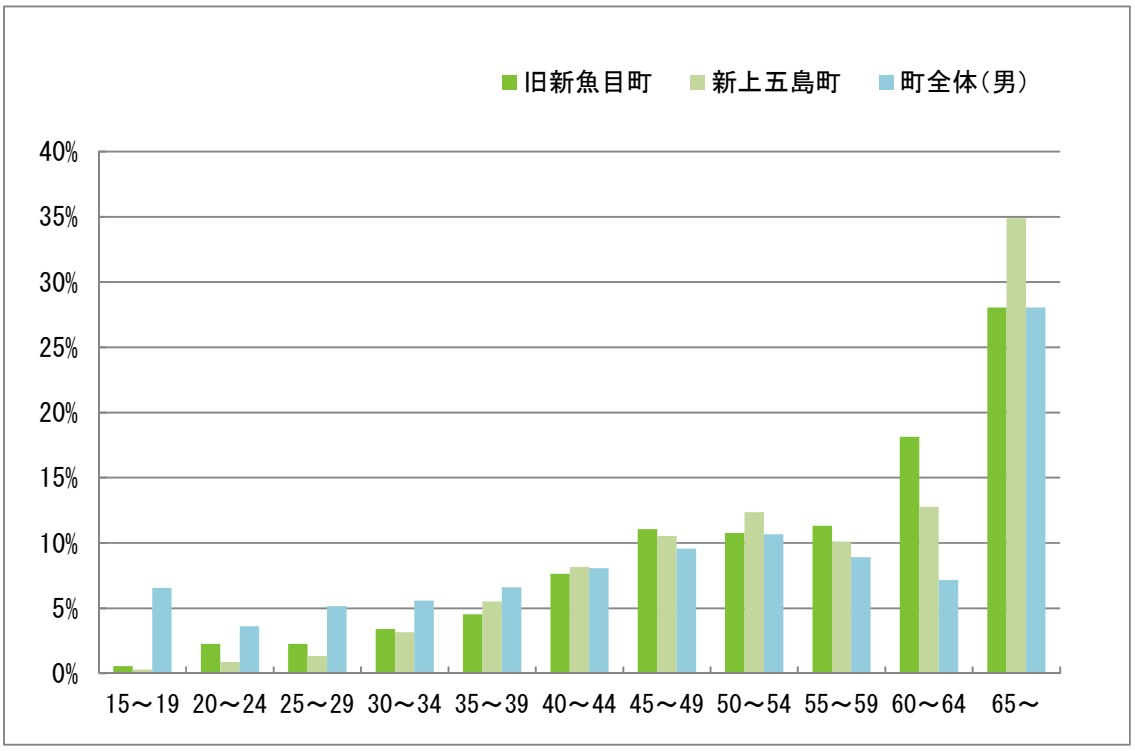


図２　新上五島町域総人口およびその中の漁業従事者、旧新魚目町域の漁業従事者の年齢構成比

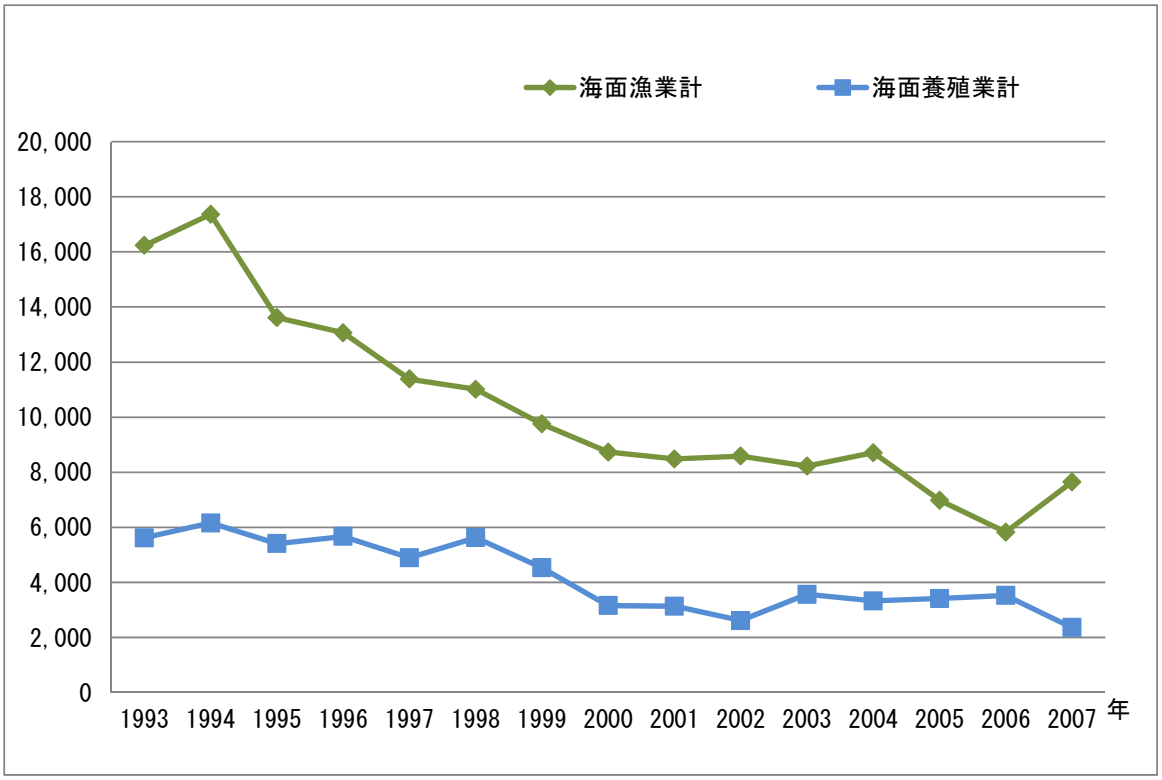


図３　新上五島町域の総漁獲量の推移（属地）

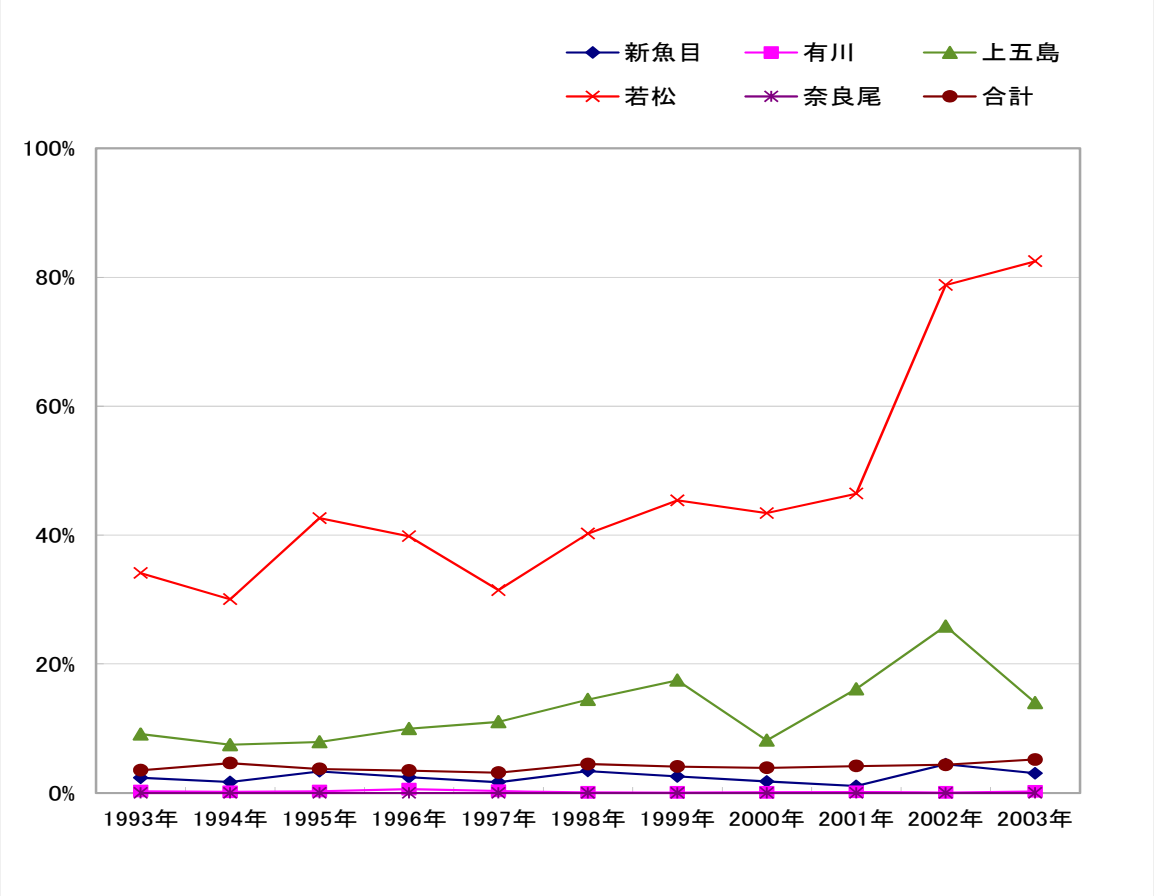


図４　新上五島町域および旧自治体単位での総漁獲量に占める海面養殖漁業のシェアの推移（属人）

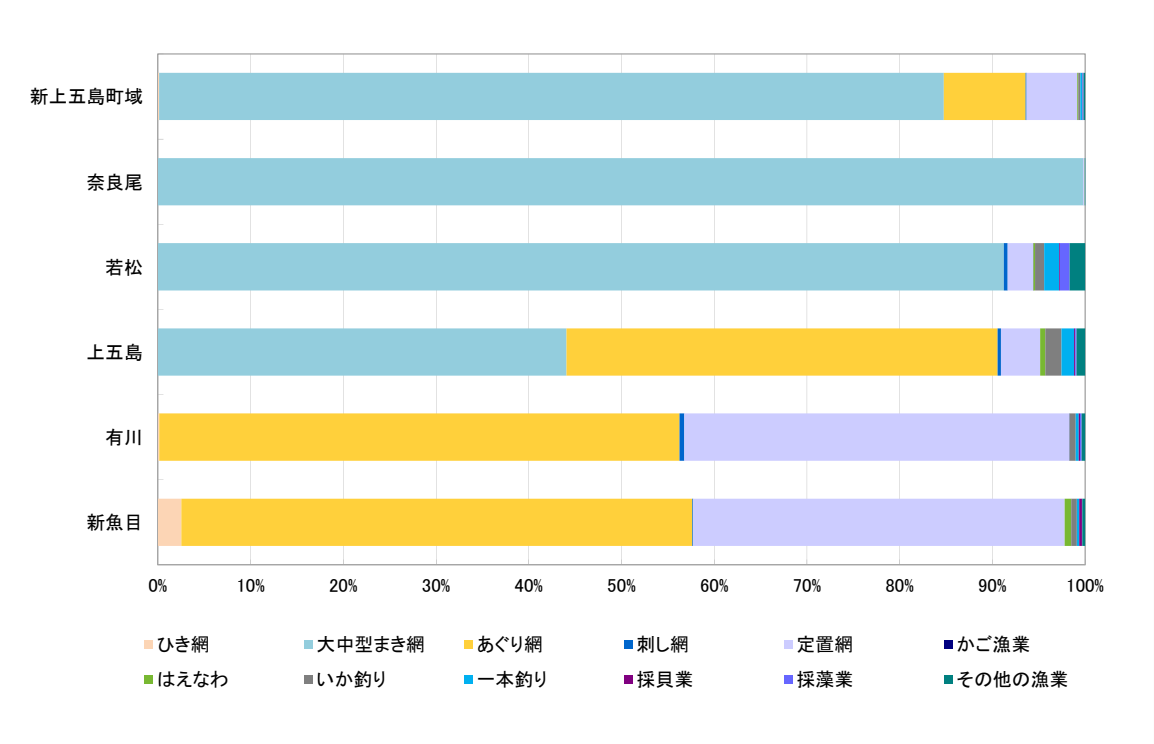


図５　旧自治体単位の漁法別漁獲量シェア 1993 年（属人）

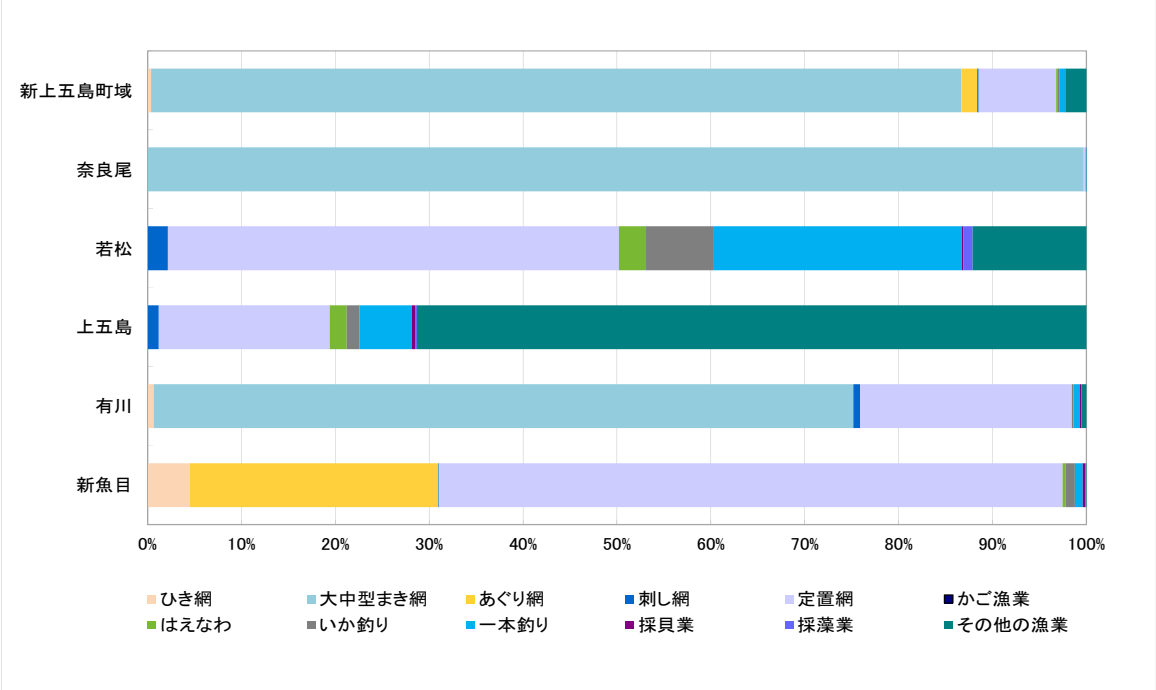


図６　旧自治体単位の漁法別漁獲量シェア 2003 年（属人）

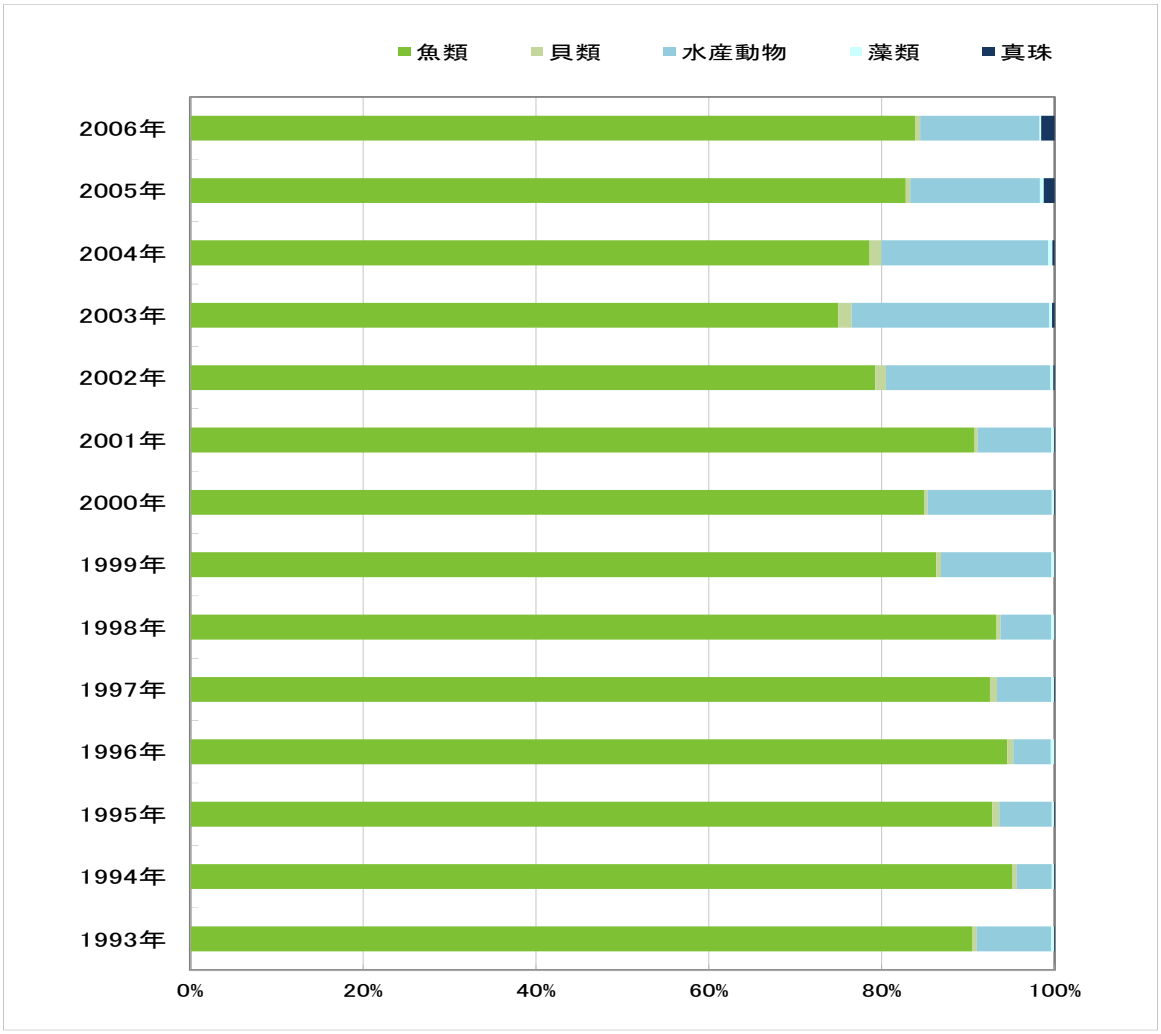


図７　新上五島町町域における総漁獲量の水産物構成の推移（属人）

第３節　生活

１．農業集落（キリスト教集落）における信仰生活とその民俗

（１）信仰生活

①ミサ

カトリック教会では、毎週日曜日、ミサにあずかることが基本である。昭和 27 年版の『公教要理』には、公教会（カトリック）の６つの掟の第一に、「主日と守るべき祝日を聖とし、ミサ聖祭にあずかるべし。」とある。「主日の中で特に盛大に祝われる主日は、御復活祭（春分後に来る満月後の最初の日曜日）と聖霊御降臨祭（五月末ごろ）とであります。」とある。また、「主日の外に、日本では守るべき祝日は四日あります。即ち、イエズス・キリストの御降誕祭（十二月二十五日）、御昇天祭（御復活祭後四十日目の木曜日、聖母被昇天祭（八月十五日）、諸聖人祭（十一月一日）であります。」とある。主日は日曜日のことであり、当時カトリック信徒には、その他の祝日にも多くのミサに参加する義務があった。現在でも毎日曜日のミサは、信徒にとって日常の信仰生活における最も重要なものである。また、御復活祭やクリスマスなどの主な祝日や主日のミサは盛大で、非常に大切にされている。

以下、具体的なヒアリング結果を示す。

米山集落出身の 50 歳代修道者によると、ミサが始まる時ホラ貝で知らせていた。巡回日でない日曜日などは、主任座教会である仲知教会まで歩いてミサにいった。

竹谷集落の 60 歳代男性によると、竹谷集落から仲知教会へは歩いて 40 分を要する。毎日曜のミサは歩いて行くことが多い。朝ミサは遠いながら、歩いて行く人もいる。歩けない人は毎日曜のミサのためにバスを使う。

久志集落の 70 歳代男性によると、仲知教会は主任座教会であったので、巡回地の大水にいく際、その地の浜には船が着けられないので、上陸する際は、巡回する神父は信徒が海につかり背負われた。

他の島の教会ではない場合、歩いて巡回教会にいく司祭もいた。もっとも遠い仲知教会を主教会とする竹谷集落の信徒は、歩いて教会に来ていた。教え方が朝ミサの時は、山（ハナ）（現在の仲知教会墓地の西側か？）までいってホラ貝を吹いていた。巡回教会である大水でミサがあるときは、凪ぎの時は、真浦の海岸に集まって村船で行った。仲知小教区は、ミサ後にかつて行っていた聖体降福式（ベネディクション）ではラテン語で聖歌を唱っていた。昔は背面式でミサをやっており、侍者もラテン語だった（第二バチカン公会議までだろう）。

江袋集落の複数の高齢者によると、巡回教会となっている江袋教会の信徒は、毎週のミサは徒歩で 30 分かけて主任座教会である仲知教会へ通う。かつてはボンテンとよばれるランプを灯して早朝から歩いていた。かつて江袋教会堂は大きく、多くの人が集まる御降誕際（クリスマス）のミサはここで行われていた。教区内の各地から村船や徒歩で江袋教会堂に集まった。大水・大瀬良・小瀬良集落の信徒がミサに向かう際は、朝の暗いうちから出発するので、ボンテンを下げながら歩いており、その光が美しかったという。ミサの開始は、鐘楼が作られる前には、ホラ貝で知らされていた。

赤波江集落の複数の高齢者によると、子どもの頃、朝ミサは仲知教会が遠いので、時間がなくていけなかった。昔は、ミサ開始の合図や人集めのために、ホラ貝で赤波江教会の前で吹き合図していた。大人になってからも、25 分ぐらい歩いて仲知まで毎日曜のミサに行く。現在も当該地区の信徒は、司祭が巡回しない日曜日は、仲知教会へ行く。

大瀬良集落の 60 歳代男性によると、主任座教会の仲知教会まで歩いて２時間はかかる。昔、クリスマスミサが毎回、夜中に仲知教会で行われた。山道を歩いて、カンテラや松明を明りにして歩いた。帰りが朝２時半になった。祝い日のミサは朝６時に出発して２時間歩いて仲知教会に行った。

小瀬良集落の 60 歳代女性によると、ミサには、赤波江から大きな船で小瀬良まで迎えに来て、小瀬

良、大水、大瀬良の人がおちあって、仲知まで行った。小瀬良教会のある場所の上からホラ貝を吹きミサの開始を知らせた。ただし、明松、大瀬良にはホラ貝の音が聞こえなかった。昔は、仲知教会でクリスマスミサがあり、12 月 24 日の深夜 12 時から行われていた。そのミサには、棒に布を巻いた松明を燈し仲知教会まで歩いて行った。その後、仲知教会で劇や踊りなどの遊戯があった。時間が遅いので、親戚がいる者は仲知に泊まるものもいた。現在は、主な主日や祝日である 11 月 1 日の死者の祝い日や 12 月 24 日のクリスマスイブ、３月の苦しみ（受難の主日、枝の主日）、御復活の主日などに巡回ミサがある。

明松集落の 70 歳代女性によると、小瀬良教会は仲知小教区に属する巡回教会だったので、ミサは昔、仲知教会や江袋教会に行った。近年は、曽根小教区に属するので曽根教会に行く機会が多い。ミサには、歩いて仲知教会に行った。現在は曽根教会まで歩いて 40 分を要するが、仲知教会より近くなった。

大水集落に在住の 50 歳代男性および出身の 60～70 歳代女性によると、大水教会でもミサの開始のホラ貝をならしていた。巡回教会であるため、昔は月に１回くらいしか、大水教会でのミサはなかった。大水教会でのミサが少ないため、信徒は主任座教会である仲知教会または昔クリスマスのミサが行われた江袋教会に通う。昔は、松明をつけて山道を２時間から３時間歩いて行った。広瀬地区の上の細い道を通って水源地のところに出て、険しかった高峯を越えて仲知まで歩いた。また、凪の時は船でミサにいったことも聞いた。昔、大水集落には５丁だての村船が１艘、３丁だてが２艘あった。櫓船では仲知教会まで約 30 分かかった。また、個人の２丁櫓の船だと、仲知まで 40 分くらいかかった。一方で艪を漕げない人たちは、歩いてミサに行った。波の状況や行事の規模によっては、小瀬良から赤波江まで船で行って、仲知教会まで歩いて行ったこともあった。40 年前は、エンジン付きの船外機のある船に 20 人ぐらい乗ってミサに行った。クリスマスのミサは昔、仲知教会で行われた。そのミサは、夜 12 時からだった。その夜に松明をつけてクリスマスのミサに仲知教会へ行ったこともある。ミサの後、大水へは朝４時頃に着いた。仲知教会は主任座教会であったので、神父や信徒が巡回地の大水に行く際、その地の浜には船が着けられないため、巡回する神父が上陸する際は、信徒が海につかり神父を背負った。

ところで、北魚目地区の高齢のカトリック信徒によると、昔、ミサの際に聖体を受ける前の日の夜 12 時以降は、飲食しない。そして、ミサへ向かう際、山道を歩くので喉が渇いても水が飲めなかったとよく聞く。『公教要理』には、「聖体拝領には、霊魂および肉身の準備が必要であります。」とあり、「聖体拝領の肉身の準備とは何でありますか。」の答えとして「それは、教会の掟に従って、前夜十二時から何物も飲食せず、聖体拝領に際しては恭しく身を整えることであります。」とある。



写真１　仲知教会でのクリスマスのミサ

このように、教理にある通り、老若男女にかかわらず遠隔地から起伏の激しい山道を通って徒歩でミサへ向かうことができるほど、信徒にとって日常の信仰生活は最も重要なものである。

②洗礼

洗礼とは、カトリックに入信する際、最初に行われる秘跡（儀礼）である。一般の洗礼は、司祭と日時を調整すればいつでも行える。五島地域をはじめ、長崎大司教区では、成人洗礼よりも乳幼児洗礼数が非常に多い。特に、昔の洗礼は厳しく、『公教要理』においても、「信者は自分の子に、一日で

も早く洗礼を受けさせなければなりません。」とある。大曾小教区を担当した70歳代の司祭によると、五島では、生まれて数日以内に洗礼を受けさせるため、親戚や親が数kmの海をテンマ船で渡ったり、何kmもの山道を歩き、主任司祭のいる教会まで向かった。今回の調査では、近代の洗礼についてあまり聞けなかったが、明松集落の70歳代女性によると、仲知小教区内で主任座教会に最も遠かった明松集落でも、子どもが生まれると仲知に歩いて連れて行き、洗礼を受けさせた。

③要理教育と堅信

カトリック信徒は、『公教要理』という教理書をテキストに、教理学習を幼少期に熱心に行う。この教理学習を修了して、「堅信」とよばれる秘跡（通過儀礼）を経る必要がある。過去の教理学習は非常に厳しく、数百問をすべて暗記する必要があった。中学生になると、３年に１回試験があり、３学年が同時に受験する。試験に合格しないと、３年ごとに何度も試験を受けることになるので非常に恥ずかしい。信仰心の強い五島列島各地で、どの集落で聞いても、教え方（集落の人々が費用負担した伝道学校を卒業した男女の教理学習指導者）の家の前の木や教会堂の前の木の上で、集落の子供たちが競って教理を学習した。過去には、それぞれの小教区の主任座教会に大司教または司教が巡回して、堅信を行った。現在、上五島地区では、各小教区の全ての受堅者（堅信をうけるもの、主に中学生）が、地区長司祭がおり上五島地区の中心的役割を果たしている青方教会に集まり、毎年11月ごろ大司教によって堅信をうける。2009年は11月８日であった。

以下、具体的なヒアリング結果を示す。

米山集落の60歳代男性によると、昔は教え方が厳しく、要理教育は毎日、稽古部屋で行われた。稽古部屋は旧米山教会の近くにあった。

竹谷集落の60歳代男性によると、要理学習は竹谷と一本松集落が合同で教え方を要請する。要理学習場所はクラブといい、一本松にある。稽古（要理学習）を休むと夕食抜きになった。要理学習は日常、木の上で学習する。一本松クラブでは、要理学習前にその開始を伝えるためにホラ貝を鳴らしていた。



写真２　2008年に行われた青方教会での上五島地区の堅信



写真３　一本松クラブ（竹谷と一本松集落の少年少女の要理教育を行った施設）

仲知集落群の複数の高齢者によると、昔は、公教要理教育は小さい地区ごとに行っていた。陸上交通の整備が遅れたこと、地区の子供の人口が現代に比べ格段に多かったことが理由としてあげられる。60年ほど前は、鯛ノ浦の伝道学校を卒業した教え方が週１～２回厳しい要理教育を行っていた。戦時中は、通常、司教しか行うことのできない堅信式を、畑中英松神父や梅木兵蔵神父が司教の代理で行った。

赤波江集落の70歳代男性によると、公教要理の個人的な学習は、木の上に登ったり、暑い日は特にヤグラなどで勉強していた。

大瀬良集落の60歳代男性によると、大瀬良集落は当時仲知小教区に属し、仲知教会で堅信を受けた。要理学習を指導する教え方は、昔は大瀬良集落にもいた。周辺集落にも大瀬良、小瀬良、大水に各１人の教え方がいた。

小瀬良集落の60歳代女性によると、子供の頃、仲知まで行って教会学校で勉強していたこともある。公教要理（教理概説）についてだれもが一生懸命勉強したことを聞いた。木に登って公教要理を勉強していたが、なぜか木に登って勉強した方が覚えるとの事である。大瀬良、小瀬良も公教要理の学習は今では考えられないほど厳しかった。以前は、要理学習指導者である教え方（カテキスタ）は、小瀬良に限らず、大水にも大瀬良にもいた。

大水集落出身の60歳代女性によると、教え方（カテキスタ）が大水集落におり、教え方が各地区に２人ぐらいいた。教え方が大水集落に隣接する草鞋畑地区にもいた。教え方の家で要理学習が行われたので、その時は草鞋畑地区まで通った。堅信の前は、多くの人が木に登って要理を覚えていた。昔は、畑作業の手伝いよりも要理学習を重視した。堅信のための公教要理の試験は、１部から３部は口頭の試験で、４部は筆記試験だった。

大水集落の50歳代男性によると、残念ながら、昔、公教要理を学んだ木を、数日前に切ってしまった。

④黙想会

カトリック信徒は、年１回は赦しの秘跡を受ける。『公教要理』には第二の掟として、「少くとも年に１度は必ず告白すべし。」とあり、告解の義務が示されている。

現在、上五島地区では、概ね３月頃の２～３日間、黙想会に行き、赦しの秘跡を受ける。黙想会では、赦しの秘跡のほか、司祭による説教や集団でのロザリオ等の祈りを行う。担当する司祭の多くは小教区の主任司祭ではなく、他の長崎大司教区内の小教区司祭や修道会司祭となる場合が多い。

以下、具体的なヒアリング結果を示す。

大水集落の出身の 60 歳代女性によると、主任座教会である仲知教会まで行き３日間ぐらい赦しの秘跡をうける黙想会があった。

久志集落の 70 歳代男性によると（おそらく第二バチカン公会議以前）、悔い改めの時はラテン語で、「ミャークルパー」と言いながら、胸を３回打っていた思い出がある。

（２）信心業とさまざまな祈り

①十字架の道行

江袋教会では通年、毎週、イエスキリストが亡くなった金曜日に十字架の道行の信心業が行われている。それは100年間絶えることなく続けられてきた信心業である。明治20年頃、伝染病が流行し多くの犠牲者が出たので、村の長老たちが集って協議し「私たちの信心や贖罪が足りないからに違いない、これから毎金曜日、十字架の道行をしよう」と決議したのが始まりで、それからずっと100年間引き継がれてきたものである（江袋カトリッ



写真４　江袋教会司祭館で行われる十字架の道行（2009 年）

ク教会　1982)。

江袋集落の複数の高齢者によると、107年間（2009年現在）毎週欠かさず続けられている。教会堂焼損前には堂内に設置されていた14の各プレートを見ながらイエスを黙想しながら祈っていた。現在は、司祭館を仮御堂として14の出来事が集められた１枚のプレートを見ながら黙想する。複数の人がこの信心業を非常に長い間続けていることに誇りを持っている。2009年２月の参与観察調査では、参加者は20名ほど、高齢の人が８割ほどを占めるが、中高年層やその子供も数名参加している。

子供が祈祷文の先唱者になっており、暗記している。高齢の人々も祈祷文のある冊子を手に持っているが、多くの方が暗唱しているようであった。

大水集落出身の70歳代の女性によると、大水教会でも昔、金曜日の朝、十字架の道行の信心業を行っていた。大水集落出身の60歳代の女性によると、昔は、ホラ貝の音で信徒が集合し、大水教会堂で金曜日はロザリオの祈りと十字架の道行の信心業を行っていた。

②集団で行うロザリオの祈り

ロザリオの祈りは個人でもできる最も身近な信心業の一つである。現在も五島の様々な教会で５月の聖母月と10月のロザリオの月には、信徒が教会堂に集いロザリの祈りを行う。久賀島の牢屋の窄殉教記念祭などの祝祭での行列などでもこの祈りが集団で唱えられる。

以下、具体的なヒアリング結果を示す。

小瀬良集落の60歳代女性によると、現在、小瀬良教会では、10月のロザリオの月に小瀬良の信徒だけでなく、大瀬良と明松の信徒も毎日曜日、教会でロザリオの祈りを行った。

明松集落の70歳代女性によると、昔、小瀬良教会では、ミサが終わったあと、日曜の夜に夕の祈りやロザリオの祈りを行うことがあった。特に「悲しみの内」という時期を中心に行う。

仲知集落の複数の高齢者によると、昔、巡回教会ではミサにあずかれない日曜日はロザリオを教会堂の中で信徒同士で祈ることを聞いた。

竹谷集落の60歳代の男性によると、カトリック信徒は、日曜日のミサが仕事で行けない場合、巻き網の船の中でロザリオの祈りを１本（祈りの単位）祈ることが通例であった。

大水集落出身の60歳代女性によると、昔は、第１日曜の仲知教会での朝ミサから帰った後、午後、大水教会堂で大水教会の信徒でロザリオを１本祈った。

③船の祝別と船での祈り

大曾小教区をかつて司牧した司祭によると、船に限らず自動車など様々な物に対して祝別を行う。祝別とは、神によって船などの物を祝福してもらうことである。信者は神の愛の中で生きるということになるということである。

曽根集落の 70 歳代男性によると、運搬船などの船を司祭から祝別していただいた。江袋漁業共同経営団の運搬船も自分が乗っていた頃、その運搬船を祝別していただいた。



写真５　先祖の埋葬地を示す十字



写真６　運搬船にある祭壇

江袋漁業共同経営団の運搬船には祭壇が設置されており、十字架と聖母画が配置されている。かつてはこの運搬船で佐世保などに獲れた魚を出荷していた。その時にも祈れるように、またいつでも神を思い起こせるように設置している。また、各船員は祝別された聖母のメダイを出漁時に身につけている。厳しい海の環境で神や聖母を思い起こし、その信仰の中で生業を行っている。他に、船が出港する際、江袋集落の南西部の高峯山の麓にある先祖の埋葬地を表す十字架が見える。江袋集落の多くのカトリック信徒は、その十字架に向かい、先祖への敬意を表し、また先祖からの神への取り次ぎを願い祈って漁業に従事する。

また、一本松漁港にある個人経営の定置網会社の事務所の中にも、聖母像や十字架が置かれており、いつでも神に祈ることができるようにされている。



写真７　仲知教会堂にある地域の信徒をモデルにしたステンドグラス

④個人の日常の祈り

五島列島のカトリック信徒に一般的ではあるが、ロザリオの祈りは個人でできる信心業のため、江袋集落の人々も時間がある時や就寝前などに行う機会が多いという。また、祈祷文にある日々の祈りも熱心に行っている。家庭祭壇や職場でも祈りを行う機会が多い。

以下、具体的なヒアリング結果を示す。

久志集落の 70 歳代男性によると、祖母の信仰の熱心さが大きく影響を与えるようである。明治生まれの姑祖父は、毎日ロザリオの祈りをしていた。本人も朝ミサにいけない時は、ロザリオの祈りをしている。



写真８　家庭祭壇



写真９　ロザリオ（コンタツ）

竹谷集落の 60 歳代男性によると、この地域の信徒も非常に信仰熱心で、日常の祈りをよくする。

⑤その他

江袋集落の複数の高齢者によると、かつて集落で死者が出ると、死者の情報を知る者がホラ貝を吹き、集落全体へ伝達していた。ミサの開始と同様に、現在、町内放送のスピーカーがある教会堂下の広場で吹かれた。そのホラ貝の音は風向きがよければ真浦・島ノ首・大水集落に聞こえた。

（３）教会の維持管理と集落

カトリック信徒は教会で毎週日曜日にミサにあずかることが基本である。さらには、日常的に祈りの場である教会堂を維持管理している。以下では北魚目地区の集落と、そこに現存する教会堂の維持管理の関係について北から述べる。

現在、江袋・赤波江教会より北は、仲知小教区として主任座教会の仲知教会を中心に管理運営を行っている。一方、大水・小瀬良教会が含まれる曽根小教区は、主任座教会の曽根教会を中心に管理運営を行っている。

米山教会は、立瀬集落より北の池尾集落の信徒までが管理し、字上ノ先の信徒がミサに通う。仲知教会は、上ノ先から島ノ首集落の信徒が管理し、その中で上ノ先の信徒以外がミサに通う。同様に江袋・赤波江・大水教会は、それぞれの集落の人々が管理し、ミサに通う。小瀬良教会は、大瀬良・小瀬良・明松集落の信徒が管理し、ミサに通う。

以上のことを勘案すると、江袋教会堂・赤波江教会堂・大水教会堂のように１集落１教会堂という

米山教会：米山集落の 60 歳代男性によると、設立当初から米山教会は巡回教会だった。小教区の設置から現在まで仲知小教区に属する。維持管理も米山集落の信徒で行っている。米山出身の 50 歳代の修道女によると、旧教会堂では幼少時代には、ミサの時正座だった。記憶が曖昧だが、最初は板張りで、後から畳敷きになった。

仲知教会：久志集落の 70 歳代男性によると、司祭が常駐する主任座教会である。小教区の中心であり、小教区の設置から現在まで仲知小教区に属する。仲知教会の掃除や維持管理は、いくつかの小字単位の組み合わせで地区ごとに順番（当番）を決めて行っている。

江袋教会：江袋集落の複数の高齢者によると、江袋教会は現在、巡回教会であり、小教区の設置から仲知小教区に属する。

赤波江教会：赤波江集落の複数の高齢者によると、赤波江教会は巡回教会である。小教区の設置から現在まで仲知小教区に属する。現在、司祭の巡回は月４回で第２・４日曜日と第１・３木曜日である。赤波江教会堂は、昔から同じ場所にあり、小さい家御堂があった。その後、昭和 55 年完成の二代目の現教会堂は、積立貯金をして建てた。オイルショック後、物価が上がってきたので積立貯金でも追いつけないと思い、建築費用を借金して工面した。現在、教会堂は当該地区の人で管理している。

小瀬良教会：小瀬良集落の複数の方によると、小瀬良教会は巡回教会であり、現在、大瀬良 6 軒、小瀬良 10 軒、明松 2 軒で構成される。60 歳代女性が若い頃まで仲知小教区に属していたが、現在は曽根小教区に属している。土曜日と日曜日に大瀬良と明松の集落の信徒が掃除などの維持管理を行う。日常の教会管理は小瀬良の信徒が１人で行っている。大瀬良集落の 60 歳代男性によると、小瀬良教会で捧げる花の交換は婦人会の主婦が水曜日と土曜日に行っている。

大水教会：大水集落に在住の 50 歳代男性および出身の 60～70 歳代女性によると、大水教会は巡回教会であり、大水集落と今は人が住まない草鞋畑集落の信徒で構成された。在住の 50 歳代男性によると、子どもの頃まで仲知小教区に属し、現在は曽根小教区に属している。現在は、大水集落の信徒で大水教会は維持管理されている。

（４）その他の教会での活動

上五島地区の教会の間のレクリエーション行事は、男性がソフトボール大会、女性がソフトバレーボール大会を年に１回行っており、概ね 10 月に行われる。2009 年度は、ソフトボール大会が 10 月 25 日、ソフトバレーボール大会　が 10 月４日だった。各教会などの単位で、チームがある。ちなみに小瀬良教会には、女子ソフトバレーチーム（女子）がある。

◇引用・参考文献

『江袋教会創立 100 周年記念誌』　江袋カトリック教会（1982）
『公教要理』　中央出版社

２．漁業集落における信仰生活とその民俗

（１）概要

北魚目地区には、近世期には津和崎、大瀬良、小瀬良各集落に先住民や漁業移住者が、それ以外の地域（大瀬良、小瀬良各集落は混在するが）に、近世後期には大村領を中心とした移住者がそれぞれ居住した。その当時、仲知集落より北は平戸領、南は富江領に属した。このような集落の配置の成立背景と近代期の宗教分布は概ね重なる。

次に、歴史的変遷をみてみる。先住民及び漁業移住者は概ね近年も仏教の檀家であり、神道（町内では神道祭と呼ばれる）の氏子でもある。津和崎集落においては、近世の平戸領に属した名残がある。現代においても小値賀町の浄土真宗本願寺派明覚寺の檀家であり、行事や法事等で密接なつながりを持っている。一方で、神道においては、小串の神社の宮司が祭事を行う等、中通島本土とのつながりも深い。

大瀬良、小瀬良各集落の先住民および漁業移住者は、大瀬良では現在居住していないので不明だが、小瀬良には３軒ほど居住しており、近世期は浄土真宗の寺の檀家であり、塩釜神社の氏子であったと考えられる。現在は神道のみを信仰している。宮司は、近代には集落に住んだが、その後不在になった。後は、立串、小串、奈摩地区の宮司が祭事を行うようになるという変遷をたどる。

池尾、大瀬良、小瀬良集落の近世後期の大村領を中心とした移住者は概ね潜伏キリシタンであった。近代になってキリシタン禁制が解かれカトリックに改宗した者もいたが、カクレキリシタンとして潜伏期の信仰を継続した者もいた。昭和 20 年代に北魚目地区のカクレキリシタン組織は解散し、多くが神道へ改宗する。大村領を中心とした移住者は改宗を機に、大瀬良集落では集落からいなくなった先住民および漁業移住者は祀っていた山神社を引き継ぐ。小瀬良集落では、先住民および漁業移住者と同じ塩釜神社の氏子となっていく。池尾集落では、神道への改宗を機に津和崎集落の先住民および漁業移住者と同じ本山神社の氏子となっていく。昭和中期から現代にわたり、大村領を中心とした後発の農業移住者の神道への改宗を機に先住民および漁業移住者との間で、神道に関わる行事や地区活動、施設維持等の協働を通して、両者の宗教・社会には「共生」から「協働」への変化がおこる。

このように、有形の宗教施設の背景には、北魚目地区の成立背景が異なる集落間の宗教や社会的な関係の変化も包含されているのである。

以下では、具体的に集落ごとにヒアリング調査の結果を中心に、北魚目地区のカトリック以外の宗教の信仰生活とそれに関わる民俗や社会関係について述べる。

（２）カクレキリシタン

①池尾集落

80 歳代女性へのヒアリングによると、カクレキリシタンの信仰組織は義父の代で解散した。津和崎郷の池尾集落と西河原集落が同じ組織で、宗教行事も一緒だった。池尾集落の元の墓は西河原にあって、近年に灯台のそばへ移した。昔は土葬で、座棺（丸い桶）に入れて埋葬していた。

70 歳代男性へのヒアリングによると、昭和 20 年代に組織は解散した。子どものとき、蝋燭１本立てて祈っている姿を見たことがある。

②大瀬良集落

80 歳代男性へのヒアリングによると、カクレキリシタンの信仰組織の解散は昭和 24～25 年頃である。自分の父の代から神道になっている。カトリックと同じように日曜日に大将（組織の役員、指導者）の家に集まった。大将が日繰帳で、下肥を扱ってよい日か、などの障りを伝えた。クリスマス（ご誕生）もあった。覚えている限り、２人大将が代わった。お帳（カクレキリシタンの教会暦）は大将

が死んだ時、納骨堂におさめた。他のお帳は諫早のカトリック教会の人がもらいにきた。昔、ラテン語の祈りは役員だけで行っていた。昔の葬式はカクレキリシタン方式で行っていた。神道に改宗したばかりの頃は、先に大将の爺さんのお祈りの後、宮司を呼んで行うことになっていた。結婚式などのお祝は各自の家でやっていた。

60歳代のカトリック信徒の男性のヒアリングによると、昔、カクレキリシタンの神父と呼ばれる人が集落内にいた。昔（キリシタン時代）の祈り（ラテン語）が残っていると思われた。葬式の時に十字を切らないことを聞いた。

③小瀬良集落

80 歳代女性へのヒアリングによると、カクレキリシタンの信仰組織は大瀬良とは別組織であった。大将は上立串にいた。一般的に、大将と役員（計３人）が、日曜日だけに大将の家に朝早く寄る。そして祈る。夫の母親の親が大将だった。カクレキリシタンには月、水、金曜に「ひくり」（カクレキリシタンの教会暦）に従って、牛や人糞等の肥料の扱いや裁縫を禁じられる日があった。子どものころ、クリスマスを「ご誕生」と言っていた。その祝いには参加していた。夫が最初にカトリックになった。洗礼名は「ドメガス」だった。カトリックに改宗し、新たな洗礼名をいただいている。マリア観音が伝わっているが、それは青砂ヶ浦で五島崩れのキリシタン弾圧の時に、屋根裏に隠されたものである。青砂ヶ浦の人から先祖がもらったものか、先祖が青砂ヶ浦から移ってきたのかわからない。いずれにせよ青砂ヶ浦にあったものである。小瀬良には昔、上の方の山側に 14 軒（カクレキリシタン・カトリック）が住み、下の方の浜側に７軒あり、先住民である地下（じげ）の人で神道を信仰していた。

別の 80 歳代女性へのヒアリングによると、小瀬良と大瀬良のカクレキリシタンの信仰組織は別だった。小瀬良は上立串と同じ組織であった。クリスマスの行事は「お誕生」といった。クリスマスは大将の家に集まって夜中 12 時に行っていた。正月は、大将と役員（計３人）の家に重ね餅を３個持ち寄る。悲しみの入りという時期があり、してはいけないことがあった。日曜日は、肥汲みや針仕事が禁止されていた。カクレキリシタンの時代は座棺だった。死者に数珠と六道銭、お土産という聖遺品を持たせていた。当時のお祈りは、カトリックの人によれば、神父が行うお祈りに似ている。カクレキリシタン時代の宗教行事は、おおむね大将の家で行われていた。大将は、交代した。カクレキリシタンをやめた後、大将がなくなった時に、お帳類を一緒に持たせ葬ったことを聞いた。回忌法要は、カクレキリシタンでは、７日ごと 49 日まで７日ごとに法事があり、10 年忌、33 年忌で終わる。結婚は「いいなづけ」が一般的で、同じ宗教の人同士が多かった。結婚式は、カクレキリシタンの方式で行った。結婚式は各自の家で行い、３人の役員が来たが、特別にお祈りはしなかった。参加者は、親戚を中心に 50 人くらいだった。その他、集落で近しい人が来た。ごちそうが豪華だった。ごちそうとは、ブリの刺身、大皿の煮物、里芋、こぶ、こんにゃく、豆腐などであった。その他の祝い日のごちそうは、五目飯という混ぜご飯をよく食べた。

60歳代のカトリック信徒の女性のヒアリングによると、県道下の地区はカクレキリシタンを信仰していた人々が多かった。そのなかで、一部が高齢になった時にカトリックに改宗した。

（３）神道

①池尾集落

80歳代女性のヒアリングによると、義理の父の代でカクレキリシタンから神道に改宗している。神道のほかに天理教になった人もいる。法事は現在、小串の宮司が来てとり行っている。

70 歳代男性へのヒアリングによると、昭和 20 年代に組織は解散し、神道に改宗した。現在は神道になり、津和崎および西河原集落の人たちと一緒に活動や行事を行っている。

②津和崎集落

70 歳代男性へのヒアリングによると、当該集落では、仏教と神道の両方を信仰する家族が多い。集落中央にある本山神社が郷社（集落の神社）であり、昔から宮司は常駐せず、小串から宮司が来ることを聞いた。当該神社の手水鉢には江戸中期、宝暦 13 年（1763）の年号が刻まれている。

70 歳代男性へのヒアリングによると、本山神社は当該集落で一番古く、地域の神社の中心である。現在稲荷神社も合祀されている。祭神は女の神様で、大山祇の神である。その他の神社や祠として、恵比寿様が波止（突堤）にある。金比羅様（高神様）は山の上にあり、金比羅様には社叢がある。塩釜神社もある。これは五島に非常に少ない。父が何人かの仲間と塩を炊いていた時（明治期）につくった。現在は小串から宮司がくる。昔は小値賀から来ていたと伝わっている。その他、古墳墓がある。昔、骨と刀が見つかった。特別に祭りはしていない。現在もお神酒はあげている。

50 歳代男性へのヒアリングによると、金比羅様では、年１回４月に地元の人が集まって、社叢の広場で会合（宴）を行う。年中行事としては、祭りに合わせて、集落内に春と秋に「のぼり」をたてる。その時は小串から宮司を連れてくる。一般的に、お祭りは本山神社を中心として一括し、宮役員が中心にとり行っている。その他、恵比寿様や金比羅様は熱心な個人が管理している。その他の祭りとして、本山神社の春祭りは１月４日に行う。厄入り、氏子入り（赤ちゃん）のお祭りもある。秋祭りは郷の人々が皆で行う。秋祭りは 11 月の土日の２日間。土曜日の前夜祭が大きな祭りで神楽や獅子舞、天狗がくる。昔は 100 人で神輿を担いだこともあったが、今は人口減少のため、少なくなっている。宮役員は３人いて内訳は総代１人、宮役２人である。本山神社を中心に、月に２回、１日と 15 日に花芝や水を換える。地区での神社の維持としては、秋祭りの前に郷の大掃除があり、４つの神社のまわりの草刈りをする。



写真 10　恵比寿神



写真 11　金比羅神社の祠



写真 12　塩釜神社の祠



写真 13　南の結界



写真 14　北の結界



写真 15　東の結界

別の 70 歳代男性へのヒアリングによると、本山神社を中心に１年に２回、お祭りを行う。秋祭りは特に盛んで、小串から宮司を連れてくる。それに合わせて、金比羅様、塩釜神社、恵比寿様の全てを掃除して、「のぼり」旗が立つ。神道を信仰するようになった池尾集落の人たちも一緒に行事を行う。塩釜神社は、明治期に父と仲間が作った。近年、小さい祠だったものに鳥居を増築し、小串のＫという宮司の指導の下でコンクリート造りに建て直した。お祭りの際の結界は、南は金比羅神社の参道、北は池尾集落北部、東は恵比寿神社の南脇に設置される。

③大瀬良集落

80 歳代男性へのヒアリングによると、当該集落では、神道やカトリックなど単一の宗教を信仰する家族が多い。集落の浜側にある山神社は、今は転出した先住民が過去に祀っていた祠であり、現在は、宮司の依頼でカクレキリシタンから神道に改宗した人々が維持管理している。昔から宮司は常駐せず、昔は立串、現在は奈摩から宮司が来た。

80 歳代男性へのヒアリングによると、昔、浜側に住んでいた先住民（地下「じげ」）の人々は、神道だった。下の祠を山の神様と言った。集落（立串郷）の経費で運営していた。Ｙ氏を中心に祀っていた。カクレキリシタンであった上（山側）の人々は祀っていなかった。その後、山の神様はＹ氏が亡くなり祀る人がいなくなったので、立串の宮司の指導によって祀ることになった。自分の父の代から神道になっており、神道に改宗したばかりの頃は、先にカクレキリシタンの大将のお爺さんのお祈りの後、宮司を呼んで行った。回忌法要は、父の代から神道になっているので、今は神道の方式で行っている。法事が楽なので神道は良いと考えている。

当該集落出身の 80 歳代女性へのヒアリングによると、子どもの時、大瀬良の山の神様で９月の彼岸の中日、太鼓を叩いていた。大瀬良の下（浜側）では３軒の人がこの神社を守っていて、その人たちは先住民（地下）であった。集落の独自の宮司はいなかった。

④小瀬良集落

当該集落では、神道やカトリックなど単一の宗教を信仰する家族が多い。集落の浜側にある塩釜神社は、かつては６軒いた少数の先住民（地下）が祀り、現在は、３軒の先住民とカクレキリシタンから神道に改宗した人々が共同で維持管理している。塩釜神社の東側に隣接して、恵比寿像などが合祀されている。昔は、集落の先住民（地下）の個人が宮司の役割を果たした。宮司の役割を果たした方がなくなると、その後、立串から小串に、現在は奈摩から宮司が来て行事をとり行う。

80 歳代女性へのヒアリングによると、上小瀬良の住民が 14 軒（カクレキリシタン・カトリック）で、小瀬良の７軒が神道であった。神道の人々は、塩釜神社を祀っていた。現在は３軒になっている。

別の 80 歳代女性へのヒアリングによると、現在、11 月に天狗と獅子舞がきて神楽を行う。立串の天照大神の 50 周年記念に行ってきた。塩釜神社は昔、もともと小瀬良集落に宮司がいた。塩釜神社は先住民（地下）が信仰していたところ、カクレキリシタンであった上小瀬良の人々が神道に改宗したことによって、一緒に守ることにした。塩釜神社のお祭りは毎年６月 10 日に行われる。立串まで行かず、小瀬良集落の氏子だけで行う。昔は立串の宮司が来ていたが、その後、小串の宮司、今は奈摩のＹ宮司がきている。回忌法要は、現在、宮司を呼んでいる。「矢祓い」とお盆と正月に、宮司に祈ってもらう。

小瀬良の高齢者女性へのヒアリングによると、近代から神道のみを信仰する。墓地には神道と仏教（浄土真宗）の墓がある。昔は、仏教徒であったが、近代（明治期）に神道に改宗している。宮司は以前、集落の方が従事していたが、近年、奈摩の正彦神社の宮司が来る。平成 20 年（2009）６月８日には塩釜神社 390 年祭が行われた。また、塩釜神社とは別に、小瀬良集落には水神社の石碑が祀られている。



写真16　小瀬良集落下の墓地にある浄土真宗の戒名の近世墓石



写真17　小瀬良集落上の家の石垣にある魔よけのアワビの殻

（４）仏教

①津和崎集落

70 歳代男性へのヒアリングによると、当該集落では、仏教と神道の両方を信仰する家族が多い。現在、集落中央にある御座所は普段無人であり、小値賀の浜津から僧侶が来る。宗派は浄土真宗本願寺派である。小値賀の明覚寺の檀家となっている。寺の役員を「お座役」という。

別の 70 歳代男性へのヒアリングによると、小値賀の明覚寺（浄土真宗本願寺派（通称、西本願寺派））の檀家である理由は、近世期に平戸藩領であったため、僧侶が帆船や櫓船で渡って来ていた。僧侶が泊まる場所を御座所という。昔は郷の集会所や公民館にもなっていた。江戸時代は平戸藩の巡見使は、御座所と呼ばれる今村家に泊まった。明治以前から同じ場所を使っていたが、平成元年の山崩れに罹災し流され、再度建て直されたものである。津和崎集落では、最初は全員が浄土真宗であった。他の宗派は後から入ってきたものである。寺役員を寺総代（御座役）という。御座役は、会計など年間を通して扱う。他の仕事として、回忌法要の時は僧侶を小値賀の明覚寺まで迎えに行く。また１週間に１回、御座所のお花を取り換えたりする。御座所は明覚寺の別院的な役割を果たし、御座役は責任を持って後述する職務を果たしている。御座役の年中行事としては、永代供養で毎年７月に船で小値賀の明覚寺に僧侶を迎えに行く。お葬式以外の初７日、14 日など 49 日以外の各７日の法要で経をあげる。49 日は、僧侶を小値賀の明覚寺から連れてきて法事を行う。御座役は、各７日法要の時に、僧侶の代わりにお花を供える。10 月１日報御講で、僧侶につき添い１日で各檀家を回る。

平戸藩時代の頃（江戸時代）は報御講の時に１週間、僧侶が御座所に泊まって檀家をめぐったことが伝わっている。

◇引用・参考文献

『新魚目町郷土誌　史料編』新魚目町（1988）

第４節　交通

１．航路

新上五島町に五島－長崎間の航路が初めて開けたのは、長崎、福江、鯛ノ浦間の往復航路であった。これでは北魚目地域の人は特に不便であったため、明治 40 年に長崎、榎津、有川、富江の定期航路が開かれた。

この航路は、長崎から福江、富江、奈良尾、岩瀬浦、有川を経て榎津に至る航路で、大川運輸株式会社所有の若津丸（427ｔ）が隔日に運航、別便として長崎から榎津、有川、岩瀬浦、奈良尾、福江を経由し富江に着く航路を、同会社の栄城丸（189ｔ）が隔日に運航した。この若津丸、栄城丸の二隻の運航に長崎県は年間 3,000 円の補助金を交付した。長崎から魚目、榎津を通って小値賀、宇久島（神ノ浦、平）にいたる航路には、菊地喜三郎所有の花咲丸（151ｔ）が運航した。

明治 43 年 11 月に九州汽船株式会社が発足し、明治 44 年３月１日より営業を開始し、早岐－有川線で運航され、旅客の外に貨物、郵便物の取り扱いもした。この当時、本町に寄港した船舶数は 29 隻、総噸数 2800 噸、航路数 19（明治末より大正期）であった。大正５年（1916）10 月、早岐－有川航路が、早岐－小値賀航路へと変更された。

表１　航路の輸送状況（明治 42 年）

航　　路	長崎・五島間（榎津）	長崎・五島間（福江）	長崎・五島間（宇久島）
船　　数	一隻	一隻	一隻
総　噸　数	427t	189t	151t
航　海　数	153	149	77
乗客人員数	14,130 人	14,702 人	3,087 人
貨物数量(t)	65,788	14,702	19,664
主要品目	雑　貨	雑　貨	鮮魚・干魚・雑貨

大正７年（1918）９月、長崎－中五島航路が長崎－五島－佐世保航路へと変更された。大正９年（1920）９月、早岐－佐世保－富江航路が再開された。大正 12 年（1923）３月に、長崎－五島－佐世保線、長崎－五島－早岐線と類似航路が同時に運航されている。昭和３年６月、九州汽船株式会社より九州商船株式会社と社名が変更された。この後、第二次世界大戦に突入し、航路も制約された。昭和 23 年９月になり、佐世保－有川－平線、佐世保－宇久島－有川線、長崎－立串線が運航された。昭和 28 年９月には長崎－上五島－佐世保線、佐世保－上五島線となり、昭和 33 年９月、長崎－上五島線、佐世保－上五島線となっている。

いずれも国庫補助を受けての運航となっている。

昭和 49 年８月より、フェリー「椿」の進水で航送船便と旅客船便に振り分け、「椿」と「鯨波丸」で、奇数日、偶数日とで島回りを逆順運航とした。

昭和 53 年３月より、長崎－五島線、佐世保－上五島線となり、長崎－五島線は補助を受けなくなった。上五島線は同年 12 月よりフェリー「五島」が就航し、「椿」と２隻の運航となった。

『北魚目村郷土誌』（大正６年発行）には、「水運よく発達して航運の利あり。即ち小串港より、毎日、魚目村似首、榎津、両港及び、有川港に往復する渡海船あり、且つ、村は、九州汽船株式会社に対し、年間 300 円の航海補助費を支出し、隔日に佐世保、長崎間往復の汽船、小串、立串に寄港するのみならず漁獲物、その他貨物の運搬に十数艘の小廻り船ありて、早岐、佐世保、及び長崎方面に絶えず往復し、津和崎は対岸小値賀との間に、毎日運航あり。曽根よりも、小値賀、青方村網上、奈摩等に船舶航行の便ありて、風浪激甚なる場合の外、敢えて、不便不自由を訴ふることなし。」と記述されている。

表２　航送船便の寄港地別発着時刻表

午前の部（昭和 48 年 8 月 11 日より実施）

寄港地	奇数日	偶数日
佐世保	発　8:00 着 15:40	発　8:00 着 15:40
有川	着 10:30 発 10:40	発 13:10 着 13:00
榎津	着 11:05 発 11:10	発 12:35 着 12:30
小値賀	着 12:15 発 12:25	発 11:25 着 11:15
平	着 13:00 発 13:10	発 10:35 着 10:25

午後の部（昭和 49 年 8 月 11 日より実施）

寄港地	奇数日	偶数日
榎津	17:50	7:20
有川	17:35	7:50
立串	17:00	8:20
小値賀	16:15	9:10
平	15:30	9:50
佐世保	発　13:00 着　12:20	着　12:20 発　13:00
有川	9:50	15:45
榎津	9:20	16:05
立串	8:50	16:35
小値賀	8:05	17:25
平	7:20	18:00

立串郷の人で、大正中頃より機帆船で、立串、小串、似首、榎津、有川と往復渡海業を 50 年近く営んでいた山田丸が、小串郷、大瀬良週弥経営の菊丸に引き継がれたが、これも立串線バス開通等により客足が減り、昭和 30 年頃より津和崎、立串間を運航していた山口平経営の津和崎丸に、昭和 44 年３月よりこの航路を委ねた。この津和崎丸は、津和崎を起点として偶数日に赤波江、立串、榎津、有川間を１日１往復、奇数日に赤波江、立串、小値賀間を１日１往復していた。

曽根港からも渡海船が出ていた。曽根を起点として、広瀬－三軒屋－青砂－冷水－奈摩と１日４往復の運航がなされ、月夜間等、揚操船団入港時は不定期貸切便で、江袋、仲知等にも運航された。この船も昭和 45 年 11 月、バスが青砂ヶ浦別道より立串まで運行するに至り、昭和 47 年 10 月に廃業した。

大石海運のフェリー「みさき丸」（200ｔ）が、昭和 53 年３月より運航が開始され、北松臼の浦港－立串－小値賀－宇久平、折り返し、小値賀－立串－臼の浦と同コースを運航し、トラック輸送を主として貨物運搬船として活躍した。

２．陸路

『北魚目村郷土誌』（大正７年発行）には、「地形狭長山岳起伏陸上の交通甚だ不便にして、立串、小串間を除き殆ど、車馬を通せず貨物の運搬は総て之を人の肩背に依らざるなし。而して、立串より津和崎に至る五里余に及ぶ縦貫里道あるも、紆余曲折、一上一下頗る険悪にして、辛うじて人の往来に便するのみ。しかれども、三面海をめぐらすを以て陸上の不便は、海上船揖の便優に之を補うを得べく要する。陸上の交通機関遅々として発達せざるは、まことにこの基因せりと雖も不可なし。本村において近く技術員を聘し、里道幹線の実測をなし、大正８年（1919）以降、10 ヵ年の継続工事にて、改修に着手し海陸の連絡を円滑にすると共に、陸上交通路の整備を遂げんとし、今やこれが計画中に属す。立串、小串間約二十余町の里道は、村内最も交通頻繁にして、明治 31 年（1891）県補助を受け改修せられ、道幅、路面、勾配、排水等を考慮し梢整頓せらる。又、小串、曽根間は旧里道に数次修繕を加え、人道として左迄の不都合なし、と雖も地形の関係上勾配急なる箇所あり。その他、津和崎

に至る里道は、山又山を越え屈折峻険物資の運搬は更なり、人馬の交通すら甚だ困難を極む。而して、隣村に通ずるには、魚目村似首と村内小串郷大浦とを連結する一条の道路あるも、これまた、険悪にして往来者常にその労を託つ所なり」と記されている。

北魚目地域の道路は表のように昭和 30 年代から 40 年代にかけて整備され、路線バスの運行が昭和 45 年に青砂ヶ浦別道－立串間が立串線として開通した。

表３　土地改良農道整備事業（色が塗ってある線は県及び町道に管理変更されたもの）

路線名	区　間		事業内容			工　期
	起　点	終　点	巾員（m）	延長（m）	構造	
竹谷線	津和崎郷竹谷 618-27	同郷上ノ先 603-10	3.6	400	アスファルト	昭和 30～31 年
江袋線	曽根郷ヒビノ首 337-5	同郷桜平上 153-1	3.6	840	アスファルト	昭和 32 年
大瀬良・小瀬良線	立串郷樽ノ迫 1,345-2	同郷大中骨 1,721-1	3.6	1,877	アスファルト	昭和 31～33 年
曽根開線	曽根郷峠 644-1	同郷番岳 580-3	3.6	1,060	アスファルト	昭和 35～36 年
上小串線	小串線クレノ中 1506-2	立串郷平野 328	3.6	1,521	アスファルト	昭和 37～39 年
津和崎線	津和崎郷登谷 375	同郷竹ノ下 21-14	3.6	1,506	アスファルト	昭和 40～41 年
大瀬良線	立串郷平瀬本 1597	同郷大中骨 1752	3.6	852	アスファルト	昭和 43～44 年
小瀬良線	立串郷辻ノ本 1278	同郷上ノ平 1537	3.6	532	コンクリート アスファルト	昭和 45～46 年
米山線	津和崎郷立瀬 589-10	同郷上滝 567-53	3.6	737	コンクリート アスファルト	昭和 46～47 年
江袋線	曽根郷後谷 101	曽根郷後谷 241	3.6	845	コンクリート アスファルト	昭和 47～49 年
赤波江線	立串郷谷ノ坂子 1887	同郷灘瀬ノ本 1829-2	4.0	267	アスファルト	昭和 54 年
津和崎線	津和崎郷南山 417	同郷登谷 326	4.0	312	コンクリート アスファルト	昭和 55 年

３．長崎から見た中通島の位置づけ

この図は、桶屋町の乙名を勤めていた藤家に伝来した長崎港の絵図（藤 13　２－２）である。「唐紅毛船乗筋定式雖無之大概ヲ記」とあることから、異国船の航路を描くことを目的として作成されたことがわかる。絵図の作成年代は不明だが、元禄 15 年（1702）に埋め立てが完成した新地がみえる。そして、嘉永４年（1851）台場建設のために神ノ島と四郎島との間を埋め立てる填海工事が着工したが、その情報がこの絵図には反映されていない。従って、1702～1851 年の時期の様子を描いていると判断できる。絵図には、長崎港を中心に、北は平戸島、西は五島列島、南は甑島・川内（仙台）、東は有明海の東岸にあたる柳川・熊本などが記されている。この絵図の特徴としては、支配領域によって色分けしている点と実測図と異なった地形図となっている点である。当時の長崎に住む住人の地理観をもとに描かれたものと考えられる。五島列島に注目すると、まず、福江島以上に中通島が大きく描かれており、現在と異なる島の存在感があったことが確認できる。もう一点注目したいのは、西彼杵半島から列島の如く五島列島まで描かれている点である。島伝いに安全に航海できる位置に五島列島が存在することをこの絵図はイメージさせる。また、中通島が西彼杵半島と海を隔てながらも当時のひとは、近い距離に位置すると感覚的に思っていた可能性が高い。18 世紀から 19 世紀中頃における中通島の捉えられ方の一面を理解できる重要な地図である。

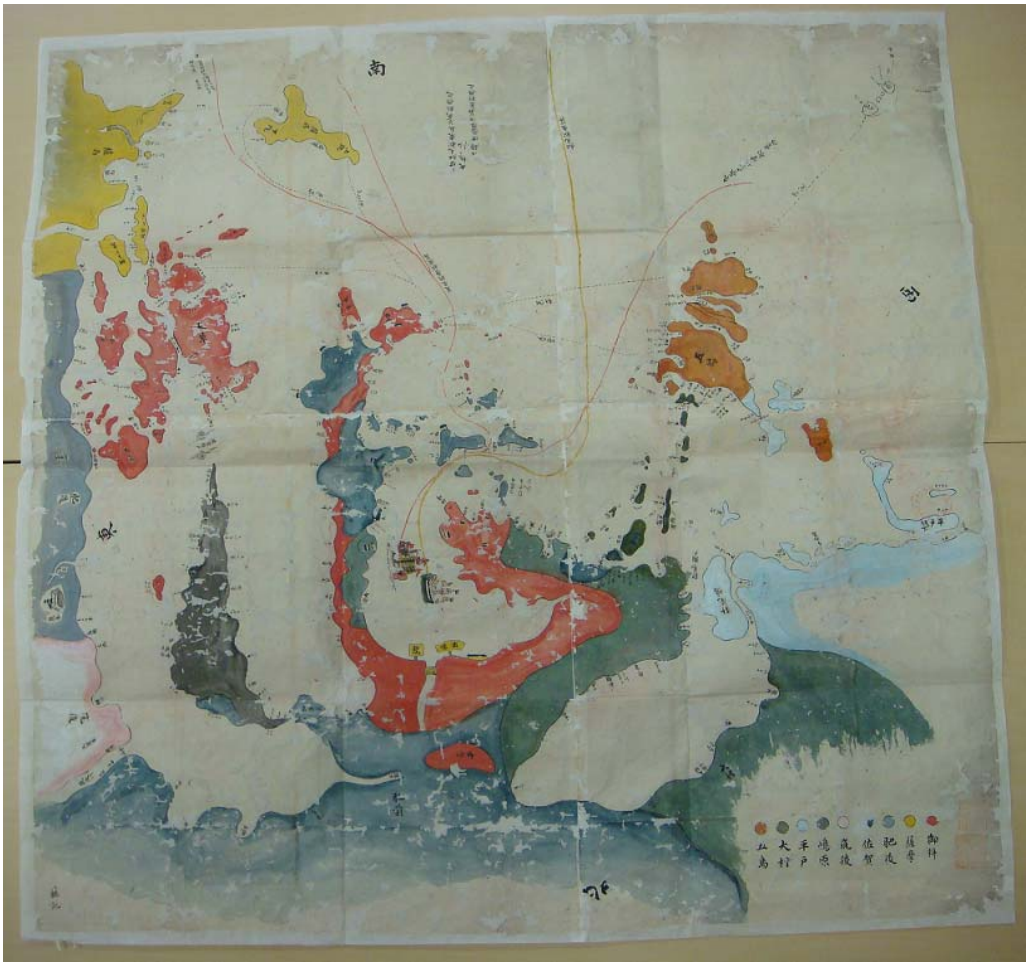


図１　全体図（北を下向きにして描かれている）　（長崎歴史文化博物館所蔵）



図２　部分１（中央に針尾島があるが、左手が大村湾になる。北が左となる）　（長崎歴史文化博物館所蔵）



図３　部分２（左端に平戸城下とあるが、中通島が平戸島の３倍程度の大きさで描かれている。五島列島の中でも中通島の情報が一番多い。それだけ、長崎から近い存在であったということになろう。
（長崎歴史文化博物館所蔵）

第４章　集落



図１　北魚目地域集落範囲図

第１節　北魚目地域の概要

１．集落成立の概要

江戸時代の寛政期に大村藩外海地方より五島地方に農民移住が開始された。これは藩の政策で、五島藩の労働生産力を高めることを主目的とし、五島方面に 3,000 人規模の移住があった。移住者はキリシタンが中心で、比較的取り締りの緩い五島藩に新天地を求めるという側面もあった。既住者（地下、じげ）が島内の海岸沿いで好条件の土地に集落を作り、漁業を中心に生活を営んでいた。寛政期の移住者の中には既存集落（地下集落）付近に住み着く者もいたが、ほどなく信仰などを理由に島内あるいは島外に再移住（２次移住）を強いられることもあった。一方で、地下集落付近のキリシタンの中には神道や仏教などに改宗する者もいた。しかし、移住者の多くは、悪条件の急斜面地のなかにわずかでも条件のよい場所を求めて開拓を進め、津和崎と立串の間の無住の山間部に集落（居付集落）を形成していった。



写真１　最も狭い一本松付近



写真２　大瀬良集落の背面

当時の地下集落である津和崎と立串は海岸沿いに集落が形成され、漁業権を持つ者により漁業を中心とした生活を営むとともに、仏教あるいは神道を守っていた。他方、津和崎と立串の中間地域の米山・竹谷・赤波江・仲知・江袋・大水などは大村藩からの移住者が形成した集落（居付集落）である。これらは海岸から上がった斜面の中腹に形成され、当時は農耕を中心に生業を営み、キリシタンで構成された集落であった。

小瀬良集落では、地下が海岸近くで漁業を中心に生活を営み、居付は

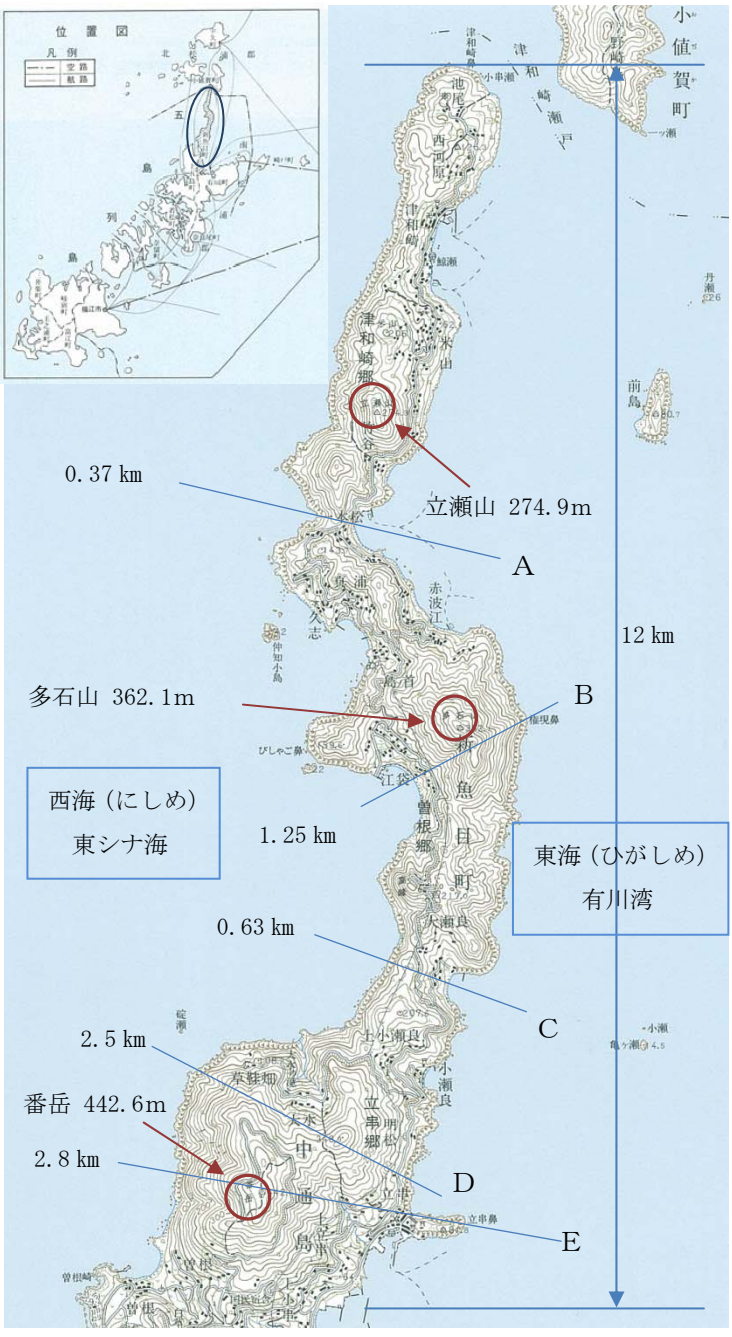


図２　北魚目全体の大きさと高さ

海岸部から山手側に外れた周縁部を開拓し、農耕を主とした生活を営んだ。このように生業や信仰の違いから、居付は地下と上手に住み分けを行い、異なった型の集落が形成された。

北魚目の集落形成要因には上記のような地下と居付の係わり方がかなり影響している。居付は漁業権を獲得できなかったことも関係し、通常では居住困難な悪条件の土地以外には選択の余地がなく、未開の土地に自らの集落を開拓し、今日まで開拓、拡大、衰退を経て維持を続けてきた。移住者が集落を新たに開くにあたっては、周囲の地形・気候などの自然環境に加え、周辺の状況に応じ、その都度周辺環境に配慮・適応しながら開拓を進めた結果、多彩な集落形態が生まれる要因となった。



写真３　急斜面地に立つ家屋の例（大水）



写真４　海岸沿いの比較的条件の良い家屋立地の例（立串集落）

２．全般的な推移

上五島の中通島は中世以前より大陸との交易の中継点あるいは漁業の拠点として港を中心として栄えた。しかし、番岳以北の北魚目地域には大きな集落は少なく、わずかに半島先端部の津和崎が中世以来開かれ、また立串が慶長年間に越前の柴田一族による漁業開拓のための定住を境に発展した集落である。この他に小瀬良と大瀬良の沿岸部に小さな集落があり、いずれも漁業集落であったとみられる。

津和崎と立串の間の山間部は未開地で、19 世紀以降の大村藩からの移住以前は無住の状態であったとみられる。江戸時代に描かれた絵図にはこの場所が山として描かれ、人家の描写がないことからもその一端を知ることができる。伊能忠敬翁地図のうち「肥前国五島沿海」（五島上）（本報告書では「伊能図」と略称する）によって、江戸時代後期の北魚目地域の状況、つまり大村藩からの移住初期の状況を見ることができる。伊能図によれば、番岳以北の北魚目地域で津和崎・立串以外に集落としては小瀬良・大瀬良に家屋が表現されており、それぞれ「字小瀬良」「字大瀬良」と集落名が記載されている。この他に、仲知集落の位置に「字中知」とあるが、家屋の表現はない。また、江袋集落の位置には集落名の記載がなく「江袋濱」と浜の名称が記載され、海岸部から少し上がった位置に家屋の表現がある。これは、まだ集落として認知されていないが、居住者が存在した状況を表わしている可能性がある。

３．伊能図に見る北魚目の概況

次図は伊能図における集落の状況を表わす。「大日本沿海輿地全図」の完成は文政４年（1821）であるが、伊能忠敬一行が上五島・北魚目を測量したのは文化 10 年(1813)であるので、絵図に見られる集落のすがたはそれ以降ということになる。また、大村藩外海地方から上五島地域に対し本格的な移住が始まったのは寛政９年（1797）以降である。従って地図に描かれたすがたは移住から間もない時期のすがたであると考えられる。ただし、測量はあくまで沿岸部に対して行われているの

で、内陸部については海岸線から見える範囲が描かれたとも考えられる。従って、内陸部に入り込んだ大水集落などは記載されていない可能性もある。

次に北魚目地域の集落について伊能図から読み取れる内容を略記する。

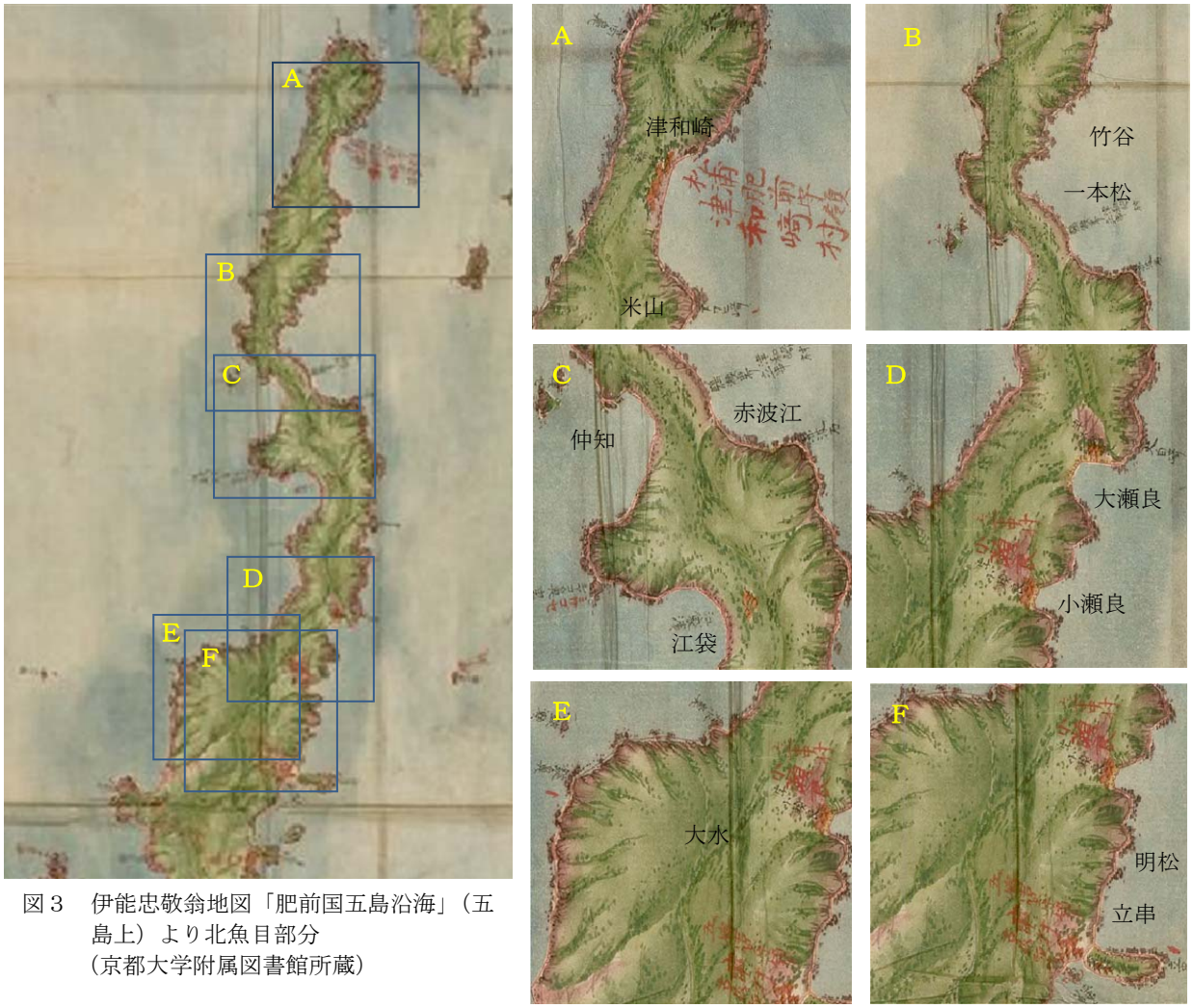


図３　伊能忠敬翁地図「肥前国五島沿海」（五島上）より北魚目部分
（京都大学附属図書館所蔵）

Ａ図：津和崎・米山集落

オレンジ色に描かれているのが恐らく屋根を表していると思われるので、家屋の存在が確認できる。屋根が多く描かれているので、まとまった集落があったことは間違いない。米山周辺については家屋の表現がない。

Ｂ図：竹谷・一本松集落

竹谷、一本松付近には家屋や地名の記載がない。

Ｃ図：仲知・赤波江・江袋集落

仲知は地名が「字中知」と描かれているが家屋は表現されていない。赤波江の付近の瀬には「赤波石」との表記があるが、家屋などの表現はない。江袋には「江袋濱」「ミサゴセ」などの表記があるが、字名の記載はない。ただし、海岸から高い位置に屋根型の表現がある。

Ｄ図：大瀬良・小瀬良集落

大瀬良、小瀬良ともに「字大瀬良」「字小瀬良」と字名の表記があり、海岸付近に少ないながらも屋根の記載がある。両集落ともに耕作地と思われる表現が見られる。

Ｅ図：大水集落

大水付近には「大水鼻」と表記があるのみである。

Ｆ図：立串集落

立串には家屋が多数描かれているため、この時代にすでに北魚目の中心的集落であったと思われる。周囲にわずかに耕作地とみられる表現もある。立串鼻南面には、立串の基礎を築いた柴田家周辺の家並みも記載されている。

表１　伊能図における北魚目各集落の状況一覧

集落名	所属村	字　名	その他の表記	近隣の記載	備　考
津和崎	津和崎村	津輪崎村	黒	高鼻　平瀬鼻　戸楽崎	家屋記載あり　Ａ図
米 山			アワヒ崎		Ａ図
一本松			記載なし		Ｂ図
竹 谷			記載なし		Ｂ図
仲 知	津和崎村	字 中知	○瀬 シマ		Ｃ図
赤波江			赤波石（瀬の表示）	鵜瀬	Ｃ図
江 袋			江袋濱（浜の表示）	ミサゴセ　ミサゴ鼻	家屋記載あり　Ｃ図
大瀬良	立串村	字 大瀬良	大白崎	タカボ崎　藤首鼻	家屋記載あり　Ｄ図
小瀬良	立串村	字 小瀬良			家屋記載あり　Ｄ図
大 水			大水鼻（岬の表示）	錠瀬　　錠鼻	Ｅ図
明 松			記載なし		Ｆ図
立 串	立串村		立串崎		家屋記載あり　Ｆ図

凡 例　　家屋表現のある集落など

第２節 北魚目地域の集落

１．　津和崎・米山

（１）津和崎集落の概要



写真１　津和崎集落（航空写真、平成 20 年）

津和崎は北魚目地域の最北端に位置する漁業集落で、津和崎瀬戸を挟み、野崎島や小値賀本島と向かい合っている。その立地条件と平戸藩領であることから、古くより小値賀などと密接な交流があったとみられ、現在でも僧侶を小値賀の明覚寺から招いている。

津和崎は中世より古文書に現われるとされ、正平２年（1347）と記される近藤定秀書状写（五島堺目旧記）に「さきめ」と記されるのが津和崎であるとされる。江戸時代は平戸藩領小値賀村のうちで、元禄 12 年（1699）の平戸領分郷村帳では、小値賀村浦分として、五島津和崎がみえ、元禄国絵図では「津和崎」とある。明治４年に魚目村に編入され、明治 19 年（1886）には小串郷などとの合併により北魚目村となる。小値賀とのかかわりが多い反面、立串までの陸路は昭和後半から平成初年にかけて道路が整備されるまでは極めて不便で、交通手段は渡海船が主であった。



図１　伊能図（文化 10 年）



図２　北魚目村字図（明治 10 年）



図３ 魚目村北部全図（明治 11～17 年）

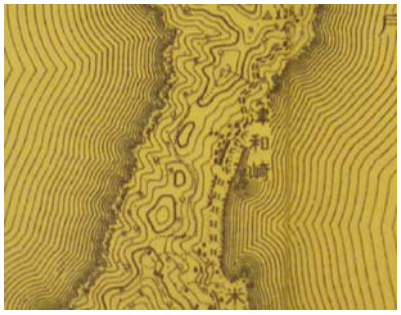


図４　陸地測量部地図（明治 38 年）

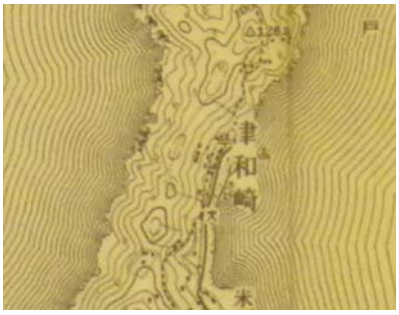


図５　内務省地図（昭和 21 年）



図６　国土地理院地図（現在）

本項で使用する地形図等の出典
伊能忠敬翁地図「肥前国五島沿海」（1813　京都大学附属図書館所蔵）
北魚目村字図・青方村字図（1877　新上五島町所蔵）
魚目村北部全図・青方村全図（1878～1884　新上五島町所蔵）
陸地測量部五万分の一地図（1905　国土地理院所蔵）― 略称：陸地測量部地図
内務省地理調査所五万分の一地図（1946　国土地理院所蔵）― 略称：内務省地図
国土地理院五万分の一地図（2010　国土地理院所蔵）― 略称：国土地理院地図

津和崎は東の有川湾に面し、背後には急な斜面が迫っており、海岸沿いから山の斜面のふもと附近にかけて集落の広がりがある。また、郷の社である本山神社は集落背後のやや高い位置におかれ、航海安全を祈る金比羅神社が集落南西の小高い山の頂上付近に祀られている。明治初年には近隣の米山や池尾に大村藩からの移住者が定着したとみられる。現在、津和崎と小値賀の間の定期船はなくなったが、瀬渡し船により小値賀本島や野崎島との間に往来がある。

なお、『上五島町郷土史』に「元文の頃（一七三六）に、泉州佐ノ浦の漁民の五島方面に出漁多く土着するもの多し。浜ノ浦、飯ノ瀬戸の漁民の祖も此の時代の移住者が多く、津和崎地区漁民の祖は飯ノ瀬戸より移住せり。（五島編年史）」とあるので、津和崎においても漁業にかかわる人々の移動が行われていたことが伺われる。

（２）米山集落の概要



写真２　米山集落（航空写真、平成 20 年）

米山は寛政期以降に大村藩外海地域より農民の移住によって開かれた集落である。明治初年になって定着が始まり、野崎島や曽根・立串・小串などを経由して米山に落ち着いた２次移住の土地と考えられる。これは米山教会に残る古い洗礼簿から確認されている。明治 10 年までには 25 名の受洗者が米山に居住していた。伊能図には津和崎集落との境付近に「アワヒ崎」との記載があるのみである。

米山は東から北東向きの斜面で、平地がほとんどない。津和崎に近い標高 90ｍほどの山の中腹に初代教会があり、移住当初はその周囲に家屋が集まっていたとみられる。『仲知小教区史』には「このことは、米山に明治 22 年には、聖アンドレアに奉献された教会があったということになる。所在



図７　伊能図（文化 10 年）



図８　北魚目村字図（明治 10 年）



図９ 魚目村北部全図（明治 11～17 年）

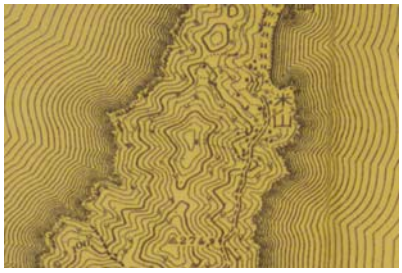


図 10　陸地測量部地図（明治 38 年）

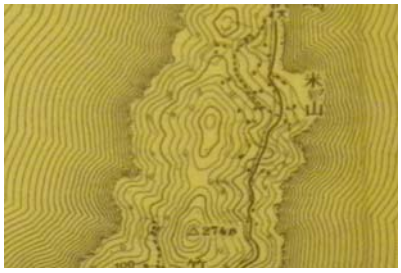


図 11　内務省地図（昭和 21 年）

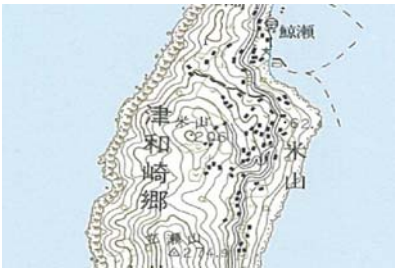


図 12　国土地理院地図（現在）

地は北魚目村津和崎郷 557 番地。すぐ近くは旧墓地になっていた。この最初の教会は 1903（明治 36）年に２回目の教会が別の番地に建設されるまでの 13 年間、信者の信仰生活の中心として使用された。教会といっても民家風の小さな祈祷所で宣教師の休憩と宿泊を兼ねていたらしい。この教会が建設された時の戸数についても信者の間で 16 戸だったと伝承されているが、当時の信者の家は教会の周囲に散在していた。」とある。

明治 36 年に教会堂が海側に大きく離れた標高 50ｍほどの敷地に建て替えられると、教会の近くに移り住む者が多かったという。初代の教会附近の土地を地元では旧米山と呼ぶことからも、集落の中心が移ったことが分かる。

（３）津和崎・米山集落の土地利用

①自然と集落

津和崎は標高 126m の山と標高 206m の米山の鞍部東麓に位置する集落で、山裾が比較的なだらかに海に落ち込む東向きの沿岸低地に所在する。半島状に突き出した北魚目地域は一本松付近で大きく括れ、それより北側は標高 274.9m の立瀬山から津和崎方面に向かって標高が低くなる。

米山は津和崎の南に位置し、東から北東向きの斜面の中腹に立地する。一本松より北側の立瀬山や米山は山体が緩やかであるが、地形的に水に恵まれず、小さな沢や井戸で水を賄っている。

津和崎・米山付近の山には照葉樹林のタブノキ萌芽群落やツバキ（椿）の植生が多く見られる。植樹したものも合わせて非常に多くの椿林があり、椿油を採取している。タブノキは成長が早く、主に薪として利用されてきた。

津和崎は古くから漁業集落であり、居住地が海浜付近に集中しているのに対し、米山は移住者の農業集落であり、居住地は斜面の中腹に点在する。津和崎では「中村」「山口」「松下」を始め 20 以上の姓があるが、米山では「白浜」「竹谷」「山田」など数種類に留まる。

②集落の推移

江戸時代以前の集落の詳細は、伊能図に見られる以上には明らかではないが、明治 10 年の字図では、津和崎の海浜部に３列以上の家屋が並んでおり、背後の斜面には耕作地がある。海浜部は後に最前面の宅地が１列消滅しているが、現在と比べて集落に厚みがある。耕作地は東斜面の標高 90m 程度の尾根付近まで広がっており、この時期は現在と比べて農業が盛んで、半農半漁の集落であることが分かる。

米山では斜面の中腹を中心に家屋が点在し、周囲に耕作地が展開しているので、この時期には純農業集落であることが分かる。この字図では、津和崎の「本山神社」が社地として着色されているが、米山には教会と思われるものは不明で、明治 22 年に初代教会が建てられた敷地もまだ耕作地である。

昭和 48 年頃の土地利用図では、津和崎・米山ともに宅地は増えているが、津和崎は集中し、米山は点在している状況である。津和崎は明治 10 年頃に比べて耕作地が減っているが、米山では耕作地を大きく増やすとともに集落が拡大していることが分かる。米山では海岸付近への進出は見られないが、東側斜面で山の頂上付近にまで家屋や耕作地を広げている。また、津和崎の中心部から北東に離れた西河原や池尾に宅地と耕作地が増えている。

昭和 48 年頃と現在の状況を比較すると、地目では大きな変化が見られないが、両集落ともに耕作地の作付け放置により、荒地が増加した。また、少子高齢化のため空き家の数が大きく増加した。昭和 50 年代以降の県道や農道の整備によって自家用車の普及が進み、立串から島の中心部方向への陸路による利便性が増したが、その一方で直接自動車が乗り入れできない宅地の放棄が著しくなった。



図 13　津和崎・米山集落の土地利用（明治 10 年）



図 14　津和崎・米山集落の土地利用（昭和 48 年）



図 15　津和崎・米山集落の土地利用（現状）

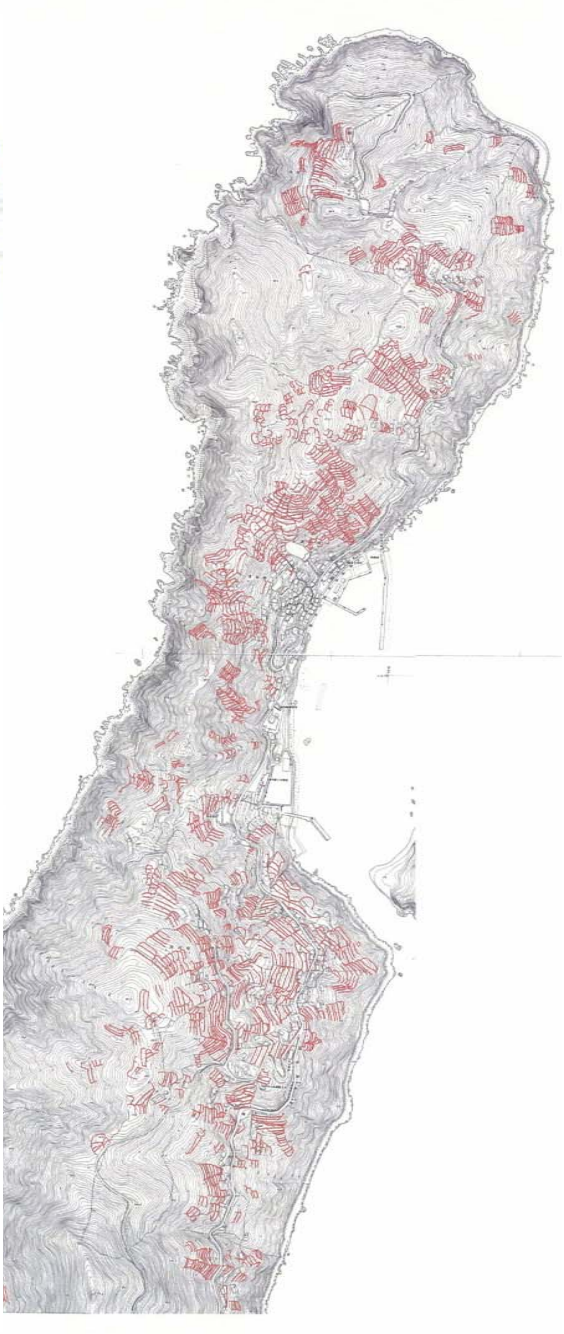


図 16　津和崎・米山集落の石垣位置（昭和 48 年頃）

２．　竹谷・一本松

（１）竹谷集落の概要

竹谷集落は立串や野崎島を経由した２次移住の土地で、伊能図には何の表記も見られない。

『仲知小教区史』によれば、竹谷を開拓したのは竹谷喜蔵・ミツ夫婦とされる。その両親は大村藩外海地方の大野より立串に移住し、成人した喜蔵も立串で結婚した。その後五島崩れにより各地を転々とし、家族がばらばらになったが、喜蔵・ミツの家族が竹谷にたどり着いたという。



写真１　竹谷集落

竹谷は南東向きの急斜面にあり、立地としては非常に厳しい。家屋は海岸から立瀬山中腹にかけての谷沿いに斜面に張り付くように建っている。

竹谷にはかつて立瀬山鞍部の反対斜面にも後に開拓された「西竹谷」と呼ばれる集落があった。開拓者は野首出身の白浜半次郎で、明治 23 年（1890）に野首教会で結婚後、分家して西竹谷に入植した。西竹谷は一時期７戸ほどになったが、昭和 40 年代から人が減り始め、昭和 52 年に無人となった。

竹谷はカクレキリシタンからカトリックに復活した集落であるが、集落内に教会堂は建てられなかった。集落の開拓は、仲知方面から一本松・竹谷・米山と順次津和崎側に向かって進んでいった。



図１　伊能図（文化 10 年）



図２　北魚目村字図(明治 10 年)

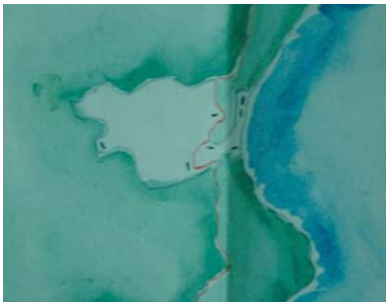


図３ 魚目村北部全図（明治 11～17 年）

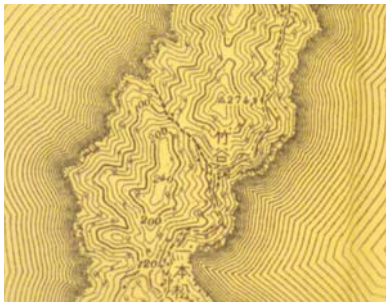


図４　陸地測量部地図(明治 38 年)

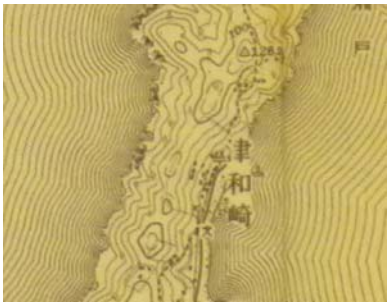


図５　内務省地図（昭和 21 年）



図６　国土地理院地図（現在）

（２）一本松集落の概要

一本松は大村藩外海地域からの移住によって開かれた集落である。文久（1861～1863）頃に定着が始まり、淵ノ元から仲知経由での移住や立串を経由した２次移住の土地と考えられる。伊能図には何の記載もなく、明治 10 年の魚目村字図（大図）にも記載されていない。



写真２　一本松集落

『仲知小教区史』には「山添兵蔵、オモ夫婦は、長男山添忠太郎、セオの家族と一本松に移住、そこの開拓者となる。初孫の山添初五郎は 1854 年に立串で生まれているが、次次（ママ）の孫マキ（1862 生まれ）からは仲知生まれとなっているので、この家族の一本松への移住は 1860 年代の初め頃だったといえる。」とあり、一本松集落の草分けを知ることができる。

一本松は東から北東向きの急斜面で小さな湾を囲む集落であるが、平地がない厳しい立地である。海岸からいく分上がったところに家屋があり、集落内に教会堂はない。現在、一本松では漁業共同経営団方式ではなく、私設経営の大敷き網（定置網）が営まれている。



図７　伊能図（文化 10 年）



図８　北魚目村字図（明治 10 年）

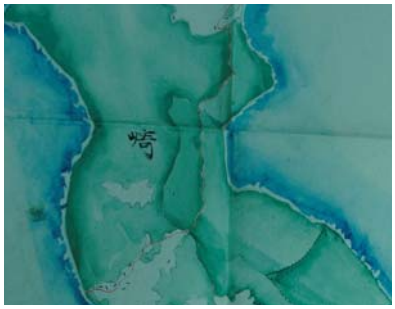


図９　魚目村北部全図（明治 11～17 年）

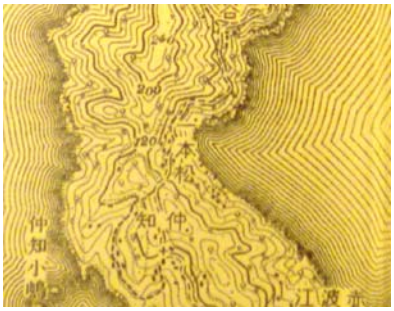


図 10　陸地測量部地図（明治 38 年）

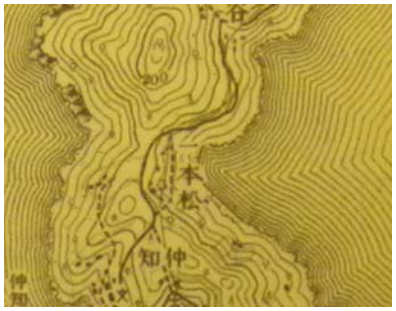


図 11　内務省地図（昭和 21 年）



図 12　国土地理院地図（現在）

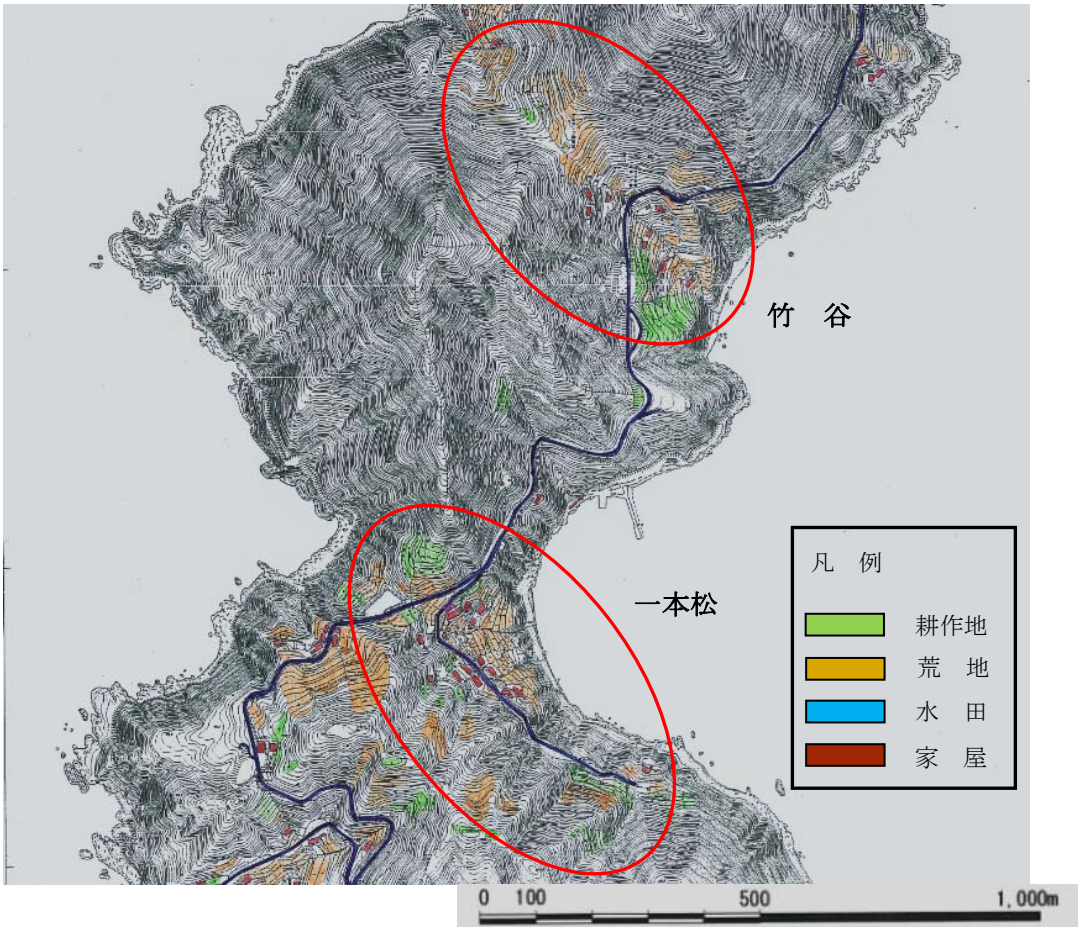


図 13　竹谷・一本松の土地利用状況（昭和 48 年）

（３）竹谷・一本松集落の土地利用

①自然と集落

竹谷は北魚目地域の北部に位置し、標高 274.9m の立瀬山と標高 245m の山の鞍部東麓に位置する集落で、山裾が急勾配で海に落ち込む斜面の中腹にある。竹谷から一本松付近にかけては、北魚目地域で最も括れた場所で、ここより北側は津和崎方面に向かうにしたがい標高が低くなる。一本松は竹谷の南に位置し、標高 143m の山と標高 245m の山の鞍部付近に位置する集落で、東から北東を向いた斜面の中腹にある。両集落は有川湾に面しているが、東シナ海側の斜面は大きく浸蝕され、切り立った急峻地形となる。江袋入口の高峯トンネル付近から仲知まで西海に沿って走る県道は一本松付近で東海沿いに変わる。

竹谷・一本松付近の山には照葉樹林のタブノキ萌芽群落がよく見られるのは津和崎と同様であるが、津和崎・米山のようなツバキの植生は少ない。竹谷・一本松では「白浜」「竹谷」「山添」「川端」など、姓は数種類に留まる。

②竹谷・一本松集落の推移

江戸時代以前の集落の詳細は、伊能図に記された以外は不明である。明治 10 年の字図には 7 区画ほどの宅地が見られるが、このうち海浜沿いの 2 区画が農業移住者のものかどうかは不明である。点在する家屋の背後の斜面には耕作地がある。両集落ともに小さな沢に水を頼っている。

昭和 48 年頃の竹谷・一本松の土地利用としては、家屋数も耕作地もわずかに増えている。集落上方への車道が整備されたが、東斜面の集落全体としては大きな変化はない。明治 10 年の字図に見た海浜部の宅地は、昭和 48 年にはすでに見られない。一方、一本松集落では標高 40～60m付近に家

屋と耕作地が増加している。集落内の標高 50m付近の等高線沿いに集落の奥まで車道が整備され、自家用車による利便性は高まった。

現在の両集落の状況は昭和 48 年頃とほとんど変化がない。荒地や空き家が増加したことは島内の他の集落と同様である。竹谷では県道より下方に廃屋が目立つ。逆に一本松では、県道から漁港に降る道が整備されたことによって漁業従事者の利便性は増した。

３．仲知・赤波江

（１）仲知集落の概要

仲知は大村藩外海地域からの農民の移住によって開かれた集落である。仲知・赤波江以北は旧平戸藩領である。「至徳二年（1385）五月三日の禅源等連署裁決状案（青方文書）に『ちうち』とみえ、平戸松浦氏と青方氏の所領相論は、禅源ら六人の寄合によって当地（仲知）と、江袋の間の『みさこさき』（現津和崎郷のビシャゴ）などを境に、その北の山野・河海・網などを平戸松浦領とし、青方氏はその南の山野・河海・網・牧などを知行し、これに異議を言わぬよう取り決めている。」（長崎県の地名）とあるように、中世から地名が記されるが集落があったかどうかは分からない。仲知は江袋とともに寛政期の移住の中では早い時期に定着した土地と考えられる。伊能図には家屋の記載はないが、「字中知」と記されているので、集落として認識されていたと思われる。



写真１　仲知集落



図１　伊能図（文化 10 年）



図２　北魚目村字図（明治 10 年）

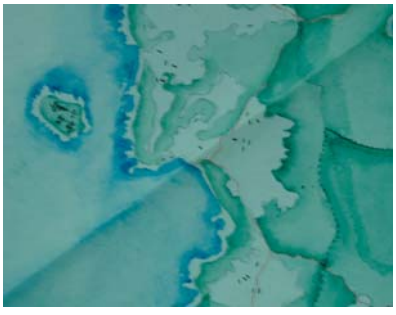


図３ 魚目村北部全図（明治 11～17 年）

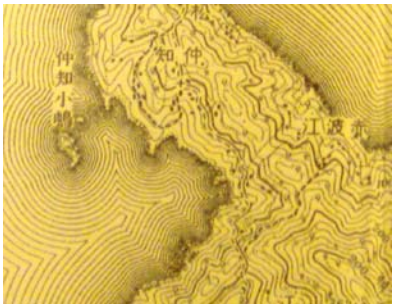


図４　陸地測量部地図（明治 38 年）

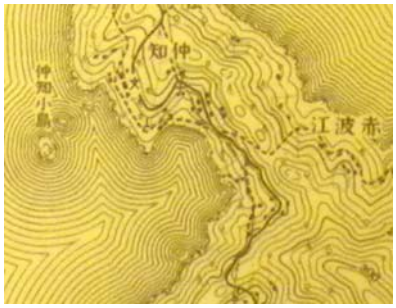


図５　内務省地図（昭和 21 年）



図６　国土地理院地図（現在）

仲知には「島ノ首」「真浦」「久志」の３地区があるが、ここではこれらを合わせて仲知集落とする。『仲知小教区史』によれば、島ノ首・真浦・久志の順に定着が進んだようで、「第一次開拓夫婦は島本与治右衛門・ツヤ夫婦、島本与治平・シマ夫婦、島本宇吉・トメ夫婦の３夫婦で、その共通の特性は早い時期（1810～1820 年）に西彼杵・外海地方から移住した夫婦であるという点である。」とある。立串や小串などを経由して 1830 年代後半に島ノ首に２次移住として定着した夫婦もあるとみられる。

仲知は南西向きの斜面にあるが、緩斜面が少ないためにまとまった耕作地や田もない。家屋は海岸から少し上がった場所にあり、強風対策として大木を防風林としているものが多い。

（２）　赤波江集落の概要

赤波江は大村藩外海地域からの農民の移住によって開かれた集落である。安政４年(1858)から文久２年(1862)頃に定着が始まり、野崎島などを経由した２次移住の土地と考えられる。



写真２　赤波江集落（航空写真、平成 20 年）

『仲知小教区史』には「この家族は、第２世代の赤波江三吉・ソノ夫婦の時、野首から赤波江の灘瀬ノ元に移住し、赤波江の最初の移住開拓家族になった。」とあり、赤波江の草分け家族が知られる。赤波江には４つの小字があり、灘瀬ノ元への移住が最初で、教会のある谷ノ坂子が最後と言われ



図７　伊能図（文化 10 年）



図８　北魚目村字図（明治 10 年）



図９ 魚目村北部全図（明治 11～17 年）

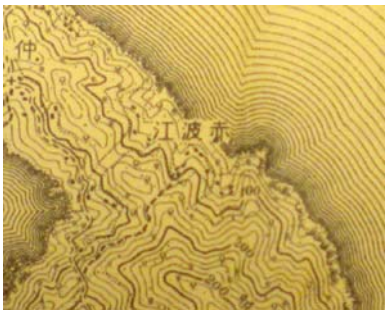


図 10　陸地測量部地図（明治 38 年）

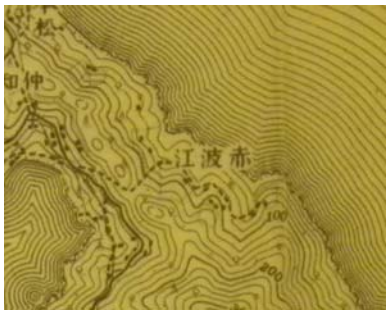


図 11　内務省地図（昭和 21 年）



図 12　国土地理院地図（現在）

ているので、条件の良い場所から定着が始まったと思われる。

伊能図には津和崎村と立串村の境界である「鵜瀬」と「赤波石」と岬の名前が記されているが、家屋の表現は見られない。集落は標高 70m前後の北から北東向きの急斜面に立地し、地形的条件の厳しい場所である。しかし、地滑り地形があり、現在の家屋が建つ周辺がわずかになだらかな場所である。現在の住民はすべて集落と同じ「赤波江」姓だが、以前は「大瀬良」姓もわずかながらいた。後者は大瀬良出身で、赤波江に再移住したとみられる。

赤波江から海岸線を南に下ると現在でも無住の小字深迫・多石・藤ノ首・上ミ小河浦・下ミ小河浦を過ぎて大瀬良に達するが、立串郷（旧立串村）の中では赤波江だけが飛び地になる。

（３）仲知・赤波江集落の土地利用

①自然と集落

仲知は北魚目地域のほぼ中央部、標高 362mの多石山と標高 164mの山の鞍部西麓付近に位置する集落で、山裾が比較的なだらかに湾に落ち込む斜面の中腹にある。集落付近は多石山より標高 112mの鞍部に向かい急激に標高が下がり、北側は津和崎方面に 143.7mの山を境に一本松付近で大きく括れる。湾の両端は急峻な浸蝕崖となっている。

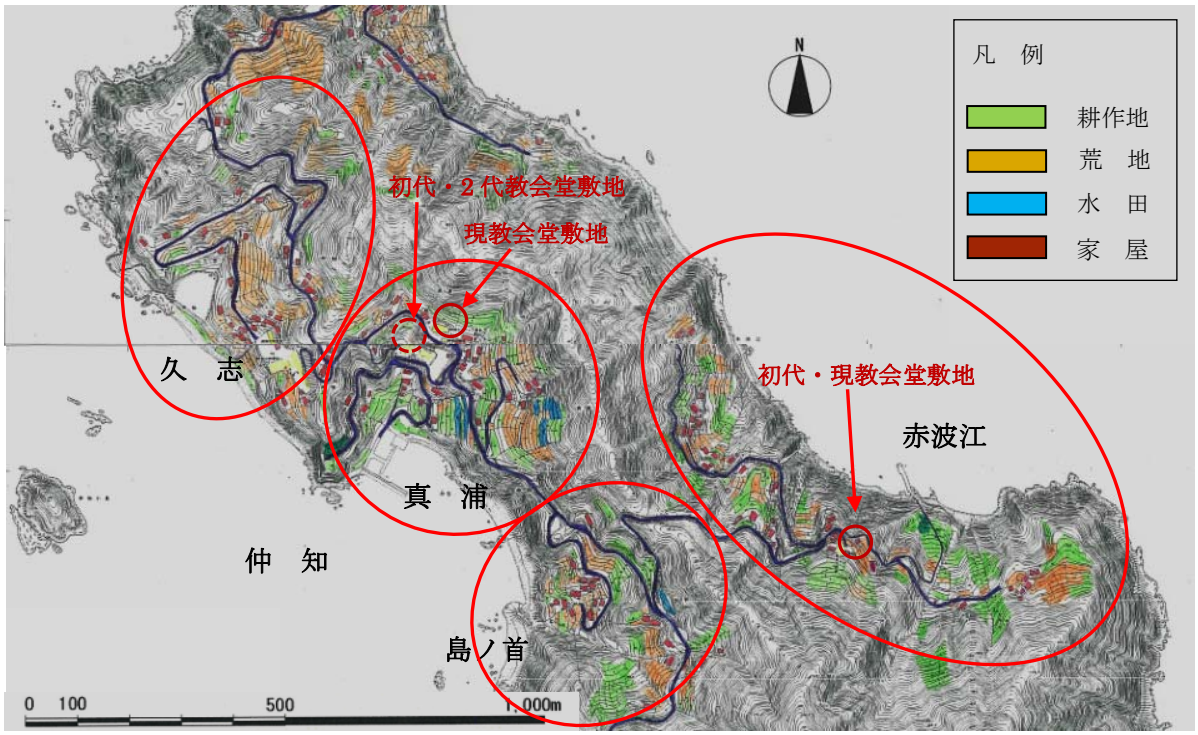


図 13　仲知・赤波江集落の土地利用状況（昭和 48 年）

赤波江は仲知の東の反対側斜面、北から北東向きの斜面の中腹に位置する。斜面が海に落ち込む急峻な地形であるが、地崩れで緩勾配の場所に家屋や耕作地を開いている。

仲知・赤波江付近の山には照葉樹林のタブノキ萌芽群落がよく見られるが、ツバキの植生は津和崎ほど多くは見られない。仲知では「真浦」「久志」「山添」「島本」「井出淵」など数種類の姓があるが、赤波江では「赤波江」姓が中心で、「竹谷」「川端」など少数に留まる。

②仲知・赤波江集落の推移

明治 10 年の字図には、仲知の島ノ首・真浦・久志にまとまった家屋や耕作地が見られる。最も早く定着した島ノ首では、家屋が狭い谷筋にややまとまって並んでいるが、真浦・久志では点在する家屋周辺の斜面に耕作地がある。真浦では海岸近くまで耕作地が広がり、赤波江で点在する家屋の

周辺に耕作地がある。仲知・赤波江集落はいずれも小さな沢に水を頼っているが、この地域は年間を通して水が涸れない。

昭和 48 年頃の仲知・赤波江では、いずれも点在しながら家屋数が増え、耕作地も標高 100m付近まで開拓している。仲知の島ノ首は谷筋が狭いためか、南東側の標高 60～100mの斜面を大きく開拓している。赤波江では、標高 100m付近まで畑を広げるとともに、家屋より低い方向にも広げている。赤波江集落の共同墓地は波止の入口付近にある。

現在の仲知・赤波江は昭和 48 年頃と特に変化はないが、荒地や空き家数が増加した。昭和 50 年代以降のさらなる県道整備で島の中心部への陸路による利便性が高くなった。仲知では漁港に降る道が整備されて埋め立てが進み、また昭和 54 年に仲知教会が県道脇に移動したため、集落中心部の景観は大きく変化した。

４．江袋

（１）集落の概要

江袋は大村藩外海地域からの農民の移住によって開かれた集落である。『仲知小教区史』に「仲知教会と青砂ヶ浦教会にある 21 のキリシタン集落の洗礼簿の調査により、1815 年から 1831 年頃までの約 16 年間に少なくとも西彼杵・外海地方から直接江袋へ移住したキリシタンの夫婦は６組存在していたことを突き止めることができたので、(以下略)」「1815 年から 1831 年頃まで



写真１　江袋集落（航空写真、平成 20 年）



図１　伊能図（文化 10 年）



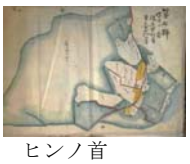
後谷



浜口



桜平上



ヒンノ首

図２　青方村字図（明治 10 年頃）



図３　青方村全図（明治 11～17 年）

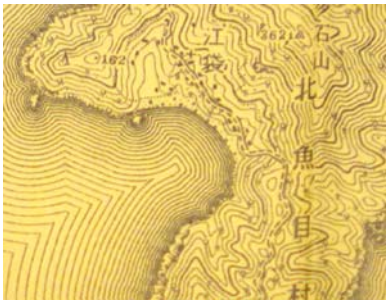


図４　陸地測量部地図（明治 38 年）



図５　内務省地図（昭和 21 年）



図６　国土地理院地図（現在）

の 16 年間に江袋に居住していた６組の夫婦から９人の子供が出生し少なくとも６家族が存在していたことが確認できる。」とあることから、当時の移住の中では早い時期に定着した土地であることが分かる。

江袋の地名は、至徳２年（1385）の古文書に『ゑふくろ』『みさこさき』とあるが、集落があったことは確認できない。伊能図には「江袋濱」とあり、わずかな家屋が記されている。字名がないため、集落として認識されていないか、もしくは定住初期の状況を示しているとも推定できる。

江袋は南西向きの斜面が多く、地崩れ地形のために比較的緩勾配のまとまった土地があり、畑地の他に田もある。広い耕作地に隣接する家屋では、強風対策として高さ６尺程度の石垣塀を築いている。

江袋は北魚目地域の中でも特に住民の姓が多く、「楠本」「尾上」「谷口」を始め、20 以上の姓がある。これは条件のよい土地なので他所から多くの人々が移り住んできたことを示している。特異なのは天保 14 年から明治初年までの約 25 年の間に集落内に天満宮が勧請されていたことで、これは北魚目地域の移住集落では他に例を見ない。初代の教会堂が現存するとともに、集落全体として明治初期の様相をよく残している重要な集落である。

江袋は明治 17 年まで青方村に属していたため魚目字図（大図）には記載がない。

（２）土地利用

①自然と集落

江袋は北部半島の標高 362mの多石山西麓に位置する集落で、山裾が海に落ち込む南西から西向きの斜面にある。斜面の地滑りによって比較的緩やかな地形が形成されているため、他の移住集落に比べると条件のよい土地と言える。

江袋付近の海岸部は西海（にしめ）に面した急峻地形であるが、集落前面は袋状の湾になっており、周辺は中世から好漁場であった。背後の多石山の斜面は大部分が照葉樹林のタブノキ萌芽群落で覆われた自然林であるが、耕作放棄地を覆うように２次林となっているところもある。タブノキは成長が早く、主に薪として、また家屋の床下材などにも利用されてきた。

江袋集落は『五島キリシタン史』によると寛政時代に大村藩神ノ浦の七右衛門・チエ夫婦が移住したことに始まる。『仲知小教区史』によれば 1815～1831 年に６組の夫婦が江袋に居住していた。以降、大村藩外海地域から農民が直接あるいは２次移住として江袋の地に住み着いた。

上五島ではそもそも平坦地が少ないため水田は島中央部の青方・有川周辺にまとまっている程度であるが、集落の中央に水田と畑地がある移住集落は北魚目地域では江袋だけである。この耕作地は集落北西のビシャゴ山（標高 159m）によって季節風が弱められるので条件がよい。景観の特徴として、多様な防風石垣が上げられる。貴重な緩斜面を最大限に利用して耕作地を開墾した結果、耕作地側からの強風に備え、防風石垣が耕作地と宅地の間、あるいは耕作地の中間に築かれている。

②集落の推移

移住初期の寛政期から明治初年に至るまでの集落形態は伊能図に見られる以上には明らかではないが、明治５年の「邪宗信仰之者調書」には 14 軒（63 人）と記されている。明治 15 年の江袋教会建築時には 17 戸の世帯があったことが『仲知小教区史』により知られる。この数字は当時の洗礼簿を根拠にしている。教会建設から 14 年後の明治 29 年に登記された記録には教会の名義人が「ＯＳ他 16 名」とあるが、洗礼簿により 25 戸程度であることが分かる。明治中期頃までは概ねこの程度の集落規模であったといえる。一方、明治 10 年頃と推定される字図には宅地として着色されている敷地が 40 区画ほど見られる。この字図には天保 14 年から明治初年まで勧請された江袋天満宮の敷地が「社地」として、明治 15 年建設の江袋教会敷地が「宅地」として着色されている。

明治 10 年頃の土地利用形態は基本的にほぼ近年の状況と変わりがないため、この頃にはすでに集落の原型が形成されていたと考えてよかろう。大村藩からの移住者は川沿いや緩傾斜地など条件のよい場所に散居するようになったとみられるが、草分けの夫婦の定住地については不明である。集落の構造としては、教会から港に降るナカノ川に沿った「タテ道」と、教会のある等高線付近の「ヨコ道」が集落の中心線であり、小字名でいえば「浜口」「後谷」「桜平上」が集落の中心となる。それは現在教会堂が建っている場所である。宅地は海抜 30m付近から 70m付近にかけて点在する。集落の西寄りを流れるビシャゴ川沿いには耕作地、特に水田がまとまっている。水田はこの他に海岸沿いの低地に一列並んでおり、これも他に例を見ない。

集落の中心部からやや離れた「中ノ河内」「ヒビノ首」はそれぞれ小さな沢で区切られた地区であるが、土地の勾配、風当たりなどで若干条件が悪いため、やや遅れて開拓された可能性がある。これらの地区はそれぞれに姓が偏っており、海抜 100m付近の「桜平上」と同様に、親族でまとまる傾向が見られる。

明治 10 年頃の字図に見られる墓地は港の入口に立地し、現在の共同墓地の場所が記載されている。居住地よりも低い場所に設けられている。

江袋では明治 10 年頃の耕作地を基点に山側に向かって開拓が進んでいるが、際立って大きく開かれたわけではなく、近年まで明治初期に近い土地利用形態が見られた。宅地は明治 10 年頃に比べて 20 ほどが既存宅地の近くに増加した程度である。北魚目地域では昭和 40 年代前半が最も耕作地面積が大きく、この頃を境に現在に至るまで下降線を辿る。

最も変化が見られるのは港の周辺で、漁業に本格参入したため漁業に必要な建物、施設が増加し、漁港としての機能を備えた。県道から港に降る車道が作られたのもこの時期である。県道が整備されたことで集落が教会上方の等高線付近で分断されたが、生活上の分断は感じられない。

現在の状況は昭和 48 年頃と大きくは変わらない。地目としては「畑」や「田」であるが、耕作放棄地が増加した。特に山側の段畑は早い時期に耕作放棄されたため、タブの木の成長がかつての耕作地を完全に呑み込んでしまった。水田も全く耕作されていない。



図 7　江袋集落の土地利用（明治 10 年頃）

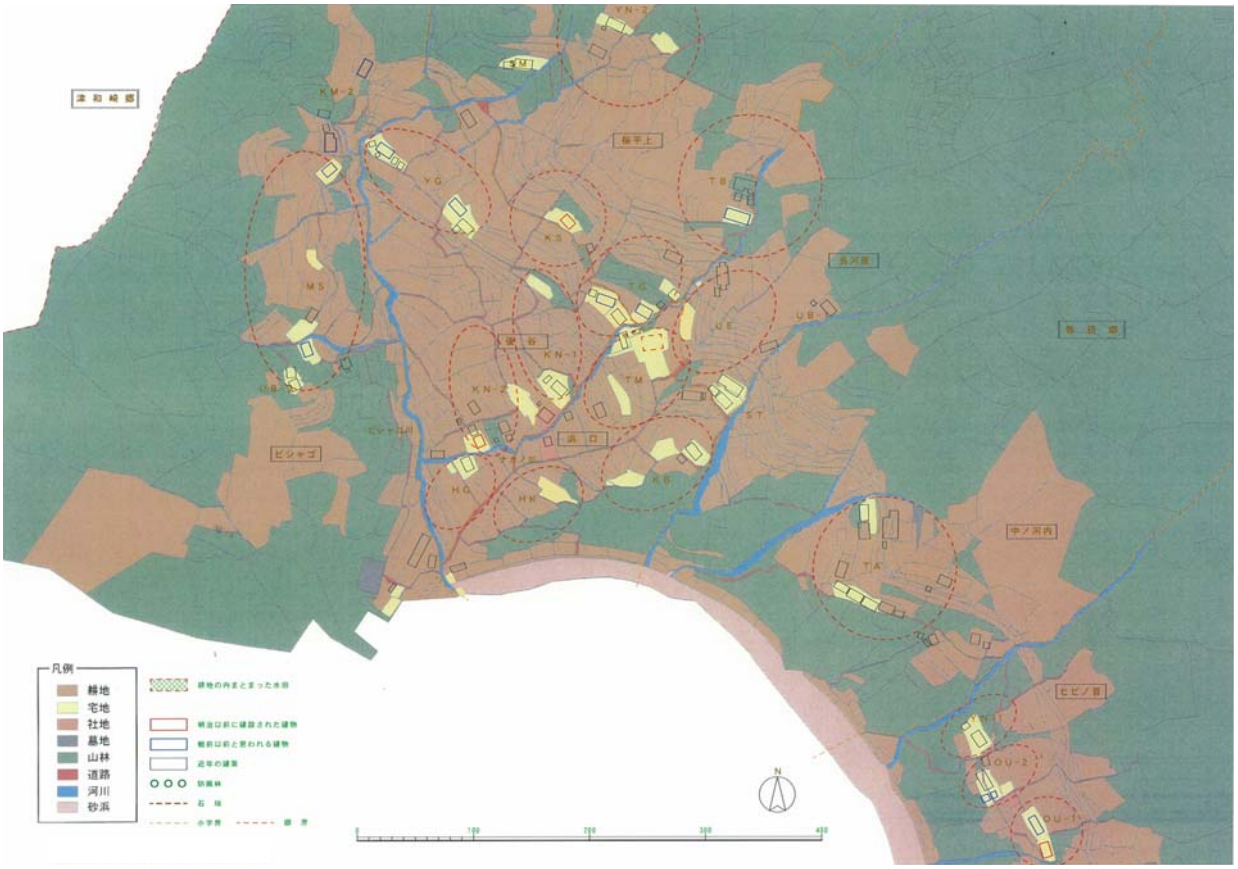


図８　江袋集落の入植推定地



図９　江袋集落の土地利用（昭和 48 年頃）

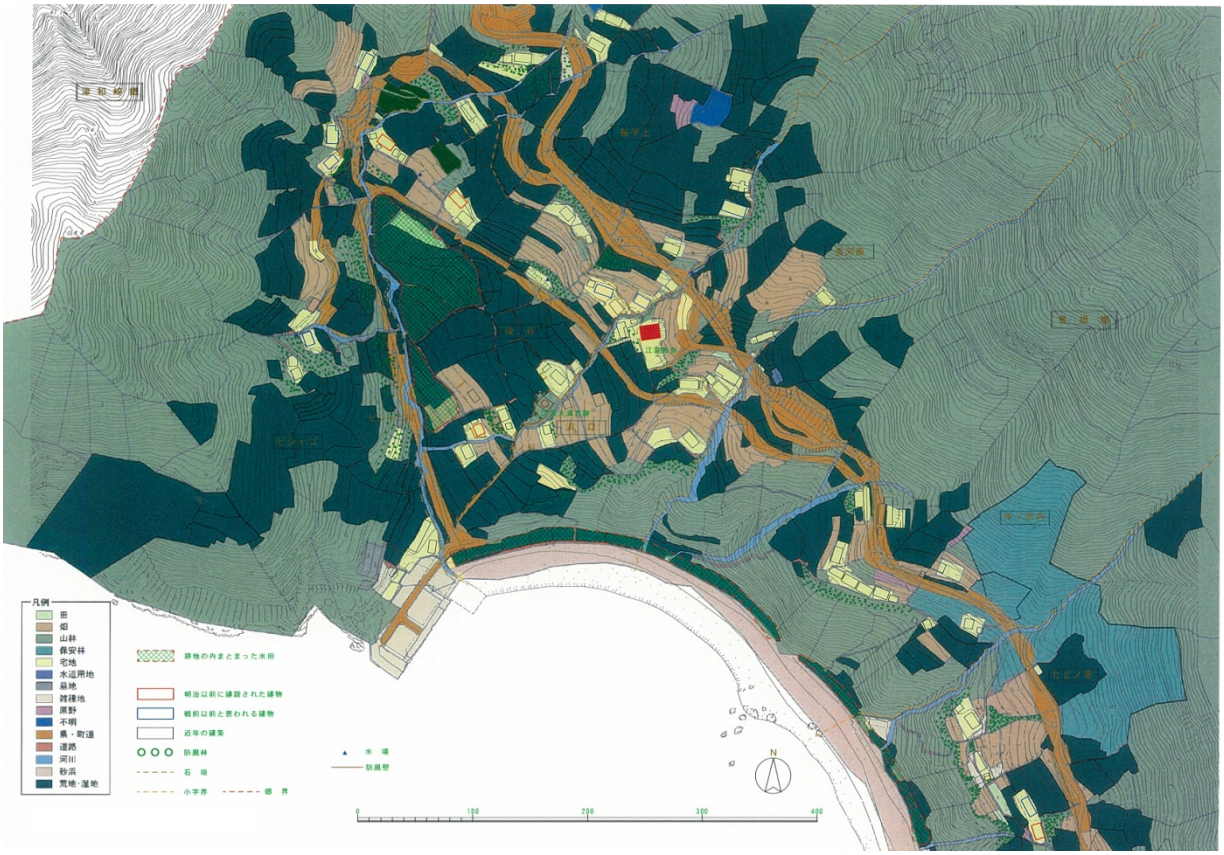


図 10　江袋集落の土地利用（現在）



図 11　江袋集落の石垣位置（昭和 48 年頃）

５．大瀬良

（１）集落の概要



写真１　大瀬良集落（航空写真、平成 20 年撮影）

大瀬良集落の起源は、大村藩外海地域から寛政期以降に農民が移住したものと、大村藩の移住以前から当地に漁業を中心として海岸沿いに住んでいたものの二通りがあるといわれる。伊能図には海岸沿いの一角に家屋と耕作地が見られ、「字大瀬良」と記されていることから、測量時には集落があったことは分かるが、この当時大村藩からの移住者がいたかどうかはこの図からは分からない。大瀬良は立串村（江戸時代には藤頸村）に属し、小瀬良とともに立串集落と関係が深いとみられる。

大瀬良では、かつて浜側には地下（じげ）が、山側にはいわゆるカクレキリシタンが住んでいたという。浜には山神社が鎮座しており、地下によって維持管理されていた。現在はカクレキリシタンから神道に改宗した人々によって維持管理されている。以前より宮司はおらず、古くは立串から、現在は奈摩郷より来る。祠の脇にある建立碑により、創始は明治 31 年（1998）、創始者は大瀬良郷中であり、立串の乙宮神社の末社である。

大瀬良は東から南東向きの斜面で、海岸からやや上った位置に家屋が散在する。畑の他、海岸近くにまとまった田がある。この集落の特徴は、移住農民の多くが昭和に至るまでカクレキリシタンのままでカトリックに復帰しなかったことである。その後に神道などに改宗した例が多く、集落に教会はない。現在は海岸沿いの土地に家屋はない。



図１　伊能図（文化 10 年）



図２　北魚目字図（明治 10 年）

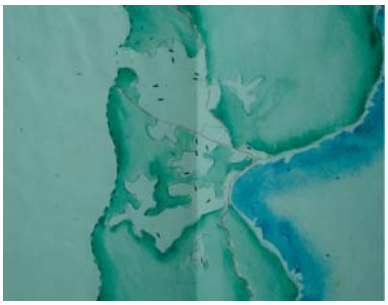


図３　魚目村北部全図（明治 11～17 年）

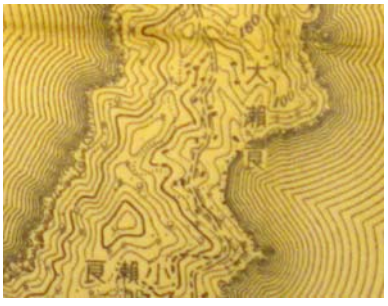


図４　陸地測量部地図（明治 38 年）

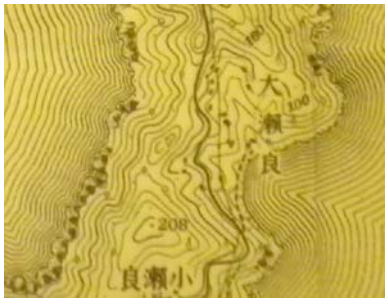


図５　内務省地図（昭和 21 年）



図６　国土地理院地図（現在）

（２）土地利用の推移

明治 10 年頃の字図を基に起こした図を見ると、集落内には３本の小河川がある。北側から流れる小河川の河口近くに水田があり、集落南側にも小さくまとまった水田がある。宅地は概ね点在しており、標高 20m付近より高い場所にある。宅地の周辺に耕作地が開かれている。

昭和 48 年頃の集落の状況を見ると、明治 10 年頃に比べて既存の宅地の近辺に新たな宅地が増加しており、より標高の高い土地に開墾が進んでいることが分かる。県道より集落内部に向かう道が整備されることによって集落内に降る里道が利用されなくなり、荒れ始めた。従来の墓地が同じ県道沿いの新墓地に移されている。

現在の大瀬良集落の状況は、昭和 48 年頃と大きくは変わらない。しかし、耕作放棄地や空き家の数が非常に多くなっている。近年には漁港関連の整備が進み、集落から海岸に向かう利便性は向上している。便利な場所に空き家ができた場合、不便な場所から集落内で転居する例も見られる。

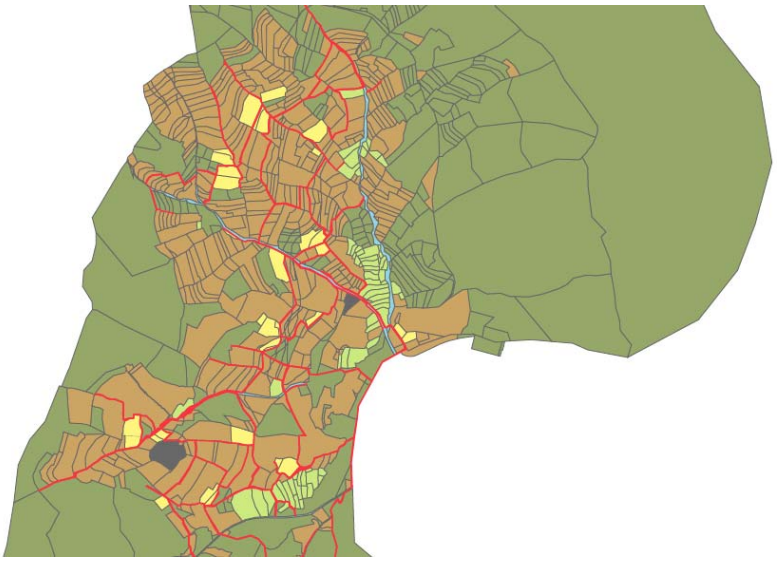


図７　大瀬良集落の土地利用（明治 10 年）



図８　大瀬良集落の土地利用（昭和 48 年）



図９　大瀬良集落の土地利用（現在）

６．小瀬良・上小瀬良

（１）小瀬良集落の概要

伊能図には海岸付近に家屋と耕作地が見られ、「立串村字小瀬良」と記されていることから、大村藩からの移住以前に集落があったことが分かる。彼らは漁業や塩作りを主な生業としていたと思われる。大村藩からの移住について詳細は不明であるが、移住者（居付）は海岸付近の地下（じげ）とは離れた斜面の中腹に家屋を設け、定住を始めたとみられる。



写真１　小瀬良・上小瀬良集落（航空写真、平成 20 年撮影）

小瀬良は東から南東向きの斜面で、海岸沿いに家屋が集まる。地下は漁業を中心に生活を営むが、背後の斜面にまとまった耕作地を所有しているので、半農半漁に近い生業形態であったとみられる。地下はもともと仏教徒であったが、戦後に神道に改宗している。海岸近くの塩竈神社はこうした人々によって創設された神社で、『新魚目町郷土史』には「天明七年十月村民神徳を敬い石祠を建立し祭る。明治四年十月神社御調により塩釜神社と公称した。当初は小石祠のみであったが、のち社殿を建立し、現在に至っている。」とある。また、神社に伝わる棟札に記される由緒書きでは、「慶長年間　柴田勝家第二ノ孫　柴田勝貞　従者ト共ニ平戸島ヨリ移来シ　其ノ当時ハ字藤ノ首に居ヲ置キ製塩ノ傍ラ漁業を成シ　字大瀬良　字小瀬良　字明松　字立串ノ五ケ所ヲ三ケ年迄　祭神ヲ守護シ回居中　元和５年ノ頃　字小瀬良ニ塩釜大明神ヲ鎮座奉り尊崇セシトロ伝ニ伝フ」ともあるので、小瀬良集落の形成は慶長年間から元和年間あたりまで遡る可能性もある。

現在は海岸付近の住民は減り、空き家や空地が増えたが、他の集落と比較して明らかに家屋が建て込んでいる。



図１　伊能図（文化 10 年）



図２　北魚目字図（明治 10 年）



図３　魚目村北部全図（明治 11～17 年）

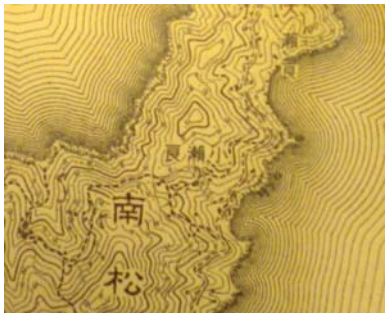


図４　陸地測量部地図（明治 38 年）

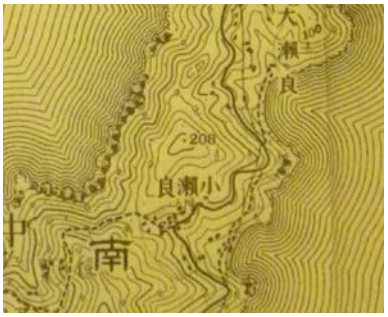


図５　内務省地図（昭和 21 年）



図６　国土地理院地図（現在）

（２）上小瀬良集落の概要

上小瀬良は大村藩外海地域からの農民移住によって開かれた集落である。移住時期など詳細については分かっていない。

上小瀬良は東から北東向きの斜面で、標高 90m前後の高い位置に家屋が散在する。上小瀬良の移住者（居付）はカトリックに復帰した時期が遅かったとされ、教会組織の法人登記は昭和 21 年である。初代の教会については詳細が不明であるが、現在の教会よりやや北側に 150m程離れた場所にあった。『仲知小教区史』によれば、初代教会は転出者の民家を買い受けて改造したもので、老朽化のために昭和 24 に敷地を移して現在の教会を木造で建てた。

地下（じげ）は海岸近くに居住し、大村藩からの移住者は地下の耕作地を挟んで高い場所に集落を形成した。集落の中心付近には小さな教会が建つ。教会設立当初は仲知小教区に属していたため、小瀬良より北の江袋・仲知などとも関係が深かったが、昭和 46 年に大水教会とともに曽根小教区に編入されたため、大水・曽根などとも交流範囲が広がった。

地下と居付とは居住地に高低差があり、耕作地を緩衝地帯として住み分けている。この状況は集落の形成過程や性格を明らかにする要素として重要である。

（３）小瀬良・上小瀬良集落の土地利用

①自然と集落

小瀬良・上小瀬良は北魚目地域の中央より南部に位置し、標高 207.6mの山と番岳に連なる標高 348.9mの山の鞍部東麓に位置する。山裾が緩やかに海に落ち込み、小さな湾の海浜部から斜面中腹にかけて集落がある。海浜近くが小瀬良で、斜面の中腹が上小瀬良である。集落には数本の沢が流れ込み、流量は多くはないが年間を通して涸れることはない。付近の山には照葉樹林のタブノキ萌芽群落がよく見られ、ツバキは天然に群生したものと椿油採取の目的で植えられたものとがある。

両集落は江戸時代には五島藩富江領に属する。両集落を隔てる斜面には小瀬良集落の畑があり、これが緩衝地帯としての役割を果たしている。

小瀬良では「田島」姓が多く、その他「山口」「本谷」など数種類の姓があるが、上小瀬良では「小瀬良」姓が圧倒的に多い。

②集落の推移

江戸時代以前の集落の詳細は伊能図に見る以上には明らかではない。明治 10 年の字図には、小瀬良の海浜近くに宅地がまとまっており、背後の斜面に整然と地割された耕作地が見られる。海浜部には塩竈神社が鎮座し、近くに墓地もある。それに対して上小瀬良では、標高の高い斜面に点在する家屋の周辺に耕作地が開かれている。両集落ともに同じ水系の小さな沢に水を頼っている。

昭和 48 年頃では、両集落ともに家屋数も耕作地も増えている。上小瀬良では特に北東方向の斜面の開墾が目立つが、小瀬良では際立った開墾は見られない。

上小瀬良では、昭和 30 年代から 40 年代にかけて県道が整備されたことにより、県道沿いに家屋が増えた。大水に至る道路も整備されたが、家屋は増えていない。教会が南側に移動して建て替えられても、家屋が移動することはなかった。

現在の小瀬良・上小瀬良の状況は昭和 48 年頃と比べて大きな変化は見られない。

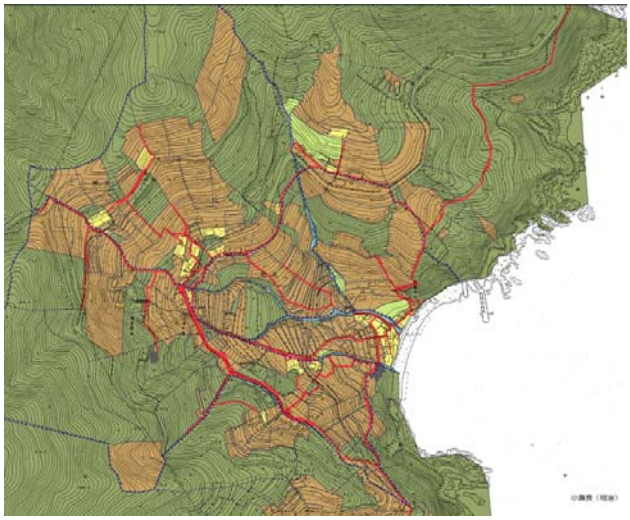


図７　小瀬良・上小瀬良集落の土地利用
（明治 10 年頃）

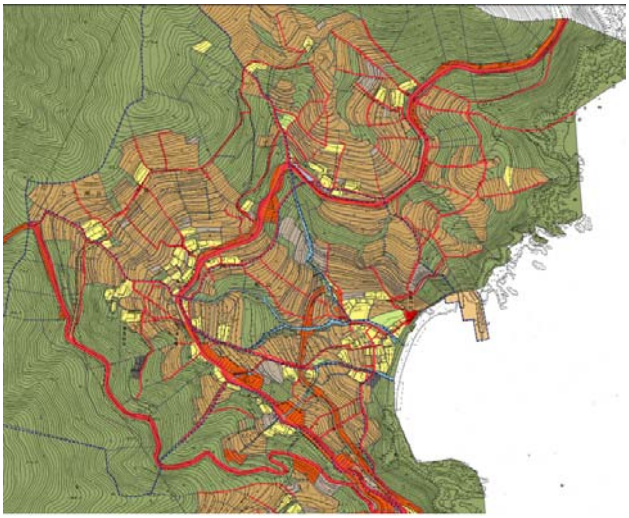


図８　小瀬良・上小瀬良集落の土地利用
（昭和 48 年頃）

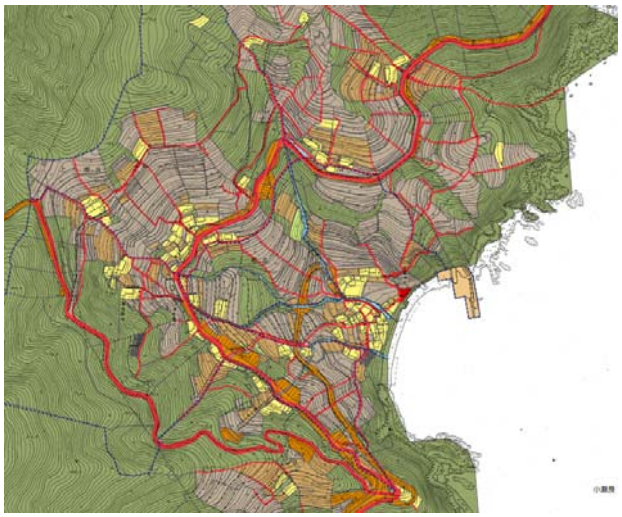


図９　小瀬良・上小瀬良集落の土地利用
（現在）

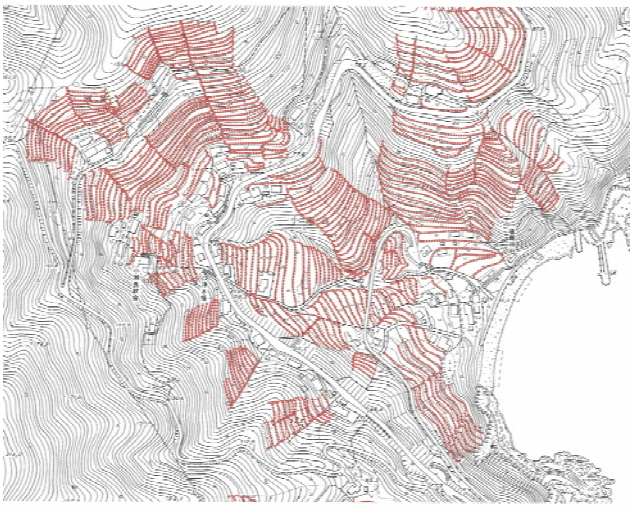


図 10　小瀬良・上小瀬良集落の石垣位置
（昭和 48 年）

７．大水

（１）集落の概要



写真１　大水集落（航空写真、平成 20 年撮影）

大水は大村藩外海地域からの農民の移住によって開かれた集落で、当時の移住の中では早い時期に定着した土地である。『仲知小教区史』には、「しかし、大水も仲知・江袋と同様に立派なキリシタン集落で、かなり早い時期から西彼杵・外海地方から移住し開墾を試みた夫婦がいた。その夫婦とは、外海（神ノ浦）から直接大水に移住した大水安五郎・マシ夫婦で、（中略）この夫婦は、1830 年の初め頃、大水に移住したとみられるが、移住先の大水では 5 人の男の子に恵まれ、そのことがこの後、子孫が縦横に繁栄し大水一族を形成してゆく源となった。」 とある。

伊能図には「大水鼻」の記載があるが、家屋は見られない。大水集落は標高 180m前後の北向きの急斜面で、北魚目地域で最も条件の厳しい場所である。教会の周辺にわずかになだらかな場所があり、家屋と耕作地が集まっている。北向きの急斜面であるため、海からの強風対策として大木を残した防風林がよく見られる。

大水は血縁集落で、すべて「大水」姓である。「イエワカレ」という分家を繰り返すことによって家屋と耕作地を開拓し、集落を拡大してきた。大水から少し離れた草鞋畑にも入植したとみられる。

大水は明治 17 年まで青方村に属していたため、魚目村字図には含まれず、青方村字図にある。



図１　伊能図（文化 10 年）

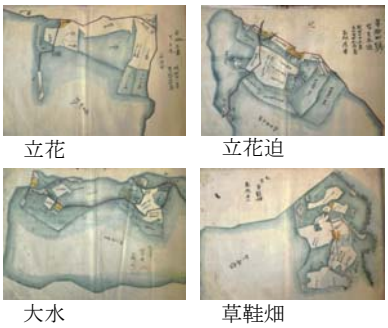


図２　青方村字図（明治 10 年頃）



図３青方村全図（明治 11～17 年）

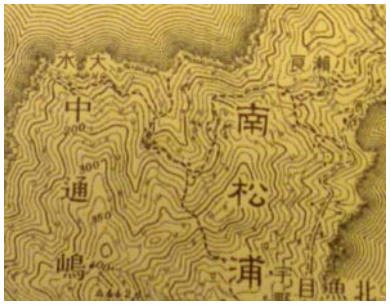


図４　陸地測量部地図（明治 38 年）

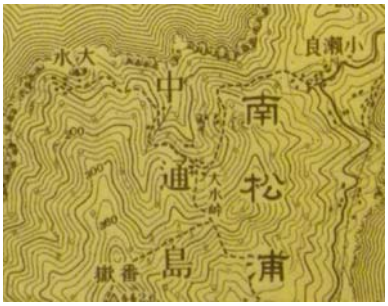


図５　内務省地図（昭和 21 年）



図６　国土地理院地図（現在）

（２）土地利用の推移

大水は番岳中腹の標高 180m付近の斜面を中心として開かれた集落であるが、明治 10 年頃の字図を見ると分かるように、急斜面の中のわずかに勾配の緩い土地に家屋がある。水には恵まれており、２本の大きな流れの他にも谷筋に小さな流れが多く見られる。

明治 10 年頃の字図でも、集落の中心付近に宅地はまだ数える程度しかない。耕作地は宅地の背後斜面周辺に開拓されているが、初代教会と現教会の間以外はかなり急斜面である。明治 14 年に、墓地近くに最初の教会が建てられ、概ね現在の集落の骨組がこの時期にでき上がったと思われる。

昭和 48 年頃には明治 10 年頃の宅地の間を埋めるように家屋が立ち並ぶ。傾斜が厳しい土地であるため、特に勾配の緩い教会周辺に家屋が集中している。一方で、標高の高い場所や中心から離れた場所では転出者が増え、空き家や耕作放棄地が目立ち始める。小瀬良との車道が整備され、集落内の奥まった土地に向かう道や草鞋畑方面への道も整備された。

現在の状況は地目としては昭和 48 年頃と大きくは変わらないが、空き家や耕作放棄地がさらに増加した。浄水施設や墓地に向かう道路も整備されたが、草鞋畑や標高の低い場所の土地さえも放棄された。

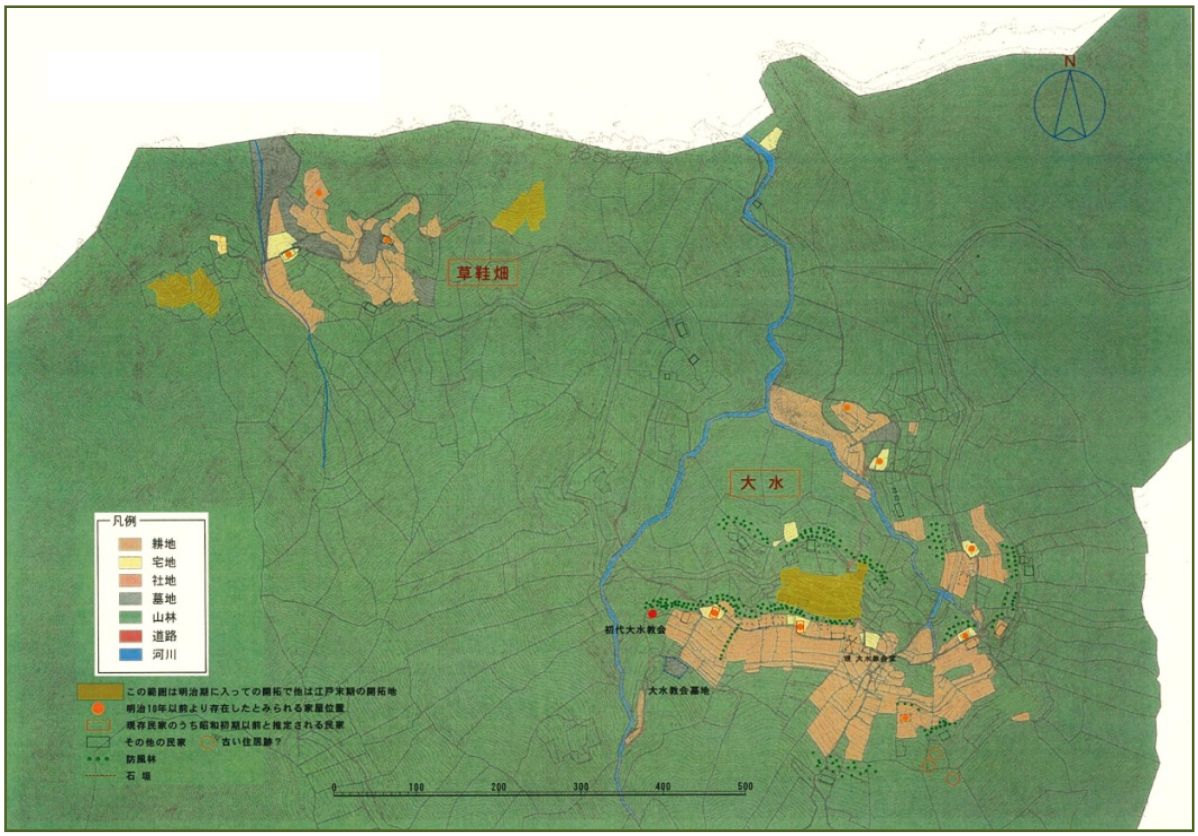


図７　大水集落の土地利用（明治初期以前）

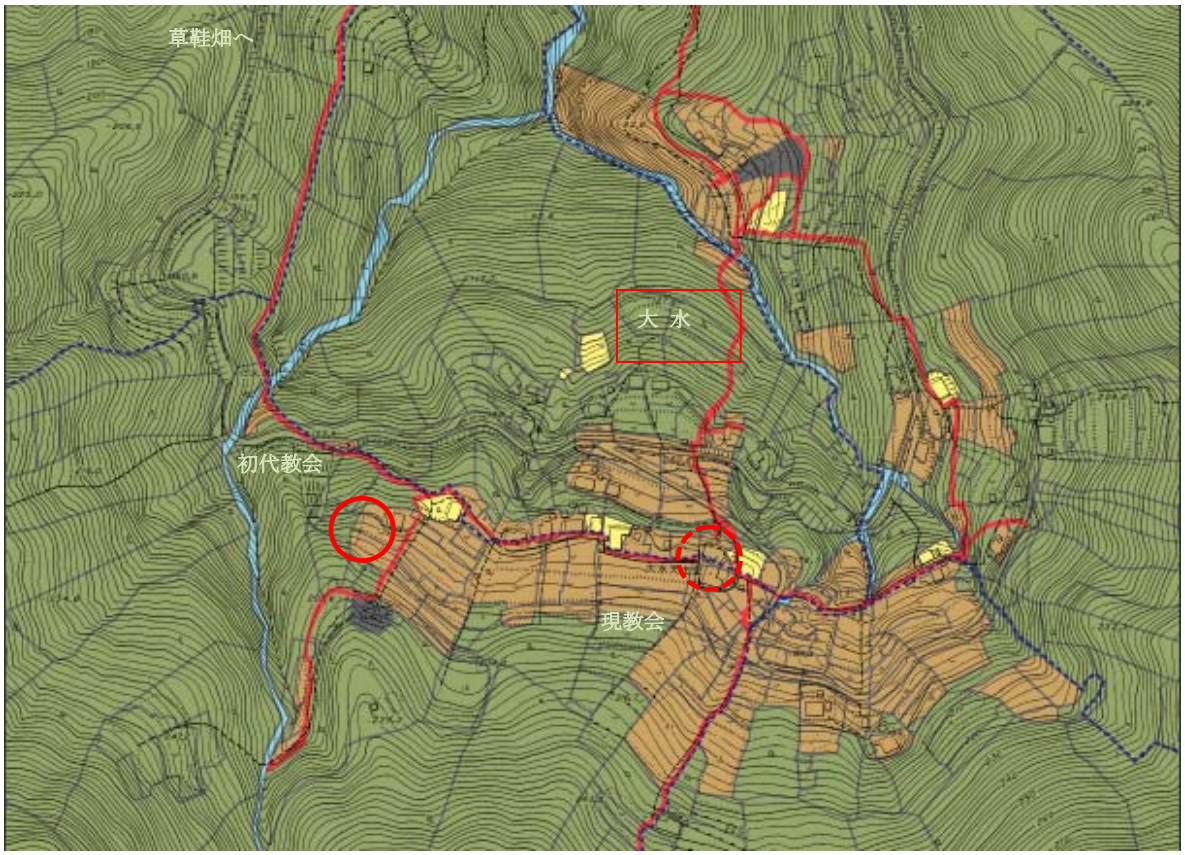


図８　大水集落の土地利用（明治 10 年頃）



図９　大水集落の土地利用（昭和 48 年頃）

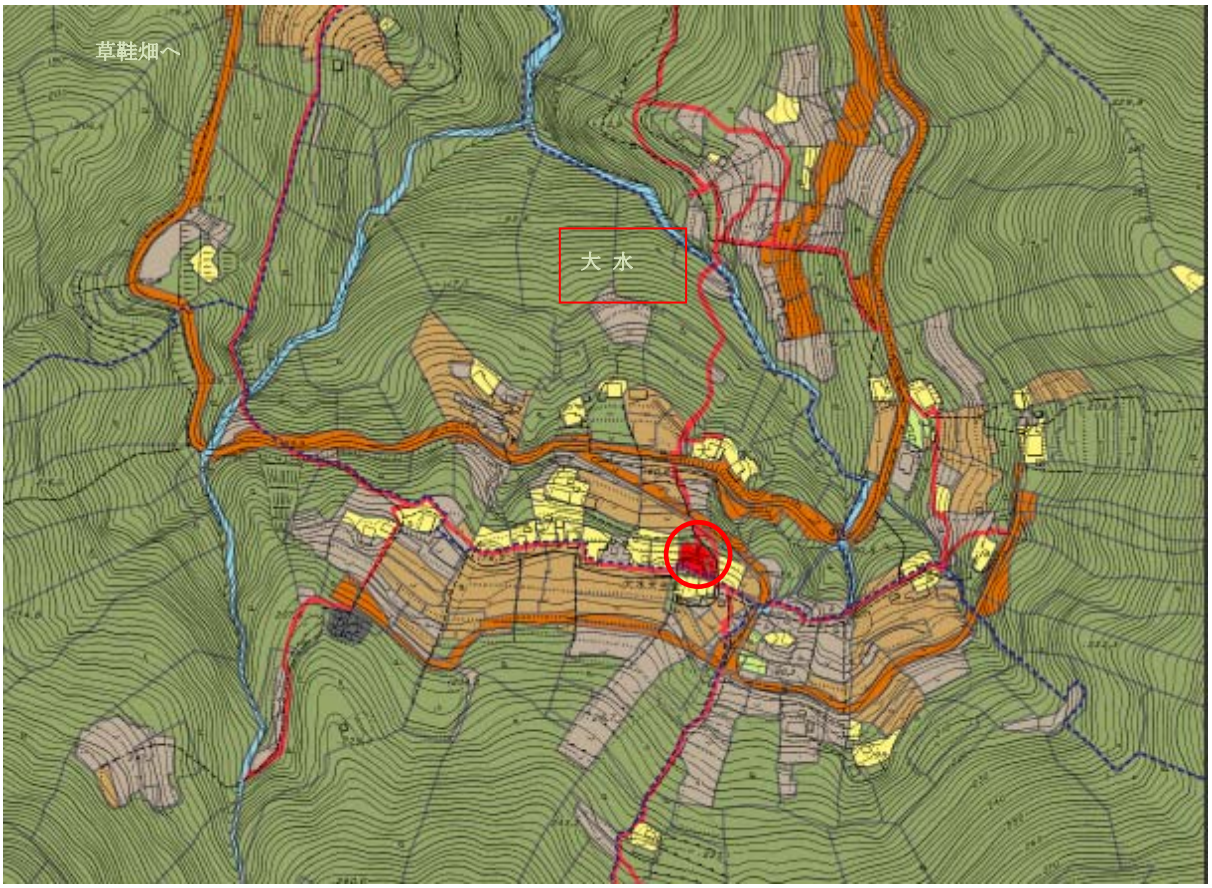


図 10　大水集落の土地利用（現在）

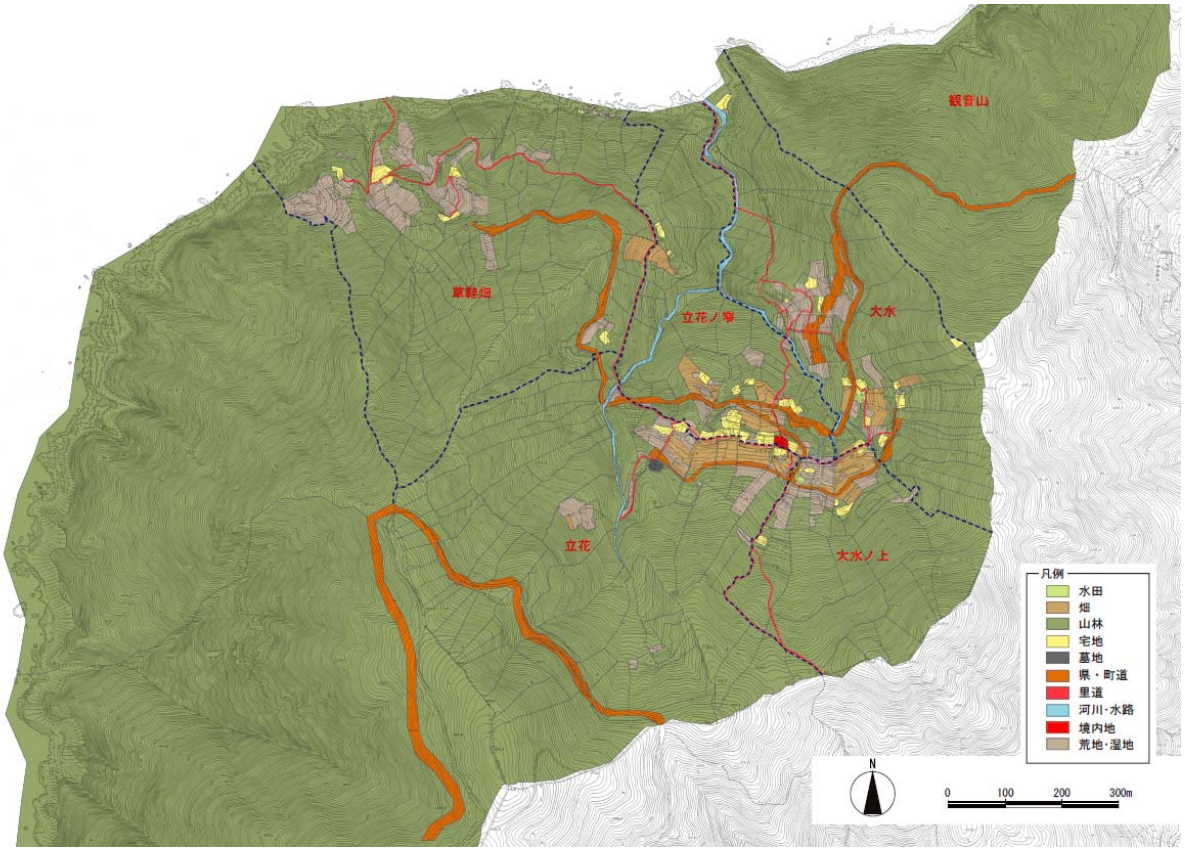


図 11　大水集落の現況

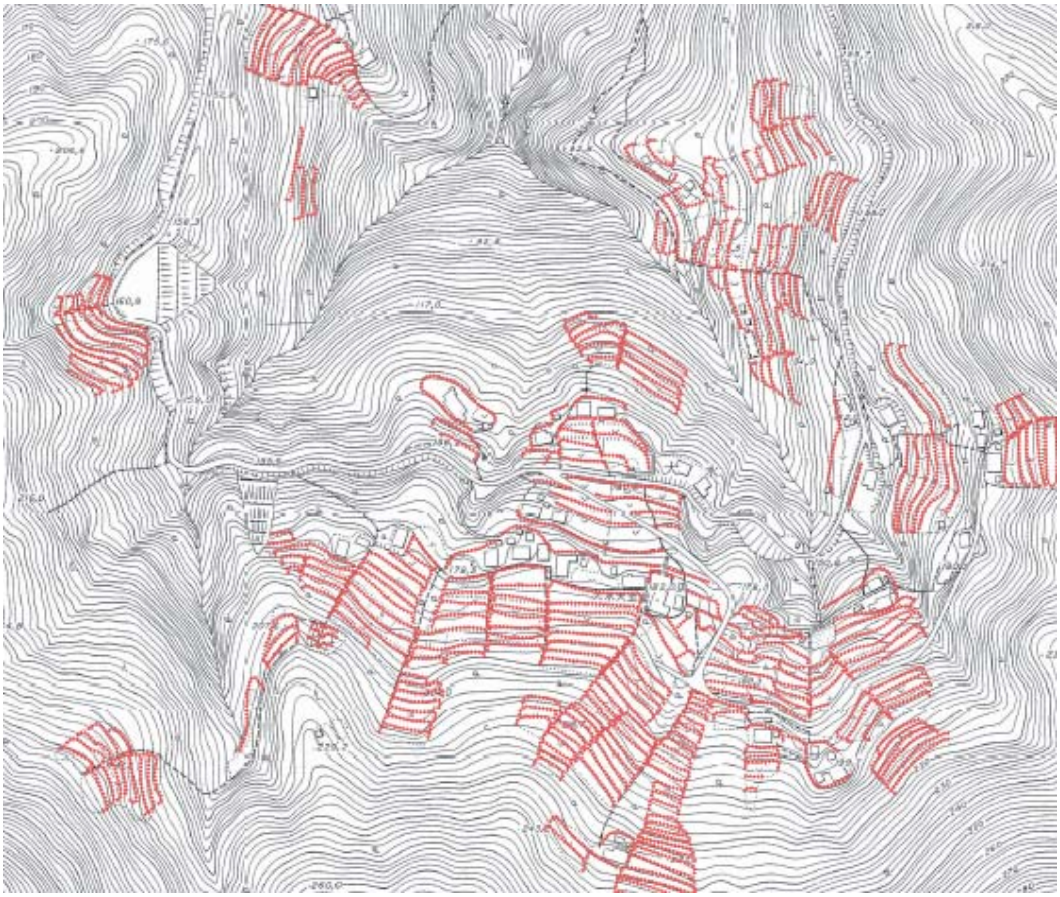


図 12　大水集落の石垣位置（昭和 48 年頃）

８．立串

（１）集落の概要



写真１　立串集落（航空写真、平成 20 年）

立串は慶長 18 年（1613）に越前の柴田勝家の子孫が越前国から平戸を経由して移住し、定着したことによって漁業集落としての基礎が作られたと言える。江戸時代には大瀬良・小瀬良・明松とともに藤首村に属していたが、それ以前のことはよく分かっていない。柴田家は当初製塩などで生計を立てていたが、後に本格的に漁業に参入した。立串は典型的な漁業集落で、立串鼻の付け根にあたる海岸部、比較的傾斜の緩い場所に集中して家屋が並んでいる。限られた敷地いっぱいに建築された家屋も多く、変形敷地の形態が家屋の平面や立面に表われたものも多い。

仏教徒が大多数で、柴田家の定着にともない海岸近くに乙宮神社を建て、維持管理している。立串は現在でも北魚目地域の中心的存在であり、商店や農協、漁協などが集まっている。道路が整備



図１　伊能図（文化 10 年）



図２　北魚目村字図（明治 10 年）

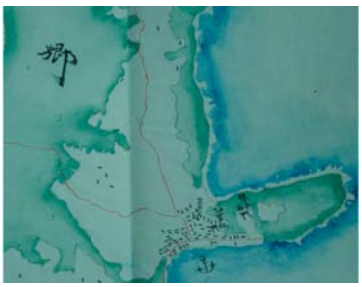


図３　魚目村北部全図（明治 11～17 年）

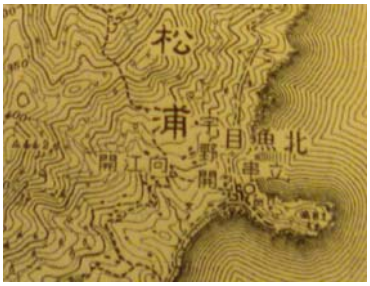


図４　陸地測量部地図（明治 38 年）

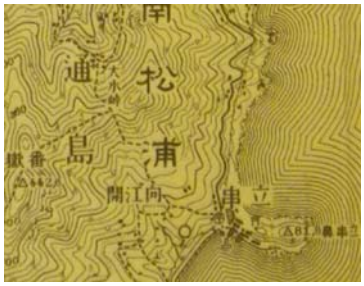


図５　内務省地図（昭和 21 年）



図６　国土地理院地図（現在）

される前は島内の渡海船や島外からの定期船の発着場があり、旅客ターミナルとしての役割を果たしてきた。漁獲物の出荷とともに、カンコロの積み出し港としての機能も有していた。

一方、山手には大村藩外海地域からの農民の移住によって開かれた上立串集落がある。明治 38 年の地図で「宇野開」「向江開」と記された地名が開拓地域を示すとされる。他の集落の記録の中に立串を経由して２次的に他集落に移住しているとあるので、早い時期に大村藩から立串に向けて移住が行われたとみられる。上立串は小瀬良・大瀬良とともにカクレキリシタンが遅くまで残っていたとされ、カトリックに復活した者が少なく、教会が建設されなかった集落でもある。

（２）土地利用の推移

①自然と集落

立串は北魚目地域の南部、標高 442.6ｍの番岳東麓に位置する。海浜部から斜面の中腹にかけて集落がある。海岸から東に向けて立串鼻が大きく突出し、その北側は荒々しく浸蝕されている。立串鼻のつけ根付近が立串で、斜面の中腹にあるのが上立串である。立串は有川湾に面し、南から南東に開けている。集落には３本の小河川が流れ込んでおり、流量は多くはないが、番岳が水源であるため年間を通して涸れることはない。

付近の山には照葉樹林のタブノキ萌芽群落がよく見られ、上立串にはツバキの植生も多い。天然に群生したものと椿油採取の目的で植えられたものとがある。

立串は江戸時代には五島藩富江領に属し、海浜沿いの集落は約 400 年前から存在している。漁業を生業の中心とするが、半農半漁で海浜近くに集中して家屋が並ぶ。これに対して上立串は斜面の中腹にあり、農業を中心とした移住者の分散型の集落である。小瀬良と上小瀬良との関係によく似ている。

立串では「柴田」「小倉」「木谷」「小賀」などを始め多種類の姓があるが、上立串では「宇野」姓など数種類に留まる。

②集落の推移

江戸時代以前の集落形態は伊能図に見られる以上には明らかではない。明治 10 年の字図では、立串鼻のつけ根近くに宅地が密集し、背後の斜面に広い耕作地が見られる。その一部は細かく区分され、地割は整然としている。海浜部には乙宮神社や墓地もある。

上立串は斜面に点在する家屋の周辺に耕作地が設けられた農業集落である。両集落ともに同じ水系の小河川（沢）に水を頼っている。

昭和 48 年頃は両集落ともに家屋数が増え、特に立串鼻つけ根付近の増加が著しい。耕作地は明治 10 年頃にすでに開墾が相当進んでおり、立串と上立串の間はほとんど開墾の余地がないようである。海岸線が埋め立てられ、漁港施設と旅客船ターミナルなどが整備されるなど、漁港周辺が大きく変化した。埋め立て地は宅地となり、海浜に４列ほど家屋が立ち並んだため、旧海岸線はほぼ消滅した。古い墓地は上立串との間の斜面に移転した。

昭和 48 年頃と現状を比較すると、地目としては大きな変化が見られないが、他の集落と同様に空き家や荒地が増加している。特に上立串では交通が不便な土地の放棄が著しい。

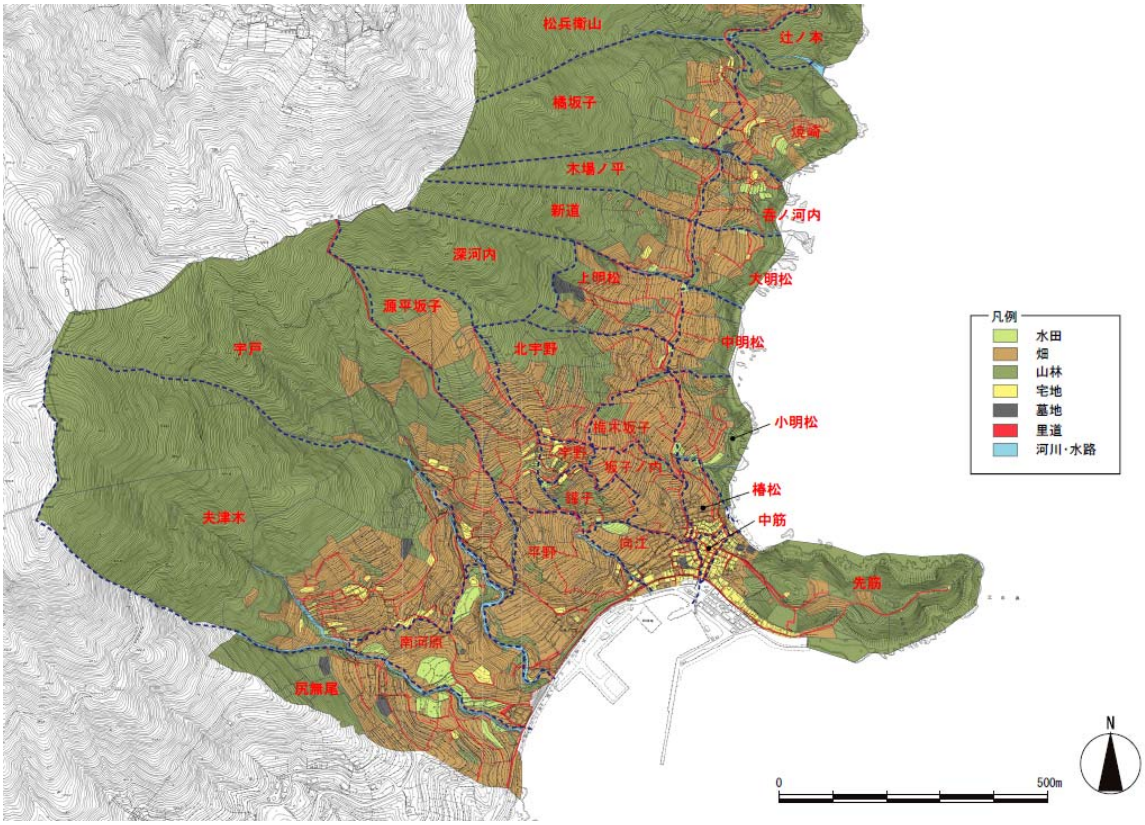


図７　立串集落の土地利用（明治 10 年頃）



図８　立串集落の土地利用（昭和 48 年頃）

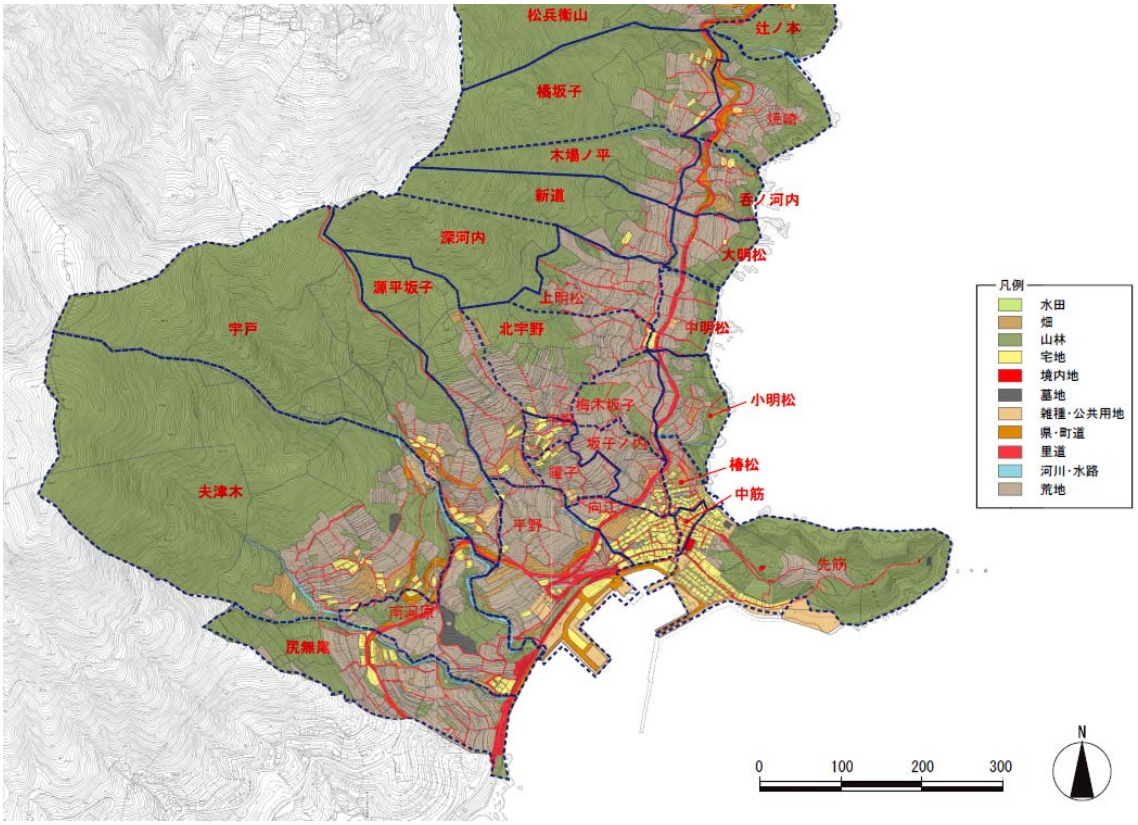


図９　立串集落の土地利用（現在）

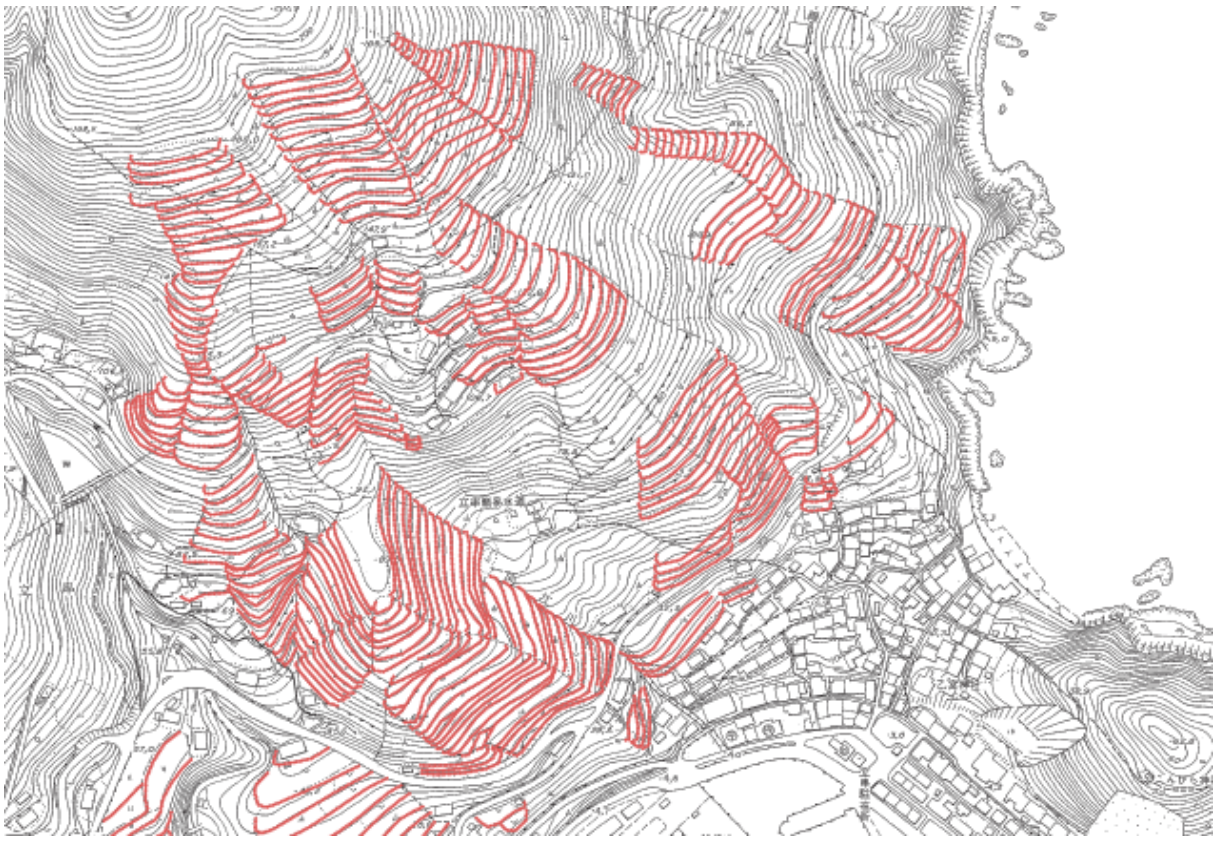


図 10　立串集落の石垣位置（昭和 48 年頃）

第３節　住居と石積みの構築物

１．北魚目地域の住居

ここでは北魚目地域の山間部に所在する移住者（居付）の住居を紹介する。

①　ＯＳ氏宅

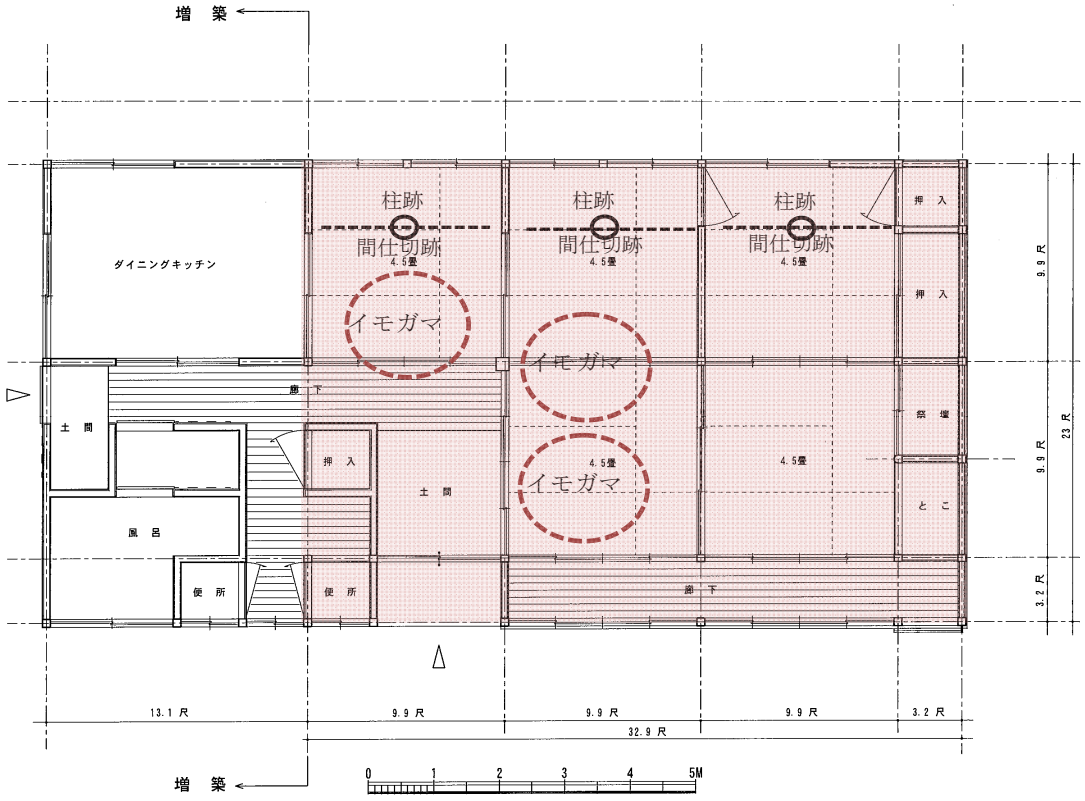


図１　ＯＳ氏宅平面実測図

〔平面〕　ＯＳ氏宅は江袋に所在する。建築年代は確定できていないが、恐らく明治 30 年代と思われる。大黒柱を境にして座敷側に田の字型に４室をとり、「おもて」に 3.2 尺の縁、妻側に奥行 3.2 尺の床の間・押入・祭壇が並ぶ。祭壇は床脇に設けることが多いが、別室にする場合もある。

大黒柱の土間側で「うら」に当たる部屋は居室であり、囲炉裏が設けられることが多いようである。関東など東日本では一般に大黒柱の土間側は広く「にわ」として使うことが多いが、当地では土間の面積が小さく、実質３～４畳程度であることが多い。また、正面出入口が半間（約３尺）奥まっているために、土間がより狭くなっている。近年のことだろうが、正面出入口に雨戸状の扉が付けられることもある。



写真１　ＯＳ氏宅外観

この住居は後に土間側に大きく増築されるとともに、「うら」側の半間分を改造して部屋を拡張している。この半間分はそれぞれ桁行方向の中央（１間半の二つ割）に柱が立っていたようで、現在分かる範囲では押入である可能性が高い。従って、「うら」側には開口部がなく、閉鎖的であったことになる。また、床下には深さ３～４尺の素掘りの「イモガマ」があり、種芋などを保存していた。

〔構造〕　現在屋根は粘土瓦またはセメント瓦で葺かれているものがほとんどである。特にセメント瓦は重量が大きいので強風に対する効果が大きい。この重い屋根材を支える小屋組は丸太材の水平梁と登り梁を交互に並べる組み方である。梁間方向の水平梁で桁行方向の牛梁を受け、この牛梁に梁間方向に登り梁を掛けて棟木を支える。水平梁と登り梁が交互に掛かるため、小屋裏を広々と使用することができる。天井はすべて根太天井であるため、屋根裏は作業や収納空間となっている。軸組は基本的に２間半または３間の上屋に半間の下屋を「おもて」側と「うら」側に廻す単純な構造である。



写真２　ＯＳ氏宅内部



写真３　ＯＳ氏宅イモガマ

内部の鴨居は梁と一体になった「差物」形式が一般的に古く、時代が下るにつれて鴨居を「薄鴨居」として分離するようになる。北魚目地域の住居でも同様である。大黒柱の太さは様々なので、太さで建物の年代を判別するのは困難であるが、面取り幅が大きい方が古いように思われる。

〔住居の変化〕　北魚目地域の山間部の住居では、平面構成に大きな変化は見られない。構造的にも伝統的な構造が継承されているようであるが、伝統建築においても戦後になると平面構成に自由な発想が見えてくる。細かいところでは「差鴨居」から「薄鴨居」への変化は確実である。

一方、海浜部の住居では、基本的に山間部の住居と同じであるが、桁行方向に一部屋分少なく、大黒柱の座敷側が２部屋になっているものがある。これは、山間部に対して、海浜部では住居が軒を接して集中するため、敷地の制約が大きく影響していると考えられる。

海浜部に見られる小規模な住居は山間部の「隠居屋」の形態に類似しているようにも思われるが、未調査である。

②　ＹＹ氏宅

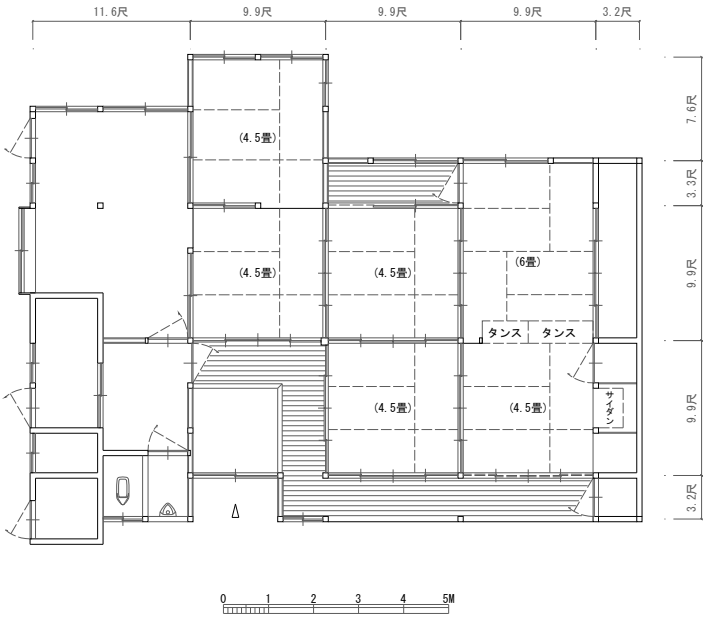




写真４　ＹＹ氏宅
（江袋、大正 15 年頃）

③　ＯＨ氏宅

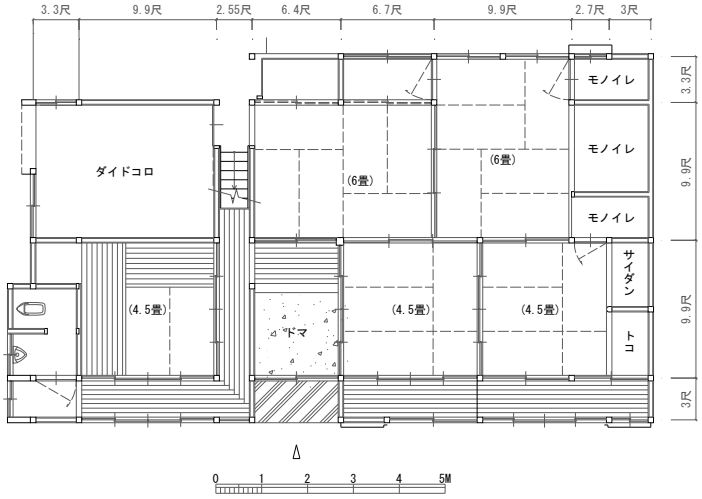




写真５　ＯＨ氏宅
（大水、昭和初期～戦後）

④　ＯＹ氏宅

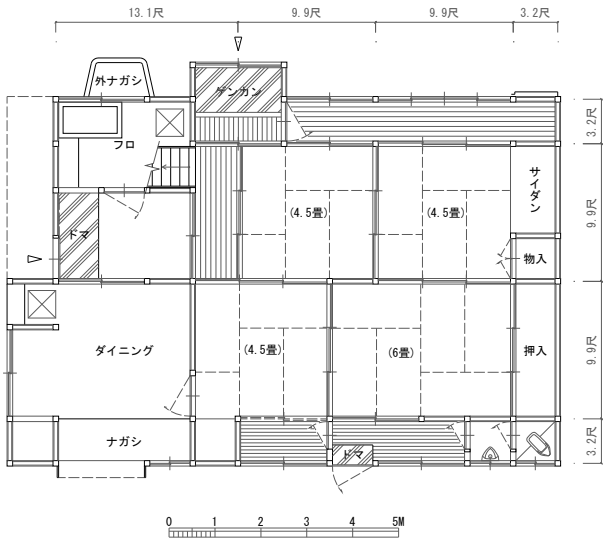




写真６　ＯＹ氏宅
（大水、戦後？）

２．頭ヶ島の住居

ここでは有川湾対岸の頭ヶ島に所在する住居（ＩＮ氏宅）を取り上げる。カクレキリシタンに由来する移住者で農業を主生業とする。建築年代は確定できないが、「ちょうな」の加工痕などより明治初期以前に遡るのではないかとみられる。

〔平面〕　大黒柱を境に座敷側に食い違い田の字型に４室をとる。「おもて」側と「うら」側ともに1.8 尺程度の縁を設け、妻側のおもてに奥行 1.8 尺程度の床の間と物入れが並ぶ。食い違い型であるとともに、縁側幅と床の奥行が非常に狭いことを特徴とする。うらの６畳間に祭壇を設けるが、通常は床脇に並ぶことが多い。おもての４畳半に対応するうらの部屋は６畳で、桁行方向に間仕切りが食い違っている。６畳の奥の部屋に祭壇を張り出しているので、「なんど」に相当する部屋は３畳よりもっと狭くなっている。

大黒柱の土間側のうらにある部屋は３畳の居室で、恐らく囲炉裏が設けられた板敷間であったであろう。北魚目地域では大黒柱の土間側は広く「にわ」として使っていないが、この住居では土間が大きかった可能性がある。なお正面出入口を半間（約３尺）ほど奥まって設ける点は北魚目地域の住居と共通する。また、座敷と納戸の間に壁があったようにみられ、納戸構えの古い形式が残っていた可能性もある。北魚目地域同様に床下には深さ３尺程度の素掘りの「イモガマ」が１箇所ある。

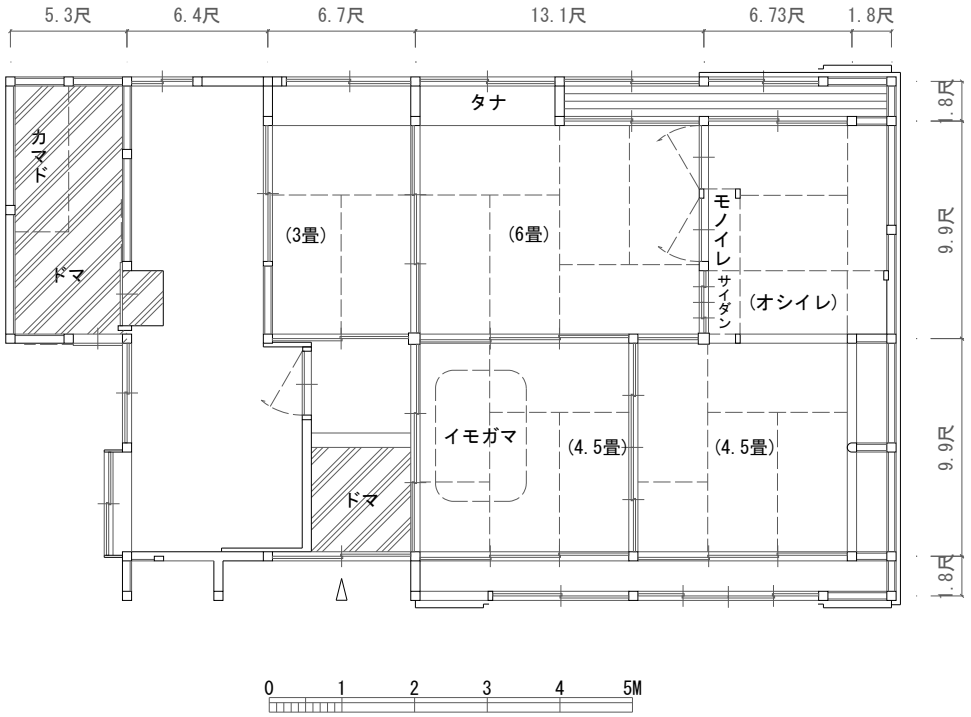


図２　ＩＮ氏宅平面図（頭ヶ島）

〔構造〕　軸部は３間の上屋に２尺弱の下屋を「おもて」と「うら」に廻す単純な構造である。屋根は粘土瓦葺で、小屋組は丸太材の水平梁と登り梁を交互に並べている。この組み方は北魚目地域で見られる構法と同じである。梁間方向の水平梁で桁行方向の牛梁を受け、この牛梁に梁間方向に登り梁を掛けて棟木を受ける。登り梁を設けることによって小屋裏を広く使うことができる。おもての座敷の天井だけが吊天井で、その他は根太天井となっているので、屋根裏は作業や収納の空間となる。内部の鴨居は梁と一体になった「差物」形式である。

なお、垂木の使い方に北魚目地域の住宅と共通した特徴がある。下屋では正方形に近い縦長断面

の垂木を使用するが、上屋では横長断面の「ごひら」使いの垂木を掛ける。上屋の垂木は杉などの細丸太の上端と下端を落とした「太鼓丸太」とするために縦長断面になり、下屋では垂木長さが短いので四角断面としたのであろう。

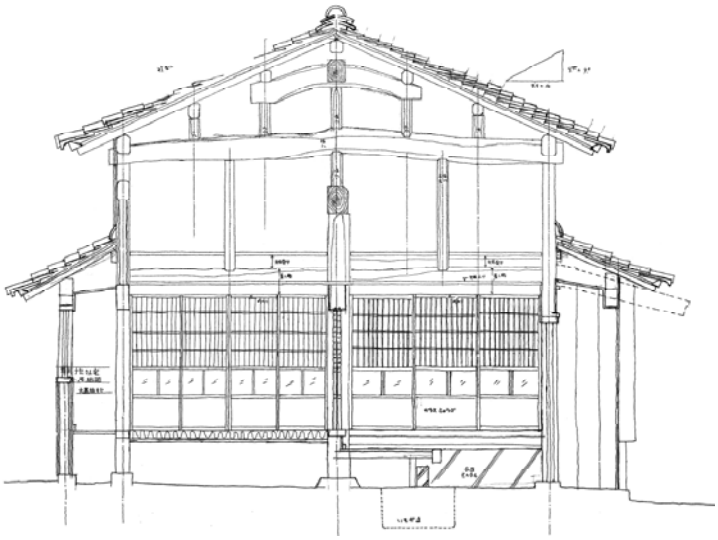


図３　ＩＮ氏宅断面スケッチ（頭ヶ島）



写真７　ＩＮ氏宅正面（頭ヶ島）



写真８　ＩＮ氏宅内部（頭ヶ島）

〔解体と移築〕　この建物の小屋組材の表面には部材の組み立て位置を示す「番付」が墨で書かれていた。通常番付は部材同士の接合部である「仕口」の内部に隠れる位置に書く方向を一定にして付けられることが多い。この建物では、部材の表面だけでなく、煤けた表面を削ってその上に書かれている。これは、番付が書かれる前に部材が煙で煤ける使用状況があったことを示している。番付は建物を組み立てる際に書かれるので、恐らくこの建物は移築されたものと考えられる。昭和 39 年 12 月に旧有川町が実施した家屋調査書に「赤尾より 40 年経過した家屋を移築」と記述があるので、経過年数に疑問はあるが、移築の事実は裏づけられた。すなわちこの建物は頭ヶ島のカトリック信徒が仏教徒の赤尾集落から建物を買い受けて移築したことになる。

頭ヶ島に限らず北魚目地域の集落においても、古い建物を建て替える際に売り買いしたことがよくあったと聞く。移住者が最初から大きな住居を建てたとは考え難いため、古民家や解体部材を購入して建設当時の状況をよく示している。

３．石積みの構築物

①北魚目地域

〔納屋・附属屋〕　北魚目地域の山間部と頭ケ島に見られる石積みの構築物を取り上げる。前者の石材は付近で掘り出したもので、練石積みとする。後者は砂岩で、同様に練石積みである。

両地域には石積みの壁を利用した納屋が少ないながらも現存している。地域の方の話では、以前はまだいくつか見られたが、解体したという。



写真９　石積み壁の納屋（江袋）



写真 10　石積み壁の納屋（頭ヶ島）



写真 11　石積みの納屋（頭ヶ島）



写真 12　石積みの納屋（頭ヶ島）

〔母屋〕　大村藩からの移住者が、移住当初から現在見るような住居に住んだとは当時の社会背景からしても考え難い。現存する住居は古いものでも２代目以降と考えられ、北魚目地域の移住集落で最も古いとされる住居でも明治 20 年代あたりの建設ではないかと思われる。江袋に残る古民家でも明治 15 年の教会堂建設時よりわずかに後だと言われる。

そのように考えたとき、初期の住居は、まず比較的簡単に建てられる構造であったと考えるのが自然である。農地の開拓を行いながらの建設であれば、手の込んだ建物や、手に入りにくい材料は論外であろう。当時比較的手に入りやすい材料としては、周囲で伐採した木材と、開墾で掘り出された石が上げられる。

もう一つの方法として石の壁を建ち上げることが考えられる。この方法であれば、石垣積みの経験があれば壁を立ち上げることが比較的容易にできる。また、特殊な道具が必要ないことと、材料となる石材は豊富に出土することが有利である。

開墾で掘り出した石や礫を利用して畑の石垣積みができるのであれば、石で壁を積み上げることは可能であろうし、積んだ石の間に土を詰めれば、あるいは土を込めながら石を積めば雨や風の入りづらい壁を比較的容易に作ることができよう。屋根に関しても、茅葺や藁葺の屋根を想定すればそれほど難しい仕事ではないと考えられる。

〔その他の石積み〕　北魚目地域に残存する石積みの構築物を取り上げる。それらは練石積みで、石材は付近で掘り出されたものと考えられる。構築物としては小規模であり、母屋か納屋などの附属屋なのか区別はできないが、単なる防風石垣でないことは明らかである。



写真 13　石積みの構築物（江袋）



写真 14　石積みの構築物（江袋）



写真 15　石積みの構築物（大水）



写真 16　石積みの構築物（大水）



写真 17　石積みの構築物（大水）



写真 18　石積みの構築物（大水）

次に米山集落の山中にあるやや規模の大きな練石積みの構築物を取り上げる。これは３棟分に相当する。



写真 19　石積みの構築物（ｈ＝1800～）



写真 20　石積みの構築物（h=1800～ 梁間３間程度）



写真 21　石積みの構築物



写真 22　石積みの構築物（木の柱？）



写真 23　石積みの構築物（ｈ＝1800～）



写真 24　石積みの構築物（コの字型の壁）



写真 25　石積みの構築物（イモガマ？）



写真 26　石積みの構築物（台所）

②外海地域



写真 27　石造構造物（外海地域）



写真 28　石造構造物（外海地域）



写真 29　ド・ロ壁（外海地域）

③平戸地域

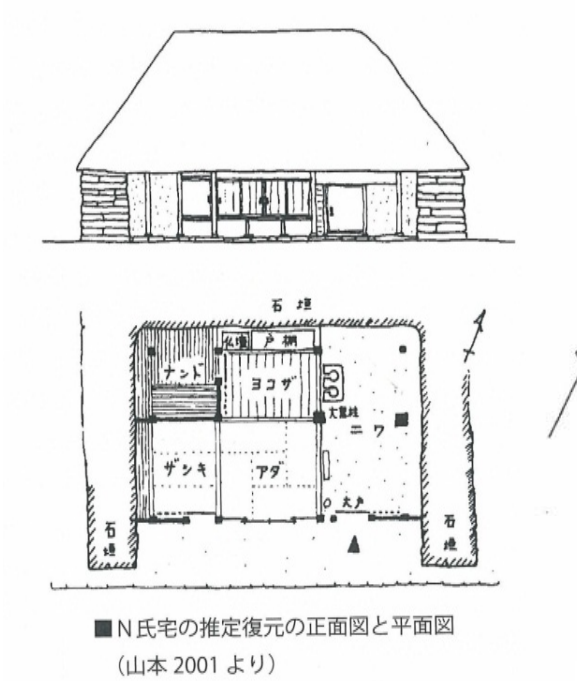


図４　N氏宅推定復原図
（平戸市文化的景観保存調査報告書）

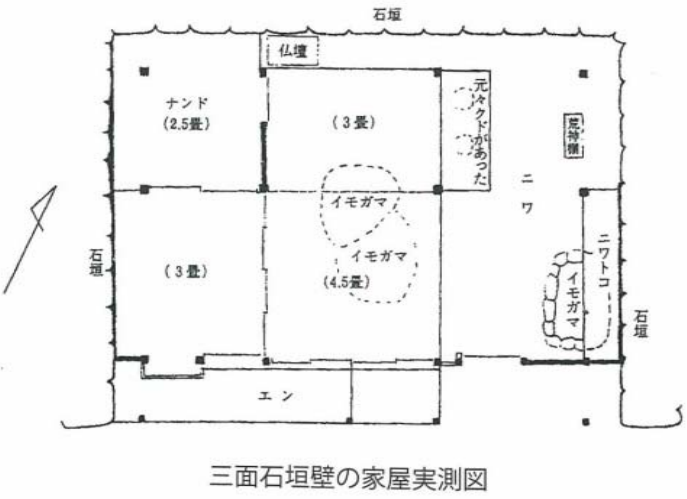


図５　N氏宅平面実測図
（平戸市文化的景観保存調査報告書）

第４節　集落の特性と類型

１．集落の特性概要

北魚目地域の特徴として、地下（漁業）と居付（農業）との住み分けと共生が上げられる。前者は海岸沿いに軒を連ねる集住の形態をなすのに対して、後者は分散の形態をなす。

農業（居付）集落を中心に述べると、このように分散型の集落になった要因としては、共同作業が稀な農耕が中心であったこと、平坦な広い開拓地が得られなかったことが上げられる。また、移住者が時期を置いて少しずつ移り住んできたことも上げられよう。

居付集落の多くは風当たりの厳しい斜面地にあるため、防風対策としてツバキ（椿）などを植えたり石垣塀を築くなど、場所に応じて工夫を凝らした。地目で「山林」として耕地や宅地に隣接している土地は、防風林として意識的に残したものが多いと思われる。防風石垣は高く積み上げたものもあるが、低いものでも吹き上げる風には効果的であった。生業の中心であった甘藷栽培に伴うカンコロ生産のために斜面に張り出した乾燥棚「ヤグラ」の向きも風向と深く関係し、珍しい景観を作り出している。

日本各地に見られる漁業集落との大きな違いは、そこに藩主導の農業移民が行われたことにある。地下（漁業）と居付（農業）の相互の精神的な距離感が集落の形成過程で重要な意味を有すると考えられる。



写真１　防風石塀（江袋）



写真２　ヤグラ（江袋）

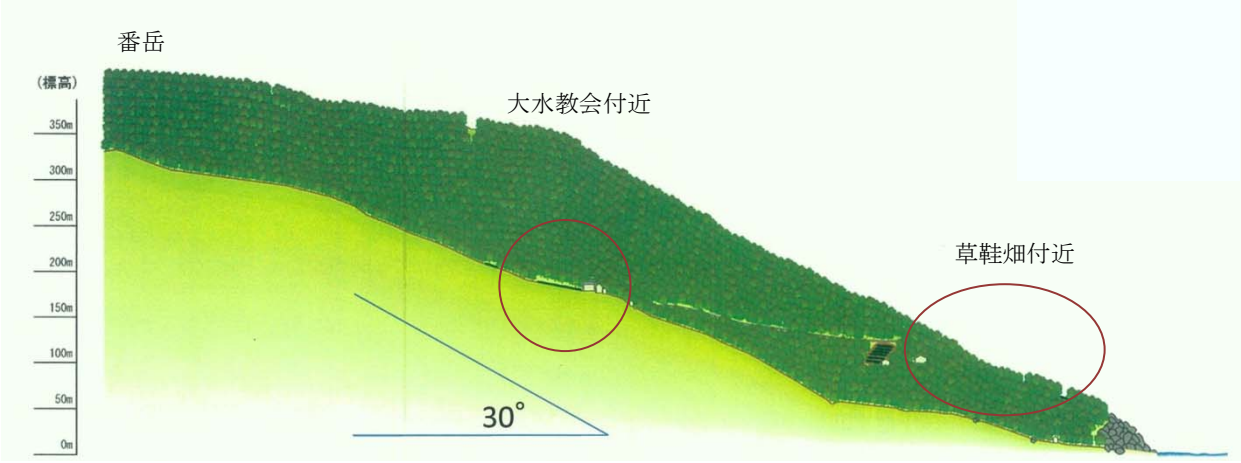


図１　大水集落断面模式図

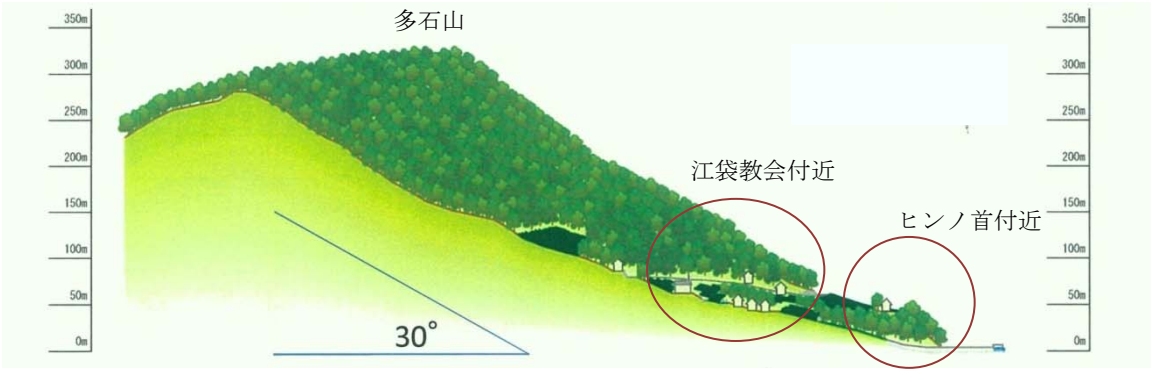


図２　江袋集落断面模式図

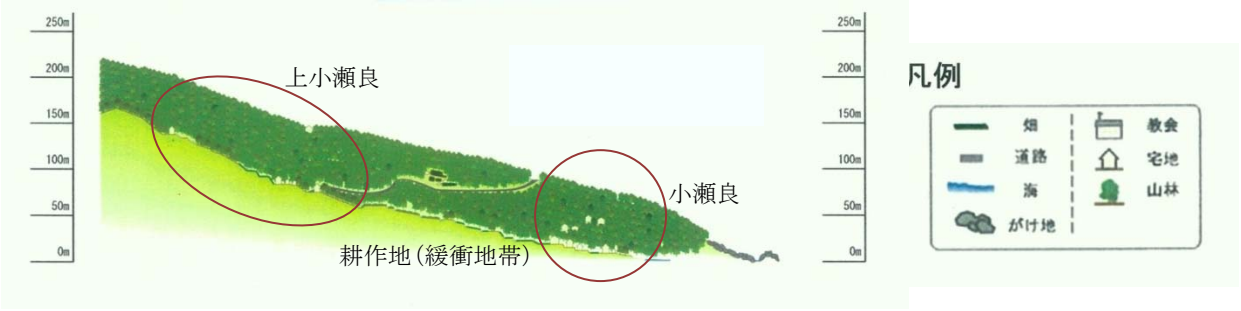


図３　小瀬良集落断面模式図

２．集落のシンボル

津和崎や立串のような地下集落では、集落の氏神に当たる神社（本山神社、乙宮神社）が集落の中心付近に存在するとともに、金比羅神社のように祈願の目的に応じた祭神をそれぞれ場所を選んで祀っている。小瀬良や大瀬良では、漁業に関係する地下の居住地近くの海岸沿いに塩竈神社や山神社がある。

一方、居付集落では、カトリック復活後に建てられた教会堂が主な集落に見られる。教会堂は復活当時には必ずしも集落の中心にあったわけではないが、時代が降ると教会堂は集落の中心となる。それは信仰の証しであるとともに集落のシンボルであり、精神的にも物理的にも重要な役割を果たしている。大水では、明治 10 年代には集落の中心から離れた場所に創建されたが、その後の建て替えを機会に集落の中心に移動した。そこには社会経済の変容やそれに伴う道路の整備などが大きく影響していると考えられる。

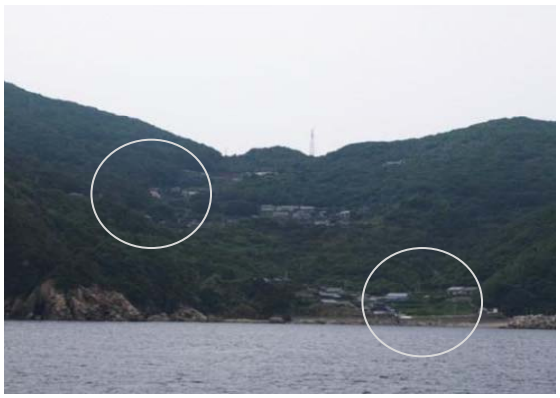


写真３　小瀬良教会と塩竈神社（小瀬良）



写真４　乙宮神社（立串）



写真５　赤波江教会（赤波江）



写真６　山神社（大瀬良）



写真７　小瀬良教会（小瀬良）



写真８　恵比寿神社（津和崎）



写真９　塩釜神社（津和崎）



写真 10　カトリックの墓地（大水）

３．集落の類型

第２節で北魚目地域の各集落の現況と推移を述べたが、ここでは集落の形成過程と生業形態を中心に据えて集落を類型化する。

①旧藩領

北魚目地域は江戸時代には平戸藩領と五島藩富江領の２つに分かれていた。赤波江・仲知以北の集落が平戸藩に属し、江袋・大瀬良以南の集落は五島藩富江領に属する。平戸藩領で、大村藩からの移住以前に集落があったのは津和崎だけである。農民移住は大村藩と五島藩との取り決めであるので、当初は五島藩領である江袋以南の土地に移住したであろう。一方で、五島藩領の江袋・立串や平戸藩領の仲知においても早い時期の農民移住があったとみられる。

②集落形成時期

1800 年頃から始まった移住によって形成された集落と、それ以前から存在していた集落とに大きく分けられる。文化 10 年（1813）の伊能図には津和崎と立串が北魚目地域では比較的大きな集落として表現されており、この他には小瀬良と大瀬良がある。これらの集落は大村藩からの移住以前にあった集落と考えられる。字名はないが家屋表現のある江袋、および字名はあるが家屋表現のない

仲知については、移住初期の状況が表われているとも考えられ、仲知小教区の教会洗礼簿の調査による移住時期に近い。

『仲知小教区史』によると、江袋集落については、1815～1831 年頃までの約 16 年間に少なくとも西彼杵・外海地方から直接江袋へ移住したキリシタンの夫婦は 6 組存在しており、９人の子供が出生し少なくとも６家族が存在していた。仲知集落については、第一次開拓者は３夫婦で、早い時期（1810～1820 年）に西彼杵・外海地方から移住している。平戸藩に属する赤波江・一本松・竹谷・米山集落は、1860 年前後から他所を経由して当地に住み着いた２次移住によって形成された。

③集落の立地

北魚目地域は全体に幅が狭く、標高 300～400ｍの山が連なってそのまま海に落ち込むような急斜面が多い。しかし、海岸付近では比較的なだらかな土地がまとまっている場所がある。立串・小瀬良・大瀬良などの低地がこれに当たり、大村藩からの移住以前から漁業や塩作りを中心に開かれた集落（地下集落）である。津和崎も海岸沿いの低地に集落を構えている。一方、大村藩からの移住者は山の斜面中腹に集落を開いた。海抜約 30ｍから 130ｍ付近までに家屋が分布する。特に大水集落は最も高く位置し、海抜 150～200ｍの斜面に家屋が点在している。このように、海岸沿いの低地と、斜面中腹に集落を開く場合とがある。

北魚目地域は南北に長い半島状になっているため、有川湾に面する東斜面と、東シナ海に面する西斜面とに分かれる。地下集落である津和崎・大瀬良・小瀬良・立串は有川湾に面しているのに対して、居付集落である仲知・江袋・大水は東シナ海に面している。大水集落は北に向かって開けているため、風の影響が非常に大きい。

開拓時期が遅い２次移住の集落である赤波江・一本松・竹谷・米山は、有川湾に面した東斜面に開かれている。また、斜面中腹に開かれた集落の中でも、江袋や赤波江などのように地崩れによってわずかに緩斜面となっている場所もあり、耕作地や居住地がある程度まとまっている。

④集落の生業

集落の生業としては、漁業と農業に大きく分けられる。ただし、いずれも完全な専業とは言えず、兼業の形態をとる。ここに言う生業とはその時期の中心となる生業を指すことにする。

有川湾に面する津和崎・大瀬良・小瀬良・立串では漁業を中心としていた。これらの集落では自家消費のための耕作を兼業として行っていたとみられる。一方で、大村藩からの移住者は農民であったので、移住当初から斜面地で甘藷栽培を中心とした農業を営んでいた。農業の傍ら、自家消費程度の漁をしたり、後には網主のもとで漁業に従事する者もいた。両集落ともに耕作地では甘藷栽培を中心としているため、住居の床下には甘藷保存用のイモガマを設けているが、農業集落では３～４箇所あるのに対し、漁業集落では１～２箇所と少ない。

このような状況が昭和に入るまで続いたが、昭和 24 年の漁業法の改正により、それまで漁業権を持たなかった農業移住者も各自が出資する漁業共同経営団などの方式をとることで漁業に参入し始めたため、生業形態に変化が起きた。生活の変化は住居の形態や配置、さらに集落形態に大きな影響を与え、次第に複雑化していった。

⑤北魚目の集落類型

北魚目地域の集落は、地下集落と居付集落とに大別できる。前者は漁業を中心とした集落で、海岸線に沿って家屋が密集している。後者は農業を中心とした集落で、斜面の中腹に家屋が点在している。地下集落はさらに家屋が同じ向きに列状に並ぶタイプと、塊状をなすタイプとがある。一方、居付集落もさらに凹（谷）状地形に形成されたタイプと、凸（尾根）状地形に形成されたタイプとがある。細かく見ると上記のように４つの型に分けることができる。

それぞれの集落にはシンボルがある。漁業集落では氏神を祀る神社があり、航海安全の金比羅神社や塩作りの塩竈神社などが組み合わされることも多い。農業集落はキリシタンの流れをもつところが多いため、集落の中心付近に教会がある。

五島、特に北魚目の自然環境を考えると、古くから漁業集落が形成されたのは当然であろう。しかし、地域（藩）の生産力を上げるためには農業は必須の要件である。そのために大村藩から農業移民が来て集落を形成したが、彼らのほとんどはキリシタンであり、信仰の違いのため両者が混在した集落を形成することはなかった。そのことがこの地に多様な集落形態を生み出すとともに、逆に地形（斜面）を利用した段畑での甘藷栽培、防風石垣の構築、また生業としてのヤグラ（カンコロ干し棚）を備える宅地構成など、独特の景観を作り上げる要因になったと考えられる。

北魚目地域の集落類型表 A

集　落　名	津和崎	米山	竹谷	一本松	仲知	赤波江	江袋	大瀬良	小瀬良	上小瀬良	大水	立串
居住の形態	既住 （移住民隣接）	移住 （２次）	移住 （２次）	移住 （２次）	移住	移住 （２次）	移住	既住 （移住民隣接）	既住 （移住民隣接）	移住	移住	既住 （移住民隣接）
集落の歴史	1300年代頃から	1871年頃～ 1877年頃	1868年前後	1861年頃～ 1863年頃	1810年頃～ 1820年頃	1858年頃～ 1862年頃	1810年代	1613年頃 移住不明	1613年頃	1800年以降	1830年代	1613年頃 移住不明
主な宗教	仏教・神道 キリシタン	カトリック （キリシタン）	カトリック （キリシタン）	カトリック （キリシタン）	カトリック （キリシタン）	カトリック （キリシタン）	カトリック （キリシタン）	仏教・神道 キリシタン	仏教・神道	カトリック （キリシタン）	カトリック （キリシタン）	仏教・神道 キリシタン
住み分け	海　仏・神道 山：潜伏	山：潜 →カト	山：潜 →カト	山：潜 →カト	山：潜 →カト	山：潜 →カト	山：潜 →カト	海　仏・神道 山：潜伏	海　仏・神道 山：潜伏	山：潜 →カト	山：潜 →カト	海　仏・神道 山：潜伏
生業	地下・漁業 居付・農業	農業	農業	農業 (→漁業)	農業	農業	農業 (→漁業)	漁業 農→漁	漁業	農業	農業	地下・漁業居付・農業
集落形態	海　集住 山　散居	散居	散居	散居	散居	散居	散居	散居	海岸　集住	散居	散居	海　集住 山　散居
集落標高	5～60m 70～90m	60～100m	40～100m	40～60m	30～90m	40～80m	30～110m	3～5m 20～100m	5～25m	70～130m	150～200	5～30m 70～130m
斜面の向き	東	東～北東	南東	東～北東	南西	北～北東	西～南西	東～南東	東～南東	東～北東	北～北西	南～南東
面する海	有川湾・津和崎瀬戸	有川湾	有川湾	有川湾	東シナ海	有川湾	東シナ海	有川湾	有川湾	(有川湾)	東シナ海	有川湾
シンボル	本山神社	米山教会堂 （3代目）	—	—	仲知教会堂 （3代目）	赤波江教会 （2代目）	江袋教会堂 （初代）	（山神社）	塩竈神社	小瀬良教会 （２代目）	大水教会堂 （３代目）	乙宮神社
旧所属藩	平戸領	平戸領	平戸領	平戸領	平戸領	平戸領	五島藩 富江領	五島藩 富江領	五島藩 富江領	五島藩 富江領	五島藩 富江領	五島藩 富江領
住民の姓	**中村　山口** 白浜　橋口 松下　湯川 **宇野** ほか多数	**白浜** 竹谷　山田 道下	**竹谷** 白浜	山添　竹谷 水元　川端	真浦　久志 島本　山添 井手淵	**赤波江** 川端　竹谷	**尾上　楠本** **谷口**　今野 瀬戸　川端 島本　など 30程度	**大瀬良** 大山 山田　蒲田	**田島** 山口　本谷	**小瀬良** 大山　小倉	**大水**	**柴田　木谷** 山田　**小倉** 武石　松下 小賀　椿山 **宇野** ほか多数

凡例　1　1800年以前に形成された集落

2　1800年以降に形成された集落

3　1860年頃以降に形成された集落

北魚目地域の集落類型表 B

集 落 名	津和崎	米山	竹谷	一本松	仲知	赤波江	江袋	大瀬良	小瀬良	上小瀬良	大水	立串
藩　領	平戸	平戸	平戸	平戸	平戸	平戸	富江	富江	富江	富江	富江	富江
集落形成時期（推定）	1300年代頃から	1871年頃～1877年頃	1868年前後	1861年頃～1863年頃	1810年頃～1820年頃	1858年頃～1862年頃	1810年代	1613年頃（移住不明）	1300年代頃から	1871年頃～1877年頃	1868年前後	1861年頃～1863年頃
大村藩からの移住集落	複合	○（2次移住）	○（2次移住）	○（2次移住）	○	○（2次移住）	○	○	否	○	○	複合
集落形成要因		農業移住	農業移住	農業移住	農業移住	農業移住	農業移住			農業移住	農業移住	漁業移住と農業移住
地　形	海岸低地と中腹斜面	中腹斜面	中腹斜面	中腹斜面	中腹斜面	中腹斜面	中腹斜面	海岸低地と中腹斜面	海岸低地	中腹斜面	中腹斜面	海岸低地と中腹斜面
集落標高	5～60m 70～90m	60～100m	40～100m	40～60m	30～90m	40～80m	30～110m	3～5m 20～100m	5～25m	70～130m	150～200	5～30m 70～130m
集落の向き	東	東～北東	南東	東～北東	南西	北～北東	西～南西	東～南東	東～南東	東～北東	北～北西	南～南東
居住形態	沿海 集住 中腹 散居	散居	散居	散居	散居	散居	散居	散居	沿岸 集住	散居	散居	沿海 集住 中腹 散居
漁業法改正以前の中心生業	沿岸 漁業 中腹 農業	農業	農業	農業	農業	農業	農業	沿岸 漁業 中腹 農業	漁業	農業	農業	沿岸 漁業 中腹 農業
現在の生業	農業と漁業の兼業	農業	農業	農業と漁業の兼業	農業と漁業の兼業	農業	農業と漁業の兼業	農業と漁業の兼業	農業と漁業の兼業	農業	農業	農業と漁業の兼業
甘藷の作付け	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
イモガマ有無	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
中心宗教施設	本山神社	米山教会堂	なし（仲知教会に通う）	なし（仲知教会に通う）	仲知教会堂	赤波江教会	江袋教会堂	山神社	塩竈神社	小瀬良教会	大水教会堂	乙宮神社
住民の姓	沿海 多数 中腹 少数	少数	少数	少数	やや多数	少数	多数	少数	少数	少数	単一	沿海 多数 中腹 少数

凡例
1　1800年以前に形成された集落
2　1800年以降に形成された集落
3　1860年頃以降に形成された集落

第５節　集落と生業

１．生業の概要

（１）移住と甘藷栽培

大村藩から五島藩への移住民は農民が中心であるが、江戸時代後期の大村藩内では甘藷栽培が盛んであった。それについて『外海町郷土史』には、「凶作打開の方法として鯨油によるイナゴの減少のほかに、積極的方法として甘藷があった。大村藩ではかねて畑作に甘藷を栽培させて農民の主要食料としており、飢饉の際に大いに役立っていた。それが直ちに幕府の知るところとなり、大岡越前守の命によって、甘藷三百斤が関東に送られたのである。この甘藷が大村藩からも送られたことは注目すべきことである」とある。

大村藩などから幕府にもたらされた甘藷は、青木昆陽らによって小石川薬園で栽培研究され関東一円に広まったとされる。大村藩からの移住農民が五島に甘藷栽培をもたらしたとは言い切れないが、彼らが上五島で盛んに甘藷を栽培していたことは事実である。移住者は急斜面の痩せた土地を段畑に開墾し、作り慣れた甘藷を栽培してこれを主食としていた。

（２）農林業

甘藷の収穫の後に麦の種を蒔いて二毛作とした。自家消費用として大根や豆類を中心に野菜の栽培も行った。海岸に流れ着いた海藻を採取して肥料にした。江袋など一部の集落ではわずかな水田で水稲や餅米を栽培していたが、北魚目地域で稲作は極めて少ない。現在では江袋においても稲作は行われていない。

現金収入の手段としてツバキ（椿）の実やシキミ（樒）の実の採取、薪の切り出しなども行った。津和崎・米山・大瀬良・小瀬良ではツバキの実の採取、江袋・大水ではシキミの実の採取が盛んであった。ツバキの実は乾燥させて殻を取り、椿油の採取のため出荷した。シキミの実は当時中国への輸出品として、また葉の付いた枝は榊として出荷された。

薪の切り出しはすべての集落で行われており、漁業集落である立串や山が少ない小値賀島に販売に行った。ある程度薪を切り出すと次の山に移り、これを繰り返していずれ最初の山に戻る。成長の早いタブノキ群生林であるからこそ再生が容易であった。西海（にしめ）の江袋集落などでは特に小値賀島とのつながりが強く、集落所有の船を仕立てて薪や野菜を販売し、その代金で日用品などを買って戻ってきた。昭和 40 年代前半に道路が整備されるまで、買い物を通して小値賀島と交流が続いた。

（３）漁　業

移住者はもともと農耕を中心としていたため、漁に関する特別な技術を持っていなかったが、自家消費程度の簡単な漁は行っていた。小船によるイカや小魚の一本釣りや海浜の貝類や海草を採取していたと考えられる。移住者の中には網子として漁業に従事する者もいた。明治 40 年過ぎに西海沿岸で鰯刺網漁が盛んになり、移住者の中にも漁業に参加するものが現れたが、生業の中心は農業で漁業が副業という大勢には変化がなかった。漁業への本格的な参入は、江袋では昭和 35 年の江袋漁業共同経営団の発足以降である。

２．カンコロ生産の装置

（１）カンコロ

甘藷を薄切りにしたものを天日で乾燥させて保存食とした。これを「カンコロ」と称し、天井裏

（つし）など乾燥した場所に保存した。また、生の甘藷を保存するために住居の床下に「イモガマ」と称する穴を掘って貯蔵した。イモガマは各戸に最低２～３箇所は必要で、「かがり」と呼ばれる藁で作った編かごに甘藷を入れ、藁や菰を被せた。



写真１　つし（天井裏）

やや厚めに切り分け、半茹でした後に天日干ししたものを「ユデカンコロ」といい、甘味が増すので好まれたが、その分手間がかかるため収穫した甘藷の２～３割に充てた。このユデカンコロに少量の餅米を加えて餅状についたものを「カンコロ餅」と言い、白餅の代用品とした。北魚目地域では現在、色の白い「七福」「おちよ」、皮の赤い「おきなわ」「あかいも」などと呼ばれている４種類ほどの甘藷を栽培している。これらはそれぞれ糖度、硬さ、保存性、収穫量などに違いがあり、それぞれの性質を活かした栽培や利用法に工夫がみられる。

（２）カンコロ生産の設備

カンコロ生産のためには設備（装置）が必要である。住居の前面の小さな庭が重要な作業空間となる。庭の前斜面に薄切り芋（カンコロ）を干すための棚「ヤグラ」を設置する。このヤグラに近接してカンコロを茹でる「ジロ」を設ける。茹でた甘藷を素早く乾燥棚に並べることができるようにすぐ近くに設置する。

収穫した甘藷のうち、種芋にするものや生の状態で保存するものは、住居の床下に設けたイモガマに入れる。カンコロに加工する甘藷は、大きな桶を用いて水洗いする。水洗いした甘藷は、庭で「カンコロかんな」と呼ばれる道具で薄切りにする。茹でずにそのままヤグラで乾燥したものが「シロカンコロ」で、ジロで半茹でした後に乾燥したものが「ユデカンコロ」である。

ヤグラで乾燥したカンコロは自家消費用と出荷用に分け、自家消費分は天井裏などに保存する。このように狭い空間を最大限に利用して各家単位にヤグラ・ジロ・イモガマが効率的に配置される。

（３）ジロ（竈）

カンコロを作るためには大きな「茹で釜」が必要であるが、この作業を行う竈をヤグラの近くに設ける。この屋外の竈を「ジロ」と呼ぶ。ジロは拳２つ程の大きさの石や煉瓦などを腰高よりやや低い高さまで積み上げて赤土で塗り固めた構造で、非常に素朴である。直径は３尺６寸（110cm）ほどの大きさで、焚き口の反対側に煙突を斜めに立ち上げたものが多く見られる。近年では赤土にセメントを混ぜ込んで強度を高めたり、コンクリートブロックを利用するものもある。もともと構造的には強くないので、風雨にさらされると傷みが早い。また、長年使用されないと自然に崩れてしまうことも多い。



写真２　石と赤土で固めたジロ（江袋）



写真３　複数のジロが並ぶ（江袋）



写真４　小石をモルタルで固めたジロ（米山）



写真５　砂岩を刳り抜いたジロ（立串）

（４）ヤグラ（干し棚）

庭先に設けたヤグラは、木材や竹を組み合わせて骨組を作り、棚床の部分に竹を敷き並べ、縄がらみで括った構造である。土地の傾斜を利用して斜面に棚床を突き出し、棚の下方から吹き上げる風が通るように工夫している。北魚目地域では常設しており、カンコロの乾燥だけでなく、大根などの野菜や海草（テングサ）などの乾燥にも多目的に利用している。近年ではヤグラの耐久性を考慮して、棚床を塩ビ製パイプに、骨組は鉄材に換えたものも多く見られるが、構法や用途などは伝統が継承されている。

土地の傾斜や風向きを考えて乾燥させ、狭い敷地に広い作業場を生み出す土地の高度利用として非常に理に適った構築物である。多種多様なヤグラが各住居の庭先に並ぶ景観は、北魚目地域に独特の歴史的な風情を与えている。



写真６　ジロとヤグラ（米山）



写真７　ヤグラ（大水）



写真８　ヤグラ上のカンコロ

（５）イモガマ

収穫した甘藷を保存するために、北魚目地域では住居の床下に３～４箇所の穴（イモガマ）を掘り、素掘りのままで生の甘藷を入れて保存する。地域によっては崖地に横穴を掘ったり、畑の横に穴を掘り藁をかぶせる方法もある。甘藷の栽培では、作り方よりもむしろ貯蔵法が難しいと言う。生の甘藷をできるだけ長い期間保存するためには温度 13 度、湿度 85%前後に保つのが最適とされる。これは生の甘藷を食用とするためと、翌年の種芋を確保するためのものである。



写真９　床下のイモガマ（江袋）



写真 10　イモの取り出し口



写真 11　縁下を石積みで塞ぐ（米山）

穴の大きさは 1.5×1.5m程度で、畳２枚分よりやや小さい。深さは 1.0～1.5m程度で、地勢に応じて工夫している。甘藷を取り出すには、通常はその度に畳や床板を外すが、土間境の上り框の下部に小さな開口部を設ける場合もある。種芋は翌年まで取り出さないので、奥まった座敷の床下の穴に保存されることもある。

通常では風通しを優先する床下を練り石積みや板を使って塞いでいるが、これは甘藷の貯蔵のために温度や湿度を調整する工夫とも考えられる。

３．住居と集落

江袋のＹ家は集落の中心近くに宅地を構え、本家と分家が隣接している。畑などの所有関係は複雑であるが、かつては同じ所有者であったと思われるので、本家と分家を合わせた敷地をとりあげる。

Ｙ家は集落の中でも水場や土地の勾配などからみてかなり条件のよい場所にあるので、比較的早い時代に江袋に定着したと推定できる。宅地の背後にまとまった畑を所有し、宅地のすぐ近くに水田を所有している。Ｙ家の周辺に山林があるのは、防風林として残しているものと思われる。薪は多石山やビシャゴ山など周辺の離れた場所、ヤグラなどに使用する竹は限られた場所から入手している。Ｙ家は多石山やビシャゴ山などにも多くの山林を所有している。

住居はほとんどカンコロ生産のための装置（設備）を備えている。甘藷は痩せた土地でも豊かにみのり、斜面を吹き上げる北風はカンコロに甘みを増加させる。厳しい自然条件に耐えながら、一方でカンコロ生産を通して自然と共生している姿を北魚目地域の集落に見ることができる。

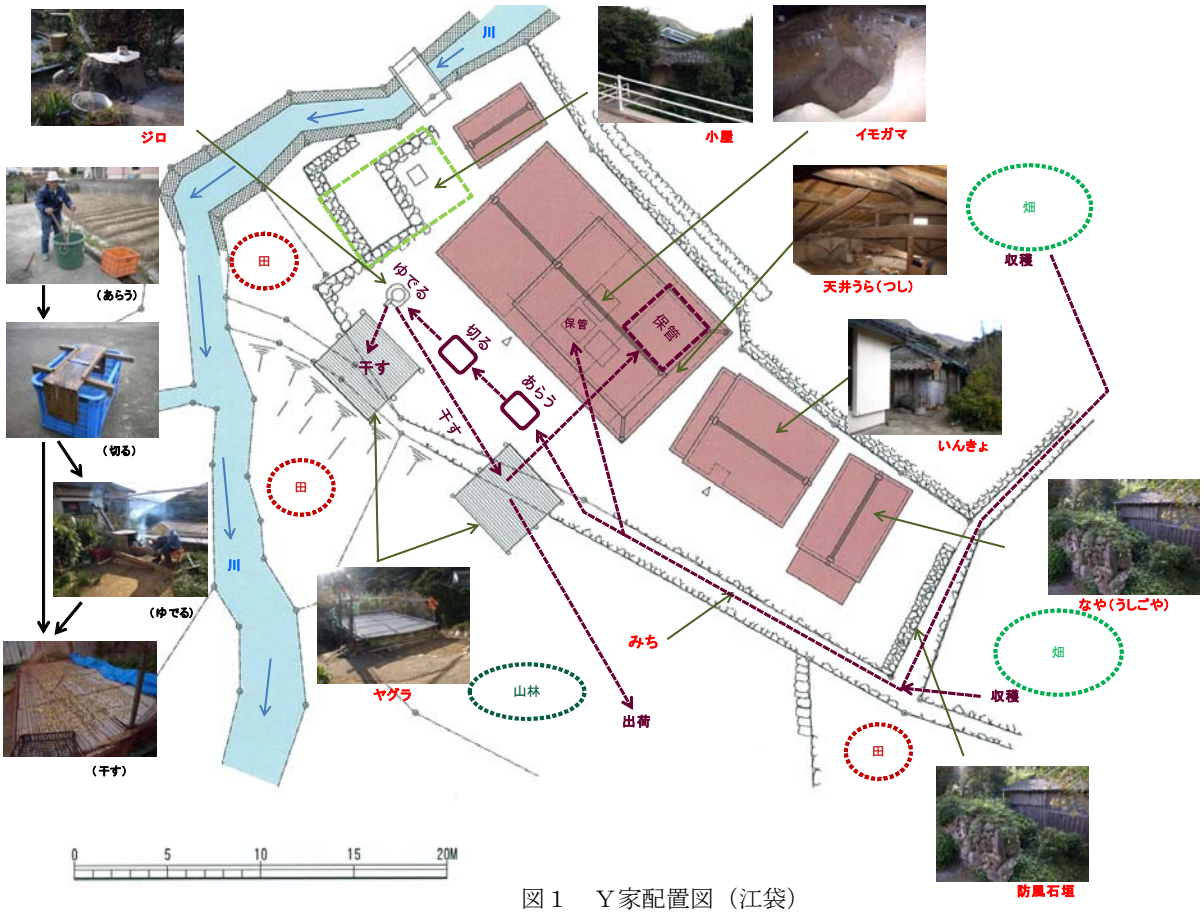


図１　Ｙ家配置図（江袋）

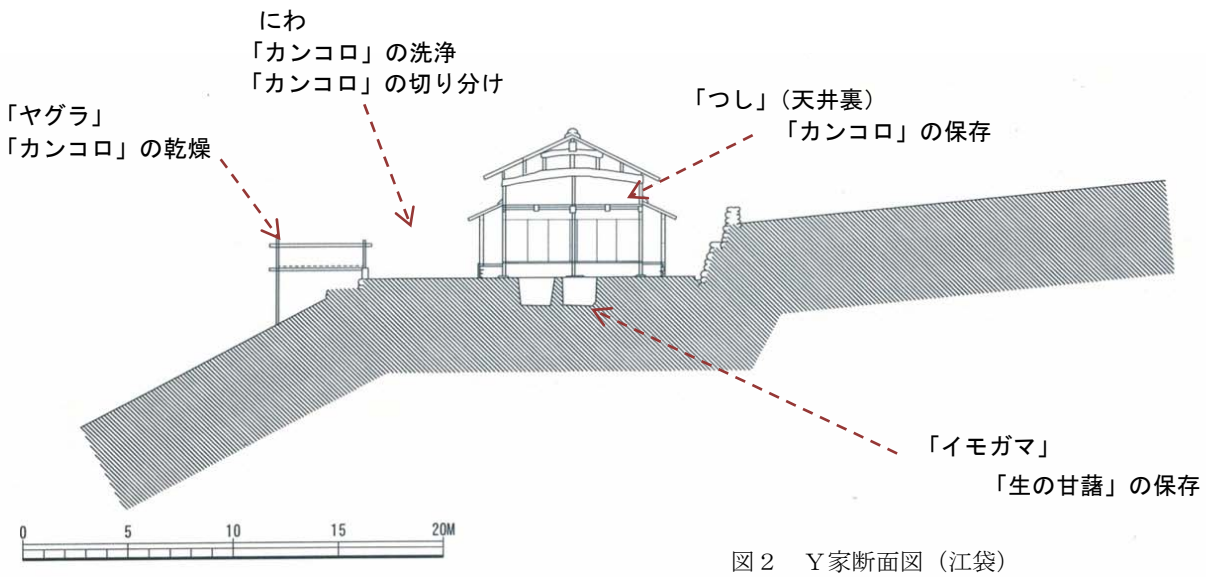


図２　Ｙ家断面図（江袋）

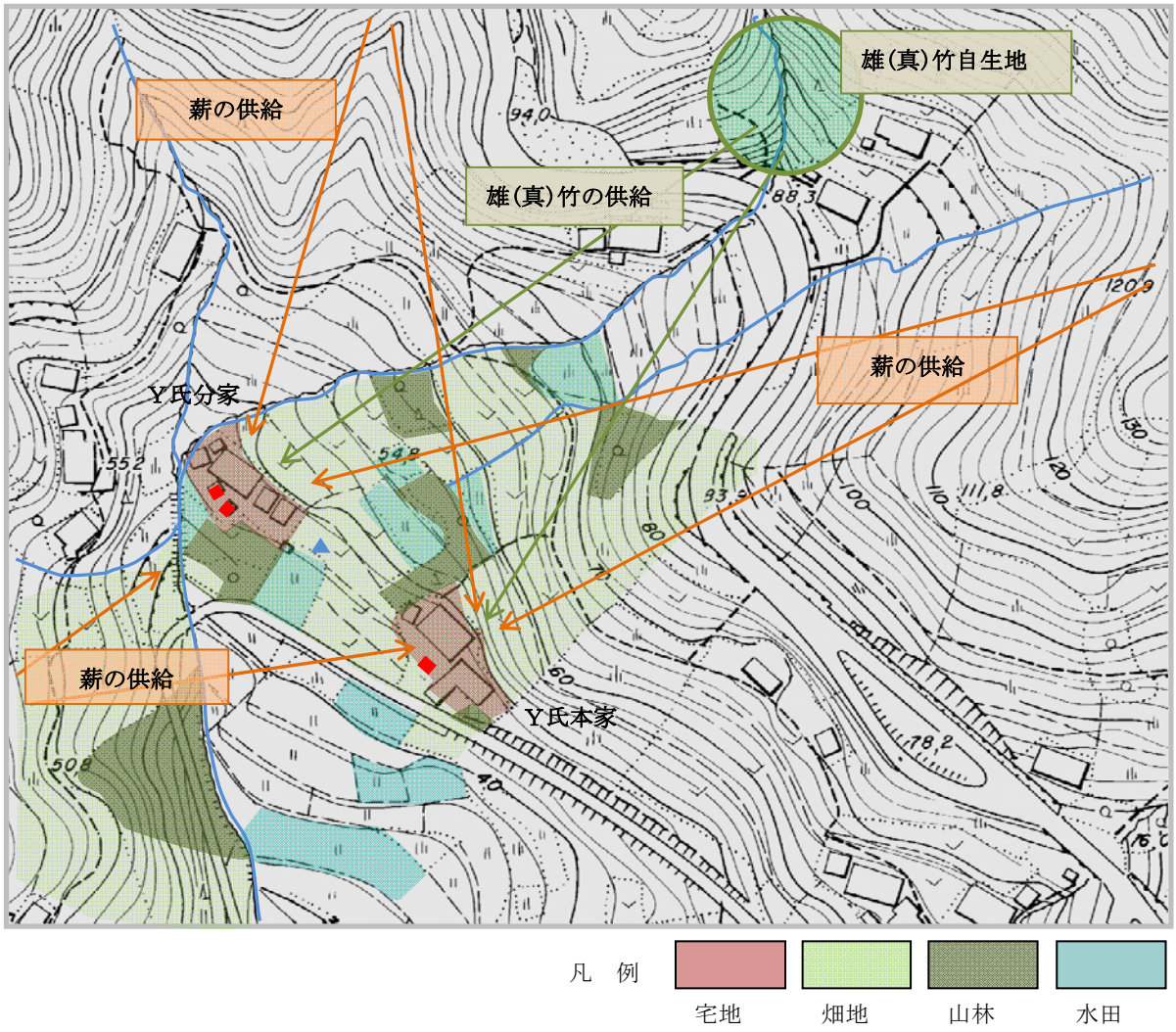


図３　カンコロ生産と集落との関係（江袋、Y家）



写真 12　段畑



写真 13　住居



写真 14　ヤグラ

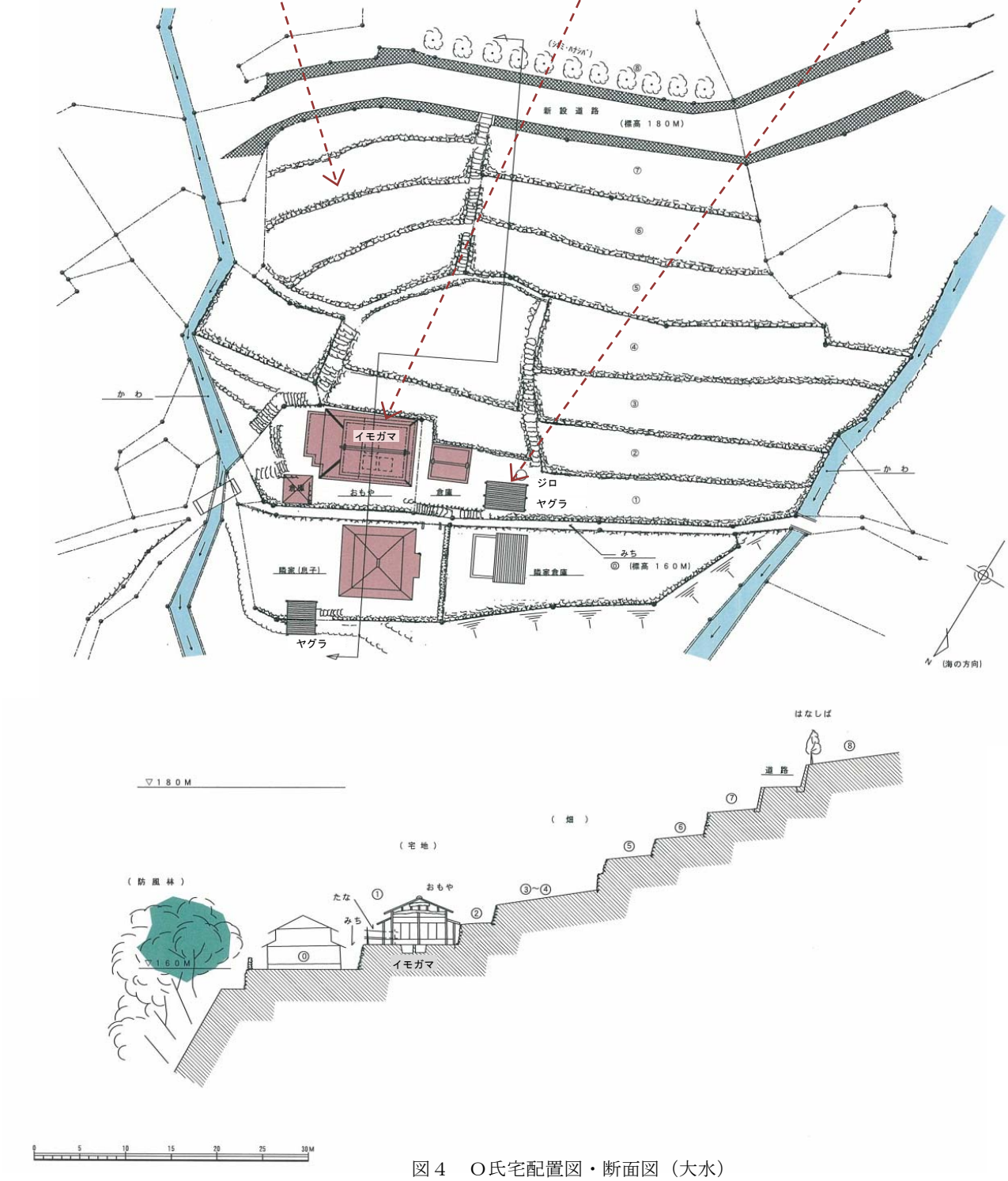


図４　O氏宅配置図・断面図（大水）

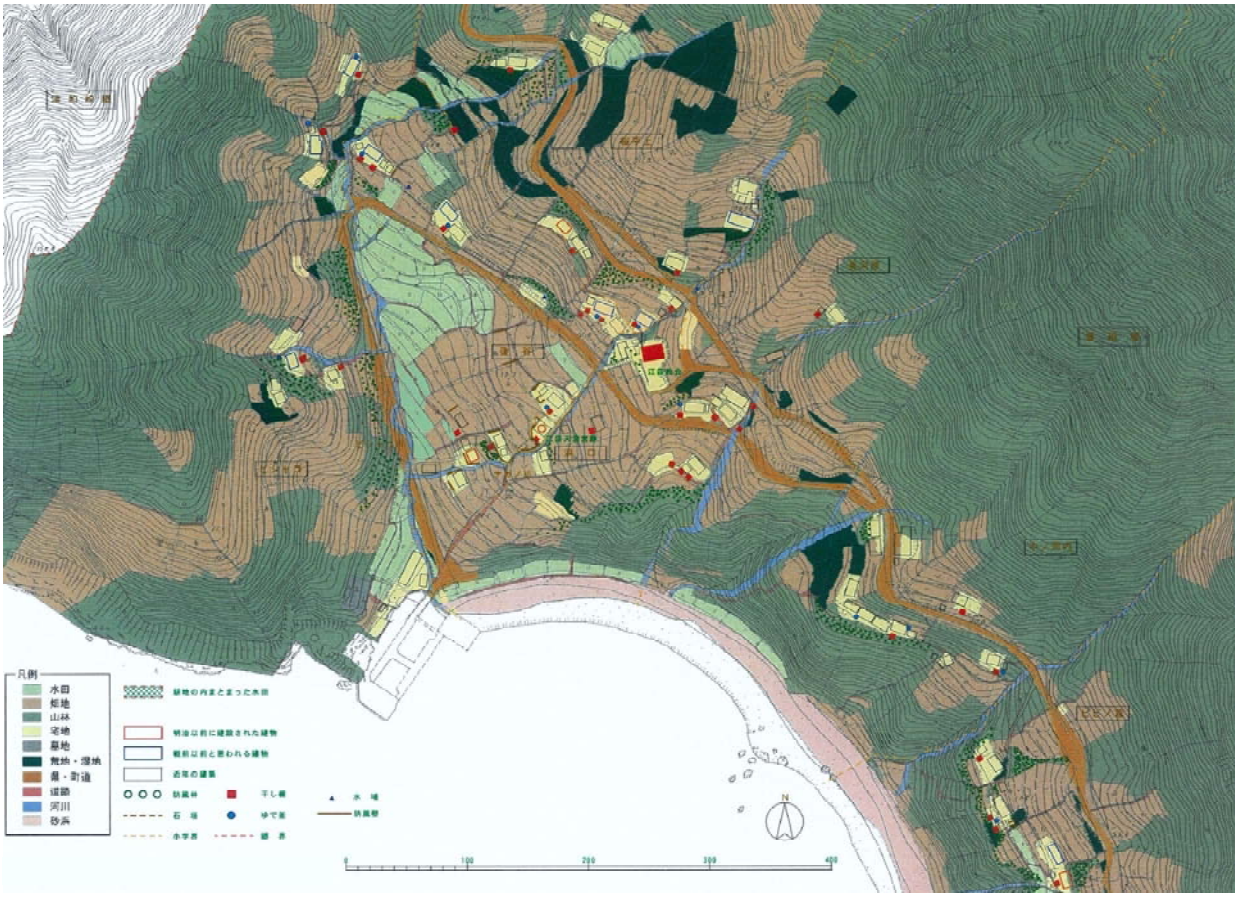


図５　ヤグラとイモガマ（江袋、昭和 48 年頃）

第５章　各 論

第１節　集落

１．北魚目地域の移住集落の形成過程

五島列島中通島では、急勾配の傾斜地に段畑が拓かれ、その中に屋敷が分散的に立地する風景を目にする。なかでも北魚目地区は特に地形が険しく、そのような独特の景観が顕著に見られる。ただし、それらは幕末期以降の移民の居住地であり、恐らくそれ以前の五島には見られなかったものである。本稿では、この特徴的な村落景観がどのように生み出され、この地域に広がっていったのかを検討する。



写真１　居付（いつき）集落の景観　（赤波江）

（１）移住による集落の成立と農地の開墾

五島では、古くから成立していた家や集落を「地下（じげ）」と呼び、近世後期以降の他地域からの移住によって成立した家や集落を「居付（いつき・居着）」と呼ぶ。両者は居住地が分かれており、形態も異なるため、景観から容易に判別することができる。

この地区への移民には、近世期の漁業者を中心とした移民と[1]、幕末から明治初頭にかけての農業移民とがあり、居付集落のルーツは後者、すなわち幕末から明治初頭にかけての農業移民によるものである。彼らは、多くが大村藩からの移住者で、そのほとんどがキリスト教信者すなわちカクレキリシタンであった。

地下と居付とでは、居住地の立地条件が大きく異なっている。地下集落は、海岸沿いの比較的平坦な場所に立地している。それに対し、後発の居付集落は、以前は山林だった傾斜地を開墾して耕地と居住地を形成した。

居付集落が北魚目において、いつ頃どのように成立し発展したのかについては、年代の異なる絵地図や航空写真を比較検討することによって推定が可能である。

① 近世末期

居付集落が北魚目に成立する以前の状況を、文化 10 年（1813）の伊能忠敬翁地図「肥前国五島沿海」（五島上）[2]（以下伊能図と略称する）から窺うことができる。この地図には、家屋が「へ」の字形の記号として記載されている。それらの家屋表記部分を抽出して、正確な地図上にプロットしたのが図１である。それらは複数の集まりとして描かれていて、その表現はみな似ている。恐らく、表記された場所に家屋が群をなして存在していることを記号的に示すものであり、集落形態や家屋数を正確に記録したものではないと考えられる。

対象地区内（立串以北）でこの図に描かれた居住地は、津和崎、大瀬良、小瀬良、立串と江袋の５ヶ所であり、文化 10 年（1813）時点には、この地区に少なくともこの５つの集落が存在していたことが推定できる。さらに、仲知には家屋の記載はないが、地名表記として「字中知」と記されており、ここが居住域として認識されていた可能性もある。また、この地図には耕地らしき表現もみられるが、それはこれらの集落に隣接した僅かな部分にとどまっている[3]。

表記された５つの集落のうち、津和崎と立串は村名として朱書きされ、大瀬良と小瀬良は集落名が字として記載されている。また、居住地は海岸近くに限定されていて、山側には存在しない。居付が発生する前の地下集落の状況を示していると推定される。それに対し、江袋は集落名としての記載がなく、立地も斜面中腹で浜から離れている。文献でも江袋は居付集落として成立したとされており、その初期段階がここに表現されている可能性が高い。ただし、家屋が記載されていながら耕地の表記がまったくないことから、この段階では開墾がまだあまり進んでいなかったのではないかとみられる。

以上より、近世末期、この地区には津和崎、大瀬良、小瀬良、立串の４つの地下集落が存在していたとみてよい。いずれも東側沿岸に位置しているのは、地形と気候条件によると思われる。耕地らしき表記は集落に隣接した僅かの部分に限られており、これらの集落は主に漁業を生業としていたとみられる[4]。

一方、この時期に居付集落として成立していた可能性があるのは、江袋と仲知の２カ所であり、これは資料による居付の成立時期とも概ね符合する[5]。地下集落が地形や気候条件のよい東側沿岸に立地するのに対し、移民定住の嚆矢となったこの２つの集落は、それら地下集落から離れた西側沿岸に立地したのである。

②近代初期

続いて、明治 10 年（1877）の字図をもとに近代初期の状況を見てみる。この図には、当時の土地利用の状況が詳しく記載されている。図２は、それをもとに描いた当該地区の耕地と宅地の分布である。白図は伊能図を書き起こした際と同じものを使っている。伊能図の時代にくらべ、耕地が大幅に増えている。同時に、多くの集落が新たに発生しているが、これらはいずれも居付集落である。それらのうち、竹谷、仲知（島ノ首、真浦、久志）、赤波江、江袋、大水は、以前は山林だった場所に独立的に形成されている。仲知と江袋は、前述のように早い段階で成立していた集落である。

一方で、地下集落の周辺にも新たな耕地と宅地の成立が見られる。津和崎では、集落周縁と南側に耕地が広がり、集落からやや離れた南側に新たに宅地が形成されている。ここは「旧米山」と呼ばれ、米山の初期開発地となる場所である[6]。

地下集落の大瀬良、小瀬良、立串では、斜面上方に宅地が発生している。これらは居付の居住地であり、この段階では地下集落からやや距離を置いている。小瀬良、立串では、地下の居住地とは区別して「上小瀬良」「上立串」と呼ばれるようになる。また、地下集落がいずれも集村の形態をとるのに対し、居付は宅地が分散的である。大瀬良、小瀬良、立串付近には、早い時期から潜伏キリシタンが居住していたといわれるが、多くは禁制撤廃後もカトリックにはならなかったため、記録があまり存在しない。

なお、これら居付の出自については『五島キリシタン史』[7]と『五島魚目郷土史』[8]に記載があり、さらに開拓期の家族関係を中心とした追跡調査の結果が『仲知小教区史』[9]に掲載されている。それらによれば、早い段階に形成された江袋と仲知は、外海地方からの移住である[10]。大水も、1820 年代から 1830 年代初めと時代は少し下るが、最初に居付いた夫婦が外海地方からの移住である。

それに対し、後発の集落は五島内からの２次移住が多い。米山の初期居住者は野首（野崎島）や曽根、立串、小串からの移住であり、竹谷の元祖は立串の生まれで 1868 年の五島崩れの際に竹谷に流れつき開拓を始めたという[11]。一本松は立串からの移住者が始祖とされ、赤波江は野首（野崎島）からの２次移住が始まりとされる。これらの後期移住による開拓は、いずれも幕末から明治初頭にかけてのキリシタン弾圧期に始まっている。

③近代後期～現代

図３は、昭和 40 年（1965）に撮影された空中写真をもとに、白図上に耕地と宅地（家屋）の分布を表したものである。図２から 80 年以上が経過しているにもかかわらず、この間の変化はその前の期間（1813～1877）にくらべ穏やかである。

この間にも耕地は拡大しているが、それは平均的に発生しておらず、半島の東側と西側では偏りがある。初期に成立した独立的集落である江袋、仲知（島ノ首、真浦、久志）はほとんど変化していない。それに対し東側では、津和崎周辺の池尾や米山で耕地が大きく広がり、その中に宅地も展開している。仲知の東部分では竹谷や一本松が同様に拡大している。旧五島藩領の東側沿岸でも、赤波江、上小瀬良、上立串などで耕地が拡大し、そこに新しい宅地が成立している。なお、昭和 40 年（1965）時点は、人口としてはほぼピークに近い。耕地はすでに縮小期に入っていたが、統計上はまだそれほど減少しておらず、最盛期の姿を概ね維持していたとみられる。

なお、集落を越えて移住が行われるのは 19 世紀の間のことであり、その後は主に集落内の分家によって宅地・耕地が増加した。これには、のちほど大水集落を例に説明する分家慣行が関係している。

図４は、現在（2009）の耕地と宅地の分布を示したものである[12]。これを見ると、耕地が著しく減少している。また、その変化はすべての集落に同じように起こっている。この時期は日本の農業が合理化される時代であり、五島の段畑のような耕地は、生産性が低く経済効率が悪いことから衰退を余儀なくされた。図４には、それが顕著に表されている。

耕地が縮小したのに対して、宅地は図４を見る限りそれほど減っていない。ただし、この間に人口や世帯数は減少をつづけており、宅地の持続が集落社会の持続を意味しているわけではない。過疎化とともに高齢化も急激に進み、また空き家が発生し、「限界集落」と呼ばれる状況を迎えている。

以上をまとめると、次のようになる。

農業移民が起こる前、この地区には津和崎と立串、それに小規模な大瀬良と小瀬良の４つの漁業集落が存在したが、それらの立地は地形上有利な海沿いの平地部分に限られていた。漁業が主体だったことから、集落以外の土地はほとんどが山林であった。

19 世紀初頭から、山林部分に居付集落が成立した。それは大村藩外海地方からの移住によって発生した。江袋や仲知など半島西岸部では、地下集落から距離をおき地形的にも隔絶された場所に形成された。一方で、ほぼ同時期に島外からの移住によって４つの地下集落の周辺にもそれに付属する形で居付の居住地が成立していたと考えられる。

1860 年代から 1870 年代にかけて、五島の他集落からの２次移住が起こる。それによってできたのが、米山、竹谷、一本松、赤波江といった半島東側の集落である。さらに、家の増殖によってそれぞれの集落域を拡大させていくが、これら近代に入ってからの開発は半島東側で顕著である。

このように、居付集落の成立時期は半島内の場所によって異なっており、これには地形や気候の条件とともに潜伏キリシタンであるがゆえの地下集落との距離感が関係していると考えられる。そして、最盛期には半島の開墾可能な場所にほぼ隈なく段畑が広がった。近年になって、それが急激に衰退する状況に至っている。



図１　伊能図に描かれた北魚目

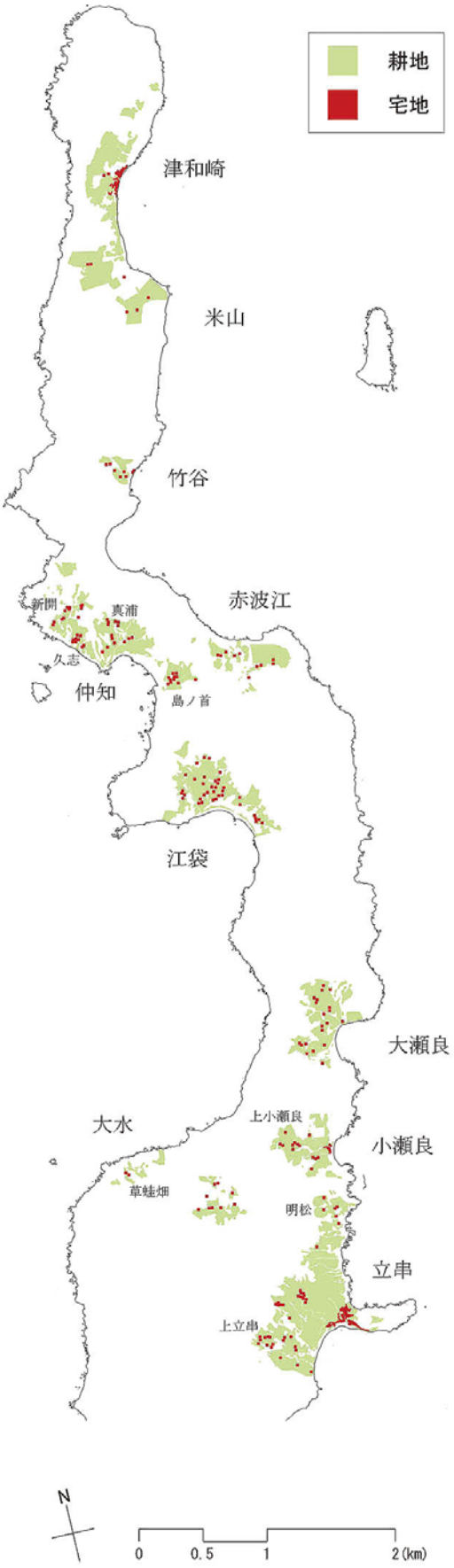


図２　明治 10 年(1877)の北魚目

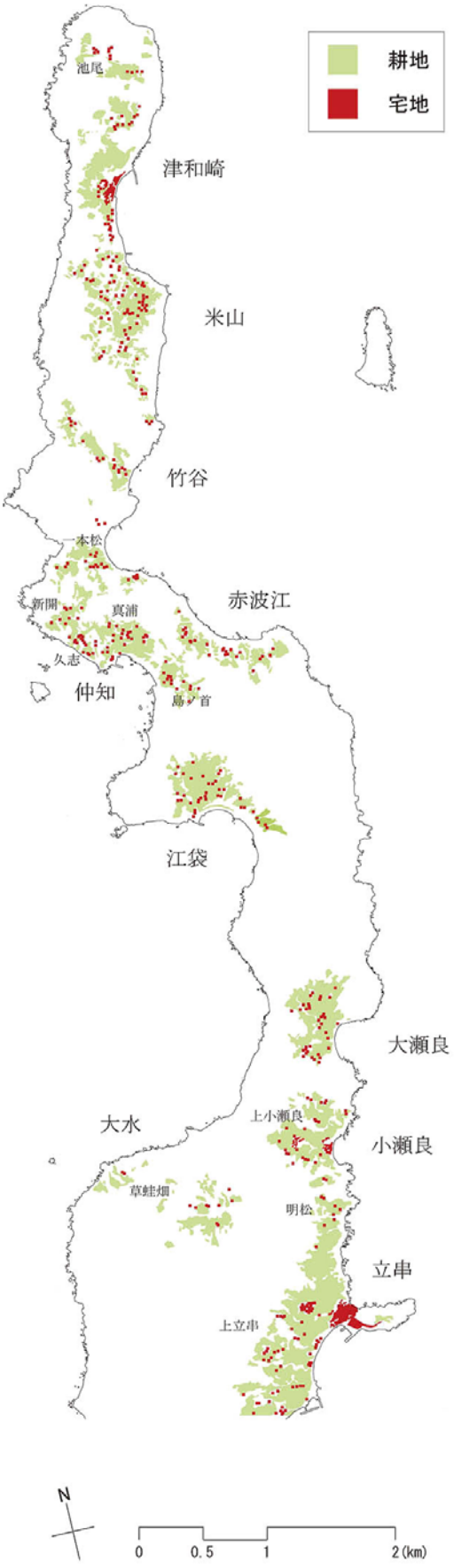


図３　昭和 40 年(1965)の北魚目

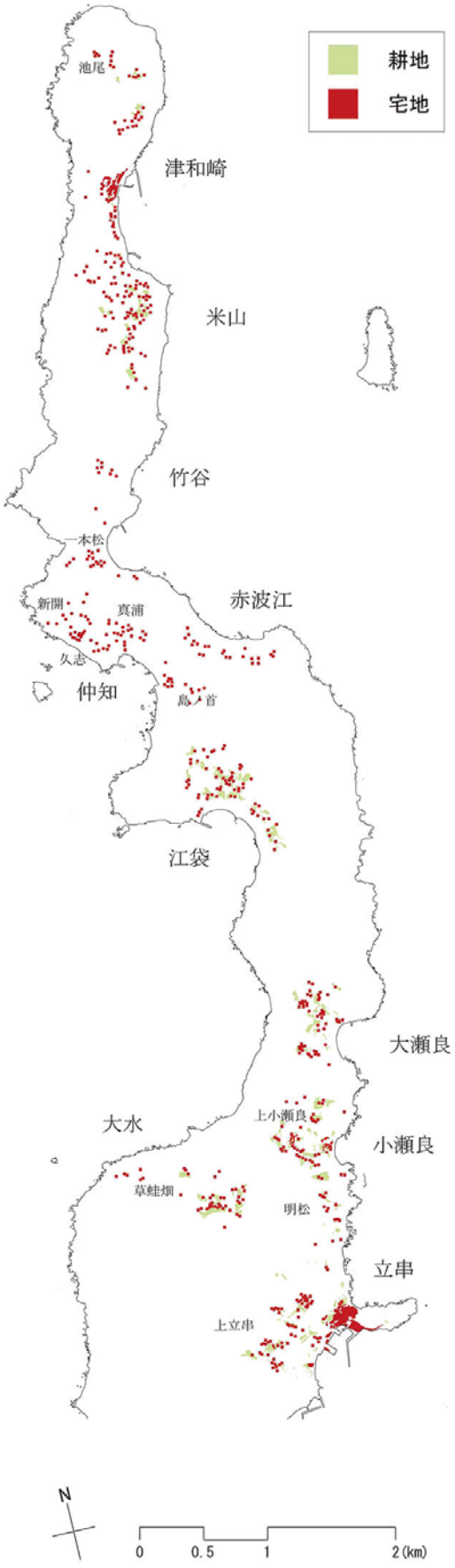


図４　現在(2009)の北魚目

（２）集落空間構成

次に、これらの居付集落が、空間構成上どのような特徴をもつのかを、具体例で検討する。取り上げるのは、初期に独立集落として成立した「江袋」、地下集落の領域に連続するかたちで形成された「小瀬良（上小瀬良）」、近代以降に遅れて開発が進んだ「米山」の３集落である。

これらの集落の空間構成を検討するにあたり、昭和 40 年（1965）の空中写真と 1/2,500 地形図をもとに、耕地と家屋の分布や水系や道などの構成要素を表現した集落空間構造図を作成した。さらに、現在の３次元データに昭和 40 年（1965）の空中写真を貼り付けることによって、開墾が最も進んだ状況の集落景観を再現した。

① 江袋

江袋は、伊能図に描かれた成立の早い居付集落である。『五島キリシタン史』では、寛政時代に大村藩神ノ浦から１組の夫婦が移住したことに始まるとされている。『仲知小教区史』によれば、幕末期（1815～1831）には江袋に６組の夫婦が存在したという。それが、明治 15 年（1882）には 17 戸にまで拡大していた[13]。しかし、その後は集落の形がほとんど変化せず、近代初期の空間構成が 1970 年代まで継承されていた。

図６は、昭和 40 年（1965）時点の江袋の空間構成を描いたものである。耕地は斜面中腹に展開し、その中に家屋敷が点在する。これを明治 10 年（1877）の字図と比較すると、集落の領域や土地利用の状況、宅地の分布域がほとんど変わっていないことがわかる。

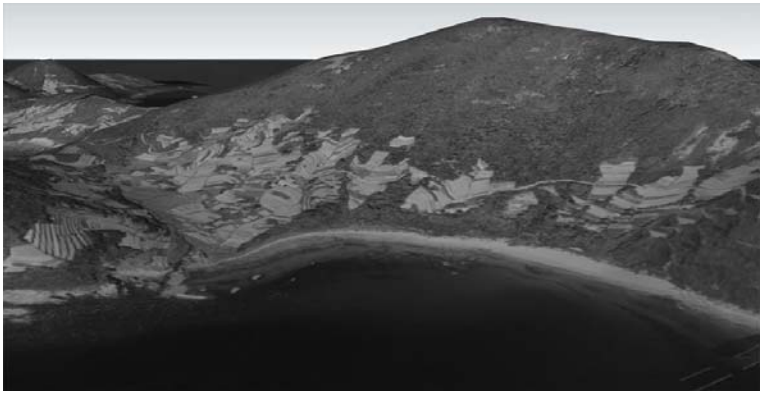


図５　昭和 40 年(1965)の江袋俯瞰



図６　江袋の集落空間構造（1965）

南北に展開する集落域のうち、北側の凹状地形部分が初期に開発されたエリアと考えられる。そこでは、複数のカワ（谷川）が縦方向に流れ、斜面に一定の間隔で水路が行きわたり、宅地はそれらの水路に接するようにとられている。耕地は多くが段畑で、主要な水源である「ビシャゴ川」に沿って水田もある。

後発の南側斜面では、宅地が中腹に並び、その上方に段畑が開墾されている。このエリアでは海際に耕地がないが、これは下方の傾斜がきつく、切り立った形で海に接しているためである。北側にくらべ南側では耕地が疎らなのも、地形条件の厳しさによると思われる。

明治 15 年（1982）建設の江袋教会は、家屋が多く連なる「ナカノ川」沿いの中段部分にあり、建設後は移動せずに現在に至る。凸状の微地形の目立つ場所に建てられている。また墓は、主要河川である「ビシャゴ川」が海に流れ込む部分、集落域の端部に位置している。

② 小瀬良（上小瀬良）

江戸時代、立串村の海岸沿いには立串、小瀬良、大瀬良の３つの漁村が並んでいた。幕末以降、山側斜面上方に居付が起こり、農地が拓かれていった。さらに、集落と集落の間でも開墾が進み、最盛期には中腹部が南北に連続的に開発された状況に至っている。なお、この地域の潜伏キリシタンの多くは、明治以降もカトリックに改宗せず、表には出なかった。それには、他の居付と違って地下集落との帰属的関係が強かったことが影響していたと言われる[14]。そのため、この地域にはかなりの数の居付が存在していたと思われ



図７　昭和 40 年(1965)の小瀬良俯瞰

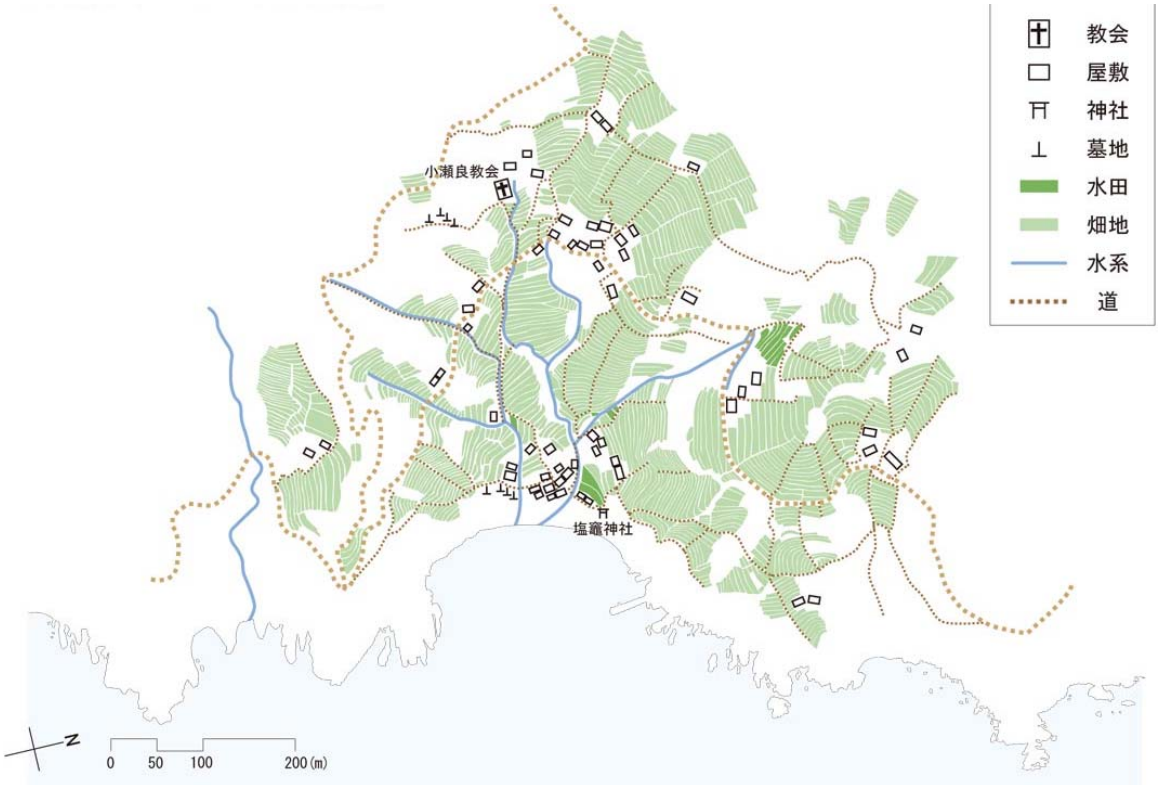


図８　小瀬良の集落空間構造(1965)

るが、教会は上小瀬良に小さな教会堂の「小瀬良教会」が１つあるのみで、その成立も大正から昭和初期にかけて（推定）と他にくらべかなり時代が下る。

図８は、昭和 40 年（1965）時点の小瀬良の空間構成を描いたものである。小瀬良では、地下の漁村「小瀬良」と居付の農村「上小瀬良」とが１つの谷の上下に立地している。北魚目の集落の中でも、地下と居付とが最も接近した状態にある。

海岸部に位置する地下集落は、塊状の形態をとる。明治 10 年（1877）の時点では、居住域がさらに小さくまとまっており、山側の居付とは農地で明確に分かれていた。

山側に形成された居付のエリアは、明治 10 年（1877）の字図と比較すると開墾がかなり進み、耕地が南北方向に広がっている。その中央部、港から山に向けての部分が初期に開発されたエリアと考えられる。枝分かれした水系が凹状の斜面に伸びており、地下の使う水系の上流を居付が利用している。明治 10 年（1877）の字図では、地下集落の直上の耕地は細かく整然と分筆されて描かれており、地下に所属する農地だったのではないかと考えられる。それ以外の耕地はかなり大雑把に区画されている。

初期の居付は、地下の使う水系の上流部で行われ、居住地はその中央にまとまって形成されている。耕地はその周りに連続的に拓かれている。その後、北側に領域を大きく広げるが、そこは凸状地形で水利条件の悪い場所である。宅地が疎らで、耕地もやや分散している。

地下のエリアでは、塊状の居住地の浜寄り北側に神社、南側に墓地があり、その上方に農地が形成されている。コンパクトながらも旧来の漁村集落の構成が成立している。居付のエリアは、それを浸食しない部分に形成され、教会と墓も山側上方に配置されている。ちなみに、現在の教会堂は昭和 26 年（1951）の建設で、それ以前は中央に家屋が集まった部分のすぐ上にあったという[15]。

③米山

米山は、地下集落の津和崎の周縁部に形成された居付のエリアが移動・拡張され、規模の大きな集落へと発展した。その時期は比較的遅く、始まりが明治期であった。この時期の居付は野首、曽根、立串、小串など五島内からの２次移住である。当時は５家族の構成だったことが確認されており、大きく拡大したのは明治中期以降である。

その場所は地形的には谷ではなく尾根にあたり、凸状で谷川や沢がなく水利に恵まれていない。米山の開発が遅く展開するのは、そのような地形特性が影響していると考えられる。なお、初めに開発された北側の谷地形の部分を「旧米山」、その後に開発された南側の尾根部分を「新米山」という。

明治に入って集落の領域は南へと広がったが、それに伴って教会も２度の移動を行なっている[15]。最初の教会は明治 22 年（1889）建設で、津和崎集落周縁の山側にあったが、明治 36 年（1903）の建て替えの際に、南側に 700mほど移動している。場所は初代にくらべ海側に近い。続いて、昭和 52 年（1977）に２度目の建て替えを行った際にさらに南側に移動し、現在の場所に建てられた。その際、標高としてもやや山側の高い場所へと移動している。なお、図 10 中の教会は、２代目の敷地が浜側にあった時代のものである。



図９　昭和 40 年(1965)の米山俯瞰

米山では、宅地も耕地も疎らに広がる独特の構成が見て取れ、江袋とは明らかに異なる。さらにこ

れを海側と山側に分けて詳しく見てみると、海側の教会付近では耕地が集まり、宅地は川筋に連なる江袋に似た配置をとっている。それに対し、山側では水系に関係なく宅地が立地しており、疎に分散している。段畑はさらにその上方に隙間をあけて開墾されている。このように、新米山でも、海側と山側とでは構成が違っている。



図 10　米山の集落空間構造(1965)

上記３集落の事例検討から、居付集落の形成過程について次のような推論が得られる。

①江袋や仲知など、独立して形成された居付集落では、凹型地形の比較的傾斜の緩い部分で開発が着手された。また、そこには谷川があり、水利にも恵まれていることが条件であった。住居がその水系を手掛かりに配置され、そこから山側に耕地が拓かれたと考えられるが、開墾が進むと凹型地形全体に耕地が連続し、その中に宅地が点在する状態に至る。

②上小瀬良や上立串など地下集落周辺に成立した居付は、地下の領域である浜側にはまったく関与せず、山側で生活圏が完結している。地下集落から距離を置いて住居を構え、上方の山林を開墾している。住居は谷川近くにまとまって配置されており、その谷川は下流に位置する地下と共用されている。

③明治以降の開墾では、耕地が凸状の地形へと伸展する。尾根地形に大きく広がった米山がその典型だが、上小瀬良の北側部分も同時期の凸状地形の開墾である。これらの土地には谷川がなく、水利に恵まれていない。また、住居は密度が低く点在する。耕地も林地を挟んで分散的に開発されている。

④教会堂は、集落の中央部に立地し、凸状の微地形の景観的に目立つ場所が敷地として選ばれている。ただ、水系など空間構造上の要所では必ずしもない。また、建て替えに際して敷地を移動する場合もある。

（３）集落形成過程

多くの居付集落は、１～３組程度の家族の入植から始まり、数十戸の集落に拡大したといわれている。そのような集落拡大は、どのように展開したのであろうか。このテーマについては、以前、大水集落を対象に形成過程の追跡調査を行っているので [17]、ここではその概要を紹介することにしたい。

大水集落は、江袋や仲知と同じく半島西側に位置し、地下から離れた単独の集落として形成された。成立期は江袋や仲知よりやや遅れるが、外海地方からの移住による比較的早い時期の事例である。

厳しい地形に立地する北魚目の居付集落の中でも、大水は急勾配の斜面に他の集落からまったく隔絶されて形成されており、特異性が際立っている。標高 180m前後の比較的高い位置に開発されたのは、傾斜の緩い土地がこの部分に限られていたからであろう。そのため、浜へは急勾配の細い道をかなり下らないと辿り着けない。

北向きの凹状斜面中腹が集落主要部で、「大水」と呼ばれる。谷の中央部を縦に川が流れるが、宅地は必ずしもそれに寄っていない。これは、集落内の至るところに湧水があるためで、初期の住居はその湧水の近傍に位置している。以前は、これから少し西側の斜面にも耕地と宅地があって、「草鞋畑（ワラジバタケ）」と呼ばれていた。

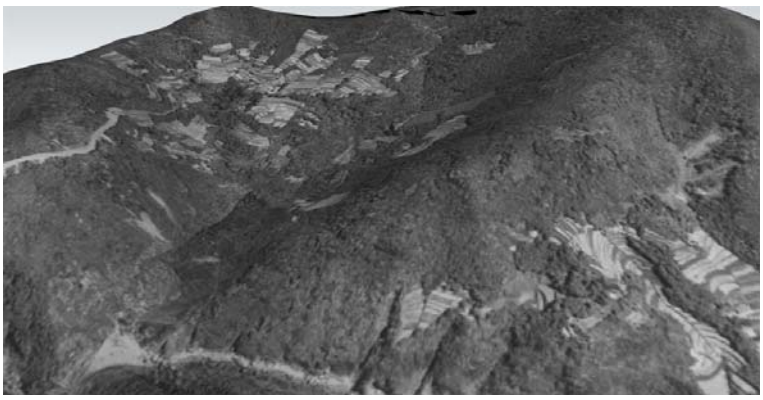


図 11　昭和 40 年(1965)の大水俯瞰

①分家慣行による世帯の増加

教会資料（洗礼台帳、家族台帳、三代調）をもとに大水集落の家の成立過程を追跡した。それによると、大水は 1820 年代か 1830 年代初頭に２組の夫婦によって開拓が始まったと考えられる。その後、この２組から発生した子孫が集落の構成員となっていく。この２組の夫婦も姉弟関係にあたり、大水はほぼ１つの親族のみによって形成されたとみてよい。明治になって苗字を付けることを義務づけられた際に、一様に「大水」姓を名乗っているのもその顕れであろう。

居付では、世代交代に際し、土地が家督相続ではなく男系子息に均等配分される。それによって、分家が多く発生することになる。それが居付集落の大きな特徴であり、独特の景観を生む要因であったと考え、この現象を「イエワカレ」と呼んで注目することにした。

この地域の典型的な分家の形式は「隠居分家」である。すなわち、長子が独立する際に本家に残り、親が残りの子女らとともに分家する。さらに、これを次男、三男と順次行うというものである。

明治 10 年（1877）の字図では、住居が成立し得る規模の宅地が約 10 筆ある（図 13）。洗礼台帳[18]が作成された明治 14 年（1881） 当時、台帳上では大水に 12 世帯が存在するが、うち２戸は老女の単身世帯であり、隠居であった可能性が高い。残る 10 戸のうち、直後に他出した１戸を除けば、すべて兄弟ないし従兄弟などの血縁関係にあたる。この１つの親族集団をベースに分家が輩出されることによって、大水集落は形成されていったと考えられる。

図 12 に、家々の系譜に関する分析結果を系統図にまとめて示した。均等相続による分家輩出を繰り返していけば、世帯数が限りなく増えていくことになるが、この図をみると必ずしもそうなってはいない。途中で途絶える家がかなりあり、ある時期以降は世帯数がそれほど増えていない。限られた農地のもとで成立する家の数にはおのずから限界があり、早晩、飽和状態を迎えることになる。大水においてその限界は、最初の夫婦の入植後 100 年を経ずに訪れたのである。

洗礼台帳に記載された 10 組からの分家では、隠居分家が順次行われ、最後に老夫婦が単独で隠居するというプロセスが共通に見られる。その結果、世帯数が大幅に拡大している。この段階は、集落が成長する段階にあったとみてよい。

しかし、次の代からは総ての家族で分家が行われているわけではなく、またその分家の出し方も、前の世代にくらべ変則的なものが見られる。同時に、他出などによって途絶える家も数多く発生するようになる。ちなみに、その移住先は福岡県の新田原地区が多い。

ただ、さらに時代が下っても、分家の慣行自体は継承・維持された。近年それが発生しないのは、慣行が改められたというよりは、過疎化・高齢化によって集落内での世代交代が起こらなくなったからにほかならない。

②集落形成の段階性

大水集落が、内部での分家輩出によって世帯数を増やしていったことが確認された。さらに、その発生のしかたが、時期によって異なっていることがわかった。では、そのことが集落の形成にどのように反映されたのだろうか。

ここでは、集落形成のプロセスを萌芽期・成長期・飽和期・収縮期の４期に分け、それぞれの段階でイエワカレがどのように展開されたのかを見ていく。期間設定は、発生から初代の大水教会が建設される明治 14 年（1881）までを萌芽期、そこから新田原への移住が始まる昭和３年（1928）までを成長期、さらに昭和 30 年代の高度経済成長が始まるまでを飽和期、それ以降を収縮期とする。図 12 には、それぞれの時期に属するイエワカレを区別して表現してある。

□集落萌芽期

最初の２夫婦がどこに居付いたかは、特定できていない。

明治 10 年（1977）の段階では、大水に７～８戸、草鞋畑に１～２戸の宅地が見られる（図 13）。大水では、宅地が同じ等高線上に、互いに距離をとって存在している。これらが谷川に沿って並ばないのは、豊富な湧水を利用しているためである。また、耕地が宅地の山側に開墾されているが、家ごとに独立しておらず、横方向に連続的である。

□集落成長期

明治 14 年（1881）に初代の大水教会堂が建設された[19]。このことは、潜伏キリシタンだった大水の人々がカトリック教徒になったことを意味する。大水が一族で構成されることから、一斉に改宗したものと思われる。

この期のイエワカレが空間的にどのような位置関係で行われたのかを、図 14 に示した。この時期には、独立する子供夫婦を残して親子が新たな土地に移住する隠居分家を繰り返すことでイエワカレが行われており、最後には老夫婦のみで隠居するケースが多い。図 14 にみるように、隠居分家に際し、家の領域を越えて大きく移動していることが特徴的である。この時期には耕地が唯一の生産手段であり、分家をするにはその家が自活できるだけの耕地が新たに必要であった。そのため、山林部に宅地と開墾農地とをセットとして分家を出すことで分家を成立させた。その結果、このように大きく移動を伴った分家が発生したと考えられる。

□集落飽和期

成長期、それぞれが所有する山林部分に分家を出し、そこを拠点に開墾を行うことによって耕地を拡大させ、大水集落は大きくなっていった。しかし、耕地化できる土地は有限であり、開発が進むにつれ、次第に飽和状態を迎えるようになる。

そして、昭和 3 年（1928）に最初の新田原（福岡県）への移住が発生する。五島から新田原への移住は大正末に始まっている。昭和に入り、初期入植者を頼って五島全体から多くの家族が新天地・新田原へと移住した。大水でも、従来の隠居分家というかたちで移住するもののほかに、一家を挙げて新田原へと転出するものもあった。

この期に行われたイエワカレを図 15 に示した。外へ伸びた直線は集落外への移住を表し、その多くが新田原への移住である。また、開墾がほぼ最大に至った時点の耕地の状況をこの図に描いている。萌芽期の開墾が横に連続的に行われたのに対し、成長期のイエワカレと開墾の結果、山林部で宅地と耕地をセットとして各々独立的に領域が形成されていたことが見て取れる。しかし、この時期の集落内のイエワカレは、成長期にくらべ小さな移動で行われている。これは、新たな開墾を行わずに、所有地を分割してイエワカレを行うためである。そうなると、それぞれの家の所有地が相互に入り組むようになってくる。

一方で、他出した屋敷に居抜きのかたちで転入することにより、分家を成立させる場合もあった。そのような空き家への転入は成長期にも見られたが、飽和期になると新田原への転出に伴って空き家が多く発生し、そこを従来の父系兄弟とは異なる親族が引き継ぐケースも現れる。その結果、入り組んだ所有地を家系の異なるもの同士が所有するなど、土地の細分化と所有関係が錯綜した状況が起こるようになってくる。

□集落収縮期

高度成長期になって、社会状況は大きく変化した。それは、それまでとは質の異なる変化であった。条件の悪い僅かな耕地から取れる農作物では、新しい時代の生活が成り立たなくなる。現金収入を求めて出稼ぎ漁業に出るものが増える一方で、生業としての農業が価値を下げていき、開墾はまったく行われなくなる。しかし、分家慣行はこの時代にも継承され、集落内においてイエワカレ

が行われていく。

収縮期のイエワカレを図 16 に示した。この時期には、本家のすぐ傍らに分家や隠居を出している。これは、土地利用における農地の優先性が失われ、農地の宅地化が行えるようになったためである。その結果、住宅が隣接して立地する集村的な構成に変化している。

集落領域の集約化にはモータリゼーションも影響している。従来、道はネットワークとして面的に構成されていた。そこに、集落を横断し草鞋畑まで伸びる車道ができたのは、戦後の高度成長期である。この道路は標高約 160mの等高線に沿って水平に通され、それが移動の軸になった。以後、それから外れる家が転出ないし車道近くに移転するようになる。農地を縮小する際も、車道との標高差が大きい部分から消えていく。草鞋畑も消滅し、コンパクト化が進んだ。このような収縮は現在も進行中である。

以上をまとめると、大水では、入植直後から隠居分家慣行にもとづくイエワカレによって、急激に領域を拡大した。見方を変えれば、隠居分家慣行は、開拓を合理的に進めるシステムであったともいえる。

隠居分家は２代、３代と受け継がれ、定着していった。ただ、それが繰り返されると、領域内の開墾可能な土地は有限であり、空間的には飽和する。しかし、飽和期にも隠居分家慣行は継続された。その際には、所有地の細分化が起こった。

さらに、高度成長期になると、これまでとは違った変化を起こすようになる。それは、それまでの内的要因によるものではなく、大きな社会構造の改変によってもたらされた不可避な変化であった。それは、五島に限らず日本の農村が共通に迎えた状況である。僻地としての五島では、それがむしろドラスティックに現れたといえる。農業が急激に衰退し、農地が消えていったが、隠居分家慣行は継承され、縮んだ集落域に住宅が集まる状況が生まれた。

ただし、このような変容過程が他の集落にも共通するものなのか、大水独自の現象なのかは未確認である。今後の課題としたい。

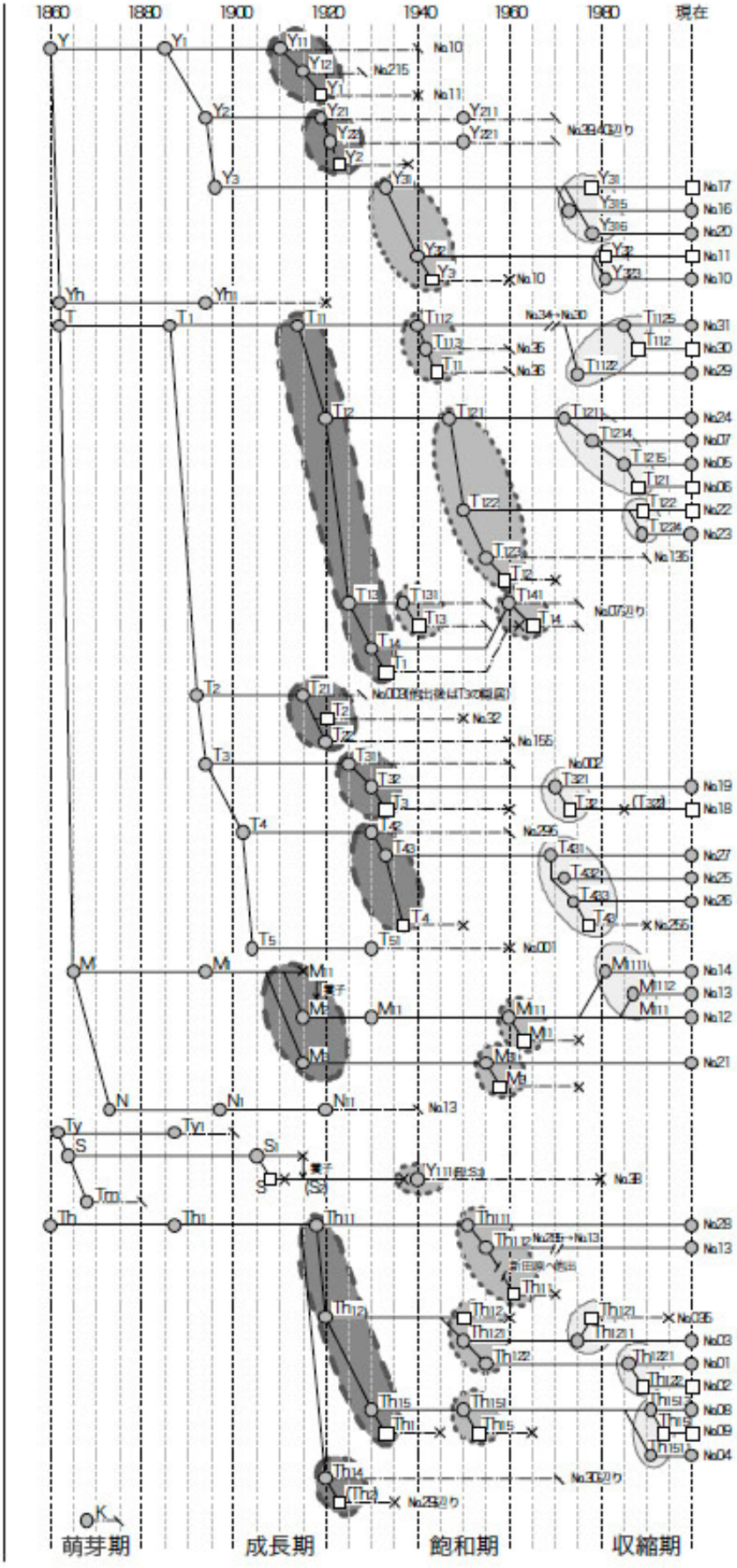


図 12　大水における家の系譜

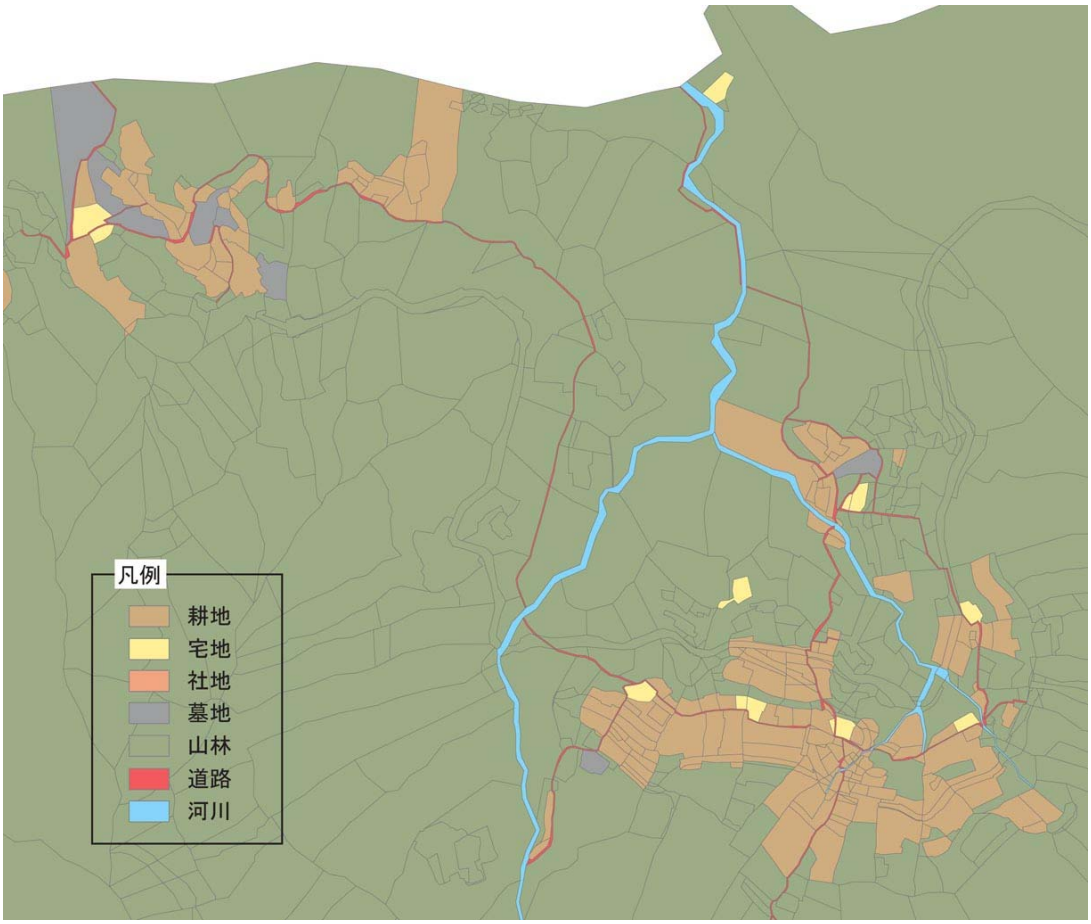


図 13　明治 10 年(1877)の土地利用

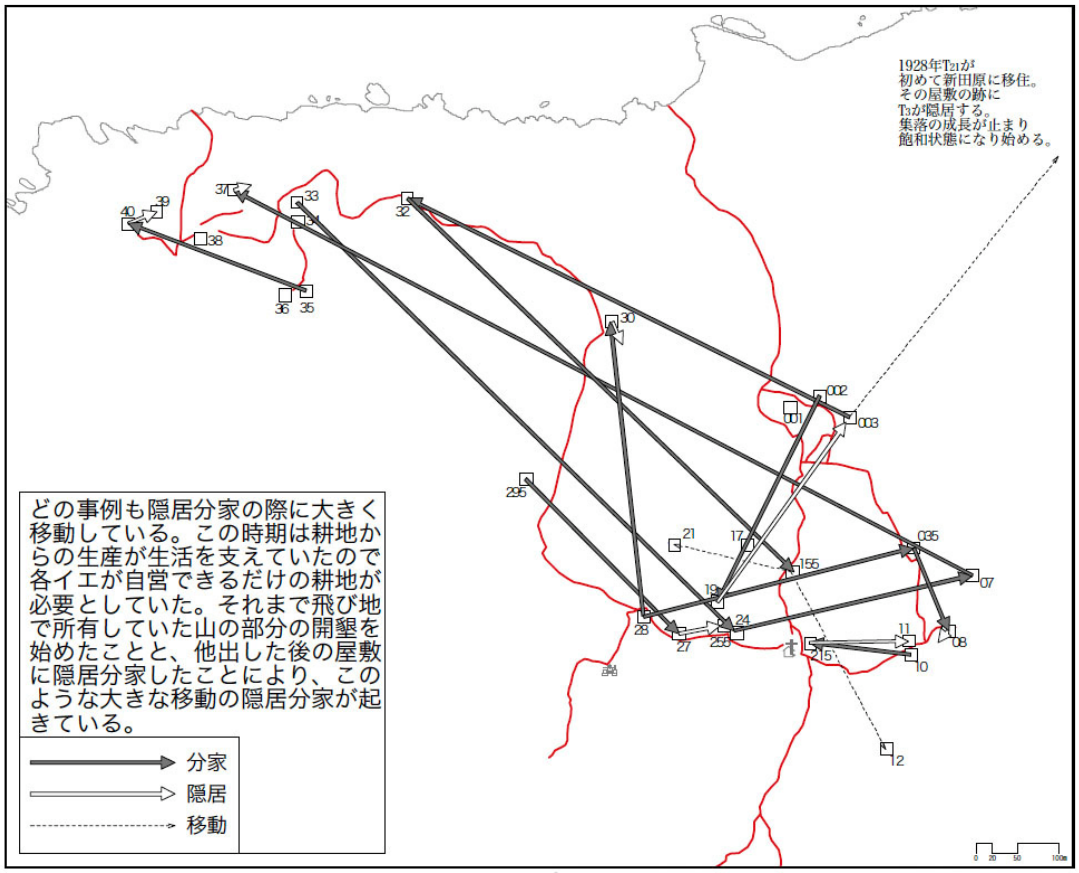


図 14　集落成長期のイエワカレ

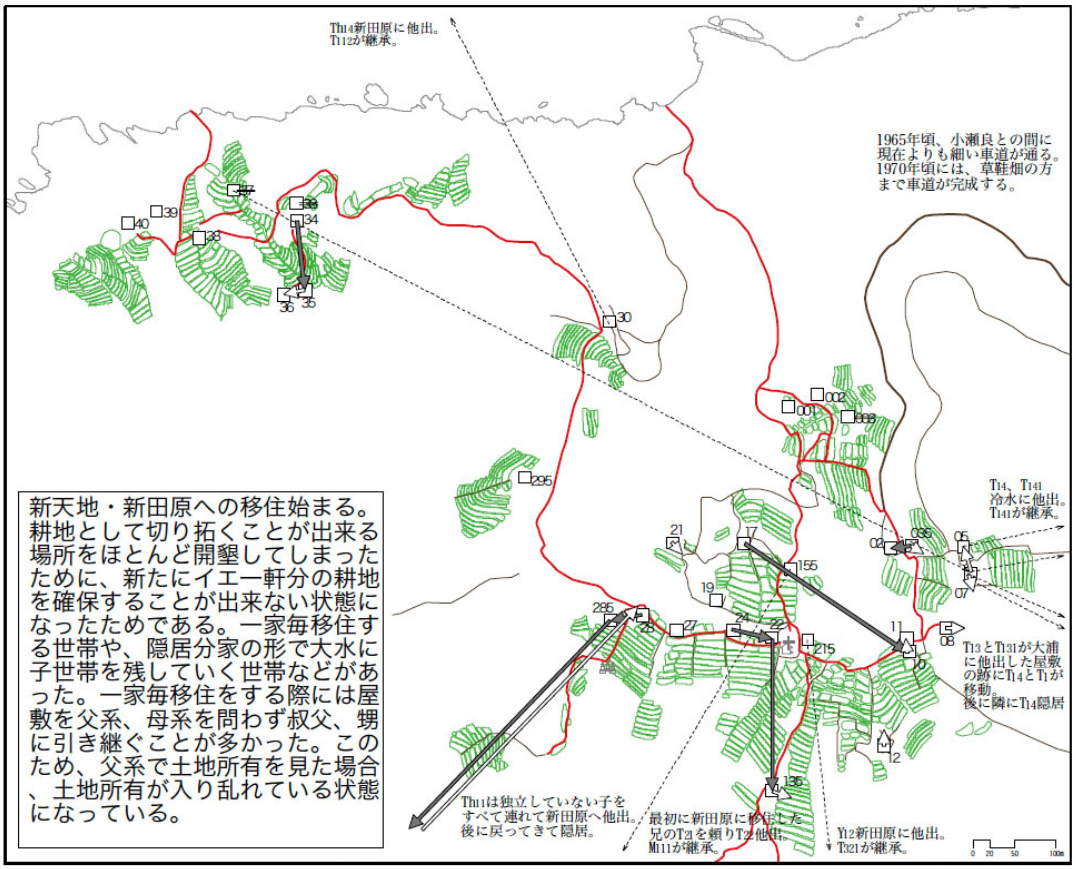


図 15　集落飽和期のイエワカレ

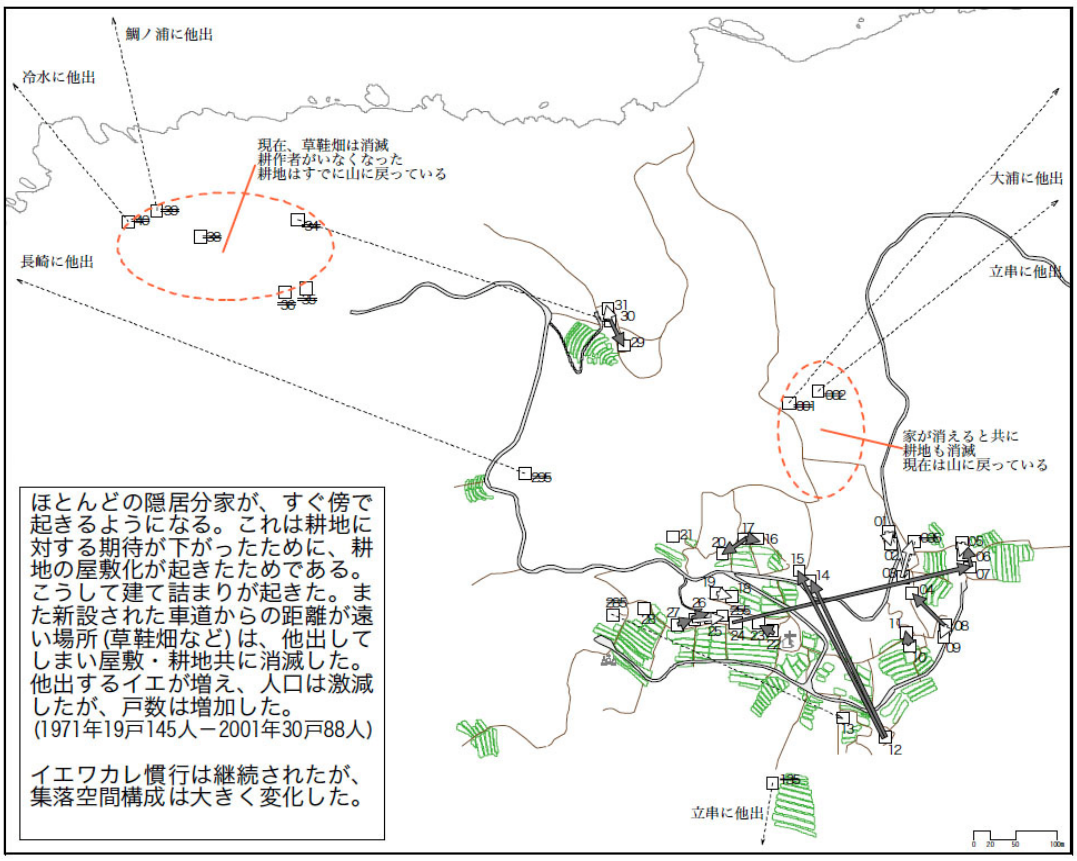


図 16　集落収縮期のイエワカレ

（４）居付集落の空間的特徴とその要因

前半で述べたように、北魚目にはいろいろな形態の集落が存在する。ここでは、それをできるだけ明快な指標によって分類して説明することを試みる。

一般に、集落形態にヴァリエーションを与えるファクターとして、地形、気候、生業、社会構造、開発時期などが挙げられる。さらに今回の場合は、地下か居付か、あるいはカトリックか潜伏キリシタンかといった社会文化的背景の違いが作用している。

当該地域の集落を大きく分類するとすれば、地下集落と居付集落の２分類が可能である。その違いを簡単に整理すると、以下のようになる。

地下は居付が起こる以前の集落で、漁業を生業とする。漁村は、一般的に住居が寄せ集められた集落形態をとる。津和崎や立串では、海岸線に沿って列状に並んだ構成が見られる。また、立串ではやや広めの平地部分に塊状の住居群も形成されている。大瀬良と小瀬良もかつては塊状の漁村集落だったと考えられる。その内部構成を見ると、列状部分は家が同じ向きに並ぶ秩序立った構成をしているが、塊状部分ではかなりランダムな配置となっている。もっとも、そのような構成は他の地域の漁村でもよく見られるもので、五島独自の特徴というわけではない。

それに対し、居付のほうは農業を生業としている。地下にくらべ住戸密度が低く、家と家とが距離を置いた散村形態をとる。それは、生産手段としての耕地が周りに存在するためである。農地は畑で主な作物は甘藷であり、一部水田をもつ集落もあるが大半は斜面地に形成された段畑である。このように、地下と居付の景観的な違いは生業に起因する面が大きい。

さらに、居付集落の中にも集落形態にいくつかのヴァリエーションが見られる。違いの要素の１つは地形である。大きくは谷の凹状地形と尾根の凸状地形とがあり、凹状地形は連続して面的に開発されているのに対し、凸状地形では開発が疎らに分散する傾向がみられる。形成時期は凹状地形で早く、凸状地形は遅れて開発されている。

初期の居付には、独立的に形成されたものと、地下集落に連続して形成されたものがあり、両者はとくに浜との関わり方が異なっている。すなわち、独立的な集落の場合、特に初期の事例ではそれぞれ自前の小さな港を持っているのに対し、地下と連続する場合は、山側の部分で領域を完結させ、浜側には領域を持たない。また、住居の集まり方にもやや違った傾向がみられる。

多様性の要因の１つとして、カトリック集落か潜伏キリシタンかの違いが働いているとも考えられる。景観上の大きな差異は、教会の有無である。カトリック集落では、集落の中央のよく目立つ場所に教会堂が建っている。しかし、教会堂の建設は集落形成より時期が遅く、その立地を手掛かりに集落が形づくられたということではい。

潜伏キリシタンは、当該地区の場合、立串・小瀬良・大瀬良などの地下集落の近傍に存在していたと考えられる。地下集落との関係性から、立地においてやや異なる構成をとるが、家の配置や耕地の取り方、宅地と耕地の関係などはカトリック集落と共通である。

居付集落は、未開の山林を開墾することで形成されたが、それが１～３戸の入植から始まり、僅か１～２世代の間に達成された点は驚きに値する。それには、大水の事例検討で見たような、隠居分家慣行によるイエワカレが有効に働いたと考えられる。形態的ヴァリエーションは、地形とくに水利条件の違いによって生まれたものであり、開墾の原則はほぼ共通だったとみてよい。

居付集落の特徴的な景観を形づくったものは、端的に言って移住農民の開拓精神とそのための社会システムである。キリスト教は間違いなくその拠り所だったが、その宗教性が直接的に影響を与えたものではない。それは、人々の「営み」の結果として生み出されたものである。

◇注

1 たとえば、立串は慶長年間に越前柴田勝家配下の漁民が移住したことにより発展したといわれる。

2 伊能忠敬翁地図「肥前国五島沿海」（京都大学附属図書館所蔵）。伊能忠敬が五島を実測したとされる文化 10 年（1813）をこの図の年代とした。

3 伊能図はあくまで海岸線を辿って測量し作成されたものであり、内陸部については集落や耕地を見逃している可能性もある。

4 明治 7 年（1874）の網師連名「旧来網代関係原由書」によると、加徳が経営してきた鮪網代として小瀬良、大瀬良もあげられており、これらが漁民の居住地だったことがわかる。ちなみに、近代以降の漁港の集約化によって立串と津和崎は拡大するが、小さな漁村集落であった小瀬良と大瀬良は縮小し、大瀬良は明治 10 年（1877）の時点で地下の集落部分が消失している。

5 洗礼台帳では、1815 年から 1831 年の間に江袋に居住していた 6 組の夫婦から 9 人の子供が出生している。また、仲知の島ノ首では第 1 次開拓夫婦の孫が 1821 年に仲知で生まれている。

6 『五島キリシタン史』によれば、米山には明治初年までキリシタンの存在が認められないという。また、『仲知小教区史』には、米山への最初の移住は明治初期で、迫害を逃れて久賀島から平戸へ移住し、そこでも迫害にあい、米山に開拓者として入ったとある。

7 浦川和三郎：『五島キリシタン史』、仙台司教館出版部、1951

8 西村次彦：『五島魚目郷土史』、1967

9 下口勲：『仲知小教区史』、1999

10 仲知に関しては、後に立串から小串を経由して島ノ首へ移住、江袋や立串から久志への移住が確認される。

11 『鯛ノ浦修道院 100 年の歩み』1984 に詳しい。

12 仲知周辺のデータが未入手のため、この部分の耕地に関しては記載していない。

13 明治 10 年（1877）の字図には、宅地が 40 筆余り存在する。『仲知小教区史』に記載された 17 戸との差異が大きいが、これには、分散する複数の宅地で 1 つの家族が構成されていた、洗礼台帳に記載されているのがカトリックに帰依して洗礼を受けた者に限られ未だ洗礼を受けていない潜伏キリシタンが混在していた、等の可能性が考えられる。

14 注 8 に同じ。

15 高橋弘一：「上五島のカトリック集落と教会堂の関係」（本報告書Ⅰ部第 5 章第 3 節）

16 注 15 に同じ。

17 菊地成朋：「五島キリシタン集落の空間特性とその形成過程に関する研究」、平成 12～14 年科研報告書、2004

18 フランス人宣教師ブレル師によって作成されたとされる。

19 注 15 に同じ。なお、初代教会堂は現在より 200m程西側にあり、大正 6 年（1917）の建替えに際し、現在の場所に移動した。

２．集落の空間構成

（１）北魚目地域への居住

中通島の北魚目地域は、最高峰番岳（442.6m）などの山地が連なる細長く延びた急傾斜地で、人類の居住には極めて不適である。事実、魚目浦絵図（貞亨５年　1688）や有川湾浦絵図（元禄２年1689）には立串以北に人家は描かれていない。平戸藩に属する津和崎は中世から確認されることから、平坦地の多い海岸部を除きほぼ無人の状況であったと考えられる。

19 世紀になると、大村藩の外海地方からの移住者が江袋など各地に居住するようになる。彼らは未開の急斜面部を開拓し、北部半島の山の中腹部に幾つかの集落を形成したのである。19 世紀前半は大村藩から直接の移住（1 次移住）であったが、19 世紀中葉以降は五島からの再移住（２次移住）が行われている。

五島では一般的に、先住者を地下（じげ）、主に 19 世紀以降の新たな移住者を居付（いつき・居着）と呼び区別している。北部半島では、前者は海岸部に集住し、後者はわずかな緩斜面に散居し、生業などにも違いが認められる。

（２）宗教施設・墓地の分布

歴史的な居住時期の違いに過ぎない地下と居付は、現在でも明確に区別できる。図１は神社・仏閣、教会などの宗教施設の分布、図２は墓地の特徴を示したものである。

これらから、移住者である居付の多くはカトリックに復活し、集落の中心に教会が建てられている。これらの集落には、石祠などがまったく見られない。かつて江袋には神社が存在していたが、明治初期に別地に移転されている。

地下集落は、津和崎、立串、小串に見るように氏神神社と金刀比羅神社の組み合わせが認められる。このような在り方は平戸島西海岸でも認められる。しかし、大瀬良の山神社、小瀬良の塩竈神社は集落規模が小さいことから小祠のみで、これらと性格が異なっている。これらは海岸部に分布し、通常の居付集落のあり方とも異なっており、潜伏キリシタン以外の移住者の存在が想定される。

墓地はこれと比べやや複雑な様相を呈しているが、これは移住者のすべてがカトリックに復活したわけではなく、カクレキリシタンが存在していたことを示していると考えられる。特に大瀬良、小瀬良の状況は注目すべきで、今後古墓の分析により明らかになるものと思われる。

（３）集落の境界認識

地下集落である津和崎と小串は、集落の境に板状のお札（ここでは「境札」と称しておく）を立てる習慣がある。これは平戸地方で初祈祷のとき行われる辻札と同種のもので、外部からの悪霊等の侵入を防ぐ意味があり、古代から行われている。この地域では道饗祭と呼ばれ、１月に行われている。神社で祝詞をあげ霊込し、手分けして境札を置きに行っている。

津和崎と小串において、境札を立てる場所は図３～５のとおりである。家屋の新築により範囲が広がる場合があり、集落空間の境界を意識するための標識である。境札には次のように記されている。

祓戸大神
奉祭　八衛彦大神　　小串郷内安全守護
八衛姫大神　（津和崎郷）
道返大神

当然、カトリック集落にはこのようなものは見られず、津和崎の結界は両者の境界でもある。立串などにはこのようなお札は認められないが、これは集落の古さと関係している可能性がある。

（４）地下・居付集落の空間構成

集落の周囲に神社を配する例は日本の古い集落に一般的であり、櫃石島集落などに典型的に認められる（松本 1879)。周辺地域でも平戸城下や的山大島神浦などに例がある。平戸地方の宝亀のような小さな集落では、神道は辻札、仏教はお堂と宝塔で囲んでいる例がある。北部半島における本例も、集落の境界を認識すると共に集落への悪霊や病気の進入を防ぐという意味がある。

北部半島では、古くから存在する地下集落は結界により守られているが、居付集落にはそのような認識はなく、集落の境界認識もあいまいだと思われる。集落の境界意識はアジア各地で認められる。例えば、北部タイのアカ族は集落の主な入口に門を設け、その脇に木像を置き精霊の進入を防いでいる。キリスト教への改宗者は、母集落の近くに教会を中心に新たな小集落を形成するが、彼らは門の外側に居住するので精霊世界との境界を意識しないようになる（清水他 1995)。キリスト教への改宗により、北部半島と同じような境界認識が生じたといえよう。

北部半島の居付集落に認められる伝統的観念との決別は、カトリックへの復活と強く相関しており、結界の存在の有無もその一環と考えられる。

◇引用文献

清水郁郎･畑聡一･服部義昭　1995「人間関係の諸相と宗教観念からみたアカ族の集落空間について―アカ族の住居、集落の空間構成概念に関する研究―」『日本建築学会計画系論文集』第 472 号
松本勝邦　1979「櫃石島集落の空間構成について」明治大学工学部研究報告　第 36 号

図１　宗教施設分布図

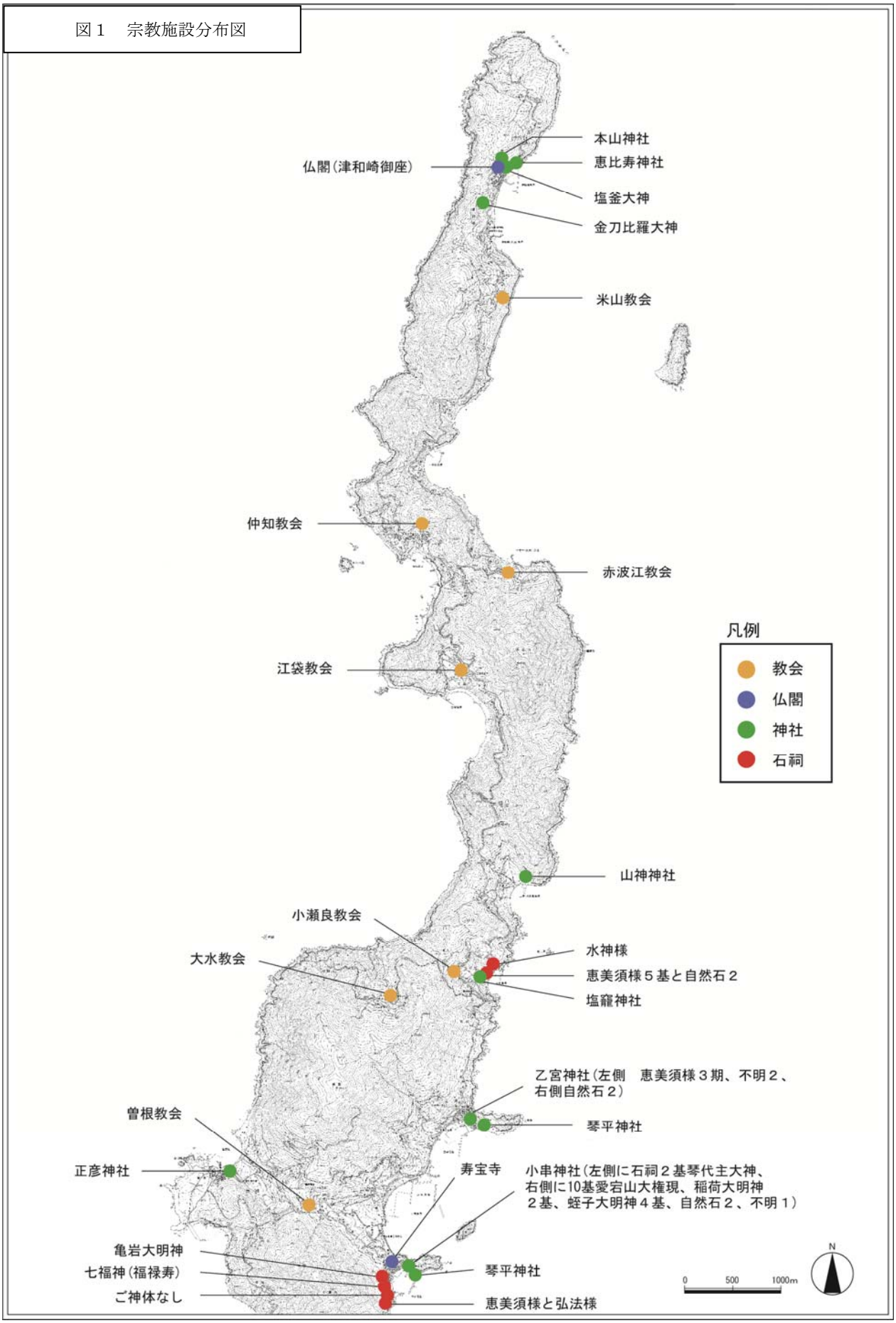

本山神社
仏閣（津和崎御座）
恵比寿神社
塩釜大神
金刀比羅大神
米山教会
仲知教会
赤波江教会
凡例
教会
仏閣
神社
石祠
江袋教会
山神神社
小瀬良教会
大水教会
水神様
恵美須様５基と自然石２
塩竈神社
乙宮神社（左側　恵美須様３期、不明２、
右側自然石２）
曽根教会
琴平神社
正彦神社
寿宝寺
小串神社（左側に石祠２基琴代主大神、
右側に10基愛宕山大権現、稲荷大明神
２基、蛭子大明神４基、自然石２、不明１）
亀岩大明神
七福神（福禄寿）
ご神体なし
琴平神社
恵美須様と弘法様
0
500
1000m
N

図２　墓地分布図

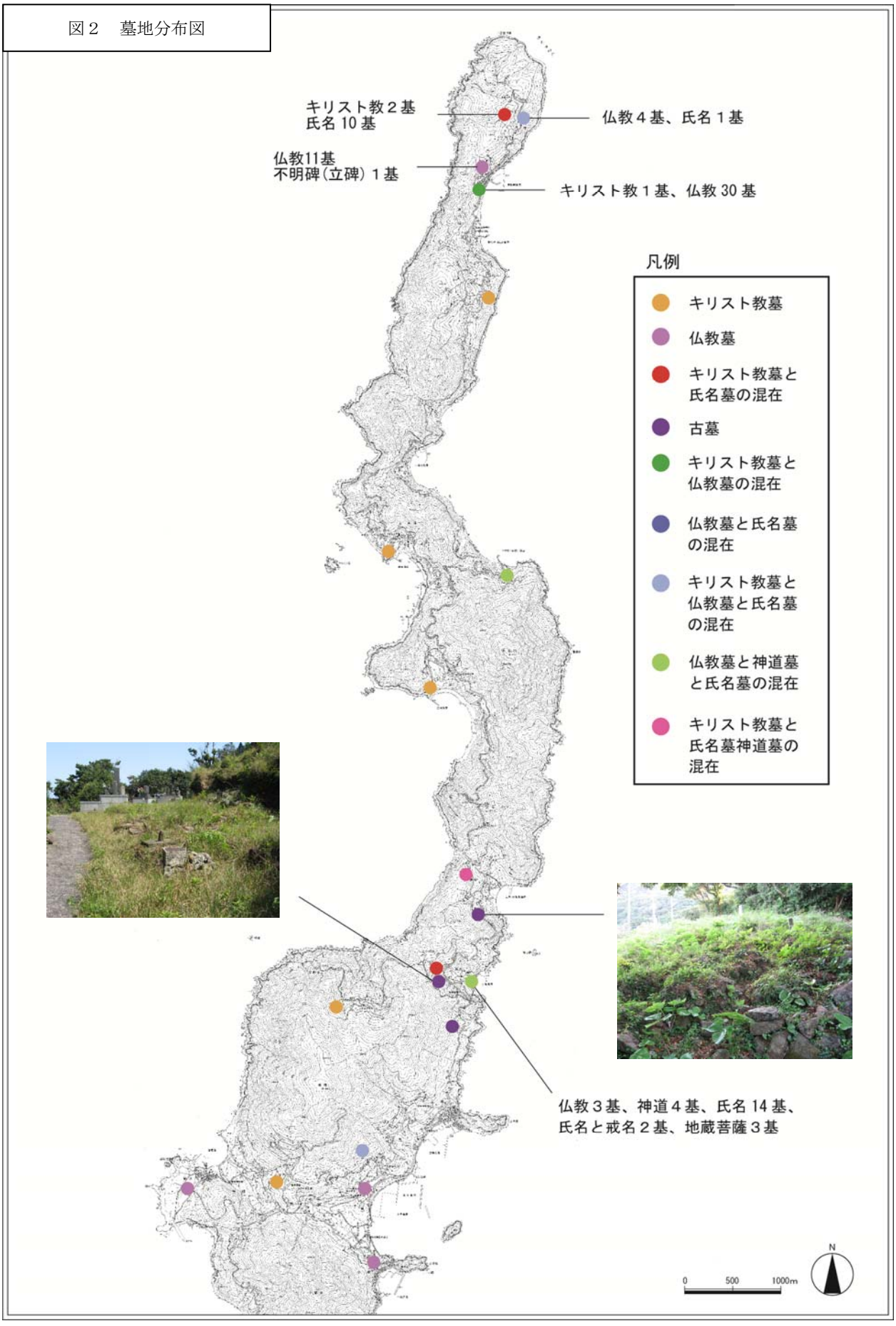
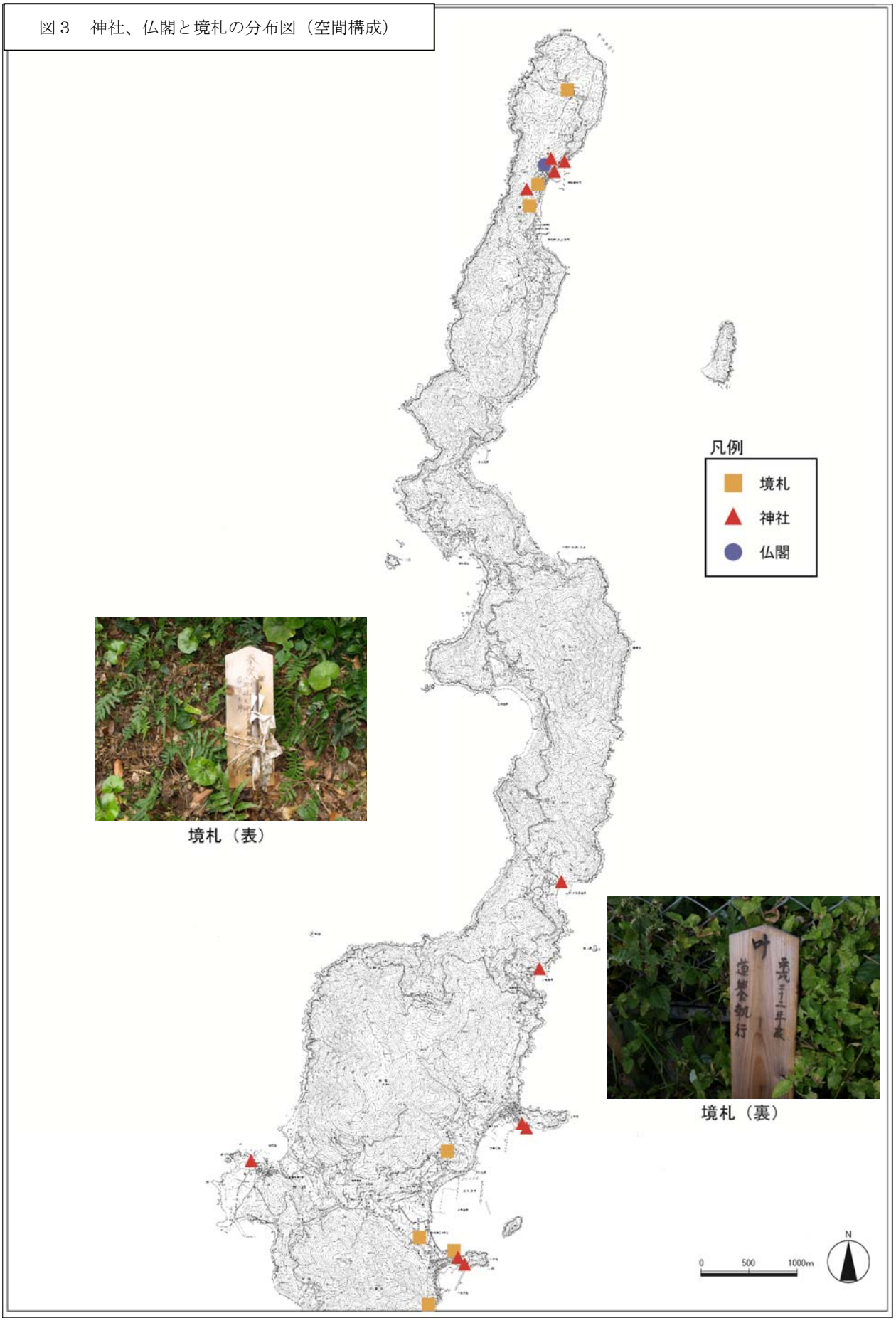

キリスト教２基
氏名 10 基
仏教４基、氏名１基
仏教11基
不明碑（立碑）１基
キリスト教１基、仏教 30 基
凡例
キリスト教墓
仏教墓
キリスト教墓と氏名墓の混在
古墓
キリスト教墓と仏教墓の混在
仏教墓と氏名墓の混在
キリスト教墓と仏教墓と氏名墓の混在
仏教墓と神道墓と氏名墓の混在
キリスト教墓と氏名墓神道墓の混在
仏教３基、神道４基、氏名 14 基、
氏名と戒名２基、地蔵菩薩３基
N
0
500
1000m

図３　神社、仏閣と境札の分布図（空間構成）



境札（表）

境札（裏）

図４　結界調査（津和崎）

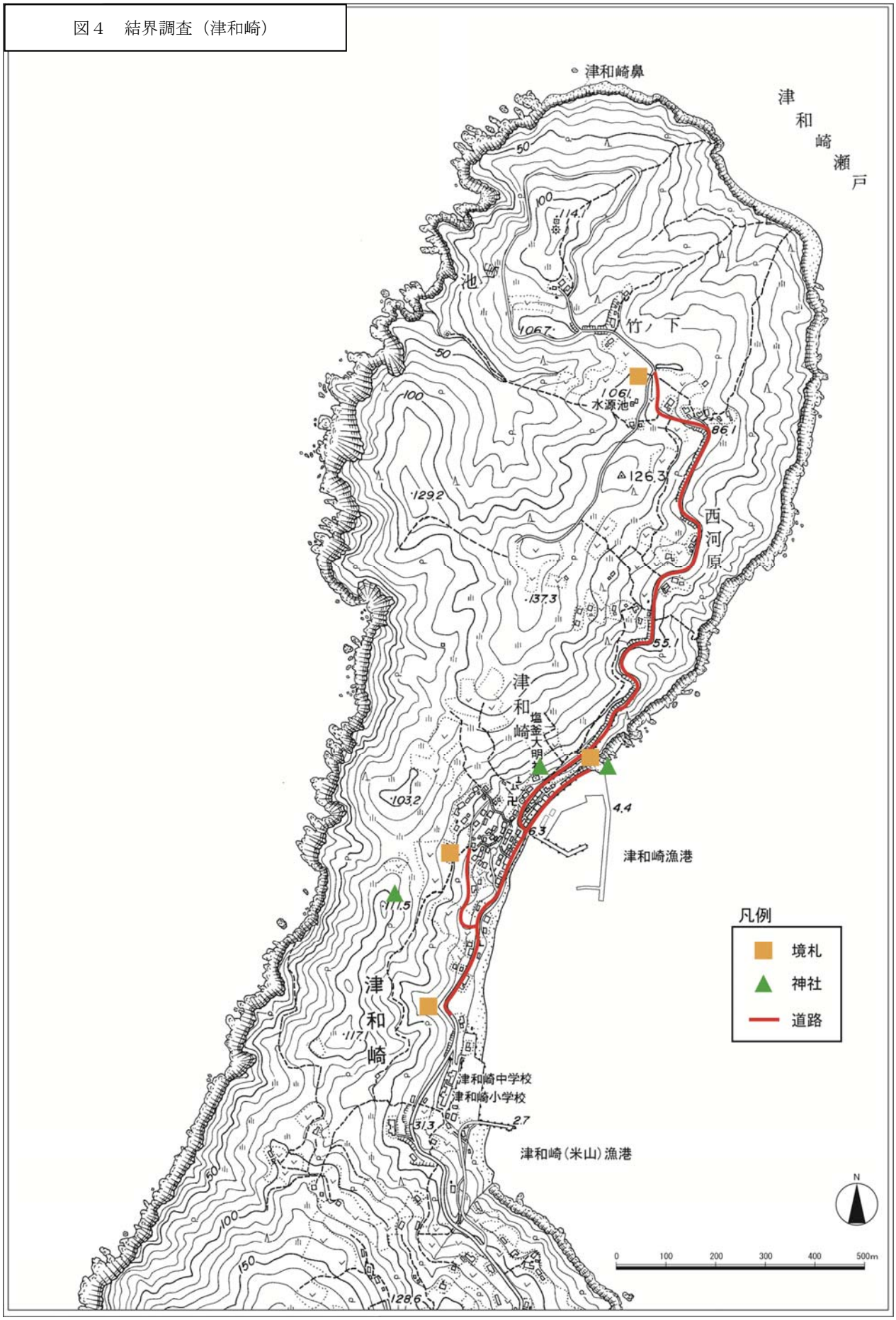
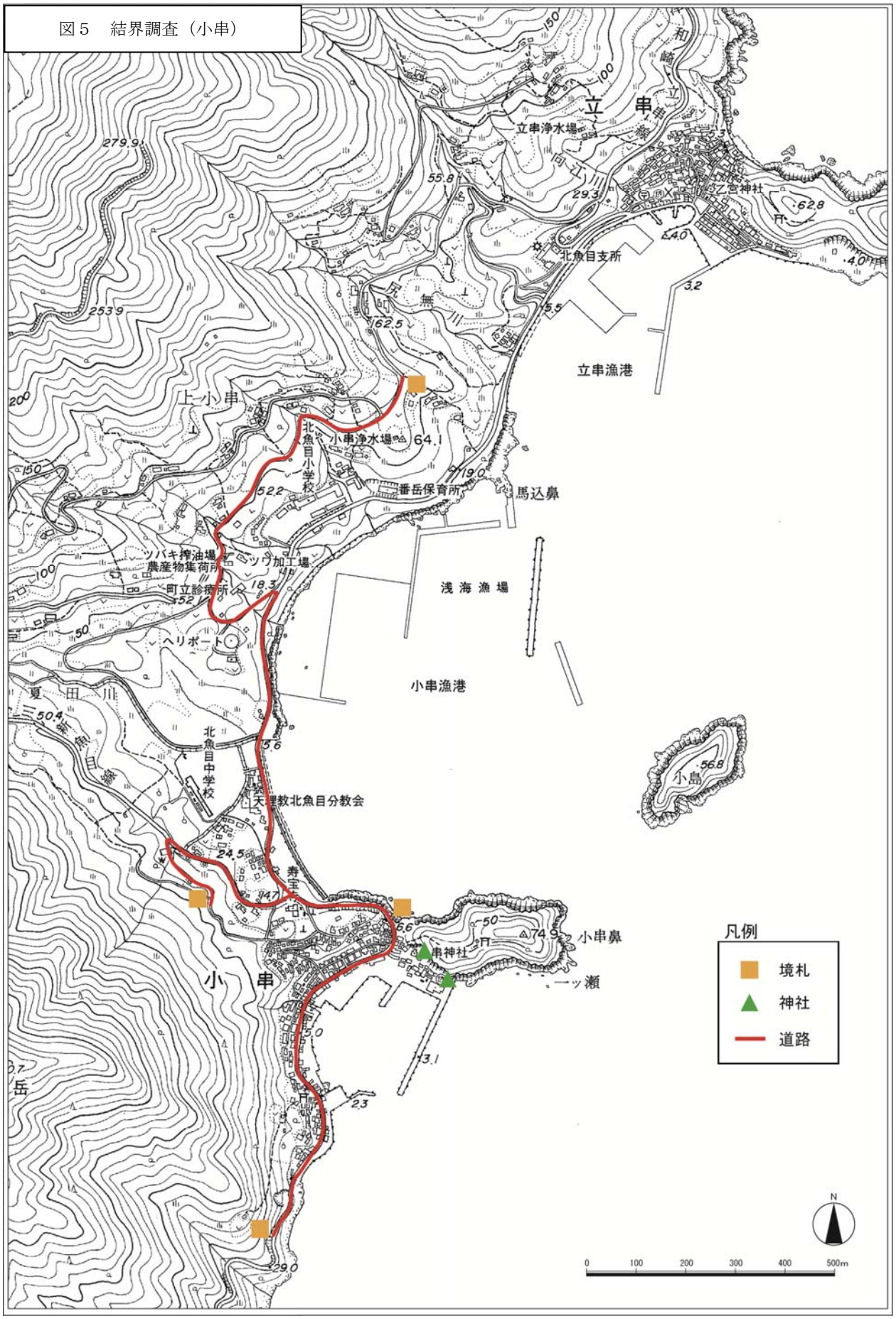

津和崎鼻
津和崎瀬戸
池ノ下
竹ノ下
106.7
106.1
水源池
86.1
△126.3
129.2
137.3
55.1
西河原
津和崎塩釜大明神
103.2
4.4
6.3
津和崎漁港
111.5
津和崎
117
津和崎中学校
津和崎小学校
31.3
2.7
津和崎（米山）漁港
128.6
凡例
境札
神社
道路
N
0
100
200
300
400
500m

図５　結界調査（小串）


立串
立串浄水場
立串漁港
北魚目支所
乙宮神社
上小串
小串浄水場
北魚目小学校
番岳保育所
馬込鼻
ツバキ搾油場
農産物集荷所
ツワ加工場
町立診療所
ヘリポート
浅海漁場
小串漁港
夏田川
北魚目中学校
天理教北魚目分教会
寿宝
小串
小串鼻
一ツ瀬
串神社
小島
凡例
境札
神社
道路
N
0
100
200
300
400
500m

３．墓地

北魚目地域にある墓地には、キリスト教墓と氏名が書かれた個人の墓、あるいは氏名の書かれている霊名塔が建てられている家族墓と仏教墓がそれぞれに混在する。表１～３のように墓地を分類した。

一般的にお墓に刻まれる文字は、「○○家奥津城」霊名として氏名の下に「之霊」、「命」、「命霊」、男性は「大人」（たいじん）、女性は「刀自」（とじ）と刻まれる。仏式のお墓には、「戒名」（浄土真宗では「法名」日蓮宗では「法号」）が刻まれる。キリスト教式のお墓には、「十字架」と「洗礼名」が刻まれる。

表１　墓碑名

A	洗礼名のある墓碑
B	戒名
C	氏名
D	洗礼名と氏名が混在する墓碑
E	洗礼名と戒名が混在する墓碑

表２　墓石の形式

①	伏碑
②	立碑
③	伏碑と立碑の複合
④	配石ａ　自然石のみ
⑤	配石ｂ　玉石のみ
⑥	配石ｃ　玉石と自然石
⑦	立碑と配石
⑧	伏碑と立碑と配石の複合
⑨	カロウト式石塔

表３　建立年（建立年がない場合は死亡年）

ア	明治時代
イ	大正時代
ウ	昭和 20 年以前
エ	昭和 20 年以後

北魚目地域には、集落毎に墓地があるが、一つの集落に複数の墓地が存在する集落もある。

津和崎集落には墓地が４箇所ある。津和崎灯台へ行く途中の山頂付近にある墓地は、ほとんどの墓碑が南東（長崎市）を向いている。沿岸部にある墓地には江戸時代に建立された墓碑もあり、集落の中では一番古い墓地ではないかと推測する。米山集落、仲知集落、江袋集落にはカトリック教会より祝別された墓地がある。キリスト教墓のみで他宗教の墓は基本的に混在しない。江袋集落には他に先祖の墓地や伝染病で亡くなった人の墓地が別々の場所にあったが、墓地への道が大変険しかったこともあり、現在は海岸近くにある墓地に改葬されている。江袋墓地と仲知墓地にある年号が刻まれている墓碑の中で最も古いものは、明治中頃のものである。配石墓も古くからあると推測されるが、昭和中頃まで配石墓でも埋葬しており、年代は不明である。

大瀬良集落の墓地はカトリック教会より祝別された証となる中心の十字架が建ち、キリスト教墓と氏名墓、神道の墓が混在する。この墓地には、上の段と下の段にそれぞれ中心の十字架があり、上の段の十字架は木造で下の段の十字架は石造である。下の段の中心の十字架は、昭和 38 年建立と刻まれている。中心の十字架の周辺にはキリスト教墓があり、それ以外の墓碑には氏名が刻まれている。大瀬良集落にはもう一カ所墓地が存在する。この墓地には、自然石を正方形に近い四角に積んで、中央に長方形に近い自然石を立てている墓が多い。また、配石の中央に角柱型墓塔を建てているものが数基ある。それらには大正の年号が刻まれている。

上小瀬良集落にはほぼ同じ位置に２個所の墓地がある。大水集落へ行く道路のすぐ下に位置する墓地には、キリスト教墓と自然石を四角に積んだ配石墓が混在する。配石墓には中央に長方形に近い自然石を立てている。

一方で、沿岸部に位置する小瀬良集落の墓地は海岸線から少し登った場所にある。江戸時代の墓碑などもあり、古くからあった墓地である。この墓地には仏教墓と神道墓が混在する。

大水集落の墓地はカトリック教会より祝別された中心の十字架の建つ墓地であるが、中央に階段を持ち左右に墓碑が建っている。自然石を長方形に積んだ配石墓もあるが、その自然石の上に海岸石である「まさご石」を積んでいる。大水集落の墓地は標高約 180mの高い場所にあるため、海岸から拾ってきて「まさご石」を置いたことになる。大水集落墓地の一番上の段は平地の幅が狭く、他の配石墓と比べると四角に積んだ配石墓が小さい。おそらく子どもの墓ではないかと推測されるが、地元の方に話を聞くことができなかった。

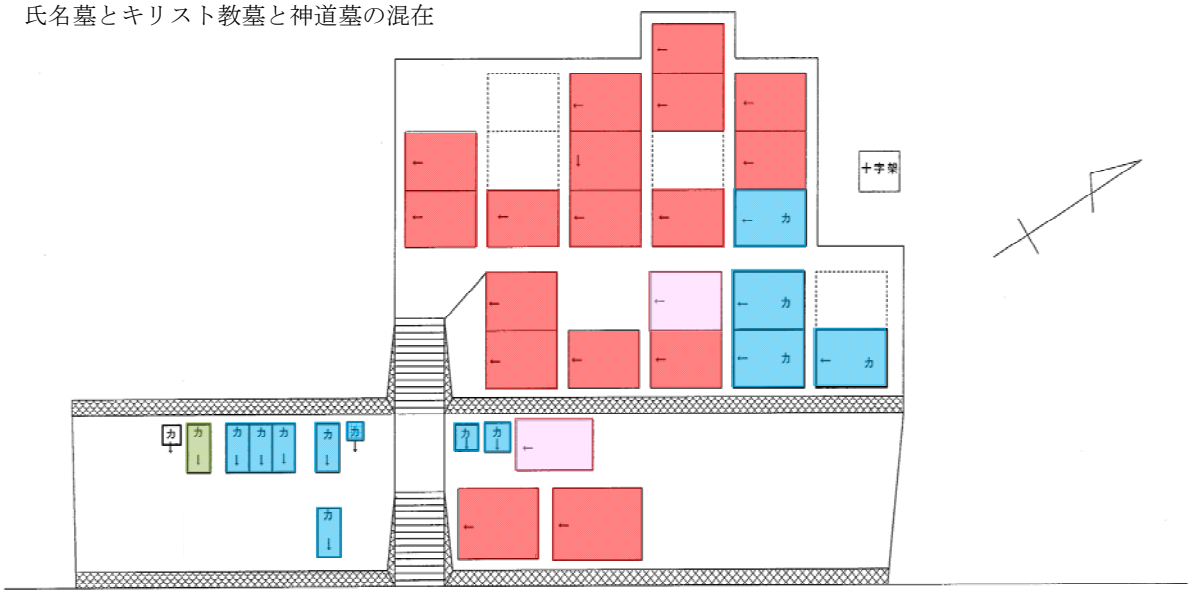
立串には番岳の中腹に墓地がある。網元である柴田家の墓地もあるがこれは昭和になってから改葬されたとのことである。柴田家の前の墓地は沿岸に広がる集落の中心に位置していた。

図１は墓碑名の種類で、墓地の平面図（模式図）に色分けしたものである。次の墓石の形式（写真）では、大まかに墓石の種類を９つに分け、それぞれの墓石を示している写真を掲載した。図２は９種類の墓石の形式毎に色分けした各集落の墓地平面図である。また、図３は墓石の建立時期毎に墓地平面図に色を塗っているが、配石墓は建立時期が不明なため、「配石墓」として色を塗った。調査した集落の墓地には江戸時代に建てられた墓石はなかった。集落内の別の場所に江戸時代の墓石が建っていたことが、最近の調査で明らかになりつつある。江袋墓地と仲知墓地については、加藤久雄氏の指導のもと作成した墓地調査表をもとに図面を作成した。

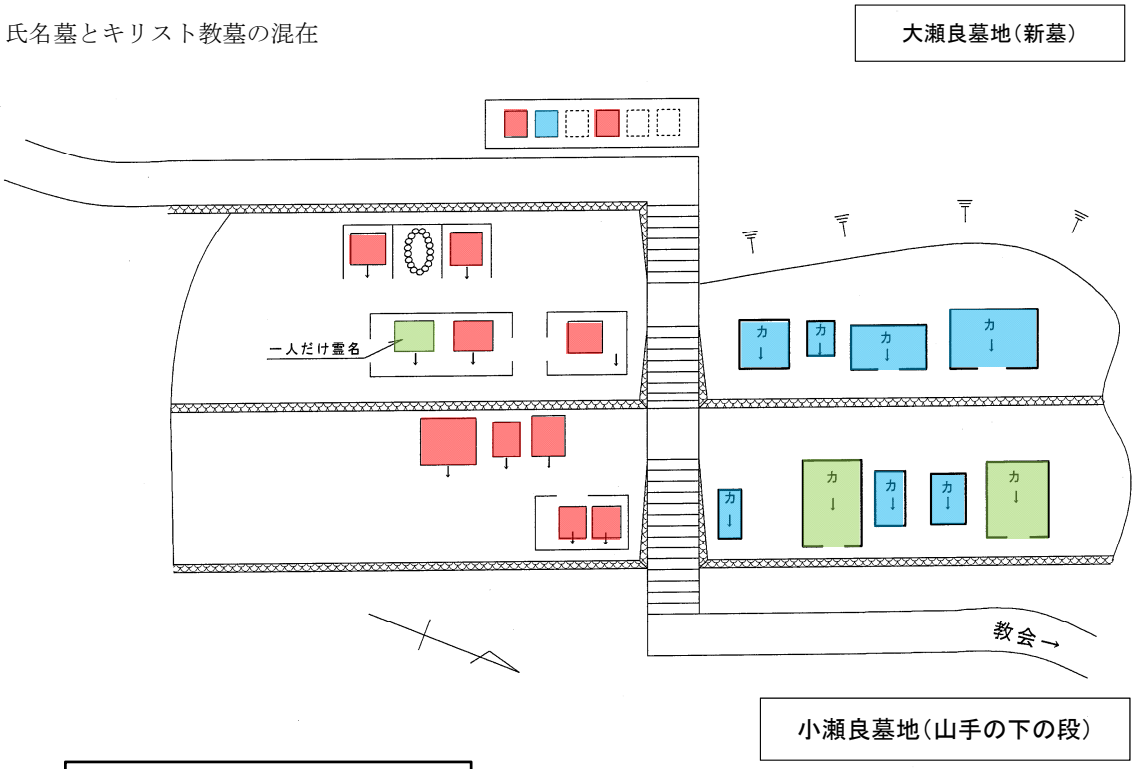
今後、さらに補足調査や分析を進めることでキリシタンの人々が潜伏していた時期からキリスト教へ復活した時期の墓地の変化形態を明らかにすることも可能であろう。

図１　墓碑名の種類

氏名墓とキリスト教墓と神道墓の混在



氏名墓とキリスト教墓の混在



墓石の形式（写真）



写真　①伏碑



写真　②立碑



写真　③複合（伏碑と立碑）



写真　④配石ａ（自然石のみ）



写真　⑤配石ｂ（玉石のみ）



写真　⑥配石ｃ（玉石と自然石）



写真　⑦立碑と配石



写真　⑧伏碑と立碑と配石の複合

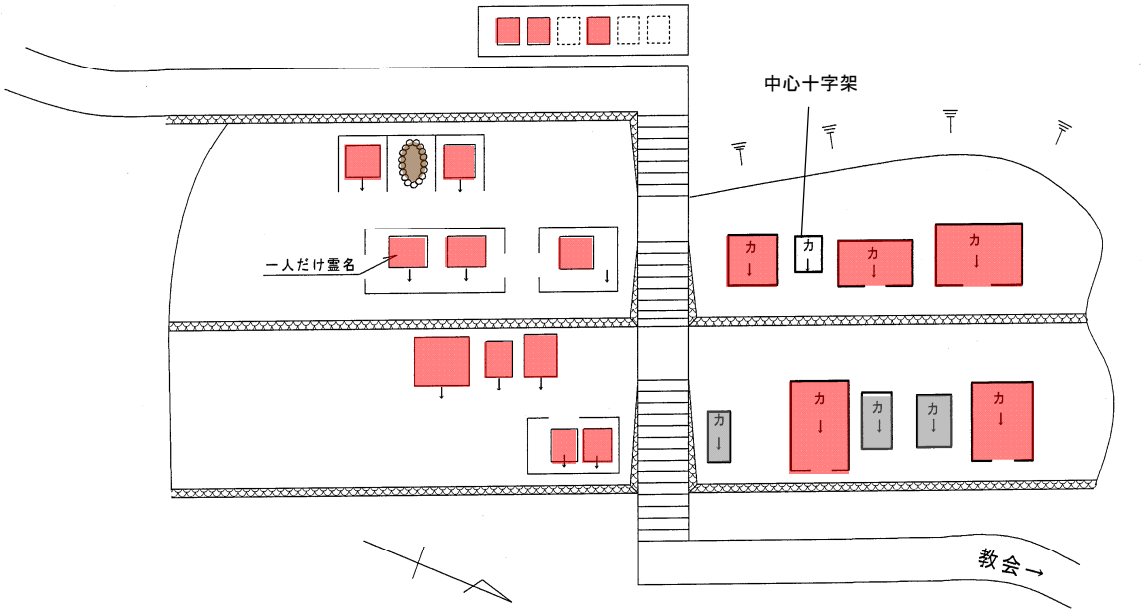


写真　⑨カロウト式石塔

図２　　墓石の種類・配置図



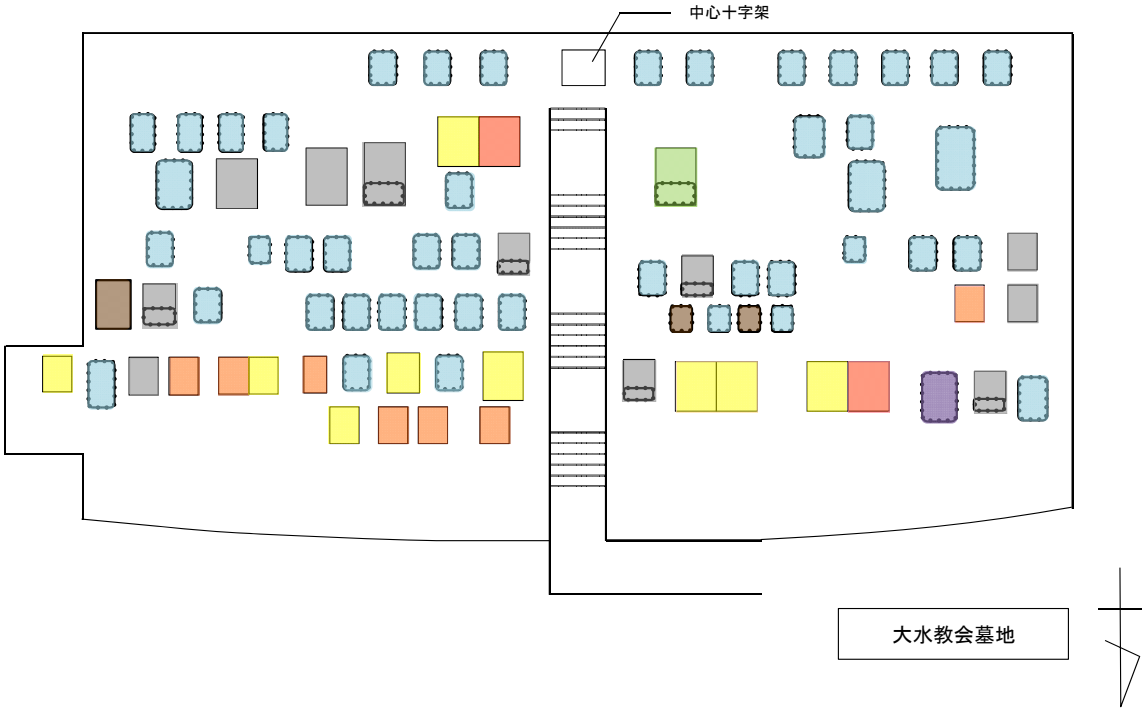
大瀬良墓地（新墓）



小瀬良墓地（山手の下の段）

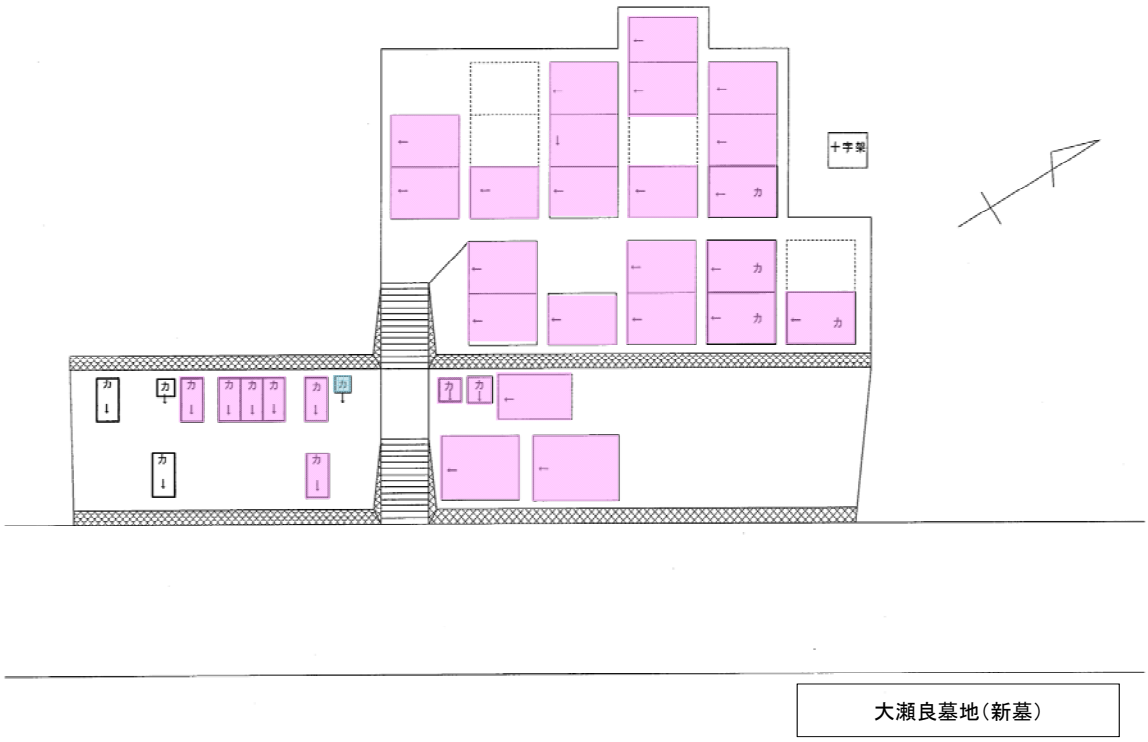
凡　例

立碑	立碑と配石
複合（伏碑と立碑）	配石b（まさご石）

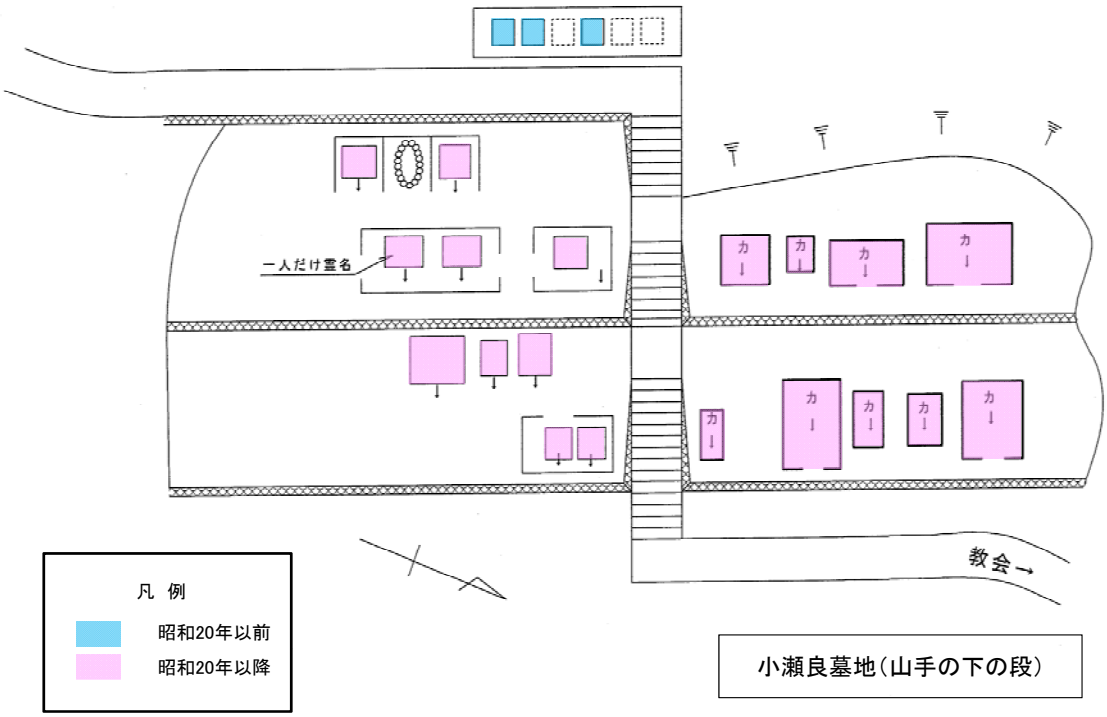

中心十字架
大水教会墓地


中心十字架
江袋教会墓地
凡　例
伏碑
立碑
複合（伏碑と立碑）
配石a（自然石）
配石b（まさご石）
配石c（玉石と自然石）
配石d（ブロック囲）
立碑と配石
伏碑と立碑と配石の複合
カロウト式石塔

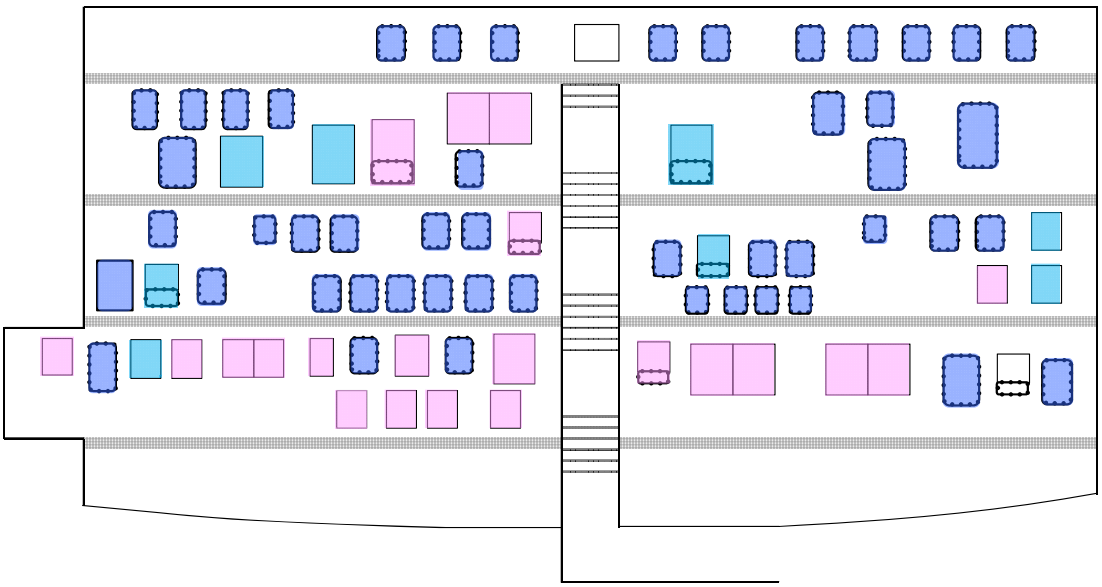
図３　　建立時期・配置図



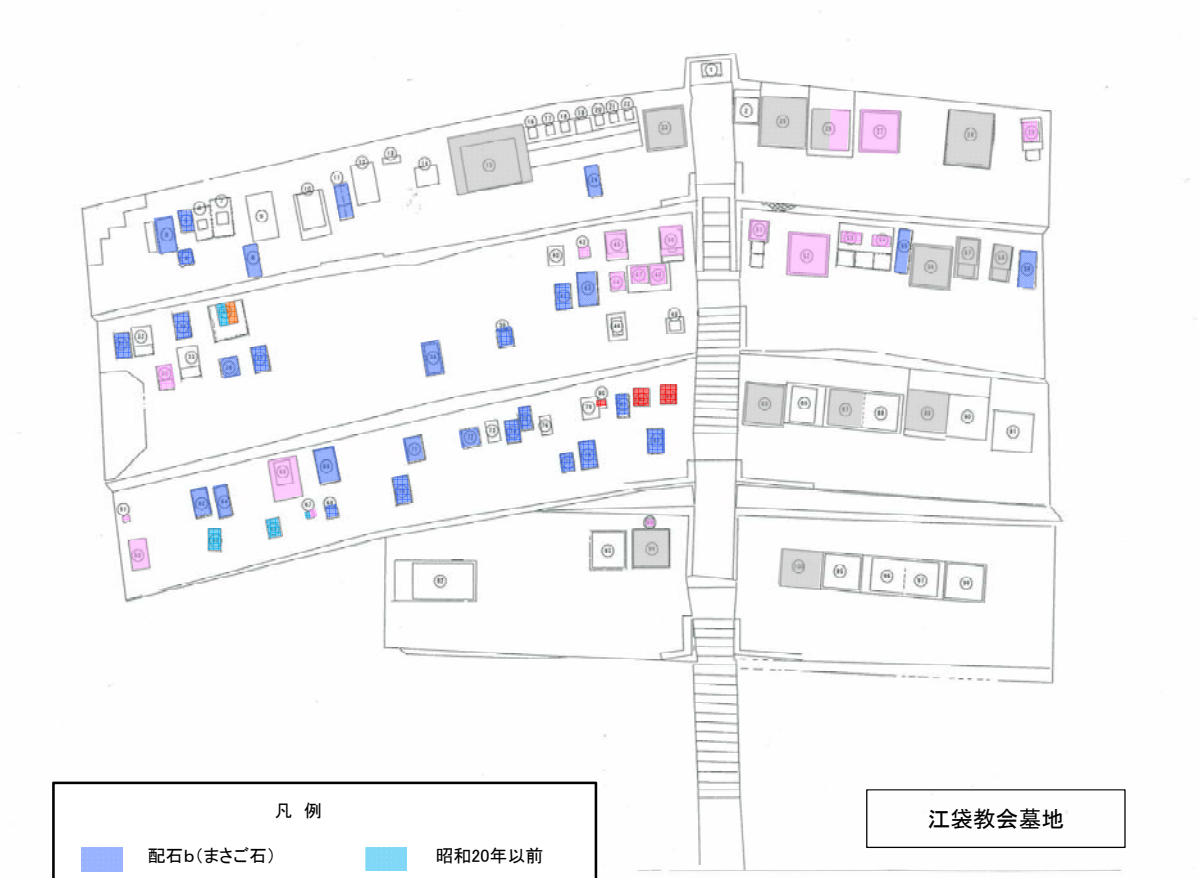
大瀬良墓地（新墓）



小瀬良墓地（山手の下の段）



大水教会墓地



江袋教会墓地

４．頭ヶ島天主堂と石切場

（１）はじめに

頭ヶ島天主堂は、明治43年（1910）着工、大正８年（1919）の完成で、地元の砂岩切石を用いた小規模ながら類例の少ない石造教会であり、外観内観に斬新で意欲的な造形をもつとして平成13年に重要文化財の指定を受けた[1]。新上五島町文化的景観の地質調査を担当した清川昌一氏によると、頭ヶ島、ロクロ島、平島、中通島東端の一帯を構成する地質は、新第三紀の中新世紀前期から中期（18～16百万年前）に湖底に砂泥が堆積したもので、五島層群の飯ノ瀬戸層相当層と呼ばれるもので、黄土色から灰白色石英粒子に富み、厚い連続性のよい砂岩層が分布する[2]という。

（２）頭ヶ島周辺における石材採掘

この地域における石材採掘について、『有川町郷土誌』は、次のように説明する。①古人の言い伝えから、起業は文久３年（1863）建築の長崎グラバー邸の使用石に遡り、オランダ坂の石畳は全面的に五島産の石であり[3]、崎浦地区（赤尾、友住、江之浜）で採石されたものである。②主として地福石、板石として採掘され、運搬は帆船で長崎・佐賀・福岡方面に積出され、帆船組合がつくられて採石荷を順番に積出した。③石は砂岩石で、用途は板石は道路用敷石、建築用の壁石、セコ石、墓石用に、地福石は建築基礎石、石坪等に使用した。④採石の最盛期は明治中期から大正年間で、職人数、帆船数も相当数に上り、採石一丁場（一現場）で帆船一艘分の生産積出した。⑤石碑彫刻は江の浜郷基地にあり、坂本竜馬ゆかりの難船乗組員の墓が江之浜の石田留蔵によって建立され[4]、元治慶応年代には石田のほか、友住の立木政吉ら、数人の者によって石碑造りが広められ、明治末から大正年間には相当数の彫刻職人に上がった。⑥石碑は地元産の砂岩石主体だったが、大正初期頃より黒島石材を購入して刻まれた。⑦大正末期より昭和初期になって採石山の原石が乏しくなり、後山が高くなったことによって採掘困難となり、ほとんどの山が閉山し、特種の山だけが五島円砥として鏡面取天然砥で大阪、東京に積出した。⑧その頃より崎浦三郷の職人は砂岩、黒島石、御影石を材石として石碑専業一本の業体に変わる。⑨石碑最盛期は昭和25～30年頃までで、当時は業者数64、従業者数170名と活気があったが、現在は衰微する。

以上のことから、採石の最盛期は明治中期から大正年間で、赤尾・友住・江ノ浜の崎浦地区の従事者によって切り出された。大正末期になって原石が乏しくなって採掘が困難になると、砥石として特殊の山から切り出すか、技術を活かし島外から仕入れた石の石碑彫刻に移行していった。起業は文久期とするが、平戸市木ヶ津の普門寺常盤蔵は、銅板銘[5]に耐久性の高い蔵を造るために五島領内頭ヶ島の石を壁に用いたとあり、嘉永４年（1851）２月21日起工、翌５年の完成で、石の使用は嘉永期まで遡って確認できる。

『日本地名大辞典　長崎県』（角川書店、昭和62年）は、赤尾郷について、近世より石材加工業者も多く、石碑・鳥居・記念碑など石材加工生産地であるとし、江ノ浜郷についても近世からの石材加工とし、先の項目に加え、敷石・建築用の石材加工の生産が地域の経済に寄与しているとする。『長崎県の地名』（平凡社、2001）は、江之浜村は赤尾・供栖村の同業地域と異なり、石碑の彫刻を主体とすると、江ノ浜が彫刻を得意とすることに触れている。

（３）頭ヶ島天主堂外壁に刻まれた数字

明治43年から大正８年に建設された頭ヶ島天主堂は、採石の最盛期であった明治中期から大正年間の、まさにその時期に建設された石造建造物である。採石のみならず、彫刻をこの地の石工が得意としたことは、天主堂外壁のルスティカ仕上げや軒・窓廻りの細部から認められる。天主堂外壁

を見ると、表面に漢数字が刻まれている。現地調査を行い、読み取った数字を立面図に書き入れたのが図１である。

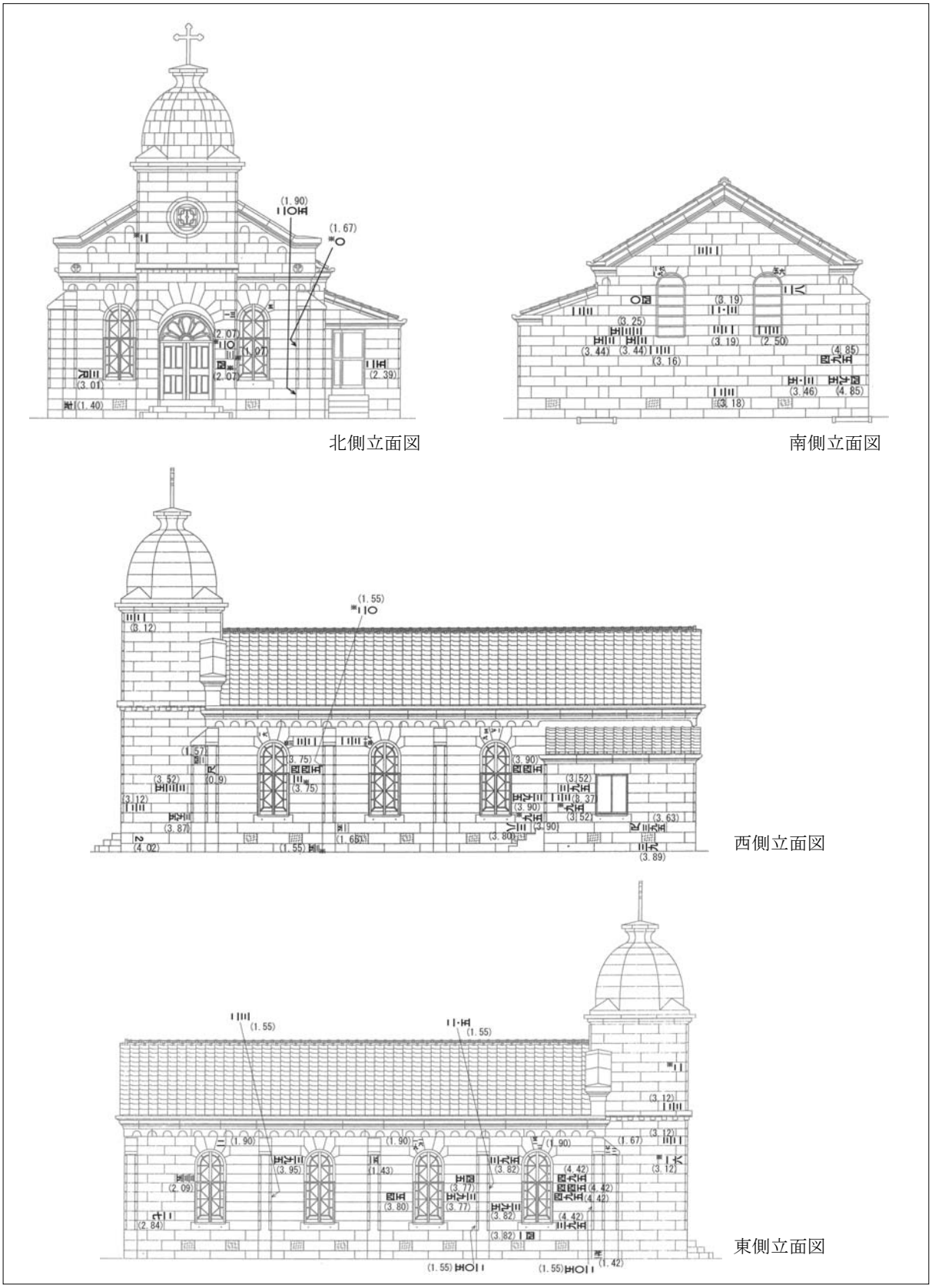


図１　頭ヶ島天主堂外壁の石に刻まれた数字
（数字は見やすいように拡大して記入した。向きは実際と同じ。線で引き出した数字は控壁側面に書かれたもの。カッコ内は実測値で、単位は尺寸。）

数字は漢数字で、正面に11ヶ所、西面に30ヶ所、東面に30ヶ所、背面に19ヶ所の計90ヶ所に確認され[6]、多くが石の長手方向に向きを合わせて刻まれていた。正面東側に「三尺」とあり、寸法を測ると高さ１尺、奥行１尺４寸、長さ３尺１分であることから、数字は石の長さを示し、単位は尺と判断された。他の石についても、高さと奥行は同じであるため、数字は長さを示すと見当がつけられた。東側立面を正面に近い側から見ていくと、「三二」とある石は長さ３尺１寸２分、「四九五」「四四五」とある石は長さ４尺４寸２分（図２）、「三九五」とある石は長さ３尺８寸２分で、漢数字は石の長さの尺寸値に近似する。図１には、刻まれた漢数字と合わせて実測値を洋数字で括弧内に書き込んだ。東側立面控壁の「二・五」、南側立面の「三・五」「三・二」のように点を打つものもあり、これは尺の区切りを示し、尺寸値を示すことがより明らかである。西側立面南側の米印をつけた「九五」の二箇所は、実測値が３尺５寸２分と３尺９寸で値が大きく異なるように見えるが、そうではなく、「九五」の文字は端に寄っているため、三九五の三が加工の過程で切り取られた可能性が高い。他の米印をつけたものも、数字の位置や実測値から検討して、一部が切り取られたと考えられるものである。

刻まれた漢数字と実測値は、数値の差が１～３寸程度のものと、５～７寸程度異なるものがある。５～７寸程度異なるのは先の東側立面北側の「四九五」とある石がそれで、端部が控壁との結合部にあたることから、組み合わせ部分の寸法を含むと考えられる。１～３寸程度の差は、仕上げの際に削った部分であろう。90ヶ所の漢数字は、「三二」が最も多く13ヶ所、次が「三九五」で９ヶ所（先の西側立面南側の「九五」も含むと11ヶ所）、「二〇五」が４ヶ所、「四九五」が４ヶ所、「四四五」が３ヶ所にあった。

図２に示した箇所は、見えがかり長さは４尺４寸２分であるから、上下の「四九五」は、５寸部分が控壁との組み合わせ部分となり、幅約１尺の控壁の半分まで入り込んでいると判断される。「四四五」を間に挟むことから、一段おきに控壁と組み合わせていると推測される。「三九五」「四四五」「四九五」の５寸刻みの寸法は、石の大きさの体系を図ったことも窺える。本来、寸法を示す文字は小屋裏につける木材の墨付などのように見えない箇所に記す場合が多く、見える箇所には表さないものである。刻まれた漢数字は、加工の過程で切り取られたとみられるものがあり、残して見せることを意識したものではない。天主堂と同時期に建設された司祭館も壁面３面は石造であるが、寸法を示すような文字は刻まれておらず、敷地内の門柱、石畳、石段などにも確認できない。刻まれた数字はたまたま残されたものと考えられるが、どのように頭ヶ島天主堂がつくられたのか、石の組み合わせの一端や、石の大きさの体系化を窺い知ることができ、重要である。



図２　頭ヶ島天主堂　東側立面北側の石壁に刻まれた文字（刻まれた部分を白線で示し、文字を書き起こした）

なお頭ヶ島天主堂は、鐘楼上までの高さ約12m、軒高さ約５m、壁厚さ１尺４寸で、大正12年の関東大震災以降に定められた建築制限規模に納まる[7]。強風にさらされる立地とはいえ、大正８年の完成からほどなく定められた厳しい制限を満たす堅牢さを備えているのは設計者の先見である。

（４）石切り場

頭ヶ島周辺には、図３に黒線で示した箇所に石切り場跡が残る。海岸沿いに分布し、戦後まで石工をしていた友住郷崎浦の立木政継氏によると、昭和30年頃まで採石が行われ、機械力のない時代

なので、採れるのは船が寄せられる場所に限られたという。中でも痕跡が良好に残るロクロ島北岸、頭ヶ島北西岸、北東岸（仙崎）について実測を行った（説明の便宜上、図３に地点Ａ、Ｂ、Ｃと記す）。

ロクロ島北岸（地点Ａ）には、幅約30m、奥行約25mにわたって石切りの跡が確認された（図４・５）。矢を使った跡がある他、直径２～３cmほどの穴が平均3.3m間隔、深さ1.2～1.8mで残る（図６）。立木氏によると、鉄棒を使って切出した跡で、２、３人がかりで鉄棒を上から突き入れて穴を作り出した後、穴の底に爆薬を入れ、爆破させて石を割ったという。

『牟礼・庵治の石工用具』[8]（牟礼町教育委員会・牟礼町石の民俗資料館、平成10年）によると、牟礼・庵治地域では鉄棒のことをエンショウノミ（煙硝鑿）と呼び、大きさは全長3,918mm、直径30mm、および全長288mm、直径26mmで、石を火薬割りするときの火薬を詰める穴を掘るときに使い、鉄製で、先は平たく蛤形の刃がつき、長さは１尺から基本的には１尺刻みに１丈をはるかに越すものまであり、鍛冶をして自分で作った。その使い方は、①岩盤の上に竹や木で軽く書いた線上に丸鑿を使って岩盤に先穴を開ける。②先穴にエンショウノミの先をあてがい穴を掘る。エンショウノミをしゃがんで保持する者１人とチュウゲンノウを持った３人という４人構成を基本とし、廻しながら上から叩き手が叩き、１回転を16回に分けて小刻みに動かせば丸い穴が掘れた。③ひとつの穴を掘るときは短いのから長いのに順次換えて使い、７、８本のエンショウノミを使うこともあった。④口径は８分と１寸の２種類であり、口径１寸のエンショウノミを使うと「寸二」といって直径１寸２分の穴が掘れ、掘っていくうちに穴が狭くなったり詰まったりしたときは、口径８分のノミを用いた。この場合、「八分二」といって直径は１寸となる。⑤深く掘っていくと石粉が詰まるため、取り除くために水を穴に入れ、ソウジボウという竹竿の先に布きれを巻き付けたものを突っ込み、穴の底を掃除する。⑥取る石の厚さ９割ほどの深さの穴を掘り終わると、黒色火薬を詰める。黒色火薬は粒状で一粒の爆発力は弱いが、潰して大量に詰めれば爆発力は強力で、方向性を持たせることができ、必要な部分の石を岩盤から浮かせることもできた。⑦火薬の量は掘った穴の深さの１～２割ほどで、「ミチビ」と呼ばれる導火線を差し込み、穴に泥をつめ、爆破させた。⑧この作業は一人前の丁場石工で一日３尺ほど掘るのがやっとで、エンショウノミを保持するには６～７年の経験が必要で、エンショウノミをゲンノウで叩くには10年以上の経験を必要とした。⑨採石する石の大きさにより、エンショウノミで開ける穴は30cmぐらいから１mほどの間隔をあけて平行に掘り（大石を採る場合に２本斜めに三角形を作るように掘る「ツガイボリ」という技術もある）、火薬を仕掛けて爆発させると、石は岩盤の弱い箇所を裂き、浮き上がった。

この記録は、地点Ａに残る鉄棒や石割れの跡を考える上で大変参考になり、穴の大きさや深さから、頭ヶ島周辺での使いかたもほぼ同様であったと判断される。

頭ヶ島北西岸（地点Ｂ）には、幅約45m、奥行約20m、高さ10m以上の規模で、石切りの跡が確認できる（図７・８）。壁面には、地点Ａよりも大掛かりに鉄棒を打ち込んだ跡が残る（図９）。図７に黒太線で示したのが、鉄棒の跡である。船が着けやすく、広い平場が確保できることから、作業に適していたことが窺える。

頭ヶ島北東岸（地点Ｃ）は仙崎と呼ばれる一帯で、幅約55mにわたって矢跡が残る（図10・11）。鉄棒を使った痕跡はない。

立木氏によると、石は場所によって硬さが異なり、地点ＡやＣの石は比較的柔らかいため、雨風に当たると表面が流れて風化しやすく、天主堂のような建築部材よりも敷石や板石に適している。地点Ｂは、石質が硬く、色合いも天主堂の石に近いという。



図３　頭ヶ島周辺石切り場跡（黒線部）

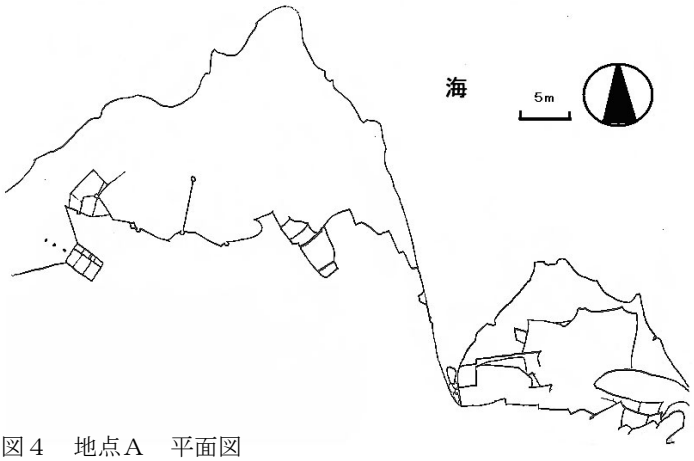


図４　地点Ａ　平面図



図５　地点Ａ　全景（東から西を見る）



図６　地点Ａの鉄棒跡

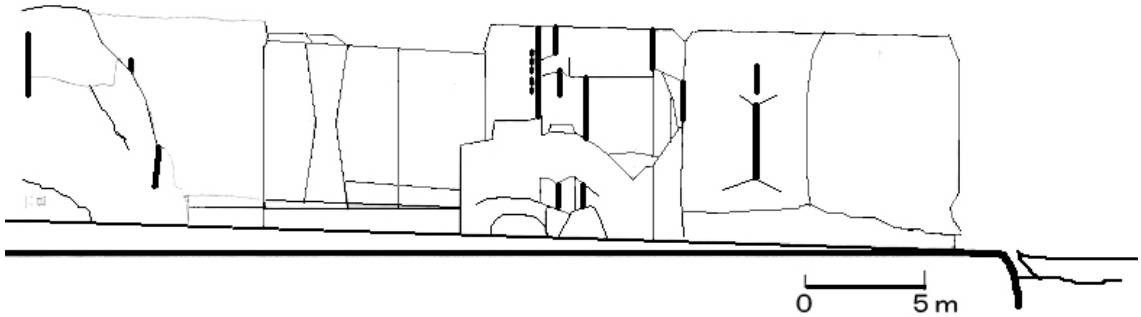


図７　地点Ｂ　立面図



図８　地点Ｂ　全景（北から南を見る）



図９　地点Ｂ　鉄棒跡

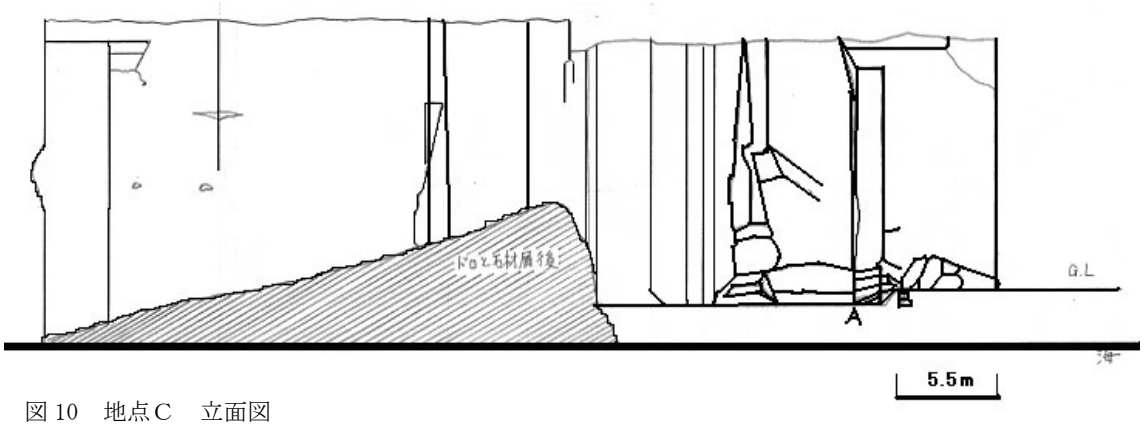


図 10　地点Ｃ　立面図



図 11　地点Ｃ　全景

（５）おわりに

『日本石材史』の石山分類と将来性判断要素（１石質の良否、２採掘の難易、３生産量の多い事、４需要地に近い所、５輸送の便利な所）によれば、頭ヶ島周辺の石切場は、単一面石山で丘を切り開いた、方法としては最も容易な採石方法であったが、要素のうち生産量が不十分で、また交通手段の変化によって、昭和 30 年頃には採石は下火になっていった。同書は、大谷石を用いた帝国ホテル（大正 10 年）、倉橋石を用いた国会議事堂（昭和 11 年）などを、石の産地と美しさを知らしめた建築として紹介する。しかし、多くの石造建造物は貼石であり、主体構造そのものではない。頭ヶ島周辺の採石場は、嘉永期から昭和 30 年までの１世紀のあいだに、普門寺常盤蔵と頭ヶ島天主堂などを単体の石造建造物として生み出した。特に頭ヶ島天主堂は、採石地の中心に建つとして、カトリック教会堂としてだけでなく、この地域の採石の歴史を物語る記念碑的存在といえる。また、頭ヶ島、崎浦地区の各集落では、石畳、石塀、段畑、小屋壁などに石の使用が認められ、地域の歴史と文化が表れた景観として高く評価することができる。

◇注

1 「新指定の文化財　頭ヶ島天主堂」『月刊文化財』平成 14 年１月号、文化庁文化財部。

2 「上五島の文化的景観、保存調査報告書（基礎資料編）」新上五島町、2010 年３月。

3 『重要文化財旧グラバー住宅修理工事報告書』（長崎市、昭和 43 年）に、主屋と附属屋（文久３年・1863）のベランダの床は板石敷で五島石とあり、ベランダの石敷きに使われている。ただしこれは修理時点のもので、元来は稲佐山附近から産出する稲佐石を敷いていたが、後世補修する際に五島石が用いられたようである。昭和 43 年に終了した修理工事の際には、在来の板石のうち、稲佐石は破損が著しく再用不能であったため、後世補修の五島石のみ採用し、新補足板石は上五島の頭ヶ島から採石したものを使用した。よって、グラバー邸での使用を起業とするには疑問が残るが、オランダ坂をはじめとする居留地の広範な石畳道に使用したことは認めてよいだろう。『長崎居留地、伝統的建造物群保存対策調査報告書』（平成元年、長崎市教育委員会）によれば、文久元年の Municipal Council（市議会）にて山手のあらゆる道に割り石を敷く事を定め、明治 10 年頃には実際に石張りした様子が確認できることから、採掘の起業時期を幕末頃とするのは差し支えないと判断される。

4 墓碑の建立は慶応２年。

5 「（前略）嘉永（略）四年辛亥二月二十一日起工、十月十八日上梁、五年壬子八月告成、（略）新庫以耐久為要是以畳五嶋封内頭嶋石為障壁（中略）嘉永七年歳在甲寅春三月初吉（後略）」。常磐蔵の規模は、梁間約 17 尺、桁行約 30 尺、壁厚は２尺５寸（１石）。石表面は、細かい叩き仕上げとする。

6 西側立面の北端、地面から２段目の石に漢数字ではなく洋数字で２とある。段数を示す可能性もあるが、１箇所では判断しがたく、ここでは図１に書き込むに留める。

7 『日本石材史』（日本石材振興会、昭和 31 年）によると、大正 12 年の関東大震災以降は、煉瓦造、石造は主体構造材料としての地位を失い、建築においては法規的に、高さ 42 尺（13m）、軒の高さ 30 尺（９m）以下、壁の厚さは１尺以上とする詳細な制限規定が設けられ、石材は法規の規定する限度内において稀に利用される他は用いられなくなったとする。

8 昭和 30 年代に機械化によって道具が失われることを懸念し、牟礼町・庵治町の石材加工業界の青年達が昭和 55 年より石工用具の資料収集及び整理を開始。収蔵する 5,500 点のうち 791 点が「牟礼・庵治の石工用具」として、平成８年に国の重要有形民俗文化財に指定。

５．上五島の地質

（１）地質概略

五島列島は、1500 万年前に日本海が形成・拡大することでユーラシア大陸から離れていった日本列島の最も西端に位置する。このことは、地質記録には、日本海形成以前のユーラシア大陸縁辺域の記録と日本海が形成していく時の記録が残っており、また、南部では東シナ海と九州−琉球列島に沿うようにできている沖縄トラフという 700～200 万年ごろ形成した背弧海盆に接しており、その形成時の痕跡が残る場所でもある。

具体的に、上五島は、１）北西南東方向に伸びる 1500～1300 万年前の五島層群とその地層の変形構造による地形と上五島は、２）南北型の 700 万年以降の火山岩類からなる地形により歪んだ十字型をしている（図１）。日本海拡大時の地層と変形作用の記録は、北西南東方向に伸びる地層群に記録されており、日本海に流れ込んだ川・デルタやその周辺にできた湿地帯・湖の地層と北西側に階段状にずれ落ちる正断層構造が残っている。一方南北方向には 700 万年前に活動した南部の厚い火砕流堆積物と北部の花崗斑岩類の貫入岩類が露出しており、まさに北部沖縄トラフの活動に関連した証拠であると考えられる。

現在、北部九州はフィリピン海プレートの沈み込みと中国－韓半島にかけてのホットリージョンの一部をなし、比較的深い部分からの火山活動が起こっている。赤岩部では第四紀の新しい火山岩が露出し、福江島から続く北西－南東方向のアルカリ玄武岩活動の痕跡が残る。これは北西－南東方向の古い断層帯（弱い線部）に沿ってマグマが貫入してきたものである。

（２）上五島地域の地質

上五島は大きく３つの地質体に区分できる。地形的に南北を走る火山岩・火成岩地域が山を作っており、この地質により、東エリア、中央火山エリア、西エリアに分かれる。それぞれ、正断層によって区分されている。地形境界がそのまま地層境界になっているのではないので、注意が必要であるが、地形と地質を合わせた区分を行う。

①東エリア

本エリアは、厚い砂岩層を主とする地質体から形成されており、変形もあまりない比較的水平な堆積岩からなる地層が見られる。境界は有川・小河原漁港から男鹿浦になる。堆積岩は五島層群上部にあたり、厚い砂岩層にはハンモッキー斜交層理、リップルマーク、巨大斜交層理砂岩など波の影響のある浅い海からデルタを示す環境であると考えられる。火成活動は石英斑岩というデイサイトから流紋岩質の貫入岩がみられる。特に、頭ヶ島飛行場東側の崖には、地層を緩く切る岩脈がみられ、所々地層に水平なシルになっている。この地域は比較的変形は少ないが、南北系の正断層は各地で見られる。

ロクロ島および頭ヶ島では淡黄色－黄色い砂岩層が広く分布し、教会の壁石に使っていたと言われている。この砂岩層は、細かなリップルラミナ、平行層理、脱水構造を持つ塊状砂岩からなる。非常に均質な砂岩層で、浅い海からデルタ末端部の環境の堆積物である。間には有機物に富む泥岩層を挟み、氾濫原の堆積物であると考えられる。

②中央火山エリア

本エリアは厚い火山活動に伴った岩類と花崗岩質の貫入岩からなる。堆積岩からなる五島層群の上位に不整合で重なっているが、その露頭はほとんど見ることができず、西側では、土井ノ浦漁港から青方港、矢堅目の半島に抜ける部分に断層がある。東側の小河原漁協－男鹿浦では、堆積

岩と火山岩が海岸線を挟んで見られるために、湾が断層境界であると考えられる。中央火山エリアは西と東エリアの間に南北系の正断層で落下したグラーベンを形成していると考えられる。

南部の奈良尾・若松南部地域は、白色火山砕屑岩を主とする厚い火山噴出岩からなり、その中には、大量の五島層群のブロックなどを含む。爆発的な火山活動が基盤の岩石と一緒に吹き飛んでいる可能性がある。岩瀬浦漁港から神ノ浦漁港に関しては、黒色の頁岩を基質にした灰色の火山岩類を含む火山砕屑性堆積岩からなり、基質支持で泥の中に礫が浮いた状態で固まった岩石である。これは、火山活動の後におこる泥流堆積物の可能性が高い。この堆積物がグラーベンを埋めていると考えられる。

北部地域は、花崗岩質の貫入岩が多く見られる。花崗岩には緑色のゼノリスを多く含んでおり、マグマの上昇にともない火道の周辺部の岩石をつかんで上昇しているものと考えられる。花崗岩類は有福島にも見られており、中央火山エリアに出現するものとの比較により、正断層がどのくらいずれたかが推定できるかもしれない。

北部半島の集落を区分する半島（鼻）が見られる。たとえば、小串鼻、立串鼻地域や小瀬良漁港の海岸線には熱変成を受けて、傾斜した砂岩層が点々と分布している。東海岸でも、仲知小島、ビシャゴ鼻などは砂岩層が分布する。久志の学校下の海岸線は、貫入岩がシルとして広く分布し、一見地層のように見える。

本地域の五島層群は、基本的には北西方向に上位を示し、北東－南西方向に伸び、北西方向に急角度の正断層の影響を受けている。そのため、北西側がより新しい地層が分布する。祝言島から北東に延びる五島層群は江袋地域につながり、江袋地域では、砂岩泥岩互層が分布する。江袋地域は、初期の北西に落ちる日本海形成時に活動した断層群と、南北方向のグラーベン構造がクロスした場所にあたり、火成岩類の貫入なども併せて複雑な地質構造をしている。

唯一、五島層群と上位の火山岩の不整合境界が見られるのが、鯛ノ浦入り口の藤崎である。ただ、ここでは東西系の断層も発達し、堆積岩層と含礫火山岩質泥岩層が巻き込まれているところもある（鯛ノ浦・長崎鼻）。

③西エリア

西エリアは広く北西方向に傾斜した五島層群が分布し、緑色に変質した火山岩質凝灰岩の高崎鼻層、湖や陸の湿地帯からなる道土井層、淡黄色の厚い砂岩からなる飯ノ瀬戸層の３つの地層からなり、五島層群を形成している（安永ほか、2007）。地質構造では若松地区の南部地域に北東方向に軸をもつ大きな背斜があり、北西に傾斜する地層は層序を保っており、全層厚 700mに達する。

基本的には、日本海形成はじめのリフトに伴う火成活動、リフト形成による湖の形成、北東部に日本海が開くためそこに流れ込む河川システムが発達し、デルタ地域の河川堆積物とその周辺部の氾濫減・湿地帯を形成していたと考えられる。

以上のように、上五島は隠されたグラーベン構造があり、少なくとも 300mのずれがあった可能性がある。隠された断層にそって、数万年前のアルカリ玄武岩活動（曽根火山）が起こっている。

五島層群は日本列島の西端に位置するために、ユーラシア大陸と日本列島がどのような関係でつながっていたかを示す証拠が地層の中に残っている。日本海拡大事件やその後の沖縄トラフ形成事件は、海洋プレートが沈み込み帯の沈み込まれる側に形成する背弧海盆（海洋プレートが沈み込んだとき、島弧の後ろ側に発達する大きなくぼみ、日本海など）形成という一般的な問題を解く手がかりにもなる。

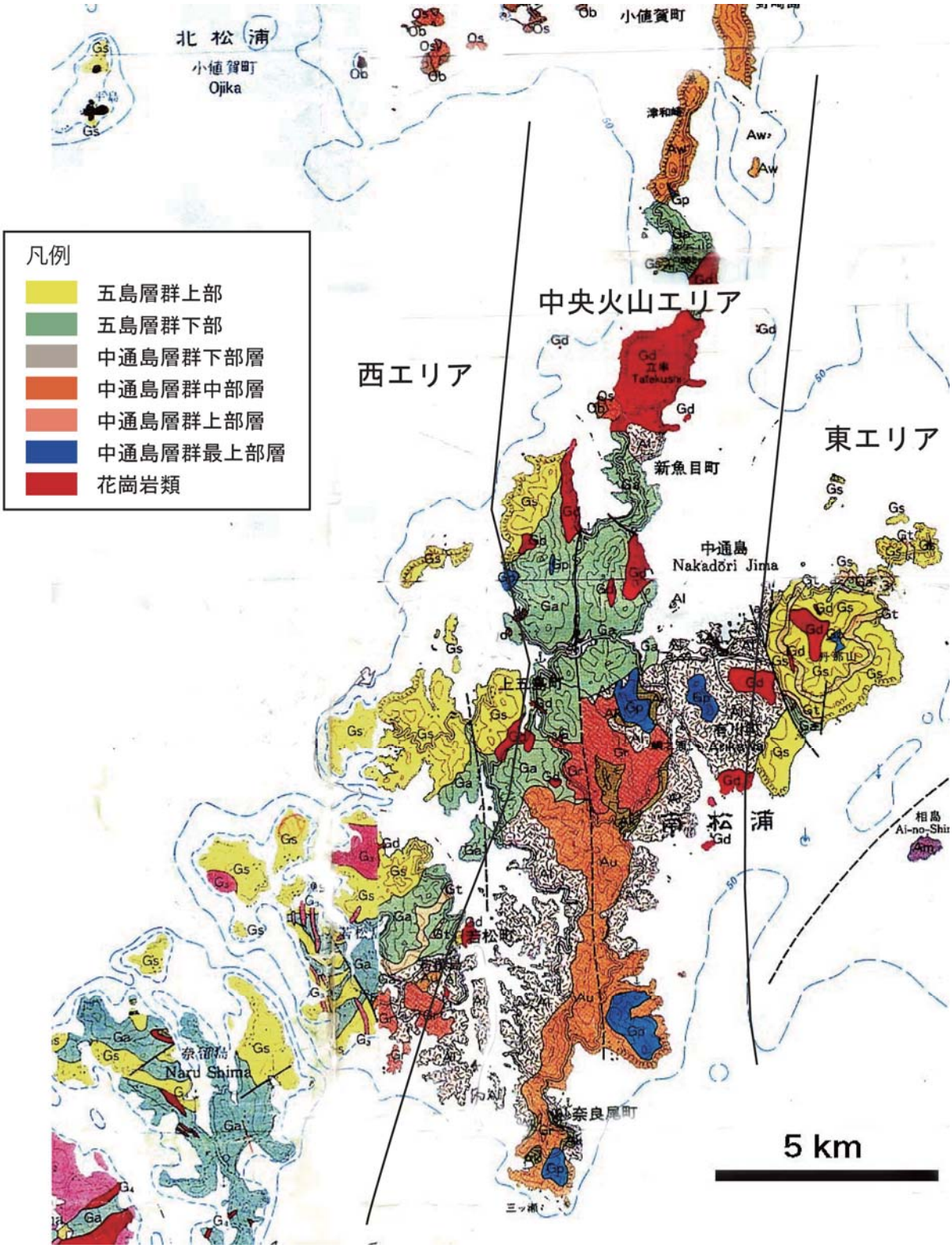


図１　上五島地域の地質図

実際には境界が入り組んでいるが、中央火山エリアがグラーベンをなしており、その中に火山岩や花崗岩類が貫入する。この変形は、700万年前以降に起こっており、北部沖縄トラフの拡大に関連すると考えられる。

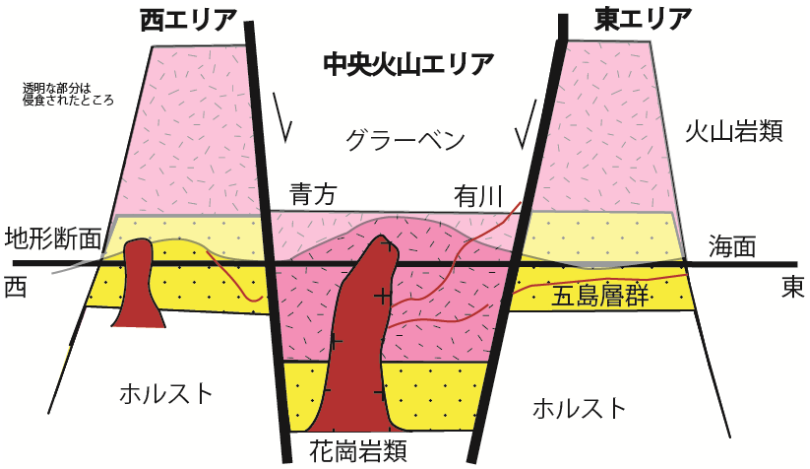


図２　上五島地域のモデル断面

第２節　歴史

１．明治以降における神社境内の景観変容　―長崎県第 27 大区の事例―

はじめに

長崎歴史文化博物館に、明治８年（1875）に作成された「神社明細調帳」（本稿掲載写真）がある。この記録は、大区ごとにまとめられたものだが、神社の由緒と共に彩色入りの境内絵図が記録されている。写真が普及していない時代における神社境内の景観を知る上では、非常に貴重なものである。

ここでは、日本の社会が近代化を目指し、国家神道が形成され、軍国主義に突き進んだ時代から、戦後を経て現代に至る過程で、神社境内がいかに変容していったのか、この点を検証していく。ここで対象とする第 27 大区（日之島・若松・濵之浦・魚目・北魚目・奈良尾・有川・青方の八ヵ村）は、前近代の社会でカクレキリシタンが存在した地域であり、明治政府が国民教化に力を注いだところでもある。従って、信仰の自由と地域社会、あるいは国家と地域社会といった関係を踏まえた現代社会形成過程におけるひとつの側面を、明らかにしうる情報を提供できるものと考える。

（１）明治政府の神社把握と長崎県

①明治政府による「神社明細調帳」の作成経緯

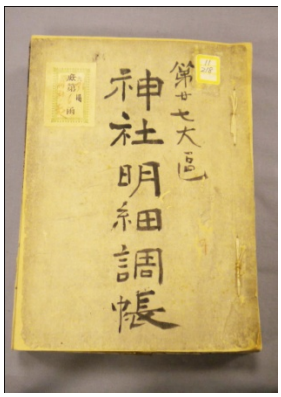
明治３年（1870）閏 10 月 28 日、太政官布告（第 779　付録法令）で府藩県管内の大小神社の規則を定めるにあたり、府藩県は管内神社の鎮座地、社名、官社間数（建物）、祭神、勧請年記（由緒）、祭日、境内、社領、摂末社、社職、氏子数等についての詳細を取り調べるように命じた。翌４年（1871）正月には、明治政府が社寺領の上知を命じる。同年５月 14 日、太政官布告（第 235）によって、神祇官所管の官国弊社以下の諸社の社格をもととした、府県郷村社の社格ごとの鎮座地・社名・氏子数・社職氏名について調査された。この調査結果は、明治５年（1872）正月に府県郷村社社格区別帳として提出することになったが（神祇省１号、付録法令六）、これが神社明細調帳の起源とされている。

その後、地租改正の業務にともなって、明治８年（1875）３月からは官員を各府県に派遣して取り調べを行うこととし、境内の実測図面を取りそろえておくように命じられた（明治７年（1874）内務省乙第 71 号）。同年８月、「社寺境内外区画取調規則」（地租改正事務局達乙第４号、付録法令 13）で書式などが定められ、神社の管理台帳である明細帳の整備がされていく。そして、最終的には、明治 12 年（1879）の内務省達「神社寺院明細帳ニ関スル件」により、神社明細調帳の様式が定められた。その内容は、鎮座地・社格・神社名・祭神・由緒・例祭日・本殿以下建物の建坪ならびに図面・造営の沿革・氏子戸数などであった[1]。

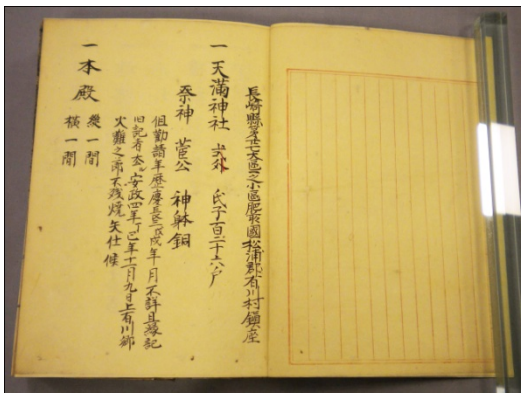
長崎県に提出された神社明細帳[2]は、明治８年（1875）に大区単位で作成されたものであるが、第 27 区を例にすると次のようなものであった。

②長崎県の「神社明細調帳」

第 27 大区は５つの小区からなっていたが、さらに小区を村単位で区切り、神社が把握されている。社格は、郷社・村社・雑社の３区分で把握され、全 68 社の記載がある。実は、明治８年（1875）に作成された神社明細帳は、２冊ある[3]。表題は同じだが、史料番号 11　218 から検証していく。

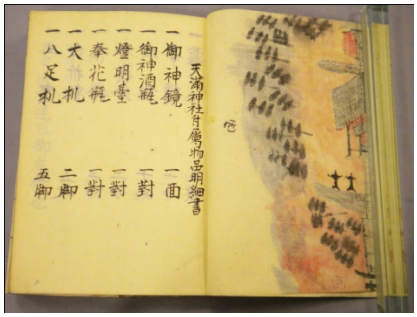






有川村の郷社である天満神社を例にすると、鎮座地、神社名、氏子数、祭神、本殿以下の建造物、社地、攝社、宸翰・勅額の有無、造営費、旧社領、末社、県庁（長崎）迄の距離の順に記載され、明治８年（1875）５月付で、天満神社祠宦馬場榮知・第 27 大区戸長櫻井弘人が署名捺印し、長崎県令宮川房之殿宛で提出されている。





その次に、彩色入りの境内絵図が付され、天満神社付属物品明細書が後に続き、天満神社祠宦馬場榮知が捺印、氏子総代立石亀三良・上田岩助が署名し、記載内容に相違ないことを長崎県令宮川房之に対して証明している。それぞれの神社は、末社も含め、この記載順をもとに記載されており、記載内容がないものについては、省略されている。従って、各神社の情報量には差がある。記載構成としては、有川村の村社、その末社、雑社、その末社と続き、第１小区から第５小区へと順に記載されている。

明治３年（1870）閏 10 月 28 日太政官布告（第 779）「大小神社ノ規則ヲ制定スヘキニ由リ査点条件ヲ定ム」で示された項目と比較すると、祠宦と大区戸長が県令に提出したものとほぼ一致するので[4]、基本的にはこれに従っていると考えられる。

付属品明細に関しては、明治５年（1872）８月３日の教部省第十二号「寺院附属ノ仏器什物等ハ帳簿ニ記載備置セシム」で、「各管内寺院之向建物ヲ除之外一寺附属之仏器什物等一切簿帳へ記載シ檀家総代法類等奥印之上兼テ其寺院へ備置可申旨可相達候事」と府県は命じられており[5]、これに従って情報の把握がなされていたものと思われる。

従って、明治３年の太政官布告と明治５年の教部省布告で指示されたものに彩色入り境内絵図を加えて神社側に提出させ、これを大区ごとに綴じたものが長崎県の神社明細調帳であるということになる。明治 12 年に神社明細帳の様式が定められたことは先述したとおりであるが、それよりも情報が充実している点も特徴といえよう。

次に史料番号 11　219 だが、これには付属物品明細が添付されていない。内容を比較すると日之島の間伏神社、八坂神社の分だけ、掲載神社数が多く、神社の記載項目については、基本的に差がない。境内絵図については同じ構図であり、どちらかを写したものと推測される。どちらが原本と特定できないのは、詳細な記述が入っているものが神社によって異なるからである。

③神社明細調帳の境内絵図

神社明細調帳に各神社の境内を描いた境内絵図があったことは先述したとおりだが、第 27 大区のものをみると、彩色数・構図・筆遣い・記載内容などの違いから、下記のような 12 パターンがあることがわかる。絵師による違いか、地区ごとで描かせたのか、これらの詳細は不明である。境内絵図の構図に統一感がないことから、細かい指示が県からだされなかったものと推測される（カメラが普及していない段階で、明治８年（1875）の景観がわかる貴重なものといえる）。



（２）神社の変化

①神社の合祀

明治維新後、政府は神社制度の整備過程で「神社」の掌握とともに、祭神未詳で由緒なく修復も行われない小祠整理を実施して、神社合祀を短期間で実行した。国民の敬神観念高揚を意識し、「国家ノ宗祀」にふさわしい神社の状態を形成していくこと、また日露戦争後の地方改良運動との関連で、地方経営と国家運営の基盤強化のために、大字ごとに氏神を孤立奉斎する旧弊を改め、一行政市町村に一社として集約化し、地域住民の精神的な統合の中核機能を神社にもたせるために、これは行われた。合祀政策は明治 39 年（1906）以降本格化し、大正５年（1916）ころに終息を迎える[6]。

長崎県の場合、明治 36 年（1903）12 月末日で県郷村社と境外無格社合わせて 1,657 社あったものが、1,564 社へと減少している。地域によって取り組みの違いがあったこともあって、統一的な基準の下で合祀がすすめられたわけではないが、全国的にみてこの数字は、全国で２番目に少ない合祀数であるいわれている[7]。ただ、『五島神社誌』[8]をみると、明治 41 年（1908）に合祀された事例が数件みられることから、合祀数が少ない県と判断することには検討の余地があると判断する[9]。

②神社名の改称

明治維新後、政府は神道にもとづく国民教化のため、神祇官内に宣教使が設けられた[10]。長崎県にも派遣され、例えば旧魚目村[11]にある榎津神社は、明治３年（1871）の冬に宣教使が訪れ氏子調べを行った際に天満宮から改称している[12]。

明治政府は、キリスト教信者の増加を食い止め国民教化を促すため、宣教使と教導職を設けた。このうち宣教使は、浦上崩れとそれに対する外国からの非難が影響して設けられた。宣教使の長崎開講が決まった後、明治３年（1871）正月３日の大教宣布の詔が発せられ、同年３月 21 日に太政官は、小野述信に長崎出張を命じた。６月に至って長崎における講義が開始するが、閏 10 月 27 日から 12 月９日の間、落合真澄などが五島において氏子改めを行った[13]。その際に、神社名の改称がなされたのであった。北魚目村・魚目村においては、下記の神社も同様の理由で改称している。

改称前	改称後
乙宮大明神	乙宮神社
小串大明神	小串神社

祭神が菅原道真公などであり、天満宮であったことと関連すると思われるが、榎津神社の境内絵図をみると、梅の紋がみえる。現在の榎津神社拝殿もこれを継承してなのか、拝殿中央部に梅の紋がある。継承されるものとされないものの区別がどこでなされるのか、この点は詰めて考えるべき課題といえる。さて、境内絵図を見ると、拝殿の裏手に赤い壁を持つ建造物が２棟あるが、ひとつが本殿と推察される。もう２棟は、神社明細調帳に「境小三社琴平神社・白鳥神社・海童神社　境内四社八坂社・稲荷社・恵美須社」とあるうちの境内４社を祀ったものだと思われる。現在、拝殿の裏手に天満宮時代の鳥居の額が放置されており、境内絵図に描かれている鳥居に使用されていた可能性が高い。



写真　拝殿中央部に梅の紋がみえる。

明治政府の関与で神社名が改称され、それによって変化したことも多々あったものと推測されるが、国民強化政策にどれだけ政府が力を入れていたのか、よくわかる事例といえる。



写真　現在の榎津神社拝殿



写真　拝殿裏手にある天満宮の額

③戦争・天皇制と神社

神社明細調帳にある境内景観が、今に残っているところは全くない。その要因は、拝殿・本殿の改築、周辺地域の開発、合祀などの人為的なものと、災害や松食い虫の被害といった自然発生的なものなど様々だが、その外に鳥居・灯籠の奉納によって景観が変わっている。境内絵図をみると、描かれている時代の鳥居は、一社一鳥居となっている。現在では、複数のところが多く、境内絵図に描かれていた時代の鳥居が残るところもほとんどない[14]。

現在残る鳥居・灯籠をみて気付くことは、日露戦争、第一次大戦、皇紀二千六百年など戦争や天皇制と関係するものが多いことである。例えば榎津神社の鳥居は、豊漁と子孫繁栄などに加えて日露戦争凱旋も記されている。後述する有川神社には、皇紀二千六百年を記念して奉納された灯籠の外、境内の山神社には、第一次世界大戦凱旋を記念した灯籠も残る。旧六ケ郷の総社的立場にある青方神社は、一の鳥居が「皇紀二千六百年」、二の鳥居が「皇紀二千六百一年」を記念したものである。

このような状況をふまえると、国家神道と軍国主義が地域社会に入り込み、そしてそれらが信仰空間である神社境内の景観を変容させる要因として、大きな力となっていたことがわかる。



写真　日露戦争に榎津村から 106 名参加したことがわかる

（３）明治以降の景観変化―旧北魚目村を事例に―

ここでは、旧北魚目村に残る津和崎の本山神社、立串の乙宮神社・琴平神社、小串の小串神社が、明治８年（1875）の境内絵図に描かれている景観と現在どの程度異なっているのか確認する。

≪無格社　本山神社≫　津和崎にある本山神社は大山祇神を祀っているが、由緒は不明である。境内絵図をみると、参道や鳥居はない。境内絵図から確認できるのは下記の表の通りである。



写真　現在の本山神社



写真　鳥居



写真　境内絵図

北魚目村	鳥居	灯籠	本殿･拝殿	木	備考
無格社　本山神社	なし	二基緑拝殿の そば	【本殿･拝殿】 平入り 屋根は青(瓦) 壁は白 柱は朱色 南向き	境外 19	境内の周りに石垣 南に道あり 広さの記載あり

現在は、拝殿の正面から下に階段があり、下りたところに鳥居がある。おそらく神社下の土地が埋め立てられたことにより、階段がつけられたものと思われる。

鳥居は平成 15 年（2003）に氏子などが奉納したもので新しく、これ以前に鳥居が存在したかは不明である。拝殿前には、灯籠２基があるが、それは境内絵図の時代のものではなく、大東亜戦争参加記念と皇紀二千六百一年記念の寄付者による奉納物である。

境内には、境内絵図に記載されていない「宝暦十二」(1762)の文字が確認できる手水鉢がある。別の神社から移された可能性は否定できないものの、神社の創建時期を考える上では参考になる。本殿・拝殿は戦後建て替えられたものであり、裏手には稲荷神社がある。



写真　灯籠基段石


写真　手水鉢


写真　本殿裏手にある稲荷神社

≪村社　乙宮神社≫　柴田勝家の孫勝厚が北魚目に居住した際に建立し、家門の長久を祈ったもので、彦火々出見神が祭神である。

もとは、乙宮大明神であったが、明治３年（1871）に宣教使が氏子調を行った際に、乙宮神社と改称された。境内絵図に残る参道と鳥居の位置は変わらないものの、階段は昭和７年（1932）に整備されたものが現在に残る。灯籠があった場所は確認できず、鳥居は氏子中より昭和 58 年（1983）に奉納されたものである。

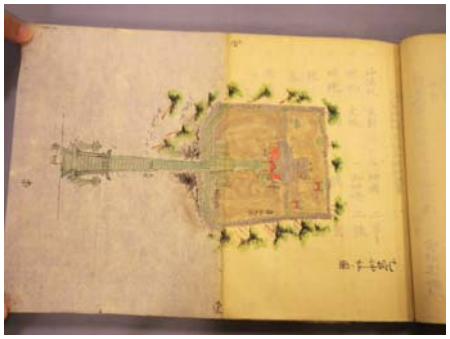

写真　境内絵図


写真　灯籠（一部）

境内には、昭和 27 年（1952）に改築されたことを記念した石碑の外、御大典記念（昭和天皇即位）の灯籠（一部）が残る。また、拝殿・本殿の裏手には、明治 29 年（1896）に奉納されたものをはじめとした恵比須の祠が残る。

北魚目村	鳥居	灯籠	本殿･拝殿	木	備考
村社 乙宮神社 D	二基 明神 緑 【境内】 二基 明神 赤 社の前	二基/四基 緑 鳥居のそば	【本殿･拝殿】 屋根は灰色 壁は朱色 南向き	境外 21	境内の周りに石垣 階段が長い 境内の中に小さな 社が4社 広さの記載あり 南に「御道」の記載 階段から境内までの 長さの記載あり 手水鉢あり





写真　本殿裏手にある祠



写真　鳥居と階段

≪無格社　琴平神社≫　『五島神社誌』によると、乙宮神社の裏山にある琴平神社は天保元年(1830)に社殿が造営された[15]。境内絵図には、鳥居が２基、灯籠もみえるが、現在ある鳥居は明治35年(1902)と同44年（1911）に奉納されたものである。境内絵図左手の鳥居の場所に現在鳥居はなく、分解されたものが放置されている。舗装整備される際に解体したものと推測される。



写真　境内絵図





写真　参道途中に分解し、放置された鳥居







写真　現在残る一の鳥居、左右海に面しており、風除けとして石塁が築かれている（左２枚）

灯籠は境内絵図にある位置にはなく、境内に残る。本殿に向かって右手に位置するものが、天保 13 年（1842）のものであり、左手のものが嘉永７年（1854）である。もとは、境内絵図のところにあったものと思われるが、本殿を建て直す際に現在の位置に移動させたものと思われる。



写真　天保期



写真　嘉永期



写真　琴平神社本殿

≪村社　小串神社≫　天文元年（1563）に創建されたもので、寛文年間（1660～）にはお告げに従って多賀神を祀ると疫病が治まったと伝わる。藩主の崇敬が厚く、北境の守護と位置づけられ、藩主病気祈願なども行われた。もとは、小串大明神であったが、明治３年（1871）に宣教使が氏子調を行ったときに、小串神社へと改称した。



写真　境内絵図

北魚目村	鳥居	灯籠	本殿･拝殿	木	備考
村社 小串神社	一基 明神 灰色	二基 灰色 鳥居の そば	【本殿】 平入り? 屋根は青 【拝殿】 妻入り 屋根は灰色 壁は朱色 南向き	境外 5	境内の周りに石垣 海に面している 四つの社の ようなものあり 広さの記載あり



写真　小串神社



写真　日露戦争紀念碑



写真　鳥居

現在の鳥居は、明治 43 年（1910）に在郷軍人が奉納したもので、その後方には、日露戦争紀念の石碑が建つ。境内絵図をみると鳥居のそとはＬ字型で右手に曲がっているが、その名残が現在も残る。

周囲は現在埋め立てられているが、明治８年（1875）当時は、すぐ海だったと思われる。また、境内絵図では手水鉢らしきものが描かれているが、現在は鳥居の内側に新しいものがある。

境内には奉納物があるものの、狛犬が昭和 16 年（1941）、灯籠が昭和６年（1931）のものであり、境内絵図に描かれているものは残っていない。拝殿などは昭和 27 年（1952）に改築されており、その記念碑が残る。拝殿中央に神額が奉納されているが、明治 13 年（1880）のものである。本殿裏手には、祠などが残るものの、境内絵図には一切記録されていない。

≪小括≫

明治８年（1875）に描かれた境内絵図の景観を確認してみたが、本殿・拝殿のみならず、境内の敷地及び鳥居・灯籠までもが残っていないのが現状である。ここで対象とした北魚目村における境内景観変化の要因は、建造物の老朽化や埋め立てなどの開発といったものも当然あるが、戦争記念であったり、御大典記念であったり、地域社会がもたらした変化というよりも国家と地域社会との結びつきから生じたものが非常に多い。

（４）明治以降の景観変化　―有川神社への合祀を事例に―

現在の有川神社は、昭和 61 年（1986）に郷社天満神社と郷社祖母君神社、村社八幡神社が合祀されたものである。この三社は、神社明細調帳にも記載のある神社であることから、明治８年（1875）以降の景観変化について、以下みていくことにする。

①各神社の概要

≪郷社　天満宮≫　祭神は、菅原道真公、天穂日神であり、村上天皇の時代より祀られていたものを、有川村の守護神として慶長３年（1598）に現在の地に社領総高三石五斗を五島家より賜り、社殿を建てたことにはじまる。安政４年（1857）の有川大火で焼失したものの、明治２年（1869）に領主五島盛運が造営修繕などをした。

神社明細調帳にあるこの本殿・拝殿は、その時のものである可能性が高い。明治７年（1874）に郷社に列せられ、福江の八幡神社につぐ神社とされた[16]。

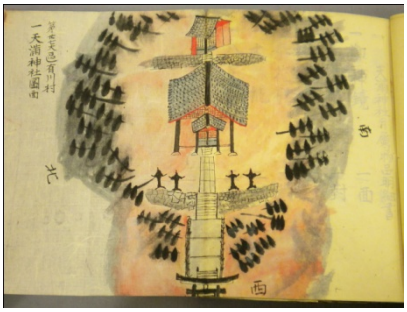


写真　境内絵図

≪郷社　祖母君神社≫　祭神は、伊邪那美神、素盞男神、奇稲田姫神、事代主神、大山祇神、海童神である。寛正四年（1463）大守宇久次郎三郎殿へ“本根、元に沖の祖母君瀬の萬福篭瀬に陰陽二神天降りしも久しく祀る者なし”との神託があり、陽神伊邪那岐大神と魚目に奉斎（現浦桑の祖父君神社）し、陰神伊邪那美大神を萬福篭瀬に加多曽伎の御舎を建てて奉斎したことにはじまる。慶長３年（1596）に現在の地に移った。累代藩主の崇敬篤い神社であり、例祭日には時の代官を奉幣使として参向させて祭典を行っていた。明治７年（1874）には、村社に列せられている[17]。

神社明細調帳には、海童社（右図）の記載があるが、明治 41 年（1908）に合祀されている（東西南北の標記に間違いがあるが、こういった事例は外にもみられ、何を意味するのかは、今後の課題）。



写真　境内絵図

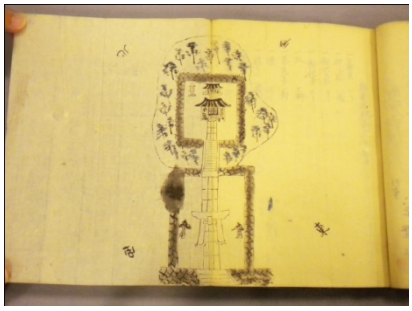
≪村社　八幡神社≫　祭神は、譽田別神、田霧姫神、水波賣神である。白木の弓と白羽の矢が天振った地に宮柱を営み、その弓矢を御神体として奉斎して「弓矢八幡」と号した。その後、御神託によって御神像を奉り、現在の浜公園である前宮地に遷座。旧跡を「八幡の弓矢田」と称し、弓矢のあった場所を「矢はずの産土神」と称した。藩主累代の崇敬篤い神社であり、有川鯨組の守護神として尊崇されていた。明治７年（1874）には、村社に列せられている[18]。



写真　境内絵図

②失われた景観

≪郷社　祖母君神社≫　祖母君神社の境内は、右図を見るとわかるように、鳥居のある空間と拝殿・本殿のあるところに段差がある。拝殿・本殿の空間は木に囲まれ、周囲は石垣が築かれている。昭和 61 年（1986）以降は、公園として整備されており、祖母君神社跡の石碑が置かれている。当時の面影としては石垣が残るものの、明治８年（1875）当時の石垣とその後築かれたと思われる石垣とがみえる。また、境内絵図にはないが、本殿裏に階段が設けられていた（建設時期不明）。


写真　境内絵図

有川町	鳥居	灯籠	本殿･拝殿	木	備考
郷社　祖母君神社	一基 形態不明 色なし	なし	【本殿･拝殿】 平入り 屋根は黒	境内 21	境内の周りは石垣 鳥居のそばに大きな岩あり 境内に社のようなものが一社 方角がばらばら


写真　本殿裏手の階段


写真　石垣（左手は古く、右手が新しい。）



拝殿・本殿の空間には拝殿跡に向かって右手に現在樹齢400年といわれる、あこう（クワ科）の大木が残るものの、境内絵図にはその存在が記されていない。神社明細調帳に残る景観絵図は、信仰空間を正確に描写することが求められたものでは


写真　あこうの大木


写真　参道の敷石

なかったものと推測される。

鳥居のある空間には、参道の敷石、鳥居の亀腹が残り、神社がこの地にあったことを確認することができる。境内絵図にある岩の存在はない。合祀によって信仰空間としての機能を失い、景観そのものも大きく様変わりしている。

≪村社　八幡神社≫　祖母君神社同様、昭和 61 年（1986）の合祀により、境内の空間は、公園として整備されている。拝殿・本殿の空間には、礎石らしきものが残っており、由緒の書かれた石碑がある。あこうの大木があったものの、これについては境内絵図のなかにみられない。拝殿に向かって右手には階段が設けられており、境内の景観も変化していた。



写真　境内絵図



写真　現在は公園となっている



写真　石碑

有川町	鳥居	灯籠	本殿･拝殿	木	備考
村社　八幡神社	一基 明神 黒	二基 黒 境内	【本殿･拝殿】 平入り 屋根は青、瓦 屋根の縁は朱色 東向き	境外 22	境内の周りは石垣 広さの記載なし

境内絵図ではよくわからないが、実際には境内に上る階段の途中に踊り場があり、その脇には灯籠の一部が放置されていた。鳥居も外され、現在は亀腹のみが残る。



写真　あこうの大木



写真　鳥居の亀腹が残る境内入口

≪郷社　天満宮≫　天満宮は、祖母君神社と八幡神社が合祀され、昭和 61 年（1986）に有川神社となった。現在の拝殿・本殿は、その時に建てられたものである。

境内の右手奥には、山神社が

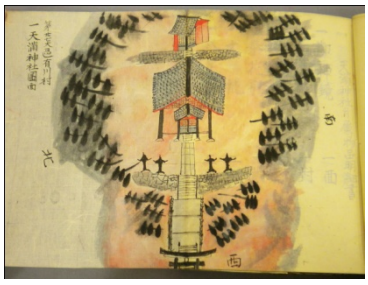


写真　境内絵図



写真　有川神社　鳥居

あり、祠が３、「猿田彦大神」石碑が建つ。その後方には、「天満宮」とある鳥居額２が残る。

有川町	鳥居	灯籠	本殿･拝殿		木	備考
郷社　天満神社 A	一基 明神 黒	四基 黒	【本殿】	平入り 屋根は青 壁は朱色	境内 38	拝殿と本殿の前に石垣あり 広さの記載なし
			【拝殿】	妻入り 屋根は青 壁は朱色		



写真　鳥居（大正三年）



写真　猿田彦大神　石碑

鳥居の前には、表に「凱旋記念」、裏に「大正三年十二月吉日」とある灯籠がある。これは、第一次世界大戦における青島での日独戦争を指すものと推測される。







写真　灯籠

神社明細調帳には、鳥居１、灯籠４が記載されているものの、その当時のものは残っていない。現在、鳥居３、灯籠９があるものの、鳥居は、一番手前から皇紀二千六百年記念の昭和 14 年（1939）のもの（天満宮）、平成９年（1997）に有川神社建設十周年で奉納されたもの、昭和３年（1928）に奉納されたものが現在ある。皇紀二千六百年を記念して奉納された灯籠なども残る。この外、狛犬が四対、皇紀二千六百年記念で昭和 16 年（1941）に奉納された願い牛が一対ある。

現在、拝殿に向かって右手に手水鉢があるが、もともと祖母君神社のものであり、合祀される際に移されたものである。

神社明細調帳の境内絵図では、拝殿・本殿のまわりに木々が生い茂っているが、拝殿に向かって左手に社務所があり、向かって右手は土地が削られ、境内の敷地が大きく変わっている。



写真　明治 35 年（1902）に原眞一が祖母君神社に奉納したもの。

おわりに

明治政府は、徳川政権のキリスト教厳禁政策を継承したが、長崎県内では、浦上、五島などで隠れキリシタンの存在が明らかとなった。明治政府は厳しい態度で臨むが、外国の避難などもあって、次第に政策を軟化させた。こういったなかでキリスト教信者の増加を抑えるために、明治政府は国民教化に神道を利用した。当該地域においても明治政府の影響は強く、宣教使の派遣にともなう氏子改めや神社名改称などが行われた。そして全国に先駆けて神社明細調帳が長崎県において作成された。その一冊が、今回分析の対象とした第 27 大区のものである。国家がキリスト教に対峙する存在として神道を位置づけ、地域社会における拠点の現状把握を目的として作成されたとも捉えられる。

神社明細調帳にある境内絵図からは明治初めの様子をうかがい知れるが、現在は大きく様変わりしている。周辺環境の開発にともなって境内の敷地面積が減少した事例などがあるほか、境内内においては本殿・拝殿の建て替えがみられる。その要因は、老朽化、創建記念のほか、合祀などによることもあった。また、境内には多くの献納物が明治以降残され、境内景観が大きく変容した。鳥居については、明治８年当時のものがほとんど残っておらず、古いものの多くは戦勝記念や皇紀関連のものである。この傾向は、灯籠や石碑などにもみられる。日本が国家神道を形成し、軍国主義に突き進む過程で、「戦争」「天皇制」が地域との関わりのなかで意識されていたことを、鳥居や灯籠などの献納物が証明している。

さて、ここで紹介した有川神社の事例は、高度経済成長期以降における離島の現状を背景としている。離島の人口減は、神社を支えた氏子数の減少を意味した。これにより、合祀が氏子により選択された。祖母君神社、八幡神社の境内は現在公園になっているが、市街地に存在する神社で合祀がなされる場合には、同様な状況になる可能性もある。

神社の存在は、明治以降も氏子の力で守られてきた。しかし、境内景観は世相の変化に大きな影響を受け、常に変化し続けたということが言えよう。

◇注

1 「解題」（国文学研究資料館　史料館編『史料叢書７　社寺明細帳の成立』名著出版、2004 年）。井澤正裕「神社明細帳」（園田稔・橋本政宣『神道史大辞典』吉川弘文館、2004 年）。

2 「第廿七区　神社明細調帳」長崎歴史文化博物館、11　218。

3 前掲「第廿七区　神社明細調帳」。

「第廿七区　神社明細調帳」長崎歴史文化博物館、11　219。

4 前掲『史料叢書７　社寺明細帳の成立』318 頁。祭日、社中職名位階家筋世代、社中男女人員、一社管轄府県之内数ヶ所ニ渉り候別の項目が神社明細調帳にはない。

5 前掲『史料叢書７　社寺明細帳の成立』324 頁。

6 櫻井治男「神社合祀」（園田稔・橋本政宣『神道史大辞典』吉川弘文館、2004 年）。

7 森岡清美『近代の集落神社と国家統制―明治末期の神社整理―』（吉川弘文館、1987 年）。

8 神祇会長崎県南松浦郡部会、1943 年。

9 例えば、明治 41 年（1908）７月、魚目村榎津郷無格社白鳥神社が同郷榎津神社に合祀されている（『五島神社誌』（神祇会長崎県南松浦郡部会、1943 年）。

10 阪本建一「宣教使」（前掲『神道史大辞典』）。

11 この村は、信仰心が強かったようで、大正７年（1918）に作成された『魚目村郷土誌』（長崎歴史文化博物館）には、「敬神、信佛ノ念富ニ信仰心厚ク、神社、寺院ノコトニ対シテハ各応分ノ力ヲ尽くスノ風アリ」とある。

12 前掲「第廿七区　神社明細調帳」。前掲『五島神社誌』には、明治 25 年（1892）に改称したとあるがこれは間違い。

13 藤井貞文「宣教使の長崎開講」（『国史学』44 号、1942 年）。

14 日之島神社の場合は、移動。

15 前掲『五島神社誌』12 頁。

16 前掲『五島神社誌』４～５頁、有川町郷土誌編集・編纂委員会『有川町郷土誌』（1994 年）など。住古、字広後古川に奉斎されていたのを藩主五島家（二十一代玄雅）から社領を寄進され、現有川神社宮地に社殿を建立して奉遷されたとしているが、江口宮司所蔵の「神社関係文書写」によれば、「大昔は八幡神社境内に合祀されて同社と相殿であった。が、広後古川に別殿し今の宮地、帽子山（旭岳）の麓に安置された。その年代は不明、ただし、社頭は先祖江口安左衛門三男甚兵衛の代に建立したと伝えられている。家伝によれば、天満宮は八幡宮と同社で、甚介親類たりといえども甚兵衛と争論に及び、福江表の判決の上、別社を建立した」と記述している。

17 前掲『五島神社誌』７～９頁、前掲『有川町郷土誌』など。

18 前掲『五島神社誌』14 頁、前掲『有川町郷土誌』など。

表　新上五島町神社一覧

	五島神社誌(第27大区)	祭神／配神	由緒	所在地	★A	★B	現存	由緒の出典
新上五島町内　郷社等	郷社 天満神社	菅原道真 天穂日神	・住古、字広後古川に奉斎されていたのを藩主五島家（二十一代玄雅）から社領を寄進され、現有川神社宮地に社殿を建立して奉遷されたとしているが、江口宮司所蔵の「神社関係文書写」によれば、「大昔は八幡神社境内に合祀されて同社と相殿であった。が、広後古川に別殿し今の宮地、帽子山（旭岳）の麓に安置された。その年代は不明、ただし、社頭は先祖江口安左衛門三男甚兵衛の代に建立したと伝えられている。家伝によれば、天満宮は八幡宮と同社で、甚介親類たりといえども甚兵衛と争論に及び、福江表の判決の上、別社を建立した」と記述している。 ・累代藩主の崇敬篤い神社であった。	—	—	—		『有川町郷土誌』 703、704頁
	郷社 志自羽黒神社	倉稲玉神社 十城別王神	・主祭神を祀る総本宮は平戸市に鎮座する『志々伎神社』であり、その御分霊は「海神」「航海安全の神」として主に西海沿岸各地に分祀され鎮座している。 ・創建は天正三年（1575）とされ、寛文九年（1669）には神仏習合の影響で御神体として観世音菩薩を祀り「志自岐羽黒大権現」と称していたが、明治の神仏合祀禁止令に伴い、新たに御神体をあつらえ奉斎し、名称も「太田神社」と改称した。しかし、神社名に部落名を使用することは畏れ多いとして、昭和三十年（1955）、「志自岐羽黒神社」と再び改称し、現在地に社殿を新築した。 ・『太田神社由緒』という、太田村旧主である太田安兵衛尉勝就が書いたとされる資料の中に、「勝就の家系綿延・武運悠久・令子令孫の繁七栄七。さらには当村安穏・五穀豊饒・民戸康寧・子孫栄七。」という記述がある。 →「海神」「航海安全の神」。★	奈良尾村岩瀬浦郷 字杉ノ本70	95頁	57頁	奈良尾町5、2-C	『有川町郷土誌』 710～712頁
	郷社 青方神社	大巳貴神 天忍穂耳神 國常立神 國狭槌神 伊邪那美神 瓊々杵神 惶根神	・創立年代は明らかではないが、「青方神社明細帳」によると、寛弘二年（1005）、高麗船の侵寇があり、御厨庄に居た領主清原公はその知らせを受けるとすぐに家臣とともにこの地に来て、外敵降伏を祈願し外賊を退け、同年に庶民安穏・外寇祈願のために社殿を建立した。 →外敵降伏・庶民安穏祈願。	青方町青方郷 字汐道越1、394	79頁	47頁		『上五島町郷土誌』 525～530頁
	郷社 祖母君神社	伊邪那美神 素盞男神 奇稲田姫神 事代主神 大山祇神 海童神	・寛正四年（1463）大守宇久次郎三郎殿へ“本根、元に沖の祖母君瀬の萬福篭瀬に陰陽二神天降りしも久しく祀る者なし”との神託があり、陽神伊邪那岐大神と魚目に奉斎（現浦桑の祖父君神社）し、陰神伊邪那美大神を萬福篭瀬に加多曽伎の御舎を建てて奉斎したことに始まる。 ・累代藩主の崇敬篤い神社であり、例祭日には時の代官を奉幣使として参向させて祭典を行っていた。また、二十七代の盛道公の時には、江戸参勤交代の海陸安全祈願報賽のため社領一石を加増した。 →海陸安全祈願。★ 海陸安全祈願の報賽が行われていることから、この神社の御利益を信じて崇敬する人々は多く存在したものと推測。	有川町有川郷 字中筋713	30頁	15頁		『有川町郷土誌』 702、703頁
	郷社 祖父君神社	伊邪那美神 菅原道真 倉稲玉神 譽田別神 事代主神	・萬福篭瀬に陰陽の二神が降りてきたので、有川魚目の守護神として奉斎した。この祖父君神社は陰神で、祖母君神社は陽神である。 ・霊夢によって社殿を建立し、奉遷。	魚目村浦幸郷 字松ノ尾36	60頁	35頁	新魚目町29、5-B	『新魚目町郷土誌』 666～670頁

	五島神社誌(第27大区)	祭神／配神	由緒	所在地	★A	★B	現存	由緒の出典
北魚目村之部	村社 小串神社	小串大明神 素盞男神 多賀大神 伊邪那美神	・昔、まだこの地域の土地が開けていない頃、大樹が茂るなかに苔に覆われた塚のような場所があり、人々は不思議に思っていた(鳴動・神火の発生・鳥の群集など)。その後次第に移り住む漁夫が増え、この森の中の不思議を見て神と崇敬し厚く拝礼していた。あるとき一人の修行者がこの地にきて、「正しく神霊が下っている」と話すと人々は喜んで、社殿を建立した。 ・寛文年間に疫病が流行し、人々が氏神へ祈願を行った際に多賀の神を祀るべしとのお告げがあり、人々が多賀の神を信仰すると疫病の流行が沈静化した。 ・延宝六年(1678)、藩主の病気回復祈願のため寄進が行われている。 →健康祈願。★	北魚目村小串郷 字先筋420	64頁	38頁	新魚目町20、1-G	『新魚目町郷土誌』 678、679頁
	村社 乙宮神社	彦火々出見神	・柴田勝家の孫勝厚が北魚目に居住した際、一社(祭神不明)を建立し、家門の長久を祈った。	北魚目村立串郷 字先筋626	54頁	31頁		『新魚目町郷土誌』 681～683頁
	村社 正彦神社	天忍穂耳神	・創始者は藤原高光といわれている。 ・昭和二十三年(1948)の同社由緒記に「藤原尋覚が小値賀浦部両島の地頭職となった際、その次男である高公に奈摩の地を与え、高公が来任したとき、藤原の宗祖である天津児屋根命を祀った。その末裔である高光公のとき、曽根を領有して奈摩の政彦宮を分霊して、天津児屋根命の末裔である天忍穂耳命を祀った。」とある。 ・延宝八年(1680)、子孫繁昌当嶋豊楽村中安全のため社殿の造立があった。 ・領主の崇敬が深かった。	—	—	—	—	『新魚目町郷土誌』 680、681頁
	村社 琴平神社	大物主神	・大神の御功徳を尊敬し、商船・漁船などの海上無難、人民安穏のための信仰で勧請し、社殿を建立した。 →海上無難。★	北魚目村小串郷 字園山476	×	×		『新魚目町郷土誌』 680頁
	無社格 琴平神社	大物主神	・寛永六年(1629)、西村観祐氏の先祖が勧請。	北魚目村小串郷 字先筋695	67頁	40頁	不明	『新魚目町郷土誌』 673頁
	無社格 本山神社	大山祇神	・由緒不詳。	北魚目村津和崎郷 字宮ノ森185	58頁	34頁	新魚目町1、2-B	『新魚目町郷土誌』 684、685頁
魚目村之部	村社 事代主神社	事代主神 大國主神 素盞男神 琴平神	・五島神社誌には「人皇百三代後土御門天皇ノ建仁元年～、魚目村漁士ノ創立ニ係ハリ恵美寿社ト奉称ス」とあるが、建仁年間(1201～1203)は人皇六十三代土御門天皇の代であり、人皇百三代後土御門天皇の代は文明年間(1469～1486)である。 ・事代主神社縁起(宮田文作筆)によると、長保恵美須または長和恵美須といわれるもので、平安期の長保年間(999～1003)、また、長和年間(1012～1016)に、この浦の漁士により祀られたとするが、年代のずれが生じている。したがって、昔は神社裏の隠居恵美須境内に凸形の性器の形をした石を祀っているように、巨石信仰、巨木信仰、性器崇拝の類であったのではないか、と宮田氏は記している。 ・寛永三年(1663)、漁業の祖神として祭典費田地等の寄付を受け、明和二年(1715)、中通島の漁業が盛んになるにつれ、ますます信仰された。 →漁業の祖神。★	魚目村偽首郷 字堂ノ脇936	68頁	41頁	新魚目町24、3-F	『新魚目町郷土誌』 675、676頁

	五島神社誌(第27大区)	祭神／配神	由緒	所在地	★A	★B	現存	由緒の出典
魚目村之部	村社 榎津神社	菅原道真公 春彦神 大物主神 崇神天皇 日本武尊 素盞男神 事代主神 海童神 大國主神	・悪い病が流行し、そのうえ戦国騒乱の時代において人々の心が穏やかではないことを憂いて、人々が菅原大神に祈願したところ、御加護を授かり災難が除かれた。 →健康祈願。★	魚目村榎津郷 字先筋185イ	74頁	44頁	新魚目町28、5-F	『新魚目町郷土誌』 671～675頁
	村社 胸肩神社	市岐島姫 神素盞男神 事代主神	・由緒不詳ではあるが、浄福寺野々観音との深いつながりが伝えられるも定かではない。	魚目村浦幸郷 字幸1、006	62頁	37頁	新魚目町30、5-E	『新魚目町郷土誌』 671頁
有川町之部	村社 八幡神社	譽田別神 田霧姫神 水波賣神	・白木の弓と白羽の矢が天振った地に宮柱を営み、その弓矢を御神体として奉斎して「弓矢八幡」と号した。その後、御神託によって御神像を奉り、現在の浜公園である前宮地に遷座。旧跡を「八幡の弓矢田」と称し、弓矢のあった場所を「矢はずの産土神」と称した。 ＜江口甚右衛門正利の嫡男、甚五右衛門種重は捕鯨吉凶を占うみくじを八幡神社に上げ、八幡の「八」と江口家紋の「二」を組み合わせて「八二」とし、鯨組の旗印にしたという。＞ ・藩主累代の崇敬篤い神社であった。 ・有川鯨組の守護神として尊崇されていた。 →漁業関係者にとっての守護神的存在。	有川町有川郷 字上原866	19頁	9頁	有川町23、1-C	『有川町郷土誌』 704、705頁
	村社 孕神社	豊玉姫神 金山彦神 大物主神 大山祇神	・宇久氏八代尾張守覚が岐宿依拠をする際、懐妊中であった覚の奥方は後便で福江島の岐宿へと向かったが、頭ヶ島と友住側との間の瀬戸に差し掛かったときに激しい瀬戸の潮流に巻き込まれ、転覆事故に遭い、亡くなってしまった。(奥方の遺体は赤尾近くの海岸に漂着。)遺体は魚目の浄福寺に葬り、その御霊に豊玉姫命の神霊を勧請して『孕大明神』の神号を奉り、赤尾に社殿を増築して奉斎した。 ・婦女懐妊のとき、神饌及び腹帯を神前に供え、安産を祈願する人々の詣でる神社で安産の神として有名。 →安産の神。★	有川町赤尾郷 本村376	27頁	14頁	有川町3、3-C	『有川町郷土誌』 706、707頁
	無格社 金刀比羅神社	金山彦神 大物主神	・由緒不詳。	有川町有川郷 字竹筋1、714	8頁	3頁	有川町30、2-F	『有川町郷土誌』 719頁
	無格社 乙宮神社	彦火々出見神 天鈿女神 倉稲玉神 大日霊神	・由緒不詳。 ・大壇主・藩主両殿様より武運・領内安全・氏子繁昌・五穀成就祈願のため、宝殿一宇の奉建があるなど藩主の崇敬篤き神社であった。	有川町小川原郷 字口ノ上187	11頁	5頁	有川町7、4-C	『有川町郷土誌』 705、706頁
	無格社 八坂神社	素盞男神 大物主神 金山彦神 事代主神	・由緒不詳。	有川町友住郷 宮立木353-1	×	×		『有川町郷土誌』 707、708頁
	無格社 江濱神社	倉稲玉大神 金山彦神 大物主神 大山祇神	・現在の江の浜が江崎村と称されていた頃、地頭の邸内に祀っていた鎮守の神を江崎村の氏神として現在の宮地に奉斎した。	有川町江ノ濱郷 字江ノ濱420	×	×		『有川町郷土誌』 708、709頁

	五島神社誌(第27大区)	祭神／配神	由緒	所在地	★A	★B	現存	由緒の出典
青方町之部	村社 客人神社	大山祇神 鹽釜神 須佐男神	・創立年代は明らかではないが、「寛政ノ頃其ノ神社改メニ客人神社ヲ塩槌命ト號シ奉リ云々」と旧記に書かれていることから、それ以前に創立したものである。弘化年間(1844～1847)より痘瘡が流行したため嘉永二年(1849)、悪疫を除くため勧請した。 →健康安全。★	青方町網上郷 字客人364、370	92頁	56頁	上五島町4、7-F	『上五島町郷土誌』 533、534頁
	無格社 姫神社	田意比賣神 大山祇神	・創立年代不詳であるが、初めは青方郷赤崎(現姫明神跡地)に鎮座したのを元禄16年(1703)、藩主が御神体を奉造した。 ・弘化四年(1847)から痘瘡が流行したため、嘉永二年(1849)に悪疫除退のため勧請された。 →悪疫除退。★	青方町相河郷 字破戸之上	82頁	50頁	上五島町30、1-D	『上五島町郷土誌』 533頁
	無格社 塩釜神社	鹽釜老翁大人	・創立年代は不詳。 ・昔は石祠であったのを明治三十四年(1901)、神鏡に改めた。 ・現在の宮地を「四釜」というのは、昔、祭神である塩釜老翁大人が製塩に使用した釜が、青方郷赤崎に一つ、船崎郷船崎に一つ、船崎郷樽見に一つ、船崎郷高崎に一つ以上四ヶ所にあったので、この四ヶ所を合わせて「四釜」といい、現在の宮地の名前になっている。	青方町船崎郷 字色麻247	×	×		『上五島町郷土誌』 535、536頁
	無格社 山神社	大山祇神 事代主神	・創立は不詳であるが、伝承では「大山祇大神を勧請したのは、昔、船崎に一年や二年ではなく悪疫が流行して五穀が実らなかったので人々が大変心配し、大山祇大神の御分霊を安鎮し、祈願したところたちまち御加護があった。(郷民は延命・五穀は成就・漁業は大漁)」とある。 →健康祈願。★	青方町船崎郷 色麻245	84頁	51頁	上五島町17、2-C	『上五島町郷土誌』 534、535頁
濱ノ浦村之部	村社 天満神社	菅原道真公 事代主神 大山祇神 渡會春彦	・勧請当初の年月は不詳であるが、以前の宮司である吉野正信の十二代前である吉野右京が寛文十二年(1672)に祭典を執行した記録があることから神社の勧請建設はそれ以前である。 ・旧平戸藩専属の浜の浦、続、飯ノ瀬戸、道土井四ヶ郷の産土神として毎年の祭礼には時の代官が奉仕として参向した。	濱之浦村續濱之浦郷字濱之浦471	125頁	73頁	上五島町34、1-E	『上五島町郷土誌』 536、537頁
	無格社 山神神社	大山祇神 事代主神	・元飯屋ヶ浦、三本松、折島の三ヶ所に勧請したがその後、続郷字神山に鎮座した。 ・現在の社地の麓にある字浦の小学校付近に鎮座…しかし、神威を汚す恐れ(明治三十年(1897))→天満神社に合祀の許可受ける(大正五年(1916))→現在地に鎮座…祭典その他が大変不便であるため	濱之浦村今里郷 字深山	×	×		『上五島町郷土誌』 538、539頁
	無格社 金刀比羅神社	大物主神 大山祇神 事代主神社 金山彦神	・飯ノ瀬戸、串島、青木、小手ノ浦に勧請したが文政以前、飯ノ瀬戸の一ヶ所に鎮座した。	濱之浦三日ノ浦郷 字松ヶ鼻313	×	×		『上五島町郷土誌』 540、541頁
	無格社 蛭子神社	大山祇神 事代主神	・飯ノ瀬戸郷小手ノ浦に勧請したが元禄六年(1693)現在地に鎮座した。	濱之浦村飯ノ瀬戸 郷字川ノ上10	×	×		『上五島町郷土誌』 540頁
	無格社 山神神社	大山祇神 事代主神	・昔は無社石祠であったが、明治十六年(1883)、木造の社殿となった。 ・境内狭隘かつ不潔で神威を汚す恐れがあるとして、社地の上手である現在地に社殿を建設し鎮座した。	濱之浦村道土井郷 字家ノ上3、240	×	×		『上五島町郷土誌』 541頁

	五島神社誌(第27大区)	祭神／配神	由緒	所在地	★A	★B	現存	由緒の出典
日ノ島村之部	村社 日島神社	大巳貴神 事代主神	・大宝元年(701)、讃岐高松に鎮座の大己貴大神を守護神として日ノ島村金堂崎に勧請。初めは高松宮の社号であったが、明治三年(1870)、社号を日ノ島神社と改称した。	日島村日島郷 字金堂崎108	147頁	92頁	若松町5、2-D	『若松町誌』 242頁
	村社 白鳥神社	日本武尊	・享和三年(1803)、間伏郷、神ノ浦郷の産土神として創建。昔からの言い伝えに、いつの頃か、この地に白鳥が飛んで来たので白鳥神社として祀っているというものがある。	—	—	—	—	『若松町誌』 244、245頁
	村社 頭子神社	天御中主大神	・昔、有福郷氏の産土神として、神部に祀っていた七頭子神社を分霊し、この地に奉祀した。古くは石祠であったが、明治四十三年(1910)社殿に改めた。	日島村有福郷 字宮田1番	152頁	96頁	不明	『若松町誌』 243、244頁
	無格社 乙宮神社	大巳貴大神	・昔、時漁浦郷民の産土神として祀った神社で、初めは石祠を神殿としていたが、明治五年(1872)、拝殿を築造した。	日島村漁生浦郷 字岡筋194	155頁	99頁	若松町6、4-D	『若松町誌』 244頁
	無格社 塩釜神社	猿田彦神 大山祇神	・土地に樹木が繁茂し製塩を起こしたため、神社を創建した。	日島村榊ノ浦郷 字小頭道882	×	×		『若松町誌』 245、246頁
	無格社 間伏神社	天御中主大神	・間伏部落民の産土神として祀る。神部に祀っていた七頭子神社を分霊し奉祀した。	日島村間伏郷 字白南風1、126	×	103頁	不明	『若松町誌』 246頁
	無格社 八坂神社	素盞男大神	・古来より石祠に祀っていたが、明治四十二年(1909)、社殿を改めた。社号は祇園神社とも呼称し、毎年祭典が行われ、余興として必ず芝居が催された。当日は全五島の遠近からたくさんの見物客で賑わい、もし一度でも余興芝居を見ないと神霊の怒りに触れ、祟りがあると伝えられていたが、戦後芝居興行が絶えてからは行われなくなった。 →祟りを恐れての祭典鑑賞・参加。★	日島村日ノ島郷 字釜崎308	×	100頁	不明	『若松町誌』 242、243頁
	無格社 頭子(ツモリコ)神社※2	天御中主神 市杵島姫神 田心姫神 湍津姫神	・由緒不詳。	日之島村間伏郷 字石司1、383	×	×		『五島神社誌』 23頁
若松村之部	村社 若松神社	天御中主神	・昔(年代不詳ながら慶長年間(1596～1615)といわれる)中通島の海辺(佐尾鼻)に、首七つを棹に貫いたまま漂流していた人々を通りかかった漁船が拾い上げ、神部のとある山に埋めた。以来その地は七ツ山と称えられるようになった。当時神部には多くのキリシタン信者が住み、不敬の行為が多かったため、住民への祟りや災難がしきりであったので、村人たちは相談の上、神部に場所を変えて七人の死者を改葬し、七頭子宮と称え、丁寧に敬い祀ったので神威は大いに輝いた。 ・元禄元年(1688)、大工喜代助は神部のキリシタンが御神体を海中に投げ入れるなど、不敬の行為があったため再び神威を汚されることを恐れ、近藤高嗣と協力して神部の頭子神社を若松郷築出山に遷座した。明治三年(1870)、若松神社と改称。 →祟りや災難からの安全祈願。★	若松村若松郷 字神ノ浦越築出山296	131頁	78頁	若松町16、4-G	『若松町誌』 233、234頁

	五島神社誌(第27大区)	祭神／配神	由緒	所在地	★A	★B	現存	由緒の出典
若松村之部	村社 雄嶽日枝神社	大巳貴神 天鈿女神	・山王宮は平安時代東島（中通島）の御嶽であった、山王山の山頂に鎮座されている。霊元天皇の治世の頃の再興で創祀起源は定かではないが、明治二年（1869）の社家記録によれば、先祖以降口伝えられていることに、城主日吉山宮の御分霊であるということがある。荒川他七ヶ浦の総社として平戸領小値賀満福寺の僧都は別当職とされ、平戸・五島の両藩主は社領の寄付や毎年の祭典への出席など、その崇敬は篤いものであった。 ・庶民の崇敬も極めて篤いものであった。 ・伝説に嵯峨天皇が勧請し、最澄が第十六次遣唐使船入唐のお礼に古称御嶽の浄地に日吉山王へ神を創祀したということがある。	若松村荒川郷 字山王山133	141頁	86頁	不明	『若松町誌』 238、239頁
	村社 宿浦神社	大巳貴神 事代主神 菅原道真公 大山祇神	・天正十二年（1584）、荒川山王宮の分霊を郷民協議の上、白魚に勧請し、白魚山王宮の名があった。後年祭祀が絶え、元禄三年（1690）再興宿ノ浦八王島に遷座し、昭和五十一年（1976）、現在地に新築遷座した。 ・宿ノ浦神社由緒には二方荒川山王宮が根元と記されている。	若松村宿ノ浦郷 八王島284	134頁	80頁	不明	『若松町誌』 237、238頁
	無格社 山神社	大山祇神	・創立は不詳であるが、伝承では「昔、船崎に一年や二年でなく悪疫が流行して五穀が実らなかったので人々が大変心配し、大山祇大神の御分霊を安鎮し祈願したところ、御加護があり（郷民の延命、五穀の豊作、漁運の成就など）、大変崇敬された。」とある。	若松村神ノ浦郷 字地下ノ上22	×	×		
	無格社 一ノ宮神社	正哉五勝勝速日天忍穂耳神	・宝永五年（1708）造営の記録に雄嶽日枝神社とともに八ヶ浦の宗廟で守護するとあるが、現在では荒川郷の守護神にすぎない。	—	—	—	—	『若松町誌』 240頁
	無格社 金刀比羅神社	大物主神 金山彦神	・安政五年（1858）、当時の祠官である藤原石見正信の記録によれば、嘉永七年（1854）の夜、荒川竈司儀平が「神と鎮めくれよ」という霊夢を見た。またその翌年、百姓である八百吉に霊夢があった。さらに安政五年（1858）、藤原石見正信に霊夢があったので、崇敬者と相談し、山王山の支脈である本倉峠に金比羅神社として鎮座した。	若松村荒川郷 字国高佛4、988第2	×	×		『若松町誌』 240、241頁
	無格社 軻遇突智神社	軻遇突智大神	・祀られている祭神は火を思いのままにする神である。この神は大昔初めて若松川の上の山の麓に出現すると、奇瑞を顕し御霊光を放ち、ある里人に神託があった。この里人が不思議に思い訪ねたところ、五葉、三葉、二葉を生じた松があり、これこそ霊木であると見極め礼拝し、帰ってこのことを人々に伝えたところ、不思議なこととして此処に道を開き、祠を建立し、御神号を若松宮と称えた。 ・この神は火災防護の守護神にして家運長久の神として崇められ、藩主の御代参りにより祈願が行われた。 →火災防護。★	若松村若松郷 字若松川395	137頁	83頁	不明	『若松町誌』 232、233頁
	無格社 塩釜神社	猿田彦神	・この地は幕政時代からの製塩地であったため、塩釜神社が奉祀された。	若松村神ノ浦郷 字地下ノ上270	139頁	85頁	不明	『若松町誌』 241、242頁
	無格社 山ノ神社	大山祇神	・この神社の祭神は山を司る神である。 ・この神社は宿ノ浦郷民によって建立され、石の祠を祭祀したもので、当時宿ノ浦郷民はこの地の山林を伐採し生計を営んでいたので、山の神の祟りを恐れ、享保元年（1716）に勧請した。 →祟りを恐れての神社建立。★	若松村□古郷 字波戸本	×	×		『若松町誌』 237頁

〇補足
・由緒の欄にある★印は研究テーマである健康と安全に関連するものを示す。
・★A、★Bは神社明細帳（★Aは奉納物が記入されている方のもの）
・表の中のーは確認していないもの
・調帳の×は絵図がないもの
・ゼンリンの空欄はないもの
・表中のーは、調査対象外のため確認していないもの
・不明がわからないもの

〇参考文献
・『五島神社誌』（山下友市・神祇會長崎縣南松浦郡部會、1943年）。
・『上五島町郷土誌』（上五島町・昭和堂、2004年）。
・『新魚目町郷土誌』（新魚目町、新魚目町教育員会・隆文社、1986年）。
・『有川町郷土誌』（有川町郷土誌編集・編纂委員会、藤木博英社、1994年）。
・『若松町誌』（若松町教育委員会、一式印刷株式会社、1980年）。
・『神社明細調帳』
・『ゼンリン住宅地図2001南松浦郡有川町』（株式会社ゼンリン、2000年）。
・『ゼンリン住宅地図2001南松浦郡若松町』（株式会社ゼンリン、2000年）。
・『ゼンリン住宅地図2001南松浦郡新魚目町』（株式会社ゼンリン、2000年）。
・『ゼンリン住宅地図2001南松浦郡上五島町』（株式会社ゼンリン、2000年）。
・『ゼンリン住宅地図2001南松浦郡奈良尾町』（株式会社ゼンリン、2000年）。

２．近世後期の上五島における宗教と信仰

（１）富江領の社寺

本報告書の対象地（中通島旧新魚目町、上五島町地域）は、近世においてほぼ富江領に含まれていた。富江領の寺社全体に関するものとして、『五島編年史』の宝暦５年（1755）８月の福江領寺社領一覧に続く史料がある[1]。ここには、寺院が富江村の瑞雲寺他、計 25 寺、177 石余、神社が富江村武社大明神他、計 20 社、86 石余、寺社合計 45、198 石余とあり、対象地の寺社はつぎの通りである。

表　社寺の石高

	郷	名称	石高
寺院	桑木	常楽院	10石
	浦	立福寺	3石
		劫福寺	2石
	青方	長福寺	3石
		松音寺	3石
	奈摩	福寿庵	1石
	相河	東楽寺	1石
	船崎	大喜庵	8斗

	郷	名称	石高
神社	青方	山王	11石
	奈摩	政彦宮	3石
	曽根	正彦宮	2石
	浦	祖父君宮	10石
	榎津	天満宮	4石
		権現	4斗
	似首	恵美須	1石
	小串	鎮守	4石

	郷	名称	石高
その他	似首	地蔵	8斗
	青方	岩谷観音	8斗

寺院は桑木の常楽院をはじめ８寺、神社は青方の山王をはじめ８社、その他が２、計 18 である。このうち石高が 10 石を超える寺社は、常楽院、山王、祖父君宮であり、地域の中心的な存在であったと考えられる。神社については、寛政 7 年（1795）「領分寺社巡拝記」に、より詳細な情報が記されている[2]。

青方－山王宮　本地仏釈迦他　本社拝殿別　祭礼 10 月晦目　社人前田伊太夫
青方－姫大明神　本地阿弥陀　小社　社人前田伊太夫預
奈摩－政彦宮　本地阿弥陀　小社
網上－摩呂人宮　神体石　小社
曽根－正彦宮　本地雨空童子　社人前田文左衛門
浦――祖父君宮 3 社　稲荷　本地不動尊・祖父君宮・八幡宮　馬上之木像
　　祭礼 11 月 2 日　社人宮田豊後
桑木－弁才天　天女尊蔵　御普請所　社人宮田豊後預
榎津－天満宮　菅公御像　社人平次兵衛
小串－天満宮　本地阿弥陀　拝殿 2 社小串大明神・多賀大明神　社人政之丞
似首－蛭子宮　同殿 4 社金比羅・住吉・八幡・神嶋宮　社人宮田恵治馬

この史料では、各神社の御神体、本地仏、合祀神名、社殿の規模、祭礼、社人の情報がある。御神体が石や木造であったり、数多くの神社に本地仏があるなど神仏習合の状況がわかる。また社人は、青方中の山王社、姫大明神、正彦宮が前田氏、魚目中の祖父君宮、弁才天、蛭子宮が宮田氏と二つのまとまりが確認できる。この状況は近代にも継続しており、『五島神社誌』によると、山王社である郷社青方神社は６ヶ郷の系社で、境外末社として奈摩の政彦神社、網上の客人神社、船崎の山神社、相河の姫神社、曽根の正彦神社がある[3]。この末社は山神社以外、「領分寺社巡拝記」にも確認できる。同じく郷社祖父君神社は、魚目村 12 か村の総社とあり、事代主（似首村蛭子）、乙宮、正彦神社は末社で、明治以降も「古来ノ慣例二因ル漁場祓等ハ当社神職ノ専務スルトコロナリ」とある[4]。

また後述する山王社の日記でも、祖父君宮の宮田嘉納、山王社の前田蔵人から榎津、似首、小串、立串、曽根、奈麻社家中に宛てた文書がある[5]。中通島富江領の神社は、青方中は山王社前田氏、魚目中は祖父君宮宮田氏が中心となり宗教活動を行っていた。

（２）寺院と地域の信仰　－常楽院文書－

中通島富江領の中心的な寺院の１つが桑の常楽院である。常楽院は曹洞宗、本尊は釈迦牟尼仏、中世、境内の山中観音堂を常楽坊とし、寛永10年(1633)天梁和尚が開山した[6]。安政４年(1857)の「寺徳書上覚」によると、客殿、庫裏、惣門、鎮守堂があり、田畑15石、檀家60軒であった[7]。常楽院と地域の信仰を考える上で重要な史料は宝暦12年(1762)４月の「当院年中記」である[8]。史料の冒頭には「当寺者為浦中之祈願事、世普知之処也」「浦中無難繁栄専一ニ祈願肝要第一」と、常楽院は魚目浦の祈願所であり、浦人の無難繁栄の祈願が肝要であると記している。

このつぎに常楽院が行っていた年中行事が列挙されている。正月から順に地域の信仰と関連する行事をみていきたい。まず正月三ヶ日は勤行があり、「国家安全宗門流布山門鎮静浦中万民無難繁栄祈願」と、国家から浦中まで含めた祈願である。三ヶ日は浦中の人々の礼日でもあり、元日榎津・桑浦諸人、２日似首頭中、３日小串、立串西頭中と、常楽院に近い村から行い、遠方の村は頭中が代表となっている。４～８日は各地の修正会、牛王を配布している。４日浦地蔵堂、５日浦阿弥陀堂、６日青方地蔵堂、相川薬師堂、７日曽根地蔵堂、８日山中観音堂と続く。また７日には丸尾の大納屋、小納屋、旦那納屋、似首番所、同頭中、小串・立串・曽根頭中に札や守を配っている。「正月守用意之品数」には、三宝印守350枚、三宝印蘇民の守500枚、荒神守150枚、三宝印厄除守150枚、三宝牛王60枚(青方、相川、曽根)、三宝印丸尾組方大札守４枚とある。修正会に配る牛王や、荒神、厄除など様々な種類がある。特に数の多い蘇民の守は、銘々が受けに来るとあり、各家に配布する守札であった[9]。

８～10日は各村の初祈祷となり、８日榎津、９日浦、10日桑と近隣の村のみである。現在の初祈祷は、地域の人々が氏神に集まり年中の無病息災、平穏を祈願する神事を行い、悪鬼や病魔退散の門札を郷境に立てる行事で、２日曽根、４日似首、６日浦桑、７日立串・小串、８日榎津の順である[10]。当時も「浦村初祈祷、朝飯社人并作衆方にて賄」と、社人の参加がみられ、後述する山王社の日記でも、山王社が各村の初祈祷を行っている記事があることから、神社と共に実施する行事であった。

６月15日～７月７日は、昼夜山中観音へ堂籠、浦中の無難繁栄為祈願を行った。山中観音は漁の守護仏でもあり、28日には鮪網の敷入の吉日を選び、大般若経を転読した。７月16日は施餓鬼、「諸之為魚鱗亡鬼」の供養を行う。14～16日は毎日社人とともに念仏に付き添う。夏は山中観音を中心に漁に関する行事が多い。

９月中に観音堂にて漁祭、心経を勤めるとある。これも社人と共に行っているが、浦祭や竜宮祭は以前社人が沖場へ出勤していたが、風波強く途中から寺で実施するようになったのである。９月２番目の亥の日には御寄進祭があり、社人と共に心経千巻を唱え、国家安全、武運長久の祈願を行う。10月中旬より網方へ興行、11月中旬より浦中の網々へ、寺役として祓にまわる。12月晦日大年の夜は、山中観音で年中終の勤行をして一年が終わる。また正、５、９月には依頼があった家の興行をしている。秋から冬にかけても漁に関する行事が中心で、いずれも社人と共同で実施するものが多い。常楽院は、魚目中を中心に、修正会、初祈祷、山中観音に関する漁関係の仏事など、地域の信仰の一つの核であったといえる。

（３）神社と地域の信仰　－青方神社日記－

つぎに中通島富江領、特に青方中で中心的な神社であった山王宮(現青方神社)と地域の信仰についてみていきたい。青方神社には、近世の山王宮時代の日記が伝わっている。日記は、主に天保13年(1842)から慶応元年(1865)まで連続し、その前後の天保２年(1831)、明治８年(1875)の記事が一部含まれている。全体が安政３年(1856)を境に２分冊され、後半の安政３年の表紙のみ「日記」とある。この分冊は山王宮の神主前田家の代替わりが関係しており、安政元年12月５日、前田左近が78歳で死去、翌年息子の和嘉佐が蔵人と改名した。蔵人の代になって本格的に神事をつとめるようになった安政３年以降、分冊したと考えられる[11]。

まず常楽院と同じく地域の信仰に関する年中行事を概観したい。対象とするのは、代替わり直後の安政３年で、行事の中で先例、例之通と毎年繰り返し、地域と関係の深いものを抜き出す。いずれも祭礼を依頼、実施した人物名、祝物や初穂の内容を記すのみなので、行事名の列挙となる。

正月４日の鏡開は、庄屋、村頭や旦那衆が招かれ、続いて青方の年始礼がある。同日相河、船崎へは下社人を村頭宅へ派遣している。その後、常楽院と同じく初祈祷があり、７日奈摩、８日船崎、９日網上、10日相河、11日青方、15日曽根の順番である。10～11日には青方のまとはり(的はり)、的場辻堅が行われているが、これは全国的に行われる弓矢を使った神事と思われる。正月の神事は寺院と共通するものが多い。23日船崎かま方の山神祭、２月１日青方をはじめ、井出川祭が５日相河、12日船崎と続き、10日竈土の畑神祭が実施される。青方の井出川祭の場所は11ヶ所、山之神、大川、大井手、殿山地神、中野井手神、くたこ牛之神など、井出や川、山や牛など、村人の生業に関する神を祀った。川祭は五島各地で行われたようで、天保８年(1837)３月27日「福江近在ノ水神、山神、牧神ノ祭ハ五社神主ノ掛ナリシガ如シ、毎年春、吉日ヲ以テ水神ヲ祭リ、五月ニ人ツテ総川祭アリキ、コノ行事富江領モ略同ジ」と記されている[12]。

11日山王宮にて日岸(ひがん)祭、14、16日は青方、相河の春籠で、「村中いたし」とあり、村人総出で神社に籠もり祈願したものと思われる。３月22日には祝言島にある西鼻鮪網の蛭子沖納屋、23日同じく祝言島、百貫瀬網の蛭子納屋において、漁を始める前の祓が行われた。この年は不漁のようで、４月20日大水網、24日百貫瀬網、５月４日奥の辺多網、６日大浦前網、小串前網、８日似首前網で祓や太神楽を行っている。３月25日青方ののしろ(苗代)蒔が終わったので、天神祭を実施した。５月５日には山王宮の神事とある。17～22日各地で田祭があり、17日曽根、19日奈摩、20日青方、22日相河と続く。苗代に稲の種をまく時期と田植えの時期に、豊作を祈願する祭である。18日曽根村江袋で地祭と村祓、６月２日熊高村、５日うしろびら開中で地神祭とある。土地や田の神に関する祭の可能性がある。

６月14日は青方、15日船崎、相河の祇園宮の祭礼である。祇園は疫病退散の神で、後述する病気の流行で勧請した例が多い。25日青方で龍神への雨乞があったが、これは毎年の行事ではなく「日照田畑作物やきからし」という状況下のためだった。しかし効果がなく、29日天神の後ろの大川中で神楽式の雨乞を実施、３日目に大雨が降った。そして30日は定例の虫除祈祷、稲に害虫がつかないようにする虫送りである。７月14日盆踊、念仏を神納とあるが、これは「ナモデ、ナモデ」と踊る青方念仏踊りのことと思われる[13]。この後９月末まで記録がないが、翌年には８月５日相河の山神祭、10日大曽網の蛭子祭、25日江袋の天満宮祭礼、９月９日朝川山神祭、未ノ日祭と曽根の祭礼、20日大曽網の浦祭と、各地の神社や海山の祭が続く。

９月25日青方、27日相河の村中願成就があり、同夜山王宮御旅立にて宮籠、29日網上の客神宮の祭礼が続く。10月10日奈摩の矢堅網にて沖祓、27日山王宮の宮籠、29日奈摩宮、夜には山王宮の祭礼が始まる。これは藩主の代参がある山王宮第一の祭礼であり、30日に村の庄屋小頭も集まり直会の膳が出されている。翌11月１日には相河の姫明神の祭礼、２日には両社のほこ上げが行われ、東役所代官

へ終了の報告をしている。７日稲荷祭、10日山王宮の金比羅宮祭礼がある。10月を中心に山王宮など主要な神社の祭が多い。

その後、12月まで漁関係の祭礼が続く。11日東網方への網祈祷、16日組方と12月５日大浦前網の太神楽、10日には東役所から依頼を受け、浦中網全体の漁祭を似首の蛭子宮にて実施した。16日柴田組方の漁が不漁のため、立串の乙宮にて前田、宮田両人が２夜３日の祈祷を行う。これらは先述した３～５月の不漁が続いていることを表しており、定例の漁祭以外に、各網での祭が増加したといえる。年の瀬になると23日の船崎をはじめとして冬月祓があり、24日相河、26日青方と続き、29日山王宮、姫明神に鏡餅他を供へて、年祈祷を行い一年が終わる。山王宮をはじめとする青方中の神社は、常楽院と同じく初祈祷、井出川祭、田祭、冬月祓、網祈祷、浦祭など、地域の信仰の一つの核であったといえる。

（４）村人の願いと社の勧請　－江袋天満宮、疱瘡－

これまで主な寺社の年中行事と地域の信仰についてみてきた。村人の願いは、農林業に関わる井出川祭、田祭、山神祭、漁業に関わる網祈祷、浦祭、村全体の初祈祷、春籠、冬月祭など、毎年繰り返す年中行事にも現れている。ここでは年中行事以外の、村人の願いや突発的に発生する疱瘡に対する神社の役割や社の勧請について述べたい。

現在、江袋教会のある曽根の江袋は、天保14年(1843)天満宮が勧請された。この年江袋から「江袋も是迄とハ違、御上より壱村ニ被仰付候ニ付、村内ニ氏神勧請仕度」と相談があった。そこで前田掃部は、「曽根村方上ニ古来より天満宮御勧請有之候儀、江袋江御遷申候」と、曽根村にあった天満宮を江袋に勧請した。8月25日曽根の神官と共に遷宮式を行い、この日に祭礼日を定め、供物の分配や祭礼には掃部を迎えにくることなどを取り決めている。天神である菅原道真の誕生、死去した日が25日であることから、この日を選んだと思われる。この一連の勧請は、江袋が一村として扱われたために、氏神を元の村である曽根から遷したもので、村の成立に氏神の勧請が必要であったことが分かる。この後、嘉永５年(1852)正月17日には天神950年祭が実施された。８月25日の祭礼は、日記にも散見するが、嘉永７年には、元々あった石の御神体に替わり、小値賀の薩摩屋が天神像と思われる御神体を寄進したとある。どのような経緯か不明であるが、村の氏神が変遷していく様子がうかがえる。江袋天満宮は、明治初年に曽根正彦神社に併祭され現存しないが[14]、これは江袋の人々がキリスト教へ改宗したためではないかと考える。

最後に疱瘡に対する神社の役割について述べたい。近世における疱瘡は感染、致死率が高く恐れられた病気の一つであった。嘉永元年(1848)船崎で疱瘡が発生、村方より疫病を防ぐ祇園社の勧請の依頼があった。そのため翌年２月15日「村方上ニ屋敷取」祇園社を勧請し、６月14日を祭礼日と決定した。５月５日船崎の利三太が疱瘡となり、早速祇園宮へ立願となった。その後、青方他各地に感染が広がり、６月５日江崎、７月20日奈麻、23日網上で疱瘡神送と村祓が行われた。このとき奈摩、網上では村祓に獅子頭を立てるなど、疱瘡に関する様々な祭、祓があった。６月14日船崎、18日山王宮の祇園宮など、既存の神社の祭礼も実施された。流行が沈静した後、12月３日たびたび疱瘡が発生した相河でも、祇園宮が脇に鎮座していたのを直に変更した。相河は、船崎や青方の事例をみて、自村は祇園宮を疎略に扱ったため疱瘡が蔓延したのではと解釈していた。船崎の祇園宮は文久元年(1861)６月15日祭礼の際に、御神体を新しくして石の祠を立てており、村人の信仰は続いていたことが分かる。『五島神社誌』にも船崎の山神社の伝説として、数年にわたる悪疫流行、凶作不漁のため、清浄の地へ石祠を建立したとあり[15]、病気の流行による神社勧請という同様の事例が他にもあった。

ここでは、一村にふさわしい氏神や、疱瘡感染を防ぐための祇園宮の勧請についてみてきた。近世における村人の願いは信仰として、年中行事をはじめ、社の勧請、疱瘡対策など、様々な面で寺社などの宗教と深く結びついていたといえる。

◇注

1 「温故知新」中島功『五島編年史』上、国書刊行会、1973年、617～629頁。

2 青龍山慈尊院第13世法印真岳筆(荒木文朗編「常楽院文書」2005年、79～81頁)。

3 神紙会長崎県南松浦郡部会編『五島神社誌』1943年、6～7頁。

4 『五島神社誌』9～10頁。

5 青方神社所蔵、「日記」万延2年正月28日。

6 新魚目町編『新魚目町郷土誌』本編、1986年、685～686頁。

7 「常楽院文書」2～3頁。

8 「常楽院文書」10～12頁。

9 「常楽院文書」12頁。

10 『新魚目町郷土誌』本編728頁。

11 安政3年の日記の表紙裏には「家格先例之村々勤方之儀ハ宝暦年中日記委」とあり、代替わりに際して参考とする先例が記された日記の記述がある。そしてこの時期までは、現存していない宝暦期の日記があったことが分かる。

12 『五島編年史』下、895頁。

13 「文化百選　五島編」76、http://www.pref.nagasaki.jp/bunka/hyakusen/goto/index.html

14 『新魚目町郷土誌』本編681頁。

15 『五島神社誌』20頁。

３．上五島の漁場利用

（１）地域概観と漁業権

①地域概観

五島の漁業権の特徴と言えば、網代（あじろ）、そして加徳にあると言っても過言ではない。これは網代とよばれる魚の集まる好いポイントの漁場を、個人に対して年限を区切って、そこでの操業、経営を行わせる制度である。本稿では、五島の漁業権、漁場利用について、中世、近世近代移行期を中心に概観していく。

最初に、地域概観を行うことにしよう。長崎県五島列島は、長崎の西方 100 ㎞に浮かぶ大小 140 余りの島々からなる。本論で取り上げる有川、魚目、青方は中通島に（現・南松浦郡新上五島町）、岐宿、三井楽は福江島（現・五島市）に位置する。列島自体が対馬暖流域の本流に位置しているため、本土では沖合の海域に回遊するような魚資源が沿岸域や湾内まで回遊している。列島の島々は、火山で形成された島が多く、リアス式海岸、沈降海岸が展開し、魚が寄ってくる「網代」や曽根が数多存在している。このように海洋資源が非常に豊富であるが、消費地から遠いため漁業の発展は停滞していたと思われがちである。しかし、古代から白水郎の存在で知られ中世の倭寇の史料には漁業記事も散見され、江戸期も「五島の鮪」として著名であったように漁業が盛んであった。江戸時代以前から島外からの出漁者が多くみられ、彼らは鰹節納屋や鯨納屋を五島各地につくり、捕鯨捕魚から加工まで行なうマニュファクチュア的な漁業をおこない、島の人々を雇用していた。

中世の五島列島では、松浦党に属する党的な武士団（国人）が割拠し、本研究で取り上げる『青方文書』を残した青方氏もその一党であった。室町期になると、それらの武士団も下松浦一揆結合を通じて、後に近世福江藩主五島氏となる宇久氏を棟梁とする形へと変化し、近世を迎えることとなる。また、この島々は倭寇の根拠地としても知られ、中国東海岸までその勢力範囲を拡大し、海賊業を営む者も多く存在したとされる。

近世の五島列島は、有川や小値賀島（北松浦郡小値賀町）の捕鯨、下五島のマグロ大敷網漁業が著名で、『日本山海名産図会』の「鮪」の項目にも「筑前宗像、讃州、平戸、五島に網すること夥し」とある。

当地は福江藩の五島氏、富江陣屋の五島氏、平戸藩の松浦氏によって藩領が区分され、この三者によって長く支配されてきた。また、地域によっては「二方領」「三方領」というように、所領地を二分割、三分割するのでなく、年貢を含む諸収納分を二分・三分するような形で、一つの村を複数藩が支配した地域もみられた。これは海や限られた範囲での島嶼支配の特徴ともいえる。福江藩は藩領を十程度の代官所に分けて「掛」という地域単位を設け、代官とその補佐の下代官（下代）によって島内を治めていた。「掛」の内部にある村は地方百姓村、浜方百姓村、竈方百姓の村に区分されていた。村方の三役は庄屋・小頭（組頭）・百姓代である（森山　1973）。福江藩の濱方支配、漁民支配、漁業政策は藩の蔵許が関与し、操業網には藩から付与された加徳と呼ばれる網株が設定されており、それは藩の知行高に結びつけられていた。加徳については次節で詳述する。新上五島町域は、旧有川町域が福江藩領、旧上五島町域のうち浜の浦が平戸藩領で、それ以外は富江陣屋領、旧新魚目町域は仲知以北津和崎までが平戸藩領でそれ以外は富江陣屋領となっている。

ここで、本書で用いる五島列島の史料について紹介しておきたい。五島列島の上五島中通島（当時は浦部島）青方には 13 世紀～15 世紀を中心とした漁業記事の豊富な『青方文書』がある（瀬野　校訂　1976）。全国的にみても、この種の中世文書が存在する事例は若狭以外に稀有である。さらに、本地域には 17 世紀～19 世紀における捕鯨関係史料、マグロ網関係史料も多い。とりわけ羽原又吉が調査、筆写を進めた福江島岐宿の西村家文書（筆写史料）はこれまでの研究では取り上げられてこなかった。これらの史料は、一部の捕鯨史料を除いて、研究に十分に活用されているわけではない。

②漁業権の「加徳」

近世五島藩の漁業制度を概観しておこう。五島藩では、漁業政策を進めるための役所は特におかれず、漁場紛争の際には各掛の代官所や、藩の蔵元が調停に出ていた。寛文延宝期の史料を用いて分析した内海紀雄によると（内海　1976）、正保４年（1647）、浜方百姓村（浦）に岩瀬浦、漁生浦、樫ノ浦、戸岐浦、田ノ浦、岐宿、玉之浦、宇久島などが指定されていた。これらの浦は、年に一度の大阪、年に二度の長崎、さらに異国船警備の島廻り番船の水主役の負担とその代償に与えられた周辺の漁場（網代）からの運上銀負担、藩への「御菜」の供給などを行っていた。五島藩は、浜方百姓村の持つ網（浦百姓網）やそれらの村網の操業と運上銀払いを請け負う請浦のほかに、藩が強固な支配権を持つ個々の網代に代官の役職に付随する代官網があり、また御蔵網、加徳網などのように知行権が個人に付与された網があった（森山　1973）。このうち五島列島の漁業権として特徴的な加徳網の加徳については森山の以下の解説に従いたい。中世五島の国人の青方氏らは沿岸漁業権を田畑経営と同様に知行権として所有し、漁船・漁具等の生産用具はもとより、労働力をも村住民に負担させて経営するという方法をとっていた。そのため多くの村住民は漁夫や水夫として労働力を提供し、そのかわりに漁獲物の一部は勿論のこと、日常生活をも彼ら在地有力国人の漁業経済に負っていた。このような漁業知行権が、のちに家中・郷士らの知行の一部として、藩から宛行われる形態をとることとなり、「家督」「加徳」と呼ばれることになった。加徳とは藩主から加徳士と呼ばれる個人に対して知行を許した網株で、藩制確立による知行権の確立によって中世以来の「家督」が「加徳」に改められたという。「家督」は「家」（一軒、二軒の家を指すのではなく「何々家」と呼称される単位）の財産相続権・家長としての支配命令権・祖先祭祀権をもつ、いわゆる家長権のことであったが、知行権と同一視され、次第に藩から公許された世襲的な網代漁業権を指すようになったとされる。加徳を持つ加徳士は代官・郷士階級、庄屋・小頭らの地元の有力な役人層や江戸時代を通じて世襲的に存続してきた有力な村落支配階層であった。彼らは網代知行権を田畑知行権と併存しながら世襲的に受け継ぎ、一般漁民を網子にして労働力を提供させ経営にあたっていたとされる（森山　1973）。こうした網の権利は、五島独自のものではなく、例えば宇和島藩で郷士層に与えられていた「元網、結出網、新網」というイワシ網の特権などとも類似する（羽原　1953）。

西村次彦によると、上五島の魚目浦にあったマグロ（シビ）網株は、15 名の網主が家督（扶持）として藩主から与えられたもので、藩の知行高に結びついていた。加徳網にはマグロ網代の他に、ブリ網・シイラ網・イルカ網などがあった（西村　1967）。上五島魚目浦の網の操業について、西村はそれが濱方百姓の村の総有形態から、マグロ網漁業の発達に伴い、領主より認められた網加徳と呼ばれる権利に変化したととらえている（西村　1967）が、浦方総有漁場と網加徳が併存していた可能性も高いのでその辺についても検討する。

このように、加徳とは、中世以来の国人領主クラスが持っていた田畑や山野、網の権利、網代の権利を起因としていた。つまり、郷村制の村総有の田畑山野河海とは異なる形の網の権利であることが窺われる。この加徳網は、郷士階級[1]の他に有力な商人や漁師などが網主となり、一般の濱方百姓を所属の網子として使用し、漁業を営む傾向にあった。この網の所有は代々世襲されていた。郷士や町人が加徳の権利をもつことは、いかに浜方百姓の漁業へ制約を与えることになったかが、維新直後の明治８年「長崎県勧業課事務簿・諸漁業免許帳」に記された魚目浦浜方百姓の漁場解放の動きから知りえる（内海　1992）。加徳は浜方百姓村の漁業を制約することとなり、明治初期に浜方百姓たちによる漁場解放の運動が進んだのであった。

（２）中・近世移行期の上五島における網代の権利　—13 世紀後半～17 世紀後半—

ここでは、近世における浦方(漁村)による海面占有の展開の中で、中世以来の漁業権がどのような形で展開したのか究明する。近世漁業史研究では、複数の漁民、または浦方（構成員の皆＝本百姓と水呑百姓）が共同で利用する近世的総有関係にある漁場を指す「浦方総有漁場」説と、近世の村の基本構成員である総百姓の持ち高や百姓株などを基準とした漁場の占有利用関係である「総百姓共有漁場」説が、1950 年代以降の近世漁業史をリードした議論だった。つまり、主として近世漁村が占有する地先海面での漁業権や用益について解明が行われてきた（伊藤 1992）が、近年では後者の説へ根拠をおく研究が行われてきている。それはとにかく、中世以来の在地領主による漁場利用から郷村制の成立による村単位の漁場利用への移行・転換によって、村の地先漁場の形成へと展開したのである。しかし、郷村制の展開は地域によって様々であり、村の地先海面における占有のあり方が弱く、網漁業（網代）や沖合漁業の権利が強く存在する地域もあった。ここでは、この例として五島列島に展開した網代漁業を取り上げていく。

これまで中世的漁業権が近世期の中で、近世的漁業権が近代の中で、それぞれどう変化したのか、時代をこえた漁業権の研究も進められている（春田　1991）（白水　2001）。本節でも、肥前国五島列島の上五島において、中世から近世に跨って網代の権利と漁業がどのような変遷をたどったのか、考察する。つまり、それは時期ごとの網代をめぐる用益形態が、人間の自然（主として海）への漁業による働きかけによっていかに再編したか、を把握することでもある。

上五島は青方氏の支配領域であり、主として「青方文書」を用いて、13 世紀後半～14 世紀前半と 14 世紀中葉～後半にわけて検討する。

従来、中世、五島地域を足場に活動した松浦党の存在が注目され、松浦党一揆研究が進められ、その研究も蓄積されてきた（瀬野　1958）（網野　1961）。そうした中で、村井章介は 13 世紀～15 世紀の、いわゆる下松浦党一揆における「単独支配→分割支配→共同支配→領主制」への時代的変質を明らかにした（村井　1975）。こうした研究の流れとは別に、五島の中世漁業史研究が羽原又吉の社会経済史学や宮本常一に始まる民俗学の立場から行われてきた（羽原　1952）（宮本　1972）。また近年では、下松浦党一揆研究の成果を取り込む形で、白水智が漁業の特殊性に対する秩序形成のためにも一揆結合がなされたことを明らかにし、松浦党が漁業を生業の軸に重点的にすえるようになったとした（白水　1987）（白水　1992）。

以上の研究史をふまえると、課題としては、海面や土地利用状況などといった空間変化のメカニズムの考察や、各種漁業権の存在形態、田畠や山野と海を一体化した用益システムなどの解明の必要が浮かび上がる。表１は、13 世紀後期から 15 世紀前期における上五島、青方氏領内の土地の用益と海の用益の記載数を項目別に『青方文書』から抽出したものである。

①13 世紀後半～14 世紀前半

（史料．１）

浦部島の内、青方の浦の古老の地下人百姓等申上候、地頭こみね(峯)のけんとうし殿（持）と、青方の入道殿（家高）と御知行の時は、地頭得分一年に一度なつかりのとき二三日、百〔姓カ〕たち候うし事と、ひうとのちう人を□□□候へは、たう□□網一帖くたさせ給い候て、この網一帖か得分を、召され候し事□貧窮の時に、さいせう〔□□〕めされ候し事はけんせん（現前カ）に候、（以下略）　（『青方文書』38.「百姓等連署起請文案」弘安３年（1280）11 月）

これは、13 世紀以降の青方浦の地名がはじめてでてくる弘安３年（1280）11 月の網漁業の記録である。内容は、守護からの浦部島地頭青方氏の得分に関する尋問に対して、百姓等が連署起請文によって注進したことである。白水によると当時の漁業は狩猟などとの兼業で行われていたとされている（白水　1992）。

（史料．２）

あゆかわに候ハんあみ一てうハ、そうりやうのうちに所をきらわすたてらるへく候、一てうのほかハそうりやうにたて候ハん時ハ、そうりやうのしんたいたるへく候、よてゆつりしやうくたんのことし、　　（『青方文書』163.「青方高継譲状案」文保二年九月十七日）

この文保２年（1318）９月の青方高継譲状には、鮎河のもつ網一帖を惣領のうちならどこでも立てることができ、その他の網一帖を惣領のうちにたてる時には、惣領の指示を得るように、と記されている。惣領とは一揆結合の筆頭である宇久氏（後の近世期の五島氏）のことである。ここから海面の権利は、一揆結合の惣領に委ねられていたことが窺われる。

青方氏はその後、元亨２年（1322）７月に堺深に対して青方内鮎河浦地頭職を銭 50 貫文で売り渡すことになるが、元応２年（1320）10 月には青方高継高光の兄弟どうしでの相論が生じ、那摩本屋敷と前田１反、山口新田一反、那摩内曽根を高光知行とするに至る。

（史料．３）

一、屋しきの事、…（略）

一、まきの事、…（略）

一、あみの事、いや三郎かちきやうふんニたちたらんあミハ、まこ四らうとはんふんつヽとるへし、まこ四らうかりやうないにたちたらんあミ一てうか五ふん一をハ、弥三郎とるへし、又弥三郎かちきやうふんニしほやなからん時ハ、そうりやうのしほかまにきりこ一人いるゝへし、そうりやうせいすへからす、（『青方文書』二二二「青方覚性譲状案」元徳２年（1332）６月２日）

この「青方覚性譲状案」は、所領等を次男青方高能に譲るとする内容であり、また弥三郎が知行分に立てた網からは孫四郎と半分ずつとり、孫四郎が領内に立てた網一帖の五分の一を弥三郎がとるように、ということである。惣領青方氏から一族や家来へ網の分割譲渡がなされたことが窺われる。ここでは、便宜上この類の網を「分割網」としておきたい。

「分割網」の用益空間は、先の文保２年（1318）９月や元亨２年（1322）７月史料にもあるように、青方一族や郎党に地頭職を売り渡すことで独立させ、そのうえで青方惣領内の用益権を分割させて生じたものである。当然、それは分割された所領とは、別枠の共同利用であった。つまり、この時代には所領の分割による土地保有関係とは連動しない、塩竈・網・牧などのような用益権が存在していたのである。その網が「先祖網」にみられるように、古くから特定の用益形態にあったこともまた事実である。先祖網の初見史料である康永２年（1343）４月 11 日の「青方高直譲り状案」（『青方文書』276）には、「又セそあミ一てうはなしても、あミのあらんとき、一てうかとくふん三人してとるへし、」とあり、網得分の先祖網が三人に等しく分配された。

以上、漁業の用益形態を把握してきたが、史料上に出てくる記述を比較してみたところ、この時期は海の用益と比べて陸の用益が極めて多い（表１）。それは、青方惣領から一族への所領・用益譲与として、元応２年 10 月、元徳２年６月、元亨２年（1322）５月の記録があるが、その内容の多くは開発先の那摩の水田に関わることによる。だが、網の原料が藁であることを考えれば水田とも関わりがあり、水田は漁業の展開と対をなしていたと想定することも可能であろう。ただ、この時期に、網が固定して立てられたことを示す史料はみられない。しかし、那摩内の浜熊の「かいふにん」の記載から、青方沖、那摩付近とその飛地、曽根・矢堅目の地先にも網が張られていたことが窺われる。

この時期、上五島の青方付近では田畠等から受ける恩恵は少なく、山野・塩竈等から出る用益権に依存していた。他方、海面の占有は行われず、好漁場に張った網の用益権が所有対象であった。

②14 世紀中葉～後半

14 世紀中葉に至り、五島地域で網代についての史料が初めて現れる。

（史料．４）

ひセんのくに五たうにしうらへあかはま・ミつしり・かわちのあしろの事、

右、あをかた殿ひセん殿たいろんにをよひ候あひた、らきよのほと寂念かゝりをき候ところ也、よてのためニかゝり状如件、　　（『青方文書』280.「寂念置文案」康永３年卯月１日）

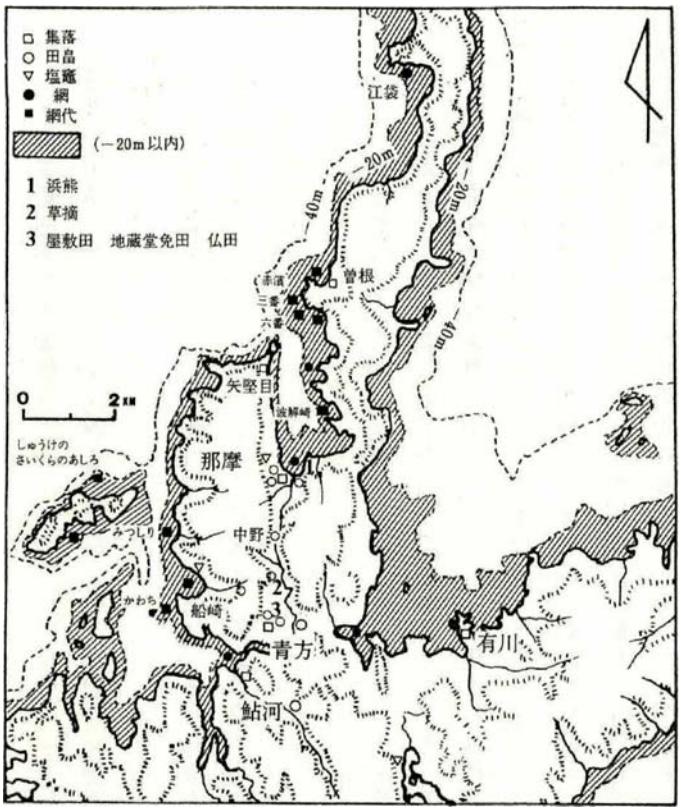


図１　上五島における 14 世紀中葉の生業用益空間とテリトリー

康永３年（1344）１月、青方氏と松浦（峯）（平戸松浦氏）との間で網代相論が起きた時の文書である。網代と網との違いは、網代には地名を冠していることである。網代は、現在でも五島列島の漁師の間では魚の集まる天然漁礁の意味で把握されており、ここには入漁する権利（入漁権）が発生している。地形学的に、網代はランバート、波食残丘に当たると推測される。地名を冠した網代の記載は定点に集まる魚を獲る漁撈活動を意味している。14 世紀中葉以前から存在していた網の権利に加えて、如上の相論文書から魚の集まる魚礁、固定された漁場での権利が発生したと思われる。この様子を地図上で復原したのが図１である。

その後も、網代の権利をめぐって相論が多発する。正平 21 年（1366）には赤濱網代において青方氏と国人領主である鮎河氏、神崎氏の相論が生じた。

（史料．５）

就青方覚性沽券状等、（鮎河）直・進（青方）重・（神崎）能阿相論赤濱網代事、いささか及旧論之間、宇久・有河為左博令談合、両方理非於以和談之儀、直・進方仁件赤濱参番網代併那摩内波解崎之崎網代・数家〔祝言カ〕之前倉網代等一円仁沙汰付おわんぬ、但赤濱者、又六番も可為直・進方、此上者、於向後可被成一味同心之思也、若以非分之儀、重及旧論、背一揆之治定之旨、有違篇之儀者、任請文事書旨、違犯人々於宇久・有河中於永可擯出之上如件賓、

正平二十一年八月廿二日孔事次第　　授（花押影）

（『青方文書』317,「宇久・有河住人等連署置文案」，正平 21 年（1366）８月 22 日）

相論の発端は鮎河氏が青方氏の赤濱網代の利用を望んだことから生じた。というのも、文保２年９月と元亨２年７月に、青方氏が鮎河（堺）氏に惣領内の海・牧の網一張と制限はあるが、所を構わない自由な用益権を与えたことにより（前掲史料２）、鮎河氏がそれを根拠に赤濱網代の利用を望んだからである。ここには青方惣領内の用益空間利用の旧慣を踏まえ、用益権を主張する鮎河氏と、用益権分与を行使した 14 世紀前半の頃ほどの惣領としての権威が見られない青方氏の姿が窺われるが、両者の主張は食い違いをみせる。この相論に宇久・有河住人連合（一揆）が仲裁に入り、その結果、青方・神崎氏側が網代の部分的な権利を放棄することになった。神崎氏は青方氏と姻戚関係にあった（白水 1992）。

つまり、ここで重要なことは用益空間の共同利用権が青方氏からではなく、一揆により与えられて存続することになったということである。しかも、用益空間の利用形態が網代は「赤濱三番・六番」とあって、籤引き等で輪番利用の取り決めがなされていた。

応安６年（1373）になると、九州探題今川了俊の働きかけで、五島全体の小領主たちは、身分の相違なく、平等に一致して足利方に味方する旨の一揆契諾を結ぶ。そして、応安７年（1347）５月には、青方重領内の網五分の一の得分をめぐる宇久氏・有河氏相論を、称・頓阿の当事者以外の寄合が裁いた。このように、各氏の分割支配から一揆結合による共同支配が進み、上五島全域で網代をめぐる相論を裁く機能が形成された。

さて、永和３年（1377）を迎えると、正平 21 年（1366）以来の鮎河氏・青方氏の網代をめぐる動きの取り決めが崩れる。

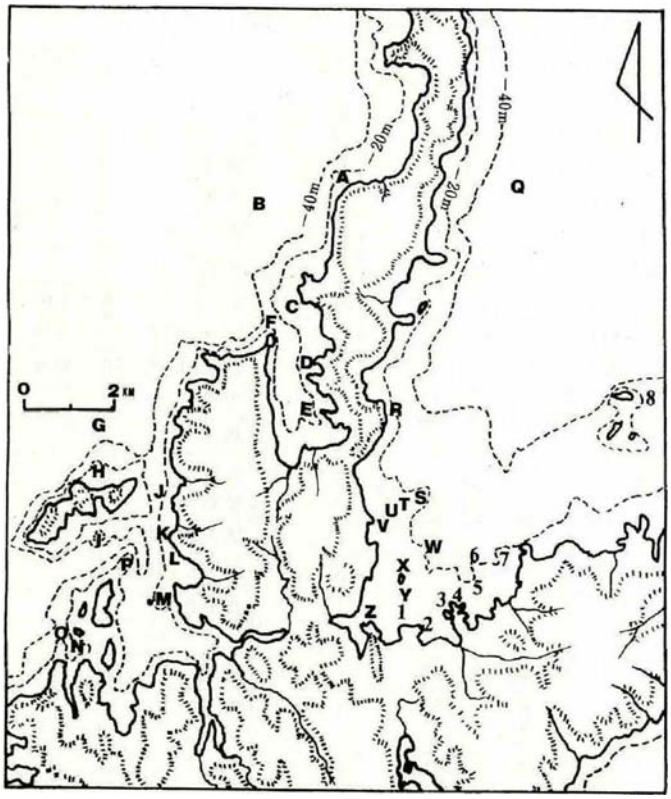


図２　上五島における主要な「瀬」

（史料．６）

うりわたし申候ところニひせんくににしうらへあをかたのうらのあしろ事、右、ところハたかつくのしや□まかせてあかはまのかますあしろの一はん・二はんおなんし申候ところに、うく・ありかわの一そくのさたとして、あかはまの三はんあしろ・はけさきのさきのあしろ・しうけのさいくらのあしろ、これ三をたうゑんいちゑんにちきやうつかまつり候お、よう〜〜候によて、あおかたとのにゑいたいをかきて二十三くわんもんにうりわたし申候ところしつなり、さん〜〜いのあしろのことハ、ほんしよもんにまかセて、たうゑんちきやうつかまつるへく候、たゝしたうゑんちきやうのうちのあミ一てうのうち、五ふんの五ふん一、つるとののほんしよもんにまかセて、ち（き）やうあるへく候、これハのそけ申候て、うり申さす候、たゝしこさいわ、たうゑん一ゑんのとくふんにて候あいた、あをかたとのいちゑんめさるへく候、このくたんの三のあしろハ、たうゑんかちうたいさてんのところにて候あいた、あをかたとのにゑいたいをかきてうりわたし申候、すゑか〜〜まて御ちきやうあるへく候、

一、三のあしろのこと、うく・ありかわの一そくのあつしよしやうおそへてまいらセ候、こなたのようのときハ、なんときにても候とも申へく候、そのときハいきなく給候へく候、たうゑんかしゝそん～～にいたるまて、いらんわつらい申ましく候、よてのちのためにうりけんのしやうくたんのことし、　　（『青方文書』332.「鮎河道円・鮎河泥連署沽却状案」永和３年４月 15 日）

これは永和３年（1377）４月の「鮎河道円・鮎河泥連署沽却状案」である。この沽却状案によると、鮎河氏が青方氏から正平 21 年（1366）に得た赤濱三番・波解崎の崎・祝言島の三つの網代を二三貫文で青方氏に売ることになり、この三つの網代以外に散在する網代については、これまでの通り鮎河道円が知行するというものである。網代の売買にあたり、正平 21 年の宇久・有河住人等連署を添え、一揆結合に従順であることを、この文書は示すが、一ヵ月後の永和３年６月には青方進が鮎河氏から購入したばかりの青方浦の地名を冠した三つの網代に、かます網代を加え、２貫 300 文で同族の神崎氏に売り渡してしまう。

（史料．７）
かつをあミ、しひあみ、ゆるかあみ、ちからあらハせう～～ハ人をもかり候いて、しいたしてちきやうすへし、（『青方文書』331.「青方重置文案」永和３年３月 17 日）

地名を冠した網代のほかに、永和３年３月の「青方重置文案」には「かつをあミ、しひあみ、ゆるかあみ」の記述が見られ、魚名を冠した網が知行の対象となっている。

このように、当該期における海面利用は、網代の誕生により固定化していく様子を知りえる。網代には地名が冠されているので、どこの場所に網が立てられていたのかがわかり、復原が可能となる。網代に冠した地名を図２、表１の「瀬」と絡めて復原を試みると、赤濱は現中通島奈摩湾入口にある新魚目町曽根郷赤岳断崖付近のＣの三尋曽根、ミつしりはＫの上五島町樽見付近、かわちはＬの同町船崎からＭの一の瀬魚礁付近、波解崎之崎はＥの奈摩湾内の青砂ヶ浦付近，数家之前倉網代はＨ・Ｉの祝言島付近に比定される。いずれも水深 20m以内の範囲の浅瀬に、網代は見たてられていたことがわかる。なお、奈摩湾北部の赤濱とそれ以外の網代の位置は約３㎞離

表１　中通島北部における主要「瀬」一覧

瀬番号	瀬名	中世（網代）	17世紀	現代	水深（m）	備考（共有地、陸地）
A	碇瀬			小定	0	
B	壺瀬				18	
C	三尋曽根	赤濱			2～10	曽根
D	広瀬				7～10	広瀬
E	ハゲ埼	波解崎			7～9	青砂ヶ浦
F	矢堅目崎	赤濱			3～14	矢堅目
G	キビナゴ瀬				7	応永29年松浦青方相論
H	百貫瀬	祝言前倉			3	応永29年松浦青方相論
I	相之瀬	祝言前倉			3～10	応永29年松浦青方相論
J	唐人バエ				5～10	樽見
K	みつじり	みつじり			8	樽見
L	河内バエ	河内			7～9	船崎
M	一之瀬				3～ 7	船崎
N	平瀬				2～9	青方松浦相論
O	力之瀬				0～20	青方松浦相論
P	タロミ瀬				1～3	樽見か
Q	亀ヶ瀬				2～21	
R	平瀬		鮪網代	小定	9～16	大浦
S	上葛瀬		江豚漁 氷魚漁	小定	4～11	魚目村
T	下葛瀬		江豚漁	小定	8	
U	地之葛瀬		江豚漁	小定	4	
V	干切瀬（ひぎり）		江豚漁	小定	4～11	魚目村
W	継子瀬		鯨漁境	海境	8～10	
X	筍島		鮪網代		3～7	
Y	メトリ瀬		鮪網代	小定	5	
Z	長瀬	桑木網代	鮪網代 江豚網代		3～7	桑
1	黒瀬		鮪網代		2～3	
2	鏡瀬		鮪網代		4	
3	祖母君之瀬				9	有川港
4	三番曽根		鮪網代		5	
5	オラレ瀬				6～9	
6	平瀬		シイラ網		1	
7	源五郎出し				10～11	
8	網掛瀬		シイラ網　鯨漁		8	

（注１）「小定」は小型定置網。「海境」は有川魚目間の海境線上にあることを示す。
（注２）海上保安庁水路部発行海図「志摩湾及有川湾」「五島列島」、定置漁業権図（『新魚目町郷土誌』所収、元禄期の浦絵図２枚（有川町役場、事代主神社所蔵）、元禄の海境争論史料、『青方文書』、現地での聞き取りをもとに作成。
（注３）瀬番号（記号）は、図１-３の「瀬」一覧地図の記号に対応する。

れており、赤濱網代についてはこの網代から約７㎞離れたところを本拠地にする鮎河氏も権利を主張している。このことは、赤濱網代が当該時期における唯一の番立網代として主要な相論漁場であったこと、換言すると、14 世紀後半の浦部島北部西海岸で最大の漁場であったことを物語っている。

ここで当該時期の海面占有と土地所有の関係についてまとめておくことにする。海の所有は網代の成立で網の用益権から瀬付近の輪番利用による海面所有へと変化する兆しがある。しかし、それはあくまでも漁期に左右されやすく、用益権中心であった。それに対する土地所有は水田利用が定着するにつれて意味を帯び、特定の用益空間に拘泥されなくなる。

③14 世紀末期～15 世紀前半

ここでは小領主から惣領青方氏への網・網代の譲渡の詳細を検討する。応永２年（1395）12 月に、鮎河氏は青方惣領内にもつ永和３年（1377）４月に売却した以外の残りの散在網代を、青方氏に 25 貫文で売却した。また、応永３年（1396）12 月には、隠居の青方浄覚の得分であった「かます網」三人前、鰹網・烏賊網一帖を惣領青方固に返すように取り決めた。これらの譲渡の動きは惣領青方氏へ漁業の権利が集約されていることを示している。

新たな漁業の展開を示す史料をみていこう。

（史料．８）

せん日あおかたどのとあゆかわとのこあミの御ろん候ほとに、ありかわわれらかうらのうちよりあい申候てさはく申候ところに、うきうおの御ろん候あいた、しよせんさかいおさし申候、あおかたとのの御方ハ、こきてさきのうちおうきうおを御ひき候へく候，

一　ほかのはんたてのあしろの事は、せん日のはんたてのまま御ひきあるへく候（中略）

一　はんたての事ハ、うお候ハば、ひかわしに御引き候へく候、又うお見えず候ハば、二日はさなに御引き候へく候、（略）　（「穏阿等連署押書状」）

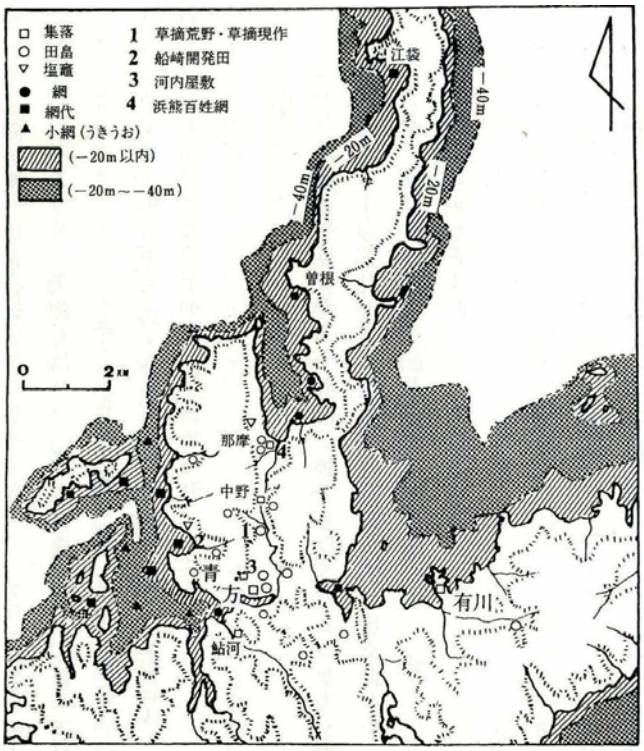


図３　上五島における 14 世紀～15 世紀初頭の生業用空間とテリトリー

この「穏阿等連署押書状」は、応永５年（1398）７月の小網・番立網代をめぐる青方・鮎河氏の相論に対し、浦内の寄合が出した判決内容を伝えるものである。小網は「うきうお」を対象とした漁網で、漁場は「こきてさき」で区分しているように、操業の海面分割が行われたことを示す。

また、小網と別に、番立網代の使用取り決めも出された。これは、魚がいる場合には日替わりに、いない場合は二日おきに使用するように取り決めている。２年後の応永７年（1400）には、青方から約 10 ㎞北の江袋かます網代（現新魚目町）内の浦・二つ河原網代で、毎年網をひくことが困難なため、一年交替に両網代で一つずつひくように、青方氏ともう一方の当事者に契約させている。網代に網を入れる輪番利用の採用・取り決めである。

以上のように、応永７年（1400）以降になると小網とともに数多くの網が登場している。また、網代をめぐる相論は減少し、番立網代など漁業秩序の取り決めが見られるようになる（図３）。応永 19 年（1412）７月には網代のみならず、浮き魚漁を対象とする小網の月交替操業まで規定するようになる。

当該期には、漁場がこれまでの漁業の中心であった青方周辺の網代よりも北に 10 ㎞以上離れたところに存在している江袋網代まで拡大している（図４）。このことは、新たな網代を求めて漁場が外延的に拡大していたことも示しているが、このような拡大が可能になったのは、従来の青方、奈摩付近の網代（赤濱網代等）への国人の集中にともなって新海域おける新漁場開発の必要性が生じたこと、さらに網代のみならず、魚名を冠した網や「うきうお」小網などのような様々な漁業形態の登場などが背景になった可能性がある。

14 世紀末期～15 世紀前期の当地における海面の権利と利用をめぐる特筆事項としては、「固定漁業」として存在していた網代が、番立網代へと変化していったこと、そして、網代漁業とは別の形態の漁業として「うきうおこあみ」漁が始まったことが挙げられる。後者は、網代の権利を得て集まる魚を待って捕獲する形態とは異なる、「うきうお」、すなわち回游魚を追って獲る漁業形態ではないか、と思われる。つまり、網代漁にみられる固定漁場の形とは異なる漁業として展開していた可能性がある。

この「うきうお」をめぐる争論が生じた際には、「うきうおの御ろん候あいた、しよせんさかいおさし申候、あおかたとのの御方ハ、こきてさきのうちおうきうおを御ひき候へく候」とあるように、海面分割を行って解決を図っていたことが窺われる。これを、海面の分割という調整が必要となる漁業の出現、海面利用システムの端緒とみなすことができる可能性がある。

④17 世紀

17 世紀の青方側の記録は少ない。そこで、青方の東隣に位置する中通島東海岸の有川湾（魚目湾）の漁業に目を向ける。有川湾（魚目湾）を囲む魚目浦（富江藩所属）と有川村（福江藩所属）との間では、幕府上訴にまで至った海境争論が起こった。その経緯を知る記録がある。魚目中によって元禄２年（1689）に完成した『魚目有川両村海境争論史料』（旧富江五島家所蔵）と、有川村によって元禄期に成立した『有川魚目間之海境帳』（有川村庄屋江口家蔵）（寛文２年から元禄３年までの内容を記す）、さらに双方が貞享期に幕府に提出した、現存の二枚の海岸絵図である。「五島五浦」の一つとして、濱方百姓村に指定された魚目浦は有川湾（魚目湾）の西北部に位置する。ここでは、「浜百姓百四人魚目浦六ヶ村　魚目浦ハ江豚氷魚鮪鰯鰹鰯鯨等此外先記より猟仕候。田地少宛作り秋初其之藁を取り網に仕候、古より地方之役目少しも不仕候」（「第一回訴訟時ニ於ケル魚目側ノ口述資料」『魚目有川間之海境争論資料』（新魚目町　1988、182 頁））とある。このようにイルカ（江豚）、シイラ（氷魚（ひいお）、マグロ、イカ、カツオ、イワシ、クジラ等の漁業が藁網を使い、有川湾（魚目湾）では行われていた。

（史料.９）

七目村之覺道覺跡兄弟ニテ此浦之猟場を切明け是ヲ見習ひ網数拾七帖ニ附へ所務等も　　仕伝候、前ニ分知頃より参拾七八年以前此浦衰え所務等も致減少魚目網壱帖七目元祖網壱帖休め残拾五帖之網御運上□五年均之割ニ入れ此網ばかり民部様御蔵許御支配ニ罷成候。（略）古来より仕伝候彼元祖網其外小網鯨突何猟ニても此方心次第に可致と申候、

（『有川魚目間之海境帳』（新魚目町　1988，39 頁））

魚目浦の猟場が七目村の覺道、覺跡兄弟によって開かれ、浦には当初、17 帖の網代があったことがわかる。しかし、富江分知（1661 年）の約 40 年以前の頃にこの浦が衰え、所務なども減少した。それで２帖の網（七目元祖網、魚目網）を休めることになり、そして残りの 15 帖の網に運上を課して、

五島民部（富江藩）の蔵元の支配下におくことになったという。これが 15 の網加徳であり、この網と別に小網や鯨突きが行われていた。

マグロ網漁業については、次の史料に詳しい。

（史料. 10）

古より鮪網壱帖と申者三百尋御座候、六七端帆之船数参拾艘ニテ有川べた迄従先規鮪網猟仕来り候（「第一回訴訟時ニ於ケル魚目側ノ口述資料『魚目有川間之海境争論資料』［新魚目町　1988、182 頁］）

鮪（マグロ）網代は 300 尋の長さの網を立てた海面である。そこでは船 30 艘を用いて操業が行われた。具体的には、マグロ網の 1 帖は 300 尋、６～７端帆の船 30 艘程で、有川村の地先まで展開していた。

次に氷魚漁である。氷魚をヒウオではなく、「ヒイオ」と読むとするならば、五島列島における回游魚シイラの地方名にあたる。シイラは、表層魚で、水深 10 尋（５m位）に生息し、魚が浮かんだときに網をかぶせて獲った（立平　1992、96 頁）。

（史料. 11）

我々の儀は北風を忌てに致し猟仕候、氷魚の儀は浮き魚にて御座候、小串似首この両村は海半分に出猟仕候、是より内の四ヶ村の儀は有川べた迄出此海に竹浮を網一帖に参拾程宛付け申し候うて是に氷魚付き候を網にて中取りに仕候。

（「御評定所江魚目之者共罷出候段々ニ申上候口上之覚」『魚目有川間之海境争論資料』［新魚目町　1988、168 頁］）

古より此案中より内四十八丁四方と積り氷魚網場壱帖前に四丁宛と見合に相定候。是は為網場壱帖前に四丁宛と見合に相定候。是は為網無御座候と申伝候て（中略）今以て網場見合いに案中より内には浮き竹仕置候て、壱帖五艘の船に弐百七拾人乗組み氷魚網漁仕り候　　（貞享「魚目絵図」）

これによると、氷魚（シイラ）は「浮き魚」で、風下に入ってくる性質があった。漁法はその性質を利用して湾の中央に網を仕掛け、網一帖に浮き竹を 30 程つけ、船 15 艘で湾の中央部に出漁した。竹に付いたシイラを網で獲った。浮き竹は、案中島より内側の湾内に設置した。15 艘の船には 270 人が乗組んだとあり、一艘に約 18 人が乗っていたことが窺われる。氷魚網は、四丁の面積を要した。案中島より内側の魚目湾（有川湾）は、氷網を設置できる四十八丁の広さがあったとある。その場合、12 帖の氷魚（シイラ）網が存在していたことが窺われる。シイラ漁業は、シイラ漬と呼ばれる集魚装置を設けて、そこに集まるシイラなどを巻き網や釣りで漁獲する方法が知られており（橋村　2003）、有川浦の氷魚（シイラ）漁では「浮き竹」が集魚の装置であった。貞享期に、集魚装置漁業としてのシイラ漬漁業がすでに行われていたのである。

次にイルカ（江豚）漁業をみていく。

（史料. 12）

魚目の儀は先年より拾帖五帖の網にて網壱帖に三百尋宛に積もり、この網不足に御座候に付、古網を下積に致し三百尋余り宛壱拾五帖を積立四千五百尋に及び御座候、この網にてあんちうより内へ江豚参り候へば有川べたへ立ち切り段々追込み候、魚目の方似首之沖へ桂が瀬と申候て瀬御座候て海浅く御座候。又風の浦崎へひきれと申候て浅き瀬御座ニ付、江豚参り則実がたまりニて御座候、是より段々内へ追込此浦奥桑木浦へ二重三重に網を立つなぎ留め被成候、江豚はときに弐百も参百も立申候。（「御評定所江魚目之者共罷出候段々ニ申上候口上之覚」『魚目有川間之海境争論資料』（新魚目町　1988、160））

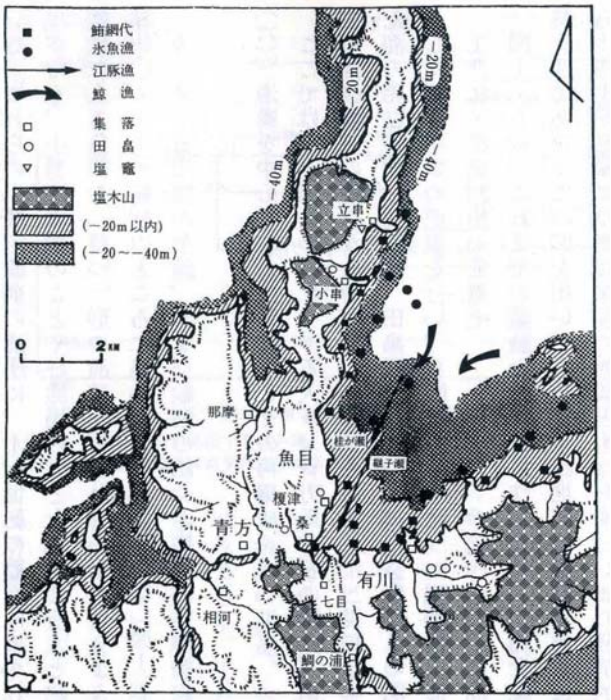


図４　上五島における 17 世紀中葉の生業用益空間とテリトリー

イルカ（江豚）漁業は、案中島の内側の湾口を四五〇〇尋の網（建切網のようなものか）で仕切って行われたと記されている。なお現実として、そこに湾を仕切る網をおこなえるかどうか、疑問が残る。網の内側に魚群（イルカ）が入ると、有川べたの方向へ追込み、さらに魚目べたの桂が瀬の方向へ誘い込んだ。桂が瀬は浅瀬である。風の浦崎の「ひきれ」という浅い瀬もあって、そこにもイルカが入り、回遊してきたイルカの溜り場の様相を呈していた。そこからさらに湾内へ追い込み、この浦の奥の桑木浦へ二重三重に網を立つなぎ留めて捕獲した。イルカは、200 から 300 頭も獲れることがあったという。掲げた図３によるとＳ・Ｔ・Ｕが桂が瀬にＶが干切瀬に該当する。この瀬を境にして湾奥は、水深 20mの範囲内となる。（図４）

このイルカ網の原料は、「先年より我々仕候わら網を苧網ニ直し我々猟場にて江豚鯨共に取申候う」（貞享期『有川魚目間之海境帳』）とあるように苧であった。イルカや鯨の漁業の展開によって、マグロ網などに用いられていた藁網から、苧網（からむし）へと一部の網漁に変化が及んでいることが窺われる。

五島列島における捕鯨は、16 世紀末に突き漁の形で導入され、17 世紀後半から急速に展開したといわれる。それを支えたのが、追い込み網で鯨を捕獲する網捕鯨であった（西村　1967、87 頁）。捕鯨は、追い込み網であるイルカ網を発展させた形ともみなせる。さらに網の原料が藁から苧網と変化したことに伴って、大型魚類（獣）の捕獲がより容易になったことが窺われる。宮本常一は、湾内へ鯨を単に追い込む網捕りから、17 世紀、18 世紀により進んで沖合でも可能なかぶせ網捕鯨へと変化したと述べている（宮本　1964）。

次に、漁場利用について、貞享の海境争論の際に、福江藩の有川村が幕府から裁許された内容を描いた絵図と、富江藩の魚目浦が自分たちの幕府への要求を描いた絵図を用いて検討していく（絵図は第３章第２節参照）。双方の絵図には、海面に網代、そして、氷魚浮き、カマス網などが描かれ、漁場の位置を特定できる。網代は、概ね水深 20m以内に位置していた。イルカの史料にもあるように、多くの魚は浅い瀬に集まる習性があり、この有川湾では、現在でも小型定置網が、干切瀬、葛瀬、一瀬などの瀬に設けられている。これらの小型定置網の場所に、17 世紀の絵図に描かれた網代が立てられ

ていた可能性があり、現地では現在でも、小型定置網のことや好漁場のことを「あじろ」と呼んでいる。イルカ網にあるように、この網代では網代に入る魚群を「待つ」形の漁業が行われていたといえよう。ただし絵図には、氷魚（シイラ）の浮きが、湾中央部の水深 40m程度のところに描かれていて興味深い。（図４）

⑤漁業を中心とした生業領域とその再編成

ここでは、上五島の海に生きる人々（青方氏などの国人）による海面占有の再編を、13 世紀から 17 世紀までの漁法変遷の観点から考察していく。そして、13 世紀後半～15 世紀前半の各時期の漁場開発を中心とした海の用益形態と浦集落、田畠開発などの陸の用益形態との関わりを通して、海辺空間における国人領主を主体とした生業領域の把握を行ない、各時期の特性について言及していきたい。

ａ．漁法・漁場利用の変遷史

図５は、これまでの議論を踏まえて作成した 13 世紀～17 世紀までの上五島における漁法の変遷の概念図である。この図を用いて、特に 14 世紀の漁業と 17 世紀の漁業のつながりをみていきたい。13 世紀～14 世紀初頭には網は譲与の対象ともならず､いまだ経済的な価値を持っていなかったといえる。所領分与が進むにつれて、14 世紀前半から網の分割が行われた。また 14 世紀半ばからは「先祖網」がみられようになり、この網が 17 世紀の史料にあった「切明網」なる元祖網（先祖網か）との関わりも推測され、さらに 17 世紀の由緒書に出てくる漁場開発者が先祖網をもっていたことから、彼らが周辺海域の漁業開発者であったことを推測させ、かつ先祖網をもつことが漁業権者の証だった可能性を示している。14 世紀半ばには権利としての網が存在していたと想像できる。14 世紀後半に地名を冠する網代が登場し、網場も特定の場所に設けられ（定置網的な建網か)、それが権利として形成されたことが十分、窺われる。

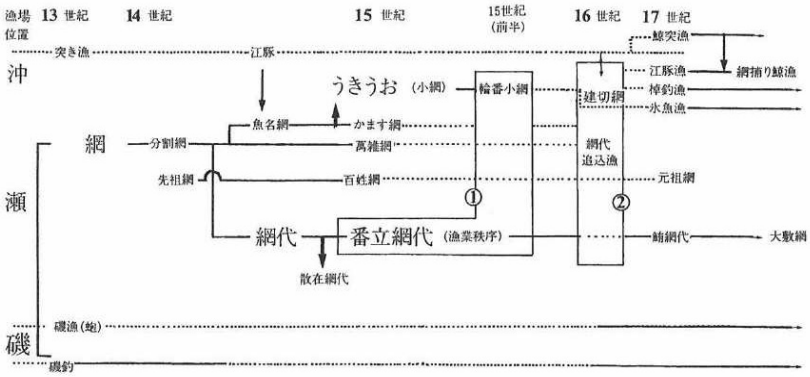


図５　上五島における漁法変遷図（『青方文書』・海境相論文書等をもとに作成）

（注 1）実線は史料で確認できる系統。点線は推測した系統。
（注 2）①の線の囲みは漁業秩序関係を示す。

15 世紀になると「番立網代」が登場し、輪番利用が行われた。また、「散在網代」といわれる地名を冠しない小さな網代も出現したが、これは地名を冠した網代の周辺に散在する小さな網代、または移動網代網か、いずれにしろこれらの網代は魚を「待つ」漁業の漁獲装置であった。網代とは異なる形態で登場したのが、14 世紀末にみられる「うきうお」小網である。動く魚群を追って行われた漁業と推測され、争論の際には海面を区切る形で解決がなされた。この形態の漁法としては網代とは別場所で展開したシイラ網漁である。17 世紀にみられた。シイラは「浮き魚」であり、「うきうお」小網とシイラ網が大いに関係すると思われる。

ｂ．海と陸の一体化した領域の特性

漁法の変遷、およびそれに伴う漁場利用の変化について、これまでみてきた。それを踏まえて、次に陸の用益との関わりを絡めながら、海辺空間における海と陸の一体化した領域を、時代ごとにとらえてみていく。その前提として、土地利用の変化をまずもっておさえておく必要がある。

中世上五島の臨海部における生業は漁業だけでなく、農業や山野の用益など多岐にわたっていたことが、白水智の研究から明らかになっている（白水　1991）。『青方文書』をベースに陸の用益と海の用益の変化を数値化したのが表１である。

上五島の臨海部では、13 世紀まで、狩猟による鹿皮等の公事納入が多く、水田は少なく、青方氏の元寇恩賞地である九州本土の神崎荘からの米供給に依存していた。この時代、知られる地名は概ね青方に限られ、その青方がほぼ青方氏の居住地であったと考えてよいであろう。となれば、青方中心の山野用益を指標とした領域を設定できる。14 世紀になると、青方氏が所領を分与していくなかで、元応２年には本屋敷として那摩が、その飛地として曽根、矢堅目の地名が現れ、また、鮎河もみられる。那摩、鮎河はともに河口部に位置する。曽根の地先海面には、元応２年（1320）の約 30 年前にすでに赤濱網代が存在し、好漁場であった。網が元応２年の段階、この赤濱に設けられていた可能性が高く、赤濱の漁場開発と曽根の集落の形成とも密接に関係しよう。このことは、14 世紀前半に那摩の開発記録が頻出することとも関係し、赤濱の漁場開発にともなって、青方氏の本拠が青方から那摩に移動した可能性もあるのである。この段階は、山野用益を主なる指標とした領域から、網漁業の動向に左右された領域へと再編し始めた時期ともみなせる。

14 世紀中葉の赤濱網代の成立は、網代漁業による漁獲高の増加をも想像させるが、それが関係してか、赤濱網代をめぐる青方氏と鮎河氏との争論が生じた。この赤濱網代への鮎河氏の進出に着目した白水智は、「陸からの秩序」に「海からの秩序」が対抗し得る程に漁業の比重が増加したとする。つまり、地先の論理から、地先に拘泥されない形の海の論理による漁業展開として位置づけていて、白水の説は説得力を持つと思われる。なお、地先の論理が 14 世紀中葉以前の段階に存在していたのかについてはなお検証の余地を残していると思われる。というのも、例えば本節の前半で筆者は、14 世紀前半の段階に、青方惣領支配の領域の中で、小領主の網や牧・塩竈などの用益権が、自己の所領に拘らず、青方惣領内の用益空間に飛地的、あるいは「散在」するような形で展開していたことを史料から読み解いてきたからである。したがって、地先に関係なく網を設定した可能性も否定できない。網代を、地先海面の共同漁業権とは別に存在する、現在の定置漁業権による定置網の祖型ではないかと推測している筆者は、陸の境界もはっきりしない中世的な段階で設けられた網が、好漁場であれば近辺の国人は誰でも設定できるような性質を持っていたのではないか、とも思うのである。

再度、陸の用益についてみていこう。康永２年（1343）以降になると、青方内の船崎などの谷田開発も頻出する。これは、翌康永三年からの付近の海面の「みつしり」「かわち」の網代の開発とセットなっている可能性がる。船崎や樽見には小川があり、植物性プランクトンが山から川に伝わり海に流れでる。そこに魚が集まる網代ができた可能性もある。

これ以降 15 世紀までの水田開発記録は、青方近辺の草摘・船崎方面に集中する。特に草摘は、草を摘むというような開発地名であり、興味深い。この草摘は那摩から青方への途中の峠に位置している。したがって、この水田開発記録は那摩を中心とした青方氏の領域が、赤濱網代の衰退に伴って、再び青方に移っていっていることを物語っているのではないかと推測される。以上、推測の域を出ないが、網代を軸とした漁場開発と水田開発は何らかの形で関わりをもっていたと思われる。

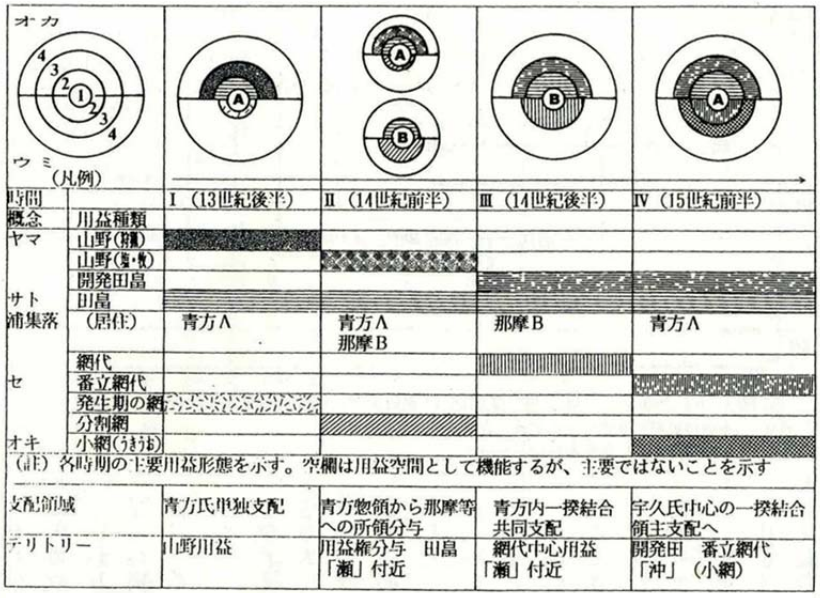


図６　13 世紀後半～15 世紀前半のテリトリーの構成要素と変遷

（注）大円はテリトリーを示す。円の上半分は陸の下半分は海のテリトリーを示す。小円は用益空間を示す。円の中心は核となる浦集落をさす。
凡例の１は主としてテリトリーの基盤となる集落、２は海では「瀬」付近（水深20m 以内）、陸では田畠などの浦集落により近い立地条件を示す。３は海では本稿のみの概念として用いる、水深20m～40m 程度の「沖」を、陸は山野用益空間や浦集落からの飛地など浦集落から遠隔に立地する空間を示す。４は用益空間としての機能はあるが、人間の開発の入っていない潜在的な空間を示す。
したがって、「ヤマ―サト―浦集落―セ（ソネ）―オキ」の一体化したテリトリーを示す。

13 世紀末から 15 世紀にかけて、「網→網代→うきうお小網」というふうに漁業技術の変化が進み、漁獲高が高まったに違いない。その漁獲物の用途については『青方文書』（65 番文書）に、中通島東海岸の有川方面との交易を示す記録があり、米などと魚介類を交易していたことを窺わせる。また、一揆結合の構成者どうしでの交易も推測でき、一揆結合が経済的なまとまり、海や陸の用益に関わる情報交換の場にもなっていたことも十分想定できる。また、網代や「うきうお」小網の展開はある程度の漁業専業者の創出を、水田開発は農業専業者の創出を意味し、青方氏の領域内で農民と漁民の分化、相互の交易場の出現が生じた可能性も否定できない。この各時期の領域の再編については、図６にまとめた。

まとめると、17 世紀のマグロ網代は 14 世紀中葉に初見の定点で「待つ」漁業形態の網代の系統につながること、同じく 17 世紀のシイラ漁は 14 世紀末に初見の「追う」漁業の「うきうお」小網の系統とつながるといえる。14 世紀後半から 15 世紀の上五島における網代漁場の開発は、陸界の浦集落や水田開発と何らかの形で関わりながら展開した。つまり、網代における漁況に左右されて、テリトリーの再編やそれにともなう集落移動がなされていたと推測される。

⑥小結

ここまでの内容を、次のようにまとめておこう。13 世紀の漁場争論では網が権利として登場し、利となっていたことを意味している。権利は青方氏や鮎河氏などの各国人が持っていた。赤浜網代をめぐっては複数の国人の間で争論が生じ、争論を回避するために網代への網入れに輪番利用の取り決めがなされた。14 世紀後半には、網代とは異なる形態の漁業として「うきうお」の捕獲を目指した小網が登場した。この網は、争論に際して、海面分割という調整が必要とされる漁業形態であった。網代は待つ漁業であるのに対して、「うきうお」小網は動き回る魚を追う漁業形態である可能性を推測した。

以上を踏まえ、中世の事例から、以下の点を解明・推測した。17 世紀のマグロ網代は、14 世紀中葉に初見の定点で「待つ」漁業形態の網代の系統につながること、同じく 17 世紀のシイラ漁は、14 世紀末に初見の「追う」漁業の「うきうお」小網の系統とつながることを見通した。14 世紀後半から 15 世紀の上五島における網代漁場の開発は、陸界の浦集落や水田開発と何らかの形で関わりながら展開したこと、つまり網代の漁況に左右されて、テリトリーの再編やそれにともなう集落移動がなされていたと推測される。

17 世紀の上五島の魚目浦では 15 名の加徳士が存在していた。これら加徳士はポイントの網の権利を持っていた。この加徳と中世の網代の権利は、村の海面占有（領有）とは異なる枠組で存在すること、加徳の権利の主体が村でなく、郷士層や商人層であること、加徳を持つ者の中には中世の国人の流れを組む者が存在することから、同系統の可能性を推測した。すなわち、中世の網代から近世初期に加徳へと、漁業権が継続していった可能性がある。

（３）五島への他領漁業者定着による新規漁業の展開と漁業権の変化

―18 世紀中葉以降の福江島大敷網漁業を中心に―

①17 世紀以降の五島列島の漁業権について

この章では、前章で検討した中世期に存在した網代と関連する漁業や権利が、近世期の五島列島においても存在するのか検討し、その権利が近世期においてどのように変質したのか考察するものである。

ここでは視点を変えて、他領漁業者が五島列島へ出漁・移住した場合、その漁業権がどうなっていたのかを、上五島でみることにする。

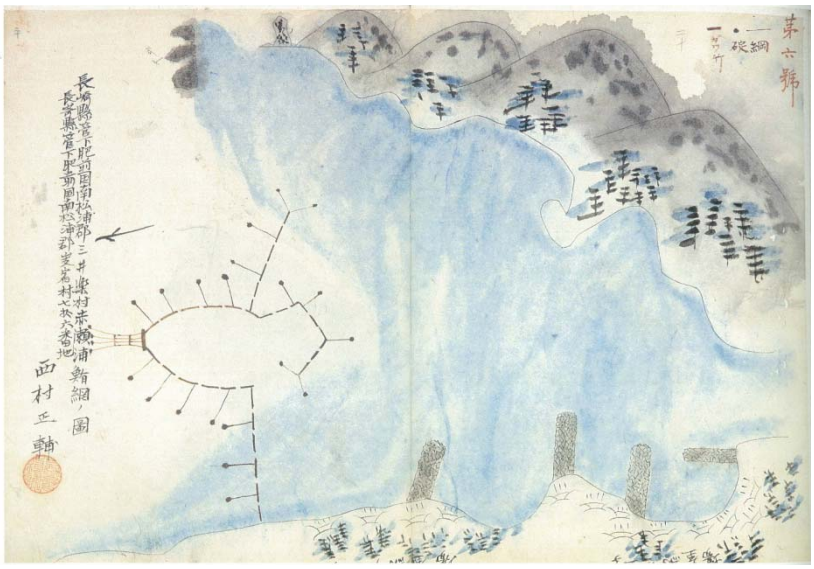


図７　西村氏の大敷網と周辺漁業場の描写絵図
（『五島列島漁業図解』　立平 1992）

近世後期五島列島への他国出漁漁民や農民の移動については、大村藩からの「居付百姓」と、捕鯨等の漁業稼ぎを求めて移住した他領漁業者の存在が宮本らによって概観されているほか（宮本 1975）（西村　1967）（森山 1973）、近世期に紀州からの五島へ移住した漁民の系譜に関しても整理されつつある（法村　1989）。『新魚目町郷土史』によると、他地域から来る集団の属性は平家落人、流罪、漁業開拓、キリスト教に概ね区分されるとする（新魚目町　1986）。このうち漁業開拓の移民は、概ね安永期の浜方百姓の減少に伴って大村藩から受け入れた百姓（農漁民）集団と、網代場を発見しその権利を藩から獲得して漁業問屋や大形網の経営をなし、藩への献金を通じて知行権の網加徳をうるという方法で大資本家へと成長していった漁業者に区分される（森山　1973）。前者は「受動的進出型」の、後者は「主体的進出型」の移民としてとらえられる。後者にあたる五島列島各地の主な他領出身の漁業者は、『長崎県史　藩政編』（森山 1973）によると、越前、泉州佐野、紀州、讃岐、周防、壱岐、薩摩などの各地を出身地としていた。『長崎県史　藩政編』によると、他国漁業者が多額の金納を進めて「郷士格」を得た流れの一方で、幕末期における藩の困窮化の中で在方の地主や漁業関係の商人による金納郷士化が最高潮に達した（森山　1973）。漁業権と他領漁業者に関する研究がこのように蓄積されてきたが、他国漁業者が五島列島の既存の漁業権とどう関わりながら漁業を進めていったのかが必ずしも明確になっていない。それを踏まえて、上五島における他国漁業者の動きを概観していこう。

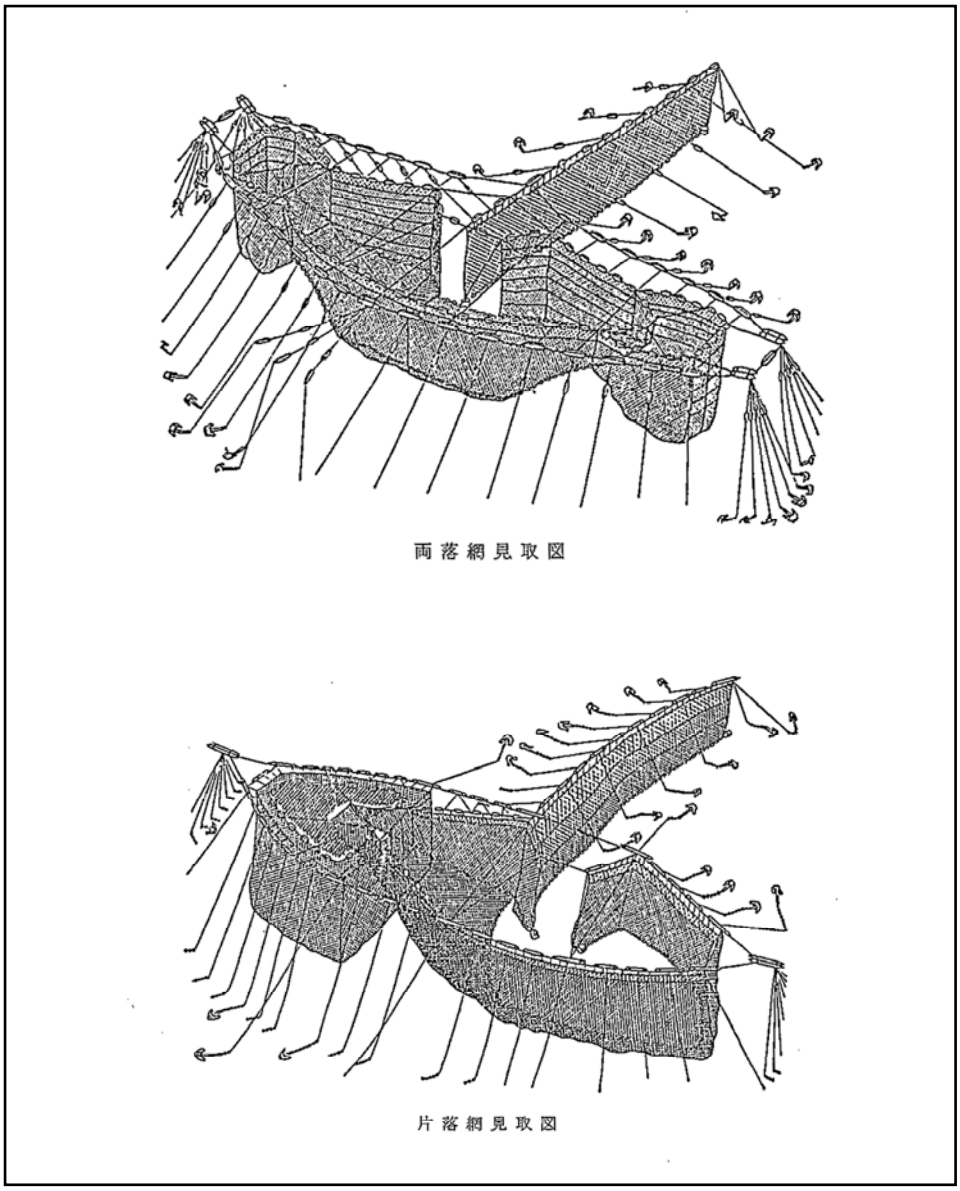


図８　定置網

『新魚目町郷土誌』で紹介されている藩政時代に富江陣屋領だった上五島魚目郷（現在の南松浦郡新上五島町）の明治初期の網加徳をもつ漁業者（新魚目町　1986）によると、中世以来、他国より来た漁業者は僅かで、その多くは近世中・後期に新たに網加徳の権利を獲得していた。柴田家は慶長 18 年頃に越前から入り、カマス網権利を領主から得ていたといわれる。湯川家は紀州湯川村から泉州佐野浦を経て寛文３年（1663）頃から延宝５年（1677）に入ったとされる。延享３年（1746）に死去した二代目源左衛門は似首の小頭役と網加徳を得ていたとされる。小頭は村方三役の一つで組頭に相当した。福岡から享保年間に移住したとされる設楽久兵衛の息子、儀太右衛門は、白島、門松のマグロ（シビ）網代を見立て、その子、久次兵衛は網加徳、小頭役、士分を得た。また、立串の小倉家は明和年間に筑前小倉から移住して漁業と漁商を営み、榎津・福山氏も寛政期に淡路島より魚商として移住したという。このように概ね他国出身の外来漁業者の移住時期は近世前期であるが、実際に網加徳を得たのは享保期以降であったことが知られる。彼等は移住後、小頭などの村の要職に就き、そののち網加徳を得る傾向にあった。彼らは単なる漁業者ではなく、武士や商人出身者などが多く含まれ、田島佳也が示した蝦夷地への出漁漁業資本家、場所請負人栖原家の出自と類似している（田島　1990）。幕府は幕末に栖原の支配人を幕吏に、松前藩は栖原を先手組格にしていたという。

他国漁業者が網加徳を獲得した時期については、「明治七年　旧来網代関係原由緒」（浦家所蔵）に「当時魚目浦の儀は往古十五帖網にて延網にて漁業仕業候得共、其後享保度に至り加徳示談之上敷網と相成り、只今の網代場江敷入甲乙之無き様、隔年廻し稼ぎ相極由、云々」とあり、参考になる（新魚目町　1986）。これによると、享保期には以前からの 15 帖網の延網から加徳の示談で敷網に変化し、網代場へ敷き網を敷く上で輪番利用等の取り決めへと再編されたことがわかる。延網は、元禄期の有川魚目争論史料と絵図でも確認され、魚群を追い込んだところに設定された「建切網」と推測される。このように享保期の延網から敷網への変化による漁業権の再編と、他国出身漁業者の網加徳の獲得とが関連することが窺われる。もっともこの敷網は定置網の大敷網と推測され（図　大敷網）、享保期に西南式大敷網の流入は進んでいたことが知られている。

上五島（中通島）の西海岸に位置する平戸藩領中通島浜ノ浦（現在の南松浦郡新上五島町）には伊藤家が存在した（上五島町　1986）。この浜ノ浦や飯ノ瀬戸は浜方百姓村であった。伊藤助作は正徳期に加瀬川網代、折島の網代を発見し、折島網納屋を設け、さらに、伊藤助左衛門が享和期に串島のマグロ（シビ）網代を発見し、その後も、焼崎・立瀬・飯ノ瀬戸・折島・串島・青木・加瀬川に好漁場を見たてて、マグロ大敷網・カツオ大敷網を設けたとされる。このように、津和崎地区をはじめとして浜ノ浦周辺に網代を見たてて世襲網代の経営を進めていた。その収益で伊藤氏は、藩への献金を進め、「村年寄格」となるに至った。

ここまでみてきたように、富江陣屋領上五島魚目では他領出身の漁業者がその定着過程で侍格や村役の地位を得て、さらに延網から敷網への変化による漁業権の再編で権利を獲得した点と、平戸藩領上五島浜之浦では他領漁業者が網代を発見し権利を得て、そこで捕れたマグロ網の収益で藩への献銀を進めて村役人の立場を得ながら定着を進めた点には共通点がある。

②18 世紀後半以降の漁業権の再編とその意味

五島の網の漁業権加徳は、藩からの網の知行権である。その時系列的な変化として、筆者は 18 世紀後半以降に進出してきた漁業者が網の漁業権（加徳）の所持者（加徳士）に代わって運上銀の負担を行なう見返りにその網の操業を請け負うようになり、網の漁業権が島の加徳士から他領漁業者の権利へ変化したことを論じた。

つまり、島に定着した他領漁業者は、元からあった漁業権の買い占めを進めたのである。西村家は、魚の回游経路となる広い海面を必要としたマグロ大敷網を新規に開発して権利を得た。しかしながらその段階では、それ以外の網の権利を島の先住者（郷士、浦の町人）が持っていた。そのためいろいろな支障が出たことで、網の権利を獲得し海面を排他的に占有していった。大敷網導入以前の 13 世紀から 17 世紀中葉までの五島列島の沿岸海域では、スポットとしての網代を基盤とした漁場利用権が散在していた。様々な水産資源を獲る網が多数あって、水産資源は共有されていたともいえよう。しかし、大敷網の導入で魚の通り道にあたる網の買い占めと排他的な海面占有が進んだため、海の資源の共有は崩壊した。これは、中世以来の網代をベースにした散在網代から、他の漁業種の参入を許さない排他的な海面利用への変化を意味する。この時期の変化は近代以降の漁業権を考える上でも重要なエポックメーキングといえるだろう。

中世以来の網代を基盤とした漁業権の加徳が、18 世紀後半の大敷網の導入を境にして崩壊していった理由を言及したい。まず、財政難の五島藩が漁業収益をもたらす他領漁業者の流入と定着を容認していた点を挙げられる[2]。五島は豊富な漁場があっても、消費地から離れた離島のため、大坂市場などへ魚を運ぶネットワークを持つ他領漁業者に頼らざるを得なかった。また、他領漁業者が網の漁業権（加徳）を容易に獲得できたもう一つの理由として、五島藩の中世以来の漁業権である加徳の存在が挙げられる。主として近世漁村の漁業権は村（浦）を基盤とした強固な封建制度によって成立している

が、当地域では村（浜方百姓村）の漁業権が弱く、中世以来の小領主制の名残りである（網野　1995、350―351 頁）加徳士の持つ網代漁業権が強かった。つまり、他領漁業者が村人の合意を抜きにして藩と加徳士と交渉するだけで網代の加徳を容易に獲得できたということも推測できる。この点は、離島五島の漁業権の特性とも見なせる。この動向は、三陸における漁業者の呼び寄せによる漁業生産の維持とも比較する必要がある。

ここまでの文章は、橋村修（2009）『漁場利用の社会史』人文書院を参考に作成した。

（４）近世近代移行期の網代漁業の権利と漁場利用

①幕末期の漁場利用

近世の上五島は、福江藩、富江陣屋、平戸藩が支配していた。青方氏は福江藩の重役となっていた。近世の青方文書では漁場利用を示した史料を確認できない。

そこで、ここでは、平戸藩支配地・浜ノ浦の伊藤家の文書（「伊藤美俊家文書」（長崎県南松浦郡新上五島町（上五島町）浜の浦（平戸藩領濱之浦））を用いて近世近代移行期の網代漁業の権利漁場利用のありかたをみていきたい。

伊藤家は、平戸藩が支配した浜の浦郷の有力者（庄屋、代官）である。近世の伊藤家文書については、戦後の漁業制度改革時に調査され筆写された神奈川大学常民文化研究所蔵筆写稿本「伊藤美俊家文書」（1718）に一部が記されている。この文書は以下の構成である。

表２　近世近代移行期の網代漁業の権利漁場

1	寛政九年巳春四月　為浦御改今井郷蔵様小値賀迄御渡海被成候節浦目附浦役人中江被仰付候御書附　下五島
2	天保九年戌二月　上使御尋請答　覚書　下五島　★浦掟書？。勢美 1 本 860 目、座頭長須は 1 本 430 目。
3	丑七月十八日　奉願口上覚　p42　下五嶋五ヶ所結鮪網代由緒書　伊藤助左衛門→近藤又蔵
4	慶應元年　諸願控　丑八月伊藤助左衛門　美道代・・（下五島 5 か所網代（串島　滝合　二方野首　嘉セ川柏嶋）明治元年継願）（鮪網代留願　明治 5 年。明治 9 年。明治 10 年 12 月鮪網代場拝借願）→添書きに維新時の来歴を主張。
5	明治 24 年　往農 123 号　濱浦村末永の今里郷地先字大崎海面に鮪網代区画拝借願いに対する伊藤家の異議申し立て。伊藤家の網代の「要路」に位置するから。
6	明治 12 年 8 月　山口県下湯玉村中尾勘左衛門から伊藤への「鮪網代借用定約書」
7	明治 13 年 3 月　地所（山林）争いをめぐる控訴状　日の島村間伏郷→濱ノ浦郷伊藤家
8	明治 22 年 6 月　北松浦郡佐々村石炭鉱業に係る請願書　伊藤助作→長崎県知事

３番の慶応元年の史料を見ていく。

奉願口上覚

下五島五ヶ所結鮪網代先祖代々請浦御免被仰付年々敷入渡造相続罷在重重難有仕合奉存候然処右五ヶ所結網代之内飯野瀬戸村持内串嶋鮪網代続ニ大和田と申候場所御座候処魚通筋ニ御座候而先祖代より串嶋持内と申傳江罷在候得共其段御免札ニも無御座右者近年鮪網代数多御願申上候時節ニ相成候ニ付若又外方より御願申上様御座候而は忽浦立不申就而は御願申上候義恐多奉存候得共串嶋上ノ

鼻より福崎鼻迄見渡先歳より申傳江候通串嶋鮪網代持内ニ御免被　仰付被下置候様奉願候右様御願申上候儀全網敷入候儀ニ而は無御座候、右網代魚通り筋ニ付奉願候儀ニ御座候左候者為冥加乍聊銀弐枚宛御運上年々御定法之通一同無間違相納可申上候何卒格別之御憐憫ヲ以御免被
仰付被下置候様此段宜被仰達可被下候以上
丑七月十八日　　伊藤助左衛門　判
近藤又蔵様
右願之趣承糺候処相達無御座候右御願申上候場所串嶋魚通筋ニ而往古先祖代より同所持内と申傳江御座候而已ニ而御免札ニ無御座候ニ付前文之通願出申候間御免被　仰付被下置候様奉願候此段宜被仰談可被下候以上
近藤又蔵　判
山岡飯助様
酒井弥右衛門様
干時慶應元丑八月大黒屋徳之助同船ニ而罷登相願候処願通御免被　仰付御免札御渡相成候事

伊藤家は、下五島５ヶ所に網代を持っていた。伊藤家は、この時期に他者から新規の網場の申請が出てきていることに対して、その網場の位置が魚の通る筋であるので、許可をしないように歎願し、さらにその魚の通り道については網を敷き入れないが運上銀は支払うので伊藤家に海面を占有させて欲しいと願い出ている。新規に網を開発している者はその海面を地先といている村の者が中心である。地先に網を設置する「地先海面地元主義」で漁場の開発が進んでいることがうかがわれる。

明治期になると、伊藤家が持つ他の網代（浜の浦村の地先海面から離れた網代）に対して、網代付近の村から出された同様の開発申請に対して、反対する旨の申し立てをおこない、裁判になっている。これが明治 10 年代後半まで続いている。

②明治初期の漁業制度改革と上五島の漁場利用

現在の漁業権は明治政府による 1874 年の海面官有借区制宣言に始まる。この明治政府による漁場解放策にともなって、浦方浜方百姓たちは漁業権を失うことになる。しかし、明治８年の旧慣による漁場の権利の復活のなかで、浦方浜方百姓たちの漁業権は復活することになるというのが全国的な傾向である。

五島列島においては、浜方百姓に加えて漁業権の加徳士たちが網代権を喪失することになる。本書５章３節にあるように、明治３年に諸業株式廃止の令が出るに至り、これに類する加徳団がこれまで通り漁業権を独占することは不当であり、これらは、村中人民平等の所有に帰すべきであるとなった。その年の冬、網漁業を浦人との平等稼ぎとして経営したのであるが、これが数年に渉る紛争の発端となった。これは従前の封建的な漁業制度を打破しようとする浦人民一同と、これを維持しようとする加徳団との抗争が表面化したのである。明治３年に始まったこの紛争は、再三に渉る県の処置が加徳士例の主張を支持したため、明治８年 10 月 15 日浦人たちは遂に長崎県令宮川房之を相手どり、長崎上等裁判所に告訴したのであるが、この裁判の審理中、即ち、明治８年 12 月９日付大政官布告（195 号）による次の海面官有宣言が出された。

捕魚採藻為海面所有之件
一、従来人民に於て、海面を区別し、捕魚採藻等の為、所有致居候者も有、之候処、右は固より官有にして本年二月第二十三号布告以後は所用の権無之候条従前の通り、所用致度者は前文布告但書に準じ借用の儀其管轄庁へ可願出此旨布告候事。

これによって裁判長は訴訟を却下し、新に県へ出願すべきであるとした。しかし、その後も県は加

徳団に免許を許可した。浦人総代松園貫一・小野慶太郎の両名は、明治７年４月６日と同年７月 27 日に上京、内務郷大久保利通へ鮪網漁業伺書を提出し、認可方の請願したがよい結果は得られなかった。

明治 12 年になり、加徳士総代二名に対し、県より出頭命令があり、「これより加徳士 15 名にて二分の一、浦方（村民）二分の一の割合にて共同稼ぎとすべし」との申し渡しがあった。こうして、明治３年に始まった漁業権紛争も約９ヵ年の歳月を経て、明治 12 年に一応解決を見たのである。

五島でも、明治８年の旧慣による漁場の権利の復活のなかで、浦方浜方漁村が排他的な漁場占有権を主張することになる。これは、旧平戸藩領を含めて全国的な流れである。それにあわせて浜方百姓たちは地先海面にある鮪網代などの権利も主張することになった。ところが、五島では、その動きに対して、網代場の漁場請負者である加徳士たちが網代の請負権復活を求める歎願を出している。このように、漁場が解放された後、明治８年の旧慣に復活するという動きは、五島において少し展開が異なっていた。それは、浦方浜方の村の地先海面の漁業権とは別形態で、権利が加徳士と呼ばれる個人に付与されていたポイント漁場としての網代の存在があった。

浜の浦の個人の網代持ちの伊藤家は、旧慣復活で網代権の回復を期待したが、網代権が戻らない網代もあったようである。そうなると、伊藤家のみならず網代の個人請負が一般的である五島藩や二方領などの五島列島では、加徳士たちから不満が出てくる。浦方浜方による漁業権復活という全国的な流れとは事情が異なるのである。

ところが、伊藤家は網代権の「保有工作」を進めていた。表３は、伊藤家文書を用いて平戸藩役所との間で取り交わした浜の浦の漁場（網代）請負者と漁場の請負期間、運上銀をまとめたものである。この表の最下段をみると、明治２年に 20 年間の網代請負の契約を伊藤が役所と結んでいることがわかる。つまり、伊藤は、表にあるような享保期からの漁場請負の実績を示しながら、明治初期の漁場解放時の直前に 20 年の漁場請負の契約を結んでいるのである。これは、明治８年の漁場解放時に浜方百姓村から漁業権の明け渡しを求められても明治 22 年まで有効であると主張する論拠になる。伊藤らは、明治初期に 20 年間の税を前払いしたと主張し、明治 22 年までの漁業権は継続した。

こうした網代漁場の経営を藩は、１年、３年、５年、７年、20 年などの年限を区切って加徳士たちに請け負わせていた。しかし、加徳士たちも、文化 11 年の契約書状に、「「数十年請持之処入札の上余人請浦相成候テハ難渋之趣且御用宅彼是御用立居候ニ付是迄ノ通り請浦被仰付被下候様末永甚八方より願出候、右者御論談之上入札相成候得者銀高ニモ及候筋ニ候得共御堺目請持之訳モ有之格別ノ御憐愍ヲ以〜」とあるように、数十年来受け持ち、資本投下してきた網代場であるので、別の受け持ち者に取って代わられては不都合であることを書き記すことも忘れない。明治 22 年の網代請負の満期の段階になり、区画漁業権の設定で、これまでの請負の仕組みがなくなると、漁場の権利を喪失することはこれまでの資本投下を踏まえると非常に困ると主張する。

これらの網代は、浜の浦の地先海面に存在しているわけではない。文化 11 年からみられる瀧合鮪網代は、新上五島町北端の津和崎の東岸、つまり、浜の浦の面する東シナ海側とは反対の魚目湾の北部に位置している。完全に飛び地的な網代といえる。こうした散在する飛び地的な網代の存在が上五島の漁場利用の特徴と言っても過言ではない。これは、中世末期の『青方文書』にみられる、青方氏の開発した江袋網代以来続いている動きともいえる。地先海面が地元漁場の権利として形成される以前の段階から、散在する飛び地的な網代の権利が存在していたことが、明治初期の漁業改革で五島の特徴として表出したと想定できる。

明治初期の漁業制度改革の動向も、漁種や地域性によってかなり異なる。この動向は、東北三陸の定置網地域、能登の定置網地域と比較をすると何がしかの傾向がみえる可能性がある。この事例は、浦方・浜方の村の地先海面が、その村の漁場という旧慣に関する議論で解決できないことを示している。

表３　平戸藩浜の浦の漁場（網代）の請負者と期間、運上銀

年　代	漁場請負人	漁場（網代）	期間	運上銀
享保元年９月 16 日	伊藤助左衛門	五嶋柏島鮪網代 折嶋鮪網代１年	１年 １年	銀年５枚 運上銀年５枚
享保７年３月	伊藤助左衛門	五嶋加勢川鮪網代。		運上銀４貫 500 目（月割）当冬相応の漁事があればほかに６貫目納入
延享２年３月	伊藤助左衛門	加勢川鮪網代 折嶋鮪網代 加勢川海福崎鮪網代 浜野浦柏嶋鮪網代。	１年間	銀４貫 200 目。 銀 500 目 銀 500 目。 銀 500 目
寛政２年戌 11 月 15 日	伊藤	下五島加勢川鮪網代	５年亥～卯	年銀６貫目
寛政４年子 11 月	伊藤	五嶋柏嶋鮪網代	３年丑～卯	運上年銀５枚。
文化９年申 10 月 22 日	板屋助作	瀧合鮪網代	５年酉～丑	運上１か年銀 15 枚。 年々２月８月定日に納入。 冥加銀２貫 500 目+これまで不納銀１貫 87 匁９分も納入せよ
文化 11 年８月４日	板屋助作	４か所（串ノ嶋・加勢川・柏嶋・二方領野首）鮪網代	５年子～亥	運上銀 473 匁。子より銀 20 枚宛年々２月８月定日納
文政 11 年子２月	伊藤助左衛門	下五島（加勢川・柏嶋・串嶋・瀧合・二方領野首）５か所鮪網代	子～寅３年	運上銀１年銀３貫 788 匁。 年々２月８月納入
天保５年正月	伊藤助左衛門	下五島５所鮪網代。	３年午～申	年銀 473 匁
天保酉年 12 月 11 日	伊藤助左衛門	下五島５所鮪網代	５年酉～丑	年銀 473 匁
天保 13 寅２月９日	伊藤助左衛門	下五島５所鮪網代	５年寅～午	年 473 匁
安政３年辰 10 月	板屋助作	鮪網代５所	７年巳～亥	運上銀年 40 枚宛。請浦
明治２年巳３月	伊藤助左衛門	下五島５か所鮪網代	未～寅 20 年間請浦	運上１か年銀 40 枚宛

注）伊藤家文書より橋村作成。

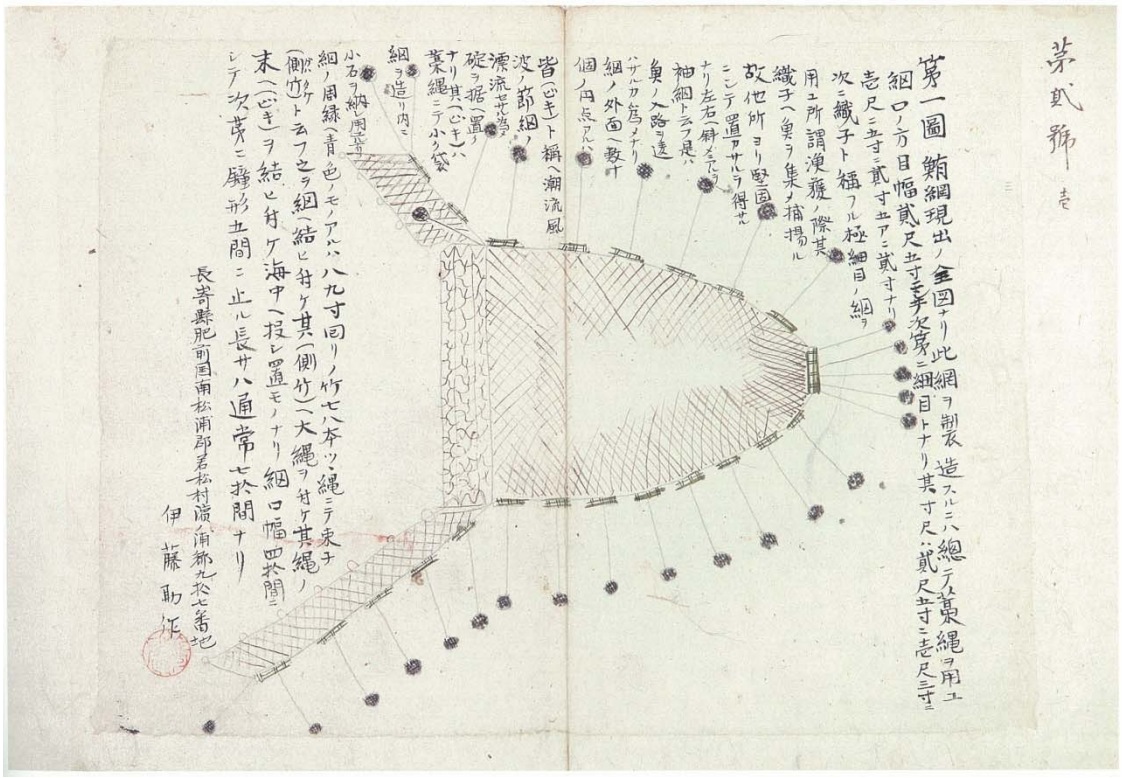


図９　伊藤家鮪網図面　博覧会提出図面

（５）明治中期以降の漁場利用

明治 30 年代の漁業制度改革、さらに明治 40 年代から顕著化する漁船の動力化の動きのなかで五島の漁業は沖合漁業へと変化していくことになる。明治期から昭和 20 年代までの八田網漁の漁場利用をみていこう。

八田網は、明治期から大正期になると、船の動力化が進み、縫切網、片手巾着網へと名称を替えて展開するようになった。対象とした魚種はイワシ、アジ、サバ、ムロアジなどであった。

昭和 20 年代になると、片手巾着網の区域（規則第９条）と漁業時期の制限が存在し、操業期間は 1. 1～12. 31 であった。

五島海域の詳しい内容は調査中であるため、近接する熊本県での例を示す。

漁期と漁場との関係は次のようになる。

・旧暦 11～３月　大羽いわしとあじ、さば　遠く沖合 10～15 浬　水深 100～150m　椛島から甑島に至る海区（時には五島方面で豊漁の場合も）

・旧暦４～５月　小羽いわし漁期　漁場は非常に陸に接近し天草１～５浬沖合から不知火海に面する鹿児島県長島から御所浦方面に亘る。

・旧暦６～10 月頃　中羽いわしの漁期　漁場は時期とともに次第に沖合に移動し８～９月になると距岸 10 浬内外の海域となってくる。この頃になると、御所浦嵐口港の片手巾着網または比較的大型の動力付双手巾着網は根拠地を天草郡牛深町、同郡大江村軍ヶ浦または富津村崎津港などに移して操業するようになる。漁獲物：まいわし、うるめいわし、かたくちいわし（タレ）、あじ、さば、むろあじ（冬季は鮮魚。脂肪の少ない時期は煮干等の製品として県外へ）

この範囲は、天草郡富岡浦の水主浦漁場の領域と概ね共通する。これは、広域的な海面を必要とする巻き網漁業の漁場を設定する際に、過去の富岡浦の漁場を参考にした可能性が想定される。このように、近世期の 18 世紀後半の八田網は漁を行なう場所、空間が画定されない形で行なわれた。しかし、県の許可漁業となり、広域的な範囲が区画されるようになったことが分かる。この背景には、明治 40 年代以降の漁船動力化などの要因があると推察できる。

八田網は、回游魚の鰯の魚群を篝火で集めて巻き網で捕獲する漁業であった。八田網の漁場は、陸から離れた沖合の海域に位置していたが、漁場は固定されていなかった。魚群の動きを追って船が集魚の篝火を用いて、移動しながら巻き網で捕獲した。漁場も漁業も固定される性質のものではなかった。また、大正期以降になると巻き網の漁場の範囲が線で画定される。この範囲は、天草諸島の富岡浦の水主浦漁場の海面の範囲と概ね共通する部分が多い。この点は、広域的な海面を要する巻き網漁業の漁場を設定するに際して、過去の富岡浦の漁場を参考にした可能性を窺わせる。

八田網にみられる移動漁業は場所、空間が画定されない段階から、動力化が進んで、面的な漁場設定へと至った。八田網は、漁獲対象物である沖合を回游するイワシを追って、漁場が線的な性質の形態から、囲い込みが進み面へと再編された。

その後、明治 34 年４月 14 日公布された法律第 34 号漁業法（明治漁業法）で、明治 41 年７月、漁業組合が設立され、これ迄の浦人共有の漁業権は漁業組合に移り、漁業組合と加徳士との共有となった。

この様にして保たれてきた漁業権も、支那事変の拡大に伴い諸物資が統制され、漁業経営も年々窮屈さを増していた。昭和 16 年、組合員の強い要望もあり、県の強い指導で三百有余年の歴史をもつ加徳もついに漁業権を全面的に漁業組合へ譲渡することになり加徳士・加徳団の名称も永遠に消滅し、歴史の一こまに残るのみとなった。

沖合漁業の展開

昭和 16 年、魚目・北魚目に漁民の出資で漁業共同経営団が組織され、定置漁業権は全面的に漁民の手に移り、終戦後の漁業法改正まで続けられた。昭和初期から昭和 20 年頃まで、鮪、鰤、烏賊の漁場

に恵まれた丸尾漁港のほか、榎津港、津和崎港、似首漁港・小串漁港・立串漁港・仲知漁港・一本松漁港などがあり、かつての大型定置網や刺網・一本釣の諸漁の賑いは失われたものの、現代に至るまで漁業は町の基幹産業で、近年の漁獲量では真鰯、烏賊類・とびうお類・真鯵・さんまなどが上位を占める。また、定置網のほか、漁礁・藻場、および築磯の造成によって資源を保護し、養殖型漁業に力を入れている。

◇注

1 代官・庄屋・小頭等、村の支配階級をなしていた家々をさす。

2 幕末期の福江藩の財政は、居城石田城築城と軍備体制の強化によって窮迫化し商人や有力漁民の金納に依存していた。例えば、1852 年(嘉永５)には 1000 両を献上した岩永惣平に対しシイラ網代１帖が与えられていた。前掲)森山。

第３節　教会

１．教会堂の立地について

2011 年現在、新上五島町には、29 のカトリック教会堂がある。それらの教会堂は、共通した特徴を持っている。

新上五島町の教会堂のほとんどが海辺あるいは入江を見下ろす丘の上にあること、その教会堂を建てたのは、江戸時代に大村藩の外海地方から移住してきた人々の子孫であることを特徴とする。教会堂の立地の特徴はその歴史によって生まれたのである。

五島のカトリック教会の歴史は、16 世紀に遡る。

永禄９年（1566）にイエズス会のルイス・デ・アルメイダ修道士が五島を訪問し、宣教活動が開始された。そのきっかけは、1562 年、五島の領主宇久純定の家臣の求めに応じて、トーレス神父がキリシタンの日本人医師を派遣して、純定の病気を癒したことであった。1567 年には、領主純定の子右衛門太夫がルイスの洗礼名で受洗した。1576 年、純定没後、領主となった純堯である。その夫人、娘たちも洗礼を受け、ルイスの熱意でキリシタンも増加し、４箇所に教会堂が建てられた。しかし、教会は長く続かなかった。純堯は 1579 年に亡くなり、純定の長男の子純玄が領主となるとキリシタン迫害がはじまった。大村の帯取で殉教したマシャド神父が 1617 年に、田平の焼罪で殉教したカミロ・コスタンツォ神父が 1622 年に五島で捕えられているのは、五島にまだ宣教師を待つキリシタンがいたからである。カミロ・コスタンツォ神父と一緒に殉教した２名のキリシタンは、神父に宿を提供したキリシタンと、自分の船にカミロ・コスタンツォ神父を乗せて各地へ運んだキリシタンであった。この頃の潜伏キリシタンがいつまで存在していたのかは、分かっていない。

五島において、明治時代に復活した、あるいは以後も潜伏状態を続けたキリシタンは、皆、大村藩外海地方から移住した人々とその子孫であった。

カミロ・コスタンツォ神父が五島で捕縛されてから 175 年を経て、再び五島はキリシタンの安住の地となった。

寛政９年（1797）、五島藩主五島盛運が大村藩主大村純尹に、五島の未開墾の地に大村の農民を移住させるよう、頼んできた。大村藩では外海地方の農民を移住させることにしたが、かれらは喜んで応じた。大村藩では 1657 年に勃発した大検挙事件、郡崩れでキリシタンはいなくなったとされていたが、大村湾と西彼杵半島の山によって城下から隔てられた外海地方では、キリシタンが密かに信仰を守っていた。五島灘に面する外海地方は、出入りの少ない断層崖の海岸線となっているため、出津川・黒崎川などの流域に、わずかに田畑が開かれているところであった。外海地方の潜伏キリシタンが五島への移住に喜んで応じたのは、生活の苦しさだけではなかった。長崎でキリシタン検索のために始められた絵踏は、大村藩でも非常に大切な年中行事になっていた。『大村郷村記』の「絵踏并大検見出目之事」の項目には、大村藩における絵踏行事の費用について記されている。

大村藩でも外海地区に多かった佐賀領（深堀藩）の飛び地では、絵踏に関する記録がないとされ、大藩の佐賀藩は絵踏を実施しなかったと考えられる。従って、五島に移住したのは大村領の外海地区 18 ヶ村の農民が多かった。

寛政９年 11 月には、大村藩家老片山波江の指揮で、黒崎、三重から 108 人が出航し、六方の浜に上陸し、平蔵、黒蔵、楠原に住みついた。彼らは御用百姓として優遇されたという。移住は２回、３回と続き、古老の話によると 1,000 人の要請に対し最終的には 3,000 人が五島に渡ったと『五島キリシタン史』（浦川和三郎著）に記されている。「これより後、大村の民、この由緒を以て五島へ来たり住むものその数を知らず」と五島藩の『公譜別録拾遺』に記されている。元々の居住者をジゲ（地下）と呼ぶのに対して、移住者はイツキ（居付・居着）と呼ばれ、条件の厳しい土地を開拓しなければ

ならなかった。しかし、その後も外海地方の潜伏キリシタンは、先に移住した者を頼り、小舟で夜陰に乗じて五島に渡った。それは信仰の安住の地を求めた農民の逃散であった。従って、彼らは隠れ住むしかなく、隠れるのに都合のよい目立たない入江に小舟を入れ、人里離れた辺鄙な土地を開拓して生活の糧を得るようになった。

『仲知小教区史』（1999 年刊）によると、仲知には西側の島ノ首、真浦、久志の３集落と東側の一本松、竹谷を合わせて５集落が形成された。

最初の移住は、1810 年から 1820 年の間に黒崎村牧野郷から２夫婦、神ノ浦村から１夫婦の合わせて３夫婦が島ノ首の海岸に着き、海藻が打ち寄せられているのを見て居住をきめたという。少し遅れて他の 3 夫婦が立串と小串を経由して移住して開拓を始め、全員がキリシタンである集落が形成されていった。

真浦の場合も、1820 年頃に神ノ浦村の２夫婦が真浦の浜の開拓を始め、10 年ほど遅れて同じく神ノ浦村から２夫婦が移住し、真浦の山手の開拓者となった。この移住した人々はみな真浦姓を名乗り、1865 年長崎の大浦天主堂における信徒発見後、仲知で真っ先に信仰を公にし、仲知教会の発展の推進力となった。この一族から司祭・修道者が多数輩出している。

上五島の教会の立地を考えるとき、大水からは江袋と仲知、赤波江から一本松・竹谷・米山が、真浦の浜から島ノ首が眺められる。小さな入江とそこに流れ込む海岸までの急斜面の山、住める人数は自然に限られている。故に分かれて小さな集落を形成しながらも、連帯感をもつことができたのではないだろうか。

明治の始めに、パリ外国宣教会の宣教師たちによって作成されたお水帳（洗礼原簿）には、受洗者の名と生年月日、出身地、授洗者名のほか、父母および祖父母の名と出身地、洗礼名が記されているので、寛政年間の潜伏期から復活教会のキリシタンの家族の状況や移住を知ることが出来る。お水帳によると、久志の場合最初の移住者は隣村江袋からの第２世代の移住で、1815 年～30 年にかけて、牧野・大野・神ノ浦からの移住者の子孫である。江袋に移住した第１世代は大野、神ノ浦出身であった。第２世代の夫婦には４人の男子がいたが、上２人は江袋で生まれ、下の２人は仲知で生まれている。

船隠教会がある地名は、文字通り、逃れてきた潜伏キリシタンがその入江に船を隠したからだと伝えられている。

他の地区の場合も、このように、先ず２、３組の夫婦が移住して開拓をはじめ、かれらを頼って第２次開拓移住が行われたといえよう。信仰の自由を求めて五島各地に渡ったキリシタンたちは、里脇枢機卿が「江袋教会創設 100 周年記念誌」に記すように、生活するには適さないやせた山間の僻地に、あるいは無人の小島にかたまり、荒波の海辺にしがみつくように、身を寄せ合って生きて、信仰を守り、信仰に生きることを最大の目的とした。

生活環境の厳しさから他の土地を探し、２次、３次の移住をした例も多くみられる。

1873 年、明治政府がキリシタン禁制の高札を撤去し、信仰が黙認される時代が到来すると、真っ先に教会堂を必要とした。教会堂は信徒の礼拝が行われてこそ教会堂である。それゆえ、教会堂は生活の場に建立されたのである。集落ごとに家御堂から木造教会堂、そしてレンガ造教会堂へと発展する教会堂は、信徒たちが感謝と喜びの祈りを捧げる神の家であり、信仰の表現であった。ヨーロッパでは教会堂が都市のシンボルとして建立されたように、五島においては集落ごとに、「我らが教会堂」が建立された結果、数多くの教会堂が生活の場である海辺に面して、あるいは入江に臨む高台に建立されていったのである。

住民の集団移住で今は閉鎖されている野崎島の野首教会堂のように急峻な山地に建つ教会堂も、外海地方からの移住者によって建てられた。

長崎県内でも珍しい石造建築の頭ヶ島教会堂がある頭ヶ島は、1859 年、有川の代官の許可を得て、２、３戸の潜伏キリシタンが移住するまで無人島だった。1865 年の信徒発見後、五島キリシタンのリーダー、ドミンゴ森松次郎は、この島が宣教師を迎えて匿うのに安全だと考え、自ら移住して、ささやかな仮聖堂を建てて、パリ外国宣教会宣教師クーザン神父を迎えた。明治２年（1869）、五島でも明治政府によるキリシタン迫害が起こると、頭ヶ島の 25 戸 144 名の住人のうち、48 名が所預けとなり、そのうちの 40 名は改宗の血判を捺して帰された。その後、はじめ 56 名が出奔、さらに全員島から出てしまった。迫害が終わって島に戻ってからは、乏しい経済力と多くの労力をささげて、鉄川与助による石造の立派な美しい教会堂を建てた。土地は、ドミンゴ松次郎の自宅跡である。教会堂建築の費用を捻出するために自分の土地を手放し、教会堂が完成すると島を去らなければならない信徒もいた。海岸に墓地があるこの教会堂は、まさに大浦から小舟で訪問する宣教師を迎えるのに都合の良い海辺に建てられた教会堂である。

例外的に市街地にある青方教会は、1960 年代から 70 年代にかけて、職を求めて上五島の中心地である青方に移住する信徒が増え、1975 年に最初の教会堂が建てられた新しい教会である。また、山間部に建つ佐野原教会は、文化文政年間の外海地方からの移住者が土地を求めて山間部に入り、渓流沿いに形成した小さな集落の教会堂である。

番岳に連なる丘の中腹にある小瀬良教会、幹線道路から少し外れた山の中腹に建つ大水教会、奈摩湾を見下ろす山の中腹にある冷水教会、いずれも海が見える場所に立っている。

しかし、司祭の数は十分ではなく、いくつかの集落を合わせて小教区が設立された。従って、信徒はミサ聖祭に与るために、司祭が常住する教会に通うことになるが、山や谷にさえぎられた集落間の移動に道路は整備されてなく、道程も遠かった。そこで便利な移動手段は小舟であった。従って、信徒が小舟で集まるのに便利な入江や港のそばに、主な教会堂が建立されたのである。

このような歴史的背景があって、新上五島町の教会堂所在地を示す地図には、漁港や入江の記入が欠かせないのである。

２．上五島のカトリック集落と教会堂の関係

長崎県西海上に浮かぶ五島列島の中通島と若松島を含めた島域を一般に上五島と呼び、これに対して、奈留島、久賀島、福江島などを含めた島域を下五島と呼ぶこともある。長崎およびその西海上の島嶼には数多くの教会堂が建てられているが、なかでも上五島には現在 29 棟の教会堂が集中している。これらの教会堂と潜伏キリシタンの流れをくむカトリック集落の間に、どのような結びつきがあるのか、上五島北魚目地域のカトリック集落と教会堂を例として、その結びつきを考える。

（１）教会堂の出現から、その後の教会堂の建て替え、敷地の移動

①明治 10 年代の上五島における教会堂の出現【外海地域との強いつながり】

江戸時代後期、1800 年を過ぎた頃、五島藩の要請に応え、大村藩外海地域からの農民移住があり、その多くは潜伏キリシタンであったとされる。北魚目地域にも江袋、大水をはじめ、主に中腹斜面を開拓したキリシタン集落ができた。その後の明治 6 年（1873）になり、禁教の高札撤廃に伴い、信教の自由が保障されることとなった。上五島へは明治 13 年（1880）にパリ外国宣教会のオーギュスト・ブレル神父が長崎港外の伊王島より上五島・鯛ノ浦に赴任し、ここを拠点として中五島（奈留島周辺）から北魚目地域の範囲を巡回することとなった。ブレル神父の巡回により、潜伏キリシタンへの洗礼が実施され、北魚目地域においてもカトリック信徒が出現することとなった。前後して明治 12 年には長崎・外海地域にド・ロ神父が赴任した。外国人神父の洗礼により出現したカトリック信徒の儀式、信仰の場としての教会堂が建築されることとなり、明治 14 年から 17 年にかけて上五島・北魚目地域においても教会堂が建設された。

表１　北魚目地域に明治中期までに建設された教会堂

建設年	教会名など	担当神父
明治 14 年	仲知教会堂	ブレル神父
明治 14 年	大水教会堂	ブレル神父
明治 15 年	江袋教会堂（当時の主任座教会、川原久米吉施工　現存）	ブレル神父
明治 17 年	赤波江教会堂（昭和 45 年まで現存）	ブレル神父
明治 18 年	（ブレル神父が外海・出津教会からの帰途に殉職）	
明治 22 年	米山教会堂	デュラン神父

当時の教会は詳細不明のことが多いが、このなかで詳細が比較的明らかになったのが江袋教会堂である。江袋教会堂は明治 15 年建築の御堂が現在まで同じ敷地に、建設当時と同規模で、わずかな改造をされるものの当時のすがたをよく継承している。計画はブレル神父で、大工棟梁は長崎の外海・黒崎村の川原久米吉（1819～1903）が務めている。川原久米吉はカトリック信徒で、江袋信徒の協力のもと、建築されたと地元に伝えられている。江袋教会堂の保存修理工事中の調査にあたり、施工面において、大工技術にすぐれた点がみられる反面で、素人的施工の一面がみられたことは、このような当時の施工状況を反映していると考えられる。江袋教会堂の建築形式の中で、平面計画や屋根形状、軒先梁端の形状、一部小屋組の擬似トラス状況などに外海・出津教会堂との大きな類似がみられ、出津教会堂を指導したド・ロ神父の関連がうかがわれる。このように、江袋教会堂においては、ブレル神父の上五島と外海の往来を通じて長崎・外海地域のド・ロ神父、外海地域の大工などとも強い影響関係があった。したがってブレル神父の巡回地であった北魚目地域の教会全般に長崎・外海地域とのかかわりがあったとみることができる。

②北魚目地域の教会堂立地の特徴【地域とその社会状況による特性】

上五島北魚目地域で特徴的なことは、集落毎といっても過言ではないほど教会堂が集中していることである。北魚目地域は、地形的に細長い半島状の土地に海抜 200～400m程度の山が控えることで、非常に傾斜の険しい地形であるといえる。特に大村藩からの移住により形成された集落は、湾や稜線で囲まれた中腹斜面に立地した集落であるため、各集落間の移動には非常な困難が伴うことが想定される。したがって日常的な信仰生活に密着した教会堂が出来るだけ住居近くに所在することが望ましいと考えることが自然であり、各集落内に教会堂が建設される理由であるかもしれない。潜伏キリシタンに由来する集落であれば、なかば孤立集落のような状況で、大きな移動を好まない傾向があるのではないだろうか。

また、北魚目地域の教会堂が立地する敷地であるが、集落そのものの立地自体が厳しい状況であるため、教会堂敷地も出来るだけ条件の良い場所を選ぶものの、斜面を削って造成するなどして、平坦な土地を確保している場合が多い。さらには、教会堂を立て直す際に、同じ敷地を使わず、別の敷地に建てなおすことも行われている。

③教会堂に変化が生ずる時期　【復帰と信徒数増加と教会堂の新設、増築、建て直しなど】

ここで教会堂に変化が生ずる時期を考える。その動機としては、まず、洗礼を受け、潜伏キリシタンからカトリックに移る時期（復活期）に教会堂が生まれる。次に、洗礼が進み、信徒数が増える時期（増加期）になると教会の修理を兼ねた増築や建て替えをするなど変化がおきる。さらに、 時間が経過し、初期に建てられたものが老朽化の時期を迎えると、増築を兼ねた大規模な改修または建て替えが進められる。（安定期）このように教会堂の変化は、３つの点に大別されると考えられる。教会堂建て替えにあたり、敷地を変更して新築することも多いが、この際に移動の影響とし、集落の構造自体に大きな変化を与えることがある。場合によっては、集落の中心位置が変わる場合がある。（例えば、米山集落　旧米山から新米山への移動）などのことが考えられる。

④教会堂敷地の移動の理由【敷地を変える理由　手狭、困難な切り開き】

それでは、なぜ敷地を変更するのか、その理由を考える。まず、最初に建てられた教会堂立地であるが、必ずしも現在のような集落中心付近に所在するとは限らない。上五島魚目地域周辺の場合では明治 14 年建設の初代大水教会堂のように現在の集落中心からはずれた場所に所在することがある。大水教会堂の場合では、大正時代の建て替えに際して、敷地を現在の集落中心に近い場所に変更している。

教会堂の敷地を変更する理由や動機付けを考えると、建物の規模を拡大するための物理的な理由と、周囲の社会状況や時期に応じた精神的な理由の２つの面が考えられる。

まず、物理的理由であるが、潜伏期からの家御堂や明治 10 年代の教会堂の場合、総じて規模が小さく敷地も建物にあわせ造成しているために狭い。もともと急斜面地を切り開いているため、建物の規模を大きくするために敷地を広げるには非常な労力が必要となる。教会堂の様式上、建物の面積を増やそうとした場合、梁間方向に延ばすことはせず、桁行方向に延ばすことになる。そのため、特に斜面に直交方向に開いた敷地の場合、より大きく斜面を削らざるを得ず、実質不可能となる。このような理由のため、新たな敷地を求めることにつながる。

次に、精神的な理由であるが、それぞれの時代の社会背景を考慮する必要がある。信仰を公に表わせなかった潜伏時代と禁教高札が降ろされた明治６年からそれほど時間の経っていない明治 10 年代では、「目立つ場所」に堂々と敷地を構えるのは、大浦天主堂のような特別の理由がない限り、困難であると考えられる。また、ある程度時間が経過し社会的にカトリックの認知度が高まった時期から世代交代が進んだ明治 40 年代以降では信徒の意識に変化がでることは自然であり、「目立たない場所」から「目立ってもよい場所」、「より目立つ便利な場所」に敷地を変更していくようにみられる。最初の頃には建てられなかった敷地に教会を建てられるようになり、さらには利便性を求めて敷地を移る

ということと考えられる。

別の一面として地元中通島出身で仏教徒の鉄川与助（1879～1976）が教会堂建設への進出し、鉄川与助と外国人神父との関係があったことも、何らかの影響を及ぼしている可能性も考えられる。

⑤教会堂の外観変化【目立たない教会から目立つ教会へ】

教会堂敷地の変化に関連して、教会堂建築自体の意匠の変化に簡単に触れる。潜伏時期から家御堂時代においては民家の一室を利用して儀式を行っていたため、建物としては民家そのものと考えても大きく違わないとみられる。いわゆる目立たない建築である。なお、家御堂の定義は明確ではなく、諸説あるので、ここでは単に民家の内部を儀式に使用していた程度のものとし、定義の詳細には触れない。

続いて、復活期直後にあたる明治 10 年代の教会堂の時代であるが、民家から分離され、教会堂として建築的に独立した状態ではあるが、意匠的には民家に近い状態で、まだ目立たない、あるいは目立たせたくない建物であるといえる。木造の建物であるが、近くから見れば、民家とは別物と判るが、遠くから見渡した時には、周囲の民家に溶け込むような教会堂である。

さらに時代が進み、建て替えの２代目教会堂以降になると、意匠が本格化し、レンガ造、石造などの教会堂が現われる。出津教会のようにレンガ面を漆喰仕上げで覆い隠していたものから、レンガそのものを表面に現すようになるレンガ造建築が増える。また、設計者の意図がからむが、正面に塔屋を設ける意匠の流行や、外部塗装色を暗色（灰色など）から明色化（青、黄、白、桃など）への変化が見られる。

⑥外観変化の理由【民家風教会から本格的教会へ】

このような教会堂の外観変化の理由であるが、前述の敷地移動と同じ社会的理由に加え、経済的な理由や、設計施工の変化などが考えられる。まず、社会的理由であるが、敷地の場合と同様に、信仰を公に表わせなかった潜伏時代と禁教高札が降ろされた明治６年からそれほど時間の経っていない明治 10 年代では、「目立つ教会」を建てることは困難であると考えられる。その後になり、信教の自由が社会に広く浸透し、カトリックの社会的認知が高まったことで、カトリック信徒であることの誇りと主張が生まれ、教会堂も「目立つ、立派な教会」へ変化していくものと考えられる。次に、経済的理由であるが、北魚目地域では、カンコロ（切干し甘藷）生産の本格化による現金収入の増加に加えて、ツバキの実、シキミの実、薪採取による現金収入の増加がある。また、昭和 30 年代以降の漁業権参入や遠洋船への乗り組みによる現金収入の増加がある。これにより、教会堂建設にかけられる費用にも変化があったと考えられる。さらに、設計施工上の理由として、明治 10 年代頃では大工棟梁から、現場作業まで、外国人神父指導の下で、ほぼ信徒だけで工事を行ってきたとみられるが、鉄川与助（1879～1976）が教会堂建設へ進出したことで、これまでの信徒による直営工事から契約による設計施工者への移行となった。外国人神父指導の一種の直営工事から日本人神父指導（発注）の請負工事への移行となった。建築材料も石、レンガ、コンクリートなどの素材の積極採用を行い、本格教会化、耐久性への考慮をはかることとなった。従来の「資金のあるところまで作る」から「図面に従い、いくらで、いつまでに作る」方針に変わり、いままでの「目立たない教会、信徒手作り的教会、長持ちしにくい教会堂」から「目立つ教会堂、立派な本格的教会堂、長持ちする教会堂」への転換がなされた。

信徒の意識変化から考慮すると、教会堂立地に対しても同様なことがいえ、「目立つこと」に差し障りがなくなったことからの利便性追求を考慮した、「近くで便利な敷地」の選択がなされ、また、道路の整備に伴う変化として、「自動車の乗り入れによる利便性の向上（昭和 40 年代以降）を考慮した敷地」を選択するようになる。教会堂は敷地とともに「目立たない教会、信徒手作り的教会、長持ちしにくい教会堂」から「目立つ教会堂、立派な教会堂、長持ちで便利な教会堂」へ対応する転換がなされた。

（２）教会堂の移動と集落の関係

①カトリック集落と教会堂の精神的な関係【精神的な拠りどころ、高い信仰心】

カトリック信者にとって祈りの場である教会堂はこころの拠りどころであることはどこでも共通している。しかし、その中でも特に北魚目地域におけるカトリック信徒の信仰心の厚さは非常に強いものがある。この信仰心の強い、弱いという状況を数字で表すことは困難であるので、ここでは精神論として扱う。

例えば、台風が集落を襲い、各家屋や教会堂に被害が及んだ場合、自らの家屋などの修理を後にまわし、まず教会堂の復旧に取り掛かることからもここに象徴される。ただでさえ供給不足になる瓦なども、まず、教会堂の復旧にあてられる。また、自分の家は費用をかけないにも係わらず、教会堂の新築には一軒あたり数百万ほどの多額の費用がかける点からもいえることである。時として自分の家に関しては、仏教徒の集落から古屋を買い取り、移築させて費用を抑えることなども行う。それほどまで教会堂に対する思いが大きいところがある。まさに神の家が我が家なのであるといえる。

また、一週間のうちに何度も教会堂に足を運び、儀式、祈り、行事、清掃をおこなう。例えば、江袋集落では、週２回のミサに加え、十字架の道行という祈りがあり、最低でも週に３回は教会堂に足を運ぶことになる。このほかに各当番の仕事も加わる。北魚目地域のカトリック信徒にとっては完全に日常生活の一部として取り込まれていることであり、非常に密接に教会堂とかかわっていることになる。

②教会堂と集落中心の関係　【集落の中心とは】

現在の集落においては、教会堂の建物は集落の中心付近に立地する。この中心という意味には、地図における距離的な中心と家屋が最も集まっている場所、生活における中心という３つの面が考えられる。

家屋が集まる場所を集落中心と考えた場合、現在の北魚目地域の集落においては、おおむね教会堂が集落中心に立地しているといえる。また、海上から見たとき、山の中腹にたたずむ教会堂の姿が象徴的なのも、この地域の大きな特徴のひとつであるといえる。

江袋教会の場合、教会堂が初代の建物を継承していることから、教会堂脇から海あるいは山を結ぶタテ道がのび、教会堂の立地する等高線上に集落をつなぐヨコ道が派生し、このタテ道、ヨコ道の軸が集落の中心軸になっているといえる。江袋集落の場合は教会建設時に意図的に集落中心に教会堂を配置したといえる。しかし、すべての集落が最初から中心部に教会堂を配置したのかというと、必ずしもそうではない。

カトリック信徒の人たちは教会儀式や教会行事のために、たびたび教会堂に集まる。例えば、江袋教会では巡回教会でありながら週に２回のミサと十字架の道行をおこなうため、少なくとも一週間に３回は教会に集まっている。このような日常行事で生活の一部に取り込まれていることから、同じ集落内でも極端に通うことが不便である場合、頭ヶ島や米山のように教会周辺に移り住むことも実際におきている。江袋や大水では教会周辺に空家がうまれた場合、山の高い方など教会から遠い場所に住む人が、空家を買い取ったり、借り受けたりして教会近くに移ることもされている。

このことは、教会堂が集落の中心に位置して建てられたということだけではなく、求心的な役割をはたすことで、家屋が集まってくるため、自身から中心になりうることが顕れていると考えられる。

③初代教会と現在の教会の位置関係

米山教会・・・初代教会は現在の教会堂より高い山の上にあり、距離も直線で約 700m離れている

仲知教会・・・初代教会と現３代目教会は、共に集落中心の近い位置に配置されている

赤波江教会・・初代教会よりほぼ集落中心に配置されている

江袋教会・・・初代教会よりほぼ集落中心に配置されている
大水教会・・・初代教会は現在の教会とほぼ等高線上にあるが、距離は直線で約 200m離れている
小瀬良教会・・初代教会は現在の教会とほぼ等高線上にあるが、距離は直線で約 140m離れている
（詳しくは別表を参照のこと）

④集落中心の移動　【米山教会の移動を例として】

教会堂の移動にともない集落の中心も移動することはありえる。例えば米山教会の場合を考えると、初代にあたる、明治 22 年建築の教会堂は現在の３代目教会堂からすると北東方向に約 700m離れた場所になる。この初代教会堂は 14 年ほど使われた後、２代目教会堂は明治 36 年に標高差で 34m海側に降った敷地に建築されている。さらに、近年の昭和 52 年になり現在の県道脇の場所に３代目教会が建築されている。このように米山教会の場合、教会堂の敷地が建て替えごとに大きく変わっているところに特徴がある。米山集落が開拓されたのは、江袋や仲知のように寛政時代の移住直後からではなく、70 年ほど時間を経た、明治 3 年から明治 10 年頃の移住で、曽根や隣の野崎島の野首などから移り住んだ２次移住であることが教会の洗礼簿から知られる。当初の教会堂の敷地は旧墓地に近く、周辺には家が散在していたことが明治 10 年頃の字図より知られる。しかし、初代教会堂は山の尾根附近の不便地であったこともあり、後に海側に降った２代目教会の敷地が集落の中心的な場所になる。初代教会堂周辺に散在していた家々も徐々に海側の土地に移っていったといわれている。現在の３代目教会堂は県道沿いの道上で、山側に分け入る農道との分岐点に位置し、県道沿いにも、山側からも利便性の高い場所に立地している。ただし、この敷地は地図的な見方をすれば、現在の集落分布からは、やや南に偏った立地であるといえる。

このように、教会堂の動きに伴い、周辺の家屋が移動するということ、あるいは見方を変えて、後から発達した集落の中心近くに移動したということであっても、教会堂と集落中心の関係を考慮した場合、互いに影響力の大きい、大切な問題であるといえる。

上五島・北魚目地域の教会堂



『仲知小教区史』より



米山教会堂

左　２代目教会堂
（明治 36 年建築）
右　３代目教会堂
（昭和 52 年建築）



『仲知小教区史』より



赤波江教会堂

左　初代教会堂
（明治 17 年建築）
右　２代目教会堂
（昭和 46 年建築）



『仲知小教区史』より



仲知教会堂

左　２代目教会堂
（昭和 23 年建築）
右　３代目教会堂
（昭和 53 年建築）



長崎純心大学博物館所蔵



江袋教会堂

左　初代教会堂
（明治 15 年建築）
右　初代教会堂



『仲知小教区史』より



大水教会堂

左　２代目教会堂
（大正 6 年建築）
右　３代目教会堂
（昭和 60 年建築）



『仲知小教区史』より



小瀬良教会堂

左　２代目教会堂
（昭和 26 年建築）
右　２代目教会堂

教会堂の立地と移動　１　　移動の大きな例（米山教会、大水教会）

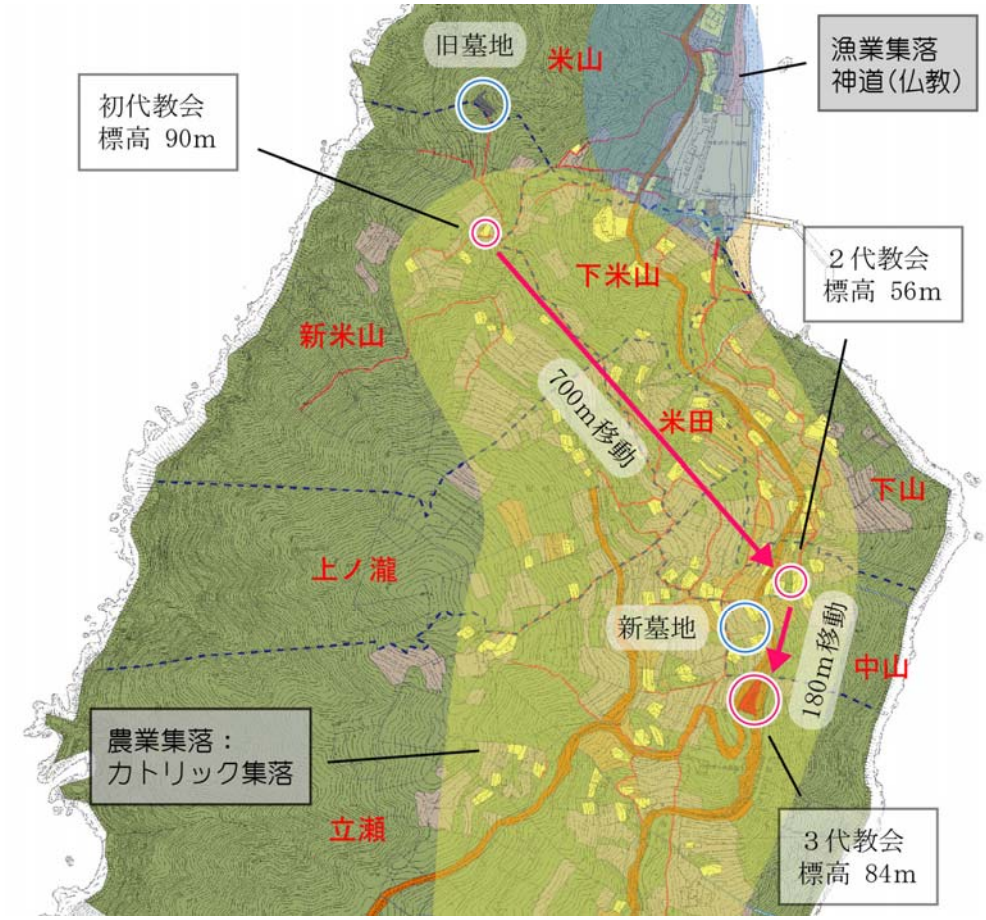


図１　米山教会の移動

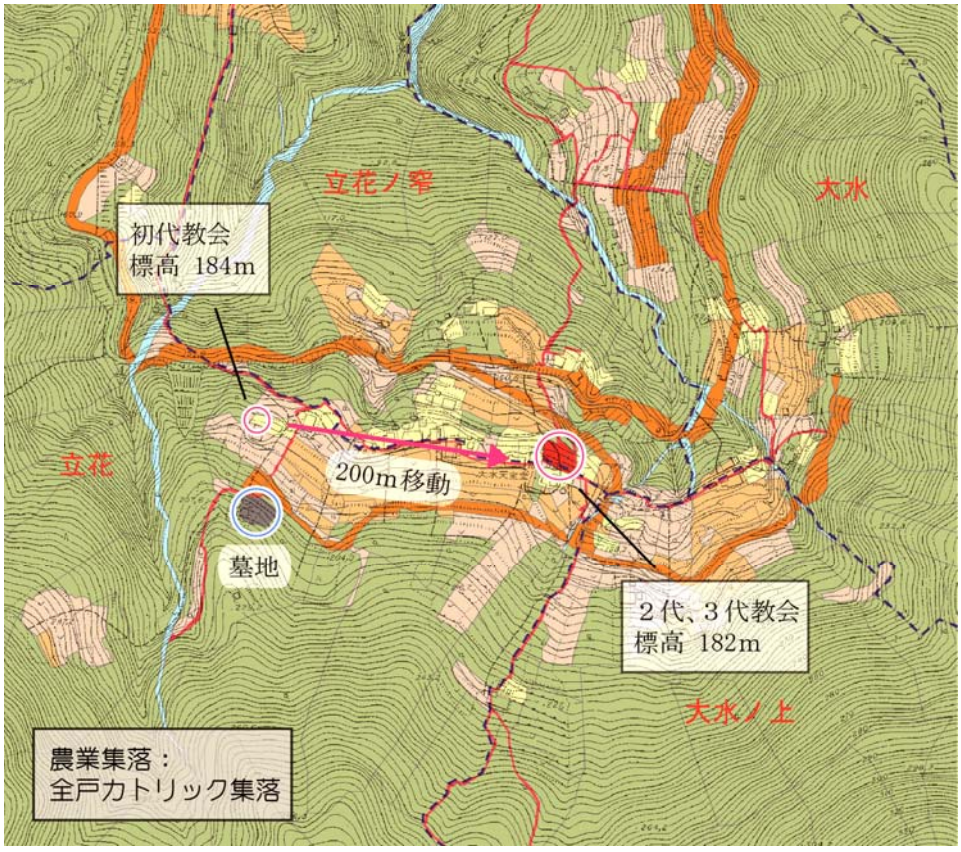


図２　大水教会の移動

教会堂の立地と移動　２　　移動の小さめな例、移動のない例（小瀬良教会、江袋教会）

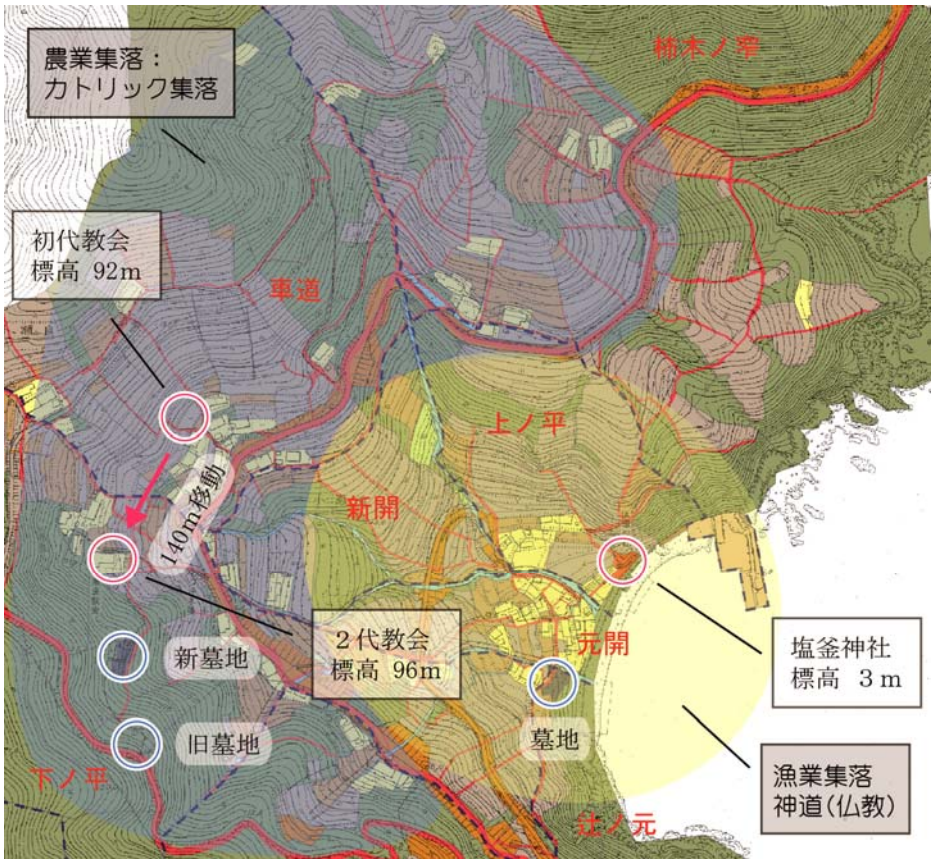


図３　小瀬良教会の移動

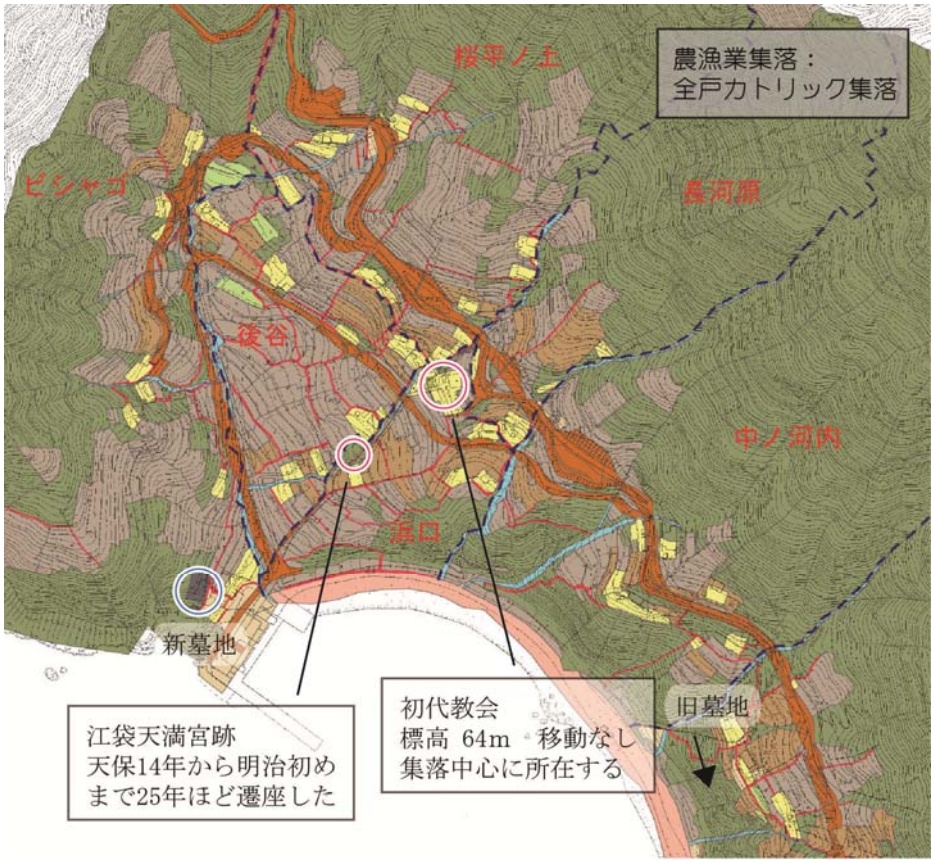


図４　江袋教会の立地

表２　北魚目地域における各時代の教会堂の立地と移動

教会堂名	世代	建築年	構造	所 在 地	立地標高	建 築 立 地 な ど
米山教会堂	初代	明治 22 年	木造	津和崎郷新米山 557	90m 附近	現在の集落からは大きく離れ、山の中で旧墓地に近い
	２代	明治 36 年	木造	津和崎郷中山 584 - 7	56m	現在の県道の道下に移動(山の上から大きく降る)
	３代	昭和 52 年	RC	津和崎郷立瀬 569 - 14	84m	現在の県道沿いで道上に移動
仲知教会堂	初代	明治 14 年	木造	津和崎郷真浦 1018	30m	現在の県道の道下
	２代	昭和 23 年	木造	津和崎郷真浦 1018	30m	初代と同じ場所
	３代	昭和 54 年	RC	津和崎郷真浦 986	56m	現在の県道沿いで道上に移動(修道院と土地を交換)
赤波江教会堂	初代	明治 17 年	木造	立串郷谷坂子 1883	82m	集落内主要道路の道上、中心であるが地形が厳しい立地
	２代	昭和 46 年	RC	立串郷谷坂子 1883	82m	初代と同じ場所
江袋教会堂	初代	明治 15 年	木造	曽根郷浜口 195 - 2	64m	現在の県道の道下(初代から変更なし)
大水教会堂	初代	明治 14 年	木造	曽根郷立花 421 - 2	184m 附近	現在の集落はずれで墓地近く
	２代	大正 6 年	木造	曽根郷立花 411 - 5	182m	現在の集落中心に移動
	３代	昭和 60 年	RC	曽根郷立花 411 - 5	182m	２代と同じ場所
小瀬良教会堂	初代	大正～昭和初期	木造	立串郷車道 1371 - 3 付近	92m	現在の位置よりやや中心を外れる
	２代	昭和 26 年	木造	立串郷樽ノ窪 1351 - 8	96m	現在の集落中心

３．鉄川与助の教会堂建築

長崎県を中心とした教会堂建築はその導入の初期においてはド・ロ神父を始めとする外国人宣教師の指導に多くを負っており、それ以後は五島出身の大工鉄川与助（明治12年１月13日～昭和51年７月２日）の弛まぬ努力によって発展的に展開した。その発展過程は準備・展開・完成・停滞・多様化といった５つの時期に区分できるが、彼は準備期を除く４つの時期において重要な役割を果たした。彼の作品には時期によって大きな差異が見られるため、ここでは前期・中期・後期の３期に分けて述べることにする。まず、前期は発展過程の展開から完成へ至る時期に相当するもので、明治末年から大正初年頃にかけてである。中期は大正時代前半の完成・停滞期及び折上天井の初期出現の時期、そして後期は大正末年から昭和初期頃で、折上天井や鉄筋コンクリート造を中心とした新しい内部空間の創出の時期である。

（１）前期の代表的遺構

①冷水教会堂（長崎県南松浦郡新上五島町）

五島中通島に所在する冷水教会堂は明治40年（1907）にクザン司教によって祝別された。当教会堂は与助が自ら設計施工した最初の遺構である。



写真１　外観（1975）

冷水教会堂は小規模な三廊式の木造教会堂で、単層屋根構成である。内部列柱は四角柱で、列柱上部の柱頭飾は地方の大工の手になるらしく簡素である。植物様彫刻の施されたその形態は旧鯛ノ浦教会堂（明治36年、木造）の柱頭飾に酷似し、また副棟梁的立場で関与した堂崎教会堂（明治41年、煉瓦造、長崎県指定文化財）の柱頭飾にも相通じる。列柱間隔は7.0尺、主廊幅は12.0尺、側廊幅は6.0尺である。



写真２　主廊部（1986）

天井構成は主廊部・側廊部ともに漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井で、全体として緩やかな尖頭アーチを基本に用いている。壁付アーチの高さ（4,235㎜）が極めて低いため、内部空間は圧迫されたようで重苦しい。それはリブが太い上に柱頭の位置が低いことにも起因するが、逆に奥行を感じさせる効果をもたらしている。内部空間の構成方法は未熟で稚拙であるが、与助の教会堂の出発点として貴重な遺構である。



写真３　内部（1986）

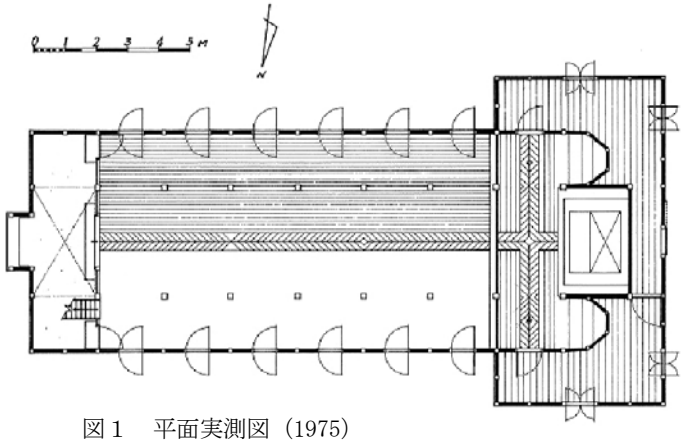


図１　平面実測図（1975）

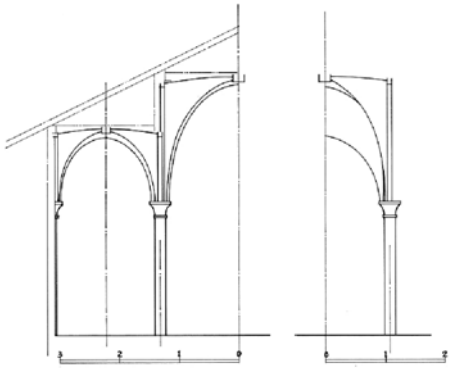


図２　断面図・内部立面図

② 旧野首教会堂（長崎県北松浦郡小値賀町）

旧野首教会堂の所在する野崎島は３つの集落から成っていたが、全信徒は集団離島してしまった。廃堂となって久しく、無人のままで放置されていたため破損の進行は著しかった。小値賀町指定文化財となった後にも台風の被害を受けて悲惨な状態となったが、復原修理によって当時の姿を現わし、長崎県指定文化財となった。野首教会は明治15年（1882）に設立され、教会堂は明治41年（1908）に竣工し、クザン司教によって祝別された。

旧野首教会堂は小規模な三廊式の煉瓦造教会堂で、単層屋根構成である。正面の中央部分がやや前方へ突出して、正立面構成に変化を与えている。屋根上には西欧の城砦に見受けられる胸壁様装飾やユリ花をモチーフとした植物様装飾が設けられている。開口部はすべて尖頭アーチを基調としており、引締った素朴な印象を受ける。主廊幅は13.0尺、側廊幅は6.5尺、列柱間隔は8.3尺である。会堂部が正方形に近いことは教会堂の初期的要素の一つである。内部列柱は円柱で、台座と植物模様の柱頭を有する。主廊部・側廊部ともに漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井であり、内部立面の構成方法は旧鯛ノ浦・冷水教会堂と同様である。

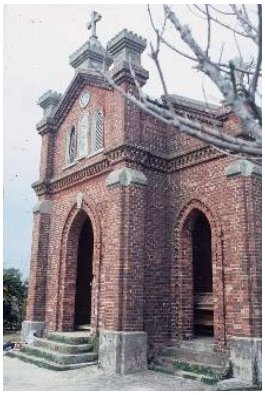


写真４　正面（1988）



写真５　主廊部（1984）

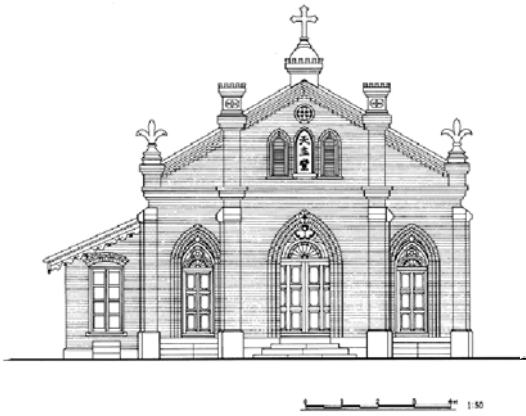


図３　正面実測図（1984）

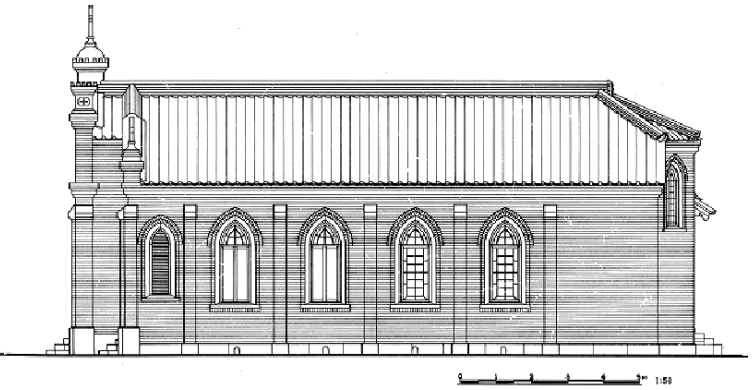


図４　側面実測図（1984）

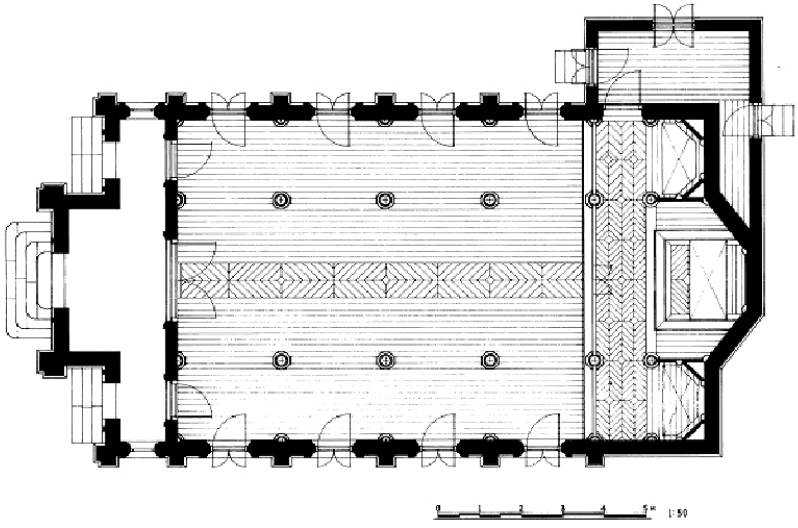


図５　平面実測図（1984）

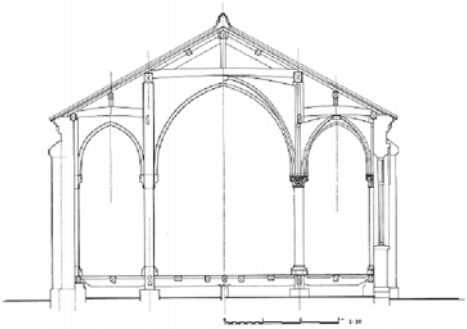


図６　断面実測図（1984）

アーケードや壁付アーチの高さもそれらとほぼ等しいが、列柱間隔は旧野首教会堂の方が約1.0尺大きいため、旧鯛ノ浦教会堂ほどにアーチは急峻ではない。木造と煉瓦造という建築構造の相違が内部空間の構成方法に影響していることが分かる。与助の最初の煉瓦造教会堂としてだけではなく、木造から煉瓦造へと変化しつつある時期の遺構として貴重である。

③青砂ヶ浦天主堂（長崎県南松浦郡新上五島町）

青砂ヶ浦天主堂は古くは「奈摩内天主堂」と称し、明治18年（1885）に設立されたが、現天主堂は明治43年（1910）に竣工し、クザン司教によって祝別された３代目である。

青砂ヶ浦天主堂は煉瓦造で、重層屋根構成である。水平の帯状装飾によって３層に分れた正立面は内部の断面形態をそのまま表出した構成で、美しいプロポーションを有する。中央出入口にある植物模様の石造柱頭は今村教会堂のそれと全く同じデザインである。正面の両脇の控壁には十字形が縦に並ぶように色の濃い煉瓦が使用されている。そこには構造体である煉瓦を意匠的に取扱おうとした意図が窺われる。その考え方は後に大曾教会堂・田平天主堂へと継承されていく。



写真６　（正面）1975

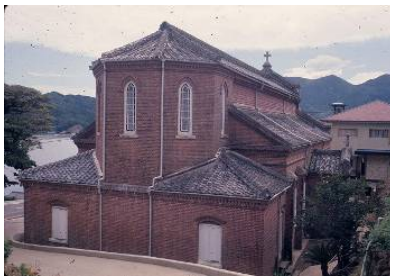


写真７　背面（1975）



写真８　主廊部（1986）



写真９　主祭壇部高窓（1984）



写真 10　内部（1986）

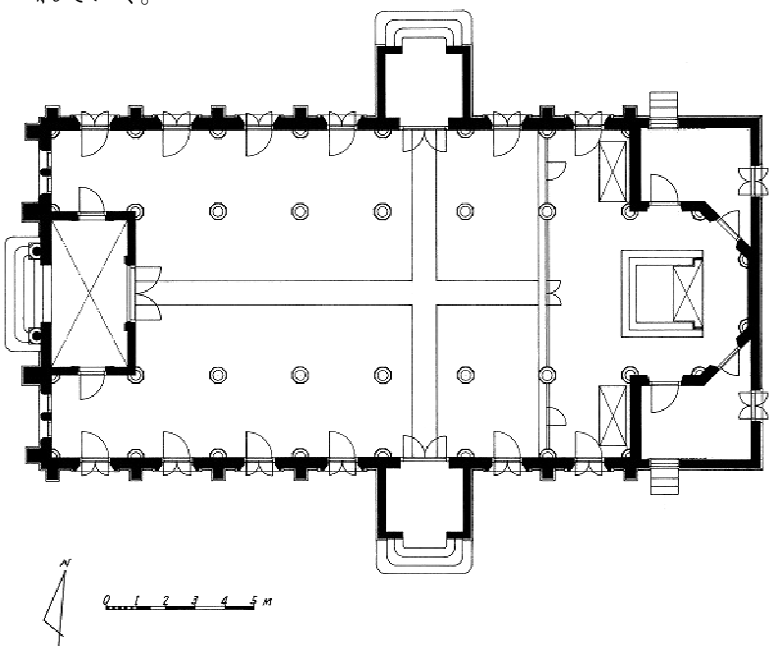


図７　平面実測図（1975）

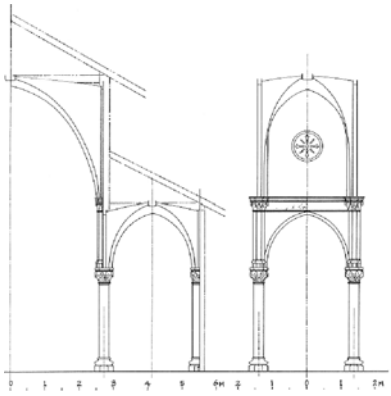


図８　断面図・内部立面図

平面は三廊式で、主廊幅は18.0尺、 側廊幅は9.2尺、列柱間隔は9.2尺である。小屋組は木骨トラス架構で、主廊部・側廊部ともに漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井である。桁の高さ（壁付アー

チの高さ）に対する貫の高さ（アーケードの高さ）は最も高く、柱間寸法に対する貫の高さも最大である。桁の位置や貫の位置を上昇させる際に柱間寸法を小さくしたことは構造的安定を求めた結果と解釈でき、与助の慎重な態度が窺われる。

青砂ヶ浦天主堂ではすべて尖頭アーチを採用しており、さらに壁付アーチの立ち上りが大きいため、整った内部空間構成の中にも一種の厳しさが感じられる。与助の煉瓦造教会堂としては時期的に早いにも拘わらずその形態は美しく整い、空間構成要素もかなり揃っているため、ほぼ完成の域に到達したと言ってよかろう。

④楠原教会堂（長崎県五島市）

楠原教会堂はチリー師の指示の下に明治43年（1910）頃に竣工した。当教会堂はイギリス積の煉瓦造教会堂で、後に内陣部が鉄筋コンクリート造で増改築された。正立面は三廊式の平面形に対応して控壁によって３分されている。重層屋根構成をそのまま正立面の構成に表わしていないため、正面のみが全体の構成から遊離・独立し、正面を飾るという意識が強く感じられる。



写真 11　正面（1983）



写真 12　主廊部見返し（1983）

主廊幅は15.0尺、側廊幅は7.6尺、列柱間隔は第１間は9.0尺、 第２～６間が8.5尺、第７間が6.0尺である。しかし、復原すると会堂部分は５間で、楽廊も脇出入口もない。主廊部・側廊部ともに漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井で、青砂ヶ浦天主堂を全体的に縮小したような遺構である。しかし、の高さと貫の高さを相互に比較すると、楠原教会堂は壁付アーチの位置がはるかに高いため、それだけ垂直性が強調されており、青砂ヶ浦天主堂が発展的に展開したことが分かる。

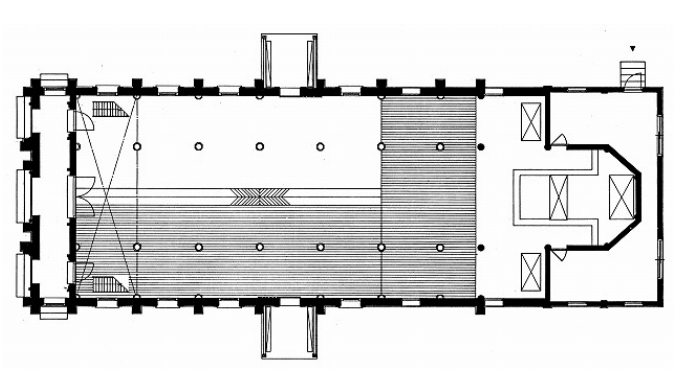


図９　平面実測図（1975）

⑤山田教会堂（長崎県平戸市）

山田教会堂は平戸島の北西にあるカクレキリシタンで有名な生月島にある。明治42年（1909）に着工して明治44年（1911）頃に竣工し、コンバス司教によって祝別された。

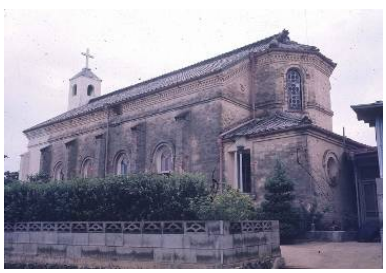


写真 13　外観（1975）



写真 14　主祭壇部高窓（1984）



写真 15　主廊部壁面（1984）

当教会堂は単層屋根構成の小規模な煉瓦造教会堂である。創建当初は正面に塔は存在せず、昭和45年（1970）に増築されたものである。その際に会堂部を前方へ拡張したため、第１間が17.8尺と長い。楽廊も建設当初は存在しなかった。

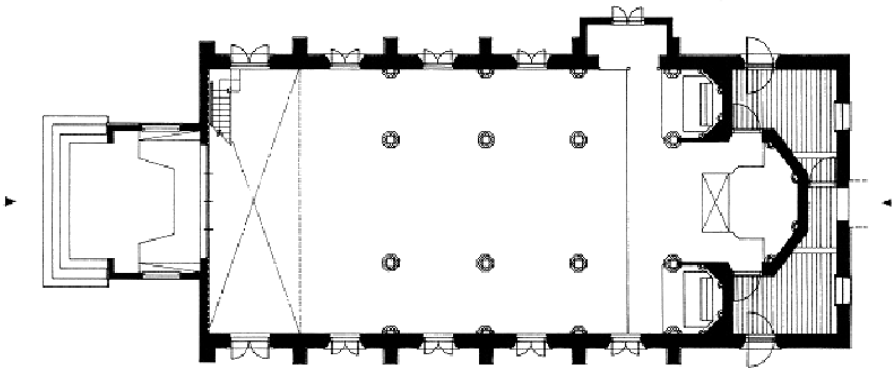


図 10　平面実測図（1975）

平面は三廊式で、主廊幅は12.0尺、 側廊幅は6.7尺、列柱間隔は9.0尺である。増築部分を除くと、会堂幅に比して奥行は浅い。天井は主廊部・側廊部ともに板張り４分割リブ・ヴォールト天井である。列柱は四角柱で、４本の付柱のうち主廊側の１本は柱頭を突き切って上方へ延びている。アーケード・壁付アーチ・横断アーチはすべて円形アーチを基調としているため、堂内にはゆったりとした雰囲気が漂っている。しかし、壁付アーチの頂点の位置が高いにも拘わらず単層屋根構成としたため、側軒の位置が全幅に対して高く、調和がとれているとは言えない。

⑥今村教会堂（福岡県三井郡大刀洗町）

広々とした筑後平野の今村を最初に訪れた宣教師はコール師で、明治12年（1879）のことである。翌13年にはソーレ神父が定住し、明治14年に60坪の教会堂を建設した。その後信徒数が増加したため、第４代主任の本田保神父は明治41年（1908）から新聖堂の建設を計画した。当時の今村の信徒は非常に貧しかったため、本田神父はドイツの布教雑誌の編集者にラテン語で手紙を書き、建設資金の援助を申し入れた。明治45年２月に新築工事に着手したが、基礎工事に費用の大部分を使用したため中途で工事費が不足し、再度読者へ寄付を訴えた。着工以来２年を経た大正２年（1913）12月に172坪の現聖堂が完成した。



写真 16　主廊部立面（1986）



写真 17　主廊部（1986）

今村教会堂は頂部に８角形のドームを戴く珍しい双塔形式である。与助は宣教師の持参した写真や絵葉書を参考にして設計したという。正立面はロンバルド帯によって３層に分れている。第一層で石造のアーチを支持している柱頭の意匠は青砂ヶ浦天主堂のそれと全く同じであり、３連アーチの上方に円形窓を配した意匠は変化して田平天主堂へ継承される。

建築材料については、石材は浮羽郡から、木材は久留米市高良山から入手した。煉瓦は筑後川下流の迎島の５箇所の工場で焼かせた。本田神父と与助は煉瓦を厳しく吟味し、半分は送り返したという。瓦は筑後川下流の城嶋で焼いたものを使用し、西側の棟先飾には「大正元年十月城嶋荒巻製細工人中園久吉」の刻銘がある。ステンドグラスはフランス製で、大部分が創建時のものである。平面は三廊

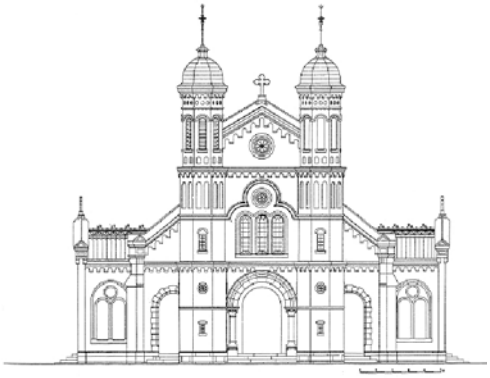


図 11　正面実測図（1966）

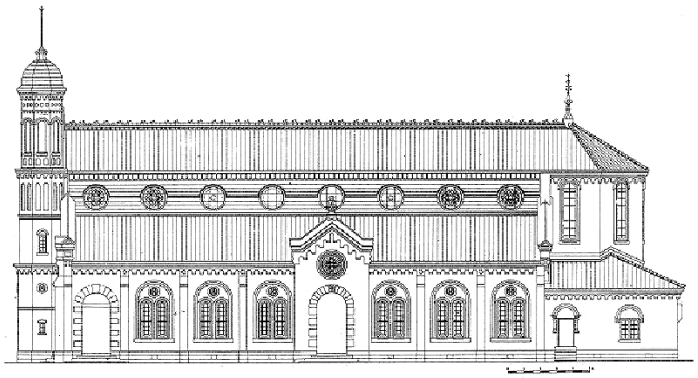


図 12　側面実測図（1966）

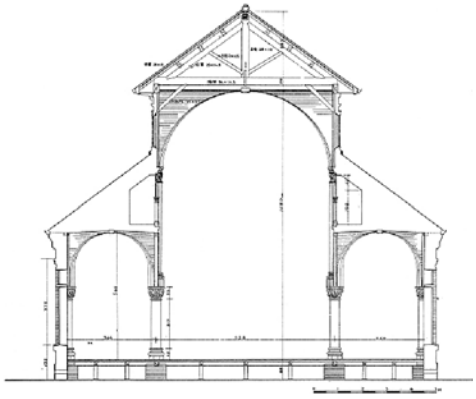


図 13　断面実測図（1966）

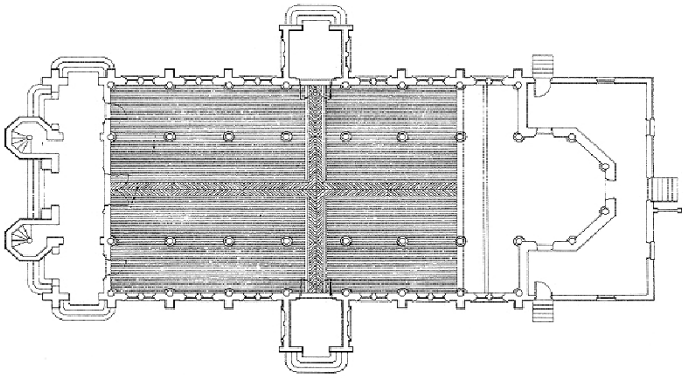


図 14　平面実測図（1966）

式で、主廊幅は24.0尺、側廊幅は12.0尺、列柱間隔は12.0尺である。内部列柱は円柱で、内部立面構成はトリフォリウムを有する完全な三層構成である。アーケードと壁付アーチの高さはリブ・ヴォールト天井を有する教会堂のうちで最大であるうえ、壁付アーチの立ち上りが大きいため垂直性を強く感じる。正面の双塔を除けば、その正立面構成は青砂ヶ浦天主堂に始まるものであり、細部の意匠はさらに大曾教会堂・田平天主堂へと連なるものである。また、完全な三層構成は黒島天主堂（明治35年、煉瓦造、マルマン神父設計）に初めての出現を見るが、今村教会堂は明らかに日本人大工の手によって建設されているため、この遺構を以て教会堂建築の発展過程における完成と言うことができよう。

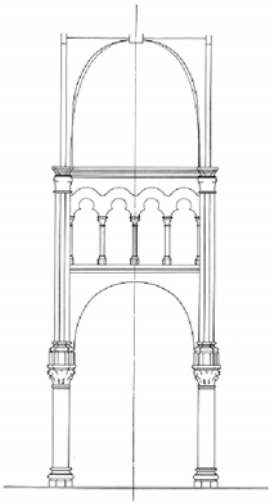


図 15　内部立面図

⑦前期の建築的特徴と意義

前期の作品として明治40年の冷水教会堂から大正２年の今村教会堂までの６棟を取り上げた。形態的な特徴としては、正立面は三廊式平面を外観に明確に示した構成で、玄関部が前方へ突出せず、鐘塔を設けない。煉瓦造が主流であり、また構造的に最も強固なイギリス積が採用されている点は、煉瓦造の壁体が構造体として認識されていたことを意味している。しかし、青砂ヶ浦天主堂の控壁に見られる煉瓦の装飾的な使用は、後に意匠材としても認識される兆候と理解できる。この時期は、教会堂建築の展開期であり、屋根構成としては単層と重層とがほぼ同数で混在し、主廊幅は側廊幅の２倍である。つまり教会堂建築が完成の域に到達しつつある段階を示している。展開から完成に至る過程が前期の大きな特徴であるが、この時期の代表的な三廊式教会堂８棟の内６棟が与助の作品であるこ

とから、教会堂建築の発展過程において彼の果たした役割の重要性が認識できる。さらに、その内の５棟が煉瓦造であることから、教会堂建築を完成に至らしめるには煉瓦造で構築することが必要であったことも理解できる。それはまた、木造の江上天主堂が煉瓦造の今村教会堂の後に建設されたことでも実証できる。

一方、与助は内部立面構成と深い関係を有する桁の高さと貫の位置とを注意深く取り扱った。冷水教会堂から旧野首教会堂への移行においては、貫の高さも桁の高さも増大させているが、それは木造を煉瓦造に置換させることによって可能となった。次に、旧野首教会堂から山田教会堂にかけては、貫の高さは低くなっているが桁の高さと列柱間隔は大きくなっている。彼は構造的安定を確認するかのように、徐々に桁の位置を上昇させてきたのである。

確かに今村教会堂は完成された作品であるが、青砂ヶ浦天主堂においてすでに形態的には完成している。つまり青砂ヶ浦天主堂は構成要素として不備な点を有しつつも正立面の構成は素晴らしく、今村教会堂に劣っているとはいえない。今村教会堂の双塔は旧浦上天主堂（煉瓦造、フレノ神父設計、大正３年）の影響を強く受けており、双塔を除けば堂崎教会堂（煉瓦造、明治41年）を始めとする煉瓦造教会堂の流れの中に位置している。このことは与助が独自の作品に到達するまでの一つの通過点に過ぎないことを意味しているとも言えよう。このように彼の作品は常に試みの連続であり、それが今村教会堂の建設を可能にしたのである。完成された遺構を単に模倣しさえすれば完成への道は近かったであろうが、彼は近道を選ばなかったのである。

（２）中期の代表的遺構

①旧大水教会堂（旧所在地：長崎県南松浦郡新魚目町大水）

大水教会は明治14年（1881）に設立され、旧教会堂は大正６年（1917）10月に竣工したが、前年にはすでにコンバス司教によって祝別されている。



写真１　外観（1984）



写真２　主廊部（1984）



写真３　主祭壇部高窓（1984）

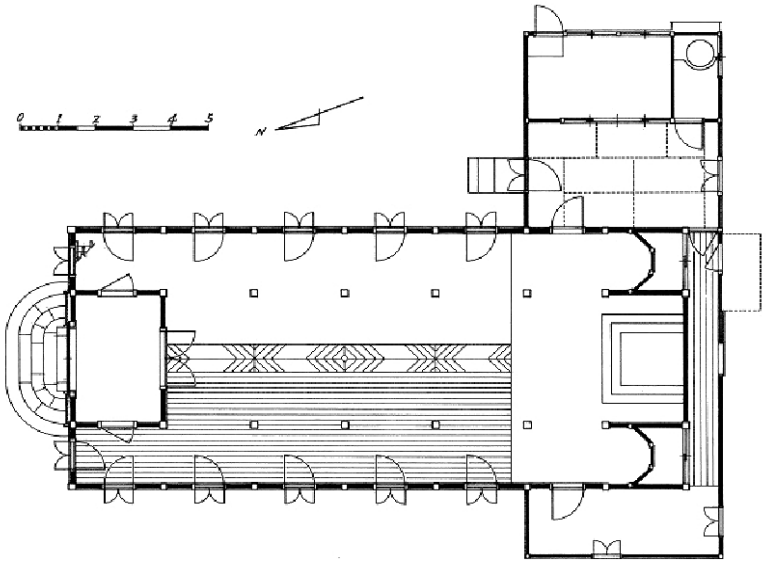


図１　平面実測図（1975）

旧大水教会堂は木造、桟瓦葺、下見板張りの簡素で小規模な教会堂である。単層屋根構成を有し、鐘塔はない。会堂内では祭壇に向かって左側が「男子礼拝所」、右側が「女子礼拝所」と定められており、分離された男女の着座位置と正面左右の出入口とが対応している。平面は三廊式であり、主廊幅は12.0尺、側廊幅は6.0尺である。内部列柱は四角柱で、列柱間隔は玄関部と会堂部４間が8.0尺、内陣部２間が7.0尺である。会堂部は当初板敷で、後に畳

敷に変更され、坐式であった。

当教会堂の最大の特徴は主廊部の折上天井構成にある。柱頭上に露出した貫（胴差）・小壁・柱頭・小壁を設け、その点から斜めに直線的に折り上げた上でさらに箱状に折り上げて板張り平天井とする。他に類例は存在しない。折上天井は大正末頃にその全盛期を迎えるが、当教会堂は与助にとっては主廊部に折上天井を用いた最初の遺構である。それは、木造の旧細石流教会堂や鉄筋コンクリート造の手取教会堂へと、建築材料の相違にも拘らず連続していく。

折上天井構成を日本の伝統様式が土着化したものとする見方もあるが、その出現から変化の過程を考察すると、その構成は屋根構成との関係上リブ・ヴォールト天井で構成し得なかった部分を直線に置換させたものであり、洋風の意匠と言うべきであろう。旧大水教会堂は全体として簡素ながらも、円形アーチの窓の繊細な意匠や軒天井飾りなど、細部にまで配慮が行届いた遺構である。

②大曾教会堂（長崎県南松浦郡新上五島町）

最初の大曾教会堂は明治12年(1879)に青方郷裏迫に木造で建設されたが、大正４年（1915）に土井ノ浦教会堂として移築された。現教会堂は大正５年８月６日にコンバス司教により祝別されたが、建築には３年、総建築費は12,000円を要した。色ガラスは西ドイツ製で、煉瓦は早岐から、瓦は城島から仕入れた。柱頭の彫刻は与助の父与四郎の手になる。



写真４　正面（1975）

大曾教会堂は煉瓦造で重層屋根構成を有する。小屋組はトラス架構で、開口部はすべて円形アーチを用いている。正面中央部は大きく３層に分れ、最上層は８角形のドームを戴いた鐘塔となっている。各層の上端部には色の濃い煉瓦の凹凸による帯状の装飾が付されている。正立面の全体的構成は最も完成された形態を有する田平天主堂に酷似しているため、その原型と言うことができる。また、ドームを戴いた鐘塔が前方へ突出する構成方法は、頭ヶ島天主堂・手取教会堂へと継承されていく。与助は今村教会堂において形態的完成を成し遂げたが、彼独自の教会堂建築の創出へ向けてさらなる一歩を踏み出した。



写真５　主廊部（1987）



写真６　主祭壇高窓部（1984）

当教会堂では褐色と黒味がかった２種類の煉瓦を規則的に用いている。構造的に最も強固で経済的であるイギリス積を基本としつつ、部分的に小口積を混用している。小口積の帯や基礎・軒飾り部分などは大きな平坦な周壁にアクセントを付与しており、煉瓦造の壁体を単に構造材としてではなく意匠材としても把えようとした与助の設計態度が窺える。



写真７　側面窓（1986）

平面は三廊式で、主廊幅は14.0尺、側廊幅は8.0尺、列柱間隔は9.0尺である。会堂幅に対する会堂長さは過去の与助の遺構の中で最大である。会堂部が徐々に長大化していることが分かる。時期的に近接した山田・楠原教会堂と桁の高さ・貫の高さ・列柱間隔について比較すると、柱間寸法に対して貫の位置が高くなっており、それ以上に桁の位置が上昇したことが分かる。視覚的にも実際にも、つまり相対的にも絶対的にも、天井がより高く構築されたことを示しており、与助の弛

みない試みと見ることができる。主廊部・側廊部ともに漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井で、主廊部壁面はトリフォリウムも高窓も存在しない簡素な構成であるため、徐々に簡略化へ向かう過程の遺構として位置づけるべきであろう。

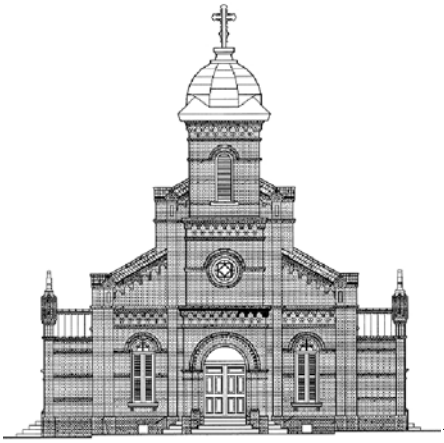


図２　正面図（文建協 2009）

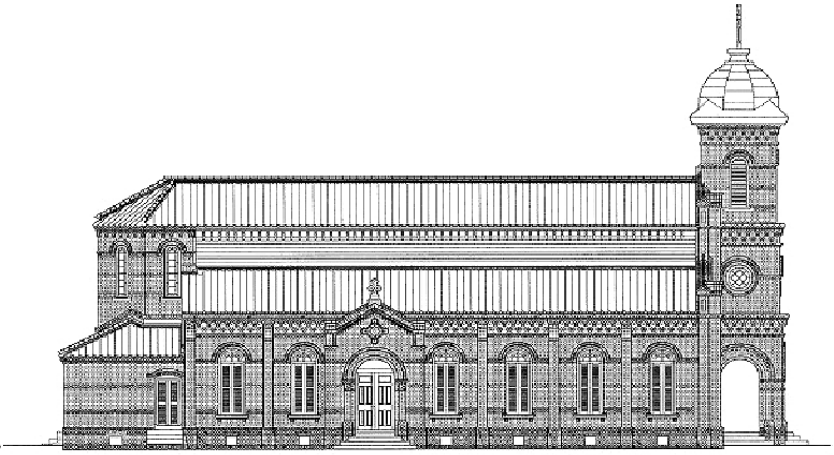


図３　側面図（文建協 2009）

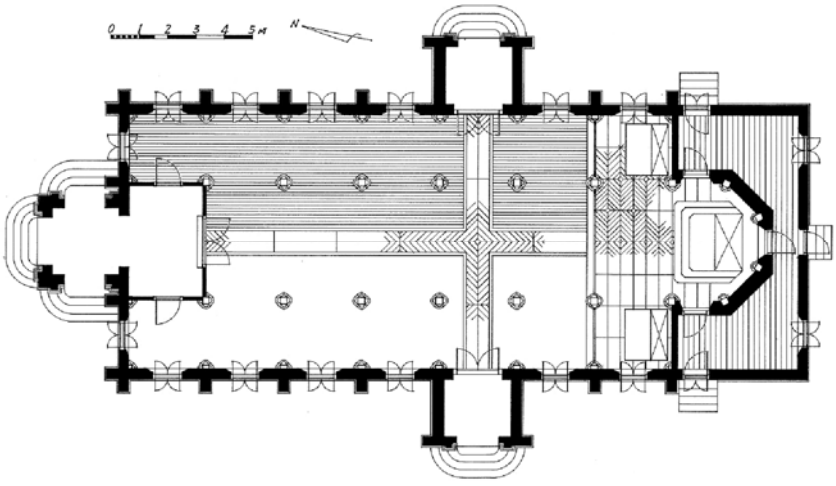


図４　平面実測図（1975）

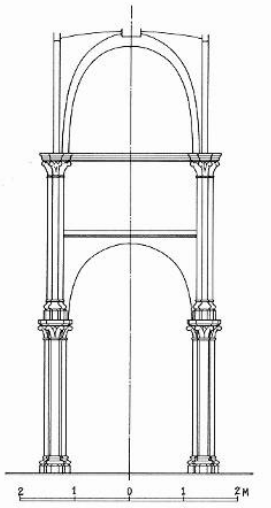


図５　内部立面図

③江上天主堂（長崎県五島市）

江上天主堂は大正６年（1917）４月に竣工し、コンバス師によって祝別された。木造の教会堂でこれ以上に完成された形態を有する遺構は他に存在しない。江上天主堂は安定した重層屋根構成を有し、内部の空間構成をそのまま正立面の形態に表わしている。外壁は下見板張りで、周囲に巡らされた軒天井飾りは当天主堂に繊細で柔和な雰囲気を与えている。正面に鐘塔はなく、小屋組は箱金物を使用した木骨トラス架構である。平面は三廊式で、主廊幅は12.0尺、側廊幅は7.4尺、列柱間隔は8.0尺で

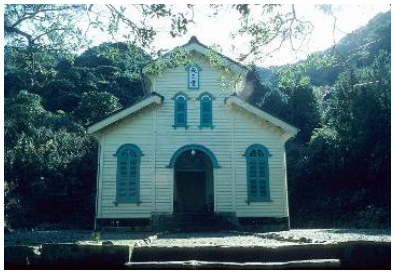


写真８　正面（1983）



写真９　正面（1975）



写真 10　主廊部（1975）

ある。主廊部・側廊部ともに漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井で構成され、内部列柱は円柱である。アーケードの頂点の位置には、「疑似トリフォリウム」とでも呼ぶべき装飾帯が主廊部の壁面を巡っている。柱頭は植物を意匠化したもので、円柱・リブ等の木部はすべて刷毛で木目が描かれている。壁付アーチの高さ（6,358㎜）に対するアーケードの高さ（3,728㎜）の比の値は0.59で、この値は煉瓦造の山田教会堂（0.60）・楠原教会堂（0.57）に近似している。このことは貫の相対高さが低いことと、敷桁の相対高さが高いことを示している。木造でありながらもこのような値を採り得たのは、完成期を経た後の遺構であるからであろう。



写真 11　主廊部立面（1983）

与助がリブ・ヴォールト天井を有する教会堂を設計したのは、木造では冷水教会堂が最初で、江上天主堂がそれに次ぐ。その10余年間には６棟の煉瓦造教会堂を建てた。教会堂建築の発展過程をみると、教会堂を形態的に完成させるためには煉瓦造で建設することが重要であったことが分かるし、そのことが木造における完成を導いた点を指摘することができる。

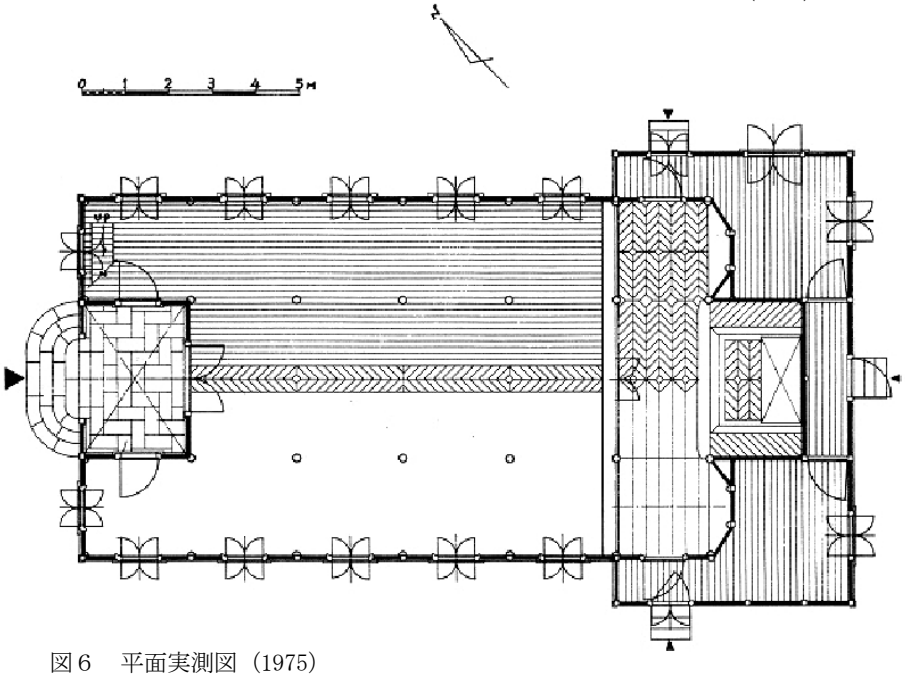


図６　平面実測図（1975）

④田平天主堂（長崎県平戸市）

田平天主堂は煉瓦造の大規模な教会堂で、当時長崎教区では旧浦上天主堂・旧中町教会堂（煉瓦造、明治29年）に次ぐ規模を誇っていた。明治38年（1905）に片岡高俊神父が田平の地に定住した。信徒数の増加により、片岡神父は新聖堂建設の準備に着手した。片岡神父の後を継いで中田藤吉神父が着任し、大正４年（1915）12月頃にはすでに着工していたが、完成は予定よりも遅れ、大正７年（1918）５月４日にコンバス司教によって献堂式が挙行された。



写真 12　正面（1985）



写真 13　外観（1985）

田平天主堂は重層屋根構成で、前方へ突出した正面中央部は大きく３層に分かれ、頂上には８角形のドームを架している。各層の上端部には色の濃い煉瓦の凹凸による軒先飾りを設けて壁面に変化を与えているが、その意匠構成は大曾教会堂と同様である。基礎や窓のアーチ等に石材を使用したり、色の相違する２種類の煉瓦を規則正しく混用しており、煉瓦の凹凸だけでなく色による変化をも試みている。それは積層のリズムと

考えることもでき、明らかに壁面が意匠化されたことを示している。従来用いられていたロンバルド帯や鋸歯状飾りなどは煉瓦の壁面からの突出によって形造られたものであるが、ここでは同一壁面上における煉瓦の色や組積法の相違によって形成される装飾へと変化している。



写真 14　主廊部（1985）



写真 15　トリフォリウム（1984）

平面は三廊式で、主廊幅は20.1尺、側廊幅は11.0尺、列柱間隔は12.0尺である。会堂幅に対して会堂部の奥行が深い。木骨トラス小屋組であり、主廊部・側廊部ともに板張り４分割リブ・ヴォールト天井で構成されている。内部立面は最も完成された構成をなし、内部列柱に付された半円形の付柱のうち主廊側の１本が柱頭を突切って上方へ延びている。そのため垂直方向への上昇性が強く感じられる。側廊部の小屋部へ奥行を有する完全なトリフォリウムを備える教会堂は非常に少なく、他には黒島天主堂（明治35年、マルマン神父設計、煉瓦造）と今村教会堂とにその例を見るのみである。当天主堂の桁の高さ（10,233㎜）は今村教会堂（11,480㎜）・黒島天主堂（10,449㎜）に次ぎ、貫の高さ（4,855㎜）は今村教会堂（5,470㎜）・黒島天主堂（5,267㎜）・旧大名町教会堂（5,247㎜、煉瓦造、解体復原後移築、雪の聖母聖堂、福岡県久留米市指定文化財）に次ぐ。強い垂直性を感じさせ、完成された形態を有しているが、教会堂建築の完成は大正２年の今村教会堂に置くことができるため、当天主堂は時期的には停滞期の作品に含まれる。しかしながら、今村教会堂とは異なった正立面の構成が次期の鉄筋コンクリート造教会堂へと継承されている点を考慮すると、与助が停滞の中にも次作へと連なる試みをなしている点を高く評価すべきであろう。

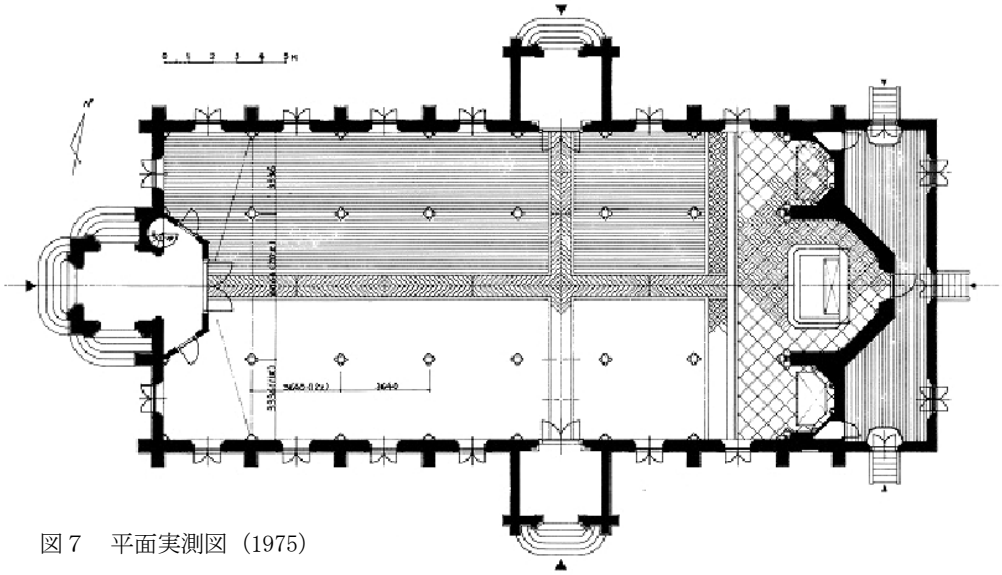


図７　平面実測図（1975）

⑤頭ヶ島天主堂（長崎県南松浦郡新上五島町）

頭ヶ島は五島中通島の東方にある小さな島である。現在は空港が建設されたために鉄橋が設けられ、交通の便は良くなった。天主堂は島の東側に所在するため、以前は漁船を雇って島の反対側へ回らねばならなかった。頭ヶ島天主堂は10年以上もの歳月をかけて大正８年（1919）に隣接する司祭館（石造）と同時に竣工し、同年５月14日にコンバス司教により祝別されている。



写真 16　外観遠望（1984）

頭ヶ島天主堂は7.2×15.5mほどの小さな矩形の単廊式平面で、

単層屋根構成である。石造の教会堂は珍しく、長崎県下では他に大野教会堂（明治26年、ド・ロ神父設計、国指定重要文化財）が存在するのみである。当天主堂は1,214×300㎜の粗石積み（ルスティカ）であり、大野教会堂はド・ロ積みである。頭ヶ島天主堂は内部の空間構成を最大の特徴とする。天井は側壁面の中途から始まる二重の持送りによって折り上げられた擬似ハンマー・ビーム架構である。与助は何らかの機会に類似の建築の写真を目にし、それを当天主堂に試みたのであろう。彼の設計になる他の教会堂とはかなり異質のものである。

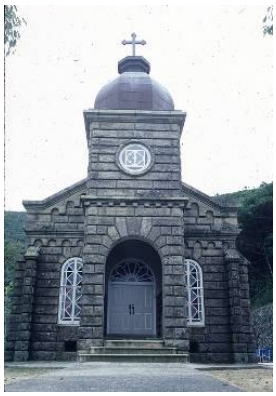


写真 17　正面（1986）

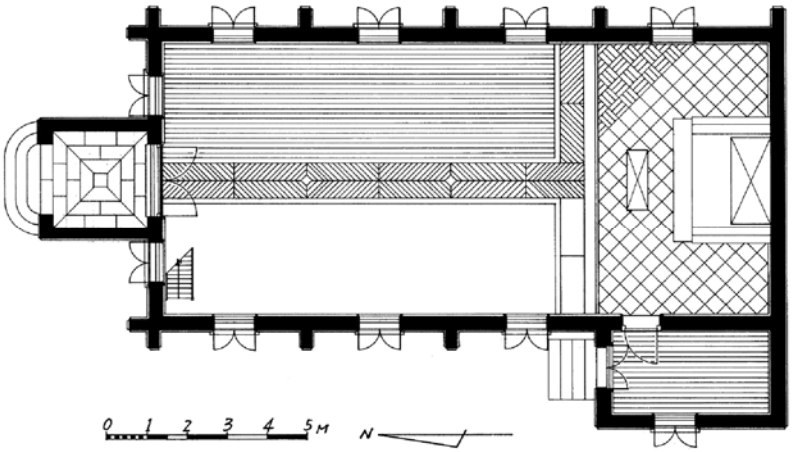


図８　平面実測図



写真 18　内部（1984）

持送りの三角形の部分や天井折り上げ部分、及び板張り平天井部分には花柄を基調とした装飾が施されている。それらは持送りの曲線ともうまく調和し、堂内は華やいだ明るい雰囲気に満ちている。各部に付された花柄の装飾は彼の設計した他の教会堂にもよく見受けられる。

頭ヶ島天主堂の正面中央の鐘塔の形態は大曾教会堂・田平天主堂と酷似し、さらには紐差教会堂・大江教会堂へと連続するものである。しかしながら、内部の構成方法は彼の一連の作品とは意匠的にもかなり相違しており、単に建築材料の相違とだけは言い切ることができないものがある。教会堂建築を完成へと導いた鉄川与助による新しい空間創造の記念碑的遺構と言えよう。

⑥中期の建築的特徴と意義

中期の作品として大正５年の旧大水教会堂から大正８年の田平天主堂までの５棟を取り上げた。形態的特徴については以下の２点に集約できよう。

まず第１点は、煉瓦造の壁面が意匠的に取り扱われている点である。幾つかの煉瓦造教会堂の壁体の組積法について述べると、大浦天主堂と出津教会堂では煉瓦壁の表面に漆喰を塗って、煉瓦の表面を見せていない。このことは煉瓦が意匠材ではないことを意味する。漆喰仕上げを施したのは、内部の煉瓦の劣化を防ぐためか、または未だ煉瓦を見せることに抵抗を感じていたからであろう。旧井持浦教会堂・堂崎教会堂のアメリカ積は壁面を飾る一種の意匠とも解釈し得る。黒島天主堂はイギリス積だが煉瓦の色や大きさは一定していないため、外壁面を特に入念に仕上げるという意識は感じられない。旧野首教会堂もイギリス積であるが、外壁の表面の縦目地は美しく整っている。フランス積を一部に採用した唯一の遺構として福見教会堂が挙げられる。フランス積は外観は美しいが、壁体内に芋目地ができて弱くなるために余り採用されないのであろう。大曾教会堂・田平天主堂の煉瓦造壁体の組積法については既述した。

現存する16棟の煉瓦造教会堂の内７棟が与助の設計になるが、彼は主としてイギリス積を採用した。イギリス積は最も丈夫で経済的な組積法であるため、彼は最も堅実な方法を選んだと言える。そこに

彼の信条の一端を窺うことができる。しかし、彼にとって煉瓦壁はいつまでも単なる構造体ではなかった。煉瓦の凹凸のみで壁面を飾るのではなく、平坦な壁面を煉瓦の色や組積法の変化で飾ることを試み、小口積も採用した。イギリス積を基本とすることによって構造的に弱めることなく、アメリカ積の有する積層のリズムにヒントを得、壁面に変化を与えたのである。これは煉瓦壁が明らかに意匠材として認識されたことを示している。

第２点は、教会堂の正面中央部にドームを戴いた鐘塔が突出して設けられた点である。正面中央部を方形に突出させて３層に分け、初層を玄関部、第２層を楽廊の一部、最上層を鐘楼とする。頂上には十字架を頂く８角形のドームを架す。中期に至るまで鉄川与助は正立面を平坦に仕上げた。今村教会堂では左右に双塔を設けたが、形態的には青砂ヶ浦天主堂の延長線上に位置する。彼は大曾教会堂で初めてこの構成を試み、田平天主堂でそれを確固たるものとした。内部立面構成は今村教会堂と同様であるが、正立面の構成方法は頭ヶ島天主堂・手取教会堂へと継承されていく。建築材料が相違してもこの構成方法は変化しなかった。この点に、彼が求めた教会堂建築の姿があると言えよう。

（３）後期の代表的遺構

①旧細石流教会堂（旧所在地：長崎県福江市猪木町細石流）

旧細石流教会堂は大正９年（1920）に竣工したが、昭和50年（1975）にはすでに廃堂となっており、訪れる人もなく、ついに朽ち果ててしまった。

当教会堂は木造で、単層屋根構成を有する。正面中央上部には円形の擬似窓（いわゆる盲窓）と２連の円形アーチ縦長窓を付す。玄関部の３箇所の出入口にはいずれも三角形のペディメントがあり、



写真１　正面（1975）



写真２　正面（1990）



写真３　主廊部（1975）



写真４　主廊部側面（1990）

花柄と植物模様が刻まれている。中央出入口だけには、柱頭及び台座を有する円柱がある。彼の他の作品とは異質な正立面の構成である。主廊部・側廊部ともに折上天井で、主廊幅は12.0尺、側廊幅は6.7尺、列柱間隔は9.0尺である。内部列柱は円柱で上方が幾分細まっており、簡素な柱

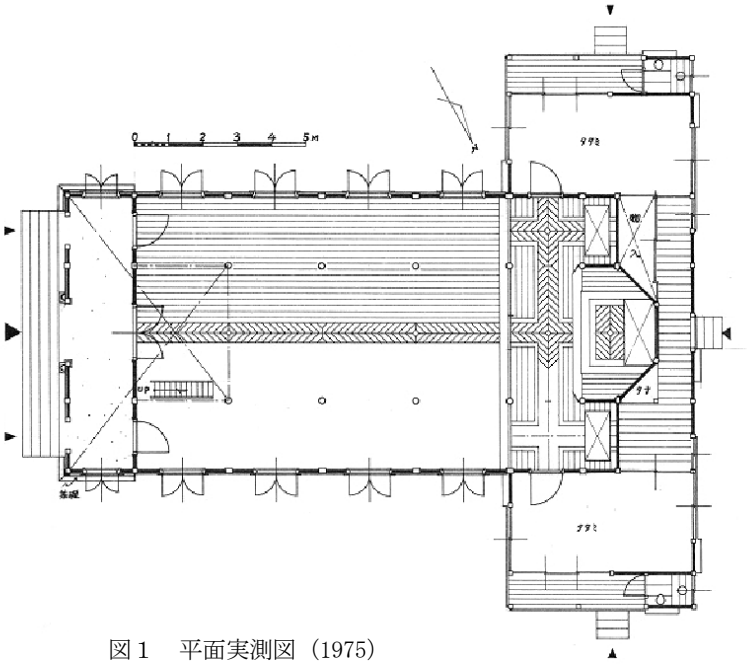


図１　平面実測図（1975）

頭の上部には簡単な刳形を施された水平材がある。さらに上方は矩形の小壁となって折上天井に達する。小壁面や折り上げ部分には菱形の中に花を意匠化した彫刻が施されている。平天井部分には、各柱間の中央に花柄を十字架風にデザインした装飾がある。

折上天井構成は明治初期の旧立谷教会堂（木造、明治15～20年頃と推定、旧所在地：長崎県南松浦郡玉ノ浦町立谷）の側廊部に初めてその出現を見るが、主廊部に出現したのは旧米山教会堂（木造、明治36年、長崎県南松浦郡新魚目町津和崎郷米山）が最初である。大正後半期を全盛期とするその頂点にあるのが旧細石流教会堂で、折上天井構成は与助の新しい内部空間創造の試みによって確固とした位置を占めることになった。

②手取教会堂（熊本県熊本市）

手取教会堂は熊本市街地に所在し、以前は「熊本教会」と称した。明治22年（1889）に創立され、昭和３年（1928）12月に新築された。当教会堂は与助にとっても長崎県地方においても、最初の鉄筋コンクリート造教会堂である。



写真５　正面（1974）

正面と塔の四面には水平の溝が刻まれ、まるで石造のように見える。類例としては、旧福岡県庁舎（大正４年、煉瓦造）や旧山口県庁舎（大正５年、煉瓦造、国指定重要文化財）があげられる。国宝大浦天主堂が煉瓦造でありながら、構造体である煉瓦を隠している点と共通し、そこには明らかに石造の優位性が存在する。正面中央部は３層に分かれ、各層の上部にはロンバルド帯を付す。鐘塔頂部には８角形のドームを架し、その形態は大曾教会堂・田平天主堂・大江教会堂へと継承されている。



写真６　主廊部（1974）



写真７　内陣部天井（1984）

平面は三廊式で、主廊幅は20.1尺、側廊幅は8.0尺、列柱間隔は11.0尺である。

当教会堂の特徴は、鉄筋コンクリート造で初めて折上天井を採用した点である。内部列柱は円柱で、植物模様の柱頭から伸びた四角柱は主廊部の梁を支持する。また、アーケードの上部は長方形の小壁となり、花柄をあしらった薄肉彫が施されている。

小壁の上端を折り上げの起点とし、平天井面へと続く。菱形や矩形の中に施された薄肉彫には、花弁のみが彩色されている。堂内は白色を基調として統一され、その中に咲く淡い花は、ほんのりとした温か味を与え

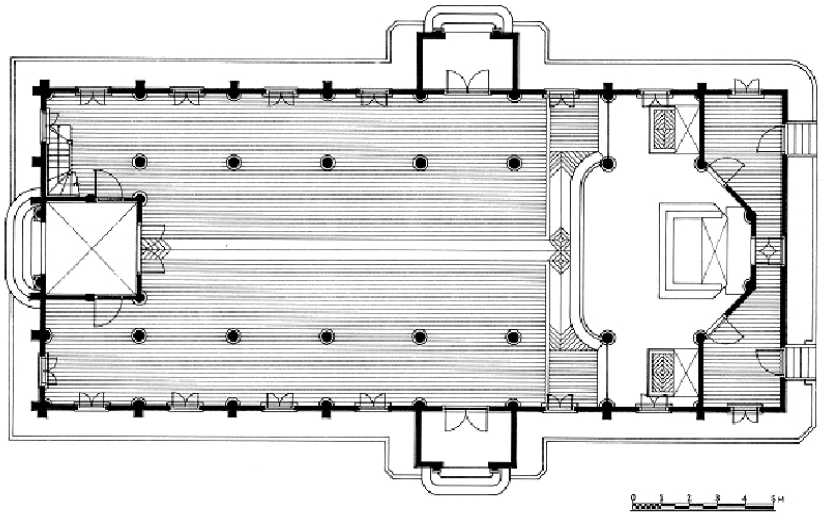


図２　平面実測図

ている。天井面の太い格縁は基本的には構造材であるため、当教会堂では構造材が会堂内に露出したことになる。そもそもリブ・ヴォールト天井や折上天井は全くの意匠であり、構造とは無縁のものであった。これに対し、与助は新しい構造を採用するに際して、構造と意匠の一体化という新たな試みをなした。それは戦後の新しい内部空間の形態へと受け継がれていく。その先駆的作品として手取教会堂の有する意義は大きい。

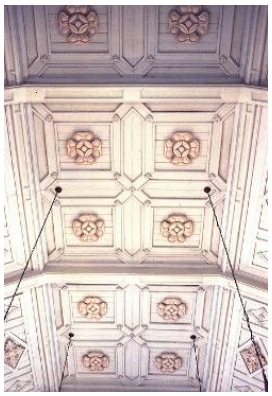


写真８　主廊部天井（1984）



写真９　主廊部立面（1984）

③紐差教会堂（長崎県平戸市）

紐差教会堂は昭和２年（1927）８月に着工され、翌４年10月に竣工した。当教会堂は平戸島に存在する鉄筋コンクリート造の巨大な教会堂で、東洋一と言われた旧浦上天主堂（煉瓦造）が原爆によって倒壊した後は、日本最大の教会堂と言われた。重層屋根構成で、正面には８角形のドームを戴く鐘塔があり、実に堂々としている。

三廊式平面で、主廊幅は24.0尺、側廊幅は12.0尺、列柱間隔は12.0尺である。長崎県地方の教会堂建築で主廊幅が最大であるのは、黒島天主堂（煉瓦造）・今村教会堂（煉瓦造）・紐差教会堂で、すべて24.0尺である。それに次いで三浦町教会堂（鉄筋コンクリート造、22.5尺）・水の浦教会堂（木造、21.2尺）・大浦天主堂（煉瓦造・旧木造、20.2尺）・田平天主堂（煉瓦造、20.1尺）がある。従って、規模を大きくするために鉄筋コンクリート造を採用したとは必ずしも言えない。



写真 10　正面（1985）



写真 11　外観（1985）



写真 12　主廊部（1985）

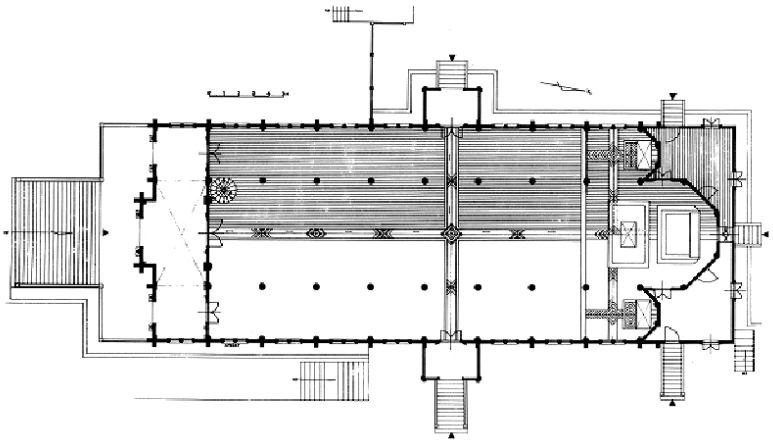


図３　平面実測図（1975）



写真 13　側廊部天井（1985）

主廊部は俗に「舟底天井」と呼ばれる折上格天井で、側廊部は平天井である。鉄筋コンクリート造の柱や梁を内部空間に顕わにしており、強壮である。しかし、各格間には幾何図形の中に花柄や木の葉模様が彩色を施されて描かれており、空間の緊張を和らげている。図柄は頭ヶ島天主堂を始めとする彼の作品の多くに見られるもので、彼独自の装飾法の特徴と言えよう。

④大江教会堂（熊本県天草市）

大江教会の創立は明治13年(1880)で、現教会堂は昭和８年(1933)４月に新築された。長崎県地方では、鉄筋コンクリート造教会堂は昭和３年の手取教会堂に初めての出現を見、昭和４年に１棟、５年に１棟、６年に４棟、と時期的に集中している。当教会堂は鉄筋コンクリート造の初期出現の最後を飾る教会堂である。

単層屋根構成を有し、正面玄関部の中央上部は鐘塔となる。頂部には８角形のドームを架し、その形態は手取教会堂・紐差教会堂と酷似している。軒先に設けられた簡素な刳形が建物の四周を巡り、



写真 14　外観（1982）



写真 15　側面（1990）



写真 16　主廊部（1982）



写真 17　主廊部天井（1984）

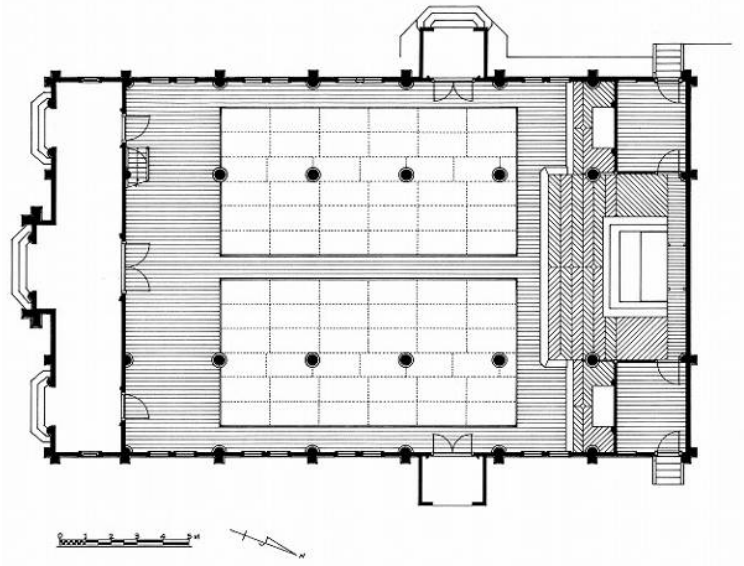


図４　平面実測図



写真 18　側廊部（1984）

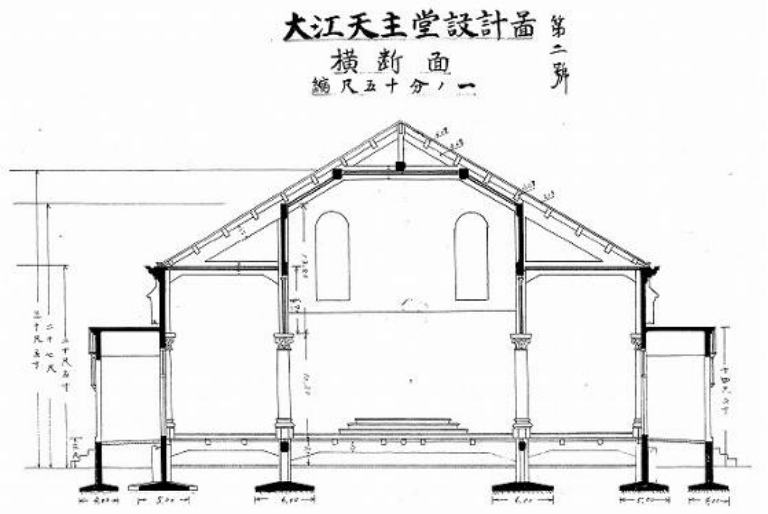


図５　設計図（鉄川喜一郎氏所蔵）

質素ではあるが堂々としている。平面は三廊式で、主廊幅は24.0尺、側廊幅は12.0尺、列柱間隔は12.0尺である。主廊部は折上天井で、側廊部は平天井である。円形アーチのアーケード上の小壁面には

円形縦長アーチが連続して設けられてトリフォリウムのような水平の帯飾りを構成している。折り上げ面と天井面には花弁をあしらった装飾が付されている。天井面の格縁は梁や母屋であるが、それらは手取教会堂におけるよりも太さが一層強調されている。

内部空間の意匠であるリブ・ヴォールト天井が簡略化されて折上天井が出現したわけだが、それは旧細石流教会堂において確固とした地位を得た。その形態はさらに意匠としてだけでなく、このように構造と密着した形態へと変化した。棟梁建築家鉄川与助の飽くことのない空間創造の到達点と言うことができよう。

⑤水の浦教会堂（長崎県五島市）

水の浦教会堂は五島福江島に所在する木造桟瓦葺の美しい教会堂である。ペルー師によって聖堂が創設されたが、狭隘さのため昭和13年（1938）５月に新築された。与助にとって、リブ・ヴォールト天井を有する最後の教会堂である。重層屋根構成で、正面の頂部には緩やかな尖頭アーチと反転曲線とを混用した装飾がある。煉瓦造教会堂に一般的に見られる控壁が下見板張りの水平線を切って周囲に設けられ、壁面のアクセントとなっている。規模が大きいため、広い壁面が単調に陥ることを防ぎたかったの



写真 19　正面（1983）

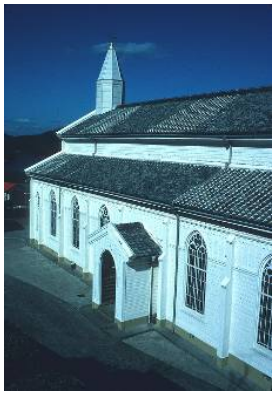


写真 20　側面（1983）

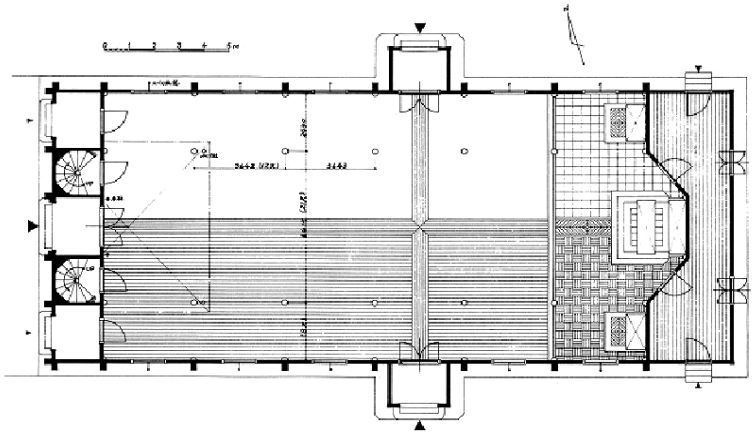


図６　平面実測図（1975）



写真 21　主廊部（1987）

であろう。基礎部の通風口の鉄製の蓋は星を意匠化しており、細部にまで配慮が行届いている。平面は三廊式で、主廊幅は21.2尺、側廊幅は8.0尺、列柱間隔は12.0尺である。側廊幅に対する主廊幅の比の値（2.65）はすべての三廊式教会堂のうちで最大であるだけでなく、木造教会堂としては最大の規模を誇る。主廊部・側廊部ともに漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井で、内部空間はおおらかに構成されている。

側廊幅に対して主廊幅が大きいために、リブの立ち上りの大きさを余り感じさせない。外観の装飾に対して内部はすっきりと仕上げられており、もの静かな印象を受

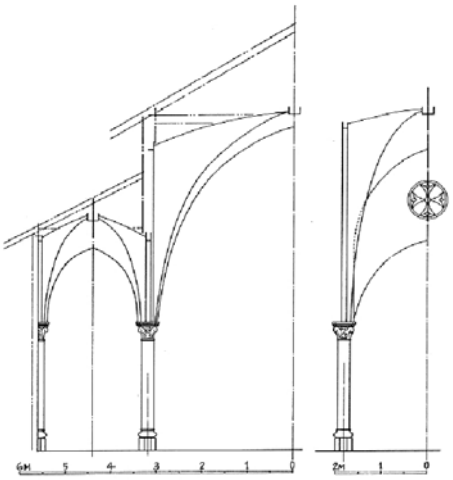


図７　断面図・内部立面図

ける。構造的安定の上に立脚したそ
の構成は、逆に力強さの欠如といったある種の物足りなさを感じさせる。それは当教会堂が建築的に完成を経た後のリヴァイヴァルであるからであろう。

⑥後期の建築的特徴と意義

後期の作品として、旧細石流教会堂から水の浦教会堂までの５棟を取り上げた。この時期の特徴は、鉄筋コンクリート造という新しい構造の出現に対応して、折上天井構成を採用した点である。

三廊式教会堂の天井構成の変化は意外に早く、明治 10 年代の旧大明寺教会堂（木造、明治 12 年頃、明治村に復原移築、旧所在地：長崎県西彼杵郡伊王島町大明寺 1060）にまず出現する。側廊部の弓状の棹縁天井は、できるだけ天井を高く構成しようとする欲求を満足させようとした構造上の必然的結果である。それは旧立谷教会堂の側廊部において直線へと変化し、折上天井となった。明治後期から大正初期にかけて折上天井は主廊部にも採用され、大正末頃に至って全盛期を迎える。その構成は日本在来の折上天井を単に模倣した和風的処理ではなく、屋根構成との関係上リブ・ヴォールト天井で構成し得なかった部分を直線に置換させた洋風の意匠と言えよう。旧大明寺教会堂から旧米山教会堂・嵯峨ノ島教会堂（木造、大正７年、長崎県五島市）へと続く木造教会堂は飽くまでも筒型天井やリブ・ヴォールト天井の簡略化の中に位置づけられ、木造の旧大水教会堂・旧細石流教会堂、さらに鉄筋コンクリート造の手取教会堂へと続く流れとは明確に区別される。そこには新しい造形感覚の出現が認められるからである。

大正５年に彼が初めて採用した旧大水教会堂の折上天井は旧細石流教会堂や昭和初期の手取教会堂・紐差教会堂へと継承されているため、それは決して簡略化の流れの中にあるものではない。単廊式平面の頭ヶ島天主堂の擬似ハンマー・ビーム架構を見ると、そこにはすでに特異な形態を有する教会堂を建設し得るに足る与助の自信とデザインの先駆性が理解できる。これは新しい内部空間の創造への試みである。旧細石流教会堂で確固とした新しい地位を得た折上天井構成は昭和初期の鉄筋コンクリート造の出現に伴って変質し、構造と内部空間の意匠の一体化というさらなる発展的展開を遂げる。

木造教会堂の場合、天井の裏面に近接して陸梁・繋梁が存在するために折り上げ面の小屋裏には間隙が生じ、梁が会堂内に露出することはない。しかし、鉄筋コンクリート造教会堂の場合は、天井面は梁の上部に接して形成されるために梁は会堂内に露出する、従って、構造体が会堂内に一種の装飾と化して顕わとなり、そこには構造と意匠とが一体となった、ある力強さがある。正面中央に突出した方形の塔を設けて頂部に８角形のドームを架す。それを教会堂建築の将来あるべき姿として与助は自信をもって提示した。それは教会堂建築を発展的に展開させ続けてきた棟梁建築家鉄川与助の止むことのない模索と挑戦の結果として相応しいものと言えよう。

４．教会堂建築におけるトラス小屋組の変遷

序

明治の開国に前後して、開港地を窓口として西洋の文化が日本に流入してきた。社会経済の大変革に対応するために種々の分野でお雇い外国人を招聘したが、建築の世界でも同様であった。彼らは自ら建築技師として設計施工に携わる傍ら、日本人技術者（建築家）の育成にも努めた。官公庁舎、銀行、駅舎、事務所建築などが建設される一方で、教会堂はいく分様相を異にしている。

長い弾圧や迫害に耐え忍んできたキリシタンは、明治６年（1873）の高札撤去後、その多くがカトリックに復帰するとともに、思い描いていた「目に見える教会」を競って建設し始めた。建設資金の積立てから始め、大工や左官など職人の多くは信徒であり、煉瓦の焼成から運搬、部材の組み上げなど自ら労働奉仕した。伝統技術を基礎にして、見様見真似でまず教会堂の意匠的要素を取り入れた。現存する遺構から判断すると、信徒たちは神への祈りの空間を最重要視したと思われる。明治10年代の遺構の多くが素朴ながらも洋風の内部空間を有するのに対して、民家と見紛うような外観を呈していることからも分かる。

教会堂建築を熟知しているのは神父自身であるため、建設に際して外国人神父が深く関わったことは容易に推察できる。中でもド・ロ神父を始めとする数名の神父は意匠面だけでなく、建築の構造にまで強い指導力を発揮した。それらの神父の下で職人たちは未知の西洋建築技術を少しずつ身につけていった。特に注目すべき人物は鉄川与助である。

建築物の意匠的な面は、多少の誤解や曲解はあるにせよ調える（移入する）ことができるが、構造（軸組）面の習得は容易ではない。より高く、より美しい教会堂の建設を目指すが、その根底には壊れない建築を建てることが課題としてあるのは当然で、職人の胸中にはすでに身につけている伝統技術との葛藤の中で、西洋建築技術の理解と導入に務めなければならなかったと思われる。その迷いと克服の過程は恐らく遺構の中に潜んでいるであろう。

ここでは、構造を最もよく表しているトラス小屋組について検討することにする。明確に結論を導き出し得ていないが、今後の課題として調査資料を整理しておくことも重要であろう。

（１）教会堂建築の概要

長崎県（長崎大司教区）に所在するカトリック教会堂の悉皆調査（実測調査）を実施したのは昭和50年（1975）である。当時すでに廃堂になった教会堂や建て替え後も残存していたものも含めると145棟であった。この中から第二次世界大戦頃（昭和24年）までに建設された教会堂を抽出し、さらに教会堂の様式的要素をあまり持たない和風（民家風）のものを除くと、57棟となる。それに周辺地域から建築的に質の高い教会堂８棟（福岡県３棟、佐賀県２棟、熊本県３棟）と教会関連建築５棟（長崎県）を加えて建設年代順に並べた表を作成した。教会堂と区別するために教会関連建築には番号を付していない。

次いで、ＲＣ造教会堂３棟（昭和初期建設）以降の教会堂と、余りにも小規模な４棟（長崎県）は除いた（表１）。和小屋組とトラス小屋組を対象とした本稿の目的からはずれるからである。教会に関連する重要な建築物は表１に全て含まれているため、ここでは表１に記載した建築物49棟を考察の対象とする。

（２）小屋組の時代区分と特徴

①時代区分

小屋組は和小屋組からトラス小屋組（洋小屋組）へと変化したことは表１から明らかである。教会堂建築の導入初期は当然のことながら和小屋組であるが、明治18年の旧出津救助院鰯網工場に初めて

表１　　教会堂および教会関連建築概要表

	教会名	建設年代	構造	小屋組	全幅（尺）	主廊幅（尺）	側廊幅（尺）	内部立面構成（群）	設計者	備考
1	大浦天主堂	元治１　竣工	煉瓦造	和小屋	44.6	20.2	12.1	Ⅵ	フュレ神父他	施工小山秀
	旧羅典神学校	明治８　竣工	木骨煉瓦造	和小屋	37.0	15.1			ド・ロ神父	
2	旧大明寺教会堂	12頃推定	木造	和小屋	32.3	12.7	9.8	Ⅱ	ブレル神父指導	棟梁大渡伊勢吉　明治村に移築復原
3	土井ノ浦教会堂	12　創立	木造	和小屋	26.7	13.1	6.8	Ⅴ－Ａ		前大曾教会堂
4	旧五輪教会堂	14　設立	木造	和小屋	28.0	12.0	8.0	Ⅰ		前浜脇教会堂
5	出津教会堂	15　献堂	煉瓦造	和小屋	35.1	15.7	9.7	弓状天井	ド・ロ神父	明治24・42年増築
6	江袋教会堂	15　設立	木造	和小屋	33.0	15.0	9.0	Ⅰ	川原久米吉	ブレル神父指導　平成22年修復
7	旧立谷教会堂	15～推定	木造	和小屋	23.6	10.2	6.7	Ⅰ		現存せず
8	旧呼子教会堂	15～推定	木造	和小屋	24.0	12.0	6.0	Ⅱ		前馬渡島教会堂
	旧授産場	16　竣工	木骨煉瓦造	和小屋	30.4	17.0			ド・ロ神父	
	旧伝道師学校	16頃竣工	木骨煉瓦造		36.0	16.0				旧羅典神学校に酷似　ド・ロ神父設計？
	旧出津鰯網工場	18　竣工	木骨煉瓦造	トラス	*18.6				ド・ロ神父	
9	馬渡島教会堂	19　推定	木造		36.0	16.0	10.0	Ⅳ－Ａ		前紐差教会堂
10	旧馬込教会堂	23　竣工	煉瓦造						マルマン神父	第Ⅴ～Ⅵ群　川原忠蔵？　現存せず
11	旧上神崎教会堂	24　竣工	木造	和小屋	32.4	14.0	9.2	Ⅴ－Ａ		マタラ神父指導　現存せず
12	大野教会堂	26　竣工	石造	トラス	*19.0			棹縁天井	ド・ロ神父	
13	旧大名町教会堂	27頃竣工	煉瓦造	トラス	36.0	18.0	9.0	Ⅳ－Ｂ		旧福岡市　久留米市に移築復原
14	旧井持浦教会堂	28　竣工	煉瓦造	トラス	*34.0	12.0	6.0	Ⅱ	ペルー神父管理	現存せず
15	旧中町教会堂	29　竣工	煉瓦造							現存せず
16	神ノ島教会堂	30　献堂	煉瓦造	和小屋	30.0	15.8	9.3	Ⅳ－Ａ	デュラン神父案	トラスに改造
17	宝亀教会堂	32　設立	木造	トラス	30.0	14.0	8.0	Ⅴ－Ａ	柄本庄市	マタラ神父指導　正面のみ煉瓦造
18	黒島天主堂	35　竣工	煉瓦造	トラス	48.0	24.0	12.0	Ⅵ	マルマン神父	大工前山佐吉　尖塔を改造
19	旧鯛ノ浦教会堂	36　竣工	木造	和小屋	25.2	12.6	6.3	Ⅲ	ペルー神父指導	正面２間と鐘塔を増築　野中組請負
20	旧米山教会堂	36　献堂	木造		18.8	9.4	4.7	折上天井		側廊幅を8.0尺に拡幅　現存せず
21	冷水教会堂	40　献堂	木造		24.0	12.0	6.0	Ⅲ	鉄川与助	
22	堂崎教会堂	41　献堂	煉瓦造	和小屋	31.4	15.8	7.8	Ⅳ－Ａ	ペルー神父指導	棟梁野原与吉　大正６年鉄川与助改造
23	旧野首教会堂	41　献堂	煉瓦造	トラス	26.0	13.0	6.5	Ⅲ	鉄川与助	
24	青砂ケ浦天主堂	43　献堂	煉瓦造	トラス	36.4	18.0	9.2	Ⅴ－Ａ	鉄川与助	
25	楠原教会堂	45　献堂	煉瓦造		30.2	15.0	7.6	Ⅴ－Ａ	鉄川与助	祭壇部を増改築
26	山田教会堂	大正１　竣工	煉瓦造		25.4	12.0	6.7	Ⅴ－Ａ	鉄川与助	正面に鐘塔を増築
27	福見教会堂	2　献堂	煉瓦造		28.0	14.0	7.0	（Ⅴ）		折上天井に改造
28	今村教会堂	2　献堂	煉瓦造	トラス	48.0	24.0	12.0	Ⅵ	鉄川与助	福岡県三井郡大刀洗町
29	旧浦上天主堂	4　献堂	煉瓦造						フレノ神父	正面の双塔は鉄川与助　現存せず
	旧長崎大司教館	4　竣工	煉瓦造	トラス	45.2	24.0			ド・ロ神父＋鉄川	
30	大曾教会堂	5　献堂	煉瓦造	トラス	30.0	14.0	8.0	Ⅴ－Ｃ	鉄川与助	
31	旧大水教会堂	5　献堂	木造		24.0	12.0	6.0	折上天井	鉄川与助	現存せず
32	江上天主堂	7　設立	木造	トラス	27.6	12.0	7.8	Ⅴ－Ａ	鉄川与助	
33	嵯峨ノ島教会堂	7　竣工	木造	トラス	25.2	12.6	6.3	平天井		外壁と天井を改造
34	田平天主堂	7　竣工	煉瓦造	トラス	42.1	20.1	11.0	Ⅵ	鉄川与助	
35	頭ケ島天主堂	8　竣工	石造		*23.4			折上天井	鉄川与助	
36	黒崎教会堂	9　設立	煉瓦造		41.9	17.9	12.0	Ⅴ－Ａ	川原忠蔵父子	
37	山野教会堂	13　竣工	木造		25.1	12.1	6.5	Ⅴ－Ａ	川原清次	
38	旧浦頭教会堂	10　竣工	木造		23.0	13.0	5.0	平天井	鉄川与助	第２側廊6.0尺を増築　現存せず
39	細石流教会堂	10　竣工	木造	トラス	26.4	13.0	6.7	折上天井	鉄川与助	挟み梁の変則トラス　現存せず
41	貝津教会堂	13　竣工	木造	トラス	28.2	15.6	6.3	平天井		正面２間改造　和小屋
43	中ノ浦教会堂	14　献堂	木造		30.0	15.0	7.5	折上天井	藤原又三郎	正面鐘塔増築は野中組請負
46	手取教会堂	昭和３　竣工	ＲＣ造		36.1	20.1	8.0	折上天井	鉄川与助	
47	紐差教会堂	4　竣工	ＲＣ造		48.0	24.0	12.0	折上天井	鉄川与助	
48	旧下神崎教会堂	5　献堂	ＲＣ造		32.0	16.0	8.0	Ⅴ－Ｂ	末広設計事務所	現存せず

注：梁間寸法については、＊印４棟は全幅を、その他は主廊幅を使用した。

トラス小屋組を見る。その後は和小屋組とトラス小屋組が混在するが、明治41年の旧野首教会堂以後はトラス小屋組が中心となる。

概観すると、明治20年頃までは和小屋組の時代（和小屋期）、次いで明治40年頃までは和小屋組とトラス小屋組の混在時代（混在期）、その後はトラス小屋組の時代（トラス期）に大きく時期を区分することができる。

②時代区分と構造

和小屋期の構造は木造が主流で、木骨煉瓦造３棟、煉瓦造２棟が含まれる。このうち木骨煉瓦造は全て教会関連建築である。大浦天主堂を居留地に建つ教会堂として除外すると、出津教会堂以外は全て木造の教会堂で、和小屋組であることが分かる。

混在期の構造は木造７棟、煉瓦造６棟、木骨煉瓦造１棟、石造１棟であり、木造と煉瓦造の混在した時期でもある。トラス期を参照すると、煉瓦造はトラス小屋組が主流であるため、木造教会堂にトラス小屋組が使用され始めている点が混在期の特徴と言える。一方で、煉瓦造で和小屋組を用いている例（神ノ島教会堂）も忘れてはならないだろう。

トラス期で興味深いのは、全13棟のうち木造は３棟で、他は全て煉瓦造であるため、煉瓦造の時代と言うこともできる。さらに木造３棟のうち２棟がトラス小屋組であるため、まさにトラス期であると同時に、この時期の教会堂建築にトラス小屋組を採用することは当然のことと理解されていたと考えることができる。つまり、トラス小屋組が定着した時期と言える。従って、小屋組を未調査である煉瓦造３棟（楠原・山田・福見教会堂）にもトラス小屋組が採用されている可能性は高い。

当該地域では、大正９年の黒崎教会堂を最後に煉瓦造教会堂は姿を消す。その後は昭和３年の手取教会堂（熊本市）を始めとするＲＣ造教会堂の時代へと移り、ラーメン構造へと変化する。

③時代区分と内部立面構成

リブ・ヴォールト天井を有する三廊式教会堂を、内部立面構成（ほぼ主廊部の縦断面の形態に相当する）を主軸にして６群に分類すると、簡素な第Ⅰ群から最も整った第Ⅵ群へと変化したことが分かっている。明治10年代まで初期教会堂は全て木造で第Ⅰ・Ⅱ群である。明治20年代後半から30年代にかけて第Ⅱ・Ⅳ群の煉瓦造が出現する。明治30年代は第Ⅲ～Ⅵ群が存在するが、第Ⅲ・Ⅳ群を中心とし、第Ⅴ・Ⅵ群は初期的出現である。明治末年から大正初期にかけては第Ⅴ群が多く、大正期になると第Ⅴ・Ⅵ群が中心となり、教会堂建築は完成期を迎える。

和小屋期は第Ⅰ・Ⅱ群の初期教会堂建築の時代と言える。第Ⅴ群も１棟（土井ノ浦教会堂）あるが、移築に際して改変された可能性があるため、詳細な調査が必要である。

混在期では、第Ⅱ～Ⅵ群が存在し、意匠的（内部立面構成）にも混在している。トラス期と比較すると、煉瓦造教会堂の初期出現の時期で、トラス小屋組にするとともに第Ⅴ・Ⅵ群とする。旧井持浦教会堂は長崎県下で唯一のダブル・ベイ・システムを有する特異な存在である。

トラス期では、第Ⅴ・Ⅵ群がほとんどで、意匠的に完成期であると同時に煉瓦造教会堂の時代である。旧野首教会堂が第Ⅲ群であるが、これは鉄川与助の最初の煉瓦造教会堂であり、和小屋組の考え方が根強いトラス小屋組を有する。この時期のほとんどの遺構が鉄川の設計施工であることを踏まえると、トラス小屋組の導入過程は鉄川与助の西洋建築技術の導入過程と換言することができよう。

（３）各時期の代表的遺構

ここでは３期に時代区分した時期別に代表的遺構を上げ、小屋組に焦点を絞ってその構成方法を述べることにする。

①和小屋期

ａ．旧五輪教会堂（長崎県五島市）

主廊部では、列柱頂部に陸梁を架け、その上に桁を乗せる。柱筋では陸梁上に牛梁（梁挟み）が乗り、柱間筋では牛梁と桁の上に繋梁が乗る。牛梁上



主廊部（1985）



主廊部小屋梁端部（1985）



側廊部（1985）

に棟束を立てて棟木を支持する。棟木と桁の中間では、陸梁と繋梁上に母屋束を立て、片流れ１通り母屋を配する。桁行（長軸）方向にこの状態が柱筋と柱間筋とで交互に続く。

側廊部では、列柱および間柱の頂部から側柱上の敷桁へ登り梁を渡し、その上に直接母屋が片流れ１通り乗る。

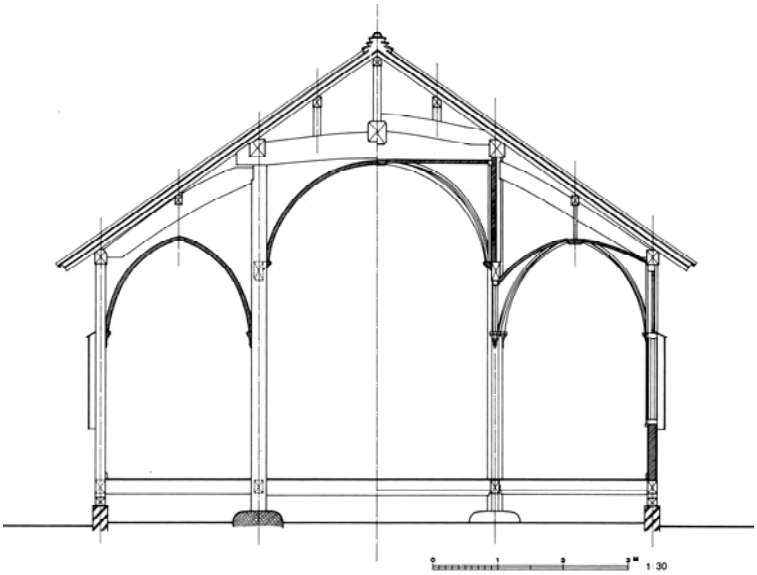


図１　旧五輪教会堂断面図（1985）

ｂ．出津教会堂（長崎市）

主廊部では、列柱頂部に桁を架け、柱筋と柱間筋で桁上に小屋梁を乗せる。その上に牛梁を桁行（長軸）方向に渡して小屋梁と組む。牛梁上に棟束を立てて棟木を支持する。棟木と桁の中間で小屋梁上に母屋束を立て、母屋を片流れ１通り配する。

側廊部では、煉瓦造側壁の上端に敷桁を据え、柱筋では列柱と、柱間筋では胴差とに繋梁を架け渡して組む。繋梁から列柱に登り梁を架け、その上に母屋を片流れ２通り配する。登り梁と繋梁に方杖を入れる。



主廊部（1973）



主廊部小屋梁端部（1974）



側廊部（1974）

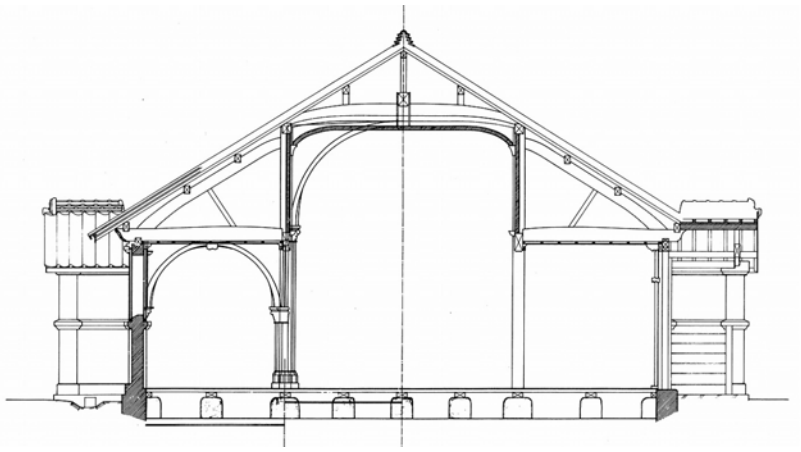


図２　出津教会堂断面図（1974）

ｃ．旧出津救助院授産場（長崎市）

旧出津授産場は教会堂ではないが、断面形態はまさにバシリカ式（長軸式）断面である。この重層の屋根構成は旧羅典神学校・旧伝道師学校・旧長崎大司教館と相通じるものがあり、ド・ロ神父の建築に対する考え方をよく表している。

上屋では、列柱（通し柱）頂部を敷桁で固め、柱筋と柱間筋に陸梁（ほぼ直材）を架け渡す。陸梁

上には母屋桁を置くが、母屋桁の下面と敷桁の上面が接するように陸梁を挟みこむ。陸梁上に２本の束を立てて重ね梁（二重梁、曲材）を架け、両端部を母屋桁と組む。重ね梁の中央に棟束を立てて棟木を受ける。伝統的な和風の二重梁架構法である。

下屋では、列柱と木骨煉瓦造（左側面）およびド・ロ壁造（右側面）の側壁上端に繋梁（ほぼ直材）を架け、中央に束を立てて母屋桁を受ける。繋梁の端部は側壁面より突出させて鼻母屋を受ける。小屋裏の列柱側（母屋桁より内側）を物入れとする工夫は、前記３棟とも共通している。



二重梁の小屋組（1973）



二重梁端部（1973）

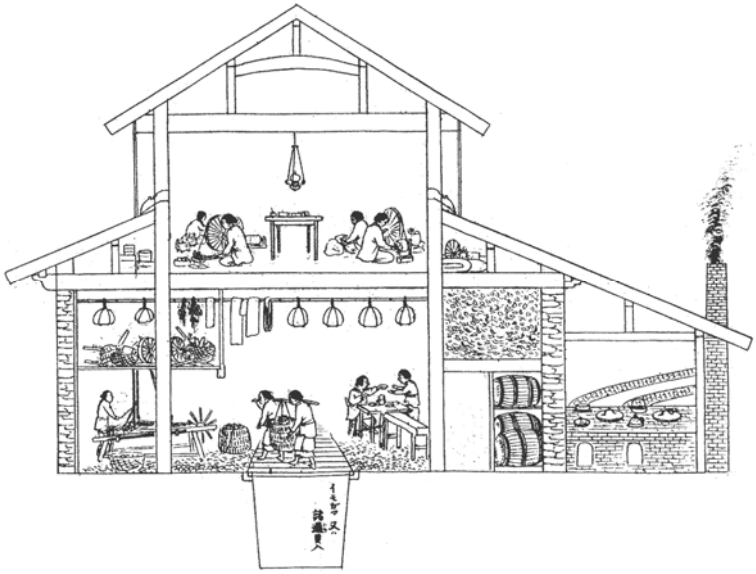


図３　旧出津救助院授産場　断面スケッチ
『出津教会誌』（1983 年）より転載

②混在期

ａ．旧出津救助院鰯網工場（長崎市）

主要部分は木骨煉瓦造の一室空間であるため、建物の全幅に陸梁を架けている。各柱筋に架け渡した陸梁の中央に真束を立て、頂部で棟木を受ける。真束の頂部から陸梁端部に合掌を架け、合掌中央から真束の根元に方杖を入れる。真束は胴付きの枠型真束で、下端部を陸梁と箱金物で固める。桁行



真束下端部（1974）



陸梁端部（1974）

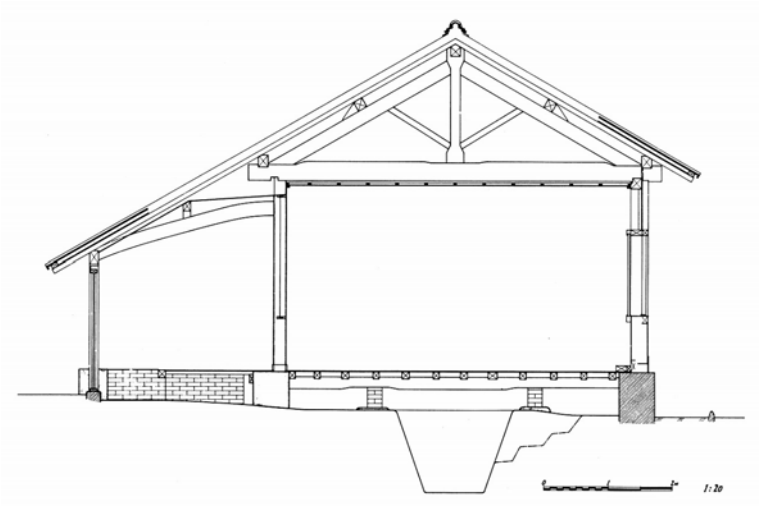


図４　旧出津救助院鰯網工場断面図（1974）

方向には合掌の上面に転び止めをもつ母屋を１通り配する。小屋組を構成する部材は全てほぼ直材であり、ド・ロ神父の建築では恐らくトラス小屋組を採用した最初の遺構である。

ｂ．大野教会堂（長崎市）

単廊式教会堂であるため、会堂内に列柱はない。ド・ロ石積みの側壁上端の窪みに落とし込まれた陸梁の両端部は外壁から出桁状に延びて軒桁を受ける。陸梁の中央に真束を立て、頂部で棟木を受ける。真束の頂部から陸梁端部に合掌を架け、合掌中央から真束の根元に方杖を入れる。合掌の上面には転び止めをもつ母屋を片流れ３通り配する。

小屋組の構成部材がほぼ直材である点は旧鰯網工場と同様であるが、真束下端部の立ち上がりがほとんどない点が大きく異なっている。



小屋組（1973）

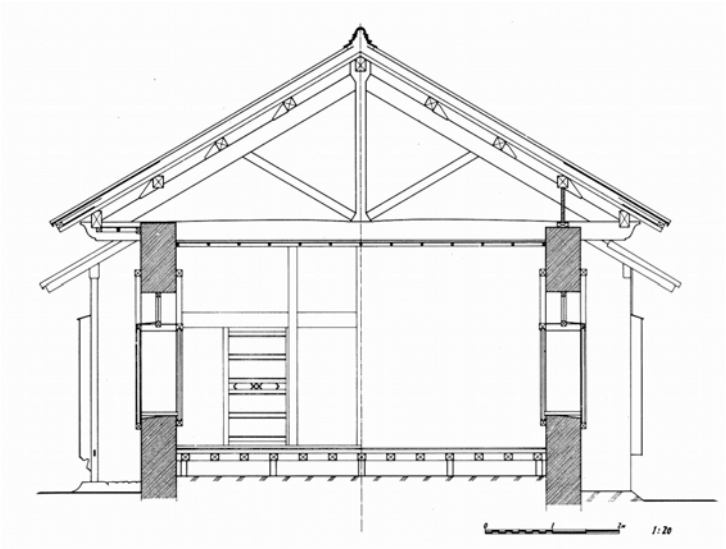


図５　大野教会堂断面図（1973）



小屋組北端部（1973）

ｃ．旧大名町教会堂（雪の聖母聖堂：福岡県久留米市、旧所在地：福岡市）

旧大名町教会堂はかつて福岡市の中心部に所在し、当時市内に現存する最古の煉瓦造建築であった。久留米市への解体移築に際して、小屋組を始めとする軸部はそのまま再使用した。

主廊部では、列柱上面と陸梁上面を揃えて陸梁を架け渡し、陸梁中央に真束を立てて棟木を受ける。杵型真束の下端部と陸梁は箱金物で固める。真束頂部から陸梁端部に合掌を架ける。真束の根元から合掌に方杖を入れ、合掌上面に転び止めをもつ母屋桁を片流れ４通り配する。真束頂部と合掌は短冊金物で固める。列柱頂部に敷桁はない。陸梁下面から列柱下方に向けて方杖を入れる。真束から棟木に方杖を入れ、真束下端部には桁行方向に貫を通す。



主廊部小屋組（1984）

側廊部では、煉瓦造側壁の上面と列柱に繋梁を架け、列柱と短冊金物で固める。繋梁端部から列柱頂部に登り梁（直材）を架け、列柱頂部を合点として主廊部の合掌尻と継ぎ、短冊金物で固める。宝亀教会堂（明治 30 年）のように主廊部の合掌が側壁まで一気に降っているのとは異なる。側壁上面の軒桁は各柱間で途切れており、繋梁の側面に突き当てて鎹で止める。



主廊部陸梁端部（1984）

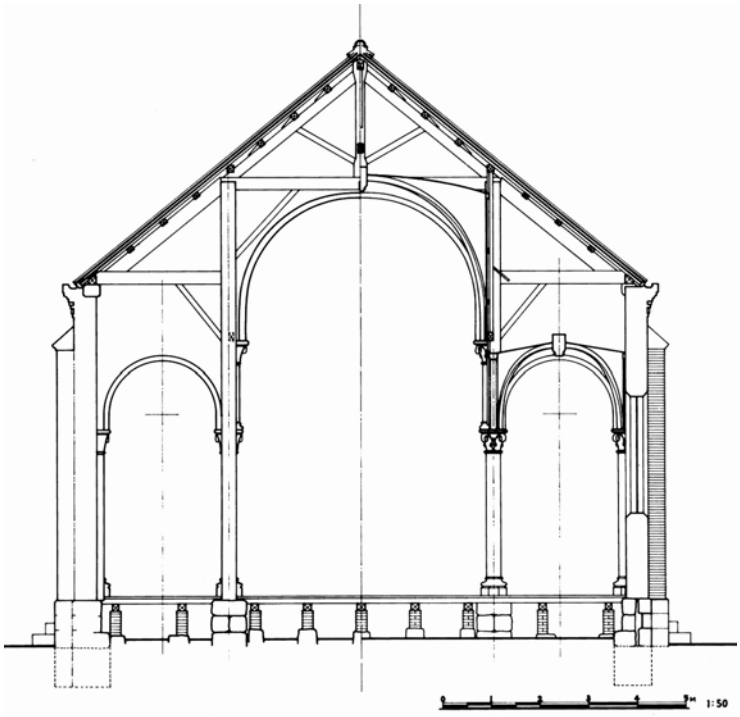


図６　旧大名町教会堂断面図（1984）



側廊部（1984）



側廊部繋梁端部（1984）

ｄ．旧井持浦教会堂（旧所在地：長崎県五島市）

煉瓦造教会堂の全幅（34.0 尺）に一気に陸梁を架け渡した壮大なトラス小屋組である。これに次ぐものは黒島天主堂と今村教会堂の 24.0 尺であるので、群を抜いて大きいことが分かる。

煉瓦造側壁の上端に据えた軒桁と壁付柱（角柱）の両者の上に陸梁（直材）を架け、陸梁の中央に真束を立てて棟木を受ける。真束下部に長軸（桁行）方向に貫を通す。真束頂部から陸梁端部に合掌を架け、真束下部と陸梁から２本の方杖を入れる。片流れを３分する位置で長軸方向に桁を渡して陸梁と組む。壁側の交点から１間おいた真束下方の胴付き上部に向かって緩く上った登り梁状の火打梁を入れる。合掌上面には転び止めをもたない母屋桁を片流れ５通り配する。



小屋組（1976）



側廊上部の小屋組（1976）

真束の胴付きの成が大きく、上端部に方杖を入れているので、陸梁には偏心した負荷がかかることになるが、真束根元に方杖を入れると方杖が長くなるため、座屈を起こし易くなる。二の束はなく、陸梁端部と壁付柱とは鎹で止める。極めて特異な構成である。



陸梁端部（1976）

ｅ．宝亀教会堂（長崎県平戸市）

宝亀教会堂は正面１間通り（玄関部）だけが煉瓦造で、他は全て木造である。会堂部の両側面にヴェランダの屋根が差し掛けられているので重層屋根構成に見えるが、教会堂としては単層屋根構成である。

主廊部では、列柱頂部を敷桁で固めて陸梁（直材）を架け、陸梁の中央に真束を立てて棟木を受

ける。真束頂部から側廊部を含めて側壁まで一気に合掌を架ける。合掌上面には転び止めをもたない母屋桁を片流れ３通り配する。杵型真束の下部で長軸（桁行）方向に貫を通し、合掌に向けて方杖を入れる。柱間筋では貫の上に棟束を立てる。列柱と陸梁の片面に方杖を当ててボルト締めする。

側廊部では、側柱頂部の軒桁と列柱に繋梁を渡し、繋梁端部で棟から降る合掌を受ける。繋梁と合掌に束を立てる。繋梁の下方にさらに別の繋梁を設け、その間にも束を立てる。列柱と側柱に片面から方杖を当て、下方の繋梁の中央部でボルト締めする。

小屋部は多くの金物で補強しているが、建設当初は短冊金物や箱金物は一切使用せず、火打梁も用いていない。



主廊部（1976）

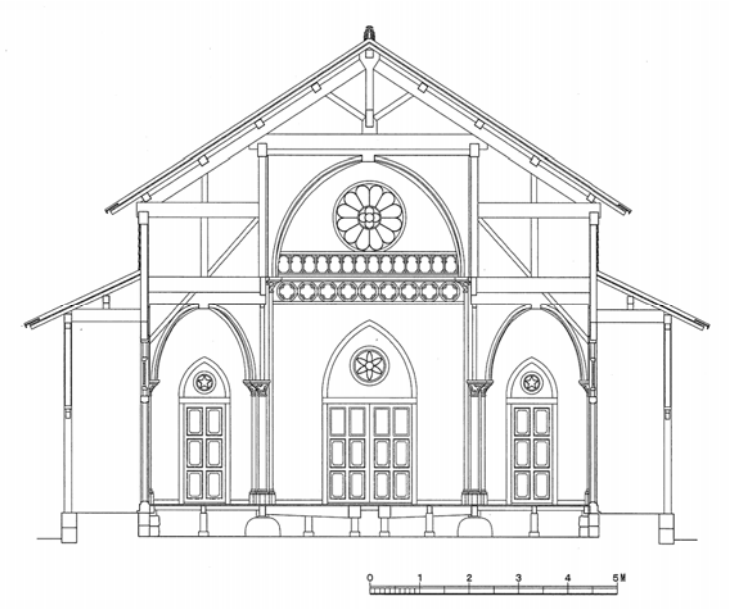


図７　宝亀教会堂断面図（文建協 2010）
（注：主廊部の陸梁と列柱の方杖が欠落している）



主廊部小屋梁端部（1976）



側廊部（2010）

ｆ．黒島天主堂（長崎県平戸市）

主廊部では、柱筋と柱間筋にトラス小屋組を並べ、陸梁は直材を用いる。陸梁と真束下端部は箱金物で、真束頂部と合掌は山型帯金物でボルト締めする。合掌尻は陸梁の端部に差し込むだけである。表１のトラス小屋組で、二の束を有する唯一の例である。しかし、それは方杖頂部に位置するのではなく、片流れをほぼ３分する位置に立つ。合掌上には転び止めをもつ母屋を片流れ２通り配していたが、現在は５通りに補強されている。



主廊部（1983）



主廊部陸梁端部（1983）

側廊部では、煉瓦造の側壁上端に敷桁を据え、繋梁もしくは登り梁を受ける。柱筋では列柱と繋梁の端部に登り梁を設けるが、柱間筋では登り梁だけで繋梁はない。側廊幅を３分した位置に２本の束を立てる。登り梁の上面に転び止めをもつ母屋を片流れ２通り配していたが、修理に際しては位置を

変えて２通り母屋を配している。

側廊部の小屋裏へ奥行のあるトリフォリウムを備えるのは黒島天主堂・今村教会堂・田平天主堂の３棟だけであるが、それぞれに側廊部の小屋組の構成方法が異なっている。



側廊部（1983）

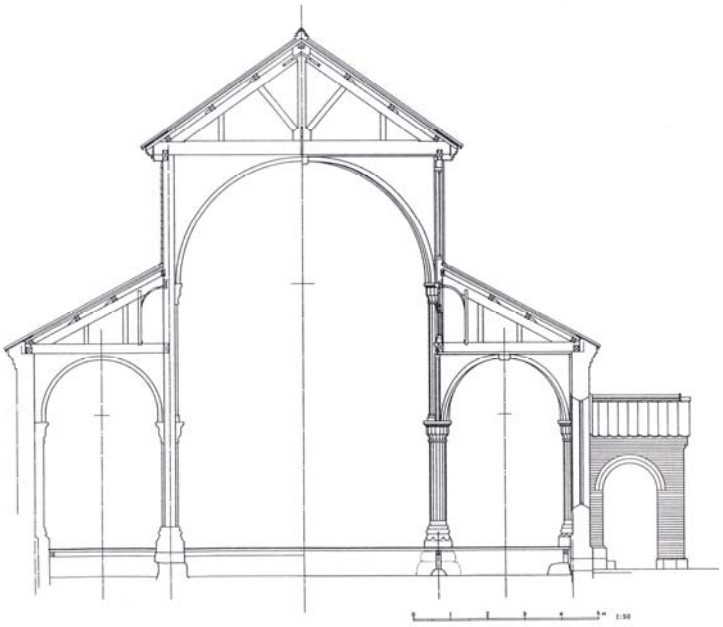


図８　黒島天主堂断面図（1994）

③トラス期

ａ．旧野首教会堂（長崎県北松浦郡小値賀町）

主廊部では、列柱上部の敷桁に陸梁（曲材、小屋梁）を渡し、中央に真束を立てて棟木を受ける。真束と棟木とに方杖を入れる。真束頂部から小屋梁端部に合掌を架け、合掌上面に転び止めのない母屋桁を片流れ１通り配する。列柱と小屋梁に方杖を入れ、列柱頂部の桁と列柱にも方杖を入れるが、真束と合掌には方杖を入れない。真束頂部と合掌、真束下部と小屋梁とに金物を一切使用しない点は珍しい。

側廊部では、煉瓦造側壁の頂部の敷桁から列柱に弓形の繋梁（曲材）を架ける。繋梁の中央に立つ束は母屋桁を受ける。トラス小屋組の教会堂で側廊部に登り梁がない点も珍しいと言える。



主廊部小屋梁端部（1973）



側廊部（1973）

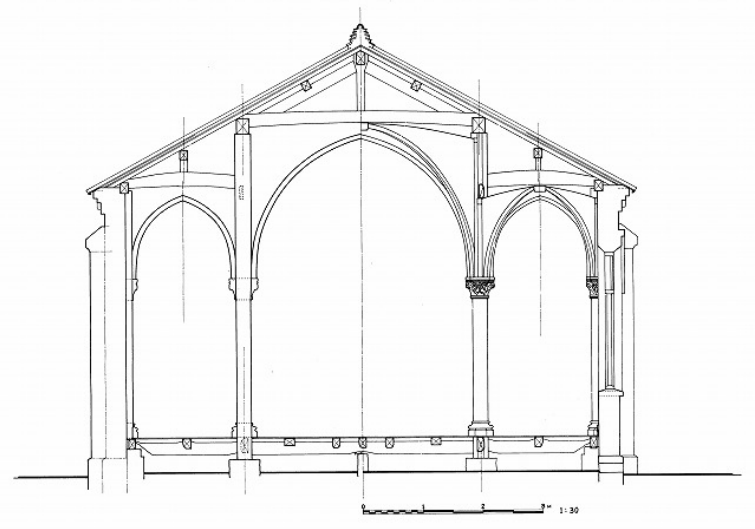


図９　旧野首教会堂断面図（1984）
（注：主廊部の列柱と小屋梁にある方杖が欠落している）

b．青砂ケ浦天主堂（長崎県南松浦郡新上五島町）

主廊部では、列柱頂部に敷桁を乗せ、柱筋で陸梁（曲材）を架け渡す。陸梁の中央に真束を立て、真束頂部で棟木を受ける。真束頂部から陸梁に合掌を架けて端部を鎹で固め、合掌の中央から真束の根元に方杖を入れる。陸梁と敷桁には１間おきに火打梁を入れて釘止めする。真束と合掌、真束と陸梁、方杖と真束、方杖と合掌を短冊金物で固める。合掌上には転び止めをもたない母屋桁を片流れ２通り配する。真束は粗削りの角材で、上下端部を膨らませず、上端部は二山に欠きこんで合掌を受ける。下端部は２本の方杖と真束がほぼ１点で陸梁と組まれているのは珍しく、大野教会堂（明治26年）と類似している。

側廊部では、煉瓦造側壁の上端に軒桁を据え、軒桁上面と列柱に繋梁（曲材）を渡す。繋梁の端部と列柱に登り梁を架け、登り梁の中央と列柱に方杖を入れる。繋梁と軒桁を鎹で止め、列柱と繋梁・方杖・登り梁、登り梁と方杖を短冊金物で固める。登り梁上に転び止めをもたない母屋桁を２通り配する。



主廊部（2010）



主廊部小屋梁端部（2010）



側廊部（2010）

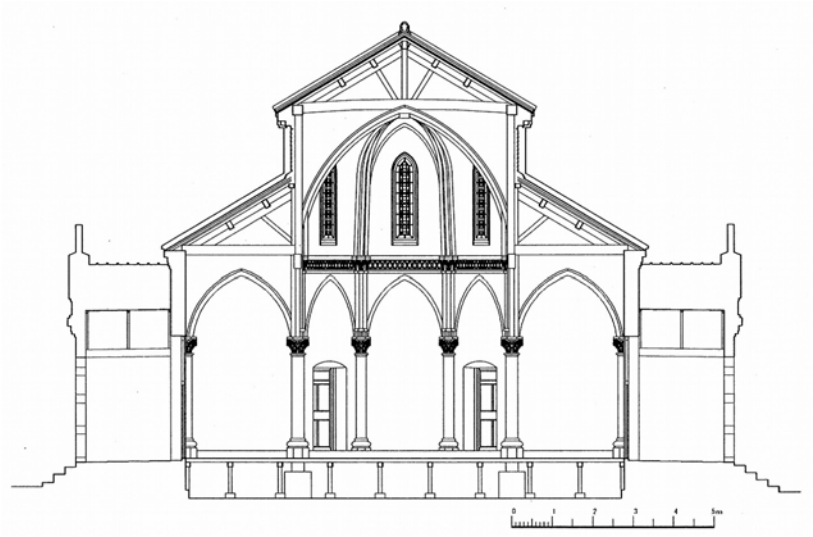


図 10　青砂ヶ浦天主堂断面図（文建協 2010）

c．今村教会堂（福岡県三井郡大刀洗町）

主廊部では、列柱頂部の軒桁上に柱筋で陸梁（直材）を渡し、陸梁中央に真束を立てて頂部で棟木を受ける。真束頂部から陸梁端部に合掌を架ける。合掌中央から真束の根元に方杖を入れ、合掌上に転び止めをもつ母屋を片流れ３通り配する。列柱と陸梁、真束と棟木に方杖を入れ、真束下部で桁行方向に貫を通す。真束の頂部と根元には合掌や方杖を受ける欠きこみはあるが、胴付きの杵型にはしていない。合掌・陸梁・列柱を挟み方杖でボルト締めする。

合掌頂部と真束、合掌と方杖は短冊金物で固める。真束下部と方杖、陸梁と真束は鎹で止め

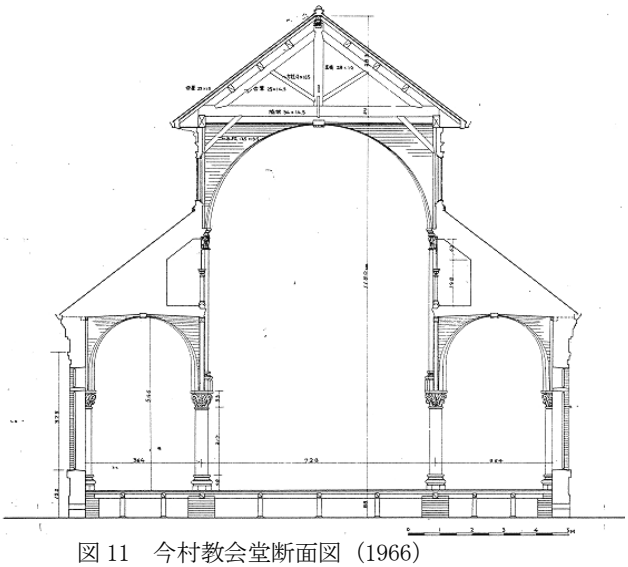


図 11　今村教会堂断面図（1966）


主廊部（2010）


主廊部小屋梁端部（2010）


側廊部（2010）

る。合掌と陸梁端部は箱金物で固める。いくつかの柱筋では、真束と陸梁を箱金物で、真束と方杖を短冊金物で固めたり、また陸梁の両側面に材を添えてボルト締めしている。正面の壁体裏面に接するトラス小屋組では、合掌の中央と陸梁間に挟み吊り束をボルト締めしているが、挟み方杖と同様に後補の可能性が高い。

側廊部では、側壁上部の梁受け石と列柱に繋梁（直材）を渡し、列柱と繋梁端部に登り梁を架ける。登り梁と繋梁を側面から斜材でボルト締めし、繋梁の下面から列柱の下方に向けて方杖を入れる。登り梁の根元と繋梁は箱金物で固め、さらに鼻母屋とは鎹で止める。合掌上には転び止めをもつ母屋を片流れ４通り配するが、補強の母屋も付加している。

ｄ．旧長崎大司教館（長崎市）

周壁は煉瓦造で３面にヴェランダを廻し、内部の間仕切り壁は主として木骨煉瓦造とする。断面形態は旧羅典神学校を始めとするド・ロ神父の一連の建築と同様に、教会堂に類似したバシリカ式断面とする。

上屋では、木骨煉瓦造の壁体上面に整ったトラス小屋組を据え、合掌上面に転び止めをもつ母屋桁を片流れ２通り配する。側柱（陸梁端部）の4.8尺内側に入側柱を桁行方向に並べ、陸梁を４点で支持する。真束は胴付きとした杵型真束で、下部には長軸（桁行）方向に貫を通す。

下屋では、ヴェランダ列柱頂部の軒桁と側柱に繋梁（直材）を渡し、繋梁端部から側柱上方に登り梁（直材）を架ける。登り梁の中央に束を立て、登り梁上面に母屋桁を２通り配する。長軸方向では、母屋束の位置を壁として側柱との空間を物入れとする。この造作を後補とする見方もあるが、先述したド・ロ神父の一連の建築と深い関連性を有している。



図 12　旧長崎大司教館断面図（文建協 2010）

ｅ．大曾教会堂（長崎県南松浦郡新上五島町）

主廊部では、列柱の頂部に敷桁を乗せ、柱筋で陸梁（直材）を架け渡す。陸梁の中央に真束を立て、真束頂部で棟木を受ける。真束頂部から陸梁端部に合掌を架け、合掌の中央から真束の根元に方杖を入れる。真束下部と陸梁を箱金物（短冊金物か）で固める。陸梁と敷桁には１間おきに火打梁を入れてボルト締めし、棟木と真束には方杖を入れて釘止めする。杵型真束であるが、特に上端部が相対的に大きい点が目を惹く。合掌・陸梁・列柱に挟み方杖を設けてボルト締めする。合掌上


主廊部（2010）


主廊部小屋梁端部（2010）


側廊部（1982）

には転び止めをもつ母屋桁を片流れ２通り配する。

側廊部では、煉瓦造側壁の上部に据えた梁受け石と列柱に繋梁（直材）を渡すが、繋梁の端部上面を側壁上面に一致させ、その上に軒桁を置く。繋梁端部と列柱に登り梁を架け、登り梁上に転び止めをもつ母屋桁を２通り配する。登り梁・繋梁・列柱に挟み方杖を設けてボルト締めする。繋梁と軒桁には１間おきに火打梁を入れる。

主廊部・側廊部ともに小屋組構成部材を挟み方杖でボルト締めしているが、この構法は大曾教会堂で初めて採用された。今村教会堂（大正２年）のそれは後補である。

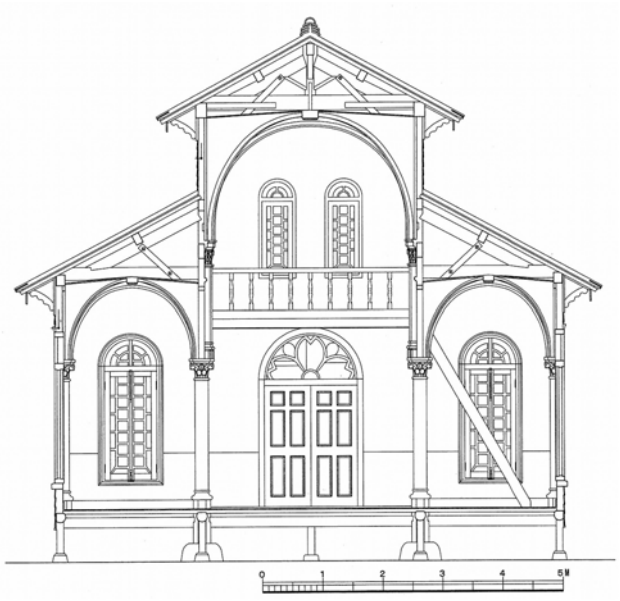

図 13　大曾教会堂断面図（文建協 2010）
（注：主廊部の挟み方杖が欠落している）

ｆ．江上天主堂（長崎県五島市）

主廊部では、列柱頂部の敷桁上の柱筋に陸梁を架け渡す。陸梁の中央に真束を立てて頂部で棟木を受け、真束頂部から陸梁端部に合掌を架ける。合掌中央から真束の根元に方杖を入れ、合掌上に転び止めをもつ母屋を片流れ１通り配する。合掌・陸梁・列柱に挟み方杖を設けてボルト締めする。真束と棟木には方杖を入れる。陸梁と真束を箱金物で固め、陸梁と敷桁には火打梁を入れてボルト締めする。

側廊部では、側柱頂部の敷桁上面と列柱に繋梁を渡し、列柱上端と繋梁端部に登り梁を架ける。登り梁上面に転び止めをもつ母屋を１通り配する。登り梁・繋梁・列柱に挟み方杖を設けてボルト締めする。繋梁と敷桁には１間おきに火打梁を入れてボルト締めする。

小屋組の主要材には直材を用い、主廊部・側廊部ともに小屋組構成部材が全て列柱と緊結されている。このような架構方法は大曾教会堂以後では共通している。田平天主堂は棟高・主廊幅ともに江上天主堂の約1.5倍という大規模な煉瓦造教会堂であるが、それと同様の架構方法が木造の江上天主堂にも採用されている。このことは、この架構方法が鉄川与助の教会堂の定型としてすでに確立されていたことを示している。


図 14　江上天主堂断面図（文建協 2010）


主廊部（2010）

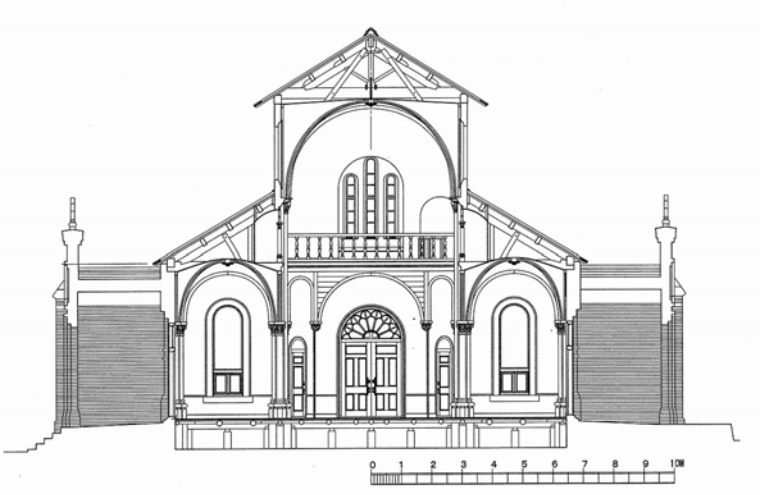

主廊部小屋梁端部（2010）


側廊部（2010）

g．田平天主堂（長崎県平戸市）

主廊部では、列柱（角柱）頂部に敷桁を乗せ、陸梁を架け渡す。真束頂部から陸梁端部に合掌を架け、合掌の中央から真束の根元に方杖を入れる。真束と合掌は短冊金物で、真束と陸梁は箱金物で固める。真束根元の陸梁上に真束を結ぶ振止めを設けるが、田平天主堂は振止めを有する唯一の遺構である。真束と棟木には方杖を入れてボルトで締め、陸梁と敷桁には１間おきに火打梁を入れる。合掌上部から列柱に向けて挟み方杖を設け、合掌・陸梁・列柱の３箇所でボルト締めする。合掌上には転び止めをもつ母屋桁を片流れ２通り配する。

側廊部では、煉瓦造側壁の上端と列柱に繋梁を渡し、繋梁の端部と列柱に登り梁を架ける。敷桁は繋梁と煉瓦壁の上に乗る。登り梁の中央から列柱に向けて挟み方杖を設け、登り梁と繋梁をボルト締めし、列柱とは釘止めする。敷桁と繋梁には１間おきに火打梁を入れる。登り梁上面に転び止めをもたない母屋桁を片流れ３通り配する。


図 15　田平天主堂断面図（文建協 2010）


主廊部（2010）


主廊部小屋梁端部（2010）


側廊部（2010）

（４）小屋組の改造

①神ノ島教会堂（長崎市）

主廊部では、列柱（円柱、小屋部では８角柱）の頂部を敷桁で固め、柱筋に陸梁を渡す。陸梁の中央に真束を立てて棟木を受ける。真束頂部から陸梁端部に合掌を架け、合掌上面に転び止めをもつ母屋桁を片流れ２通り配する。合掌中央から真束根元に方杖を入れる。真束下部と陸梁は箱金物で、真

束上部と合掌は山型帯金物で固める。真束は胴付きの枘型とせず、全体は同寸である。方杖は枘差しとし、合掌とは真束を欠きこんで組む。敷桁と陸梁に火打梁は設けない。構成部材は全て直材である。

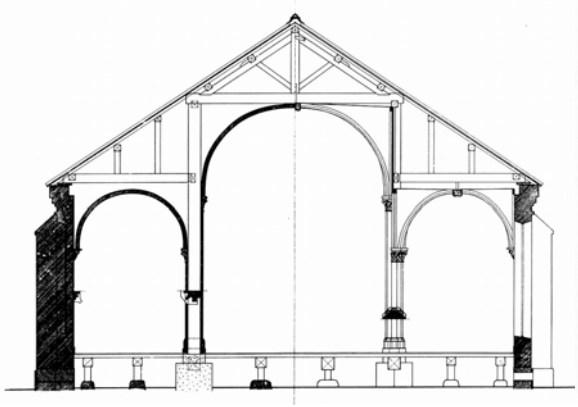


図 16　神ノ島教会堂断面図（1980）

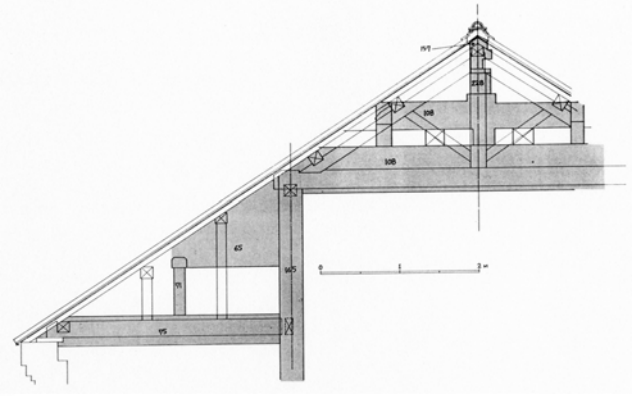


図 17　煉瓦壁に残る和小屋組の痕跡（1980）

側廊部では、煉瓦造側壁の上端に据えた軒桁と列柱に粗削りの繋梁を渡し、列柱とは鎹で止める。繋梁上に２本の束を立て、片流れ２通り配した母屋桁を受ける。軒桁と繋梁に火打梁は設けない。

小屋組の現状は上述した通りであるが、それらは改変されている。正面の煉瓦造壁体の裏面（小屋部）には図 17 に網目で示した部分の煉瓦が削り取られている。その深さは浅いもので 65㎜、最も深いものは 228㎜ である。網目の位置にはかつて梁や束が存在し、和小屋組の形態をなしていたことが分かる。つまり、主廊部では小屋梁を渡して小屋束を立てて母屋と重ね梁とを支持し、その上に棟束を立てて棟木を支持する。側廊部では繋梁に１本の束を立てて母屋を受けるが、その位置にはもう１本の繋梁が存在していた。



主廊部（1980）



主廊部小屋梁端部（1980）



側廊部（1980）

母屋の存在していた位置は現在の垂木の線よりも下方にあり、かつ棟木の位置は現在の方が低いため、以前は屋根勾配がもっと急峻であったと推定される。列柱や貫にも多くの枘穴が残っているため、天井構成も含めてかなり大規模な改変がなされたと思われるが、詳細な内容や時期などについては明確にし得ていない。

②堂崎教会堂（長崎県五島市）

主廊部では、列柱（角柱）頂部を敷桁で固めて陸梁を架け渡し、陸梁の中央に真束を立てて棟木を受ける。昭和 63 年（1988）の実測調査時にはすでに主廊部の小屋組には３種類の架構法が混在していた。

主廊部第１間の柱間筋では、敷桁上に陸梁（直材）を架け渡してトラス小屋組とする。第２間と第３間の桁行方向２間分を３等分した位置、及び第４間と第５間の２間分を３等分した位置にも陸梁を架ける。陸梁はうねった材と直材が混在し、列柱頂部に乗る場合と敷桁上に乗る場合とがある。さらに、束立て式の和小屋組、真束と母屋束を斜め材で釘止めした小屋組もある。従って、創建当

初は柱筋の束立て式和小屋組で、母屋桁を片流れ１通り配していたと思われる。後に陸梁数を増やすとともにトラス小屋組を加え、さらに平成の修理で母屋も補強して片流れ２通り配した。

側廊部では、煉瓦造側壁上端の敷桁と列柱に登り梁を架け、片流れ１通りの母屋桁を受けていた。平成の修理では柱筋以外にも登り梁を架けて母屋を片流れ２通り配するなど、かなり大幅に補強した。

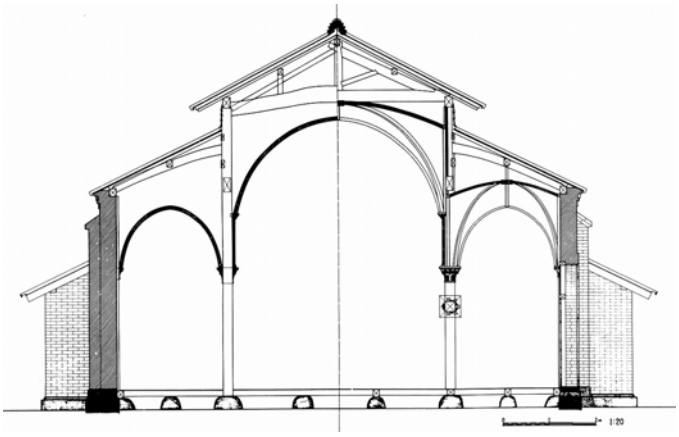


図 18　堂崎教会堂断面図（1976）

陸梁の位置は図 19 に示した。小屋組３種類の構成は図 20 に示したように、曲材とほぼ直材とがある。一方、正面鐘塔の裏面に煉瓦の接していた痕跡が残存しているため、かつては棟の位置が高く、屋根勾配もいく分急であったことが分かる。鉄川与助の建築年譜にある大正６年６月の「堂崎天主堂新築」工事はこの改造工事を指すものと思われる。

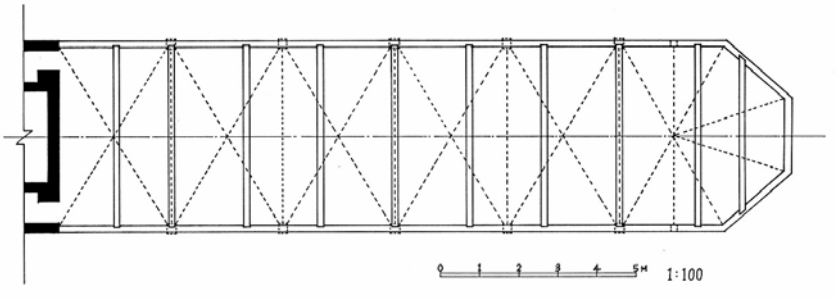


図 19　堂崎教会堂小屋梁位置図（1976）

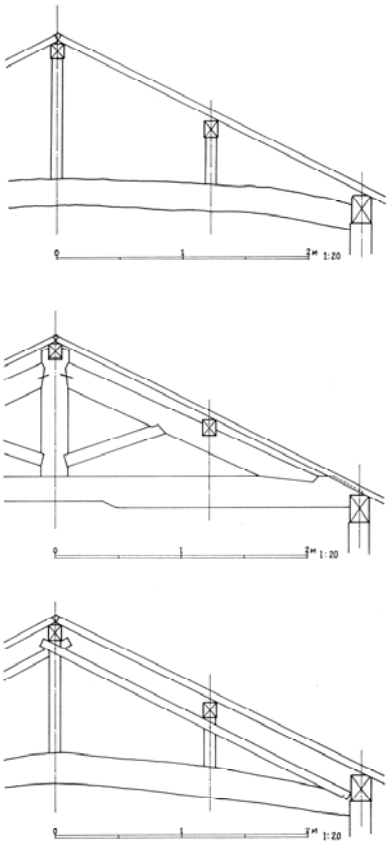


図 20　堂崎教会堂小屋組３種（1976）



主廊部小屋組Ａ（1976）



主廊部小屋組Ｂ（1976）



主廊部小屋組Ｃ（1976）



主廊部小屋組Ｃ陸梁端部（1976）



側廊部小屋組（1976）

（５）トラス期の小屋組の比較

日本人大工がトラス小屋組を理解する際に大きな問題（課題）になったのは、恐らく真束と陸梁であったのではないだろうか。一般的に、和小屋組では真束に圧縮応力、陸梁に曲げ応力が生じるが、トラス小屋組ではいずれも引張応力である。その点はトラス小屋組導入初期の小屋組の構成を見るとよく分かる。

ここでは主廊部と側廊部の小屋組の部材構成について述べ、次いで真束を中心にトラス小屋組に対する考え方の変化について述べる。カラー写真６枚は日本人大工鉄川与助が設計施工したトラス期の遺構である。モノクロ写真４枚はド・ロ神父など外国人神父が関与した（と思われる）混在期の遺構であり、相互比較のために掲載した。

①主廊部

陸梁は旧野首教会堂と青砂ケ浦天主堂では曲材（うねった材、小屋梁と呼ぶべきだろう）を用い、今村教会堂以後は直材を用いる。

真束上部を短冊金物で合掌と固めるのは、青砂ケ浦天主堂・今村教会堂・田平天主堂の３棟である。真束上下端の金物については、旧野首教会堂では全く使用せず、青砂ケ浦天主堂では上下端ともに短冊金物であり、特に下端部は方杖下端部とも水平に繋ぐ。今村教会堂の下端部では鎹を用いるが、それ以降は全て箱金物を用いる。

真束の根元と合掌に方杖を入れることによってキング・ポスト・トラス小屋組が構成されるが、旧野首教会堂には方杖がない。旧野首教会堂では陸梁の下面から列柱の下方に向けて方杖を入れ、主廊部の敷桁と列柱にも方杖を入れる。これはリブ・ヴォールト天井の漏斗状の空間を利用して、長軸（桁行）と短軸（梁行）方向の揺れに対して効果的な方法と言える。しかし、旧野首教会堂以降の全ての教会堂にはこれらの方杖はない。逆に、陸梁と敷桁を固める火打梁は旧野首教会堂にだけ存在せず、それ以外の教会堂では１間おきに設ける。

挟み方杖は合掌中央上部から陸梁と列柱の３者を長尺材で挟み、３点でボルト締めする。それは旧野首教会堂から今村教会堂（後補）までは存在せず、大曾教会堂以後の３棟には存在する。

表２　教会堂建築概要表（トラス小屋組）

部材名／教会堂名			旧 野 首	青砂ケ浦	今　村	大　曾	江　上	田　平	黒　島
主廊部	梁間寸法		13.0	18.0	24.0	14.0	12.0	20.1	24.0
	陸　梁		曲材	曲材	直材	直材	直材	直材	直材
	真　束	上端部金物	ナシ	短冊金物	短冊金物	無	無	短冊金物	山型帯金物
		下端部金物	ナシ	短冊金物	鎹	箱金物？	箱金物	箱金物	箱金物
	方　杖	真束－棟木	有	ナシ	有	有	有	有	ナシ
		真束－合掌	ナシ	有	有	有	有	有	有
		列柱－陸梁	有	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
		列柱－敷桁	有	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
	挟み方杖		ナシ	ナシ	有(後補)	有	有	有	ナシ
	火打梁	陸梁－敷桁	ナシ	１間おき有	有(後補？)	１間おき有	有	１間おき有	ナシ
側廊部	梁間寸法		6.5	9.2	12.0	8.0	7.8	11.0	12.0
	繋　梁		曲材	曲材	直材	直材	直材	直材	直材
	登　り　梁		ナシ	直材	直材(粗削)	直材	直材	直材	直材
	方　杖	繋梁－登り梁	束	ナシ	挟み梁	ナシ	ナシ	束	束（２本）
	挟み方杖		ナシ	ナシ	ナシ	有	有	有	ナシ
	火打梁	繋梁－軒桁	ナシ	鎹	ナシ	１間おき有	１間おき有	１間おき有	ナシ
構　造			煉瓦造	煉瓦造	煉瓦造	煉瓦造	木造	煉瓦造	煉瓦造
屋根構成			単層	重層	重層	重層	重層	重層	重層
内部立面構成（群）			Ⅲ	Ⅴ－Ａ	Ⅵ	Ⅴ－Ｃ	Ⅴ－Ａ	Ⅵ	Ⅵ
建設年代			明治41年	明治43年	大正２年	大正５年	大正７年	大正７年	明治35年

（注：比較のため黒島天主堂を加えた）

②側廊部

繋梁は主廊部と同様に、旧野首教会堂と青砂ケ浦天主堂だけが曲材で、その他は全て直材である。登り梁は旧野首教会堂を除いて全ての教会堂に用いる。

繋梁と登り梁間の方杖は全てに存在しない。青砂ケ浦天主堂では両者を挟み方杖で固め、旧野首教会堂と田平天主堂は束立て式である。ただし、旧野首教会堂では束が母屋桁を直接支持するが、田平天主堂では母屋桁が登り梁上にあるため、束は登り梁を支持することになる。

方杖に代わるものとして、大曾教会堂以後では登り梁・繋梁・列柱を挟み方杖を用いてボルト締めする。この状況は主廊部と同じである。今村教会堂と田平天主堂には側廊部の小屋裏へ奥行を有するトリフォリウムが存在する。床板を張り、奥壁裏面には束を兼ねた間柱が並ぶため、側廊部の小屋組ではそれぞれに工夫をしている。

側壁上部の敷桁（軒桁）と繋梁を固めるために、大曾教会堂以後では１間おきに火打梁を入れるが、旧野首教会堂と今村教会堂にはなく、青砂ケ浦天主堂では鎹で止めるのみである。

③真束

トラス期の陸梁の形状は、旧野首教会堂と青砂ケ浦天主堂が曲材で、その他はほぼ直材または直材である。真束との取り合いでは、旧野首教会堂は金物がなく、青砂ケ浦天主堂は短冊金物、今村教会堂は鎹である。大曾教会堂以降では箱金物で緊結する。このことは、トラス期初期には陸梁が曲げ力に対する部材という認識であったことを示している。混在期のトラス小屋組では、大野教会堂が粗削りの直材であるが、その他は全て直材であり、かつ箱金物を使用している。


旧鰯網工場（M18）


大野教会堂（M26）


旧大名町教会堂（M29）


黒島天主堂（M35）

真束の形状は、大曾教会堂以後の３棟では上下端を胴付きとした杵型真束であるのに対して、それ以前の遺構では胴のない角材である。旧野首教会堂の上端は合掌受けの胴付きとなっているが、下端部は胴付きとしない。青砂ケ浦天主堂では上端の合掌受け部分を二山に欠き込んでいる点が興味深い。一山にすると欠き込みが深くなるため、局所的な部材の欠損を少なくしたかったのであろう。今村教会堂では合掌頂部を直角にせず、尖らせていることと共通している。青砂ケ浦天主堂ではさらに真束下端部を斜めに削ぎ落として、同様に加工された方杖の下端部を陸梁に押し込む工夫をしている。真束と陸梁、真束と方杖をそれぞれ短冊金物で十字形に固めている。

大曾教会堂以降は杵型真束を用いるが、大曾教会堂の真束は他の２棟に比べて極端に太い。明らかに圧縮応力を考慮した対応であろう。江上天主堂を経て、田平天主堂では真束がかなり細くなり、混在期のトラス小屋組と酷似してくる。


旧野首教会堂（M41）


青砂ヶ浦天主堂（M43）


今村教会堂（Ｔ２）


大曾教会堂（Ｔ５）


江上天主堂（Ｔ７）


田平天主堂（Ｔ７）

④まとめ

以上を踏まえると、鉄川与助のトラス小屋組の理解の流れは以下のようにまとめることができよう。

旧野首教会堂では、陸梁には曲げ応力が生じるため太くうねった小屋梁を用いる。方杖はなく、側廊部は繋梁に束立て式（和小屋組）とする。真束頂部を胴付きとするが、あくまでもトラス小屋組の形態だけが模倣されたと思われる。

青砂ケ浦天主堂では、陸梁に対する考え方は旧野首教会堂に同じであるが、真束には圧縮応力が生じると考え、材積を減じない工夫をしている。短冊金物を使用し始めた。側廊部では登り梁を架けるが、方杖は入れない。

今村教会堂では、陸梁は粗削りの直材を用いるが、真束に対する考え方は従前と同様である。真束下端部と陸梁を鎹で止め、真束間に貫を通している。側廊部の繋梁と登り梁に直材を用いる。

大曾教会堂では、初めて杵型真束を用いるが、極めて太い。陸梁と真束を箱金物で固める。大きな変化としては、合掌・陸梁・列柱を挟み方杖でボルト締めしている点である。トラス面の面内剛性を高めるためであろう。水平面に関しても、主廊部では陸梁と敷桁に、側廊部では繋梁と軒桁に１間おきであるが火打梁を入れている。江上天主堂でもほぼ大曾教会堂に同じである。

田平天主堂に至って、初めて真束下部に振れ止めを備える。杵型真束も大曾教会堂に比べてかなり細くなる。トラス小屋組の形態だけでなく、各部材に生じる応力についてもほぼ理解し得たと思われる。また、混在期のトラス小屋組よりも構造的には優れていると言えよう。

鉄川与助の教会堂を概観すると、内部立面構成を主軸とした意匠面においては今村教会堂が完成期であるが、トラス小屋組（西洋建築技術）の理解という構造面においては田平天主堂を完成期とすべきである。鉄川の大きな転換点は大曾教会堂であるため、旧長崎大司教館の設計をド・ロ神父と共同で行ったことが彼に大きな影響を与えたことが遺構から推察される。

（６）結論と今後の課題

本稿の内容は以下のように要約することができる。

①　トラス小屋組に注目して教会堂建築の小屋組の変遷をたどると、和小屋期・混在期・トラス期の３期に区分することができる。

教会堂建築導入の初期においては、外国人神父の指導の下で、日本人大工は木造を中心として和小屋組で教会堂を建設した。意匠的側面は早い時期に受容できたが、小屋組を中心とした構造的側面を理解して導入するには大正期まで時間を要した。

② トラス小屋組を最初に採用したのはド・ロ神父であり、それは明治 18 年建設の旧出津救助院鰯網工場においてである。

その２年前の旧出津救助院授産場（明治 16 年）では和小屋組である。出津教会堂（明治 15 年）は和小屋組であるが、明治 24 年の増改築時には脇出入口に鉄骨の小梁と束を使用し、主廊部の小壁と側廊部の天井の一部に板木舞の漆喰壁を採用している。

③ 教会堂建築においてトラス小屋組は日本人大工に素直に受け入れられたとは言い難い。

ド・ロ神父は旧羅典神学校（明治８年）を始めとする明治初期においては、平面から軸組までの設計はしたが、小屋組に関しては日本人大工に任せたことが分かる。旧鰯網工場に至ってド・ロ神父自身が小屋組の設計まで行ったと思われる。トラス期初めの旧野首教会堂でさえ和小屋組の考え方に基づく設計であることがそのことを示している。

④ トラス期はほぼ鉄川与助の教会堂建築の時代と言い換えることができる。

トラス小屋組の構成部材の組み方にとどまらず、多種の部材が集中する真束の形態（役割）に腐心した様子を遺構から読み取ることができる。

⑤ 鉄川与助（日本人大工）がトラス小屋組の理論をほぼ理解したことを示す遺構は大曾教会堂（大正５年）が最初であり、その構成方法は面内剛性を高めるなど、外国人神父が導入したトラス小屋組よりも力学的に優れていると言える。時期的に見ると、鉄川与助は旧長崎大司教館（大正４年）をド・ロ神父と共同で設計することによって大きな影響を受けたものと推察される。

⑥ 今後は、混在期における外国人神父と日本人大工との関係を明らかにすることが重要である。

ド・ロ神父、マルマン神父、ペルー神父、デュラン神父など外国人神父が建設に関与しているにも拘わらず、和小屋組とトラス小屋組の教会堂が時期的に混在している。一方で、和小屋組がトラス小屋組に改造されているため、その時期や状況を明確にすることが西洋建築技術の導入の解明に繋がるからである。

第４節　信　仰

１．仲知小教区の開拓者たち

（１）はじめに

『新魚目郷土誌』によると、魚目を含む五島では、江戸時代の初めから中期にかけて、漁業が飛躍的に発展し、これに伴い、他地域から多くの移住民が見られ、五島の人口は急増したばかりでなく、貨幣の流通も盛んになり、経済も伸長したという。そのため、住民の大半は漁業に走り、農地の開拓のようなものを顧みる者はいなかったという。こうしたことから、当時の五島には、かなりの荒れ地が存在していたとみられる。そのため、藩は幾度となく耕地開拓を企てたようである。『五島近古年代記』には、寛永 19 年（1642）には、京都所司代板倉周防守に乞うて、京都や摂津の飢饉による難民をもらい受けて田畑の開墾を行ったことや、貞享４年（1687）には、江戸の賤民を五島に移して原野を拓かせたことなどが記されている。しかしながら、こうした試みもほとんど効果をもたらさなかったとみられている[1]。

時は経ち、『青方文書』の人別日記の中の安永５年（1776）　３月 26 日の条には、明和９年（改元して安永元年、1772）に大村藩の御領百姓 16 軒 70 人の男女が柏村渕之元に居付いたことが書かれている[2]。しかも、その翌年の安永２年にも「三井楽へ大村領ヨリ大勢居着ノ者来ル。同様地下人申付クベキ旨、市郎宗門奉行本村左衛門ヲ以テ申聞ク」[3]と『五島編年史』には記されている。また、下記に詳述する寛政９年（1797）の公式の移民に先立つ寛政７年にも 「大村領ノ者、日ノ島男鹿浦ニ居ツキ不埒ノ筋アリ。」[4] とある。ここで注目すべきは、上記２例の移民が福江島内を目的地として渡ってきたのに対して、３例目は日ノ島、即ち、福江島から北へ数十キロに位置する上五島の島にすでに外海からの移民が居着いていることである。従って、寛政９年の公的移民以外にも、このような非公式の移民が半ば黙認され、福江島以外にも広まっていたと推測される。そのうえ、安永２年の場合には、宗門奉行が立ち会っていることから考えても、大村領からの移民は潜伏キリシタンであった可能性が非常に高い。それでも、五島藩としては、領内の至る所に見られる荒地を放置するよりも、それがたとえ潜伏キリシタンであろうとも、農地を開拓し、それ相応の農作物を収穫して年貢として収めてくれる農民であったならば、迎え入れるという実利を優先させたのではなかろうか。それでも、家族単位や個人での移民では、広い荒れ地や未開地の開墾には不十分であったとみえ、結局寛政９年になると、『公譜別録拾遺』にも書かれているように、福江藩主五島盛運は「五島は地広く人少なくして、山林未だ開けざるを憂い」[5]、大村藩主に藩内からの開拓民の組織的な移住を要請したのである。

この公式の移民には、下記に示すように、大村藩家老片山波江の指揮の下で行われた。そして、外海地方の黒崎、三重の百姓 108 人が遠路五島灘を渡って、福江の六方に上陸し、それぞれが居着く場所へと移動して行ったのである[6]。彼らは地元農民と同様の待遇を受ける御蔵入百姓となり、開墾に精を出したのである。外海出身のこれらの百姓は「然モソノ多クハ所謂潜伏切支丹ノ徒ニシテ茲ニ五島ニ於ケル天主教徒ノ発展ノ第一歩ヲ印スルニ至リシナリ」[7]と『五島編年史』に記されているように、非公式の大村領からの移民同様に、彼らが潜伏キリシタンであることは、藩としてもまったく承知の上での受け入れであったようである。これを証明するように、寛政 11 年の頃にも「一月廿九日、大浜黒蔵（切支丹移住地）ニ山火事アリ……、三月、大村領黒崎ノ幸平一家妻子五人ハ、黒崎村横目宮原一戸兵衛、横目松三重村添半太夫ノ捨切手ヲ以テ来リ、居着ク。（作、六月、切支丹ノ移住トス）」[8]とある。そもそも黒崎村や三重村がある外海地方は、1613 年頃に 30 のキリシタン集落があったとパジェスは記している[9]。ただ、外海地方と言っても、キリシタンが潜伏していたのは外海全体ではなく、中央部の黒埼一帯と三重村、神浦村の一部であった。そのうえ、外海の

領有は非常に複雑であり、それぞれの地区は大村藩と佐賀藩に分属していた。当時佐賀藩は広大な領地を支配し、大藩だけに幕府をはばかる念も薄かったようで、万事に鷹揚であり、「幣藩内には黒宗門の徒は一人も無之候」と幕府に届け出て、絵踏みも行わなかったという[10]。これに対して日本で最初のキリシタン領主大村純忠を有した歴史を持つ大村藩では、禁教になるや、小藩ゆえに藩の存亡を慮ってキリシタンやキリスト教信仰に対してはことさら激しく対処した。また、藩内の細民化を恐れて、長男以外の男子には間引きが命ぜられていた。間引きや堕胎はキリシタンにとっては人殺しの大罪であった。他家へ養子に出す以外に道はなく、藩内にとどまっていては、生きる術もなかった。それゆえに、大村藩のキリシタンたちは他藩に逃亡する者が多かったという[11]。こうしたキリシタンに対する厳格な藩政もあって、外海地方の大村藩の潜伏キリシタンたちは、五島藩ではキリシタンに対して比較的寛容であることを先行の移住者から聞きつけて、五島へと渡る者が後を絶たなかったと考えられる。「五島へ五島へみな行きたがる。五島はやさしきや土地までも」という歌が流行ったのもその証拠である。

本論では、こうした歴史的背景を持つ外海地方から五島へ移住した者のうちで、最初に辿り着いた福江島からさらに北東に約 20km の距離にある中通島のさらに最北部に位置し、福江からは直線距離でおよそ 50km 離れた仲知小教区を築いた先駆者たちがどのようにして仲知という場所に移り住んだのか、その足跡を追い、また彼らが仲知小教区でどのような生活を送ったかについて論じる。

（２）入植地の地理的条件

寛政年間の外海からの移民たちは福江島の六方に到着した後、どのような場所に移動して行ったのであろうか。『五島編年史』には、「大村家老片山波江ノ指図ニヨリ黒崎、三重ヨリ之ヲ送ル。一行ハ十一月廿八日ニ福江ノ北、六方ノ浜ニ上陸シ奥浦村平蔵、大浜村黒蔵、岐宿村楠原等ニ居着キタリ。屢猶今後々コノコトアリ。或ハ居着ノ者ノ手引きニヨリテ来住セル者モアルベシ。奥浦村ニ於テモ浦頭、大泊、浜泊、堂崎、嵯峨ノ瀬、宮原、半泊、間伏ニ来住シ、又久賀島ニハ上ノ平、細石流、永里、幸泊、外輪、大開等ニ、又北魚目仲知、島首ニ来住ス、ソノ江袋ハ大村領神ノ浦大中尾ノ七右衛門、チエノ子孫ト伝ヒ、若松村ニモ桐二七名、古里二七名ナリシト伝ヘ、岐宿村水ノ浦、山川、中村、片山、浜端ノ五姓ノ祖ハ寛政四年度一〇八名ノ内ナリ。」[1]とある。すでに示したように、寛政９年の移民以前にも非公式の家族単位や個人での移民が行われ、しかも福江島以外にも広がっていたが、この寛政９年の公式移民を契機に、移民は短期間のうちに福江島の端々まで広がっている。しかも、それだけにとどまらず、隣接する久賀島のみならず、それより北に位置する中通島北部の仲知まで、すなわち五島列島全体に広がっていることが分かる。最初は 108 人と小規模であった五島への移住民は、人が人を呼んで、最終的には 3,000 人にまで膨れ上がったと言われている。そのため、元和元年（1801）２月には「二月、宗門改ノ節、先ニ正月、上下五島へ申聞ケタル五人組ノ法度書ヲ仰出ス、民ヨク之ニ化ス」[2]と、キリシタンに対する取締りを厳重にするように命ぜられている。

移民は広大な荒地や未開拓地を田畑に変え、収穫をもたらすとはいえ、3,000 人という新たな入植は予想をはるかに超えるものであり、在来住民のジゲ（地下）との間で権利をめぐっていろいろな悶着が惹起することが予想された。実際、寛政の入植から 30 余年後の文政 12 年（1829）には、奥浦で、ジゲとイツキ（居付）との間で薪採取と海草採取をめぐって代官平山弥左惣右衛門の仲介で４項目からなる協定が両者間で結ばれている。[3]奥浦での居付の勢力がどの程度であったか詳細は不明であるが、在来住民の利益を損なうほどの人数になっていたのではないかと推測される。公式移民から 80 年経った明治 10 年代には、外海からの移民の子孫は 7,000 人[4]にまで増加している。この数は、公式移民の数とは比較にならないほど、いかに非公式の移民数が多かったかを物語っている。

しかしながら、漁業に適した浜がある沿岸部や耕作が容易な平地は当然のことながら地下によって占拠されていたため、移民に残された場所といえば、漁業や農業にはきわめて不向きな場所であった。そのため、移民が入植した土地や集落は、地図１[5]で示すように、各島嶼の沿岸部が多いが、その多くは山の稜線がそのまま海まで急勾配で下降するような急斜面の途中か、大波が打ち寄せる岩場しかない海岸線沿い、あるいはリアス式海岸の入り江の奥であった。また、淵ノ元のように、砂浜がある海岸に面してはいるものの、西から海洋性の強風が吹きつけるため、樹木も育たない不毛の地であった。もちろん、樺島、平島、葛島のような小さな島々にも移民たちは住み着いた。また、福江島や中通島のような比較的大きな島の中央部に入植した移民たちもいた。しかしながら、そこは繁敷や佐野原のように山中奥深くに分け入った極めて辺鄙な場所であった。それでも、彼らは狭い土地や山の斜面でさえも苦労を厭うこともなく開墾し、見事なまでに拓かれた段々畑を作っては耕作し、次第に耕作面積を広げていった。もちろん、そうした場所の多くは水の確保が極めて困難であり、近くに川のあるいくつかの入植地を除いては雨水だけに頼る農業であり、水稲栽培には適していなかった。こうした状況は後年になってもほとんど変わることはなく、例えば1960年代の旧上五島町の統計にもそのことは明確に現れている。当時の旧上五島町の水田は全耕地面積の26%に過ぎなかったが、その９割までが、仏教徒の経営・所有であった。そして、カトリック教徒が所有する田畑の割合は、水田10%、畑が90%[6]と畑作が中心であった。

このような地理的条件から、彼らが栽培できる作物といえば、ムギやサツマイモ、ダイズのようなものであったと推測される。ただし、繁敷のキリシタンの家系に生まれ、農業の専門家でもあった木場田直氏によれば、サツマイモがいつ頃から五島で栽培されるようになったかは不明であるという。ただし、「カワチイモ」と呼ばれた時代もあることからサツマイモは通常考えられている長崎経由よりも、平戸藩からの導入の方が確実視されている。いずれにせよ、江戸時代の年貢の上納穀物としては、籾、栗、大麦、大豆と決められていたため、サツマイモは開墾した新地に自家用として栽培され、収穫物の一部は町人たちへも分け与えられていたのではないかとみられている。そして、明治の廃藩置県後の地租改正による土地の私有化と年貢の金納化にともなって、サツマイモの栽培は急激に増加し、五島の栽培作物の王者に発展したという[7]。サツマイモの王者としての地位がどれほどであったかと言えば、例えば1960年代のある年の旧上五島町の主要作物の収量は、コメ553トン、コムギ13トン、ハダカムギ520トン、バレイショ750トンに対して、サツマイモは5,824トンであり[8]、サツマイモの収量はコメやムギの収量のおよそ10倍であり、他の作物を圧倒していた。ましてや、現在のように商品経済が発達せず自給自足に近い経済社会においては、コメの収穫がほとんど見込めない畑作地帯では、サツマイモやムギが主食であったと考えられる。

2009年に仲知小教区のカトリック信徒の人たちを対象に聞き取り調査を行ったが、江袋には水田があってコメを耕作することができたが、その他の地区では水田はほとんどなく、畑作中心の農業であったという。そのため、第二次世界大戦前どころか、大戦後でさえも、彼らの主食はイモやムギであり、米の飯が食えるのは、年に数回ある特別の日だけであったという。小学校の弁当として、紙に包んだイモを持って行ったそうである。段々畑の耕作では、作物の種類や収量も限られていたために、経済的にも決して豊かではなかったカトリック家庭にとって、半世紀ほど前までは、コメは買って食べる贅沢な食べ物であった。

移民が行われたのは江戸時代後期から明治初期にかけてである。開墾した狭い土地で営まれていた農業は、落葉や刈敷を厩肥と混ぜて作った堆肥や、家畜の糞尿や人糞尿を使った農業であった[9]。それは化学肥料も農薬も使わないまったくの自然農法であり、収穫できる作物や収量も非常に限定的であったと考えられる。しかも、キリシタン信仰に忠実であった彼らは、信仰上厳格な決まり事も忠実に守り、それゆえに耕作できる日数も限られていたと推測される。こうした決まり事は現在のカトリック信仰においてはもはやほとんど存在しないが、カトリックに復帰せず先祖伝来の信仰を守り続けていたカクレキリシタン[10]の行事などからそうした決まり事がどのようなものであった

かを推察することができる。地域や組織によって若干の違いはあるものの、五島のキリシタンたちの出身地であり、彼らの習俗のもととなった外海の黒崎のカクレキリシタンの行事や決まり事を中心に紹介すると、毎日が「日繰り」あるいは「日繰帳」(「吉凶日繰表」とも呼ばれる）を元に「良か日」、「悪か日」、「ゼジュン日」などに振り分けられていた。日繰りというのはカクレ信仰独特の宗教暦を指し、御帳（おんちょう）とも呼ばれる年間の行事表とその年の旧暦の暦を比較整合させたうえで、宗教上の祭日を確定することを指す。日繰りは潜伏時代に外国人宣教師ジュワン（ジワン）神父とその助手の日本人バスチャン様が外海地方を回って周知させたものであったが [11]、ジュワン神父が突如帰国したために帳面だけがバスチャン様に残され、バスチャン様が断食と苦行によって確認したもので、外海地方の潜伏キリシタンたちが支えにしていた [12]。こうしたことからバスチャン暦とも呼ばれ、外海地方の潜伏キリシタンの信仰において特徴的なものであった。そして、これが移住民によって五島にもたらされたことから、五島のカクレキリシタンの組織は自分たちの宗教のことを「元帳」や「古帳」と呼び、組織の三役は、最高の役が「帳役（帳方）」で、御帳を繰って祝い日や障りの日を信徒に知らせ、「水方（水役）」はお授けを行い、「下役（したやく）」は行事の折に供え物のお膳を準備して出したり下げたりしていた [13]。

さて、日繰りの中で「悪か日」というのは、農作業の中で、特に種まき、肥料（下肥）の扱いのできない日を指していた。この日は針仕事もできなかった。この「悪か日」は、ドミンゴと呼ばれる日曜日と、暦の中の諸聖人の日がそれに相当した。また、昔バスチャン様が捕らえられたのが 20 日で、処刑されたのが 23 日ということで、毎月旧暦の 20 日、23 日はハツカサンチと呼ばれて「悪か日」となっていた [14]。こうした障りの日は「サシエの日（差支えの日）」とも呼ばれ [15]、制約がない日は、「良か日」と呼ばれていた。また、「ゼジュン日」というのは、「ぜじん」あるいは「ぜぜん日」とも呼ばれ、１週間のうちのくわるた（水曜）、せすた（金曜）、さばと（土曜）の３日間とカトリックの復活祭に相当する悲しみの期間中、御誕生から後の 13 日間がこれに相当した。１日１食で我慢し、聖人の威徳を讃え、犠牲を捧げる習わしで、普通は昼と夜の食事の量を半量ずつにして野良仕事をしていたという [16]。このように年間かなりの日数が「ゼジュン日」に相当し、自分自身が１食我慢することによって犠牲を捧げていた。だが、１日１食分の食事の量では、野良仕事のような力仕事にとっては相当支障があったものと思われる。また、帳方、水役、下役などの三役は一般の信者よりもさらに制約が多かった。普通に畑仕事ができる労働日は一般の信者よりもさらに少なく、より禁欲的な生活を強いられていた [17]。

しかしながら、開拓地で想像を絶する苦労を強いられ、年貢を納めれば、自分たちの食料にも事欠くような貧しさではあったが、神に祈りを捧げ、家族そろって労働ができるだけでも幸せであった。また、辺鄙な場所であったがゆえに、江戸末期から明治初期にかけて五島に吹き荒れた宗教弾圧の嵐の中で、入り江の奥や岩場の多い浜から密かに船を出して近隣の島嶼に逃れることができた人たちも少なからずいた。

そして、200 年近くの歳月が流れた。1970 年代には、自給自足の生活から経済生活へと移行する中で、辺鄙な故郷を捨てて他地域や本土への集団移住によって消滅したカトリック集落がいくつもあった。また、日本の高度経済成長期であった 1960 年代からは中卒・高卒の子どもたちが就職や進学のために島外に出てゆき、親が島内に残るという図式が続いた [18]。その結果、現在は極端な少子高齢化が進行している。例えば 2010 年４月１日現在、新上五島町では、123 ある集落のうち 65 歳以上が 50%を超える高齢化集落が 27、55 歳以上が 50%を超える準高齢化集落が 53 あるが、そのうちカトリック集落が占める割合は比較的高く、高齢化集落は７集落、準高齢化集落は 10 集落以上ある [19]。また、これにカトリックには復帰せずカクレキリシタン（元帳）にとどまった集落を加えると、かなりの数にのぼる。これは外海のキリシタンが移住した土地の地理的条件がいかに不利であったかを物語っている。

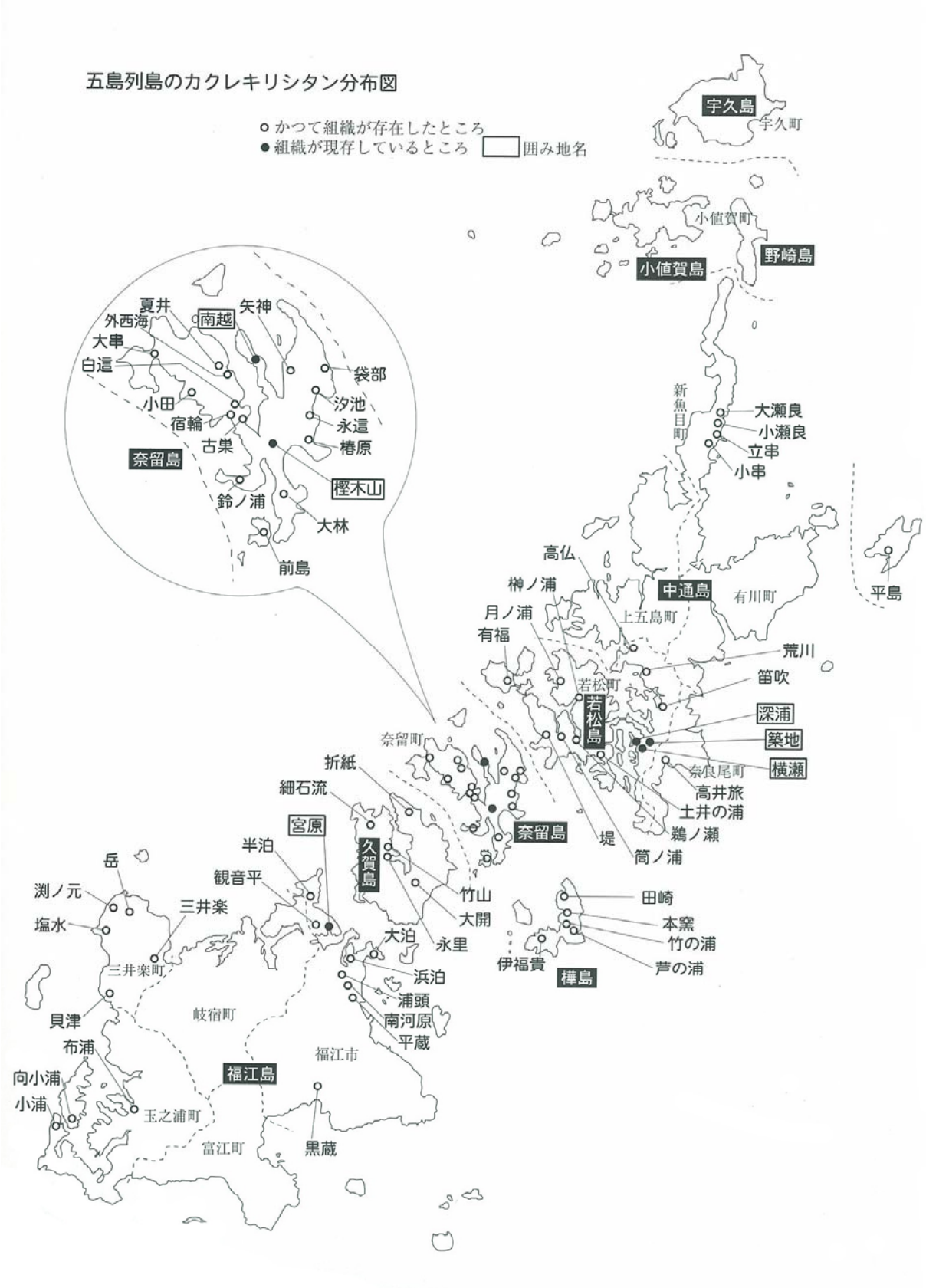


図１　五島列島のカクレキリシタン分布図（出典 『長崎県のカクレキリシタン』 1995）

（３）仲知小教区の過去と現在

仲知小教区は現在では北から順に、米山（こめやま）、仲知（ちゅうち）、江袋（えぶくろ）、赤波江（あかばえ）の４教会で構成され、その中で仲知教会が主任座教会であり、米山、江袋、赤波江の各教会はその巡回教会である。また、これらの教会名は集落名でもあり、米山、赤波江、江袋は１集落に１教会あるが、仲知だけは島ノ首、真浦（まうら）、久志、一本松、竹谷（たけや）の５集落から成り立っている。

現在では上記のように仲知教会が主任座教会として仲知小教区の中心的な役割を果たしているが、明治 39 年（1906）まではこの地区の主任座教会は江袋教会であった。また、仲知小教区という名称も、江袋教会の代わりに仲知教会が主任座教会となったため、変更されたものである。旧江袋小教区と同様に当時の仲知小教区は、江袋、赤波江、仲知、米山、さらには現在ではもう無人島となってしまった小値賀の野崎島の野首と瀬戸脇、そして現在では曽根小教区に属している大水、大瀬良（おおぜら）、小瀬良（こぜら）の９つの集落、７つの教会から構成されていた。このように当時の小教区は広範囲に及んでいたが、当時の信徒たちは現在とは比較にならないほど敬虔で、祝祭日や日曜日になると艜舟に乗り合って、仲知教会や大水教会に行ってはミサにあずかっていた。また、陸路の場合には、早朝の３時、４時に起きて、暗い山道を歩いてミサに参加していた。現在では道路も整備され、米山から江袋や大水までは車で 30 分足らずで辿り着けるようになったが、当時はそれぞれの集落を連絡しているものと言えば、海路か細くて険しい山道でしかなく、しかもその山道もいったん雨が降れば、ぬかるんでしまう泥道であった。そんな道でさえも、わらじや草履や下駄を履いて何時間もかけてミサに参加するのが普通であった。信仰のためならば、信徒はそうした苦労もまったく厭うことはなかった。村中の人々が々信仰によって結ばれ、典礼を祝うことは彼らにとっては大きな喜びであった。人々は大祝祭日を楽しみ、お祝い日を目指して働き、典礼を生活の中心に置いていた[1]。時は経ち、今では生活の中に信仰があるが、昔は信仰の中に生活があり、信仰が何にもまして優先されていたのである。

仲知小教区は五島カトリックの中でも特に信仰が篤い地区として知られている。それを証明するように、故島本要大司教を始めとする幾多の司祭や修道士、修道女を輩出し、現在も長崎大司教区のみならず、全国のカトリック界で数多くの仲知出身者が活躍している。もちろん現在では少子化や宗教心の希薄化の影響を受けて、以前ほど司祭や修道士、修道女を目指す人は少なくなってきてはいるものの、それでもまだ神の道を目指そうとする少年少女がこの地区から出ている。

江袋、赤波江、米山の集落は、現在でも仲知小教区に属し、それぞれ固有の教会を有している。しかしながら、これらの教会に司祭は不在で、仲知教会の巡回教会となっている。大水の集落にも教会はあるが、大水教会は 1979 年（昭和 44 年）の小教区の見直しによって曽根小教区に所属するようになり、曽根教会の巡回教会となった。そして、野崎島にあった野首と瀬戸脇の集落であるが、この両集落には、他地区よりも遅れて開拓者たちが入植し、開墾に励んだ結果、瀬戸脇には 1882 年（明治 15 年）に、野首には 1908 年（明治 41 年）に教会が建設されるほどの開拓者たちの数となった。しかしながら、1960 年代から 70 年代にかけての日本の高度経済成長の流れに抗うことができずに、信徒たちが集団で移住した結果、野崎島は無人島となり、現在では野首教会と開墾の痕跡を残すのみとなってしまった。

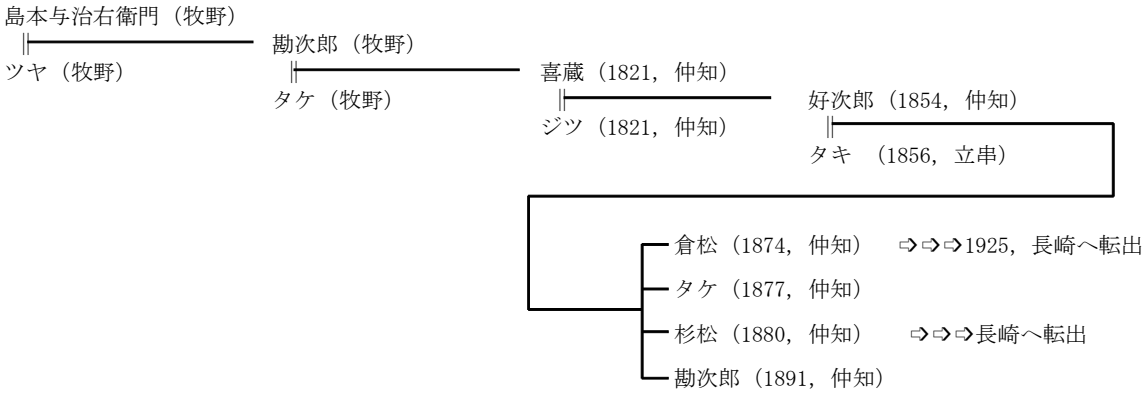
それでは、このような特徴を持つ仲知小教区はどのような人たちを祖先としているのであろうか。すでに述べたように、『五島編年史』に「北魚ノ目仲知島、島首ニ来住ス、ソノ江袋ハ大村領神ノ浦大中尾ノ七右衛門、チエノ子孫ト伝ヒ」とあるように、公式移民の初期段階から仲知小教区は外海地方出身者によって開拓された。本論は古い洗礼簿や教会籍などを基本資料として著された『仲知小教区史－信徒移住 200 年記念－1797～1998』(以下小教区史と省略する) と『お告げのマリア修道会、仲知修道院の 100 年の歩み』を中心資料とし、特に開拓者の家系略図の作成においてはは小教区史

を基本資料としているが、この小教区史にも間違いや見落とし、あるいは内容の整合性に疑問を抱かざるを得ない部分もあることが判明した。そのため、不明な箇所や明らかに誤っていると思われる箇所には、検証を加えることとした。

（4）島ノ首の開拓者たち

江戸時代、中通島の北部にある仲知、米山、津和崎の３地区は五島藩ではなく、平戸藩の領分であった。浦川和三郎の『五島キリシタン史』によれば、この３地区のうち、米山と津和崎には、明治初年までキリシタンの存在はなかったという[1]。それに対して、近年まで仲知は純粋にキリスト教徒だけの集落であった。これは江戸時代に外海地方からやってきた潜伏キリシタンの移民によって開拓された土地という歴史を持つことによるものである。そして、その第一開拓者というのは黒崎村牧野出身のドミンゴ島本与治右衛門とドミニカ・ツヤの夫婦であった。与治右衛門は狩人でもあり、五島には、獲物を狩りに渡ったと伝えられている。そして、仲知の島ノ首という場所に海草が打ち上げられているのを見て、格好の移住場所と考え、一家をあげてここに移住したという[2]。仲知小教区の古い洗礼簿と教会籍の調査によると、島ノ首への移住開拓夫婦は６組いるが、時代区分によってこれらの夫婦は第一次開拓夫婦と第二次開拓夫婦に分類できるという[3]。

それでは、第一次開拓夫婦である島本与治右衛門とツヤ夫婦の家系略図から見ていこう。



島本与治右衛門・ツヤ夫婦の家系略図[4]　　‖は夫婦関係　（　）内は出生年と出生地、以下同様

この家系略図を見ると、与治右衛門とツヤはともに外海の牧野出身であり、息子の勘次郎も牧野で生まれていることが分かる。しかも第三世代の喜蔵が 1821 年仲知生まれであること、また当時の結婚年齢などから考えると、与治右衛門とツヤは若夫婦で幼子を連れての移民であったと推測される。また、第二世代の勘次郎とタケは、同郷者同士のよしみで結ばれたとも考えられる。第四世代の好次郎の妻タキは立串出身であることが注目される。この立串という地区は、浜側は漁業を生業とする仏教徒の集落として知られるが、タキの出身地の立串は地図でも示しているように山側の上立串と呼ばれる集落を指すと考えられる。この上立串への外海キリシタンの入植年代は不明であるが、タキの生年から推察すれば、江戸末期にはすでに上立串におけるキリシタンの入植や定着が進んでいたのではないかと思われる。ところが、上記に示した明治 39 年の仲知小教区の集落の中に上立串は含まれていない。しかしながら、内藤莞爾の昭和 46 年の戸口調査によると、上立串は 37 戸 182 人から形成される立串郷の一集落であったが、内藤は上立串をキリシタン集落、いわゆるカクレキリシタンの集落に位置づけている[5]。つまりこれは、上立串には少なくとも江戸時代末期には、

外海からの潜伏キリシタンの入植が行われて１つのキリシタン集落を形成していたものの、明治期になって禁教が解かれた後も、カトリックには復帰せず、先祖伝来の潜伏キリシタン時代の信仰を昭和後期までずっと維持しつづけた集落であったことを意味する。このことは上立串に近接する上小串にも当てはまる。明治６年になってキリシタン禁制の高札の撤去によってキリシタンたちにようやく信仰の自由がもたらされると、それまで若干の違いはあっても、元帳や旧キリシタンとして皆一様にキリスト教を信仰していたキリシタン集落は、カトリックに復帰することを決めた集落と先祖伝来の潜伏キリシタン時代の信仰をそのまま維持することを決めた集落の大きく２つに別れてしまったのである。そして、カトリックに復帰した集落とキリシタン集落との間にはある種の対立が生まれるようになった。しかしながら、それ以前には外海から移民してきたキリシタン仲間としてお互いに深い親交があったのである。そのため、以下に示す仲知地区を拓いた最初の開拓者たちの家系略図の中にも、立串や小串を経て仲知にやってきた入植者たちが少なからずいるし、立串や小串から仲知に嫁いできた女性たちがいるのである。

さて、好次郎とタキ夫婦には４人の子どもがいるが、この家に特徴的なのは、長男である倉松が1925 年に 51 歳で、また次男の杉松も、転出年やその当時の年齢については不明であるが、いずれも長崎に転出していることである。そして、最終的に仲知に残って島本家を継いだのは末子の勘次郎である。つまり、本来ならば島本家を継ぐべき人物と想定される長男が地元に残らずに長崎へ転出し、三男が家を継承していることである。ところが、この事例は単に島本家だけにとどまらず、他の五島のキリスト教系の家族にも該当するため、その特徴的な点を以下に示すことにする。

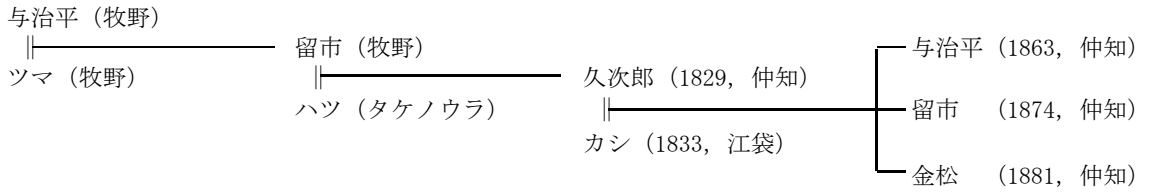
江戸時代においては藩も長子に家督を継がせることを命じていたため、長子相続が長い間日本社会の慣行となっていた。ところが、島本家はすでに指摘しているようにこの日本的慣行である長子相続から逸脱している。しかしながら、内藤莞爾が上立串と上小串のキリスト教系家族を昭和 40 年代に調査したところ、長子相続型は 35%、隠居分家型は 29%、末子相続型が 25%であり、通日本的相続のパターンから逸脱しているケースが多く見られたのである[6]。五島の他のキリスト教系の集落でも大同小異である。その背景には、まずキリシタンは堕胎や子殺しをせず、授かった子どもはすべて産み、育てることを習慣としていることがあげられる。好次郎とタキ夫婦も、それぞれが 20 歳と 18 歳のときに最初の子どもである倉松が生まれている。ところが、末子の勘次郎が生まれた時、夫婦はそれぞれ 37 歳と 35 歳であった。長子誕生から 17 年後の末子誕生である。そのため、長子が成人して結婚する時には、親はまだ若くて生業に従事しているため、家督を継がせる年齢には至っていない。そこで行われたのが長男や次男にそれまで一緒に住んでいた家を譲って、親が未婚の子どもたちを連れて分家して他に居を移すことであった。やがて末子が成人して結婚をする頃に親は引退し、家督を末子に継がせるのである。藩政期に五島で形成された隠居分家の伝統が明治以降も持ち越されたようである[7]。

上記の家族調査において、五島のカクレキリシタン系の家族には、連綿と続く家系としての伝統がないという印象を内藤は受けたという。そのため、自分たちが生まれた家を本家（もといえ）とは言っても、いわゆる本家（ほんけ）や分家、あるいは総本家や草分けというような基幹家族の概念自体が彼らには欠落していたようである。そうしたことから、原住地についても、大村藩とか外海地方とか、漠然とした地域を指すだけで、具体的な地名はあがってこなかったそうである。また、親の法要も仏教にならって、１年忌、３年忌、７年忌、13 年忌などが営まれるが、神職を招くようなこともない。しかも、30 年忌で打ち止めとなり、30 年忌を過ぎると、位牌は墓場に持参して、捨ててくるという、遠祖や始祖のイメージが極めて薄かったようである。しかしながら、家系の観念とは別に、家族集団の世代的な継起は行われていて、相続や分家がそれ相応に行われていたそうである[8]。

こうしたことから、島本家を継いでいる第二世代の勘次郎、第三世代の喜蔵、第四世代の好次郎

が長子であるかどうかは家系略図からは明確に知ることはできない。勘次郎と好次郎は名前からすると、次男であることを想像させる。また、喜蔵と好次郎の 33 歳という年齢差から考えると、好次郎も長子ではないようである。

さて、次の一家も上記の島本与治右衛門家と同様に牧野出身の島本与治平・ツマ夫婦である。この夫婦も島ノ首の第一次開拓夫婦と位置づけられている。名前の類似から、与治右衛門と与治平は兄弟か親戚同士とも考えられる。以下がその家系略図である。

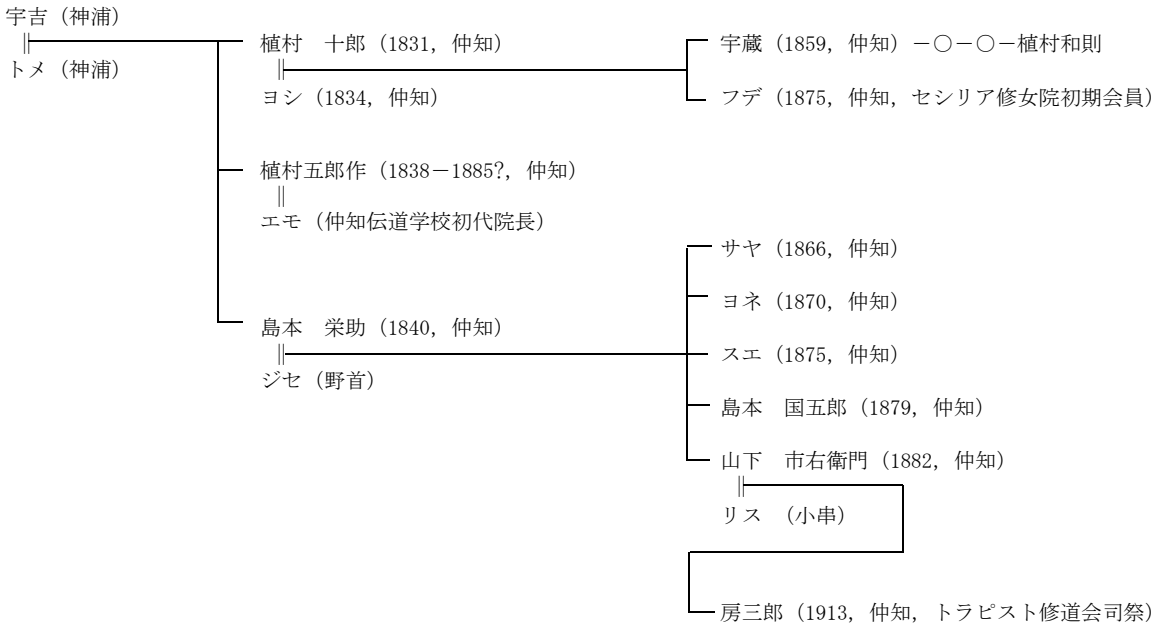


島本与治平・ツマ夫婦の家系略図 [9]

この島本家の三代目の久次郎・カシ夫婦は仲知と江袋という近隣のキリシタン集落出身同士の結婚である。江袋も最初の公式移民たちによって開拓された集落である。ただ、この一家の家系略図は郷土史家の浦敏雄によって洗礼簿などを基に作成されたとはいえ、第四世代の名前が第一世代と第二世代の名前と同じであり、また第三世代の久次郎・カシと第四世代末子金松の年齢差が大きいのが気になるところではある。この一家の第四世代も 1930 年代になって転出しているが、転出先は不明である [10]。また、第四世代の誰が転出しているのかも、『仲知小教区史』には明記されていない。この一家の系譜等は参考程度にとどめたい。

次の島本宇吉・トメ夫婦も島ノ首の第一次開拓者夫婦である。上記の島本両家の第一、第二世代が牧野出身であったのに対して、この一家は神浦出身である。また、島本与次右衛門と島本与治平の２家族の第三世代が 1820 年代生まれなのに対して、宇吉の家族は第二世代の長男が 1831 年に仲知で生まれ、三男の栄作に至っては 1840 年生まれであることなどから考えると、この夫婦の場合は、結婚直後に五島に渡ってきたと推測される。入植の年代に関しても、『仲知小教区史』では、この宇吉・トメ夫婦を含めた３組の第一次開拓夫婦の特性として、「早い時期（1810～1820 年）に西彼杵・外海から移住した夫婦」[11] としているが、上述のように、宇吉・トメ夫婦の長子や末子の生年から考えると、入植したのはむしろ 1820 年代後半ではないかと思われる。これに対して、島本与次右衛門・ツヤ夫婦と島本与治平・ツマ夫婦の場合は、宇吉・トメの若夫婦とは異なり、浦川和三郎が『五島キリシタン史』で与次右衛門夫婦に関して、「五島植民熱の盛んだった寛政年間に、鹿や猪を狩りに上五島に渡った」[12] と語っているように、宇吉・トメ夫婦に先立つ２組の夫婦の入植は 1810～1820 年ではなく、寛政年間の初期移民時代とするのが正しいのではなかろうか。『仲知小教区史』の 1810～1820 年の入植時期は３組の夫婦のいずれにも該当しないようである。

それでは、島本宇吉・トメ夫婦の家系略図を見てみよう。



島本宇吉・トメ夫婦の家系略図[13]

『仲知小教区史』では、この宇吉・トメ夫婦は島ノ首だけではなく、真浦の浜の開拓も試みたのではないか[14]、また開拓年も1820年代[15]と書かれているが、宇吉・トメ夫婦の島ノ首の開拓の開始を1820年代後半だとしても、現在のように開墾するための機械や道具類がほとんどない時代である、若夫婦だけで同時期に２カ所の荒れ地の開墾が果たして可能であっただろうか。ただ、1880年代に現在の仲知教会共同墓地の前にある山畑が彼らの次男の植村五郎作の所有となっていたことだけは下記に述べるように確かである。いずれにしろ、資料が乏しい中で、入植・開拓年を特定することは難しい。

さて、宇吉・トメ夫婦の息子たち夫婦が開拓に精を出している頃と時を同じくして、パリ外国宣教会のフレノー師が鯛ノ浦を根拠地として、上・下五島の各地を巡回していた。ところが、車がない時代である。徒歩や小舟での広範囲に及ぶ巡回地の司牧にはおのずから限界があった。そのうえ、潜伏時代に土俗化していたキリシタンたちの宗教は、カトリックの教えや信仰から多かれ少なかれ逸脱していた。そのため、五島各地のとりわけ辺鄙な集落に住んでいる信者たちに対して洗礼を授け直して告白させ、聖体の秘蹟を授けるために、一貫した要理教育を施すことを徹底させなければならなかった。そこで、宣教師たちの巡回司牧後も、信者たち自らの手によってこの宗教教育を継続させるために、信徒の組織が各教会に作られた。それが、「宿老」、「教方（おしえかた）」の制度であった。ところが、「教方」の専門家、宣教師たちの手足となって働く伝道婦の養成が必要であった。そこでフレノー師は伝道学校の創設を思い立ったのである。フレノー師はこの構想を仲知の信者たちに打ち明け、その協力を求めた。

フレノー師の要請に応じたのが、宇吉・トメ夫婦の次男植村五郎作の妻エモと、真浦の項で述べる島向（真浦）ナルとその養女で後に仲知修道院の第四代修道院長になるソノ親子であった。彼女たちは自分たちの家屋と土地財産すべてを提供して、家族全員でフレノー師の計画実現のために全面的に協力したのである。エモが捧げたのは、現在の仲知教会共同墓地の前にある山畑約１反２畝であった。また、島向ナルが提供したのは、約１反余の畑、家と土地、物置小屋などであった。こうして、明治15年（1882）頃、仲知伝道学校（伝道婦養成所）の基礎が築かれたのである。そして、この伝道学校の初代院長の務めを担ったのが、最年長の植村エモであった。彼女は「かかさん」と呼ばれていた。ちなみに、エモ以外の伝道学校の最初の会員は、真浦（島向）ナル、真浦ソノ、赤

波江トメ、植村フデ、真浦キミ、竹谷サツ、真浦オモ、山添マキの９名であった。そして、創設３年後の明治 18 年（1885）に仲知伝道学校はセシリア修女院となり、それが後に仲知修道院となったのである[16]。

植村エモによって伝道学校に寄附された土地の開拓や所有に関しては、所有者はもともと宇吉・トメ夫婦の次男植村五郎作であったこと、また土地を寄附した後、伝道学校が本格的に稼動し始めた時に、エモがその伝道学校で最年長であったことなどを考えると、この土地は宇吉・トメ夫婦が開拓を開始し、五郎作・エモ夫婦がそれを本格的に行ったのではないかと考えられる。また、『仲知小教区史』には、「この土地は五郎作が 1885（明治 18 年）年 10 月に死亡すると彼の妻植村エモによって、セシリア修女院の共同体に寄付された」[17] とあるが、寄付されたのはセシリア修女院ではなく、その前身の明治 15 年発足の伝道学校（伝道婦養成所）である。伝道学校の発足年を考えると、この土地は五郎作の生前すでに伝道学校に寄付されていたことになる。そのうえ、エモは伝道学校の初代院長になっている。どちらが正しいのかは不明であるが、エモと伝道学校の関係については『仲知修道院 100 年の歩み』に詳述されていることから考えると、寄付されたのはおそらく明治 15 年頃のことであろう。ただし、「明治 15 年頃（下線筆者）」と書かれていることから、時間的に１～２年のずれがあることは否めない。

さて、島本宇吉・トメ夫婦一家の家系略図に話を戻すと、この家族もキリスト教系家族に典型的な末子相続の例である。島本の姓を継いでいるのは末子の三男栄助だけである。しかも、長男の十郎と次男の五郎作は分家するだけでなく、島本の姓を捨てて、新たに植村という姓を名乗っている点が注目される。彼らが創氏改名に至った明確な理由は不明であるが、それでも当時の状況からいくつかの理由が考えられる。まず、明治３年９月 19 日太政官布告「自今平民苗氏被差許候事」が出されたことである。この制度は、それまで身分別の族属別方式の戸籍法を廃止し、属地主義の戸籍法を実施するために、全国民を「苗字と名」で把握することを目的とした。しかし、これは平民が苗字を公称することが許容されたものであり、強制するものではなかった。そのため、喜んで苗字を公称したり、創氏した事例もあったようである[18]。しかも、明治６年に発布された「徴兵令」においては、60 歳以上の戸主の跡取り、不具廃疾の戸主の跡取り、それに現戸主は徴兵から免除された[19]。外海出身のキリシタン移民やその家族、あるいはその子孫は、荒れ地の開拓によってようやく田畑を手に入れ、そこに作物を植えて糧を得ていた。ところが、その田畑は山間の狭い土地や段々畑であった。そのため、耕作には、少なからず人手が必要であった。徴兵によって男手を取られることは開拓一家にとっては痛手であり、それを避けるため、「兵隊養子」、すなわち兵役を逃れるために、苗字を変えるケースもあったと考えられる[20]。そして、「従前ノ禁例ヲ解キ候ノミニテ今后平民苗字相用候モ不相応モ亦各自ノ勝手」と権力側も認めざるをえない状況になり、明治８年２月 13 日になると、徴兵事務に支障をきたしていた陸軍省の要請を受け入れて、太政官によって「平民苗字必称令」が布告されたのである[21]。そうした中、他のキリスト教系家族にも見られるように、自分たちの生存を優先させるため、彼らの間では分家と同時に新たな姓を名乗ることが抵抗なく行われるようになったようである。こうした状況もあり、島本宇吉の長男十郎と次男の五郎作の２人とも、あまり島本の姓にこだわることもなく分家して植村姓を名乗ったのではないかと考える。

また、このような改名の背景として、開拓民として移住や移動、転居は日常茶飯事であり、また分家も繰り返されることから、家や定着に対してあまりこだわりもなかったことが考えられる。こうした心理が本家の姓への執着心の欠如にもつながっているように思われる。それに、新しい概念であった苗字は平民であった彼らにとって家系として親から子へと連綿と続くものという概念形成もまだなされておらず、定住地に従って家を新たに建設するように、苗字も新たに作られたのではないかと考えられる。そのうえ、家そのものもようやく雨露をしのぐほどのものでしかなく、財産

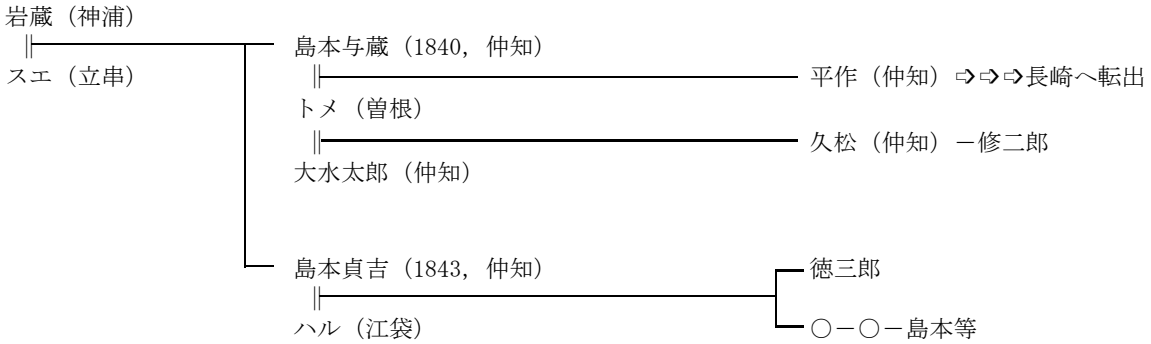
としての重要性も低く、家へのこだわりもなかったこともなお一層苗字へのこだわりのなさにつながったのではないかと考えられる。また、宗教的な迫害も明治初期までは常にあり、生命や生活は不安定で、こうした状況はある意味現世的な意味や価値に対するこだわりの希薄さをも生じさせたのではなかろうか。これは、キリスト教の理念の根本にある現世の富や名誉を否定し、キリストのように無私無欲で人のために愛をもって尽くす行為そのものを重視する考え方、現世は一過性のもの、正しい行いをして来世に希望をつなぐという考え方と無縁ではなかろう。ことに現世が厳しければそれだけ余計に来世に夢を託したいという思いが強かったのではなかろうか。いずれにしろ、所有している土地を伝道学校に進んで寄附したエモの行為はこうした当時のキリスト教徒たちの考えに則していたものと思われる。

さて、島本家を継いだ三男の島本栄助については、後述するような島本貞吉や真浦栄作・栄吉父子が平戸で受けたと同じような信仰体験をしたことが子孫によって伝承されていると『仲知小教区史』には記されている[22]。ところが、『五島キリシタン史』には栄助の名前は見当たらない[23]。ただ、この当時34人もの仲知のキリシタンたちが宗教弾圧を受けている。恐らく真浦栄作・栄吉父子ほどの過酷さではなかったにせよ、この34人の中の1人として、算木責めや青竹で叩かれて気絶したものの、拷問にも屈せず、信仰を貫いたのではないかと思われる。次男五郎作の妻のエモの行為や栄助の信念に見られる信仰心は一家で共有されて後代まで引き継がれてゆき、家系略図にもあるように、第三世代や第四世代には修道女や司祭が出ている。

以上あげた3家族が第一次開拓夫婦とその一家だとすれば、次にあげる3組の夫婦は第二次開拓夫婦とその家族である。この第二次開拓夫婦の特徴としてあげられるのは、いずれも、立串や小串の開拓を経て、島ノ首に入植していることである。

まず、神浦出身の島本岩蔵と立串出身のスエの夫婦である。スエは下記のように立串出身ということから、開拓移民の第二世代として五島で生まれていることが分かる。第一次開拓夫婦のいずれもが外海出身者であり、その子どもたちでさえもその多くは外海で生まれて、幼少時に五島に渡ってきていたことと比較すると、第二次開拓夫婦は、開拓も第一次開拓夫婦に比べて遅れをとっていたが、夫婦の年齢自体も若かったようである。

それでは、島本岩蔵・スエ夫婦の家系略図を見てみよう。



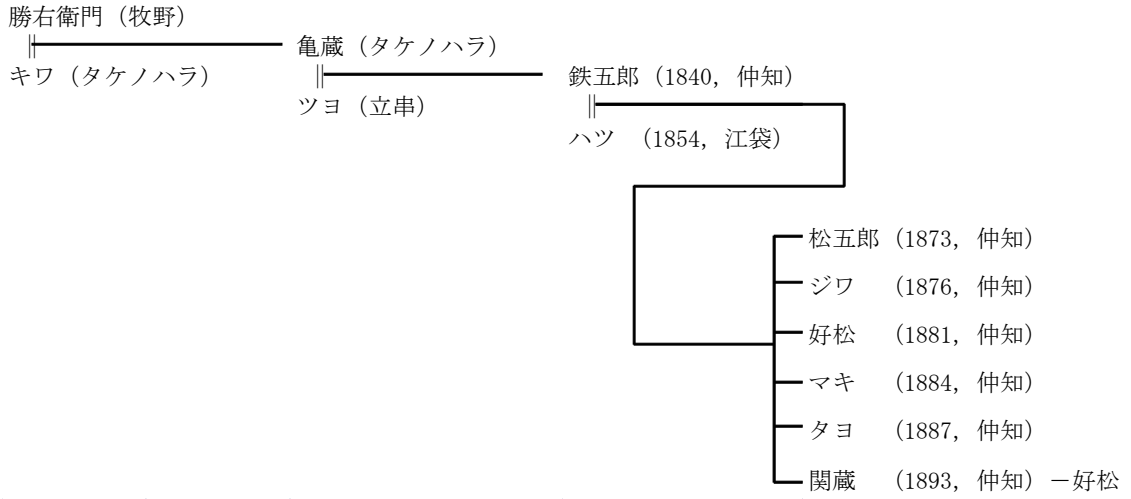
島本岩蔵・スエ夫婦の家系略図[24]

この夫婦は、1830年代後半に最初の入植地である立串から、島ノ首へ移住している。1840年生まれの長男の与蔵は、明治2年（1869）に、仲知の井手渕茂助や真浦才吉とともに、大浦天主堂でパリ外国宣教会のロケーニュ師から成人洗礼を受けている。また、与蔵夫婦は4男2女に恵まれている。与蔵は妻トメの連れ子の久松も入籍し、我が子同然に育てたという[25]。

次男の貞吉であるが、長崎で成人洗礼を受け帰郷した後、信仰を公表したため、役人に捕らえられ、中谷勇吉や真浦才吉、久志セキ、山下エモら男女合わせて33人と一緒にまず小値賀に送られた

後、平戸に移送されている[26]。平戸では、真浦栄作、栄吉父子、中谷勇吉らと最も残酷な拷問を受けたという[27]。また彼は後年未信者の子どもでさえも里子として育てている[28]。この未信者という表現には注意が必要である。当時、キリシタンの間では、カトリックに復帰しようとする勢力と、先祖伝来のキリシタンの考えを貫こうとする勢力が対立していた。そのためカトリック側から未信者と言えば、カトリックに復帰しようとはしなかった元帳も意味した。また、伝統的にキリシタンのイツキと仏教徒であるジゲとはほとんど接触がなく、地下からは一段下の人間と見下されていたキリシタンたちにとって、未信者とは非キリシタンでもあった。対立関係の元帳であったにせよ、あるいは自分たちを軽蔑する仏教徒であったにせよ、未信者の子を養育した貞吉は万人に対する愛を唱えたキリスト教精神の真髄を理解する人格者であったと言えよう。

次に紹介するのも第二次開拓夫婦に位置づけられる島本亀蔵・ツヨ夫婦である。彼らも 1830 年代に立串から島ノ首へ移住している。



島本亀蔵・ツヨ夫婦の家系略図[29]

小教区史では、この一家に関しては家系図を示しながら、鉄五郎とハツの結婚について若干の説明があるのみで、詳しくは語られていない。しかしながら、この亀蔵・ツヨ一家は、久志の項で述べる亀蔵・ツヨ一家と同一である。生年から察すると、亀蔵・ツヨ夫婦の長男は佐蔵であり、二男は鉄五郎である。この一家で特徴的なのは、第一世代のキワと第二世代の亀蔵の出生地がタケノウラということである。このタケノウラという地名は現在の五島列島には見当たらないが、恐らく三井楽の岳、あるいは柏を指すと考えられる。勝右衛門は外海の牧のから寛政年間に独身で五島に入り、入植地の女性キワと結婚したと思われる。キワは寛政年間かそれ以前に植民した移民二世か三世であろう。勝右衛門・キワ夫婦は三井楽の開拓を試みた後、息子の亀蔵を連れて立串に入植したのである。亀蔵は入植地立串生まれの女性ツヨと結婚し、1830 年代に島ノ首に開拓の場を移したようである。小教区史の久志の項では「この家系は第二世代の亀蔵・ツヨ夫婦の時（1830 年代）立串から久志に移住し、その開拓者となる」とあるが、久志の解説では、「仲知の歴史は島ノ首と真浦の浜を開拓したキリシタンによって始まるが、この２地区の開拓後、間もなくして 1830 年代に久志と真浦の山手の開拓が行われた」とも書かれている。島ノ首と久志のどちらの開拓が先なのか不明である。しかしながら、同じ立串の岩蔵・スエ夫婦が 1830 年代後半に立串から島ノ首に入植していることから察すると、亀蔵・ツヨ夫婦はまず島ノ首の開拓を試みたと考えるのが妥当であろう。また、小教区史では岩蔵も亀蔵も島本姓で紹介されていることから、亀蔵一家は島ノ首を拠点に、久志の

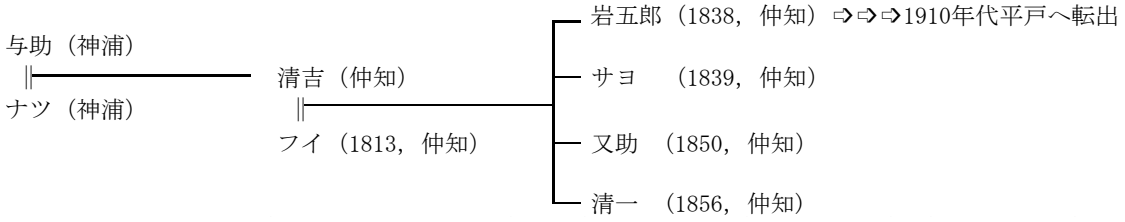
開拓も試みたとも考えられる。なお、亀蔵の長男佐蔵は久志の姓を、次男の鉄五郎は島本の姓を名乗っている。ここにも長男分家の例を見ることができる。

以上第二次開拓夫婦二組とその系譜を紹介したが、『仲知小教区』には第三番目の夫婦として島本栄蔵・ヨネ夫婦が取り上げられている[34]が、その家系略図は示されていないため、ここでは名前を紹介するだけにとどめたい。

（５）真浦の開拓者たち

真浦の開拓も、島ノ首の開拓と同じように、第一次開拓夫婦と第二次開拓夫婦に分類することができる[1]。第一次開拓夫婦は真浦与助・ナツ夫婦と島本宇吉・トメ夫婦であるが、後者についてはすでに島ノ首の第一次開拓夫婦の項で紹介したので、ここでは割愛する。

それでは、真浦の第一次開拓夫婦である真浦与助・ナツ夫婦の家系略図を示そう。

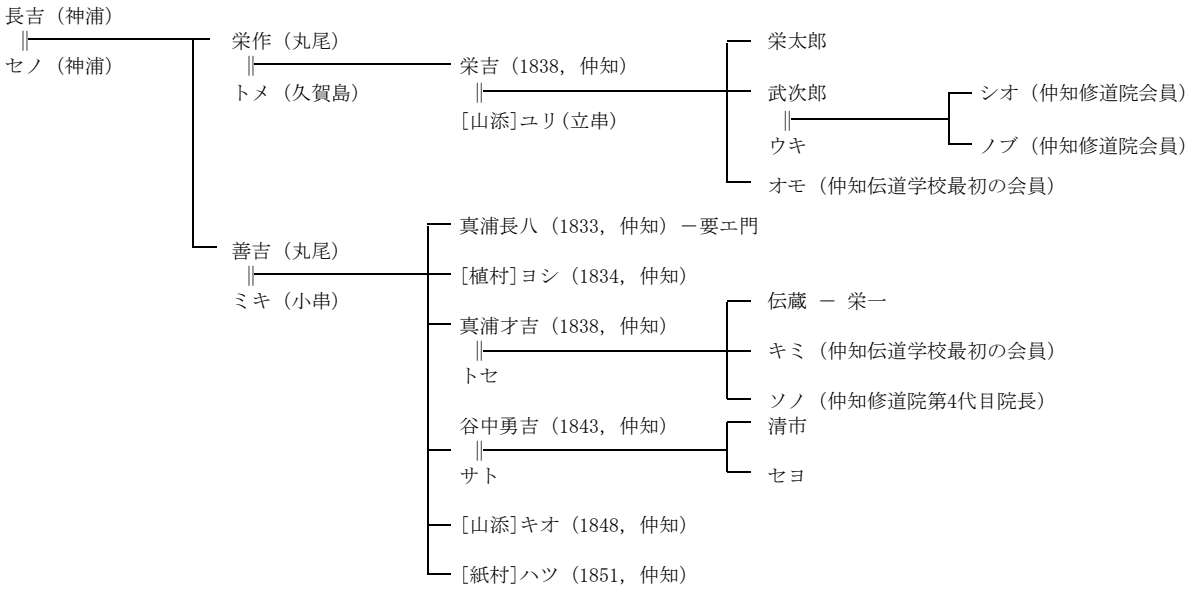


真浦与助・ナツ夫婦（真浦の浜の開拓夫婦）家系略図[2]

この夫婦は２人とも島ノ首の第一次開拓夫婦と同じように、外海の神浦の出身である。しかしながら、第二次世代の清吉は仲知生まれであり、また清吉の妻のフイが 1813 年生まれであることなどから考えると、同じ第一開拓夫婦であった島ノ首の島本宇吉・トメ夫婦よりも一世代、20 歳ほど上であったと思われる。この夫婦の真浦への入植年も不明であるが[3]、島ノ首の開拓よりも若干遅い 1800 年代から 1810 年にかけてではないかと思われる。なお、清吉の長男岩五郎は 1870 年頃に水方であったという[4]。また、岩五郎は 1910 年に 70 歳を過ぎてから平戸に転出しているが[5]、その理由については不明である。この一家でも、長男松五郎が本家を継ぐことなく他所へ移動している。なお、この一家の第三世代以降がどのようになったのかも定かではない。

次は真浦の第二次開拓夫婦２組である。真浦の浜側の開拓は第一次で行われたために、第二次では 1830 年代の初め頃に夫同士が兄弟である２組の夫婦によって真浦の山手側の開拓が行われたようである[6]。

それでは、第二次開拓夫婦である真浦栄作・トメ夫婦と善吉・ミキ夫婦の系譜を見てみよう。



真浦栄作・トメ夫婦、真浦善吉・ミキ夫婦（真浦山手の開拓夫婦）の家系略図

『仲知小教区史』では、「長吉・セノ夫婦の時に西彼杵・神浦から丸尾に移住し」[8]とあるが、いつ頃２人が丸尾に入植したかは不明である。第二世代の長男栄作と次男善吉が丸尾で生まれていることから考えると、夫婦はまず丸尾の開拓を試みたようである。ところが、善吉・ミキ夫婦の長男長八が仲知で出生していることから考えると、長吉・セノ、栄作・トメ、善吉・ミキの２世代３夫婦は 1820 年代から遅くとも 1830 年代初めには丸尾から真浦に移っているようである。丸尾の浜側は仏教徒であった鉄川与助も住んでいたように、地下の仏教徒が占めていた。そのため、移民としてやってきたキリシタンたちには山側の土地しか残されていなかった。しかし、丸尾自体がそれほど広い集落ではないために、恐らく仏教徒とも日常的に接触しなければならず、開拓も限定的であったことから、まだ十分に開拓されていなかった真浦に開拓の場を移したものと思われる。また、栄作の妻トメは久賀島出身であるが、丸尾と久賀島は直線距離でも少なくとも 50km はあり、遠く隔たっている。にもかかわらず丸尾と久賀の男女が結ばれていることから察すると、丸尾と久賀、あるいは仲知と久賀は、その距離的隔たりにもかかわらず、何らかの交流関係があったと考えられる。実際、明治 33 年にセシリア修女会に入会した田中ハツに関して『仲知修道院 100 年の歩み』の中で、彼女は久賀出身であったが、先祖が仲知に住んでいた関係で、遠く離れた仲知の修道院に入会したことが書かれている[9]。当時のキリシタンやカトリック教徒たちは、現代の我々が想像する以上に遠距離を移動していたものと思われる。現在は陸路中心の移動を考えがちであるが、当時は陸路と言えば、徒歩だけであり、移動の距離は限られていた。ところが、すでに述べたように、ミサに参加するのも艝舟を使っていたことを考えると、陸路以上に海路を使うことの方が当時はむしろ一般的であり、かなりの距離を舟で移動したと想像される。明治初期に五島の幾人ものキリシタンたちがフランス人神父に会うために、遠路はるばる長崎まで小舟で渡っているのはそのよい証左であろう。そうしたことからも、五島のキリスト教徒の間には、たとえ島々が南北に 100km ほど連なった列島であったにせよ、移民や結婚に関しては互いに情報を交換しあうある種のコミュニケーション網があったと推測される。当時の人々は遠距離にもかかわらず今以上に人的交流をしていたのではなかろうか。そのうえ、結婚に関しては、当時差別の対象でもあったカトリック教徒やキリシタンにとって、仏教徒との結婚は想定外であり、情報交換や情報共有の必要があったと考えられる。

さて、善吉・ミキ夫婦は３男３女の子どもに恵まれたが、三男の勇吉は谷中姓を名乗っているの

は、分家したついでに、新たな姓を名乗ったものと思われる。もちろんそこには世帯主となって徴兵を避けようとする思惑も隠されていたと推測される。

栄吉については、『五島キリシタン史』の中でその信仰に対する情熱や姿勢について詳述されているので紹介したい。栄吉は仲知のキリシタンの中でも率先して聖教を学び、明治２年に大浦天主堂で洗礼を授かった人物である。帰郷後、彼は自家の仏壇神棚を取り払い、信仰を公表した。これが役人の聞き及ぶこととなり、同年 10 月に栄吉は、妻ユリ、父栄作、幼児栄太郎等とともに召し捕らえられ、小値賀に護送された。それを見た仲知のキリシタンたちは、信仰に燃えて、栄吉同様に仏壇神棚をことごとく取り払い、「御坐」という郷内の集会所に祀られていた仏像を粉砕して海中に投げ棄てるという行為に出たのである。彼ら 34 名もまた小値賀に護送され、10 日ばかり囚われた後、野首のキリシタンたちとともに平戸に送られた。そして、15 歳以上の男子は監獄に繋がれ、婦女子は中ノ崎の長屋に抑留された。男子は「キリシタンを止めるか、止めぬのか」と聞かれ、否定すれば算木責めに処せられた。仲知のキリシタンで最も残酷な拷問を受けたのは、真浦栄作・栄吉父子、谷中勇吉、島本貞吉の４名であったという。しかしながら、翌年の正月に全員が改心を申し出たため、戸主と婦女子は帰郷を許されたが、青年男女は３年もの間侍屋敷で苦役を強いられた[10]。

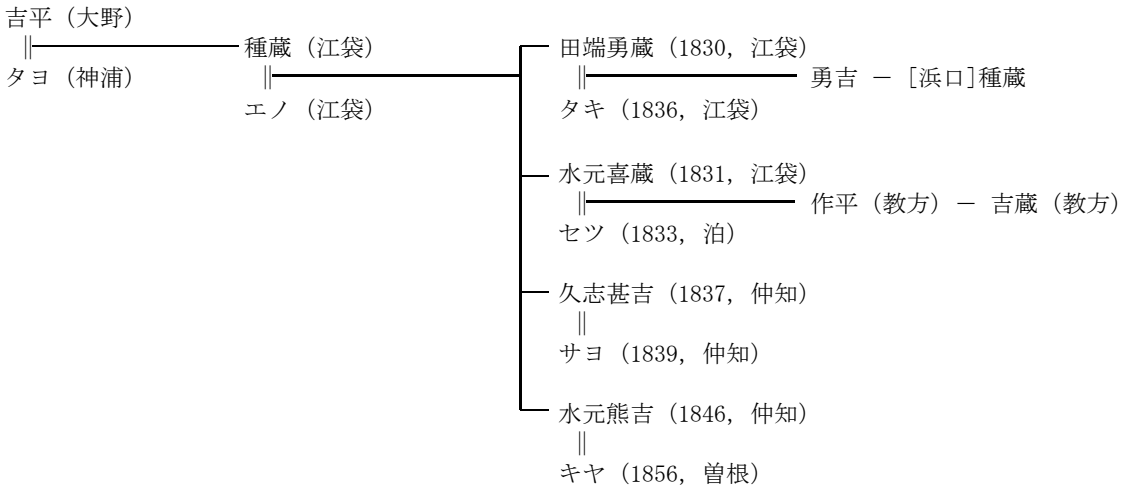
また勇吉の兄の才吉は、栄吉が捕らえられるや、島本与蔵他２名とともに、ロケーニュ師に事の次第を伝えるために危険を顧みず舟を漕いで遠路長崎まで知らせに赴いた。才吉や与蔵は、長崎に留まっていた井手淵茂助らとともに、労をねぎらわれてその場でロケーニュより洗礼を授けられた。才吉ら４人が直ちに仲知に引き返したところ、才吉は即座に捕らえられて入牢の憂き目に会った[11]。

こうした栄作、栄吉父子、栄吉のいとこの才吉と勇吉兄弟の揺るぎない信仰と情熱は一家のキリスト教信仰に対する信念を形成したようである。そのため、この一家からは仲知伝道学校の初期会員や伝道学校を引き継いだセシリア修女院の会員が多数出ている。しかも、才吉の娘ソノは仲知伝道学校の最初の母体を築いた真浦（島向）ナルの養女となり、昭和元年には仲知修道院の第四代院長に選ばれている。この時彼女は 52 歳であった。彼女の時から、修女院入会者は真浦姓を名乗るようになったという[12]。なお、ソノが院長になった翌々年の昭和３年、栄吉の息子武次郎の次女シオも修道院に入会している。当時彼女は集落の教方を終了したばかりであった[13]。

（６）久志の開拓者たち

仲知の開拓はすでに説明したように島ノ首と真浦の浜がまず開拓された。そして、この２地区の開拓の後に、久志と真浦の山手の開拓が行われた。久志の開拓は、種蔵・エノ、亀蔵・ツヨ、未五郎・タオの３組の夫婦によって始められた[1]。

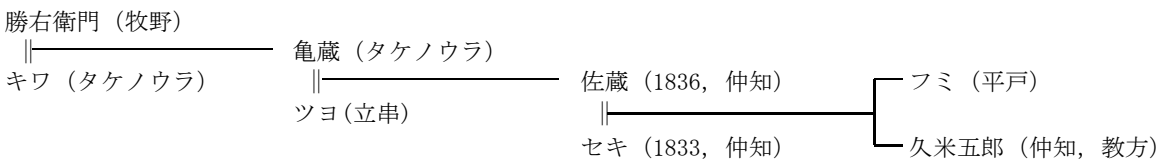
それでは、まず種蔵・エノ夫婦の家系略図から見てみよう。



種蔵・エノ夫婦（田端家、浜口家、水元家、久志家の先祖）の家系略図[2]

この一家は家系略図から見ても分かるように、外海出身の移民第一世代の両親を持つ移民二世の種蔵と、同じく移民二世のエノの夫婦から発する家系である。移民第三世代は長男と次男は江袋で生まれているが、三男と四男は仲知、すなわち久志で生まれている。また、次男と三男の間の年齢が多少開いていることから考えると、この一家は最初第一世代の吉平・タヨと第二世代の子どもたちがともに江袋の開拓に携わっていたものの、種蔵・エノ夫婦の次男の誕生から三男が誕生する直前の 1830 年代の半ばにかけて久志に移住したものと思われる。この一家も、家系略図で示しているように、第三世代の４人の息子のうち３人が分家してそれぞれ新たな姓を名乗り、第五世代で更に１つ新たな姓を名乗っている。第三世代の長男勇蔵は江袋出身のタキと結婚して分家し、自分が生まれた江袋に戻って田端姓を名乗っている。また、次男喜蔵と四男熊吉は分家後に水元姓を名乗っている。結局家を継いだのは三男甚吉で、開拓地の地名をとって久志を姓としている。彼らが生まれたのはいずれも江戸末期であり、明治になってから「平民苗字必称令」などを受けて、徴兵制なども考慮しながら姓を選択したものと思われる。長男勇蔵の孫である種蔵も長男分家であろうか、浜口という新たな姓を名乗っている。次男喜蔵の息子作平とその子吉蔵の親子は二代にわたって教方として活躍したことで知られている。作平は進んで子どもたちを集めて読み書き、ソロバンを教えると同時に、信仰についても教えていた[3]。

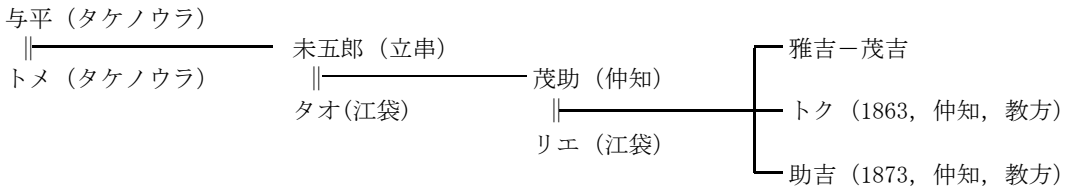
小教区史では久志開拓の２組目の夫婦として亀蔵・ツヨ一家があげられている。しかしながら、既に述べたように、この夫婦は島ノ首の第二次開拓夫婦としても紹介され、しかも移住年はどちらも 1830 年代とされている。恐らく島ノ首の開拓が先であろう。ただし、亀蔵・ツヨ夫婦の長男佐蔵・セキ夫婦以降は久志に定着し、久志姓を名乗っていることだけは確かである。



亀蔵・ツヨ夫婦の家系略図[4]

佐蔵とセキの夫婦は、明治２年に役人から捕らえられて小値賀や平戸に送られ、そして拷問を受けた仲知や野崎島のキリシタンたち（長崎に出向いてカトリックの司祭から洗礼を受けて、正式にカトリックに復帰した者たちを含む）の中にいた。恐らく佐蔵の弟の鉄五郎も同様であろう。そのため、佐蔵とセキの娘のフキは平戸生まれである。また、彼らの息子の久米五郎は仲知で教方として活躍した[5]。

次に示すのも、久志を開拓した井手淵未五郎・タオ夫婦の一家である。



井手淵未五郎・タオ夫婦の家系略図[6]

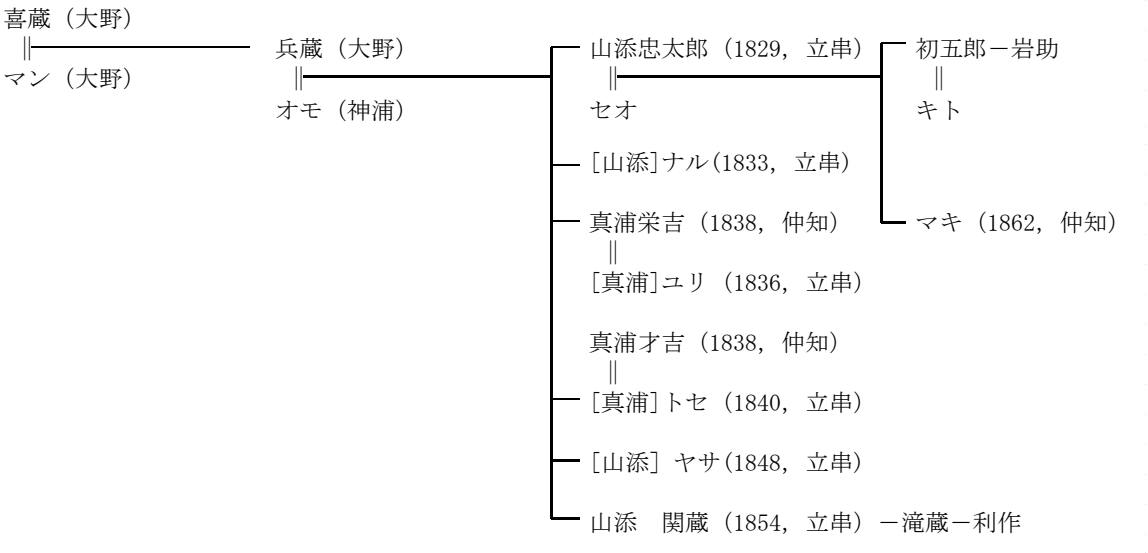
この一家は第一世代から既に三井楽タケノウラ出身であることが特徴的であり、上記の勝右衛門・キワ夫婦とは知人関係にあったと考えられる。また、勝右衛門・キワ夫婦と同様に、与平・トメ夫婦も三井楽から立串に入植している。未五郎は自分が生まれ育った立串から開拓地の久志に移動している。子どもの茂助が仲知生まれということから、彼らが久志に移ったのは子どもが生まれる前ではなかったかと思われる。『仲知小教区史』には、久志への入植は、上記の２夫婦同様に、1830年代と書かれている[7]。なお、この家系略図では他の家族のように生年が書かれていないが、未五郎・タオの息子の茂助は、上述の真浦栄吉といっしょに長崎に行って聖教を学んでいることから、栄吉と同年代と見られる。しかしながら、彼らの長崎での滞在は２人の運命を大きく変える結果となった。栄吉は病身ゆえに、茂助よりも先に洗礼を受けて、一足先に仲知に戻ったのであるが、それがかえって役人に捕らえられ、小値賀に幽閉された後、平戸で拷問を受けることにつながった。これに対して、家族とともに長崎に渡っていた茂助は辛うじて難を逃れることができた。それでも、茂助は五島に帰り着くと、巧みに役人の目を忍んで各地に潜伏し、平戸の牢獄を訪れては同士を慰めたという[8]。その後、彼は宿労となって、フレノー師やブレル師など歴代の宣教師たちに奉仕した。また、茂助の子どもたちのトクと助吉も教方として地域の宗教教育に貢献した[9]。篤信というものが親から子へそして孫へと伝えられた好例である。

久志と次に述べる一本松の間に「新開き」と呼ばれる地区がある。ここは現在では久志の一部となっているが、「新開き」と呼ばれるように、江戸末期に開拓がなされた他の集落よりもかなり遅れて明治になってから（1871 年頃から 1885 年頃まで）開拓された土地である。ここは５組の夫婦によって開拓がなされたが、真浦出身の１組以外は久賀島、立串、浦上、小串など他地区から移動してきた夫婦であった[10]。それぞれの出身地の開拓に見切りをつけたのか、あるいは新天地を求めて入植してきたかのいずれかであろうが、そのほとんどが定着することはなかったようである。開拓に携わった５組の夫婦のうち現在もその子孫が残っているのは１家族のみである[11]。「新開き」については紹介程度にとどめたい。

（７）一本松の開拓者たち

仲知小教区には山添と名乗る家族が３つ存在するが、一本松を開拓したのは、そのうちでも外海の大野出身で、立串に移住した喜蔵・マン夫婦を先祖とする家系である[1]。第三世代末子の関蔵が立串の生まれで、忠太郎の娘のマキが 1862 年仲知で生まれている[2]ことから考えると、この山添一家の立串から一本松への移住は、1850 年代から 1860 年代初めにかけてと推測される。

それでは、山添喜蔵・マン夫婦の家系略図を示すことにしよう。



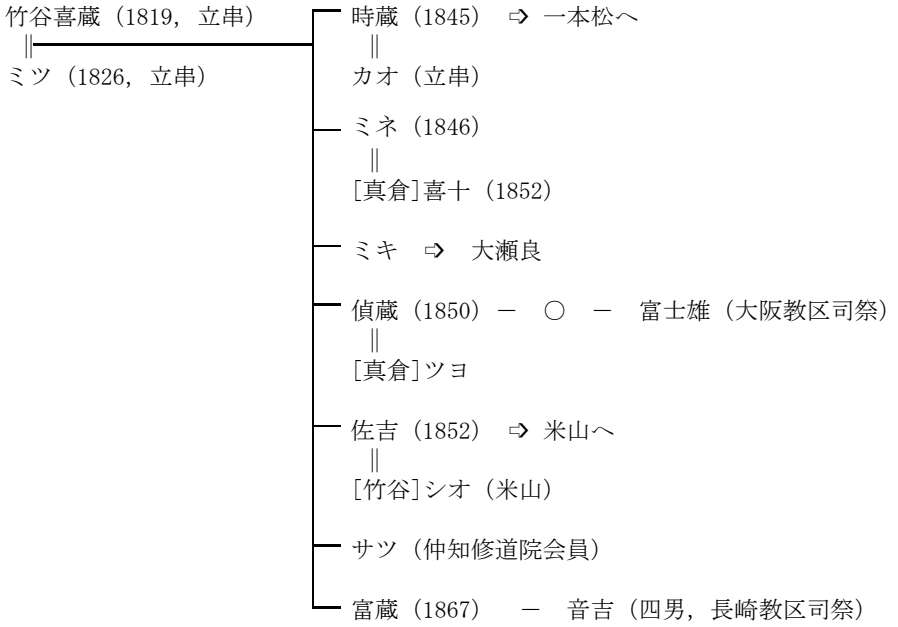
山添喜蔵・マン夫婦の家系略図[3]

真浦地区の真浦栄作・トメ夫婦、真浦善吉・ミキ夫婦の家系略図ですでに述べたように、山添兵蔵・オモ夫婦の次女ユリは真浦栄吉と結婚したが、真浦家は非常に信仰心篤く、栄吉・ユリ夫婦の長女オモは仲知伝道学校最初の会員となっている。また、オモの兄武次郎の娘シオとノブは２人とも仲知修道院会員になっている。兵蔵・オモ夫婦の三女トセは、姉ユリの夫栄吉のいとこである真浦才吉と結婚したが、才吉・トセ夫婦の娘２人うち、長女キミは仲知伝道学校最初の会員となり、妹ソノは仲知修道院第四代院長となっている。なお、兵蔵・オモ夫婦の長女ナルと四女ヤサはいずれも山添姓に嫁いでいるが、この山添姓がいずれの地区の住人なのかは不明である。

（８）竹谷の開拓者たち

竹谷は東竹谷と西竹谷の二つに分けられるが、開拓の歴史は東竹谷の方が古い[1]。

それでは、東竹谷の開拓を試みた竹谷喜蔵・ミツ夫婦の家系略図から見ていこう。



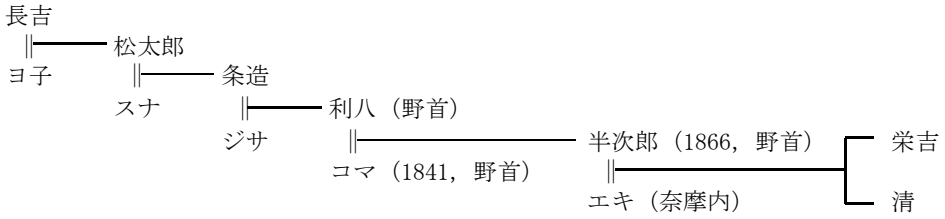
竹谷喜蔵・ミツ夫婦の家系略図[2]

喜蔵とミツはいずれも立串で生まれていることから、喜蔵・ミツ夫婦は移民第二世であることが分かる。

若松村桐古里から始まった五島崩れは中通島の北部に位置する立串にも及び、喜蔵とミツ夫婦と子どもたちは３隻の船に分乗し、平戸や黒島方面に逃れることを余儀なくされた。ところが、明治初めのキリシタンに対する迫害は、五島列島だけにとどまらず、長崎各地に広がっていた。そのため、行く先々で迫害に遭った喜蔵・ミツの家族は、逃げ惑ううちに親子兄弟姉妹が離ればなれとなってしまった。ようやく一家が流れ着いたのが竹谷で、そこで開拓を開始したのである。一家の第二世代の子どもたちはそれぞれ成人して結婚の時期を迎えたが、立串出身のカオと結婚した長男の時蔵は、長男でも竹谷家の家督を継ぐことはなく、一本松へ移住していった。家を継いだのは次男の偵蔵であった。彼は竹谷の隣家に移住してきた真倉喜助・セリ夫婦の娘ツヨと結婚した。また長女のミネは同じく真倉家の長男喜十と結婚した。当時は数家族が住まうだけの開拓集落もかなりあって、結婚適齢期の男女がいれば、同じ集落同士や同じ村同士で結婚する村内結婚の事例が多かった。竹谷家の三男の佐吉は、竹谷の隣の集落である米山の竹谷シオと結婚し、米山に移住していった[3]。竹谷家も信仰篤い家系で、喜蔵・ミツ夫婦の三女サツは仲知修道院会員となった。上記の家系略図で示したように、四男富蔵の四男音吉は長崎教区司祭となり、次男偵蔵の孫の富士雄は大阪司祭となっている。

東竹谷には喜蔵・ミツ夫婦の竹谷家の他に、血縁関係にはないものの、竹谷姓を名乗る家が２軒ある[4]。　西竹谷に入植してきたのは、小値賀の野崎島野首出身の白浜半次郎と奈摩出身のエキの夫婦である。半次郎は白浜利八とコマ夫婦の次男として生まれ、1880 年にフレノー神父から洗礼を受けている。そして、それから 10 年後の 1890 年にはエキと野首教会で結婚式をあげたが、その後分家し、生まれ故郷の野崎島の野首を離れて、中通島の西竹谷に開拓者として移住してきた。

それでは、白浜半次郎・エキ夫婦の家系略図を見てみよう。

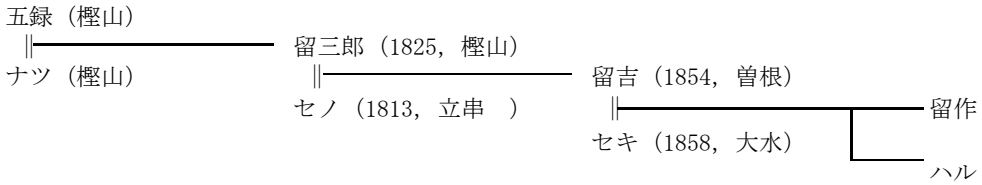


白浜半次郎・エキ夫婦の家系略図[5]

半次郎とエキの結婚が 1890 年ということから考えると、彼らが西竹谷に入植したのは、1890 年以降であると推測されるが、詳細は不明である。なお、半次郎・エキ夫婦の子どもは栄吉や清の他に５人の娘がいるが[6]、名前等が不明のため家系略図からは省略した。

西竹谷に入植したのは、この他にも、曽根から来た水元家と奈摩内から来た白浜家がある[7]。

水元家の家系略図も簡単に紹介しておこう。



水元留吉・セキ夫婦の家系略図[8]

外海の樫山出身者を先祖とする水元家であるが、第二世代の留三郎が 1825 年に樫山で生まれていることから考えると、この一家が上五島に移民としてやってきたのは、公式移民から随分後のことである。一家はまず曽根の開拓を試みた後、東竹谷に入植してきたようである。西竹谷は一時７戸あったが、昭和 40 年代から過疎化が進行し、昭和 52 年にはついに廃村となった[9]。

（９）江袋の開拓者たち

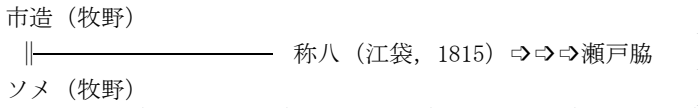
明治 39 年に、交通の便と地理的な諸事情、小教区内の集落からの便宜をはかって、江袋教会から仲知真浦の浜に近い仲知教会に主任座が移された[1]が、それまでは江袋教会が主任座教会として重要な役割を果たしていた。こうしたことを示すように、明治 15 年（1881）には当時としては非常に立派な聖堂が信者たちの一致協力のもとに建設された[2]。

浦川和三郎の『五島キリシタン史』によると、江袋を最初に開拓したのは、外海の神浦村大中尾出身の七右衛門とチエ夫婦であった。彼らは外海の他の 1,000 人の貰い人とともに寛政年間に五島に渡り、江袋に落ち着いたのである。そして、市右衛門、要介、安兵衛の子どもたちを授かり、この子どもたちが繁栄し、32 戸 250 余名の江袋の集落を形成するに至ったという[3]。この江袋の集落の繁栄の背景にはまた、他の集落に比べると、自然環境に恵まれ、取水ができて稲作が可能であったということもあげることができる。そのため、畑作が中心で、イモや麦が主食であり、米は年に数回ある特別の日や祝日にしか食すことができなかった他集落に比べると、より頻繁に米を食すことができたと聞き取り調査で聞いた。

ところで、『仲知小教区史』には、浦川が述べた七右衛門とチエ夫婦に関する記述は最後にわずかにあるだけである。というのも、小教区史の著者の一人である浦敏雄によると、1883 年（明治 16 年）にブレル師によって作成された洗礼簿には、本人と両親の名前と生年月日及び洗礼名のみが記録されているだけで、両親以上に遡る先祖は名前どころか、生年や出身地でさえも記録されていな

いからである。ところが、浦が仲知教会と青砂ヶ浦教会にあった 21 のキリシタン集落の洗礼簿の調査を行った結果、「1815 年から 1831 年までの 16 年間に少なくとも外海地方から江袋に直接移住したキリシタン夫婦は６組存在していたことが判明した」という[4]。

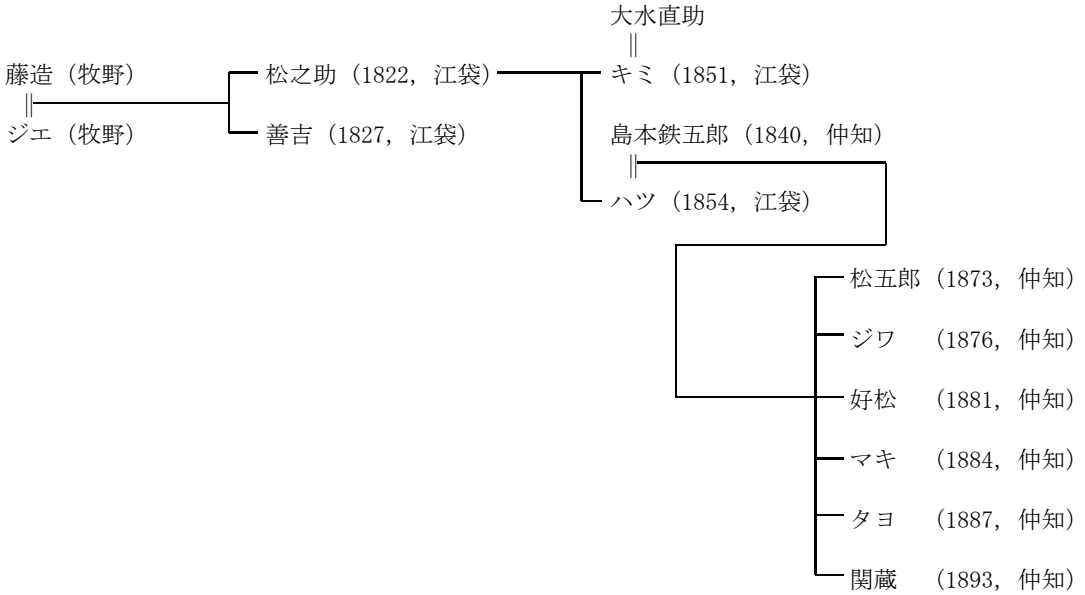
それでは、この６組の夫婦の家系略図を見てみることにしよう。まず、市造・ソメ夫婦である。



市造・ソメ夫婦家系略図[5]

市造・ソメ夫婦の長男称八が 1815 年に江袋で誕生していることから考えると、江袋への移住年は 1815 年よりも古い時期と思われる。なお、この一家はその後小値賀の野崎島の瀬戸脇に移住し、称八は 1870 年代に瀬戸脇の水方として活躍したという[6]。確かに、1870 年代（明治３年～）の瀬戸脇の御水帳（洗礼台帳）を元に作成された受洗者一覧では、称八は筆頭に記されている[7]。瀬戸脇は中通島の北端の津和崎から海峡を隔てた場所に位置していた。江袋が主任座教会の時代から、野崎島の２つの集落のカトリック教徒は、江袋教会のミサにも参加していたが、それ以前のキリシタン時代からすでに、島は異なるものの、中通島北部と野崎島のキリシタンたちとは交流があり、情報交換もなされていたために、それが江袋から瀬戸脇への移住につながったものと推測される。また、仲知に修道学校があった時代には、野崎島の少年少女たちは、教方になるために仲知に来ていた。野崎島に戻るときには、米山の浜から大声を出して、帰ることを告げ、家族に舟で迎えに来てもらっていたという。こうした交流を示すように、野崎島の信徒と中通島北部の信徒の婚姻も比較的頻繁に行われていた。

２組目は藤蔵・ジエ夫婦である。

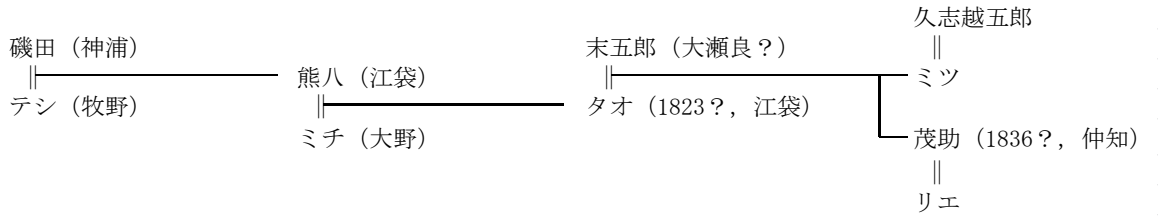


藤蔵・ジエ夫婦の家系略図[8]

藤造とジエ夫婦も市造・ソメ夫婦同様に外海の牧野出身である。この家系略図からは明確なことは分からないが、藤造とジエの江袋への入植は、第二世代の松之助の出生地と生年から考えると、1810 年代後半から 1820 年代にかけて行われたのではないかと推測される。松之助には２人の娘が

いたが、長女のキミは、後に述べる大水地区の最初の開拓者である大水安五郎・マシ夫婦の五男の直助と結婚し、大水地区の開拓に努めたという。また、次女のハツは家系略図でも分かるように島ノ首の島本鉄五郎と結婚し、３男、３女に恵まれた[9]。

それでは、３組目の開拓夫婦の磯田・テシ夫婦の家系略図を見てみよう。

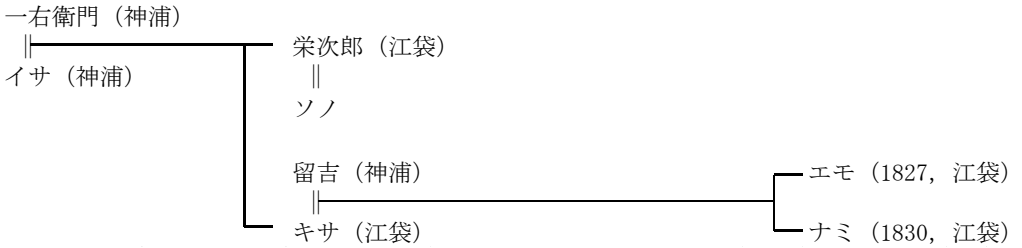


磯田・テシ夫婦家系略図[10]

この夫婦の特徴として、第二世代の熊八の生年は不明であるが江袋で生まれ、第三世代のタオも1823年に江袋で生まれていることがあげられる。タオの生年から考えると、第一世代の磯田・テシ夫婦の江袋入植は1800年前後、すなわち1797年（寛政９年）の大村からの公式移民の頃とほぼ同時代と推測される。従って、浦が主張する1815年から1831年の間の外海地方から直接江袋への入植よりもさらに20年近く遡るのではないかと考えられる。なお、第一世代の磯田であるが、小教区史では何ら説明はなされていないが、磯田は一般的に名前ではなく姓であり、名前のみが記された他の多くの家系略図とは異なることを指摘しておきたい。

小教区史では、第三世代のタオは「大瀬良の末五郎と結婚し、その長女ミツは仲知の久志越五郎と結婚し、長男茂助は久志の開拓者となっている」と述べられている[11]。ところが、同じ小教区史の久志の項の井手渕末五郎・タオ夫婦の家系略図[12]では、妻であるタオは確かに江袋出身と示されているが、末五郎は大瀬良出身ではなく、立串出身となっている。大瀬良と立串の両集落は近隣にあるが、同じ集落ではない。しかも、久志の井手渕末五郎・タオ夫婦の家系略図の説明では、茂助は1836年仲知生まれとある。この熊八・ミチ夫婦の家系略図のタオの生年1823年と比較すると、13歳の年齢差しかない。母子の年齢差としてはあまりにも小さい。また久志の家系略図では末五郎となっているが、上記では「大瀬良の末五郎」となっている（下線筆者）。未五郎なのか末五郎なのか、出身地も立串なのか大瀬良なのか、いずれが正しいのか不明であるが、いずれにしろ洗礼簿などの再検証が必要であろう。

次は、江袋開拓４番目の夫婦である一右衛門・イサ夫婦である。

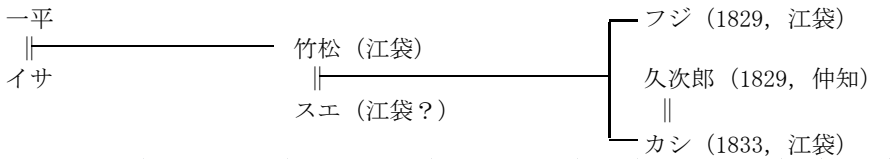


一右衛門・イサ夫婦家系略図[13]

この一家の特徴として、第二世代の栄次郎とキサの２人とも生年は不明であるが江袋で生まれ、第三世代のエモとナミも江袋で、それぞれ1827年と1830年に生まれていることがあげられる。つまりこれは、この一家も、上記の磯田・テシ夫婦同様に1810年以前にすでに江袋に入植していたことを意味する。恐らく寛政年間の公式移民とほぼ同時代に五島にやってきた家族であると考えられ

る。ところで、第三世代のエモは仲知島ノ首の開拓者の一人植村五郎作に嫁いで夫とともに開拓に携わり、フレノー師が構想した伝道学校建設のために夫名義のすべての土地を寄付して学校創設に寄与し、その初代院長になったあの植村エモであろうか。小教区史では何ら言及されていないため、詳細は不明である。それでも、エモなる名前の女性は他の家系略図には見当たらない。なお、当時同じ江袋出身の楠本シゲなる女性も伝道学校創設に関わり、伝道学校創設後は伝道婦の養成に携わり、他の伝道学校の会員たちと共同生活を営んでいたことが『仲知修道院 100 年の歩み』に記されている [14]。伝道学校創設に同じ江袋出身のよしみとしてこれらの女性２人が関わったとしても不思議ではない。しかしながら、確たる証拠もないため、紹介だけにとどめておきたい。

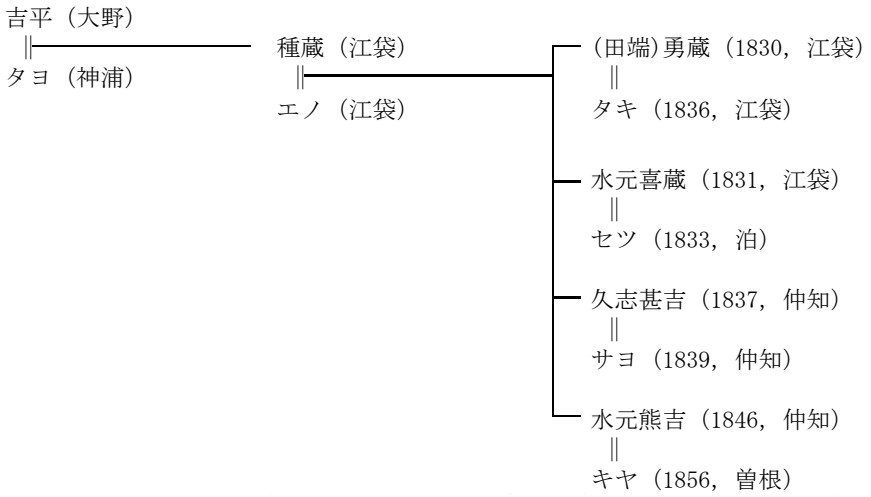
次に示すのは第５組目の開拓夫婦である一平・イサ夫婦である。



一平・イサ夫婦家系略図 [15]

この一家も、第二世代が江袋出身であり、また第三世代の生年から類推すると、上記の数家族とほぼ同年代の入植であったと考えられる。なお、第二世代の竹松の結婚相手であるスエについては、小教区史では、仲知の佐吉・ナツ夫婦の娘としているが、仲知の項ではこの夫婦を見つけることはできなかった。また、家系略図でもスエの出身は江袋となっているが、この江袋の６組の夫婦の子どもの中にスエの名前を見出すことはできない。６組の開拓夫婦以外にも開拓夫婦がいたのであろうか、資料が乏しいため、詳しいことは分からない。

次は江袋を開拓した６組最後の夫婦である種蔵・エノ夫婦の家系略図である。



種蔵・エノ夫婦家系略図 [16]

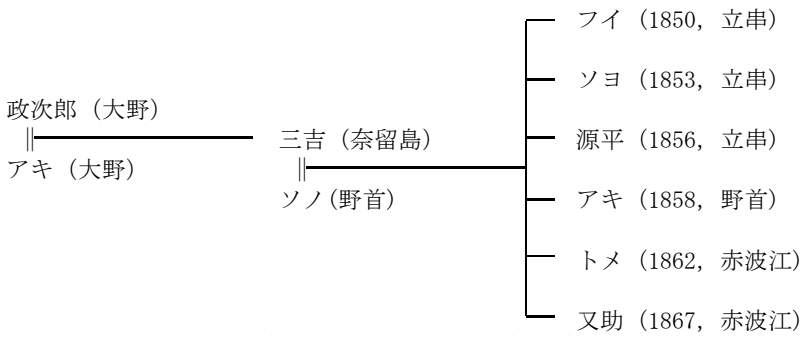
種蔵・エノ夫婦については、『仲知小教区の開拓者たち（１）』の久志の開拓者の項で述べたが、次男の喜蔵が 1831 年に江袋で生まれ、三男の甚吉がそれから６年後の 1837 年の仲知生まれであることから考えると、この夫婦は喜蔵の誕生と甚吉の誕生の間の６年間のいずれかの年に江袋から久志へ移住したものと推測される。なお、種蔵の妻のエノの出身地は江袋となっているが、これまで見てきた６組の夫婦の子どもたちの中にエノという名前は見当たらない。すでに述べたように、この６組の夫婦以外に同時代に江袋を開拓した夫婦がいたのであろうか。それとも他の集落についても見られるように、小教区史自体の誤りであろうか、詳細は不明である。

以上、江袋を開拓した６組の夫婦とその家族を追ってみた。浦は、すでに述べたように、ブレル神父が残した洗礼簿や 21 のキリシタン集落の洗礼簿の調査から、1815 年から 1831 年の約 16 年間に西彼杵・外海地方から直接江袋に移住した夫婦６組を見つけ出したと主張している。ところが、この６組の夫婦の出生地と生年、あるいはその子どもたちの出生地と生年などを検討した結果、第二世代が 1822 年生まれの藤蔵・ジエ夫婦以外の５組の夫婦はすべて 1815 年以前にすでに江袋に居住していたことが判明した。江袋は、浦川が指摘したように、寛政年間の大村藩からの公式移民とほぼ時を同じくして、上記のほとんどの夫婦が他の入植地を経由することなく、直接江袋に入植したと考えられる。また、浦は浦川が指摘した神浦の七右衛門・チエ夫婦以外に６組の開拓夫婦がいたと主張している[17]。洗礼簿を詳細に調べなければ明確なことは言えないが、32 戸 250 余名に増えた七右衛門･チエ一家とこの６組の夫婦とをどのように関係づければよいのであろうか。洗礼簿の詳細な再調査が必要である。

（10）赤波江の開拓者たち

赤波江の集落は江袋から仲知に向う途中から右手に登る坂道をしばらく進み、峠を越えて下って行った場所に位置する。この坂道を通らなければ赤波江の集落に辿り着くことはできない。赤波江の集落は他の集落から容易に往来できない場所にある。竹谷からは赤い屋根の赤波江教会や集落の一部を遠望できるが、竹谷からこの集落へ直接通う道はない。また、竹谷から見ると、赤波江教会は急勾配で岩場に降りる険しい山の稜線のちょうど中腹に位置している。しかしながら、赤波江の集落に降り立つと、集落は多少なりとも平地になっていて、集落を見下ろす場所に位置する教会を中心に、３つの小集落に分かれている。北側は平坂、南側は灘瀬の元、教会が位置する中央部は谷の坂と呼ばれている[1]。赤波江の開拓は、明治 10 年（1877 年）７月にマルマン師が初めて赤波江を巡回した際に残した洗礼簿から探ることができるという[2]。

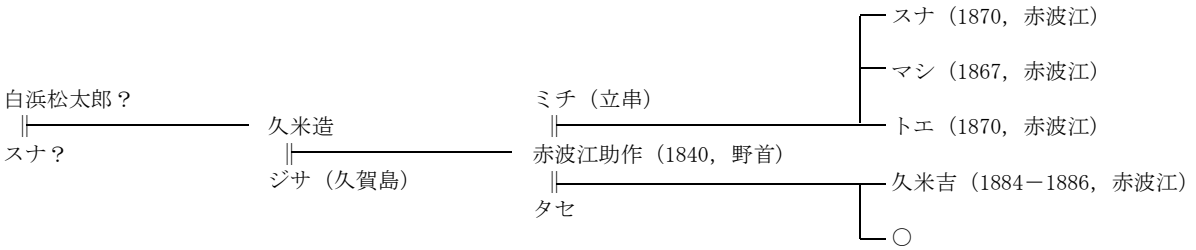
それでは、赤波江三吉・ソノ夫婦の家系略図から見てみよう。



赤波江三吉・ソノ夫婦[3]

この一家は、第三世代の生年からも分かるように、寛政年間の公式移民よりも遅れて五島にやってきた外海大野出身の夫婦を先祖としている。この夫婦は、第二世代の三吉が奈留島生まれということから、最初奈留島に入植したようである。しかしながら、やがては奈留島を見限り、次に入植したのは、第三世代の３人の子どもの出生地からも分かるように、上五島の立串であった。ところが、三女のアキが野首で生まれていることから考えると、夫婦は幼い子どもたちを連れて、ソノの出身地である野首に入植を試みたようである。しかしながら、それも数年間のこと、やがてはまた新天地を求めて、最終的に落ち着いたのが赤波江であった。それを物語るように、四女のトメは赤波江生まれで、しかも、野首生まれの三女アキとの間は４歳しか離れていない。すなわち、野首にいたのはわずか４～５年ほどのことであったとみられる。もちろん、この家系略図からはその理由は分からない。恐らく、野首の立地の悪さもその原因の一つではなかったかと思われる。

次に紹介するのは、赤波江助作・ミチ夫婦の家系略図である。



赤波江助作・ミチ夫婦家系略図[4]

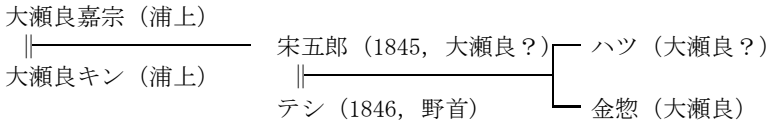
小教区史には赤波江の最初の開拓者となった赤波江助作は、野首の開拓者の白浜松太郎・スナの孫にあたる[5]と書かれている。ところが、小教区史に掲げられた「野首血統一覧」[6]には、松太郎・スナの子どもとして忠造、条造、寅造の３人の名前はあるが、久米造の名前は見当たらない。ただし、この血統一覧にしても、同一人物に関していくつかの系統がある場合もあり、決定的なものと見なすことはできない。いずれにしろ、久米造と松太郎・スナとの関係が明確ではないため、家系略図には疑問符をつけておいた。ただし、久米造の出生地はどこであるか分からないが、白浜松太郎・スナ夫婦は久賀島出身であり、久米造の妻のジサが久賀島出身であることから、松太郎・スナ夫婦と久米蔵は何らかの血縁関係にあるとも考えられる。しかしながら、久米造なる人物が白浜松太郎・スナ夫婦の家系略図には記載されていないため、これ以上彼らの関係について言及することはできない。

さて、助作とミチとの間の３人の娘たち全員が赤波江生まれということから、彼らは結婚するとほどなく分家し、野首から赤波江に移住してきたと推測される。小教区史によると赤波江の中でも灘瀬の元に居を定めたという[7]。また、上記の家系略図でも示しているように、ミチはトエを生んだ後に亡くなり、助作はタセと再婚したようである。しかしながら、小教区史では、ミチの死亡や助作の再婚については一切触れられていない。いずれにしろ、助作はタセとの間に長男久米吉を授かってはいるが、その子は２歳で夭逝している。そのため、跡継ぎとして仲知の山添忠太郎家から養子を迎えている。また、助作は赤波江の開拓に携わらずに、むしろ商業を営んでいたようである。地元の人たちからイカやカジメを買い取って加工し、遠く下関まで出荷していたという[8]。そして、商業を営む傍ら、後述の大瀬良宋五郎とともに、伝道士としても活躍している。助作の洗礼については、浦川の『五島キリシタン史』では述べられていないが、恐らく野首の白浜忠造、白浜岩助、白浜長吉、白浜留吉、白浜兼吉などが慶応３年３月から４月にかけて当時「フランス寺」と呼ばれていた大浦天主堂でパリ外国宣教会の宣教師であるポワリエ師やプティジャン師から洗礼を授かったのとほぼ時を同じくして受洗したものと思われる。彼も下記の宋五郎同様に、水方としても、ま

た伝道士としても、赤波江だけでなく、野首、瀬戸脇、大瀬良、明松、大水と非常に広範囲に宣教活動を行った。仲知小教区では、「第二の森松次郎」と呼んでもよいほどの活動をした人物と見なされている。彼の導きにより、洗礼を受けた人たちは多いと言われている。例えば、大水の開拓者である大水安五郎・マシ夫婦の三男徳蔵は、助作が代父となり、1873 年（明治６年）に長崎で洗礼を受け、信仰を表明している。このように、助作は伝道士として要理を教えるだけでなく、洗礼志願者に長崎まで同行して代父となっている [9]。

ところで、小教区史では、「赤波江の水方兼、伝道士として活躍」[10] とあるが、これは補足説明が必要であろう。水方とは潜伏キリシタン時代の役職である。潜伏時代にはカトリックの司祭の役割は、帳方と水方に分かれて務められていた。キリシタンの集まりの司祭役を勤めていたのは帳方であったが、洗礼を施していたのは水方であった。江戸末期から明治初期にかけては、潜伏キリシタンからカトリックへ復帰する移行期にあったため、当時は確かに水方の存在はカトリック教会によって認められてはいたが、それでも水方は正式の洗礼を施すことはできず、仮洗礼を施すことしか認められていなかった。1873 年（明治６年）にようやく禁教の高札が撤去されると、それまで水面下で宣教活動を行っていたパリ外国宣教会のフランス人宣教師たちも晴れて宣教活動ができるようになった。1877 年（明治 10 年）３月２日には同宣教会のフレノー師が初めて五島の地を踏み、以後活発に活動を開始した。彼は鯛ノ浦を拠点に、中･上五島の各地を巡回した。１年後にはマルマン師も派遣され、二人一致協力して司牧活動に励んだ [11]。こうしてカトリックの司祭が直接洗礼を授けることができる環境となたため、水方という役職は明治 14 年（1881 年）に廃止された [12]。また、伝道士とは、当時数少なかった宣教師の代わりに教理を教えていた人たちを指し、彼らは宣教師たちによって直接養成されていた。彼らは宣教師の手足となって、各地でカトリックへの復帰を促す伝道活動を行った [13]。いずれにしろ、カトリックに復帰するためには、水方から受けた洗礼は仮の洗礼でしかなく、宣教師から再度直接洗礼を受けなければならなかった。そのため、江戸末期から明治初期にかけて五島各地の人々は、長崎に直接赴いて、フランス人宣教師から成人洗礼を受けたり、五島各地を巡回して宣教活動を行っていた宣教師から受洗したのである。こうしたことから、「赤波江の水方兼、伝道師として活躍」という表現は正確とは言えない。「赤波江の水方で活躍した後に、カトリックの伝道士としても活躍した」というような表現が適当ではなかろうか。なお、小教区史によると、助作は伝道士として活躍したが、その一方で事業にも成功し、赤波江教会建設の折には、マリア像とヨゼフ像を寄付したという [14]。現在もこのマリア像とヨゼフ像は教会に飾られている。

次は、赤波江の平坂の開拓者である大瀬良宋五郎・テシ夫婦である。



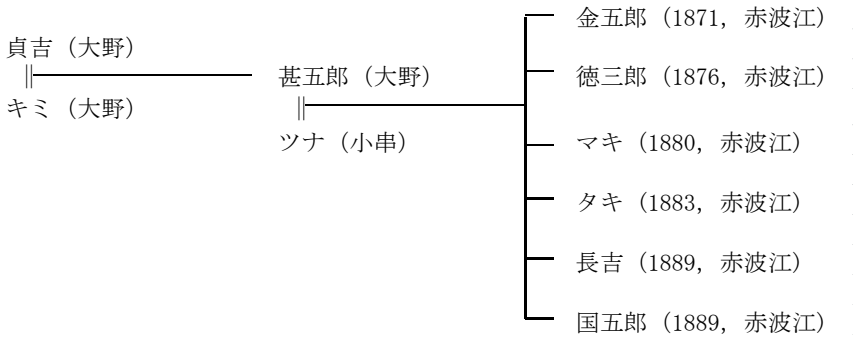
大瀬良宋五郎・テシ夫婦の家系略図 [15]

これまで紹介したほとんどの移住者たちの先祖は外海出身者であったのに対して、この一家の第一世代の大瀬良嘉宗・キン夫婦は浦上出身者であることが特徴的である。浦上も外海同様に潜伏キリシタンが多くいた地域として有名である。五島と浦上との関係に関して言及されることはほとんどないが、同じ潜伏キリシタン同士として、移住に関しても五島から浦上へ情報が伝わっていたものと思われる。小教区史によると、宋五郎一家の出身地については不明な点が多いとしている。すなわち､野崎島の瀬戸脇教会の洗礼簿には､本人も長女のハツも赤波江生まれとなっているという。

ところが、赤波江の洗礼簿では、本人も３人の子どもたちも大瀬良出身となっているという[17]。いずれにせよ、赤波江教会の洗礼簿の方が地元でもあることから、信憑性は高いように思われる。また第一世代の姓から見ても、宋五郎・テシ夫婦は親たちと一緒に大瀬良の開拓を最初に試みたと思われる。ところが、大瀬良の集落も山の途中を切り開いた場所にできた集落であり、ほとんど耕作地もないような所である。そうした地理的条件であるため、開拓を試みたものの、限界を感じて、内陸部のやや平地もある赤波江の平坂に開拓地を変更したのではなかろうか。

小教区史には、「第二世代の大瀬良宋五郎は、・・・明治３年頃から赤波江の水方兼伝道士として長年活躍した」[18]と書かれている。これも上述の助作の項で述べたように、注意が必要であろう。宋五郎は 1862 年頃から水方の役職に就き、助作同様に、赤波江だけでなく、近隣の大瀬良、仲知、明松、立串、小串にも足を運んで、先祖伝来の教えを伝えていた。しかしながら、フランス人宣教師の話を近隣の集落で聞きつけたのか、1872 年（明治５年）には長崎に赴いて、宣教師から直接聖教を学び、帰郷後に同じ地域で今度はカトリックの教えの伝道活動を行ったのである[19]。従って、上述の「水方兼伝道士」という表現も正確ではなく、「水方となって活躍した後には、カトリックの伝道士となって活躍した」という表現が適当であろう。また、宋五郎の妻テシについても、小教区史では、彼女は米山の開拓者白浜忠兵衛の妹で、野首の開拓者である東太の孫にあたるとしている[20]が、「野首血統一覧」の中に忠兵衛の名前もテシの名前も見出すことはできない。「野首血統一覧」が作成されたのは大正５年であり、１世代も２世代も前に島外に出て行った人たちについては、当時存命中の人々の記憶の中にはもはやその痕跡を残さず、その結果血統一覧からも除外された可能性は大いにあるが、明確ことは分からない。

次に紹介するのは赤波江甚五郎・ツナ夫婦の家系略図である。



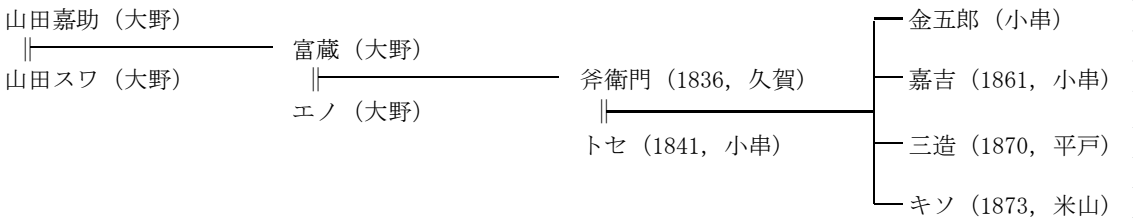
赤波江甚五郎・ツナ夫婦の家系略図[21]

この甚五郎・ナツ夫婦も上記の宋五郎・テシ夫婦同様に、赤波江の谷の坂を開拓した夫婦である。第一世代の貞吉・キミ夫婦とその息子の甚五郎はいずれも外海の大野出身である。甚五郎の生年は不明であるが、その子どもたちの生年から察するに、貞吉・キミと甚五郎親子が五島に渡ってきたのは、早くても 1840 年代であったと思われる。寛政年間の移住と比較すると、かなり遅れてからの移住である。五島の開拓者の中には大野出身者が多数含まれているが、上記の赤波江の最初の開拓者である正次郎・アキ夫婦も大野出身であり、貞吉・キミもこうした知人縁者を頼っての五島移住であったものと考えられる。第三世代の長吉と国五郎は、家系略図の生年が同じことから見ても分かるように、双子である。彼らは赤波江教会が 1889 年（明治 22 年）に建設されてから最初の洗礼者であり、司祭はデュラン師であった[22]。

（11）米山の開拓者たち

すでに示したように、浦川は『五島キリシタン史』の中で、中通島の最北端にある米山と津和崎には明治初年までキリシタンの片影すら認められなかったと書いている[1]。明治 10 年にマルマン神父が現地調査をした際の受洗者を元に記録された洗礼簿は、No. 1 から No. 25 まであり、受洗者たちの出身地も記されている。それによると、出身地は、野首 12 人、曽根６人、立串３人、小串３人、平戸１人となっていて、野首と曽根の出身者が全体のほぼ３分の２を占めている。しかも、その 25 人は５家族に分けられる。すなわち、山田斧衛門・トセ夫婦の家族、山田鉄平・サト夫婦の家族、又居藤五郎・カヨ夫婦の家族、白浜与平・ミツ夫婦の家族の５家族である[2]。

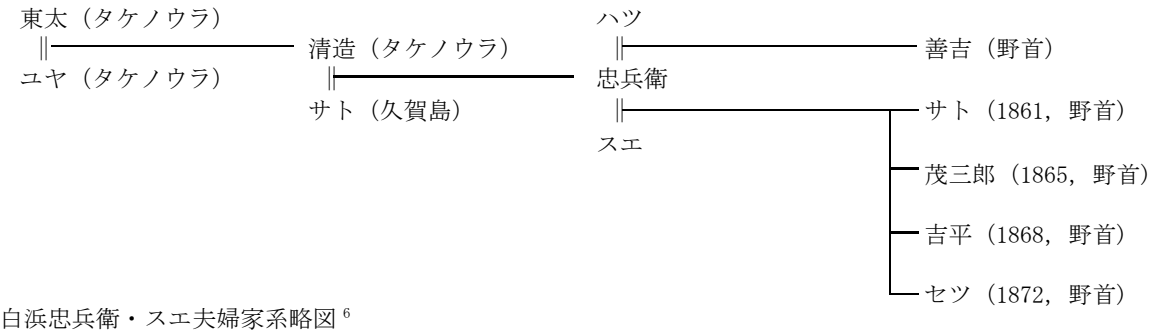
それでは、まず米山を最初に開拓したとされる山田斧衛門・トセ夫婦から紹介しよう。



山田斧衛門・トセ夫婦の家系略図[3]

この家系略図から分かることは、まずこの一家は大野出身者を先祖とし、彼らの五島への移住は、第三世代の斧衛門の生年から推測すると、早くても 1810 年代以降であり、嘉助・スワ夫婦とその子富蔵親子２代そろっての移住であったと考えられる。また、斧衛門の出生地から考えると、彼らはまず久賀島へ入植を試みたようである。しかしながら、それも長く続くことはなく、第四世代の長男と次男が小串生まれであることから考えると、久賀島の開拓も 20 年余りで見切りをつけて、久賀島から上五島の小串に入植したものと考えられる。すでに述べたように、久賀島と小串などの上五島北部とは移住者同士の交流があり、知人縁者を頼っての移住であったとも考えられる。ところが、斧衛門・トセ夫婦一家は明治初期に五島各地を襲ったキリシタン弾圧を逃れて小串から平戸に移住したようである。そのため、三男の三造は平戸生まれである。次男と三男の間が９歳も開いているのは、この間の苦難を物語っている。三造は長男金五郎や次男嘉吉とともに平戸の水方であるミカエル直蔵より洗礼を受けている[4]。しかしながら、キリシタン弾圧は五島にだけではなく、平戸にも及んだ。そのため、一家は平戸でも迫害に遭い、再び上五島に戻り、ようやく米山に定着したようである。そのため長女のキソは 1873 年に米山で生まれている。1873 年（明治６年）と言えば、明治政府が禁教の高札を撤去し、キリシタンたちにようやく信仰の自由が与えられた記念すべき年である。斧衛門一家は米山に定着後ほどなくして、長崎に出かけてゆき、パリ外国宣教会の宣教師より受洗したと言われている[5]。

次に紹介するのは、白浜忠兵衛・スエ夫婦である。



白浜忠兵衛・スエ夫婦家系略図[6]

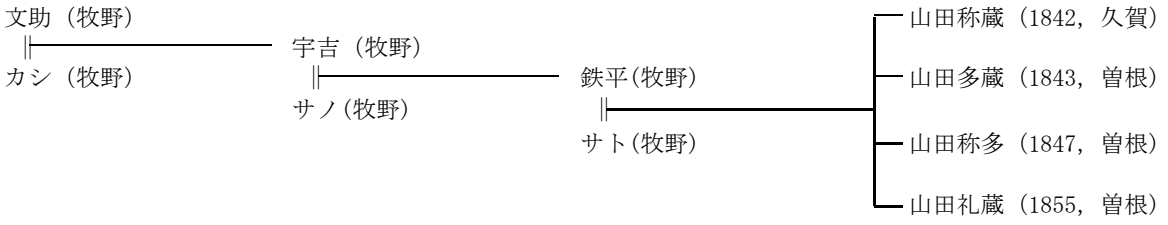
浦川は『五島キリシタン史』の中で、野首の開拓者二家族として松太郎一家と東太一家をあげている。松太郎一家が久賀島出身であるのに対して、東太一家は三井楽出身としている[7]が、確かにこの一家は第二世代まで三井楽タケノウラで生まれている。

さて、この三井楽出身の東太であるが、同じく三井楽タケノウラ出身のユヤと結婚し、清造をもうけた[8]。ところが、「野首血統一覧」には確かに、東太・ユヤ夫婦の子どもとして清造が、そして清造の嫁としてサトが記されているが、忠兵衛の名前が見当たらない。清造はサトとの間に２男２女をもうけたが、忠兵衛はその中には入っていない。これをどのように解釈すればよいのであろうか。この「野首血統一覧」は、大正５年に当時野首在住の白浜作太郎によってまとめられ、以後昭和 36 年までに順次書き加えられていったものである。ところが、この血統一覧を詳細に見てみると、松太郎の家系と東太の家系とが混同して記述されている部分もあり、必ずしも正確に記述されたものではないことが分かる。特にキリスト教系の家族は子だくさんの大家族ゆえに、混同や記憶ちがいも十分あり得ると考えられる。また、すでに指摘したように、男の子どもたちは分家するだけでなく、本家の姓までも捨てて、新たに創氏改名を行うケースも多々あった。またキリスト教の家系では、本家などという意識に乏しいことも指摘した。こうしたことから、血統一覧を作成することは困難を極めたであろうことは想像に難しくない。それに、忠兵衛は野首から米山に移住したために、野首の一族の記憶からも抜け落ちたと考えられる。いずれにせよ、この血統一覧の中に忠兵衛の名前が清造の子どもの中に見いだせないことだけは確かである。ところが、野首と瀬戸脇のキリシタンたちが、明治元年（1868 年）信仰の自由と新天地を求めて、無人島探しに出かけている。出かけた６人の中に忠兵衛の名が野首の長吉、留五郎とともに見出される[9]。

このように、血統一覧には出生地は野首ではあるものの、他所へ移住するために島を出て行ったことにより見落とされている名前が相当数あるのではなかろうか。ところで、この忠兵衛・ハツ夫婦であるが、忠兵衛とハツは息子善吉をもうけたが、ハツはその後死亡している。そして、忠兵衛はスエと再婚し、２人の間に２男２女をもうけている。忠兵衛は 1866 年に長崎に赴き、大浦天主堂司祭のプティジャン師に会い、教理の勉強を始め、翌年３月６日にクーザン師によって受洗した。当時、忠兵衛は野首の帳方を務めていた。ところが、小教区史によると、1870 年（明治３年）に野首から米山へ移住し、開拓夫婦になったという[10]。しかしながら、遠路はるばる長崎まで赴いてプティジャン師に会い、本格的に教理の勉強まで始めた帳方が、地元でカトリック復帰のための宣教活動をすることなく、受洗からわずか３年後に果たして移住を決断するのであろうか。しかも、忠兵衛の次女のセツは 1872 年に野首で生まれている。これをどのように説明したらいいのであろうか。恐らく浦が主張する移住年に誤りがあるのではなかろうか。

なお、忠兵衛の７人の兄弟姉妹のうち、弟の白浜武次郎も米山に、また姉のテシも大瀬良宋五郎の妻となって赤波江に移住しいる[11]が、いずれも「野首血統一覧」の中には見当たらない。ただし、テシは、上記の赤波江宋五郎の家系略図にも示したように、確かに宋五郎の妻であり野首出身となっている。

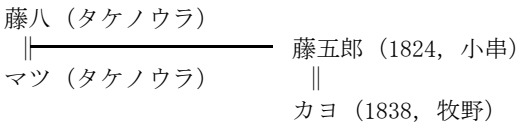
次は山田鉄平・サト夫婦である。



山田鉄平・サト夫婦家系略図[12]

この一家は第三世代まで、外海の牧野で生まれている。四代目の長男が久賀で 1842 年に生まれていることから、この一家は二夫婦三世代一家をあげての久賀島への移住であったと考えられる。そして、鉄平・サト夫婦の時代に、それまで開拓していた久賀島を後にして、曽根への移住を決断したようである。それは、乳飲み子を抱えての移住であり、1842 年か 1843 年であったとみられる。そして、子どもたちが全員生まれてから、曽根からさらに米山へ移住したと考えられるが、移住年に関しては不明である。なお、小教区史によると、鉄平・サトの夫婦は米山に移住した後に隠居し、長男称蔵と次男多蔵が分家したという [13]。すでに示したように、五島キリスト教系家族に特徴的な長男、次男の分家の例をこの一家にも見ることができる。忠兵衛の跡を継いだのは四男の礼蔵であり、彼は米山教会の伝道師となり教会に奉仕したという [14]。

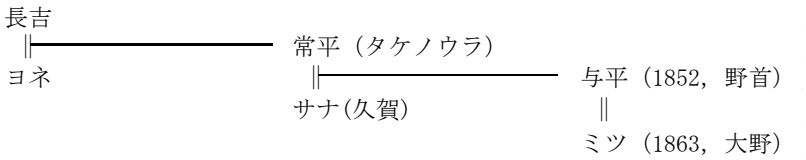
次は４番目の開拓夫婦の又居藤五郎・カヨ夫婦である。



又居藤五郎・カヨ夫婦家系略図 [15]

一代目の藤八・マツ夫婦はいずれも三井楽タケノウラ出身であるが、藤五郎の生年から考えると、藤八は恐らく寛政年間の三井楽生まれであろう。このことから、藤八の親の世代で五島に渡ってきたことがわかる。ただ、藤八の親が寛政の公式移民に属していたかは不明である。というのも、タケノウラに近い三井楽渕ノ元には、寛政年間以前にも移民の来島が記録されているからである。いずれにしろ、この一家の祖先は外海から五島への移住民の中では、早期の移住者に属していることだけは確かである。

次は白浜与平・ミツ一家の家系略図である。



白浜与平・ミツ夫婦家系略図 [16]

この一家は野首の最初の開拓者である長吉・ヨネ夫婦の子孫であると考えられるが、「野首血統一覧」でも一家の源となる長吉・ヨネ、そして常平・サナは記されているものの、与平の名前は見当たらない。恐らく与平の時代に分家して、米山に移住していったために、野首の血統一覧には記録されていないのではないかと考えられる。米山への移住の年代は、他の４家族同様に、1870 年代から 80 年代にかけてのことだと思われる。

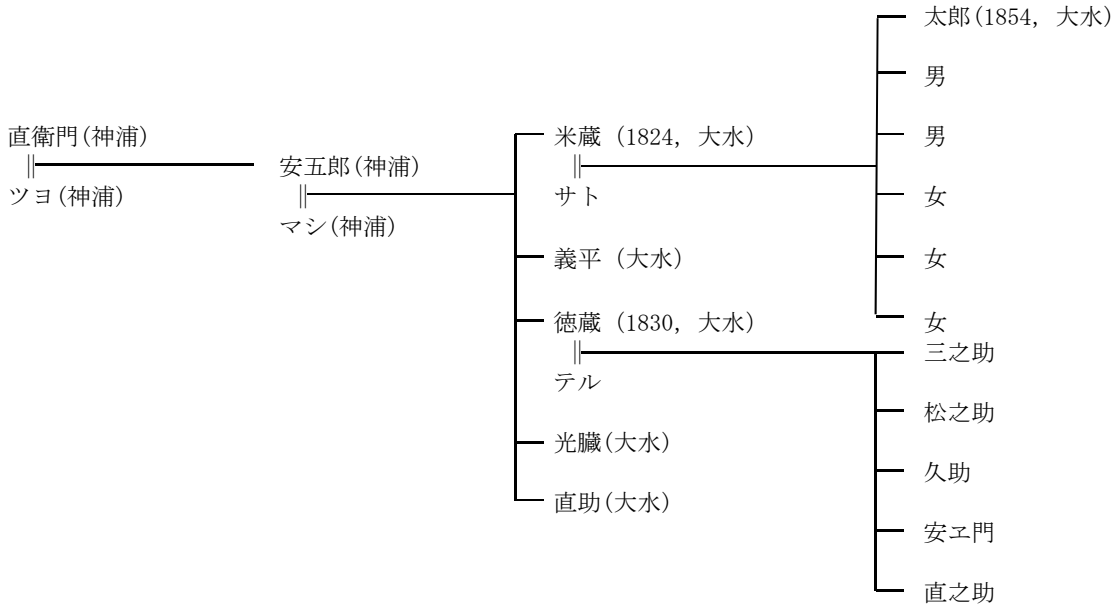
以上、米山の入植者の基となった５家族について紹介したが、これらの５家族のいずれもが、外海から米山への直接移民ではなく、三井楽や久賀島、あるいは小串、曽根、野首の開拓の後に、新天地を求めて、あるいは本家から分家して米山へ入植してきたことが分かった。そのため米山の開拓の歴史は他地区の開拓が江戸末期であったのに比べると、明治初期と新しいのが特徴的である。

(12) 大水の開拓者たち

大水地区については浦川の『五島キリシタン史』には一言も触れられていないが、ここは仲知小教区の中でも、下記の大水安五郎・マシ夫婦の家計略図から見ても分かるように、非常に早い時期に外海からの移住者たちが住み着いた場所である。恐らく寛政の公式移民の時代に大水に入植し、定着したものと思われる。他のキリスト教系の集落のほとんどが沿岸部に位置しているのに対して、この大水地区は内陸部に分け入った人里離れた場所であるためか、明治初期に五島キリシタンへの迫害の嵐が吹き荒れる中でさえも、追跡の役人に発見されて逮捕され他島へ流されるような被害を受けることもなく、信仰を続けることができたようである。そうとは言え、後述するように、大水のキリシタンが長崎に洗礼を受けるために赴いたことから考えると、他のキリシタン集落との情報網は十分保たれていたとみられる。ただ、この集落には伝道師の資格を持った信徒がいなかったため、カトリックへの復帰は他の集落よりも多少遅れることとなった。大水教会の洗礼簿によると、信徒の長崎での受洗は明治になってからであり、明治５年に２名、明治６年に５名、明治８年に３名洗礼を受けているが、大人の多くは明治８年頃までにカトリックに復帰したという。そして、大水集落のカトリック復帰のために貢献したのは、上述の赤波江助作と赤波江キタ、そして曽根の伝道師常造であった[1]。

また大水という地名が示すように、ここは水に恵まれていたとも聞いている。大水は昭和 44 年に曽根小教区に編入されたが、それまでは仲知小教区に属していた。小教区史によると、この教会の移住者については、明治 14 年にブレル師が作成した大水教会洗礼簿から完全に解明できたという。それによると、大水の開拓を試みたのは、外海の神浦から大水に直接移住してきた大水安五郎・マシ夫婦であったという[2]。

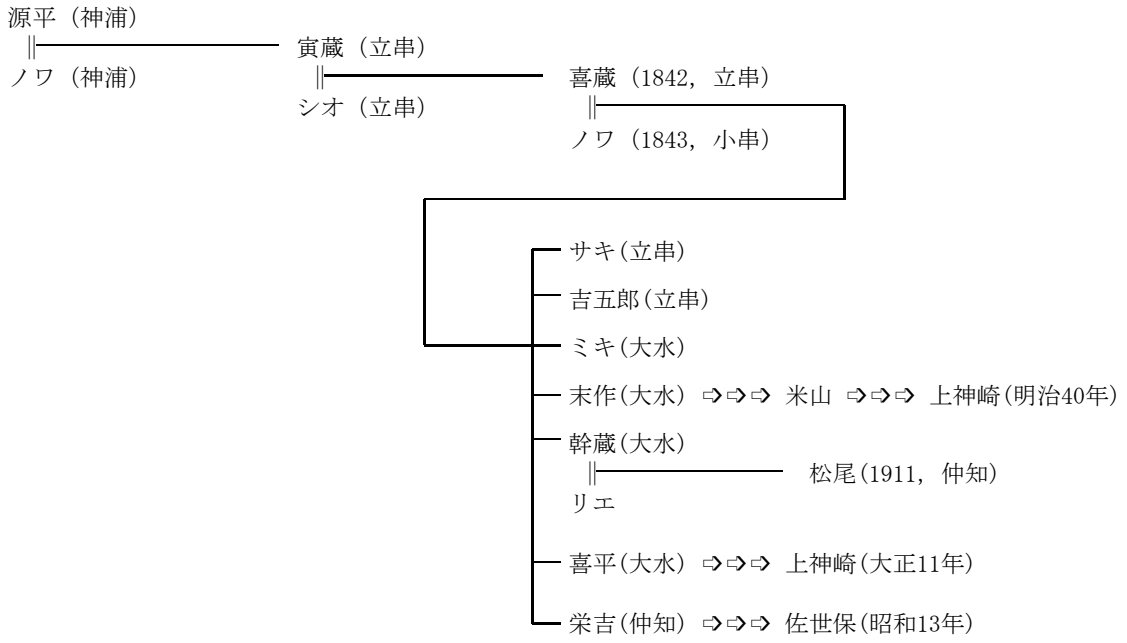
それでは、大水の最初の開拓者である外海神浦出身の大水安五郎･マシ夫婦の家系略図を紹介しよう。この開拓者夫婦は下記の家系略図で見ても分かるように、５人の息子に恵まれ、それぞれの息子がまた結婚して、多くの子どもたちに恵まれたため、それぞれが大水集落の繁栄につながっていったと言われている。



大水安五郎・マシ夫婦家系略図[3]

小教区史によると、米蔵は誕生直後に地元の信者大水留吉から仮洗礼を受けたという。信仰の自由が認められるようになった明治６年になると、弟の徳蔵とともに長崎に赴き、フレノー師から成人洗礼を受けた。その時米蔵は 49 歳、徳蔵は 43 歳であった。米蔵は 1853 年に祖父母や両親と同郷である大水喜蔵･サヨ夫婦の長女であるサトと結婚し、３男３女に恵まれた。彼らの長男太郎は明治 15 年に大水教会が建設された当時の信徒代表であった[4]。また徳蔵は 1856 年頃に平戸から大水へ移住してきた大水義之助の長女テルと結婚し、家系略図でも示しているように、五男に恵まれ、直之助以外はすべて大水にとどまり、これが大水の繁栄につながったと言われている[5]。

次に紹介するのは、大水安五郎・マシ夫婦に続いて、明治３年（1870 年）に立串からこの集落に入植してきた大水喜蔵・ノワ夫婦の家系略図である。



大水喜蔵・ノワ夫婦の家系略図[3]

この一家は外海の神浦から立串に入植しているが、第二世代の出生地や第三世代の生年などから推測すると、寛政年間の公式移住に属していないにせよ、比較的早期に外海から直接立串に入植したものと思われる。そして、移住してきた第一世代から第四世代の吉五郎の誕生まで、50 年近く立串で開拓に努めた後、吉五郎の妹ミキの誕生前に立串から大水に入植したようである。ところが、上記の家系略図で末子の栄吉は仲知生まれとなっているように、喜蔵・ノワ夫婦は、理由は不明であるが、子供たちを連れて大水から仲知の一本松に移動している。そして、他のキリスト教系家族の例に漏れず、この大水家でも長男が親の跡を継ぐことはなく、三男の幹蔵が一本松の本家を継いでいる。次男の末作は、分家して一本松から米山に移住し、しばらく開拓を続けた後、平戸の上神崎への移住を決断している。また四男喜平も、次兄を頼るように、上神崎に移住している。また、五男栄吉も兄たちよりかなり遅れてではあったが佐世保に転出している。この一族の広範な移住の軌跡に沿うかのように大水姓は米山や一本松など上五島だけにとどまらず、平戸の上神崎や佐世保へと広がっていった。

(13) おわりに

以上見てきたように、仲知小教区は、島ノ首、真浦、久志、一本松、そして竹谷の順で開拓が始まったことが確認できる[1]。しかも、島ノ首や真浦の開拓は外海から五島への公式移民が始まった1797年とほぼ同じ時期に外海から他の地区をほとんど経由することなく直接仲知にやってきた移民たちで開拓されていることが分かった。また、江袋や大水も比較的早期に開拓されたと考えられる。これに対して、久志、一本松、竹谷、赤波江になると、いったん立串や江袋などの上五島北部の隣接する他集落の開拓を試みた人々や、三井楽、久賀、野首などを経由しながら、さらに新たな開拓地を求めて移住してきたことがその家系略図からも見てとることができる。こうした開拓移民たちは、明治初期に吹き荒れたキリシタン弾圧にも、また厳しい地理的条件の中での過酷な労働や窮乏にも耐えながら、仲知小教区を築いていったのである。彼らを支えたのは、忍耐力と篤きキリスト教信仰であった。この忍耐力と篤き信仰心は親から子へ、また子から孫へと脈々と受け継がれていった。こうした忍耐力や熱き思いがあったからこそ、この地区は数多くの司祭や修道者、あるいは修道女を輩出したのである。しかしながら、この地区も他のカトリック集落や元キリシタン集落と同様に、その地理的悪条件ゆえに、若者が次々と地区を離れてゆき、今は極端な少子高齢化に見舞われている。かつては教会や教室からあふれでていた小学生たちも、今はほんのわずかとなってしまった。そして、2011年3月をもって仲知小学校も閉校となった。

教会で祈る人々には高齢者の姿が目立っている。この先20〜30年後の仲知小教区はどのようになっているのであろうか。気がかりである。この地区から篤い信仰心が消えてゆくことがないように、切に願うだけである。

◇注

（１）はじめに

1　『新魚目郷土誌』新魚目町・新魚目町教育委員会、昭和 61 年、184 頁。
2　内藤莞爾『五島列島のキリスト教系家族』弘文堂、昭和 54 年、22 頁。
3　『五島編年史下巻』国書刊行会、昭和 48 年、672 頁。
4　同上、717 頁。
5　内藤莞爾、前掲書、23 頁。
6　『五島編年史下巻』、723 頁。
7　同上。
8　同上、727 頁。
9　浦川和三郎『五島キリシタン史』仙台司教館出版部、昭和 26 年、89 頁。
10　同上。このような藩の雰囲気は領民にも影響を与えたようで、佐賀藩と大村藩が分配支配した樫山では、佐賀藩の東樫山と大村藩の西樫山とでは、住民の性格が大きく異なっていたという。面積も非常に狭い樫山ではあるが、道を隔てて、一方が西樫山、他方が東樫山で、東樫山の天福寺の住職の塩屋秀見氏によると、現在でも東樫山の住民の方が鷹揚であるという。また、方言も多少異なっているとのことであった。
11　同上。

（２）入植地の地理的条件

1　『五島編年史下巻』、723～724 頁。
2　同上、730 頁。
3　同上、852～853 頁。
4　内藤莞爾『五島カトリックの家族分封』九州大学北川基金刊行会、昭和 45 年、33 頁。
5　『長崎県のカクレキリシタン－長崎県カクレキリシタン習俗調査事業報告書』長崎県教育委員会、平成 13 年、40 頁。この地図は「五島列島のカクレキリシタン分布図」ではあるが、これは江戸後期に外海から五島へ潜伏キリシタンが移民してきて、定着した場所とほぼ同じである。地図上に示された集落に隣接する場所にカトリック集落は位置している。あるいは、同じ集落の中に、カトリック信徒とまだわずかに残っているカクレキリシタンが混在するところもある。
6　『五島カトリック家族分封』、21 頁。
7　木場田直『キリシタン農民の生活』葦書房、1985 年、56 頁。
8　『五島カトリックの家族分封』、22 頁。
9　木場田直、上掲書、45 頁。
10　「カクレキリシタン」という呼称は宮崎賢太郎氏が提唱している学術用語であるが、研究者によっては、「潜伏キリシタン」、「はなれ（離れ）キリシタン」、「隠れキリシタン」、「かくれキリシタン」、「納戸神」を使用している。しかしながら、これらはあくまでも外部の研究者たちが使用してきた呼称であり、実際に信仰している人たちは自分たちのことを生月では「古キリシタン」、「旧キリシタン」、平戸では「辻の神様」、外海では「昔キリシタン」、「古キリシタン」、「しのび宗」、五島では「元帳（もとちょう）」、「古帳（ふるちょう）」などそれぞれ地域で異なった呼称を使っていたし、信仰が存続している集落では現在もまだ使用している。（宮崎賢太郎『カクレキリシタン』長崎新聞新書、2006 年、22～26 頁）
11　『長崎県のカクレキリシタン』、26 頁。
12　木場田直、上掲書、96 頁。
13　宮崎賢太郎、上掲書、197 頁。なお、三役は地域によって多少呼称が異なっていて、例えば有福では帳役、看坊役、取次役、宿老の四役があり（同上、212 頁）、奈留島の前島では帳方、水方、宿老（しくろ）の三役（同上、222 頁）、福江島の大泊では帳方、水方、取次役の三役であった（同上、239 頁）。
14　『長崎県のカクレキリシタン』、26 頁。
15　同上、43 頁。
16　木場田直、上掲書、111 頁、『長崎県のカクレキリシタン』、26 頁。
17　例えば、黒崎の水方はお授け（洗礼）に先立って前後 1 週間は、労働に関して制約を受けていた（『長崎県のカクレキリシタン』、29 頁）。また、中通島の築地（あじ）・横瀬の三役は葬式、洗礼の時には三役そろわなければならず、そこでそれぞれに適当とされるオラショを唱えた（同上、49 頁）。オラショの種類や回数は地域によって異なるが、奈留島の樫木山の葬儀では、最初に「罪晴し」と称して「テンニマシマス」1 回、「アベマリア」33 回、「ガラシタ」１回、次に「死ん届け」という口上の後、葬儀の本体に入り、「テンニマシマス」３回、「ザジメ」、「アベマリ

ヤ」55回（故人が女性の場合「ガラシタ」３回）を唱えた（同上、66 頁）。いずれにしろ、三役は年中行事の他、個人の人生に関連する行事に参加し、行事を司らなければならず、名誉職とはいえ、役職に要求される事柄を遂行するためには、相当の時間を割かなければならなかったと思われる。また、それぞれの行事の前後には不浄なことも避けなければならなかった。

18　阿部律子「第４章五島列島のカトリック信徒数の推移とその特徴」『島の交流－移住・観光・歴史・文化・ライフパス』離島研究報告書第Ⅰ部、長崎県立大学経済学部学長指定研究、離島白書作成グループ編、2008 年、82～86 頁。

19　この数値は、2010 年８月 27 日に新上五島町役場において入手した資料（平成 22 年４月１日現在の統計数値）によるものである。

（３）仲知小教区の過去と現在

1　『仲知修道院 100 年の歩み－セシリア修道院よりお告げのマリア会まで－』お告げのマリア修道会、1984 年、22 頁。

（４）島ノ首の開拓者たち

1　浦川和三郎、上掲書、207 頁。
2　同上。
3　『仲知小教区史－信徒移住 200 年記念－1797～1998』仲知小教区、平成 11 年、52 頁。
4　同上。本論の家系略図は『仲知小教区史』を基に加筆訂正を加えて作成した。
5　『五島列島キリスト教系家族』、41 頁。
6　同上、55 頁。
7　同上、72 頁。
8　同上、66～67 頁。
9　『仲知小教区史』、53 頁。
10　同上。
11　同上、52 頁。
12　浦川和三郎、上掲書、207 頁。なお、この家系略図は『仲知修道院 100 年の歩み』を参考に補足した。
13　『仲知小教区史』、53 頁。
14　同上。
15　同上、55 頁。
16　『仲知修道院 100 年の歩み』、８～13 頁。なお、伝道学校の最初の会員のうち、山添マキは、『仲知修道院 100 年の歩み』の最後に示された「年表・仲知修道院 100 年略史」の中では、楠本シゲとなっている。詳細は不明である。
17　『仲知小教区史』、53 頁。
18　井戸田博史「平民苗字必称令－国民皆姓」『日本法政学会法政論叢』21、1985 年、44～46 頁。
19　『五島列島のキリスト教系家族』、47～48 頁。
20　井戸田博史、上掲書、46 頁。
21　同上。
22　『仲知小教区史』、53 頁。
23　浦川和三郎、上掲書、214～215 頁。
24　『仲知小教区史』、53 頁。小教区史の中の家系譜略図では、貞吉の妻は江袋出身のハルとなっているが、本文の説明（同上、54 頁）では、江袋出身のエリザベト・フデとなっていて、どちらが正しいのかは不明である。そのため、ここではハルとしておく。
25　同上、53 頁。小教区史では「ローカニュ師」とあるが、フランス語の綴りからすると「ロケーニュ師」である
26　浦川和三郎、上掲書、214～215 頁。なお、貞吉たちと一緒に小値賀に送られた山下エモなる人物は、上記の植村五郎作の妻エモであろうか。小値賀に送られた男女 34 名の中で、名前が列挙されているのは７名であるが、この７名は仲知のキリシタンの中でも目立った活動家であったからであろうか。いずれにしろ、山下エモが植村エモと同一人物であれば、彼女の宗教に対する情熱やそれに発する行為には一貫性がある。
27　『仲知小教区史』、54 頁。
28　同上。
29　同上。小教区史の島ノ首の項では、キワの夫は示されていないが、久志の項ではキワの夫は勝右衛門（牧野）となっているため、この家系略図ではこの夫の名前も示した。また、キワと息子の出身地はタケノハラとなっていたが、久志の項の家系略図に合わせてタケノウラとした。
30　同上、57 頁。
31　同上、56 頁。
32　同上、53 頁。
33　同上、53～54 頁。
34　同上、52 頁。

（５）真浦の開拓者たち

1　『仲知小教区史』、55 頁。
2　同上。
3　同上。
4　同上。

5　同上。
6　同上。
7　同上。なお、この家系略図は『仲知修道院 100 年の歩み』を参考に補足した。
8　同上。
9　『仲知修道院 100 年の歩み』、15 頁。
10　浦川和三郎、上掲書、214～215 頁。
11　同上、216 頁。
12　『仲知修道院 100 年の歩み』、20 頁。
13　同上、25 頁。教方とは、男女ともに伝道学校で 3 年間宗教について学んだ後、出身の集落に戻り、集落の子どもたちにカテキスタなどを教える人を指す。最初の伝道学校は明治 13 年フレノー師によって仲知に創設された。明治 15 年頃には、男子のみの伝道学校が女子部とはまったく独立して江袋に設けられた。明治 44 年、青砂ヶ浦教会主任であった大崎八重師によって、上五島の中心部である青砂ヶ浦に伝道学校が創設された。それに伴い、仲知伝道学校は廃止となり、男子部と女子部は３年毎に交代制で養成された。当時五島における伝道学校は中等教育（女学校）程度の教養科目も修めさせていた。明治、大正、昭和の初めまで、県立五島中学校と県立女学校に次ぐ学府であった。なお、この伝道学校での３年間の養成期間中の食費、学費、生活費は、すべて地元が負担した。そして、食糧のイモ、カンコロ、ムギ、野菜などは必要に応じてみんなで出し合って学校に届けられていた（『仲知修道院 100 年の歩み』、23～24 頁）。

（６）久志の開拓者たち

1　『仲知小教区史』、56 頁。
2　同上。なお、この家系略図は『仲知修道院 100 年の歩み』を参考に補足した。
3　『仲知修道院 100 年の歩み』、11 頁。
4　『仲知小教区史』、57 頁。
5　同上。
6　同上。
7　同上。
8　浦川和三郎、上掲書、216 頁。
9　『仲知小教区史』、57 頁。
10　同上。
11　同上。

（７）一本松の開拓者たち

1　『仲知小教区史』、58 頁。
2　同上。
3　同上。

（８）竹谷の開拓者たち

1　『仲知小教区史』、59 頁。
2　『仲知小教区史』には家系略図は示されていないが、文章から読み取って略図を作成した。なお、次女ミキと三女サツの生年が記されておらず不明であるが、1852 年生まれの三男佐吉と 1867 年生まれの四男富蔵の年齢が 15 歳も離れていることから、次女と三女は三男と四男の間に出生したと仮定し、四男の前に置いた。
3　『仲知小教区史』、59 頁。
4　同上。
5　『仲知小教区史』には、半次郎・エキ夫婦の子どもは「２人の男の子と５人の女の子」とあり、家系略図にはその２人の男の子として、栄吉と清が書かれているだけである。そのため、家系略図では５人を略した。なお、『仲知小教区史』の家系略図には、条造と久米蔵、またコマをユマと書かれているが同じ小教区史の中の野首・瀬戸脇の系譜について述べられた箇所で「野首血統一覧」が載せられ、久米蔵は条造と、ユマはコマと書かれている。そのため、この家系略図では「野首血統一覧」に従って記載した。いずれが正しいかは不明である。
6　『仲知小教区史』、60 頁。
7　同上。
8　同上。
9　同上。

（９）江袋の開拓者たち

1　『仲知修道院 100 年の歩み』、15 頁。
2　同上、11 頁。江袋教会は当時の面影を造す木造の聖堂として評価されていたが、2007 年２月に漏電のため焼失した。幸いに多くの人々の協力を得て再建され、2010 年５月に敵営式が長崎大司教の列席のもと挙行された。 2007 年まであった聖堂は何度か塗り替えられていたようで、再建された聖堂は明治 15 年の建築　当時の色彩を再現したものとなっている。
3　浦川和三郎ｒ五島キリシタン史』亻山台司教館出版部、昭和 26 年、204 頁。
4　『仲知小教区史』66 頁。
5　同上。
6　同上。

7　同上、75 頁。
8　同上、66 頁。
9　同上、54 頁。
10　同上、67 頁。
11　同上。
12　同上、57 頁。
13　回上、67 頁。
14　『仲知修道院 100 年の歩み』、13 頁。
15　『仲知小教区史』、67 頁。
16　同上。
17　同上。

（10）赤波江の開拓者たち

1　『仲知小教区史』、61 頁
2　同上。
3　同上。
4　同上。
5　同上。
6　同上、73 頁。
7　同上、61 頁。
8　同上。
9　同上、79～82 頁。
10　同上、61 頁。
11　『仲知修道院 100 年の歩み』、9 頁。
12　『仲知小教区史』、80 頁。
13　同上、79 頁。
14　同上、61 頁。
15　同上、62 頁。
16　同上。
17　同上。
18　同上、81 頁。
19　同上、62 頁。
20　同上。
21　同上。

（11）米山の開拓者たち

1　浦川、前掲書、207 頁。
2　『仲知小教区史』、63 頁。
3　同上。
4　同上。
5　同上。
6　同上、64 頁。
7　浦川、前掲書、208 頁。
8　『仲知小教区史』、72 頁。
9　浦川、前掲書、210 頁。
10　『仲知小教区史』、64 頁。
11　同上。
12　同上。
13　同上。
14　同上。
15　同上。
16　同上。

（12）大水の開拓者たち

1　『仲知小教区史』、82 頁。
2　同上、65 頁。
3　同上。
4　同上。
5　同上。
6　同上。

（13）おわりに

1　『仲知小教区史』、52 頁。

２．新上五島町の柑橘「ゆうこう」について

はじめに

筆者は長崎県南松浦郡新上五島町において、文化的景観保存調査を依頼され実施しているが、その一環として植物および動物の現地の踏査を実施している。

2009 年 11 月に１個の柑橘を世界遺産推進室の職員から渡された。しかし、観察の記憶がない柑橘であったが、ベトナム調査旅行の際に果実の香気は体験したような香りであった。

渡された果実は本町南部地区に位置する奈良尾郷高井旅のＩ商店の横に植えられた１本の樹木から採取した果実であった（写真１、写真２）。

それ以来その柑橘を追い求めている。その名は「ゆうこう」という品種であるが名前の由来について明らかでない。（長崎の古き良き果実・ゆうこう　MIROKUYA HOME PAGE 第 297 号等）のコピーを渡された。その論文によると江戸時代後半には長崎市土井ノ首、外海地区の屋敷の庭に植えられていたという記載があった。

それら文献によると長崎市での栽培状況から「カクレキリシタン信徒」と関係があるような記事が目にとまった。

新上五島町の中通島、若松島、有福島、日島、頭ヶ島でもカクレキリシタンの存在が知られている（教育委員会　1999)。

カクレキリシタン集落は勿論、その周辺地域にいたるまで現地踏査を計画し世界遺産推進室の職員とともに実施した。



写真１　高井旅Ｉ商店の「ゆうこう」



写真２　１の根元の様子（2009.12.26）

（１）柑橘ゆうこう由来仮説と検証

五島列島の新上五島町は1800年代から屋敷の周辺などで栽培されている柑橘があり、それは同じ果実でも地区により呼び名（名前）が異なった。

例えば2009年現在における名称「ゆうこう」、「ゆーみかん」、「ユズみかん」「むかしみかん」などがその事例である。

本品種は前述した長崎県内では長崎市土井ノ首および西彼杵半島の西海岸に位置する外海町で栽培されているという（MIROKUYA HOME PAGE 第297号)。

おそらく本町内には「長崎県西彼杵半島の外海町から移入され」現在も栽培されているであろう。

しかし、現時点で栽培されている樹木の樹令および聞き取り調査による根拠に基づき年代および移入された地域が主に「カクレキリシタン信徒の屋敷」に栽培されているものと仮定した。

≪仮説≫

キリスト教の布教に従事した宣教使ド．ロ神父（1840－1914年）により長崎県西彼杵半島の西側に位置する外海町に国外から持ち込まれ栽培された品種をその地から信徒により中通島へ運び持ち込まれ栽培された。

したがって、カクレキリシタンに入信した信徒への暗黙の記念樹、つまりシンボル・ツリーとして次々に送呈され分布が広がっていった。

また品種名「ゆうこう」の名称は「友好」の愛の証しとして贈られ大切に栽培されてきたものと推測した。

しかし、時代の流れとともに良品種の柑橘が登場し「ゆうこう」は栽培されなくなりシンボル・ツリーは樹の寿命とともに枯死し、より甘い良質の品種が栽培され愛着が薄れ「ゆうこう」は姿を消しつつある状況であろう。昔はカクレキリシタン信徒の屋敷または屋敷周辺で大切に栽培されてきた。

したがって新上五島町で最初に栽培したのはカクレキリシタン信徒の屋敷であろう。ゆえに現在の新上五島町内では「カクレキリシタン・カトリック信徒」の屋敷およびその周辺で栽培されているに違いない。

以上のような仮説のもとで調査を開始し現在も続けている。

（２）調査地および調査方法

果実が成熟し着色している時期を調査時期とし、調査方法についても次のように十分に検討し聞き取り調査（ヒヤリング）、果実の観察を実施するなど試みた。

①調査方法：調査は現地で以下の方法を実施した。

○聞き取り調査法：果実を持参し各地で見ていただき「これと同じみかんを見たことはありませんか」という要領で問うた。すると家にはないが、・・・にあったような気がすると教えてくれた。しかし、その果実は「ゆうこう」と異なることが多かった。

○現地での果実の観察：熟した果実の色彩がレモン色（淡黄色）に成熟しているものを探し持参した「ゆうこう」の果実と比較検討し確認した。果実の特徴については後で述べる。

②調査年月：2009 年 11 月～2010 年５月までの期間に世界遺産推進室職員の協力のもと共同研究を実施している。

期間の選定については先にも述べたように柑橘の果実が成熟しそれぞれ特色の色彩がみられる11月から３月の期間に主に現地踏査を２人～３人で実施し、後で述べる調査票に記録を行った。

③主な調査地：調査地は長崎県南松浦郡新上五島町内の全域を対象に実施している。

柑橘の生育地調査を 2010 年５月末までに実施した地区は、津和崎郷、曽根郷、立串郷、小串郷、曽根郷、似首郷、丸尾郷、浦桑郷、榎津郷、鯛ノ浦郷、七目郷、阿瀬津郷、青方郷、三日ノ浦郷、荒川郷、神ノ浦郷、岩瀬浦郷、宿ノ浦郷、桐古里郷、奈良尾郷および若松島の西神ノ浦郷、榊ノ浦郷および日島郷、有福郷、漁生浦郷、若松島の間伏郷、若松郷などの地域で、現地踏査を行った。

しかし、１年間１シーズンだけの調査であり不十分であるが今後の調査の参考のため現時点での調査結果を次の通りにまとめた。

（３）調査結果

生育地を 2010 年３月までに確認できたのは下記のａ～ｊ地域の通りである（ゆうこう分布図を参照）。

①分布と個体数

生育地と個体数を中通島の北部地域から列挙する。

ａ．曽根郷江袋：

北緯 33° 06′ 13″ 東経 129° 08′ 35″（確認数１本：調査票７）、おそらく昔は多く栽培されていたであろう。その当時、果実をカラス類が運び現在の法面に落され自然に発芽し成長したものと推測した。

b．岩瀬浦郷福見：

北緯 32° 51′ 27″ 東経 129° 05′ 07″（確認数１本：調査票４およびこの地域の山中に２本あるというが未観察)、周辺を探索すると今後も発見できるであろう。

c．宿ノ浦郷築地：

北緯 32° 52′ 08″ 東経 129° 52′ 08″ 東経 129° 03′ 18″（確認数 16 本：調査票 1 -1～1-16)、この地域で最も多く栽培していた。

この地のH氏の父浜口喜之エ門が外海から持ち込んだ。その樹木は現在約 70 歳代の人が子どもの頃は、その「ゆうこう」の大木に、はしごを立て掛け果実を採取していたと言うが、現在は枯死し痕跡もなかった。

d．桐古里郷横瀬：

北緯 32° 52′ 10″ 東経 129° 02′ 59″（確認数１本：調査票２、および山中に１本あるというが未観察)、この地区は築地と山ひとつ越え隣接する地区であり、今後も発見されるであろう。

ここでも大木が屋敷工事のため伐採されなくなっていた。

e．桐古里郷桐：

北緯 32° 51′ 37″ 東経 129° 02′ 59″（確認数２本：調査票 3-1、3-2)、さらに前の横瀬の南に隣接する地域であり時間をかけて精査すると生育の確認本数は増加する可能性がある。

f．奈良尾郷高井旅：

北緯 32° 51′ 42″ 東経 129° 04′ 03″（確認数２本：調査票 5-1、5-2)、古い時代には大木があったが伐採したと言う（岩谷)。

g．奈良尾郷宮田：

北緯 32° 50′ 16″ 東経 129° 03′ 59″（確認数２本：調査票 6-1、6-2）この地区でも昭和初期には数本あり学校帰りに果実をとり食べていたという（一鶴堂の主人談)。

h．宿ノ浦郷宿ノ浦：

北緯 32° 53′ 45″ 東経 129° 2′ 59″（確認数１本：調査票 10)。

以上は中通島での栽培地およびその栽培していた個体数を確認した。次に若松島で生育を確認できた地域は下記の通りである。

i．西神ノ浦郷大平：

北緯 32° 54′ 55″ 東経 129° 00′ 35″（確認数１本:調査票８)、現在のところ大平教会の後部に生育する１本である。ここのものは中通島の築地より移植された（聞き取り調査)。この地域では明らかに名前も「ゆうこう」がそのまま生きていた。

j．西神ノ浦郷男鹿ノ浦：

北緯 32° 54′ 58″ 東経 120° 0′ 45″（確認数１本、調査票９）など若松島では２個所が産地であった。

前述したとおり 30 本の生育を確認し、聞き取り調査により福見と横瀬では山中に生育しているものが３本あることが明らかになったが未踏査であり。合計すると 33 本を知ることができた。そのうち築地の１本は立ち枯れしていた。

更に、現在は生育していないが聞き取り調査により、確かに自宅には栽培していたが、既に「ゆうこう」は枯れてしまった地域は有福島の小田（環境庁 4929－2786)、若松島の樫ノ口（環境庁 4929－2040)、中通島の白魚（環境庁 4929－2054）の３地域であったが、さらに踏査が進むと昔の状況が明らかになるであろう「ゆうこう分布図」で示した通りである。

②新上五島における名称

果実名：調査の結果、仮説の項目でも述べたとおり各地で同じ種類「ゆうこう」であっても新上五島町宿ノ浦郷築地では「ゆうこう」、築地の近隣の桐古里郷横瀬および桐でも「ゆうこう」、奈良尾郷高井旅でも「ゆうこう」、岩瀬浦郷福見では「ユズみかん」、奈良尾郷奈良尾では「ゆーみかん」、西神ノ浦郷大平では「ゆうこう」、曽根郷江袋では「ユズみかん」、西神ノ浦郷男鹿ノ浦では名前が判らない「昔みかん」など地域により果実の名前が異なることが明らかになった。

③新上五島町における由来

日本の柑橘は沖縄にはシークワシャーが野生していることが知られ、九州や本州南部に野生しているものはタチバナだけである（岩掘脩一・門屋一臣 1999)。タチバナは本町にも各地で少数ではあるが栽培されている。しかし、この「ゆうこう」は、後で述べる形態的特徴から考察すると本邦原産ではなく海外から移入されたものと筆者は推測している。

西神ノ浦郷大平のものは前述の通り宿ノ浦郷築地から持ち込まれたことが聞き取り調査で明らかになり「ゆうこう」の名前が生きていた。

④筆者らが最初に見た柑橘

筆者らが最初に見たのは高井旅のＩ商店横に生育していた１本の個体であった。この１本の柑橘由来については栽培していたＩ氏本人からの聞き取り調査によると「約 20 年前に旧奈良尾町東方の南に突き出した福見鼻の山中で１本の約 20 ㎝の柑橘苗木を見つけた。それを持ち帰り現在の場所に植えた」と語ってくれた（写真１・２・３)。

果実は 2009 年 12 月 26 日撮影した。

福見鼻の山中に自生した経緯の推測をすると柑橘ゆうこうは山麓の海岸近くにある福見集落（写真５などに数本）栽培されていて、その果実をハシブトガラス・ハシボソガラスのカラス類が採食し種子分散に関与したものと推測した。カラス類は果実のまま嘴でくわえ運ぶ習性がある。それが地面に落され発芽し２年目の苗だったと推測した。

⑤新上五島町における分布

調査範囲において生育分布を確認できた地域を列挙すると表１の通りである。

現在までの調査で 10 地区 30 本が知られているが今後調査が進むとこの数は増えるであろう。

表１　新上五島町内のゆうこう分布地と本数

島名		地　　域	本　　数
中通島	(1)	曽根郷江袋	１本
	(2)	岩瀬浦郷福見	１本と山中に２本
	(3)	宿ノ浦郷築地	20 本
	(4)	桐古里郷横瀬	２本
	(5)	桐古里郷桐	２本
	(6)	奈良尾郷高井旅	２本
	(7)	奈良尾郷奈良尾宮田	２本
	(8)	宿ノ浦郷宿ノ浦	１本
若松島	(9)	西神ノ浦郷大平	１本
	(10)	男鹿ノ浦	１本

⑥2010 年３月まで未確認地域

中通島では友住郷、赤尾郷、江ノ浜郷、小河原郷、太田郷、榎津郷、七目郷、浦桑郷、神ノ浦郷などについては３月までの段階では詳細な踏査はしていない。

分布の項で述べた地区での状況から推察すると全て明らかに「カクレキリシタンの集落の信徒宅」の屋敷内および周辺に栽培されている。そのような事情からカクレキリシタンの集落を中心に現在も調査をすすめている。先に述べた分布状況から「ゆうこう」の分布はカクレキリシタン宗教信仰と関わりあいが予想された。

⑦筆者・推進室職員らによる検証

新上五島町における分布状況から推測すると、栽培場所は屋敷内かその近くで栽培され大切に育てられている。

筆者は「ゆうこう」を分ける時点で大切な「友好」の証しとして配分されたもので、それが「ゆうこう」として呼ばれている。つまりカクレキリシタンのシンボル・ツリー（記念樹）として分け与えたものと推測される。カクレキリシタン信徒の屋敷には「昔はあったが枯れた。切った。」などの聞き取りができた。

新上五島町に入った土地は「築地」であることが聞き取り調査と現在の分布状況などから明らかになった。築地地区のH氏の父が外海町から持ち込んだことが浜口家の「言い伝え」で明らかになった。



写真３　写真１の全体の樹形に仕立てている



写真４　約 10 数年前に接ぎ木したゆうこう（2010．1．15 日撮影）



写真５　三代前に植えられた福見のゆうこう（2010．1．15 日撮影）



写真６　築地の民家の屋敷内で生育



写真７　大平教会後部で生育するゆうこう

（４）形態的特徴

①自然樹形と枝の特徴：

常緑高木で樹高は約 10ｍで、日当たりのよい場所を好む、周囲の木々に覆われると生育が悪くなる。したがって写真３のように陰切りが必要になる。

自然樹形は三角形に近い形となり光合成に適した形状となる。周辺の環境の影響を受け、その状況に従って樹形は決まる。たとえば写真１は成長の過程で生長点を剪定し芯を止めている（写真３）。

福見鼻の山中にランを採取に行ったＩ氏は山中で約 20㎝の苗を持ち帰り屋敷内の片隅に植えた。約 20 年前のことである。順調に生育したので、10 年前に樹木の中心を伐採した。頂芽を失った樹木は枝を横に広げ写真３の樹形となった。

樹木が高くなると果実の採取が困難になるために採取を容易にする目的で芯（頂芽）の成長を止めたという。たしかに果実の採取が簡単にできた（写真１）。

写真４は写真５の樹木をH氏がO氏からもらい、それを接ぎ穂に古いみかんに接ぎ木した。この個体は十数年になろうというが定かでない。

現在の地主は三代前の人が植えたもので、「ユズみかん」と言っていた。

- **枝の特徴**：果実をつける枝は緑色で稜角で断面はほぼ三角形で、３～４㎜の小さな刺がある。
- **葉　の　形**：ほぼ楕円形で主脈の先端は鈍頭で凹部があるものもある。葉は革質で表面は濃緑色で裏面は淡緑色で、12 対内外の側脈があり、主脈は隆起している。葉の縁は全縁であり鋸歯はない（写真５・６）。葉柄はほぼ 10 ㎜で葉身の基部には小さな翼葉がある。

②果実の計測結果

・**形　態**：型は、ほぼ球形で果柄接着部分に小さいくぼみがある。

・**大きさ**：縦長径は 53～57 ㎜、横長径は 62～67 ㎜、１個当たりの生体重量は約 120ｇで、果皮の厚さは約４㎜、袋は約 11 個であった（写真８）。

・**種　子**：果肉内には沢山の種子が詰まっている。中央果実のさらに中央の粒が種子である。果実の果柄の長さは約 10 ㎜で直径は３㎜であった。

・**果実の色と芳香**：果実が熟すのは 12 月前後からで、果実の果皮の色はレモン色に類似するがやや淡黄色、で脂腺は荒く手触りは小さい凹凸を感じる。

・**果皮の香り**：みかんのユズの香りより弱く、レモンの香りに近いが、それよりやさしい香りである。大きさを容易に比較するために日本の硬貨を下に並べ比較した。右端から 500 円、100 円、10 円、50 円、１円硬貨である（写真９）。



写真８　高井旅の「ゆうこう」果実
（2009 年 12 月 27 日に計測）



写真９　ゆうこう（右）とレモン（左）の比較

③葉と枝の特徴

葉形の特徴については、写真 10 および写真 11 に示したとおりである。

葉の大きさは若い葉、成熟した葉により異なる。写真で明らかなように葉の大きさには、かなりの差異があった。

写真 12 では小さな突起（刺）であったが、宿ノ浦郷築地のＦ氏屋敷内に生育していた個体の刺は写真 13 に示した通り長いことが判明した。この個体は高く伸びると果実の採取が困難になるため、一度幹の途中から切った。それでこのように長い刺が出てきたという。



写真 10　葉の形状と大きさ①



写真 11　葉の形状と大きさ②

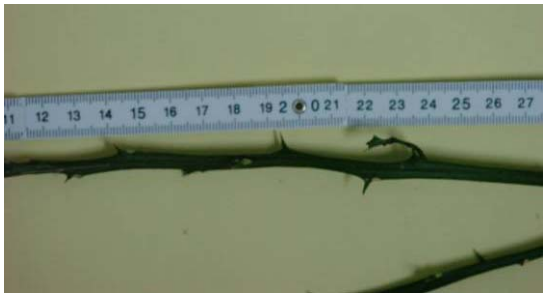


写真 12　小枝に小さな刺がある
（2009 年 12 月 26 日採取枝）

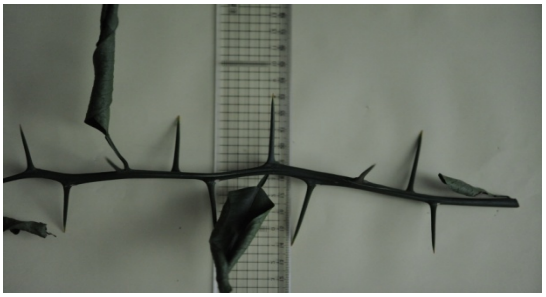


写真 13　ゆうこうの刺が長い個体

④花の特徴

ゆうこうの花の開花時期は４月中旬であり、５月下旬には１本の樹木に数個が残っていた。

花弁は下図に示したとおり枝先や葉腋に萼片５個と５個の花弁は白色で直径は約 40 ㎜であった。各花弁の長さは約 18 ㎜で、雄蕊は約 12 ㎜で多数、雌蕊は１個で約 14 ㎜で雄蕊より長い。子房は１個で楕円形である。

花は芳香が強く、心地よい香りである。



写真 14　ゆうこう（友好）の花

⑤新上五島町での果実の用途

新上五島町での聞き取り調査から次のような用途が明らかになった。

ａ．しぼり出した果汁に砂糖を入れジュースとして飲んでいた。

ｂ．調味料として、ダイコンのなますなどに入れ、風味と酸味に用いている。

ｃ．果実を湯船に浮かべ入浴を楽しむのに用いている。

ｄ．魚の小骨をのどにかけた時に「ゆうこう」の果実をしぼり、しぼり汁を飲んだら小骨が取れたという。

⑥考察

調査の結果で述べてきたとおり現地踏査によって「ゆうこう」生育地は 10 地域で合計 33 本の生育を確認した。その中で集中的に栽培されていたのは中通島の築地集落（4929－2044）に 20 本、およびヒヤリングにより横瀬と福見に３本（未踏査）であった。

最初に栽培した地域は築地で、カクレキリシタンの浜口喜三エ門で、西彼杵半島の外海から移入した（現地でのヒヤリングによる）。

さらに江袋地区に１本の樹木を確認したものは生育環境から明らかなように果実をカラス類が採食のためこの地まで運び落とし発芽し生育したものと推測した。したがって、この地区のどこかに大きい「ゆうこう」の古い樹木があった。その樹木は外海町から持ち込まれたものと推測した。

2010 年に発行された文献(6)の p. 20 により江袋地区は外海との縁がありド･ロ神父との関わり合いが明らかで、シンボル・ツリーとして古い時代から持ち込まれたものと類推した。

柑橘「ゆうこう」の名称が通じたのは築地と近隣の横瀬および桐と、築地から移植したという若松島大平である。それらの地区では「ゆうこう」という名称が使われていた。

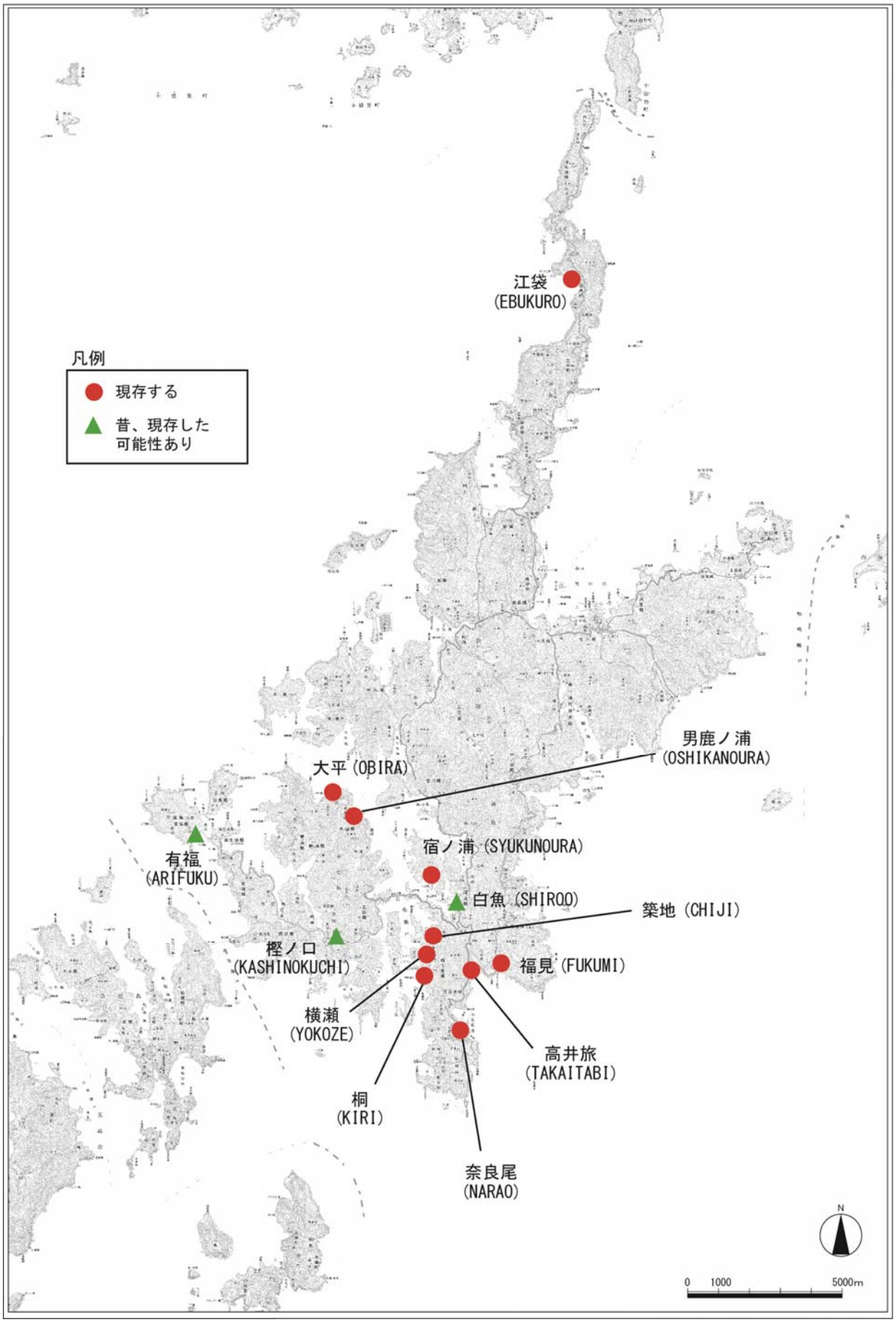
50～60 年以上前､屋敷に栽培していたが現時点では枯死し今は生育していない地域は､有福郷小田、若松郷樫ノ口、宿ノ浦郷白魚であった。

1973 年、有川には「夏ミカン共同集出荷施設」が新築、さらにオレンジ共同選果場改築がなされており、柑橘栽培は盛んになった。古い品種の「ゆうこう」は歴史的な価値は薄れ、管理が悪く放置され、また伐採され、カクレキリシタンの屋敷や周辺の畑などから「ゆうこう」の姿は消えて行ったものと、聞き取り調査および現地調査によって推測した。

後日の調査結果などをまとめ続編としてまとめる予定である。

◇参考文献

・岩崎脩一　他（1999)。カンキツ総論。
・ホームページみろくや（2007)。長崎の古き良き果実・ゆうこう。
・環境庁都道府県別メッシュマップ（1997）42 長崎県　環境庁。
・長崎県教育委員会（1999）長崎県カクレキリシタン風俗調査事業報告書　長崎県教育委員会。
・有川町教育委員会（1992）有川町郷土誌　有川町。
・江袋教会復旧委員会専門委員会編（2010）江袋教会堂焼損復旧修理工事報告書　p 20　宗教法人カトリック長崎大教司区。


凡例
現存する
昔、現存した可能性あり
江袋 (EBUKURO)
男鹿ノ浦 (OSHIKANOURA)
大平 (OBIRA)
有福 (ARIFUKU)
宿ノ浦 (SYUKUNOURA)
白魚 (SHIROO)
築地 (CHIJI)
樫ノ口 (KASHINOKUCHI)
福見 (FUKUMI)
横瀬 (YOKOZE)
高井旅 (TAKAITABI)
桐 (KIRI)
奈良尾 (NARAO)
N
0 1000 5000m

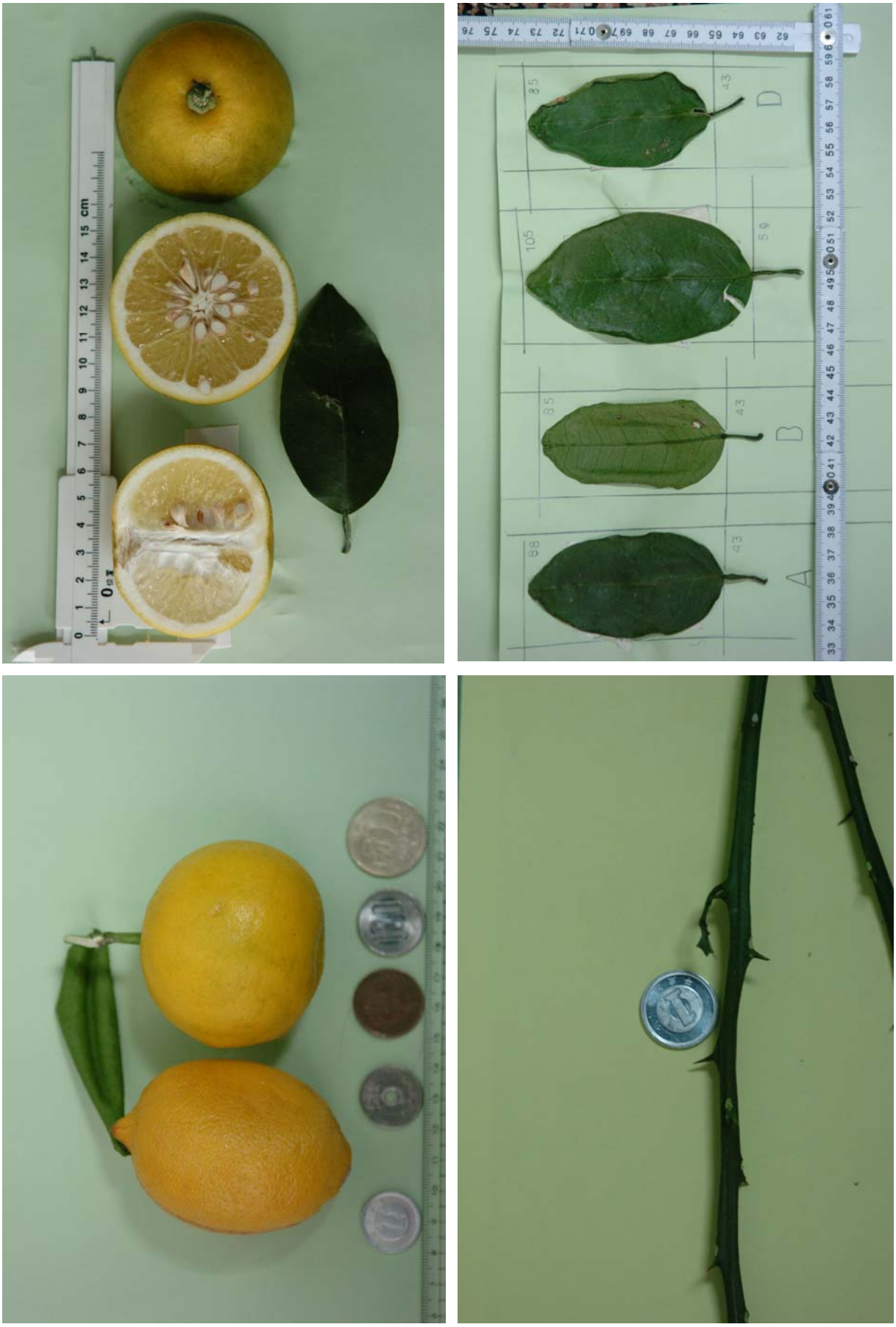


写真 15　高井旅の I 氏の木のもので 2009 年 12 月 26 日に採取し佐世保の長崎・野生生物環境研究所で計測したものである

３．上五島のキリシタン遺物

（１）概要

土井ノ浦教会カリスト資料館収蔵の信心具 11 点について報告する。これらの信心具は近年まで若松島や有福島のカクレキリシタンの信心具であったものである。これらは、カクレキリシタン組織が解散のさい、この資料館に納められたものがほとんどである。表１には資料リストをあげる。報告する資料はメダイ４点、ロザリオトップの十字架４点、用途不明（おそらくロザリオトップ）１点、硬貨１点、簪（かんざし）１点である。主に 19 世紀後期から 20 世紀初頭のものが中心となる。詳細は DON001 から 0011 とする 11 枚の資料観察カードに示した。

以下では主な資料の特徴を述べる。

（２）各遺物資料の特徴

以下では、主な資料の特徴を述べる。

DON0001：十字架（ロザリオトップ）（箱入り）は、製造年代を 17～19 世紀と推定する。17C ごろの製作を考える方もいるが、比較資料を検討すると、モチーフは異なるが形状は似ているものが 18～19 世紀のスペイン製のものもある。南蛮文化館の明治期資料と形状は似ている。断面にバリがあり、精緻ではない作り、磨耗が進んでいるが、コピー元の磨耗が反映されている印象をもつことから、複製品と考えられ、本物からコピーしたものという印象をもつ。裏面に、左にヤットコ、右に金槌、中上に十字架と、工具が描かれ、イエスを磔にするための象徴とされる。19 世紀末までしばしば聖具・信心具に用いられる。このことも 19 世紀ごろの製造である可能性も否定できない。

DON0005：メダイ（耳付き）は、大石らによって聖イグナチウス・ロヨラと聖フランシスコザビエルが福者だった時代（1619 年～1622 年）のものと考えられている。しかしながら、根拠とした両者の像にある光のモチーフが、19 世紀から 20 世紀のメダイに描かれた聖母像などには点状の光を表すモチーフが描かれることもある。したがって福者を表す光のモチーフとは断言できない。また、17 世紀のメダイに類例もある。東京国立博物館 395／C1065 とよく似ているが丸環部や枠の形状、サイズが異なる。これらのことから、製作年代を 17 世紀ごろと推定する。観察をすると、磨耗が少ないのに像容が明確でない。このメダイは、磨耗のある母型となるメダイからの近世期に国内で作られた複製品である可能性も考えられる。

その他（DON0002，3，4，6，7，9）：東京国立博物館所蔵の 1860 年代末から 70 年頃の浦上四番崩れの際の浦上キリシタンからの収納品と同タイプのものである。フランスなどの南ヨーロッパ製が主体である。漢字のメダイが含まれるが、19 世紀後期のフランスやベルギー製のメダイでこのようなタイプがしばしばみられる。パリ外国宣教会宣教師が潜伏キリシタンへの布教の際に配ったものの可能性が高い。このような信心具は、禁教解除後もカクレキリシタンの御神体ないしは信心具として使われた。

DON0010：VOC コインで、刻印の通り 1750 年頃のものであろう。オランダ領東インド会社の通貨がカクレキリシタンの御神体ないしは信心具として使われたものであろう。

◇引用・参考文献

江口正一　1972『東京国立博物館図版目録　キリシタン関係遺品篇』（pp. 210）東京美術

標準名　十字架（ロザリオトップ）（箱入り）		整理番号　DON0001
法量	縦木　29.30mm　厚さ　6.10mm 横木　20.90mm　厚さ　5.99mm 厚さ（中央）2.25mm 丸環（紐通し輪）　高さ　6.85mm 幅　5.45mm 重量　箱と布　6.25g；箱 長径 58.55mm　短径 38.90mm　厚さ 6.50mm 布　0.06g 十字架　3.23g	 
材質	鉛合金か？	
製作年代	17C？～19C	
製作地	国内	
使用地	日本	

所見

製作技法	鋳造
像容	表：　イエス像。光背あり。 背面：　十字架（上部）　左右にアルファベット文字あり；十字架（下部）　ロザリオの聖母像、左：ヤットコ；右：金槌；中上：十字架（これらの工具はイエスを磔にするための象徴。19世紀末までしばしば聖具・信心具に用いられる）。中央：聖体顕示台ないしは燭台。
形状	丸環（紐通し部）　メダイに対し、垂直方向。ただし時代判定根拠にはならない。
その他の特徴	断面にバリあり。下方に左方向にゆがみあり。 複製品と考えられ、本物からのコピーという印象をもつ。磨耗が進んでいるが、コピー元の磨耗が反映されている印象をもつ。
十字架のプロポーション	横木が相対的に上についている。
類例	南蛮文化館；加藤個人蔵
備考	潜伏時代の伝世品か？パリ外国宣教会の初期宣教時に配布された信心具の複製か？
比較資料	モチーフは異なるが形状は似ているものをあげると、18C～19Cのスペイン製のものがある（加藤蔵）。南蛮文化館の明治期資料と形状は似ているがモチーフが異なる。

標準名　メダイ（不思議のメダイ）		整理番号　DON0002
法量	長径　21.10mm 短径 17.50mm 厚さ 0.85mm 紐通し丸環部　高さ　3.75mm 幅　3.50mm 重量　1.59g	 
材質	真鍮（銅成分が少ないイエローブラス）	
製作年代	19C後期～末期	
製作地	フランス製か？	
使用地	日本	

所見

像容	表：　無原罪の聖母　文字はフランス語　1830年代の刻印あり 裏：　定式通り
表面	文字：　フランス語で　”O MARIE CONQUE SANS PECHE PRIEZ POUR NOUS QUI AVONS RECOURS A VOUS”　と刻まれるのが一般的である。意訳すると「けがれなくやどられた聖マリア、あなたによりすがる私たちのためにお祈りください」となる。 像様：無原罪の聖母が両手から光を出している。この光は人々への恵みを注いでいることをあらわしている。足元の地球は全世界を表す。踏み砕かれたヘビは悪霊・悪魔を表す。
裏面	12個の星は、12使徒の上に建てられた教会の母であり、母であるマリアを表す。十字は十字架上で亡くなったキリスト、Mはマリアの頭文字である。十字の下の線は、Iという頭文字を表し、Immaculata（けがれのない）を表す。左の心臓のモティーフは、いばらのとげで傷ついたイエズスの聖心、右は子供を犠牲とされ苦しみの剣で貫かれた聖母の聖心を表す。
その他の特徴	比較的、薄手である。
類例	国立博物館所蔵品と同笵はなく、あまり似ているものはない。加藤所蔵品とやや似ている。
備考	パリ外国宣教会の明治6年以降の宣教にからんだものか。
比較資料	19世紀後期～末期のフランス？製のものである（加藤蔵）。東京国立博物館資料については、423／C951が聖心のモチーフが似ているが、表面の文字の位置が異なる。

標準名　メダイ（聖ベネディクトのメダイ）		整理番号　DON0003
法量	長径 15.25mm	
	短径 12.35mm	
	厚さ 0.50mm	
	丸環部 高さ 2.85mm	
	幅 3.20mm	
	重量 0.40g	
材質	真鍮（イエローブラス）	
製作年代	19C後期～20C初頭	
製作地	ヨーロッパ	
使用地	日本	

所見	
表	聖ベネディクト像　CRUX　S. P.　BENEDICTI　ラテン語（聖ベネディクトの十字架）。聖ベネディクトの足元の壷がないタイプである。
裏	人類の救主イエス・キリスト（以下、宣教の略語）
類例	加藤個人蔵
備考	パリ外国宣教会の明治6年以降の宣教にからんだものか。
比較資料	左側の2つは聖ベネディクトの足元の壷がないタイプである。1900年前後のものである（加藤蔵）。このDON0003は20C前期のアルミ製のものと似ており、さらに新しいものである可能性が高い。東京国立博物館の448／C919とは形状は似るが、聖ベネディクトの足元の壷の有無で明らかな違いがある。

標準名　十字架（ロザリオトップ）		整理番号　DON0004
法量	縦木 34.80mm	
	横木 20.80mm	
	厚さ イエス像を抜いた厚さ 2.90mm	
	イエス像を入れた厚さ 4.60mm	
	丸環部 高さ 4.20mm	
	幅 4.55mm	
	厚さ 1.70mm	
	重量 4.86g	
	光背部高さ 5.80mm，釘の直径 1.99mm；イエス像（頭から足台まで） 20.50mm；イエス像（手から手まで） 16.85mm	
材質	枠　－真鍮（イエローブラス） 内部　－木製 イエス像－真鍮　金？メッキ 釘　－真鍮	
製作年代	19C中～後期	
製作地	南ヨーロッパか？	
使用地	日本	

所見	
製作技法	真鍮削りだしで、丸環部をつける段付きのタイプである。後面に削り出しの擦痕が残る。
像容	光背がイエス像と一体となるタイプである。光背部が大型である。イバラに囲まれた御心のモチーフである。
ロザリオトップの形状	丸環に丸いチェーンがついている。真鍮の枠に対し、木造十字架の幅の枠が広い。
構造	真鍮の枠に木を入れている。背面に穴が開いていない。背面から釘が打ち込まれている。
その他の計測値	縦木　木製部の幅 3.60mm
類例	加藤個人蔵（右上）
備考	パリ外国宣教会の明治6年以降の宣教にからんだものか。
比較資料	左上20C前期ヨーロッパ製；右上19C後期ヨーロッパ製；左下19C末～20C初頭フランス製。右上の十字架には後面に削り出しの擦痕が残る（加藤蔵）。

標準名　メダイ（耳付き）		整理番号　DON0005
法量	長径 12.00mm　短径 10.05mm 厚さ 1.85mm 耳の長さ（下）長さ1.35mm 、径 1.40mm （右）長さ1.35mm、径 1.50mm （左）長さ1.15mm、径 1.35mm 丸環部　高さ 3.90mm、幅 2.90mm 厚さ 1.20mm 重量 1.23g	
材質	銅合金（真鍮ないしは青銅）	
製作年代	17C（1619年～1622？年）	
製作地	アジア（日本？）	
使用地	日本	

所見	
製作技法	鋳造である。磨耗が少ないのに像容が明確でない。磨耗のある元のメダイからの複製である可能性も考えられる。
モチーフ	表：　イグナチウス・ロヨラのモチーフ（福者時代？ただし19世紀から20世紀のメダイに描かれた聖母像などには点状の光を表すモチーフが描かれる。したがって福者を表す光のモチーフとは断言できない。
	裏：　フランシスコ・ザビエルのモチーフ（福者時代？ただし19世紀から20世紀のメダイに描かれた聖母像などには点状の光を表すモチーフが描かれる。したがって福者を表す光のモチーフとは断言できない。　両者は十字架のイエズスを拝んでいる。
	両面：　どちらも修道服（法服）を着ている。
残存状況	磨耗が弱く状態もよい。
形状	丸環が垂直に着いている（耳付きメダイに多いタイプ）。
印象	厚手で、錆びがほとんどない。
類例	東京国立博物館395／C1065とよく似ているが丸環部や枠の形状、サイズが異なる。
備考	17世紀のものの可能性が高い。

標準名　十字架（ロザリオトップ）；通称（宣教師団の天使のクロス）		整理番号　DON0006
法量	縦木 幅 奥行 径 重量 1.91g	
材質	真鍮製（イエローブラス）、表面に金メッキが施されたか？	
製作年代	19C中期	
製作地	南ヨーロッパ製？	
使用地	日本	

所見	
モチーフ	表：　左右下に燭天使のモチーフあり。イエス像は磨耗して、観察不能である（ロザリオの祈りの痕跡か？）。罪状札の位置がやや低め。
	裏：　SOUVENIR　DE　MISSION（宣教の記念品）
形状変化	下部がひずんでいる（曲がっている）。
類例	東京国立博物館367／C879とよく似ているがSOUVENIRの文字が下部に縦木についていることや光背の形状が異なる。
備考	パリ外国宣教会の初期宣教にからむものか。
比較資料	19世紀中期～後期のフランス製のものである（加藤蔵）。

標準名　メダイ（漢字刻印のメダイ）		整理番号　DON0007
法量	長径　18.40mm	
	短径　9.95mm	
	厚さ　0.90mm	
	丸環部　高さ　3.60mm	
	幅　3.70mm	
	丸環付き	
	重量　1.28g	
材質	真鍮製（洋白）	
製作年代	19C中～後期	
製作地	中部ヨーロッパ（フランスまたはベルギー）	
使用地	日本	

所見	
モチーフ	表：　聖母子像
	裏：　聖ヨゼフ像
比較資料	右側のものに像容や文字形状が似ている。19世紀後期のものである（加藤蔵）。東京国立博物館の434／C963とも像容が似ている。
印象	厚手で、錆びがほとんどない。
備考	パリ外国宣教会の初期宣教にからむものか。中国への宣教のために製作されたものか？

標準名　ロザリオ残欠（トップと下がり部）		整理番号　DON0008
法量	縦木　36.60mm	
	横木　22.70mm	
	イエス像（頭から足台まで）19.00mm	
	（手から手）　15.40mm	
	罪状札　長径　6.40mm	
	短径　3.10mm	
	重量　4.87g	
	（十字架のみ）2.95g	
	主の祈りの珠　長径　7.20mm　短径 3.95mm；天使祝詞の珠　長径　6.75mm　短径 3.70mm；十字架　厚さ　板　1.20mm　イエス様像含む　4.90mm	
材質	十字架－鉄合金製	
製作年代	19C末～20C前期	
製作地	ヨーロッパ	
使用地	日本	

所見	
ロザリオの珠の材質　練りガラス製	
チェーンの材質	洋白（ジャーマンシルバー）製。
チェーンの造りの特徴	精緻で手間がかかっている。チェーンが間に2個（通常では珠を通したチェーンが直接つながる）入っている。
ロザリオトップ周辺	主の祈りの珠周囲のチェーンの環が7個～8個あることから、ロザリオトップとチェーンの間がとても頑丈に作られているといえる。
珠の特徴	主の祈りの珠と他の珠のサイズがほぼ同じ。
イエス像および罪状札とそれらの固定のための釘の材質	真鍮（銅合金）製。
その他の計測値	釘の径　1.45mm；丸環　高さ　3.7mm；　幅　4.3mm
備考	パリ外国宣教会の明治期以降の宣教にからんだものか。

標準名	十字架（ロザリオトップ）；通称（宣教師団のクロス）	整理番号　DON0009
法量	縦木　51.60mm　　横木　29.10mm 厚さ　0.75mm　（イエス像含む）　3.35mm 罪状札　横　7.70mm　縦　3.85mm イエス像（頭から足先）　22.10mm （手と手）　　19.70mm 丸いチェーン付き（真鍮製） 重量　　2.73g	
材質	真鍮（ゴールドブラス）	
製作年代	19C中～後期	
製作地	フランス（南部ヨーロッパか？）	
使用地	日本	

所見

刻印	表面　罪状札の文字「INRI」；背面　SOUVENIR　DE　LA　MISSION（宣教の記念品）
構造と特徴	イエス像の全身が溶接されており、手がそっている。足台なし。
類例	国立博物館338／C871と同氾の可能性が高い。
備考	パリ外国宣教会の初期宣教にからむものか。

標準名	コイン（VOC）	整理番号　DON0010
法量	長径　21.1mm 短径　21.1mm 厚さ　1.4mm 径 重量　3.50g	
材質	銅ないしは銅を含む合金	
製作年代	1750年	
製作地	オランダないしはバダヴィア	
使用地	日本	

所見

モチーフ	表：　VOCマークと製作年代 裏：　王冠と紋章 両面：周囲に幅1mm程度の刻みがある
由来	若松島ないしは有福島地区のカクレキリシタンの信仰具
備考	メダイかわりにしたものなのか？潜伏時代からの伝世品か？

標準名　簪（かんざし）		整理番号　DON0010
法量	長径　192.35mm 最大幅　12.10mm 厚さ　2.60mm 穴あり（柄）紐が通されている。 重量　25.73g 黄玉　1.54g 玉二つセット　0.64g	
材質	金属製（銅ないしは銅を含む合金），珠はガラス製	
製作年代	江戸時代？	
製作地	かんざし（日本）、玉は不明	
使用地	日本	

所見	
特徴	かんざしに結ばれた玉。玉に穴がT字に開けられている。トンボ玉に似たガラス。
その他の計測値	穴の直径　1.7mm　玉の直径 8.8mm（黄玉）
特徴	白い玉　ガラスまたは水晶。透明。 そろばん型。扁平型。 穴は一直線。
その他の計測値	短径　4.9mm　長径　7.10mm
特徴	青い玉　練りガラス？
その他の計測値	長さ　5.0mm 、径　4.8mm、穴は一直線。玉は二条のスジあり。
備考	潜伏時代からの伝世品か？

第６章　文化的景観の本質的価値

１．自然的特性

上五島の北魚目は、番岳（標高 442.6m）から北に南北約 10km、東西約 1.5km の狭く細長い組織地形をなしている。立串、大水、小瀬良、仲知地区は花崗岩類からなる。五島層群が残る江袋・赤波江・大瀬良地区は、地層が砂岩や泥岩で出来ている。これらの地形はなだらかに浸蝕されるとともに、斜面の地滑りにより比較的緩やかな地形を形成している。津和崎は中通島層群に属し、火砕流堆積物からなる。急斜面が形成される地域では沿岸の狭い低地部に密集して集落を形成する。地滑りにより形成された緩斜面には集落や耕作地が展開しており、対照的な立地環境の集落が北魚目に点在している。

北魚目にはタブノキを優占種とする照葉樹林が形成され、タブノキやヤブツバキ等が海岸付近まで繁茂している。このような森林は、保水林として谷間の小規模な水田や生活用水の水源となったと同時に、家屋の周囲に自然林を残す、あるいは植樹を行って防風林や防潮林、日除けとしてきた。

２．歴史的特性

北魚目では、北端である津和崎から江袋と仲知の間の「びさご崎」（ビシャゴ鼻）から赤波江の「ひん河内」を結ぶ線までは、至徳２年（1384）から明治初めまで平戸藩領であった。津和崎は海洋資源の収奪をめぐる争いの対象地となったのである。五島藩は寛文２年(1662)に五島藩富江領と福江領に分知された。江袋と仲知の間の「びさご崎」から赤波江の「ひん河内」を結ぶ線より南側は五島藩富江領となった。

慶長 18 年（1613）頃、柴田勝家の孫が平戸、五島を転々としたのち立串へと移住した。柴田は家臣と共に土地を開き、漁業を生業とし、漁業集落が形成された。

一方で、寛政期（1789～1801 年）以降、大村藩領から移住した「居付」と呼ばれた移民は漁業移民とは状況が異なった。寛政年間には、仲知・島首へ大村領より移住があったとされ、江袋へは大村領神ノ浦大中尾の七右衛門とチエの子孫が移り住んだと伝わっている。これらの人々は農業従事者であり、農耕地を切り開いていった。彼らの多くは潜伏キリシタンであり、先住者の集落とは婚姻などの通交はなかった。移住してきた農民は、斜面地に家屋を構え、家屋の周辺に段畑を開墾し、甘藷の栽培を積極的に行い、生計をたてていった。

また、開拓を行いつつ分家をするために兄弟が近傍に家を構え、末子が隠居家となり本家を相続するイエワカレと呼ばれる独特の慣行により、居住地や農地が拡張されてきた。

３．生業の特性

江戸時代の五島藩富江領では、網一張が 15 石に相当し、網は 15 張あった。網一張の権利は魚目浦の古来由緒ある加徳 15 人（15 家）に与えられ、代々家督として世襲される権利であった。これを網加徳という。加徳士は自ら網主となり、一般の浜百姓は所属の網子となって主従関係が結ばれた。この加徳士の漁業権は昭和 16 年（1941）に漁業権を全面的に漁業組合へ譲渡されるまで続いた。

北魚目では主に鮪・鯨・鰐などが捕れ、鯨は有川湾内で年間約 70 頭捕れていたと推測される。文化９年（1812）冬、柴田甚蔵が鯨大敷網敷入方を富江御勤番御家老平田亮平へ申し込んで許可され、御手許金によって仕出した。天保 14 年（1843）組師柴田祐右衛門の代に至っては、藩有の鯨組株というのが出来ている。これはあらかじめ藩によって漁具、漁船など鯨組に要する資材一式を調達し、出願者に対して組株と一緒に貸与するものであるが、出願者は定まった運上銀のほかに一定の株式賃料を上納しなければならないといった特殊な制度が作られた。これらは藩の収入源確保のための一方策であったと考えられる。

19 世紀以降農業集落が形成された背景としては、沿岸での漁業権が既得権益として土地の有力者に付加され、移住者に与えられなかった点に加え、移住者が持つ高い農業技術にあった。

移住者が有した農業技術にイモ（甘藷）栽培がある。地元でイモと呼ばれる甘藷は、各戸単位で居住地の近辺の傾斜地を開墾した段畑で栽培され、居住地の庭に設置したジロで茹で、ヤグラで乾燥し、家屋の屋根裏や地下に掘られたイモガマで保存された。これにより、イモガマを有する家屋やジロ・ヤグラで構成される居住地と、その周辺に展開する段畑群がセットをなし、防風林や防潮林を伴って傾斜地に散在する景観が形成された。また、甘藷を輪切りして天日干ししたシロカンコロは焼酎原料として島外に出荷されたが、出荷の窓口となる港の機能は漁村が担っており、農村と漁村は甘藷栽培と流通を通して有機的なつながりを有していた。

北魚目は、急傾斜に段畑が作られ、その表土は 10～15 ㎝と浅く、土も砂壌土または壌土であり、保水力に乏しい。乾燥に強い甘藷を主要な作物として栽培した。水田は一部でしか作れなかった。

４．集落の特性

北魚目の集落は、19 世紀以前から沿岸部に集住していた漁業集落と、19 世紀以降に斜面地に形成された散居形態の農業集落が併存している。

北魚目の中で、19 世紀以前から沿岸部に集住していた漁業集落として、津和崎、小瀬良、立串集落が上げられる。これらの集落は、19 世紀初めを描いた伊能図にも集落として描かれ、明治 10 年の字図に海岸低地部に集住している様子が描かれている。これらの集落では盛んに漁業が営まれ、漁業と農業をして生活していた。

19 世紀以降に斜面地に形成された散居形態の集落として、米山、竹谷、一本松、仲知、赤波江、江袋、大瀬良、上小瀬良、大水集落が上げられる。これらの集落は、19 世紀初めを描いた伊能図にはほとんど山として描かれ、江袋と大瀬良に僅かに数軒描かれているのみである。明治 10 年の字図には斜面に散居している様子が描かれている。また、19 世紀以降に斜面地に形成された集落は、北魚目全体として、地形的に急傾斜の中でも、地滑りにより形成された緩斜面を選び、住居を構えているため、緩斜面に集落が展開する。この様子が、北魚目を全体的に見渡した際に、集落が急斜面に張り付いているように見え、独特の景観をなしている。これらの集落では農業を中心として生業が営まれた。

また、漁業集落には神社やお寺があるのに対し、農業集落の９集落の中の６集落には教会が建っている。農業集落で生活している人はほとんどがカトリックである。

このように、新上五島町北魚目の文化的景観は、組織地形に巧みに適応した多彩な集落景観と、イモ（甘藷）の栽培・保存・加工システムを基軸とした傾斜地での徹底的な土地利用に特徴がある。また、このような特徴が形成され、維持されてきた背景として、18 世紀後半以降の移住を契機に、生業や信仰を異にする集団が共存してきた歴史があり、これらは総体として希有な価値を有している。

※組織地形：地質の違いによって、変化している地形のことである。新上五島町の場合は、南北に連なる火山岩と北西南東方向に連続する五島層群（砂岩、泥岩）が重なって分布するために、１）火山岩分布域および、その周辺の砂岩・泥岩は熱変成の為に堅くなり侵食に耐えている。細い岬（串）はほとんどが、熱変成を被っている砂岩層が露出している部分にあたる。２）厚い堆積岩分布域は、比較的侵食されやすく、侵食により分布、幅が狭くなっている。３）熱変成されていない堆積岩部分は、侵食作用により土砂崩れや地滑りをおこし、地形的になだらかになっている。

第Ⅱ部　文化的景観保存計画

第１章　文化的景観の保存に関する基本方針

第２章　文化的景観の保存に配慮した土地利用に関する事項

第３章　文化的景観の整備活用に関する事項

第４章　文化的景観を保存するために必要な体制に関する事項

第５章　文化的景観における重要な構成要素

第６章　参考資料

第１章　文化的景観の保存に関する基本方針

１．文化的景観の概要と価値、課題

（１）文化的景観の概要と価値

「新上五島町北魚目の文化的景観」は、下記のような価値が考えられる。

＜環　境＞　新上五島町北魚目は我が国本土最西端よりも西海上に位置する離島群の中にあって、狭く細長い組織地形に立地することから、海浜部以外ではことさら悪条件の土地である。目に映る美しい風景とは裏腹に人間の居住には極めて不利な土地であったといえる。海に落ち込む急峻な斜面地で平坦な土地がなく、夏から秋にかけては台風が直接押し寄せ、冬季には強い季節風が潮を巻き上げ、吹きつける厳しい環境でもある。

＜時代背景＞　江戸時代末期、労働力強化の目的で大村藩外海地方から五島藩上五島のこの土地に農耕民の移住があった。移住した農耕民は漁業権を持てなかったことで本来の生業を活かすべく、比較的条件の整った海浜部に住み付くことなく、本来居住には不利な条件過酷な急峻地に、入植することになった。厳しい条件の斜面地であったが、甘藷の栽培技術と石積み技術の経験を駆使し、悪条件を克服し集落を開いた。

開拓にあたり木を払い、斜面を削り、掘り出した石で石垣を築き、段畑を作り出した。その畑で自分たちが生活に必要なだけの農耕を行い、自給自足的な生活を行った。作物は得意であった甘藷栽培が中心で、甘藷は痩せた急傾斜地に最も適した作物でもあった。甘藷は当時の大村藩においては盛んに栽培されていたとされる。

＜生業形態＞　収穫した甘藷を切干しにするため、周辺の山から切り出した木や竹などを利用して組んだ乾燥棚「やぐら」で天日に干し、「カンコロ」と呼ぶ乾燥芋に加工し保存した。収穫した生の甘藷は自家消費及び種芋として家屋の床下に縦穴「イモガマ」を設けて保存した。副産物として裏作の麦、大根、かぼちゃなどの野菜も作るが自家消費程度の栽培である。一方、目前に豊かな漁場があるにもかかわらず近年まで漁業権を持てなかったため、本格的な漁業に参入することはできなかった。そのため、小船でイカ、小魚の類を獲り、浜辺や磯で貝や海草を採集した。農産物も海産物も経済的に成り立つ規模に程遠いものであった。移住から間もない時期はほぼ自給自足的な集落であったことが推測される。

移住から時間を経て生活が安定した後、この地に適した甘藷栽培は本格化した。尾根付近まで段畑を切り開き、大量の甘藷が収穫され、島外にも「カンコロ」として出荷できるほどの規模となった。シキミの実、椿の実、薪などの採取も行うが、これらは貴重な現金収入になるものの生活の基盤にまでは至らなかった。

＜集落の形成背景＞　集落の形成事情を考えると、移住時に漁業権を持つことができず、居住に不利な急斜面地に集落を形成せざるを得なかったが、痩せた土地に適したすぐれた甘藷栽培の技術と石積み技術を活かすことで悪条件を克服し、結果として急勾配の段畑や防風石垣、「やぐら」「じろ」の見られる集落景観が生まれ現在に引き継がれたといえる。さらには、地形などの自然条件と漁業権をめぐる社会的条件などをふまえ、各集落ごとに特徴の異なった集落が形成されることとなり、多様な集落が生まれる要因となった。

＜漁業権をめぐる住み分け＞　北魚目の景観は、上五島の生業として欠かせない漁業を中心に生活を営む人々が形成していた海岸の集落と、移住してきた農耕を営む人々が形成した山あいの集落で共存のための住み分けが特徴的に顕れた地域であるといえる。移住した土地の条件や周囲の社会状況のために、それぞれ特徴が異なる多様な集落が形成された。また移住の集落では現在の集落の中心にカトリック教会堂が建てられていることが多い。これらの移住集落は 200 年程度の浅

い歴史にも拘らず、長崎本土から離島の中の不便地への移住と開拓期の経過、その後の開花の軌跡という劇的な社会背景の変化により形づくられた我が国でも独特な集落形態といえる。

＜特徴的な集落景観＞　本来の自然発生的な集落形成とは異なり、急ごしらえされた集落であり、移住者独自で急峻な土地を切り開き、日々の暮らしは、ほぼすべてを自分たちだけで賄わなければならなかった。言い換えれば自給自足的な生活のためにはわずかなことにでも最大限の知恵と工夫をこらした生活であり集落であるといえる。急峻な斜面地に暮らすため、石垣積の段畑や季節風などを防ぐ石垣塀、防風林など築き、厳しい生活環境を克服するための知恵をめぐらせ工夫をこらした。さらには、急斜面の痩地に適した甘藷栽培から生まれた「カンコロ」生産に必要な「やぐら」や「じろ」が各家屋の庭先に並ぶ独特な景観を生み出した。このように急斜面地で生活するための様々な工夫が生まれ、土地の高度利用が行われた。

大村藩からの移住により入植し、信仰の異なる漁業既住者と現在まで山手と海側に分かれて共生をし、移住した人々は急峻な斜面地に農耕集落を形成せざるを得なかった社会的背景が教会堂に開花の象徴として顕されるこの景観こそ、この地域独特なものであると言える。このことこそが大村藩からの移住民が既住の漁業者と共生するために作り出された文化的景観であるといえる。

以上の事柄を一言で表現すれば　「離島における組織地形の高度利用を背景としてイモ（甘藷）文化を継承し散居する農耕民と海浜に集住する漁労民が共生する多様で特徴的な集落景観」といえる。

（２）課　題

前項で新上五島町北魚目における文化的景観の価値を述べてきたが、現状では様々な課題を内包しており、それらの課題解決がなされない状態であると、新上五島町北魚目の文化的景観の価値は急速に失われてしまう可能性が大きい。特に道路事情が格段に良好になった昭和 50 年代以降、徐々に進んだ人口流失は、過疎化、少子・高齢化という地域再生にとって厳しい結果を残してきた。

過疎化や、生活様式の変化による森林や耕作放棄による農地の荒廃はかつての段畑をタブノキの二次林へと変容させつつあるのが現状である。また同時に、耕作放棄地と空家の増加により里山の荒廃が進み、その結果イノシシなど害獣が繁殖し、害獣が人間の生活圏に近づくことで耕作地を荒らすなど農作物に深刻な被害を及ぼすことになった。さらにもともと規模の小さな集落が過疎化により、居住人口の減少が進むことで、集落の存続自体が危ぶまれる状況の地区も現れ始めた。

離島という本来から不利な環境に加え、以上のような容易に解決しがたい課題が山積しており、新上五島町北魚目においては個々の要素をどのように守り伝えていくかという課題解決の施策より、むしろ上五島全体の地域活性化をどのように講じていくかが重要な課題である。

２．保存管理に関する基本方針

「新上五島町北魚目の文化的景観」は文化的景観保存調査の成果から、厳しい条件の土地に移住を果たした農耕民が漁業権を認められなかったため、他に例を見ない急傾斜地という特異な地形を利用しながら段畑を開き、独特の生業、集落空間が形成されたことが明らかになった。

段畑においては主にイモを栽培し、年間を通しての主食としたり、「カンコロ」として出荷したりした。現在は、急激な過疎化の影響によりイモの栽培が衰退し、それに伴い「カンコロ」生産も少なくなった。そのシステムとしての一連の加工・貯蔵施設が荒廃しつつあり、社会システムが脆弱化しているため、新上五島町においては保存管理に関する基本方針を、保存調査により明らかになった北魚目の本質的価値に基づき、「自然的観点」、「集落及び生活・生業的観点」の二つの観点から示す。

以下の方針を定めるにあたり、各要素を保存していくためには地域に住む人たちの景観保全に対する理解と自助的な取り組み、そして行政の役割を明確にしておくことが必要であり、それを実行できる体制づくりが何よりも必要であることを先に記しておく。文化的景観保存計画や景観計画は、規制のための仕組みだと考えられがちだが、良好な景観の創造に繋がるという視点も忘れてはならない。

（１）自然的観点

新上五島町を含む五島列島は東シナ海に接し、そこは対馬暖流で包囲されておりその影響で、生態系の生産者である緑色植物は「常緑広葉樹林」でタブノキを優占種とする照葉樹林であり、タブノキやヤブツバキ等が海岸付近まで繁茂している。

北魚目地域に暮らす人々は、このような植生を非常に巧みに利用しており、家屋の周囲に自然林を残すあるいは植樹を行って防風林や防潮林、日除けとし、薪炭や食料を確保する場にもなっていた。また、タブノキは家屋の床下材にも使用することもあった。またこのような森林は保水林としての役割も大きく、現在でも生活に不可欠なものである。

したがってこれらの保存については、現状の維持に努めるものの、凍結的な保存ではなく適切に手を加えながら保存を図る必要がある。

北魚目地域には、ノアサガオやオキナワシタキヅル、柑橘ゆうこうなど貴重な植物が存在し、特にノアサガオは北限地であり学術上貴重な分布地域でもある。また、海岸植物では、ハマゴウやハマヒルガオ群落があり、夏場の台風等気象の影響を受けやすい厳しい環境下で形成された断崖と併せて、景観構成要素として重要である。

したがってこれらの保存については定期的な磯清掃を行うとともに、極力現状を維持することが必要である。

（２）集落および生活・生業的観点

北魚目地域の生業は農業・漁業といった第１次産業に大半が占められている。移住の者により急斜面地に形成された農耕集落と一体的に形成された耕作地、あるいは海岸に形成された漁業集落に古くから島に根付いた漁港施設などの生業空間はこの地域の特徴を示すものである。農耕集落における「カンコロ」の出荷が本格化した後は、集荷された「カンコロ」の積み出し港としての役割も重要となった。

本地域において、中でも特徴的なのは東シナ海に面する西海（にしめ）あるいは有川湾に面する東海（ひがしめ）に向かって落ち込む急斜面地に開かれた農耕集落の立地性である。平地のない急峻な斜面地に居住と一体となった農耕を営むことから、急斜面地の高度利用と防風対策が求められ、

石垣積みの段畑、斜面に張り出した「やぐら」、石垣塀、石垣利用の小屋、防風林などが発達した。北魚目地域においては、居住地と農耕地が大きく離れて設けられるということがほとんどなく、居住家屋の脇や背後の斜面に耕作地がある。それらを囲うように防風石垣や切り残し、あるいは植えられた防風林が存在しており、植えられたものの中には場所によっては土留めや防潮を兼ねる植物を選ぶ工夫や知恵もみられる。

集落の家屋の中に百年近く経過したものや、他所から移築した建物も散見され、また、戦後の家屋であっても伝統的な構造・工法や間取りが継承されているものも多く見られる。

これらの集落を構成する諸要素の保存については、いくつかの保存方法を組み合わせる必要がある。まず農地景観の保存管理にあたっては、耕作地や周辺域の防風林や防風石垣などの景観維持に努めるとともに、その景観を造り、維持してきた技術の継承の支援を検討する必要がある。また、伝統的な土地利用を継続しながら今後も耕作地などの生業空間を維持していくために必要なシステムを検討する必要もある。それは後継者の確保、育成や、耕作放棄地の再活用策など、関係法令を踏まえ有効な支援策を検討していく必要がある。そして、集落の良好な景観を構成している保存すべき要素として、集落内には歴史的な石垣・防風石垣、および干し棚「やぐら」、屋外ゆで釜「じろ」が残されており、これらを維持・保存することに努めることとする。また、漁村集落における漁港施設の改修工事等によってもたらされる景観の変化は、大きな影響を与えることも考えられるため、良好な景観を維持・保存することに努めることとする。

最後に農漁村集落の保全では、特に農地が継承されることが前提であり、時に建築物の変容よりも、こうした農耕地の変容の方が集落景観に及ぼす影響が大きい場合もある。本地域の農漁村集落については、家屋等の建築物だけではなく、その集落の持つ風情を保護すべきであろう。

３．整備活用に関する基本方針

前述した保存の方針に沿って、整備活用に関する基本方針を以下に示す。

（１）全体的な考え方

新上五島町北魚目の文化的景観は、自然的空間と集落及び生活・生業空間が一体となった景観地であり、このような景観地は長年の営みによって生み出されたものである。長期的な人々の生活・生業によって生み出されたものである以上、人の手が加えられ続けることで、景観の維持・保全が可能となってくる。しかし過剰な手入れは逆に景観を損ねてしまう恐れがあるため、一定の整備方針を定める必要がある。また、共同水路や祭礼・年中行事など伝統的コミュニティ活動を重視することも重要である。

公共事業においても、これまで道路は道路、農地は農地、森林は森林といった縦割りだった土地利用計画を総合的に見直し整理することが肝要である。このような観点から地域の景観マスタープランを法的に位置づけることができるのが景観計画であり、計画の見直しを行いながらまちづくりを進めることとする。

活用策に視点を移すと、北魚目を訪れる観光客の多くは県指定有形文化財である江袋教会や豊かな自然景観を体感することが目的であり、日帰り観光客が多いことが特徴である。文化的景観を生かした地域振興が最終的な目的であるため、広域的な観光ルートの設定や案内板等の設置だけではなく、地域自体の魅力を高め、そこへ行きたいと思わせる付加価値を付ける取り組みを行う必要がある。

平成 19 年１月、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が世界遺産暫定リストに記載され、本地域も構成資産のひとつとして検討されている。活用という面で考えるならば、潜在的な価値を持っている場所であり、登録推進活動に併せ、文化的景観を核としたネットワークを形成していく必要がある。観光ツアーのほか都市部住民の観光客等をターゲットにした農漁家民泊等を視野に入れ、地域内に組織されているまちづくりグループを主体とした施策を実施する必要がある。

ただし、このような観光施策を行う場合、過剰な観光客の増加等によって北魚目の景観が損なわれることがないよう配慮しなくてはならない。観光客と島民とのトラブルなども心配されるため、島民と行政との緊密な連携も必要である。

（２）自然的空間

北魚目の地質は 700 万年前以降の火成岩分布層からなり、この火成岩が沈降しリアス式海岸を形成したため幅の狭い険しい地形をつくりだした。海岸部は急峻地形がそのまま海に落ち込む地形が多く、西海（にしめ）、東海（ひがしめ）ともに侵食により切り立った海食崖が多く形成され、海鳥類や豊かな魚類を育んでおり、その一部は長崎県の自然環境保全区域に指定され保全が図られている。北魚目地域の大多数が照葉樹林のタブノキ萌芽群落で覆われ、人工植林はないに等しい。これらの自然林については、凍結的に保存するのではなく、適切に手を加えながら林産物や林空間の活用を図るべきであろう。

（３）集落及び生活・生業空間

本地域の集落に多く見られるのは、木造２階建または平屋建の住宅であり、現在も良好な景観を維持している。特に建築物や工作物の高さや色には十分注意すべきである。景観計画でそれらの行為誘導を行っているが、今後は景観協定の締結も視野に入れ、より自発的な景観創造への取り組みへと繋げていくこととする。

【景観協定】

景観計画区域内の一団の土地について、良好な景観の形成を図るため、土地所有者等の全員の合意により、当該土地の区域における良好な景観の形成に関する事項を協定する制度である。景観協定は、住民が自らの手で、地域のより良い景観の維持・増進を図るために、自主的な規制を行うことができる有意義な制度であり、積極的な啓発・普及がなされることが望ましい。

土地所有者等の全員の合意による協定であることから、法に定める景観計画等よりも細やかなルールを策定したり、規制手法に馴染まないソフトな事項についても定めることができる等、幅広い内容とすることができる。

農漁村集落については、建築物の形態意匠や農地の保全・利用を一体として定めること等により、農漁村景観の保全を図ることが可能であるが、土地所有者等と十分時間をかけて協議する必要があるため、段階的に協定の範囲を広げていくことが現実的である。

本地域の景観を構成するものに地形を利用し「防風林」や「防風石垣」などに守られた「耕作地」があり、景観を特徴づける要素となっている。全国的に棚田の景観は観光資源としても認知され始めており、それが高まって付加価値作物の開発へと繋げていった地域もある。作物自体のブランドを高めるのか、耕作地の景観を生かして交流人口を増やすのかは、地域の特性に合わせたものにすべきであろう。いずれにせよ、耕作地としての景観が保全されていることが前提であり、整備を行う際は、土地利用を尊重することが必要である。

さらに、生業空間としての景観構成には、これら「防風林」や「耕作地」に溶け込むように形成された集落構造がある。これらは個別単体で考えられるものではなく、一体的に捉えることで一つの景観が形成されていることにも配慮が必要である。

また、本地域には８箇所の漁港施設と１箇所の港湾施設があり、それらの改修工事等によってもたらされる景観の変化は、大きな影響を与えることも考えられる。良好な景観を維持するための配慮が必要である。

４．管理運営に関する基本方針

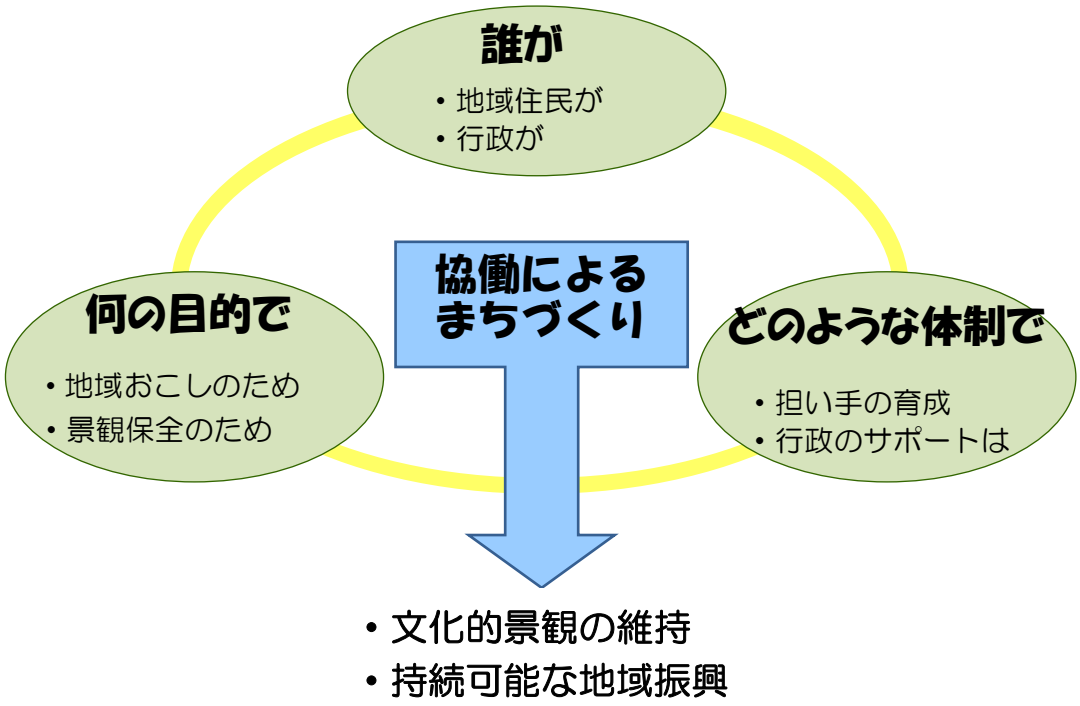
本地域の文化的景観は、自然環境にそこで暮らす人々の生活・生業の働きかけがあって、初めて作り出され、長い年月をかけて現在の景観へと変遷してきたものである。これは、継続し変化し続けている景観であり、現在の景観が完成形ではないことを示している。

農漁村集落の過疎化等により、現在の景観を保つことは非常に難しい問題である。特に耕作放棄地と空家の増加により里山の荒廃が進み、その結果イノシシなど害獣が繁殖し、害獣が人間の生活圏に近づくことで耕作地を荒らすなど農作物に深刻な被害を及ぼしている。この良好な景観を継続させるために、「誰が（主体・担い手）」、「何の目的で（生業のため・景観の保全のため）」景観管理を行うのかという目的を明確にし、農漁村集落の景観が維持されるシステムを早期に確立させなければならない。

重要なのは、その地で生活し生業を営む地域の人々の存在であり、農業を継続できない理由は何なのかを把握し、現在の景観を維持し発展させるため、農業を継続できた理由などの要素を取り除く仕組み作りを検討する。後継者不足であるのなら、農地所有者のみではなく、文化的景観地区に住む人々、周辺都市部に住む人々が積極的に景観保全に係わることができる仕組みが必要であろう。

北魚目の一部の地域では、景観保全と生業育成のために、一部の耕作放棄地でツバキの植栽が進められ活用されている。本地域は自治会組織が比較的確立された地域であるため、これら既存の組織を活用した住民主体のまちづくりと景観保全、文化・伝統の継承を図るべきであろう。

一方、行政の体制も整理、強化される必要がある。文化的景観の継承・活用においては、教育委員会のほか、都市計画、建設、農林、観光部局等の多くの協力連携が必要となる。県関係部局との連絡調整も含めて、関係機関が緊密に協力できる体制を整備したい。その上で、地域活動を積極的にサポートしていくこととする。



第２章　文化的景観の保存に配慮した土地利用に関する事項

１．保存管理に関する考え方

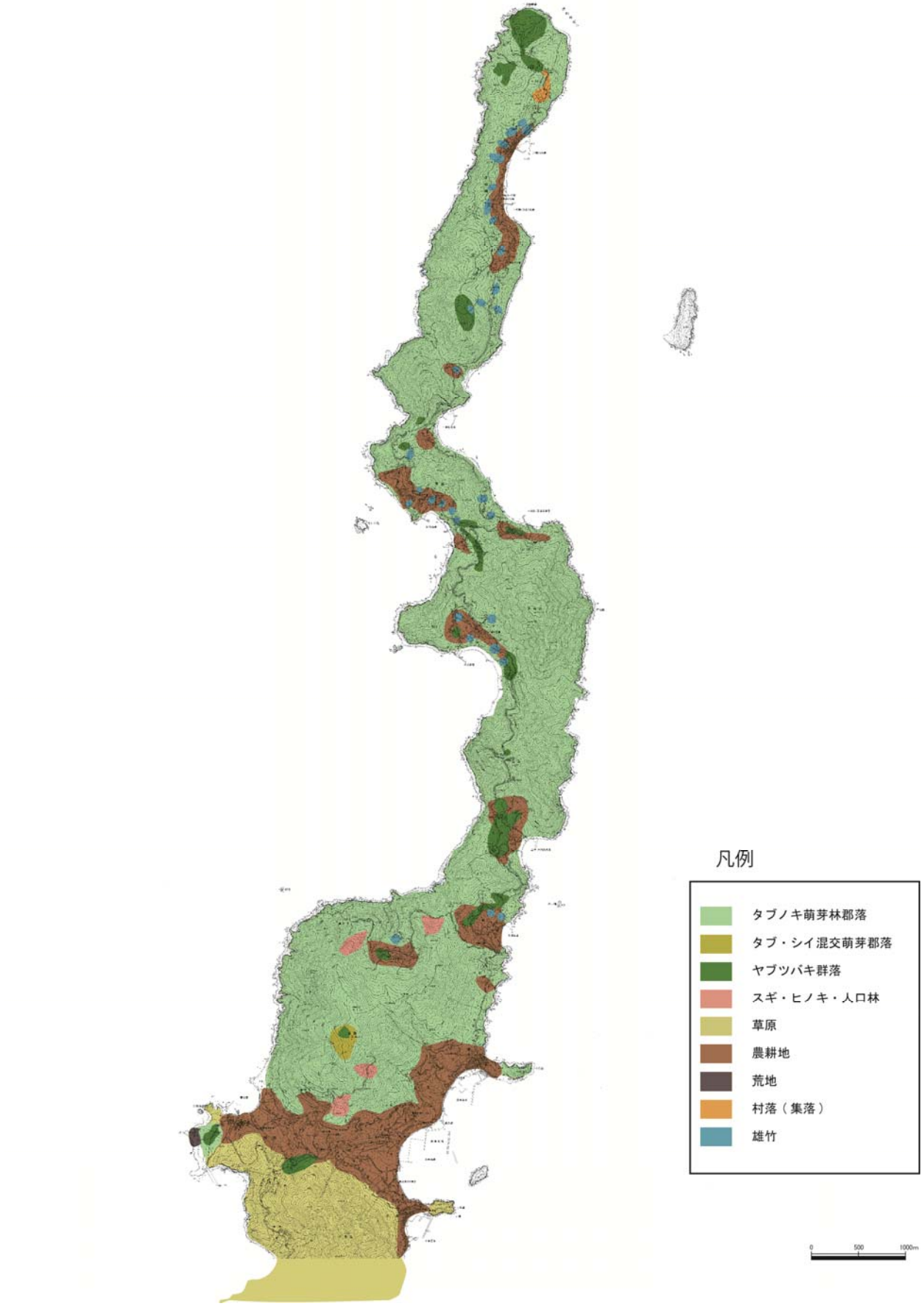
保存管理に関する基本方針を踏まえ、保存管理に留意した土地利用のあり方等を示す。

（１）自然的観点

現状の植生区分に従った管理を行うとともに、伐採跡地の回復、育成を行うことで森林保全に努める。本地域において、優れた自然景観の一部は自然公園法や保安林として保護されているが、それらに隣接し、景観として連続したものについても、同様に保全されるよう努める。

景観を構成する要素	土地利用等についての考え方
天然林 （図１）	・天然林が残る森林は、今後も現状維持を行うこととする。
ツバキ林 （図１）	・ツバキ林は景観構成要素であり、その保全に努めることとするものの、荒廃を防ぐために適切な管理が必要である。
二次林 （図１）	・家庭で薪を使用していた際は、定期的に伐採され、更新されてきた場所であり、タブ林が多い。森林の適切な維持管理を行うとともに、現状の植生区分に従った植生の回復も検討する。
人工造林 （図１）	・道筋や集落内に防風林として植生された人工造林は、景観構成要素であり、保存に努める。 ・森林と人との共生を重視する森林整備に努める。 ・資源の循環利用を重視する森林整備に努める。
道路	・生業・生活や森林の適切な維持管理のために必要とされる場合に限り、景観への配慮を検討した整備を行う。 ・過去に整備した部分についても必要に応じて順次修景を行う。
海岸・河川	・自然海岸、自然石積護岸、自然河床の保全に努める。 ・多様な生態系の維持に努める。 ・港湾整備などの公共工事においては、必要な整備に限り、周囲の景観と調和するよう整備を行うこととする。 ・過去に整備した部分についても必要に応じて順次修景を行う。
その他	・文化的景観区域内に大規模な鉄塔類を設けないことを原則とする。防災等の観点からやむを得ない場合は、周囲の景観に十分配慮する。（山稜線を分断しない、主要な眺望ポイントと同一視野に入らない等） ・風力発電施設については、原則として設置しない。 自然公園（西海国立公園）内については、環境省自然環境局が定めた「国立・国定公園内における風力発電施設設置のあり方に関する基本的考え方」（H16.1.19）があり、長崎県立自然公園においても長崎県自然環境課が定めた「長崎県自然公園内における風力発電施設（風車）の取扱い基準について」（H14.11.11）がある。それらの区域に隣接し、周囲の景観と一体となった文化的景観区域でも、同様に考えることとする。 （第７章参考資料：風力発電施設についての考え方） ・過去に整備した部分についても必要に応じて順次修景を行う。

北魚目地域の植生


凡例
タブノキ萌芽林郡落
タブ・シイ混交萌芽郡落
ヤブツバキ群落
スギ・ヒノキ・人口林
草原
農耕地
荒地
村落（集落）
雄竹
0
500
1000m

（２）集落及び生活・生業的観点

文化的景観を構成する主要な要素と位置づけ、良好に維持される生業空間に隣接する生活の場として、景観計画と連携した景観形成を図る区域とし、景観保全を図るとともに、生業の支障となる案件については、改善策を検討しながら生業景観の継承に努める。

景観を構成する要素	土地利用等についての考え方
住居	・高さ、色彩、屋根の構造等について、周囲の景観との調和に努める。現在、多くの家屋が木造であり、周囲の景観と一体となった良好な景観を維持しているため、これまで同様に木造家屋が望ましい。 ・伝統的家屋については、文化財としての価値を高めつつ、重要な構成要素としての特定を検討していく。 ・防風石垣や防風林の保全に努める。調査報告書において、地域における多様な石積技法が認められており、これらについては、従前の技法で積み直すことが望ましい。 ・良好な景観を有する「集落」としての景観保全に努める。
事業所	・高さ、規模、色彩等の誘導を行い、周囲の景観との調和に努める。 ・敷地の緑化や、木壁等により、景観阻害要因の遮蔽に努める。
神社､寺､教会堂	・構造、材料、色彩等の保存に努める。 ・高さ、色彩、屋根の構造等について、従前と同様の伝統的な建築様式になるよう努める。 ・これらの信仰に関する施設は、設置場所に意味がある場合が多く、文化的景観の核となる施設でもあるため、原則として移設は行わない。
公共施設	・高さ、規模、色彩等の誘導を行い、周囲の景観との調和を図る。また、改修に合わせ、積極的な修景に努める。 ・敷地の緑化や、木壁等により、景観阻害要因の遮蔽に努める。
道路	・新設、改良工事については、景観への影響が考えられるため、事業主体は、新上五島町景観計画を尊重するとともに、景観への配慮を最大限行うこととする。
墓地	・墓地様式及び時代性に価値のあるものについては、保存を検討する。 ・古い墓地は山野に埋もれている箇所もある。それらは文化的景観を構成する無形の要素と関係が深い可能性があるため、住民の協力を得ながら保存・顕彰に努める。
集落の石垣景観	・集落内に多数分布する石垣の景観は特徴的であり、保全に努める。
広場	・資材等の投棄場所にならないよう、景観の維持に努める。 ・集落と一体となって良好な景観を形成するよう、活用方法や整備方針を検討する。
石造物	・場所に意味がある場合が多く、原則として移設を行わない。やむを得ない場合は、近接した場所へ設置することとする。 ・古い時代の石造物も多く、地域の文化を実証する数少ない物証であるため、原則として石材の更新は行わない。
防風林	・住居や農地の周囲に自生し、それを活用して防風林となっているタブ林やツバキ林等の樹木は、集落・生業景観の特徴でもあるため保全に努める。

集落の緑地及び景観木	・地域景観のシンボル的な景観木の保全に努めるとともに、自然景観を損なわないような緑地の保全に努める。
信仰に関する空間	・寺社仏閣・教会堂等の空間は、周囲の景観も含め保存することとし、場所性を損なわないようにする。
耕作地	・耕作放棄地になっている場所が多いが、可能な限り再生を図る。
工作物	・景観の連続性を阻害しているものについては、修景に努める。 ・電柱類その他工作物を設置する場合は、設置場所や高さ、色について配慮し、周囲の景観との調和に努める。
屋外広告物	・設置は行わないことが望ましい。やむを得ない場合は、高さと色について配慮し、周囲の景観との調和に努める。 ・交通誘導板、観光案内板等は、必要最小限に留めることとし、案内板が乱立している場所では、撤去を検討する。
その他	・景観協定を締結する等、集落内でのより細やかなルール作りを目指す。

２．既存法令等による土地利用規制の整理

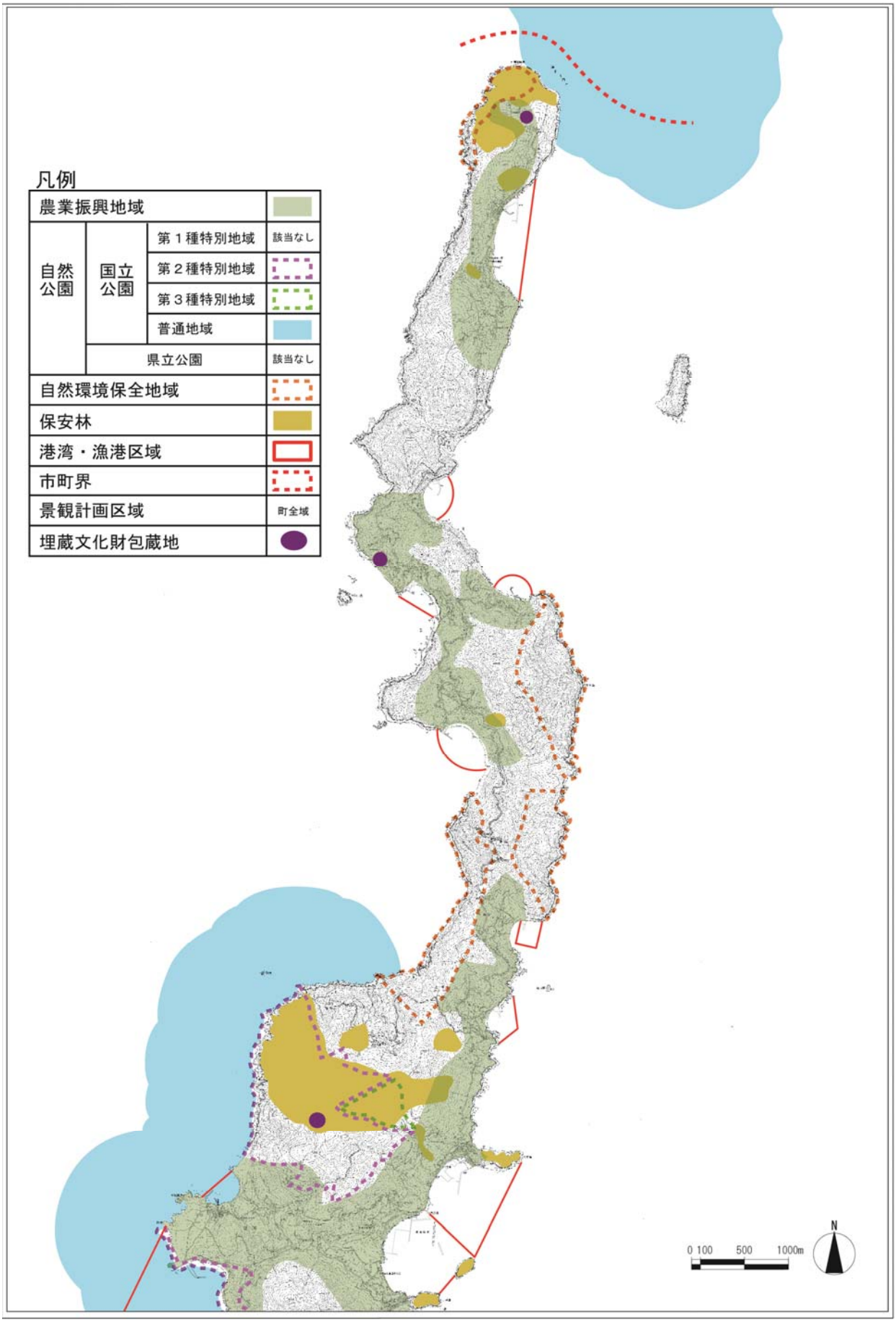
申出対象範囲には、景観法に基づく行為規制が全ての範囲に適用されるほか、自然公園法、文化財保護法、森林法、農地法、農業振興地域の整備に関する法律、河川法、漁港漁場整備法による行為規制が適用されている土地が含まれる。

■土地利用規正法等による行為規制の一覧

根拠法令	対象範囲	許可・届出等	行為規制の内容	罰則規定
自然公園法 （国立公園）	特別地域	許可又は届出	【許可事項】 ①工作物を新築し、改築し、又は増築すること ②木竹を伐採すること ③鉱物を掘探し、又は土石を採取すること ④河川、湖沼等の水位又は水量に増減を及ぼさせること ⑤環境大臣が指定する湖沼又は湿原汚水又は廃水を排水設備を設けて排出すること ⑥広告物等掲出・設置し、又は広告等を工作物等に表示すること ⑦屋外において土石その他の環境大臣が指定する物を集積し、又は貯蔵すること ⑧水面を埋め立て、又は干拓すること ⑨土地の開墾、土地の形状を変更すること ⑩高山植物その他の植物で環境大臣が指定するものを採取し、又は損傷すること ⑪山岳に生息する動物その他の動物で環境大臣が指定するものを捕獲し、若しくは殺傷し、又は指定動物の卵を採取し、若しくは損傷すること ⑫屋根、壁面、塀、橋、鉄塔等の色彩を変更すること ⑬湿原その他これに類する地域のうち環境大臣が指定する区域内へ当該区域ごとに指定する期間内に立ち入ること ⑭道路、広場、田、畑、牧場及び宅地以外の地域のうち環境大臣が指定する区域内において車馬・動力船を使用し、又は航空機を着陸させること ⑮前各号に掲げるもののほか、特別地域における風致の維持に影響を及ぼすおそれがある行為で政令で定めるもの 【届出事項】 木竹の植栽、家畜の放牧	懲役又は罰金

	普通地域	届出	①その規模が環境省令で定める基準を超える工作物を新築し、改築し、又は増築すること（改築又は増築後において、その規模が環境省令で定める基準を超えるものとなる場合における改築又は増築を含む。） ②特別地域内の河川、湖沼等の水位又は水量に増減を及ぼさせること ③広告物その他これに類する物を掲出し、若しくは設置し、又は広告その他これに類するものを工作物等に表示すること ④水面を埋め立て、又は干拓すること ⑤鉱物を掘採し、又は土石を採取すること（海面内においては、海域公園地区の周辺一キロメートルの当該海域公園地区に接続する海面内においてする場合に限る。） ⑥土地の形状を変更すること ⑦海底の形状を変更すること（海域公園地区の周辺一キロメートルの当該海域公園地区に接続する海面内においてする場合に限る。）	懲役又は罰金
景観法	景観計画区域	届出	①建築物の新築、増築、改築若しくは移転、外観を変更することとなる修繕若しくは模様替又は色彩の変更 ②工作物の新設、増築、改築若しくは移転、外観を変更することとなる修繕若しくは模様替又は色彩の変更 ③都市計画法第４条第12項に規定する開発行為その他政令で定める行為 ④良好な景観の形成に支障を及ぼすおそれのある行為として景観計画に従い景観行政団体の条例で定める行為	罰金
新上五島町景観条例	景観計画区域 ※ただし、今保存計画にかかる地域を特定し規制する規定はなく、町全域を対象とする。	届出	①土地の開墾、土石の採取、鉱物の採掘その他の土地の形質の変更行為 ②木竹の伐採 ③屋外における土石、廃棄物、再生資源、その他の物件の堆積 ④水面の埋立又は干拓行為	勧告
森林法	保安林	許可	①立木の伐採 ②立木を伐採し、立木を損傷し、家畜を放牧し、下草、落葉若しくは落葉を採取し、又は土石若しくは樹根の採掘、開墾その他の土地の形質を変更する行為	罰金
文化財保護法	周知の埋蔵文化財包蔵地	届出	土木工事等を目的として周知の埋蔵文化財包蔵地の発掘しようとする行為	―
長崎県文化財保護条例	県指定文化財	許可	現状を変更し、又はその保存に影響を及ぼす行為	罰金科料
農地法	農地	許可	農地の権利の移動、農地の転用及び農地転用のための権利の移動	懲役又は罰金
農業振興地域の整備に関する法律	農用地	許可	宅地の造成、土石の採取その他の土地の形質の変更又は建築物その他の工作物の新築、改築若しくは増築等の開発行為	懲役又は罰金
漁港漁場整備法	漁港	許可	工作物の建設若しくは改良（水面又は土地の占用を伴うものを除く。）土砂の採取、土地の掘削若しくは盛土、汚水の放流若しくは汚物の放棄又は水面若しくは土地の一部の占用（公有水面の埋立てによる場合を除く。）	罰金
海岸法	海岸保全区域	許可	①土石（砂を含む。）を採取すること。②水面又は公共海岸の土地以外の土地において、他の施設等を新設し、又は改築すること。③土地の掘削、盛土、切土その他政令で定める行為をすること。	―
長崎県未来につながる環境を守り育てる条例	自然環境保全地域特別地区	許可	①建築物その他の工作物を新築し、改築し、又は増築すること。②宅地を造成し、土地を開墾し、その他土地の形質を変更すること。③鉱物を掘採し、又は土石を採取すること。④水面を埋め立て、又は干拓をすること。⑤河川、池沼等の水位又は水量に増減を及ぼさせること。木竹を伐採すること。⑦知事が指定する区域内において木竹を損傷すること。⑧知	懲役又は罰金

			事が指定する区域内において当該区域が本来の生育地でない植物で、当該区域における自然環境の保全に影響を及ぼすおそれがあるものとして知事が指定するものを植栽し、又は当該植物の種子をまくこと。⑨知事が指定する区域内において当該区域が本来の生息地でない動物で、当該区域における自然環境の保全に影響を及ぼすおそれがあるものとして知事が指定するものを放つこと（当該指定する動物が家畜である場合における当該家畜の放牧を含む。）。⑩知事が指定する池沼又は湿原及びこれらの周辺 1 キロメートルの区域内において当該池沼若しくは湿原又はこれらに流水が流入する水域若しくは水路に汚水又は廃水を排水設備を設けて排出すること。⑪道路、広場、田、畑、牧場及び宅地以外の地域のうち知事が指定する区域内において車馬若しくは動力船を使用し、又は航空機を着陸させること。⑫前各号に掲げるもののほか、特別地区における自然環境の保全に影響を及ぼすおそれがある行為で規則で定めるもの	



「新上五島町北魚目の文化的景観」申出区域の土地利用規制図

３．景観法に基づく景観計画による行為誘導

（１）景観計画のエリア区分と方針

重要文化的景観申出を行う前提として、景観法に基づく景観計画の策定が必要であり、新上五島町では、平成 21 年 11 月、新上五島町全域を対象に「新上五島町景観計画」を策定し「新上五島町景観条例」を制定した。本計画では、町域全体を景観計画区域とし、本町の区域を「海」「山」「街」「集落」の４つに大きく類型し、これらの景観特性ごとに景観づくりの方針を下記のとおり定めた。また、北魚目の重要文化的景観選定申出範囲を重要景観計画区域に設定している。なお、将来的には他の重要文化的景観申出予定範囲を区域設定することを想定している。

①「海」の景観づくりの方針

項　目	方　針
海岸	・自然海岸は極力保全する。 ・防波堤や護岸は、極力景観との調和を図るとともに、親水空間の確保に努める。 ・漂着ゴミ等は定期的に収集処分などの方策を検討する。 ・不用漁具等の適正処分や整理を行う。
建築物	・景観との調和に配慮したデザインや色彩とするとともに、圧迫感を与えない配置や規模とする。
外構	・自然素材の活用や緑化により、景観との調和に配慮する。
広告物等	・管理看板や広告物等は、できる限り集約化するとともに、景観との調和に配慮する。
道路・橋梁	・道路付属物や転落防止柵の素材や色彩は、周辺の景観や眺望を妨げないよう調和するよう配慮する。 ・橋梁や欄干は、景観との調和や、地域のシンボルとなるようデザインに配慮する。

②「山」の景観づくりの方針

項　目	方　針
山林	・森林の適正管理に努め、良好な森林景観を維持する。 ・四季の移ろいを感じることができる景観づくりを推進する。
建築物等	・森林景観との調和したデザインや色彩とするとともに、背後の山並みの稜線を分断しないよう配慮する。
外構	・自然素材の活用や緑化により、森林景観との調和に配慮する。
広告物等	・看板等は、森林景観と調和し、癒しを感じられるデザインとなるよう配慮する。
道路	・道路付属物の素材や色彩は、森林景観に調和するよう配慮する。 ・四季の移ろいを感じることができる沿道景観の創出や眺望の確保に努める。 ・長大な法面などが生じる場合には、緑化やその他修景を施し、周囲の景観を損なわないようにする。

③「街」の景観づくりの方針

項　目	方　針
建築物	・商店街は賑わいの持てる美しい建築物による景観づくりに配慮する。 ・歴史的な街並みとの調和に配慮した配置や規模、デザイン、色彩とする。 ・中高層建築物は、周辺の景観への影響が大きいことから、色彩やデザインに十分に配慮するとともに、街を往来する人々に圧迫感をあたえない配置や規模とする。
外構	・街並みの連続性に配慮するとともに、自然素材の活用などにより、豊かな景観をつくりだすよう配慮する。
広告物等	・広告物や案内サイン等は、できる限り集約化し、目的に応じて効果が最大限発揮できる位置に設置するとともに、簡素で分かりやすいデザインとし、目立ちすぎにより街並みの景観を乱さないよう配慮する。 ・案内サインは、隣接して乱雑な案内サインが設置されないよう配慮する。
道路	・舗装や道路付属物の素材や色彩は、賑わいのある街並みや歴史的な街並みなど、地域性を考慮したものとする。

④「集落」の景観づくりの方針

項　目	方　針
農地	・農地の適正管理に努め、良好な景観を維持する。休耕地への景観作物の導入なども検討する。 ・段畑の石垣などを保存するとともに、自然素材の活用や緑化などにより、集落景観との調和に配慮する。
漁港	・網やその他の漁業で用いる道具などは、雑然として見えるため、景観に配慮した管理方法などを検討する。
建築物等	・勾配屋根の設置や伝統的な工法を用いるなど、周辺の既存建物との調和や地域特性に配慮したデザインとなるようにする。 ・特に教会の周辺などは形態や色彩などに配慮する。
外構	・自然素材を活用するとともに、生垣や庭木の緑により、周囲の景観と調和したデザインとなるよう配慮する。
広告物等	・看板等は、地域産材を活用するなど、畑地景観に調和したデザインとなるよう配慮する。 ・自動販売機は色彩等に配慮し、周囲の景観を阻害しないものとする。
道路	・道路付属物の素材や色彩は、畑地景観に調和したものとする。 ・沿道の緑化や花による修景を推進し、畑地景観にふさわしい景観づくりに努める。

（２）良好な景観形成のための届出制度と景観形成基準

■届出を要する行為（重要景観計画区域）

区　分	項　目		規模等の基準
建築物・工作物	新築、増築		建築面積及び増築面積が 10 ㎡を超えるもの
	改築、外観の修繕、模様替え又は色彩の変更		前面道路及び公共の場所から見える屋根及び外壁の見付け面積が 10 ㎡を超えるもの
	煙突、柱、高架水槽		高さ５ｍを超えるもの
	遊戯施設、製造施設、貯蔵施設、汚物処理場、立体駐車場、彫像、記念碑、携帯電話中継塔等		高さ５ｍ又は築造面積が 10 ㎡を超えるもの
	擁壁、柵、塀等		高さ 1.5ｍを超えるもの又は見付け面積が 100 ㎡を超えるもの（一連で造るものも含む）
	電線路	電柱	高さ５ｍを超えるもの
		変電器等の地上機器	設置する変圧器等の地上機器すべてのもの
自動販売機	自動販売機及びその修景施設の設置、置き換え、模様替え又は色彩の変更		高さ１ｍを超えるもの
木竹の伐採	木竹の伐採		高さ５ｍを超え、かつ林業以外の目的の行為 （ただし、枯損木竹の伐採、間伐等保育のために通常行なう管理行為は適用除外）
屋外における物の集積又は貯蔵	屋外における野積みによる物の集積又は貯蔵		高さ 1.5ｍ又は集積・貯蔵面積が 50 ㎡を超えるもの
土地の区画形質の変更（鉱物の採掘又は土石の採取を含む）	鉱物の採掘又は土石の採取、のり面、土地の造成		採掘・採取面積が 300 ㎡を超えるもの 田及び畑などの農地で法長が 0.5ｍを超えるもの 宅地等の土地の造成で 300 ㎡を超えるもの、又は切土又は盛土によって生じる法（のり）の高さが１ｍを超えるもの

■景観形成基準（重要景観計画区域）

<table>
<tr><th colspan="2">項目</th><th>重要景観計画区域の景観形成基準</th></tr>
<tr><td rowspan="1">共通事項</td><td>指針</td><td>【形態意匠】
○地区の歴史的文化的景観と調和した落ち着きと安らぎのある景観を形成する。
○歴史的資産との景観的調和を図り、文化財保護地域等にふさわしい景観の創出を心がける。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">建築物</td><td>指針</td><td>【形態意匠】
○低層建築で勾配屋根を設けることを基本とする。
○一戸が突出した印象を与えないよう、周辺の家並みと調和するような形態意匠・色彩とする。</td></tr>
<tr><td rowspan="5">基準</td><td>【高さ】
・最高の高さは 10ｍを超えないこと。</td></tr>
<tr><td>【形態意匠－基本構造】
・建築は和風のデザインを基本とする。
・木造建築を基本とする。ただし、耐震補強等の構造上やむを得ない理由がある場合は、この限りではない。
・高床式（ピロティ）は避ける。</td></tr>
<tr><td>【形態意匠－屋根】
・屋根勾配は、3/10～5/10 を標準とする。
・屋根の材料は、和瓦・金属板を基本とする。
・屋根の形状は、入母屋・切り妻・寄せ棟を基本とする。
・総二階は基本的に避ける。やむを得ない場合は庇等を設けることを基本とする。
・屋根の色彩（庇等を含む）は、以下の基準とする。
ただし、和瓦葺き等の材料によって仕上げられる部分は以下の基準の限りではない。
また、金属板を使用する際は、素材色を活かすか塗装し、ぎらぎらした不快感を与えないように配慮すれば、以下の基準の限りではない。
<table>
<tr><th>色相</th><th>明度</th><th>彩度</th></tr>
<tr><td>0.1Ｒ～５Ｙ</td><td>６未満</td><td>６以下</td></tr>
<tr><td>上記以外</td><td>６未満</td><td>４以下</td></tr>
</table>
</td></tr>
<tr><td>【形態意匠－外壁】
・外壁は、板張り・塗壁（しっくい等）・塗壁調（プラスター、モルタル、コンクリート等）を基本とする。
・色彩は、以下の基準とする。ただし、着色していない木材・コンクリート・ガラス・石等の材料によって仕上げられる部分は以下の基準の限りではない。
<table>
<tr><th>色相</th><th>明度</th><th>彩度</th></tr>
<tr><td>0.1Ｒ～10Ｒ</td><td>９未満</td><td>３以下</td></tr>
<tr><td rowspan="2">5ＹＲ～10Ｙ</td><td>９以上</td><td>４以下</td></tr>
<tr><td>９未満</td><td>５以下</td></tr>
<tr><td rowspan="2">上記以外</td><td>６以上</td><td>３以下</td></tr>
<tr><td>６未満</td><td>４以下</td></tr>
</table>
</td></tr>
<tr><td>【形態意匠－付属屋】
・付属屋は下屋を活用し、和風（透明プラスチック板等不可）を基本とする。
※本基準における「付属屋」とは、建築面積 20 ㎡未満かつ軒高 2.3ｍ未満の建築物を指す。</td></tr>
<tr><td>【位置】
・土地の区画形質の変更は原則行わない。
・遠くからの眺望の際に突出した印象を与えないような位置を選ぶ。</td></tr>
<tr><td>【形態意匠－建築設備等】
・建築設備等は、周辺の道路等公共用地から見えないように隠す。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="8">工作物</td><td>指針</td><td>【形態意匠・高さ】
○送電線塔、電波塔等は極力立地しない。やむを得ない場合は、極力高さを抑え、目立たない位置に設置し、周辺と調和する色彩とし、極力植栽で修景する。
○垣根、擁壁、さく、塀などは、周辺景観に配慮し、木材、石材等の自然素材を用いるようにする。
○煙突、遊戯施設は極力設置しない。
○屋外証明は下方を照らすことを基本とし、むやみに上方を照らしたり、ぎらぎらした不快感を与えないようにする。
○自動販売機は店舗等の建物に付属させ、建物と調和するような色彩選定や修景を行うことを基本とする。また、内臓光源は明る過ぎないようにする。</td></tr>
<tr><td rowspan="7">基準</td><td>【高さ１】
・最高の高さは10mを超えないこと。</td></tr>
<tr><td>【高さ２】
・ただし、電柱・製造施設等で、極力高さを抑えたものの、機能的な理由等によりやむを得ず上記基準以上の高さが必要なものはその限りではない。</td></tr>
<tr><td>【位置】
・歴史的な地形を尊重する。
・重要な眺望地点から見て、突出した印象を与えないような位置を選ぶ。ただし、やむを得ない場合は、目立たないように修景する。
・隣地相互での空間を確保する。
・設置位置は、接道部から少なくとも１～３m程度の後退を基本とする。
ただしやむを得ない場合は、接道部分を重点的に緑化する。</td></tr>
<tr><td>【形態意匠－外観】
・工作物の外装に使用する素材は、周辺の景観と調和した質感のものにする。
・擁壁は、自然石積又は緑化等により文化的景観等と調和する修景を基本とする。
・道路等の公衆の視点場からみて、圧迫感や威圧感を緩和するような形態意匠とする。又はそのように修景する。
【形態意匠－屋外照明等】
・屋外照明等は、下方を照らすことを基本とし、むやみに上方を照らさない。
・投光器等の天空への光束を抑制する。</td></tr>
<tr><td>【形態意匠－色彩】
・外壁の色彩は、以下の基準とする。
ただし、着色していない木材・コンクリート・ガラス・石等の材料によって仕上げられる部分は以下の基準の限りではない。
<table>
<tr><th>色相</th><th>明度</th><th>彩度</th></tr>
<tr><td>0.1R～10R</td><td>９未満</td><td>３以下</td></tr>
<tr><td rowspan="2">５YR～10Y</td><td>９以上</td><td>４以下</td></tr>
<tr><td>９未満</td><td>５以下</td></tr>
<tr><td rowspan="2">上記以外</td><td>６以上</td><td>３以下</td></tr>
<tr><td>６未満</td><td>４以下</td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td>【形態意匠－自動販売機】
・野立ての自動販売機は覆屋を設け、周囲の景観になじむものとする。
・色彩は、設置する建物と同色ないし調和する色彩を基本とする。
・複数並べて配置する場合、色彩は同色系のものを採用することを基本とする。
・過度に明るい内蔵光源を避ける。</td></tr>
<tr><td>【形態意匠－外構】
・生垣や木塀を基本とする。
・ブロック塀は避ける。やむを得ない場合でも、高さ1.5mを超えないこととする。
・アルミフェンス等は、低彩度色（彩度１以下）を用いる。
・農業用の獣害対策で用いる柵等はこの限りではない。</td></tr>
</table>

土地の区画形質の変更（鉱物の採掘又は土石の採取を含む）	指針	○不用意に土地の区画形質の変更又は土石の採取は行わない。
	基準	・調査等の目的以外に鉱物の採掘又は土石の採取は行わない。 ・現況の地形を生かし、長大なのり面及び擁壁が生じないようにする。 ・隣接する道路や敷地と高低差が生じる場合は石積みを基本とし、周囲の景観に調和することを基本とする。
木竹の伐採	指針	○地域の特徴的景観に資する木竹はなるべく保全する。
	基準	・基本的に木竹の伐採は避ける。やむを得ない場合は、伐採跡地において事後の土地利用に応じ、周囲の植生と調和するよう緑化を行うことを基本とする。 ・ただし、枯損木竹の伐採、間伐等保育のために通常行う行為は適用除外。
物の集積	指針	○景観に不調和な露出した物の集積は避ける。ただし、漁業や農業目的のものはその限りではない。
	基準	・道路等に面する場所では、高さ 1.5m、面積 50 ㎡を超える物の集積は行えない。 ・ただし、やむを得ない場合は、道路等から見えにくい場所を選び、道路からできる限り離し、高さを低くし、樹木等で遮蔽を行う。
屋外照明	指針	○屋外照明等は、夜空の美しさを確保するために、むやみに上方を照らさない。
	基準	・屋外照明等は、下方を照らすことを基本とし、むやみに上方を照らさない。
緑化の重点的推進	指針	○駐車場や工場など大規模な施設の周囲は、重点的に緑化による修景を行う。
	基準	・大規模な屋外駐車場（1,000 ㎡以上）では、植栽による空間の分節化や通路部分を緑化する。 ・工場等の屋外設備等は緑化により遮蔽する。

（３）景観計画におけるその他の事項

新上五島町景観計画において、①景観重要公共施設の整備に関する事項、②景観まちづくりの推進方針、③景観重要建造物の指定の方針、④景観重要樹木の指定の方針を定めている。

これらの方針は、景観行政団体である新上五島町が今後も良好な景観を維持するために必要であると定めた最低限の配慮事項であり、景観重要公共施設に指定されていない公共施設についてもこれに準じることが望まれる。特に公共事業については、国県町の事業主管にかかわらず、計画が立ち上がる段階から把握して調整をはかることとする。

４．現状変更の取扱い

重要文化的景観は、法執行上の規定として文化財保護法第８章（第 134 条－第 141 条）に、重要文化的景観の選定や現状変更の規制等が記されている。

また、重要文化的景観に係る選定及び届出等に関する規制の一部を改正する省令（平成 20 年文部科学省令第 24 号）の公布により、文化的景観を形成する重要な構成要素を特定することとなった。この改正により、重要文化的景観の滅失又はき損に係る届出（法第 136 条関係）及び現状変更等の届出（法第 139 条関係）は、文化的景観における重要な構成要素を対象とすることとなった。

申出地域で行われる現状変更対象行為の多くは、自然公園法、農地法、森林法、景観法等に基づく届出の対象行為となっている。

（１）文化財保護法の届出対象行為

文化財保護法で届出対象とする行為は、以下の行為とする。当該物件の所有者は、現状変更の際に教育委員会と協議の上、文化庁長官に対して届出を行うこととする。

■届出を要する行為

届出の種類	届出が必要な場合	届出日
滅失	焼失、流失等により滅失した場合	滅失・き損を知った日から 10 日以内
き損	災害等により大きく破損した場合	〃
現状変更	移転・除去等、当該景観重要構成要素の価値に影響を及ぼす増改築等の行為	現状変更しようとする日の 30 日前まで

※滅失又はき損（法第 136 条）については、重要文化的景観の保存に著しい支障を及ぼすおそれがない場合は届出を要しないとされており、その行為は省令（第４条）で定められている。

※現状変更の届出等（法第 139 条）については、現状変更については維持の措置若しくは非常災害のために必要な応急措置又は他の法令の規定による現状の変更を内容とする命令に基づく措置を執る場合、保存に影響を及ぼす行為については影響の軽微である場合は、この限りでないとされており、その措置の範囲は省令（第７条）で定められている。

（２）文化財保護法の届出を要しない行為

以下に定める行為については、影響の軽微であるものとし、本計画において届出を要しない行為として定めている。

①地盤面下又は水面下における行為
②仮設の建築物、工作物の建設等
③通常の管理行為、軽微な行為
ア　建築物の新築、増築等、外観を変更することとなる修繕若しくは模様替え又は色彩の変更行為で、次のいずれかに該当するもの
- 建築面積が 10 ㎡以下の建築物
- 色彩の変更行為を行う部分が 10 ㎡以下のもの
- 擁壁等（塀、柵含む）の構造物その他これに類するもので、面積が 10 ㎡以下のもの
- 電柱、照明灯、携帯電話用アンテナ、その他これに類するもので高さ３ｍ以下のもの
- 生業を営むために行う、高さが 1.5m以下の貯水槽、飼料貯蔵タンクその他これらに類する工作物の設置等

・生業を営むために行う、幅員が２ｍ以下の用排水路又は幅員が２ｍ以下の農道若しくは林道の設置

イ　土地の形質の変更行為で、面積が 100 ㎡以下のもの（ただし、これにより建築物・工作物等が生じ、アの基準を超える場合は届出を要する。）

ウ　木竹の伐採で、次のいずれかに該当するもの

・森林の保育、施設管理のために通常行われる木竹の伐採

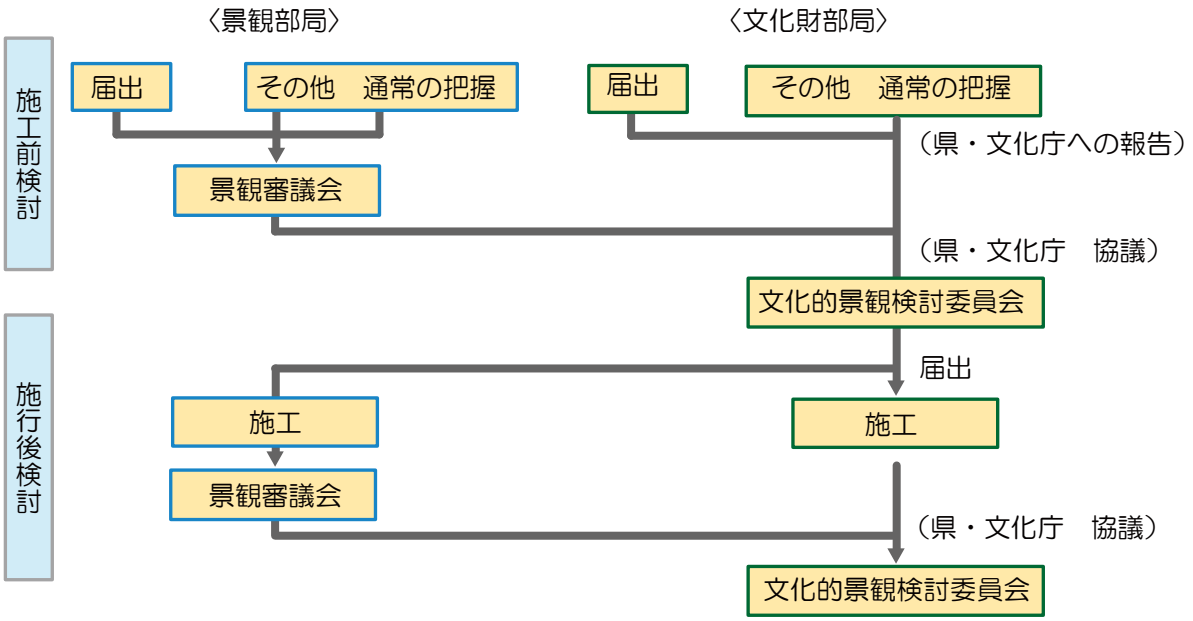
・枯損した木竹又は危険な木竹の伐採

教育委員会は、重要文化的景観の形状又は管理若しくは復旧の状況を把握し、文化財保護法第８章（第 140 条）により報告を求められた場合は、文化的景観の現況について報告するものとする。

また、文化的景観区域内で新上五島町景観計画による届出等があったものについては、景観計画担当部署及び教育委員会で協議を行うこととし、現状変更の内容によっては、所有者等と協議を行うこととする。（域内で行われる公共工事を含む。）

重要文化的景観の滅失又はき損が省令第４条に定める行為についても、教育委員会と事前に協議を行うことを原則とする。

〈体制について〉



第３章　文化的景観の整備活用に関する事項

１．整備活用に関する考え方

整備活用については、自然的空間と集落及び生活・生業的空間を体感し、地域の文化を知ることができるようにすることを基本とする。調査研究による価値づけを継続することはもちろんのこと、修景事業の計画・実施、景観保全を担う人材育成等、検討事項は多岐に渡る。

新上五島町北魚目の文化的景観の整備は、自然的景観と集落及び生活・生業的景観を保全するよう努める。文化的景観の保全については、関係部署と調整し、価値のき損や滅失がないように努めることが原則である。

公共事業については、これまで管理者が異なるという理由から、隣接する場所であっても、工法や材料の違いがあり、環境保全の整合性が取りにくいことが課題であった。公共工事は景観への影響が大きいため、環境保全に対する認識を統一する必要がある。また、集落景観には、学校、橋梁、道路、港等、景観に大きな影響を及ぼす公共施設が含まれていることが多い。これらについては、景観計画の中で景観重要公共施設として位置づけ、整備に関する事項を定めることも想定される。国土交通省から、「公共事業における景観検討の基本方針」（H21.4.1 改訂）が示されており、その他景観ガイドライン等も多数策定されていることから、それらの内容を踏まえた事業実施に努めることとする。（第７章参考資料：公共事業におけるガイドライン等の尊重）

文化的景観を確実に継承していくため、地域住民の必要に応じて景観計画の見直し等も検討していく。

文化的景観の活用のため、上述した景観保全の取り組みと同時に、県内に分布する同様の価値を持つ文化的景観地域との連携を図り、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産登録の取り組みに併せ、広域な周知啓発ルート等の開発に取り組むこととする。

保存調査で抽出された景観阻害要因については、文化庁事業等を活用して、修景や除去に努める。これらの修理修景を実施しながら、地域内の拠点施設の整備や、サイン計画等を併せて検討する。

また、文化的景観を長期的に保全し継続していくために、地域産業の育成を図るものとする。

２．整備活用の方針

（１）自然的観点

景観を構成する要素	整備活用の方針
天然林	①整備の方針 ・天然林としての保全に努める。 ・水源涵養林として保全に努める ②活用の方針 ・全体眺望として、文化的景観の価値と併せて周知できる方法を検討する。
ツバキ林	①整備の方針 ・その保全に努めることとするものの、荒廃を防ぐために適切な管理が必要である。 ②活用の方針 ・ツバキ油搾油のためのツバキ実採取を図る。
二次林	①整備の方針 ・里山としての保全を図りながら管理する。 ・用材として一定規模以上を伐採した場合は、植林を行うなど植生の早期回復に努める。 ②活用の方針 ・里山を活用した取り組みが望まれる。 ・木炭など林産物の生産を図る。
人工造林	①整備の方針 ・用材として一定規模以上を伐採した場合は、植林を行うなど植生の早期回復に努める。 ②活用の方針 ・用材などの林産物の生産を図る。
道路	①整備の方針 ・地域内の価値は、散策することで理解が深まるため必要な散策道の設定及び整備、自然散策路の整備を検討する。 ②活用の方針 ・森林内を通る里道を散策路とすることで、林空間の活用を検討する。
海岸・河川	①整備の方針 ・自然海岸としての保全に努める。 ・自然海岸や自然石積護岸を生かした整備に努める。 ②活用の方針 ・自然海岸は景観をかつ生かした散策場所とする。 ・磯場は魚介類や藻類の採集場として保全する。
その他	①整備の方針 ・修景に関しては、重要文化的景観保護推進事業のほか様々な支援策を検討する必要がある。 ②活用の方針 ・海岸などの自然景観や天然記念物を活かした散策ルートの設定を検討する。

（２）集落及び生活・生業的観点

景観を構成する要素	整備活用の方針
住居	①整備の方針 ・現在、集落には木造２階建で勾配のある屋根形状を有しているものが多い。住居は木造が望ましく、高さについては２階建て以下を原則とする。 ・空家は所有者の協力を得て散策を行う際の休憩施設、物販所などとしての整備が考えられる。 ・地域内には廃屋が点在しており、これらは景観上好ましいとはいえない。私有財産であり解体処分等の対策には法的な壁もあるが、所有者との折衝や地域内での協議などにより、対策を講じる。 ②活用の方針 ・魅力ある集落景観を作ることで、交流人口の増加を図る。 ・農漁家民泊としての利用を検討し、交流人口への受け入れ態勢の充実を検討する。 ・ただし、これまでの暮らしを保全する観点からも、大規模な交流人口増を目指すことは想定しない。
工場･事業所	①整備の方針 ・地域イベント開催時の拠点施設として、周辺部の整備も考えられる。 ・現在、地域内には地元産の土産品を流通販売する組織・施設がないため、これらソフト・ハードともに、その必要性や対応策を地域内組織で協議する。 ②活用の方針 ・他の地域では漁協や農協など地域の組織で地場物産品の即売会を行っている事例も多数あり、他地区を参考に活用策を検討する。
神社、寺、教会堂	①整備の方針 ・参道や庭園等、建築物と一体となって良好な景観を形成しているものも含めて保存整備を検討する。 ・従来の構造、材料、色彩等の保存に努めた整備を行うこととする。 ②活用の方針 ・観光利用が多い江袋教会堂は、地域活動の拠点となることも想定される場所であり、整備活用計画との連携を図る。 ・地域内の寺社やそれらに付随する石造物なども文化的景観の価値を付加することによって、更なる活用方策を検討することとする。 ・ただし、これらは信仰の場であり、地域住民の生活に直結しているところであるので、十分に配慮が必要である。
公共施設	①整備の方針 ・学校や消防倉庫等を改修する場合は、周囲の景観との調和に努める。 ・漁港整備で、大きな構造物が設置される場合は、特に周囲の景観に調和するよう配慮する。 ②活用の方針 ・既に設置されている公共施設（学校や公園等の広場）については、地域活動の場として積極的に利用ができるよう調整を行う。

景観を構成する要素	整備活用の方針
道路・里道	①整備の方針 ・地域内の価値は、散策することで理解が深まるため、必要な散策道の設定及び整備、自然散策路の整備を検討する。現段階では地域内の主要な幹線道路及び里道がこれにあたることを想定する。 ・地域内道路の整備については、無用な拡幅・拡張はせず、住民からの生活改善要望として上がっている箇所については、必要最小限の幅員を確保するよう改修していく。 ・道路線形は既存道路の線形や地形を極力踏襲したものとし、新たに発生する法面や切土面、護岸が最小限となるよう設計する。 ・法面や切土面には緑化を施す。 ・法面に吹きつけを施す場合には、彩度・明度の低いグレー系の色とする。 ・護岸は極力自然石護岸とするよう努める。自然石護岸の積み方や素材については、周辺の既存の護岸と合ったものとする。 ・ガードレールなどの構造物はコントラストの強い色調を避け、景観の保全に努める。 ②活用の方針 ・荒廃している里道の復活など、既存の歩道等を利用した遊歩道の整備が考えられる。 ・道路整備の際に生じる残地を活用し、駐車場や展望施設としての活用が考えられる。 ・集落内の小道（歩道）については、散策マップ等を作成することで、新たな観光コースとしての活用も考えられる。
墓地	①整備の方針 ・集落ごとに形成された古墓は、現在管理されていない箇所もあるので、地元の協力を得て草刈り等を行い、見学できるようにする。 ・ただし、故人を弔った信仰の場であるので、無用な整備は行わない。 ②活用の方針 ・古墓については現段階で積極的な活用は想定しないが、歴史体験ツアーなど教育文化的な事業に際しては見学できるようにしたい。
集落の石垣景観	①整備の方針 ・宅地を取り囲む防風垣や建築物の壁の一部となっている石塀は、北部地域の景観の特徴となっており、保全に努める。 ・連続性を阻害しているものについては、修景若しくは除去を検討する。 ②活用の方針 ・地域内の小道を散策すると、数多くの特徴的な石垣景観を見ることができる。貴重な地域資源であり、散策マップ等を作成することで、新たな観光コースとしての活用も考えられる。
広場	①整備の方針 ・公園整備等については、周囲の景観と調和した施設整備に努めることとする。広場を囲む金網のフェンスや大規模なネット、舗装材、トイレのデザイン等については、十分な配慮が必要である。 ・既存の公園については、改修の際に修景を実施していくこととする。 ②活用の方針 ・イベント広場として、又は日常的に利用可能な憩いの場としての活用を図る。

景観を構成する要素	整備活用の方針
石造物	①整備の方針 ・地域に散在する石塔や石碑等の石造物は、現状維持に努める。 ・記念碑等は景観を阻害する要因となり得るため、原則として新たな設置は行わないこととする。 ②活用の方針 ・石造物は地域史に深く関連するものである。その地を訪れた旅行者等がその価値を理解できるようなマップ等の作成が考えられる。
防風林	①整備の方針 ・家屋や耕作地、集落を取り囲む防風林は、地域独自の特徴的な景観であり、その保存整備に努める。 ・新上五島町北魚目の文化的景観を形成する重要な要素であるため、地域住民と連携してその保全に努める。 ・また海からの強い季節風や夏の日差しを防ぐためのものであり、実用面を考慮しつつ、今後大幅な改変を加えず現状維持に努める。 ②活用の方針 ・日常生活に溶け込む防風林としての景観を眺望できるように配慮する。 ・集落内の小道を散策すると、大規模な防風林を見ることができる。貴重な地域資源であり、散策マップ等を作成することで、新たな観光コースとしての活用も考えられる。
集落の緑地及び景観木	①整備の方針 ・森林として現状維持に努める。 ・地域景観の核となるような樹木の伐採は行わないことを原則とする。 ②活用の方針 ・説明板の設置や散策マップへの掲載など周知を図る。
信仰に関する空間	①整備の方針 ・現在の景観を継承することを基本とし、原風景と極端に異なりコントラストが強い構造物等がある部分については、修景を検討する。 ・無形の文化について引き続き調査を行い、それを継続させるための方策を検討する。 ②活用の方針 ・無形の文化の保存に加え、公開の場を持つことで、伝承されてきた貴重な地域文化に触れる機会を提供する。
耕作地	①整備の方針 ・耕作放棄地になっている場所が多いため、活用策を検討した上で、農地として回復を検討する。また目立つ場所については定期的な除草などを行う。 ・農地災害復旧工事では、可能な限り従前の石材を使用する等、景観の保全に努める。 ・地域内での石積み技術の継承に努める。 ・耕作地の景観を形成する防風林の整備及び管理技術について地域内での継承に努める。 ②活用の方針 ・集落や耕作地の修景を行うことで、交流人口増加のほか、畑地オーナー制などの活用を検討する。 ・学校教育の学習教材として、文化的景観を知る、触れ合う機会を提供する。 ・耕作物の地域ブランドとしての可能性を調査研究し、特産品の開発を行う。ただし、可能な限り従前からの耕作物を用いることが望ましい。

景観を構成する要素	整備活用の方針
広場･耕作放棄地等	①整備の方針 ・耕作放棄地については「耕作地」に準じる。 ・駐車場整備は基本的に行わない。 ②活用の方針 ・耕作放棄地については「耕作地」に準じる。
工作物	①整備の方針 ・電線・電柱などの地中埋設化については、工事費の問題のほか、道路掘削や付帯施設の設置等の景観上の問題もあり、長期的な計画策定を要する。 ・景観を阻害する要因については、修景事業を実施していく。 ②活用の方針 ・不用となった工作物が、長期間放置されることがないよう努める。
屋外広告物	①整備の方針 ・必要最小限の場所に、適切な大きさ、適切なデザインのものを配置する。 ・貴重な文化財の脇に案内板を設置する場合は特に注意を要し、文化財自体の価値を損なうことがないよう努める。 ②活用の方針 ・本地域の文化的景観は、説明版を設置しないとその価値が分からないものも多く、関係部署と調整を図りながら設置を行い、文化財としての活用を図る。
その他	①整備の方針 ・文化的景観の価値を高めるため、地域内の文化財の調査、修復、整備を行う。 ・地域で景観協定を締結し、より細やかなルール作りを目指す。 ・修景に関しては、文化的景観保護推進事業で行う事業のほか、様々な支援策を用意していくことが考えられる。 ②活用の方針 ・文化的景観の価値については、その区域内の住民への周知に加え、観光客を含めた幅広い周知を行う。 ・生涯学習の一環として、公民館講座等を活用し、文化的景観の周知を図る。 ・地域の魅力をどのように伸ばし活用するのか、目標を明確にする。 ・学校教育の学習教材として、文化的景観を知る、触れ合う機会を提供する。 ・増加が見込まれる交流人口（観光客等）の受け入れ態勢を確立させる。

３．整備活用計画

本章第１項及び第２項で文化的景観の整備活用の方針を示したが、詳細については、後に設置される整備活用委員会で検討を行い策定される整備活用計画に拠るものとする。この整備活用計画は、保存調査で明らかとなった文化的景観の価値を保護し活用するため、文化的景観地域内におけるより詳細な整備活用の指針を定めるもので、今後は、同計画に基づき整備を進め活用を図り地域振興に繋げることとしている。以下は、新上五島町内における既存の取り組み等を踏まえた、整備活用計画の骨子である。

【新上五島町北魚目の文化的景観整備活用計画　骨子】

（１）基本構想

『離島における組織地形の高度利用を背景としてイモ（甘藷）文化を継承し散居する農耕民と海浜に集住する漁労民が共生する多様で特徴的な集落景観を次世代に引き継ぐ』

－文化的景観を生かした「まちづくり」－

①地域文化の継承
②文化的景観地域の資源を生かした整備と交流人口の拡大
③地域産業の振興

離島の限られた地形を利用したイモ作を軸として発達してきた農漁村集落の姿を体感し、地域の文化を知ることができるようにするため、「地域文化の継承」、「文化的景観地域の資源を生かした整備と交流人口の拡大」、「地域産業の振興」を軸に基本構想の検討を行う。

（２）基本計画

重要な構成要素として「集落」を挙げているように、本地域の文化的景観の価値は「集落の構造」にある。その構造を保全していくための整備計画と、それらを生かした活用計画の検討を行う。

①地域文化の継承

文化的伝統の保存・継承・活用、町民の文化活動への支援、地域の文化に触れる機会の提供等が考えられる。

②文化的景観地域の資源を生かした整備と交流人口の拡大

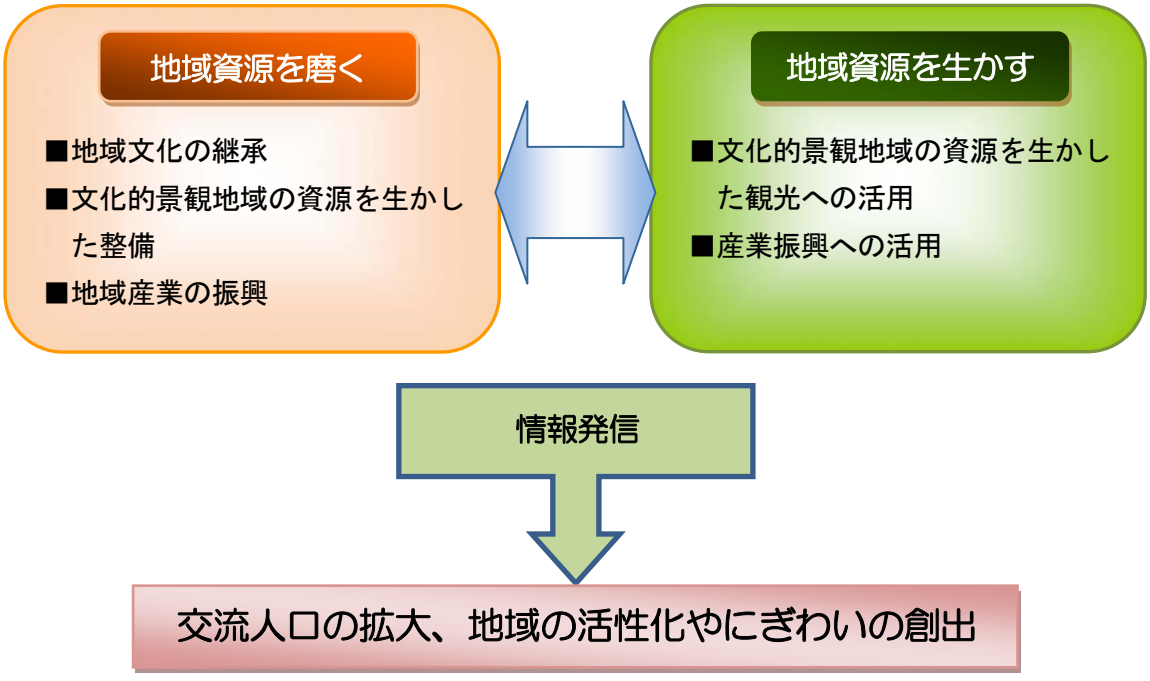
農漁村景観を生かした、体験型・滞在型観光の推進について検討を行う。テーマにあったメニューを充実させ、文化的景観を生かした周知啓発ルート（まち歩き型観光の擁立）の設定等が考えられるが、併せて、地域におけるもてなし体制も充実させる必要がある。交流人口の対象は町外からの観光客のみではなく、文化的景観の趣旨を町民に理解してもらうためにも、周辺地域に住む町民も対象にすべきであり、町民参加型イベント等を開催しながら周知啓発の取り組みを継続させる必要がある。

文化的景観地域の情報発信の強化、広域連携による活用の方策、文化的景観に配慮した整備等、地域と行政の連携も重要になってくる。

③地域産業の振興

地域産業の振興は、地域社会の基盤を安定させるために重要なことであるため、関係機関と連携を図りながら取り組みを進める。

新たな観光施設を作るのではなく、既にある地域資源を磨き生かすことを考える。文化的景観地域内での体験事業（農業体験、漁業体験、ツバキ実採取体験）や地域における景観保全の取り組み等を踏まえ、総合的な整備活用計画を策定しなければならない。



（３）新上五島町における文化的景観地域の位置づけ

様々な計画や各種事業間における文化的景観地域の位置づけを明確にし、本地域の振興について、全庁的な取り組みを行える体制を確立させる。

また、施設整備にあたっては、現在の観光客の入り込み状況を把握しながら、適切な場所に拠点施設を設けることが肝要である。

新上五島町における観光客数は年間約 19 万人であり、上五島観光に期待するものとしては、「自然・景観」、「郷土料理」、「教会」、「海水浴」などが想定される。

「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が世界遺産暫定リストに登録されて以降、新上五島町内の構成資産候補を訪れるという効果もあり観光客が増加している。まずは、これまでの観光客の流れを文化的景観地域へと周遊させる仕組み作りを行うことが必要である。

整備活用計画を策定するにあたっては、適切なゾーニングを行い、各地域が生かすべき魅力を把握した上で、動線計画やそれに伴う整備計画を立て、それを活用するための方策について検討を行う必要がある。

第４章　文化的景観を保存するために必要な体制に関する事項

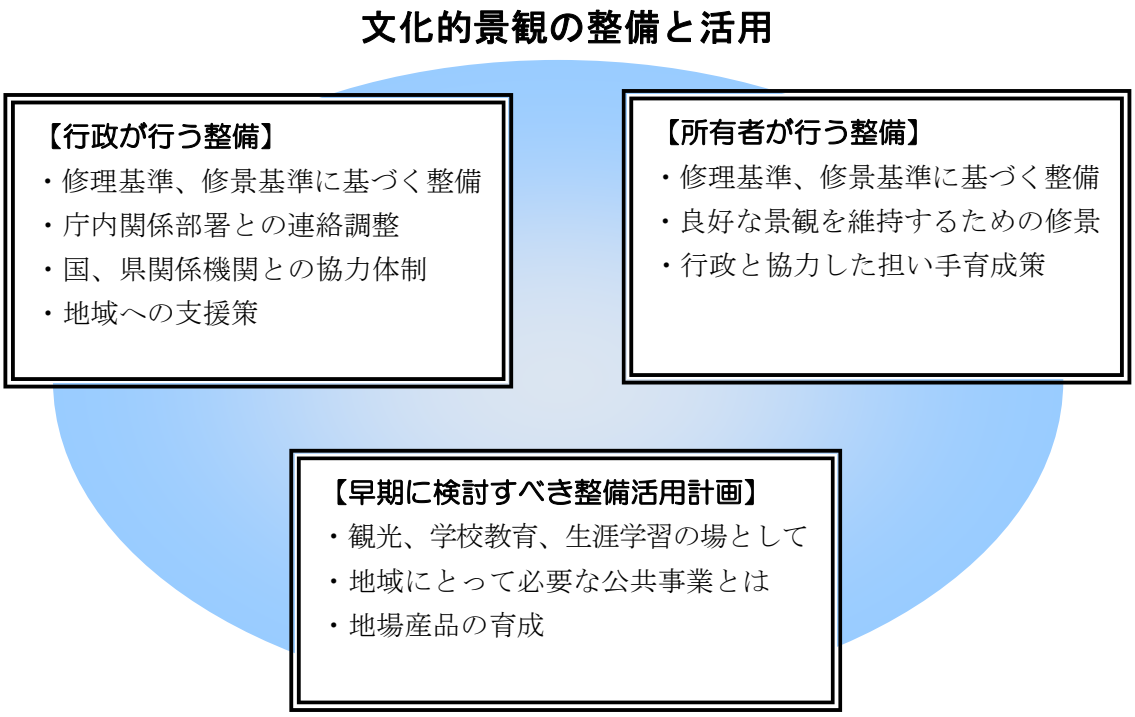
１．管理運営に関する考え方

基本方針を踏まえ、管理運営に関する考え方を以下に示す。

地域の文化的景観は「地域の資産」であり、良好な景観とともに継承していくには、地域住民と行政の協働が必要になってくる。「良好な景観」の定義は主観に拠るところが大きく、概念的であり、地域の人たちがその議論を深めることは難しいと思われる。しかし、自分たちの町にとって、何が好ましく、何を残していきたいのかを挙げることは可能であり、対象物が明確になると、景観保全に対する意識も向上してくるものである。

新上五島町北魚目は、自然への人為的な働きかけで景観が形成されてきた場所であり、それら生業が営まれる中で形成されてきた景観を引き継ぐことが重要である。そのためには、地域住民及び行政は文化的景観の価値を正しく理解し、その継承のために必要な体制づくりを進めなければならない。

本計画は、あくまで文化的景観の保存継承の枠組みを定めるものであり、この計画が効力を発揮し景観保全への取り組みへと繋げていくためには、景観行政団体である新上五島町や国・県等の施設管理者、地域住民の協力関係の構築が求められる。



２．地域住民の役割

景観法で高さや色等の基準を設けたところで、それを守れば必ずしも良好な景観が形成されていくというものではない。画一的な「作られた景観」を形成することが目的ではなく、立地する場所の条件や周辺環境により、景観に配慮すべき事項は異なってくるものである。景観は、庭の手入れや空き地の利用の仕方等、それらの使い方に拠るところもある。地区を対象としたゆるやかな協定により自主管理することは、地域景観へのコンセンサスを作っていく効果があり、そうした自主的な取り組みで補完することによって広がりが出てくると考えられる。景観協定は景観規制のルールとしても使えるし、自発的な景観創造の制度としても活用できるものである。

文化的景観の継承は、行政の施策と共にそこに住む地域住民の参画と自主性が重要となる。本地域は、自治会組織が強く機能している地域であるため、これらを活動の母体組織として位置づけ、自分たちができる事から始め、農地が荒れる原因として挙げられる、高齢化や後継者不足の問題を補うための担い手育成への取り組み等を通じて、町全体で文化的景観の継承に取り組むこととする。

３．行政の役割

新上五島町においては、地域の特性に応じて、景観計画により段階的な規制を設定した。地域づくりを行うにあたっては、規制のみの制度ではなく、規制のレベルに応じた支援策を用意すべきであり、規制と支援のバランスの取れた制度にしていくことが肝要である。（支援については、人的支援、経済的支援、規制緩和等が考えられる。）

文化的景観の管理と継承に関する効率的な行政運営を行うため、関係する庁内担当課との連携を強化し、横断的な連絡調整が可能な体制づくりを行うこととする。

また、今後策定される文化的景観整備活用計画については、新たな体制を整え検討することとする。

第５章　文化的景観における重要な構成要素

１．景観を構成する重要な構成要素の考え方

新上五島町北魚目の文化的景観は、「水田・畑地などの農耕に関する景観地」、「垣根・屋敷林などの居住に関する景観地」として典型的または独特のものであり、「自然地理的背景」と「独特な歴史的・社会的背景」の結びつきから生み出された集落景観である。そこから「斜面の高度利用とイモ（甘藷）文化」が生まれ、「移住農民集落と既住漁業集落の共生」が行われ、「生業と密接に結びついた集落」が生まれた景観であるといえる。

すなわち、「離島における急峻な組織地形の高度利用を背景としてイモ（甘藷）文化を継承し散居する移住農民と海浜に集住する漁民が共生する多様な集落景観」と価値付けすることができる。

したがって、「自然地理的背景」（＝離島における急峻な組織地形、海から吹きつける強い風、台風の進路といった自然的背景）のうえに「独特な歴史的・社会的背景」（＝外海地方から上五島への農民移住、漁業権の有無、信教の違いなど）が重なり、結果として「斜面の高度利用とイモ（甘藷）文化」（＝段畑、防風石垣、防風林、やぐら、じろなど）が生み出され、「生業と密接に結びついた集落」（＝集落そのもの）が形成されたといえるものである。本地域においては各集落の構造自体がそれぞれに価値を持つものであり、その集合体である北魚目全体が高い価値を持つものであると考えられる。このようにして生まれた価値を表わすもの、欠くことのできないもの、あるいは今後において集落を維持してゆくために必要なものを重要構成要素と位置づけ、保存、保護をはかるものとする。

２．重要な構成要素一覧

Ⅰ．集　　落

＊集落の範囲には、居住地（ 歴史的石積み、集落が管理する宗教施設、墓地、家屋、里道、排水路 ）、生業空間（ 段畑、里山、じろ釜、やぐら ）、周囲の自然的空間（ 小河川、自然林、竹林、つばき林、景観木 ）を含むものとし、これらの要素を保全することを原則とする。

番　号	種　類	名　称	管理者等	備　考
A	集　落	津和崎集落	自治会	
B	〃	米山集落	〃	
C	〃	竹谷集落	〃	
D	〃	一本松集落	〃	
E	〃	仲知集落	〃	
F	〃	赤波江集落	〃	
G	〃	江袋集落	〃	
H	〃	大瀬良集落	〃	
I	〃	小瀬良集落	〃	
J	〃	上小瀬良集落	〃	
K	〃	大水集落	〃	
L	〃	立串集落	〃	

Ⅱ．居住地を構成する要素

番号	種　類	名　称	管理者等	備　考
1	寺社、教会堂	津和崎御座	自治会	津和崎集落（集落の社会的背景を表わすもの）
2	〃	本山神社	団体、自治会	〃　（　〃　）
3	〃	金比羅神社	〃	〃　（　〃　）
4	〃	米山教会	団体	米山集落　（　〃　）
5	〃	赤波江教会	〃	赤波江集落　（　〃　）
6	〃	仲知教会	〃	仲知集落　（　〃　）
7	〃	江袋教会	〃	江袋集落　（　〃　）
8	〃	山神社	団体、自治会	大瀬良集落（　〃　）
9	〃	塩竈神社	〃	小瀬良集落（　〃　）
10	〃	小瀬良教会	団体	〃　（　〃　）
11	〃	大水教会	〃	大水集落　（　〃　）
12	〃	乙宮神社	団体、自治会	立串集落　（　〃　）
13	〃	琴平神社	〃	〃　（　〃　）
14	住居	Ｋ氏邸	個人	江袋集落　（明治期の古民家）
15	〃	Ｓ氏邸	〃	立串集落　敷地・母屋・境内社・ソテツ・石塀 （立串発展のもととなった網元）
16	石造物	Ｔ氏宅の石垣構え	〃	江袋集落　屋敷構え石垣・石垣塀 （自然条件を屈服するための設備）

Ⅲ．居住地を構成する要素（ 公共施設 ）

番　号	種　類	名　称	管理者等	備　考
17	公共施設（道路）	主要地方道　有川新魚目線	長崎県	
18	〃	県道　津和崎立串線	長崎県	
19	〃	町道　津和崎池尾線	新上五島町	
20	〃	町道　一本松線	〃	
21	〃	町道　仲知真浦線	〃	
22	〃	町道　仲知赤波江線	〃	
23	〃	町道　大瀬良線	〃	
24	〃	町道　小瀬良線	〃	
25	〃	町道　上小串線	〃	
26	公共施設（農道）	農道　竹谷線	〃	
27	〃	農道　江袋線	〃	
28	公共施設（林道）	林道　津和崎線	〃	
29	〃	林道　小瀬良線	〃	
30	〃	林道　番嶽線	〃	
31	公共施設（港湾）	地方港湾　小瀬良港	長崎県	
32	公共施設（漁港）	津和崎漁港	新上五島町	津和崎集落
33	〃	一本松漁港（一本松地区）	〃	一本松集落
34	〃	一本松漁港（赤波江地区）	〃	赤波江集落
35	〃	仲知漁港（仲知地区）	〃	仲知集落
36	〃	仲知漁港（江袋地区）	〃	江袋集落
37	〃	立串漁港（大瀬良地区）	〃	大瀬良集落
38	〃	立串漁港（立串地区）	〃	立串集落

（公共施設のうち、道路、農道、林道については全体を撮影できないため、現況写真を割愛する）

Ⅳ．生業を構成する要素

番　号	種　類	名　称	管理者等	備　考
39	かんころ関連施設	YT 氏宅のかんころ関連施設	個人	江袋集落　母屋・やぐら・じろ・敷地全体 （かんころ生産を象徴する設備一式）
40	〃	OR 氏宅のかんころ関連施設	〃	大水集落　母屋・段畑・やぐら （かんころ生産を象徴する設備一式）

Ⅴ．自然的空間を構成する要素

番　号	種　類	名　称	管理者等	備　考
41	公共施設（公園）	津和崎つばき園	新上五島町	津和崎集落
42	〃	番嶽園地	〃	立串集落

番　号	A
種　類	集 落
名　称	津和崎（つわざき）集落
住　所	新上五島町津和崎郷津和崎
管理者	自治会
備　考	居住地（家屋、墓地、石垣、集落の管理する宗教施設）、生業空間、周囲の自然的空間を含む。



番　号	B
種　類	集 落
名　称	米山（こめやま）集落
住　所	新上五島町津和崎郷米山
管理者	自治会
備　考	居住地（家屋、墓地、石垣、集落の管理する宗教施設）、生業空間、周囲の自然的空間を含む。



番　号	C
種　類	集 落
名　称	竹谷（たけや）集落
住　所	新上五島町津和崎郷竹谷
管理者	自治会
備　考	居住地（家屋、墓地、石垣、集落の管理する宗教施設）、生業空間、周囲の自然的空間を含む。



番　号	D
種　類	集 落
名　称	竹谷（たけや）集落
住　所	新上五島町津和崎郷竹谷
管理者	自治会
備　考	居住地（家屋、墓地、石垣、集落の管理する宗教施設）、生業空間、周囲の自然的空間を含む。



番　号	E
種　類	集 落
名　称	仲知（ちゅうち）集落
住　所	新上五島町津和崎郷仲知
管理者	自治会
備　考	居住地（家屋、墓地、石垣、集落の管理する宗教施設）、生業空間、周囲の自然的空間を含む。



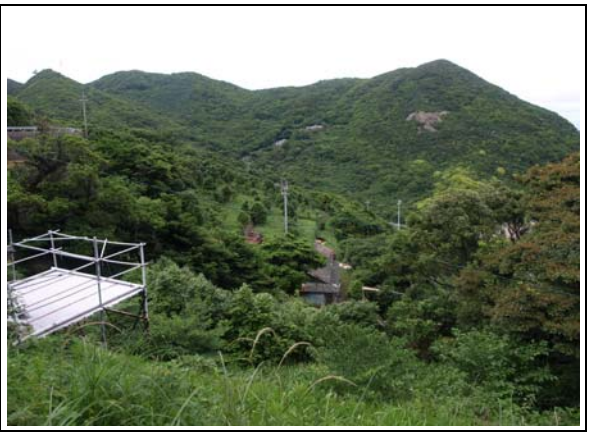
番　号	F
種　類	集 落
名　称	赤波江（あかばえ）集落
住　所	新上五島町立串郷赤波江
管理者	自治会
備　考	居住地（家屋、墓地、石垣、集落の管理する宗教施設）、生業空間、周囲の自然的空間を含む。



番　号	G
種　類	集 落
名　称	江袋（えぶくろ）集落
住　所	新上五島町曽根郷江袋
管理者	自治会
備　考	居住地（家屋、墓地、石垣、集落の管理する宗教施設）、生業空間、周囲の自然的空間を含む。



番　号	H
種　類	集 落
名　称	大瀬良（おおぜら）集落
住　所	新上五島町立串郷大瀬良
管理者	自治会
備　考	居住地（家屋、墓地、石垣、集落の管理する宗教施設）、生業空間、周囲の自然的空間を含む。



番　号	I
種　類	集 落
名　称	小瀬良（こぜら）集落
住　所	新上五島町立串郷小瀬良
管理者	自治会
備　考	居住地（家屋、墓地、石垣、集落の管理する宗教施設）、生業空間、周囲の自然的空間を含む。



番　号	J
種　類	集 落
名　称	上小瀬良（かみこぜら）集落
住　所	新上五島町立串郷上小瀬良
管理者	自治会
備　考	居住地（家屋、墓地、石垣、集落の管理する宗教施設）、生業空間、周囲の自然的空間を含む。



番　号	K
種　類	集 落
名　称	大水（おおみず）集落
住　所	新上五島町曽根郷大水
管理者	自治会
備　考	居住地（家屋、墓地、石垣、集落の管理する宗教施設）、生業空間、周囲の自然的空間を含む。



番　号	L
種　類	集 落
名　称	立串（たてくし）集落
住　所	新上五島町立串郷立串
管理者	自治会
備　考	居住地（家屋、墓地、石垣、集落の管理する宗教施設）、生業空間、周囲の自然的空間を含む。



番　号	1
種　類	寺社、教会
名　称	津和崎御座（つわざきおざ）
住　所	新上五島町津和崎郷 173－1
管理者	自治会
備　考	小値賀島明覚寺からの僧侶の招へい時のための御座所（休憩所）



番　号	2
種　類	寺社、教会
名　称	本山神社（もとやまじんじゃ）
住　所	新上五島町津和崎郷 185
管理者	自治会、宗教法人
備　考	津和崎集落の郷社



番　号	3
種　類	寺社、教会
名　称	金比羅神社（こんぴらじんじゃ）
住　所	新上五島町津和崎郷 459－1
管理者	自治会、宗教法人
備　考	津和崎集落の航海安全の守り神



番　号	4
種　類	寺社、教会
名　称	米山教会（こめやまきょうかい）
住　所	新上五島町津和崎郷 589－14、589－15
管理者	宗教法人
備　考	米山集落のカトリック教会堂（３代目教会堂）



番　号	5
種　類	寺社、教会
名　称	赤波江教会（あかばえきょうかい）
住　所	新上五島町立串郷 1899
管理者	宗教法人
備　考	赤波江集落のカトリック教会堂（２代目教会堂）



番　号	6
種　類	寺社、教会
名　称	仲知教会（ちゅうちきょうかい）
住　所	新上五島町津和崎郷 964－1
管理者	宗教法人
備　考	仲知集落のカトリック教会堂（３代目教会堂）



番　号	7
種　類	寺社、教会
名　称	江袋教会（えぶくろきょうかい）
住　所	新上五島町曽根郷 195－2
管理者	宗教法人
備　考	江袋集落のカトリック教会堂（初代教会堂） 長崎県指定有形文化財（明治 15 年建築）



番　号	8
種　類	寺社、教会
名　称	山神社（やまじんじゃ）
住　所	新上五島町立串郷 1809－2
管理者	自治会、宗教法人
備　考	大村藩からの移住以前からの既居住漁民が明治 31 年に創建した祠



番　号	9
種　類	寺社、教会
名　称	塩竈神社（しおがまじんじゃ）
住　所	新上五島町立串郷 1528、1527-1、1530
管理者	自治会、宗教法人
備　考	大村藩からの移住以前からの既居住漁民が天明７年に創建した神社



番　号	10
種　類	寺社、教会
名　称	小瀬良教会（こぜらきょうかい）
住　所	新上五島町立串郷 1351－10、1351－6
管理者	宗教法人
備　考	小瀬良集落のカトリック教会堂 （２代目教会堂） 昭和 26 年建築



番　号	11
種　類	寺社、教会
名　称	大水教会（おおみずきょうかい）
住　所	新上五島町曽根郷 411-5、414-3、432、436-2
管理者	宗教法人
備　考	大水集落のカトリック教会堂（３代目教会堂）



番　号	12
種　類	寺社、教会
名　称	乙宮神社（おとみやじんじゃ）
住　所	新上五島町立串郷 628
管理者	自治会、宗教法人
備　考	慶長年間に立串集落に定住した柴田勝家の子孫が元和６年に創建した立串集落の郷社



番　号	13
種　類	寺社、教会
名　称	琴平神社（ことひらじんじゃ）
住　所	新上五島町立串郷 695
管理者	自治会、宗教法人
備　考	立串集落の航海安全の守り神



番　号	14
種　類	住　居
名　称	Ｋ氏邸
住　所	新上五島町曽根郷 152
管理者	個人
備　考	明治 20 年代頃に建築されたとみられる民家。北魚目地域において現存する居住家屋の中でも最も古い部類の建物である。



番　号	15
種　類	住　居
名　称	Ｓ氏邸
住　所	新上五島町立串郷 644、653－1
管理者	個人
備　考	慶長年間に越前国より移住し、現在の立串集落の基礎を築いた柴田勝家の子孫の住宅。近代になり建て替えられた建物。



番　号	16
種　類	石造物
名　称	Ｔ氏宅の石垣構え
住　所	新上五島町曽根郷 67
管理者	個人
備　考	風の強い急斜面地を開拓した結果、江袋集落において特に発達した防風石垣の典型例。



番　号	31
種　類	公共施設（港湾）
名　称	地方港湾　小瀬良港
住　所	新上五島町立串郷小瀬良
管理者	長崎県
備　考	



番　号	32
種　類	公共施設（漁港）
名　称	津和崎漁港
住　所	新上五島町津和崎郷津和崎
管理者	新上五島町
備　考	



番　号	33
種　類	公共施設（漁港）
名　称	一本松漁港（一本松地区）
住　所	新上五島町津和崎郷一本松
管理者	新上五島町
備　考	



番　号	34
種　類	公共施設（漁港）
名　称	一本松漁港（赤波江地区）
住　所	新上五島町立串郷赤波江
管理者	新上五島町
備　考	



番　号	35
種　類	公共施設（漁港）
名　称	仲知漁港（仲知地区）
住　所	新上五島町津和崎郷仲知
管理者	新上五島町
備　考	



番　号	36
種　類	公共施設（漁港）
名　称	仲知漁港（江袋地区）
住　所	新上五島町曽根郷江袋
管理者	新上五島町
備　考	



番　号	37
種　類	公共施設（漁港）
名　称	立串漁港（大瀬良地区）
住　所	新上五島町立串郷大瀬良
管理者	新上五島町
備　考	



番　号	38
種　類	公共施設（漁港）
名　称	立串漁港（立串地区）
住　所	新上五島町立串郷立串
管理者	新上五島町
備　考	



番　号	39
種　類	かんころ関連施設
名　称	ＹＴ氏宅のかんころ関連施設
住　所	新上五島町曽根郷 120-2 および 119-1
管理者	個人
備　考	北魚目地域で盛んであった甘藷の保存食「かんころ」の生産に必要な乾燥棚「やぐら」屋外用茹釜「じろ」、家屋内部の保存穴「いもがま」などの一連の施設の江袋における典型例。



番　号	40
種　類	かんころ関連施設
名　称	ＯＲ氏宅のかんころ関連施設
住　所	新上五島町曽根郷 386 外 5 筆
管理者	個人
備　考	北魚目地域で盛んであった甘藷の保存食「かんころ」の生産に必要な乾燥棚「やぐら」家屋内部の保存穴「いもがま」などの一連の施設の大水における典型例。



番　号	41
種　類	公共施設（公園）
名　称	津和崎つばき園
住　所	新上五島町津和崎郷
管理者	新上五島町
備　考	町有のつばき林を低木化、純木化などの整備をおこない公園化した場所。



番　号	42
種　類	公共施設（公園）
名　称	番嶽園地
住　所	新上五島町立串郷、曽根郷
管理者	新上五島町
備　考	上五島最高峰の番岳（北魚目番岳）山頂付近を整備して公園化した場所。360 度の眺望を誇る。



第６章　参考資料

１．公共事業におけるガイドライン等の尊重

国土交通省においては、平成 15 年７月に公表した「美しい国づくり政策大綱」において、良好な景観形成に持続的に取り組むためのシステムを確立するという観点から「公共事業における景観アセスメント（景観評価）システム」が位置づけられている。

「国土交通省所管公共事業における景観検討の基本方針」が、平成19年度から運用を開始されており、平成 21 年４月１日に最終改訂が行われている。今回の改訂のポイントは以下のとおりである。

① 景観評価を景観検討の一環として位置づけ
② 対象事業を全ての直轄事業に拡大
③ 景観上の重要度によって事業の景観検討区分を３分類
④ 「景観整備方針」によって景観検討の一貫性を担保
⑤ 景観検討に関する事後評価の適正な実施

③の景観検討区分については、「重点検討事業」「一般検討事業」「検討対象外事業」の３つに区分されており、重要文化的景観は「優れた景観を有する地域で行う重点検討事業」の対象地域となっている。

その他、長崎県では「世界遺産登録に向けた公共事業のあり方ガイドライン（暫定版）」を作成しているため、これらと連携し、一帯となった景観検討を行う必要がある。

２．風力発電施設についての考え方

環境省自然環境局において、平成 16 年２月に「国立・国定公園内における風力発電施設設置のあり方に関する基本的な考え方」を示している。

その中で、「風力発電施設が、地域へのエネルギー供給や地球温暖化防止へ寄与という公益性を有することは認められるとしても、なお、国立・国定公園外において、立地の可能性や各種取組による風力発電の推進が期待される状況においては、一般論として公園の保護の公益性を上回るような特別な立地の必然性や公益性が認められるものとは判断できない。」とされている。

なぜその場所が国立・国定公園に指定されているのか、その意義や目的を踏まえ、国立・国定公園における風力発電施設の立地の必要性や公益性について、個別に検討を行うこととする。

新上五島町北魚目の文化的景観

平成 23 年 10 月

発　行　　新上五島町

印　刷　　株式会社　修復技術システム